
比企郡川島町

富田後遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う
川島地区埋蔵文化財発掘調査報告
(第1分冊)

2 0 1 1

国土交通省 関東地方整備局
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 富田後遺跡遠景（東から）



2 富田後遺跡全景

卷頭図版 2



1 E区第4号井戸跡出土遺物



2 D区第9号井戸跡出土遺物



1 第5号方形周溝墓出土遺物



2 D区第10号周溝状遺構出土遺物

富田後遺跡の紹介

富田後遺跡は、埼玉県のほぼ中央にあたる川島町にあります。川島町は、荒川低地に立地し、北は市野川、東は荒川、南は入間川、西は越辺川・都幾川に囲まれて、肥沃な水田が広がっています。また、川島町には大きく蛇行する河川の跡や、河川によってもたらされた土砂により形成された自然堤防が、現在まで良く残っており、関東有数といわれる美しさを誇っています。

富田後遺跡は、こうした自然堤防上に営まれた遺跡です。遺跡からは縄文時代後期（約3,000年前）の土器が発見されており、この時期には富田後遺跡が存在する自然堤防が既に形成されていたことが判明しました。

この地で、本格的に集落が営まれたのは古墳時代前期であり、住まいの跡である周溝状遺構と呼ばれる遺構が、折り重なるように多数発見されました。また、この時期の井戸跡には、意図的に土器が置かれたものがあり、特筆に値する資料といえます。

序

埼玉県では、「人と自然にやさしい道づくり」を目標に、生活環境の改善と自然環境との調和を図る体系的な道路網の整備と、交通渋滞対策を推進しております。

国土交通省が進める一般国道468号首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の新設事業もその一つであります。都心からの放射状道路をつなぐ道路を整備することにより、首都圏全体の道路交通の円滑化を目指すものであります。

さて、圏央道が東西に走る比企郡川島町では、建設予定地内に多くの遺跡が確認されており、富田後遺跡もそのひとつであります。埋蔵文化財の取り扱いに関しては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

調査の結果、縄文時代、古墳時代、さらに古代から中・近世に至る遺構や遺物が発見されました。特に、古墳時代初めごろの方形周溝墓や周溝状遺構が密集して発見されたことは、注目に値します。その数や密度は、関東でも有数の遺跡といえるものです。また、同時期の井戸跡も数多く発見されました。このなかには、意図的に土器を納めたと考えられるものもあり、興味深い資料といえます。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発及び各教育機関の参考資料として、広く御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所をはじめ、埼玉縣市町村支援部生涯学習文化財課、川島町教育委員会、並びに地元関係者の方々に厚く感謝申し上げます。

平成23年11月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 藤野龍宏

例言

1. 本書は、比企郡川島町に所在する富田後遺跡（第1・2次）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と、代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

富田後遺跡（略号TMTUSR、遺跡番号No.37-024）
埼玉県比企郡川島町大字牛ヶ谷戸388番地他（第1次）
埼玉県比企郡川島町大字三保谷77-2番地他（第2次）
発掘調査に対する指示通知：
平成17年6月20日付け教生文第2-23
平成18年9月6日付け教生文第2-40
発掘調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 本事業は、I-3に示す組織により実施した。発掘調査期間と調査担当者は以下のとおりである。

富田後遺跡（第1次）
平成17年6月1日～平成17年11月30日
調査担当者 剣持和夫 大谷 徹
 福田 聖 村端和樹
富田後遺跡（第2次）
平成18年8月1日～平成19年1月31日
調査担当者 黒坂禎二 上野真由美
 福田 聖 篠田泰輔
4. 整理・報告書作成事業の期間と担当者は以下のとおりである。

平成21年10月1日～平成22年3月24日
整理担当者 鈴木孝之
平成22年4月8日～平成23年3月31日
整理担当者 鈴木孝之
平成23年4月8日～平成23年9月30日
整理担当者 鈴木孝之
以上の期間と担当者と実施し、平成23年11月30日までに事業団報告書第385集として刊行した。
5. 遺跡の基準点測量は、株式会社GIS関東に委託した。
6. 遺跡の空中写真は、精進測量設計株式会社に委託した。
7. 木製品の樹種同定は独立行政法人森林総合研究所に委託した。
8. 遺構の写真撮影は各調査担当者が行った。遺物写真撮影は鈴木が行い、福田 聖の協力を得た。
9. 出土遺物の整理および図版の作成は鈴木が行い、宮井英一 細田 勝 大谷 徹 上野真由美の協力を得た。
10. 本書の編集は鈴木が行った。本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が行い、V章では2を上野、3を福田が行い、それ以外を鈴木が行った。
11. 本書にかかる資料は平成23年12月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
12. 発掘調査から報告書の刊行まで、下記の機関にご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略）

川島町教育委員会

凡例

1. 本書中におけるX・Yの数值は、世界測地系による平面直角座標IX系（原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく座標値を示し、各挿図における方位はすべて座標北を示す。
2. 遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づいて設定し、10m×10mを基本グリッドとしている。
3. グリッドの名称は、北西杭を基準として、東西方向は西からアラビア数字（1・2・3……）を付し、南北方向は北からアルファベット（A・B・C……）を付し、両者を組み合わせA-1、B-2等の名称を付した。富田後遺跡のG-18グリッド北西杭の世界測地系X=-1,580.000m、Y=-30,550.000m（北緯35° 59' 07" 0106 東経139° 29' 40" 3253）である。
4. 調査の工程上、A～C区では、遺構名を連番で付した。D区・E区については、調査を並行して実施したため、遺構番号の重複を避けるべく、遺構名の前に区名を冠し、D区第1号住居跡、E区第2号溝跡……と命名した。また、原則として調査時に付した遺構番号をそのまま用い、欠番もそのままとした。
5. 発掘調査時に付した遺構番号を尊重し、遺構番号順に編集したため、時期別の配列ではない。
6. 本文中に使用した略号は以下のとおりである。

SJ 竪穴住居跡	SB 掘立柱建物跡
SR 周溝状遺構	SH 方形周溝墓
SK 土壌	SE 井戸跡
SX 性格不明遺構	SD 溝跡
SA 柵列跡	GP グリッドピット
SS 古墳跡	ST 火葬墓跡
7. 遺構図および実測図の縮尺は、各挿図中に縮尺率とスケールを示した。同一図中に縮尺の異なる場合は、図中にその都度例示した。

- 遺構 全体図 1/1500・200
竪穴住居跡・掘立柱建物跡 1/60
土壌・井戸跡・性格不明遺構 1/60
方形周溝墓 1/100 古墳跡 1/160・80
溝跡 1/200・60 柵列跡 1/60・80
周溝状遺構 1/100・50・160

遺物実測図

- 土器 1/3・4 陶磁器 1/3
金属製品 1/2・4
石製品 1/2・3・6
木製品 1/2・4・6・10・12
埴輪 1/4・5 土製品 1/3
拓影図 1/3・4

8. 胎土は土器に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で記した。
A-白色粒子 B-角閃石 C-石英 D-雲母状微粒子 E-長石 F-赤色粒子 G-黒色粒子 H-白色針状物質 I-片岩 J-砂粒 K-小礫 L-その他
9. 文中や観察表中の（ ）内の数值は復元推定値、[]内の数值は残存値を意味する。
10. 遺物の残存率は、図示した範囲についてのおよその残存率を、5%刻みで示した。
11. 遺物の焼成については、数値での表現が難しいため、良好・普通・不良の3段階で表す。
12. 遺構断面図に表記した水準値は海拔標高で、単位はmである。
13. 遺物実測図中の網掛けは、赤彩を意味する。
14. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000の地形図（大宮・鴻巣・熊谷・川越）を使用した。
15. 本書に使用した引用・参考文献は、著者・発行年の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に一覧を掲載した。

目次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3
II 遺跡の立地と環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	9
III 遺跡の概要	12
IV 遺構と遺物	29
1. 縄文時代の遺構と遺物	29
(1) 土壌	
(2) グリッド出土遺物	
2. 古墳時代～中・近世の遺構と遺物	
(1) 住居跡	34
(2) 周溝状遺構	38
(3) 方形周溝墓	209
(4) 掘立柱建物跡	231

(5) 柵列跡	274
(6) 土壌	280

(第2分冊)

(7) 井戸跡	305
(8) 古墳跡	353
(9) 溝跡	384
(10) 性格不明遺構	423
(11) 火葬墓跡	430
(12) グリッドピット	431
(13) 自然科学分析 (樹種同定)	437
V 調査のまとめ	442
1. 調査の成果	442
2. 縄文時代の富田後遺跡と川島町の自然堤防	443
3. 古墳時代前期の遺構と遺物について	446
4. 土器が納められた井戸跡について	454

写真図版

挿図目次

(第1分冊)

第1図 埼玉県地形	5
第2図 遺跡周辺の地形	6
第3図 周辺の遺跡	8
第4図 基本土層図	12
第5図 遺跡の位置	13
第6図 遺跡全体区割図	14
第7図 区割図(1)	15
第8図 区割図(2)	16

第9図 区割図(3)	17
第10図 区割図(4)	18
第11図 区割図(5)	19
第12図 区割図(6)	20
第13図 区割図(7)	21
第14図 区割図(8)	22
第15図 区割図(9)	23
第16図 区割図(10)	24
第17図 区割図(11)	25

第18図	区割図(12)	26	第55図	第12号周溝状遺構	63
第19図	区割図(13)	27	第56図	第12号周溝状遺構出土遺物	63
第20図	区割図(14)	28	第57図	第13号周溝状遺構	64
第21図	土壌	30	第58図	第13号周溝状遺構出土遺物	64
第22図	土壌遺物出土状況	31	第59図	第14号周溝状遺構	65
第23図	土壌出土遺物	32	第60図	第15号周溝状遺構	65
第24図	グリッド出土遺物	33	第61図	第16号周溝状遺構	66
第25図	住居跡分布図	34	第62図	第15・16号周溝状遺構出土遺物	66
第26図	第1号住居跡	35	第63図	第17号周溝状遺構	67
第27図	第2号住居跡	35	第64図	第17号周溝状遺構出土遺物	67
第28図	第2号住居跡出土遺物	36	第65図	第18号周溝状遺構	68
第29図	第3号住居跡	36	第66図	第19号周溝状遺構	69
第30図	D区第1号住居跡	37	第67図	第19号周溝状遺構遺物出土状況	70
第31図	周溝状遺構分布図	38	第68図	第19号周溝状遺構出土遺物(1)	71
第32図	第1号周溝状遺構、第5・10号溝跡	39	第69図	第19号周溝状遺構出土遺物(2)	72
第33図	第1号周溝状遺構遺物出土状況	40	第70図	第21号周溝状遺構	74
第34図	第1号周溝状遺構出土遺物	41	第71図	第21号周溝状遺構出土遺物	74
第35図	第2号周溝状遺構、第10号溝跡	42	第72図	第22号周溝状遺構	75
第36図	第2号周溝状遺構出土遺物	43	第73図	第23号周溝状遺構・遺物出土状況	75
第37図	第3号周溝状遺構、第10号溝跡	44	第74図	第23号周溝状遺構出土遺物	76
第38図	第3号周溝状遺構遺物出土状況	45	第75図	第24号周溝状遺構	77
第39図	第3号周溝状遺構出土遺物	46	第76図	第25号周溝状遺構	77
第40図	第4号周溝状遺構	48	第77図	第26号周溝状遺構	77
第41図	第4号周溝状遺構出土遺物	49	第78図	第27号周溝状遺構	78
第42図	第5号周溝状遺構	50	第79図	第27号周溝状遺構遺物出土状況	79
第43図	第5号周溝状遺構出土遺物	51	第80図	第27号周溝状遺構出土遺物	80
第44図	第6号周溝状遺構、第58号溝跡	52	第81図	第28・33・35号周溝状遺構	81
第45図	第6号周溝状遺構出土遺物	53	第82図	第28・35号周溝状遺構遺物出土状況	82
第46図	第7号周溝状遺構	54	第83図	第28号周溝状遺構出土遺物	83
第47図	第8号周溝状遺構、第58号溝跡	55	第84図	第35号周溝状遺構出土遺物	85
第48図	第8号周溝状遺構遺物出土状況	56	第85図	第29号周溝状遺構・遺物出土状況	86
第49図	第8号周溝状遺構出土遺物	56	第86図	第29号周溝状遺構出土遺物	87
第50図	第9号周溝状遺構、第99号溝跡	58	第87図	第30号周溝状遺構・遺物出土状況	89
第51図	第9号周溝状遺構出土遺物	59	第88図	第30号周溝状遺構出土遺物	90
第52図	第10号周溝状遺構、第99号溝跡	60	第89図	第31号周溝状遺構出土遺物	90
第53図	第10号周溝状遺構出土遺物	61	第90図	第31号周溝状遺構	91
第54図	第11号周溝状遺構	62	第91図	第32号周溝状遺構	91

第92图	第34号周溝状遺構・遺物出土狀況 ……92	第118图	D区第18号周溝状遺構 …… 118
第93图	第34号周溝状遺構出土遺物 ……93	第119图	D区第19号周溝状遺構 …… 118
第94图	D区第1号周溝状遺構 ……94	第120图	D区第19号周溝状遺構出土遺物 …… 119
第95图	D区第1号周溝状遺構出土遺物 ……95	第121图	D区第20・21号周溝状遺構 …… 120
第96图	D区第2号周溝状遺構、 第101号溝跡……………96	第122图	D区第20・21号周溝状遺構出土遺物 …… 120
第97图	D区第2号周溝状遺構出土遺物 ……97	第123图	D区第22号周溝状遺構 …… 121
第98图	D区第3号周溝状遺構 ……99	第124图	D区第22号周溝状遺構出土遺物 …… 122
第99图	D区第3号周溝状遺構出土遺物 ……99	第125图	D区第23号周溝状遺構 …… 124
第100图	D区第4号周溝状遺構 …… 100	第126图	D区第23号周溝状遺構出土遺物 …… 124
第101图	D区第6号周溝状遺構、 第101号溝跡…………… 101	第127图	D区第25号周溝状遺構 …… 125
第102图	D区第6号周溝状遺構出土遺物 …… 102	第128图	D区第25号周溝状遺構出土遺物 …… 126
第103图	D区第8・9号周溝状遺構 …… 102	第129图	D区第26・28号周溝状遺構 …… 127
第104图	D区第8・9号周溝状遺構出土遺物 …………… 103	第130图	D区第26・28号周溝状遺構 遺物出土狀況 …… 128
第105图	D区第10号周溝状遺構 …… 104	第131图	D区第26・28号周溝状遺構出土遺物 …… 129
第106图	D区第10号周溝状遺構 遺物出土狀況(1) …… 105	第132图	D区第27号周溝状遺構 …… 131
第107图	D区第10号周溝状遺構 遺物出土狀況(2) …… 106	第133图	D区第27号周溝状遺構出土遺物 …… 132
第108图	D区第10号周溝状遺構 遺物出土狀況(3) …… 107	第134图	D区第29号周溝状遺構 …… 132
第109图	D区第10号周溝状遺構出土遺物(1) …………… 108	第135图	D区第29号周溝状遺構出土遺物 …… 132
第110图	D区第10号周溝状遺構出土遺物(2) …………… 109	第136图	D区第30号周溝状遺構 …… 133
第111图	D区第10号周溝状遺構出土遺物(3) …………… 110	第137图	D区第31号周溝状遺構 …… 134
第112图	D区第10号周溝状遺構出土遺物(4) …………… 111	第138图	D区第32号周溝状遺構 …… 135
第113图	D区第12・13号周溝状遺構 …… 114	第139图	D区第32号周溝状遺構出土遺物 …… 135
第114图	D区第15・17号周溝状遺構 …… 115	第140图	D区第33号周溝状遺構 …… 136
第115图	D区第15・17号周溝状遺構出土遺物 …… 115	第141图	D区第33号周溝状遺構出土遺物 …… 136
第116图	D区第16号周溝状遺構・ 遺物出土狀況 …… 116	第142图	D区第34・54号周溝状遺構・ 遺物出土狀況 …… 137
第117图	D区第16号周溝状遺構出土遺物 …… 117	第143图	D区第34号周溝状遺構出土遺物 …… 138
		第144图	D区第35号周溝状遺構 …… 139
		第145图	D区第35号周溝状遺構出土遺物 …… 139
		第146图	D区第36号周溝状遺構出土遺物 …… 140
		第147图	D区第36号周溝状遺構 …… 141
		第148图	D区第37・38・52号周溝状遺構、 第81号溝跡 …… 142
		第149图	D区第38号周溝状遺構遺物出土狀況 …… 143
		第150图	D区第38号周溝状遺構出土遺物 …… 144
		第151图	D区第39号周溝状遺構 …… 146

第152图	D区第39号周溝状遺構出土遺物 …	147	第175图	D区第51号周溝状遺構出土遺物 …	174
第153图	D区第41号周溝状遺構 ……………	148	第176图	D区第53号周溝状遺構 ……………	174
第154图	D区第41号周溝状遺構出土遺物 …	148	第177图	E区第1号周溝状遺構 ……………	175
第155图	D区第42·46·48号周溝状遺構、 第81·102号溝跡(1) ……………	149	第178图	E区第1号周溝状遺構出土遺物 …	175
第156图	D区第42·46·48号周溝状遺構、 第81·102号溝跡(2) ……………	150	第179图	E区第2·14号周溝状遺構 ……………	176
第157图	D区第42号周溝状遺構 遺物出土狀況(1) ……………	151	第180图	E区第2号周溝状遺構出土遺物 …	177
第158图	D区第42号周溝状遺構 遺物出土狀況(2) ……………	152	第181图	E区第3号周溝状遺構 ……………	178
第159图	D区第42号周溝状遺構出土遺物(1) ……………	153	第182图	E区第3号周溝状遺構出土遺物 …	179
第160图	D区第42号周溝状遺構出土遺物(2) ……………	154	第183图	E区第4号周溝状遺構 ……………	179
第161图	D区第42号周溝状遺構出土遺物(3) ……………	155	第184图	E区第4号周溝状遺構出土遺物 …	180
第162图	D区第46号周溝状遺構遺物出土狀況 …	159	第185图	E区第5号周溝状遺構 ……………	181
第163图	D区第46号周溝状遺構出土遺物(1) ……………	160	第186图	E区第5号周溝状遺構出土遺物 …	182
第164图	D区第46号周溝状遺構出土遺物(2) ……………	161	第187图	E区第6号周溝状遺構 ……………	183
第165图	D区第48号周溝状遺構遺物出土狀況	163	第188图	E区第6号周溝状遺構遺物出土狀況 …	184
第166图	D区第48号周溝状遺構出土遺物(1) ……………	164	第189图	E区第6号周溝状遺構出土遺物 …	185
第167图	D区第48号周溝状遺構出土遺物(2) ……………	165	第190图	E区第7号周溝状遺構 ……………	187
第168图	D区第44号周溝状遺構 ……………	166	第191图	E区第7号周溝状遺構遺物出土狀況 …	188
第169图	D区第44号周溝状遺構出土遺物 …	167	第192图	E区第7号周溝状遺構出土遺物 …	189
第170图	D区第50号周溝状遺構 ……………	168	第193图	E区第8·9号周溝状遺構出土遺物 …	190
第171图	D区第50号周溝状遺構遺物出土狀況 ……………	169	第194图	E区第8号周溝状遺構 ……………	191
第172图	D区第50号周溝状遺構出土遺物(1) ……………	170	第195图	E区第9号周溝状遺構 ……………	192
第173图	D区第50号周溝状遺構出土遺物(2) ……………	171	第196图	E区第10号周溝状遺構 ……………	193
第174图	D区第51号周溝状遺構 ……………	173	第197图	E区第10号周溝状遺構遺物出土狀況 …	194
			第198图	E区第10号周溝状遺構出土遺物 …	195
			第199图	E区第11号周溝状遺構 ……………	197
			第200图	E区第12号周溝状遺構 ……………	197
			第201图	E区第13号周溝状遺構 ……………	198
			第202图	E区第13号周溝状遺構遺物出土狀況 …	199
			第203图	E区第13号周溝状遺構出土遺物 …	200
			第204图	E区第15号周溝状遺構、 D区第102号溝跡……………	202
			第205图	E区第15号周溝状遺構遺物出土狀況 …	203
			第206图	E区第15号周溝状遺構出土遺物 …	204
			第207图	E区第16号周溝状遺構 ……………	205
			第208图	E区第16号周溝状遺構出土遺物 …	206
			第209图	E区第17号周溝状遺構 ……………	206
			第210图	E区第17号周溝状遺構出土遺物 …	207

第211图	E区第18号周溝状遺構	208	第246图	第10号掘立柱建物跡(1)	243
第212图	方形周溝墓分布图	209	第247图	第10号掘立柱建物跡(2)	244
第213图	第1号方形周溝墓	210	第248图	第11号掘立柱建物跡	245
第214图	第1号方形周溝墓出土遺物	210	第249图	第12号掘立柱建物跡(1)	246
第215图	第2号方形周溝墓	211	第250图	第12号掘立柱建物跡(2)	247
第216图	第2号方形周溝墓遺物出土狀況	212	第251图	第13号掘立柱建物跡	248
第217图	第2号方形周溝墓出土遺物	213	第252图	第14号掘立柱建物跡	249
第218图	第3号方形周溝墓	215	第253图	第15号掘立柱建物跡	251
第219图	第3号方形周溝墓出土遺物	215	第254图	第16号掘立柱建物跡	252
第220图	第4号方形周溝墓	216	第255图	第17号掘立柱建物跡	253
第221图	第5号方形周溝墓(1)	217	第256图	D区第2号掘立柱建物跡	254
第222图	第5号方形周溝墓(2)	218	第257图	D区第3号掘立柱建物跡	255
第223图	第5号方形周溝墓遺物出土狀況(1)	219	第258图	D区第4号掘立柱建物跡	256
第224图	第5号方形周溝墓遺物出土狀況(2)	220	第259图	D区第5号掘立柱建物跡	257
第225图	第5号方形周溝墓出土遺物(1)	221	第260图	D区第6号掘立柱建物跡	258
第226图	第5号方形周溝墓出土遺物(2)	222	第261图	D区第7号掘立柱建物跡	260
第227图	第5号方形周溝墓出土遺物(3)	223	第262图	D区第7号掘立柱建物跡出土遺物	260
第228图	第6号方形周溝墓(1)	225	第263图	D区第8号掘立柱建物跡	261
第229图	第6号方形周溝墓(2)	226	第264图	D区第9号掘立柱建物跡	263
第230图	第6号方形周溝墓遺物出土狀況	227	第265图	D区第10号掘立柱建物跡	263
第231图	第6号方形周溝墓出土遺物(1)	228	第266图	D区第11号掘立柱建物跡	264
第232图	第6号方形周溝墓出土遺物(2)	229	第267图	D区第12号掘立柱建物跡	265
第233图	第7号方形周溝墓	230	第268图	E区第1号掘立柱建物跡	266
第234图	第7号方形周溝墓出土遺物	230	第269图	E区第2号掘立柱建物跡(1)	267
第235图	掘立柱建物跡分布图	231	第270图	E区第2号掘立柱建物跡(2)	268
第236图	第1号掘立柱建物跡	232	第271图	E区第3号掘立柱建物跡	269
第237图	第2号掘立柱建物跡	233	第272图	E区第4号掘立柱建物跡	270
第238图	第3号掘立柱建物跡	234	第273图	E区第5号掘立柱建物跡	271
第239图	第4号掘立柱建物跡	235	第274图	E区第6号掘立柱建物跡	272
第240图	第5号掘立柱建物跡	236	第275图	E区第7号掘立柱建物跡	273
第241图	第6号掘立柱建物跡(1)	238	第276图	柵列跡分布图	274
第242图	第6号掘立柱建物跡(2)	239	第277图	第1·2号柵列跡	275
第243图	第7号掘立柱建物跡	240	第278图	第3·4·5号柵列跡	277
第244图	第8号掘立柱建物跡	241	第279图	E区第1号柵列跡	278
第245图	第9号掘立柱建物跡	242	第280图	E区第2号柵列跡	278
			第281图	土壤分布图	280
			第282图	土壤(1)	281

第283図	土壙 (2)	283	第319図	井戸跡出土遺物 (8)	343
第284図	土壙 (3)	285	第320図	井戸跡出土遺物 (9)	344
第285図	土壙 (4)	287	第321図	井戸跡出土木製品 (1)	350
第286図	土壙 (5)	289	第322図	井戸跡出土木製品 (2)	351
第287図	D区土壙 (1)	290	第323図	井戸跡出土木製品 (3)	352
第288図	D区土壙 (2)	292	第324図	古墳跡分布図	353
第289図	D区土壙 (3)	294	第325図	D区第1号墳	354
第290図	D区土壙 (4)	296	第326図	D区第1号墳出土遺物	355
第291図	E区土壙 (1)	299	第327図	D区第2号墳	356
第292図	E区土壙 (2)	301	第328図	D区第2号墳遺物出土状況	357
第293図	E区土壙 (3)	302	第329図	D区第2号墳出土遺物 (1)	358
第294図	土壙出土遺物	303	第330図	D区第2号墳出土遺物 (2)	359
(第2分冊)					
第295図	井戸跡分布図	305	第331図	D区第2号墳出土遺物 (3)	360
第296図	井戸跡 (1)	306	第332図	D区第2号墳出土遺物 (4)	361
第297図	井戸跡 (2)	308	第333図	D区第2号墳出土遺物 (5)	362
第298図	井戸跡 (3)	311	第334図	D区第2号墳出土遺物 (6)	363
第299図	井戸跡 (4)	313	第335図	D区第3号墳	367
第300図	井戸跡 (5)	315	第336図	D区第3号墳遺物出土状況	368
第301図	井戸跡 (6)	317	第337図	D区第3号墳出土遺物 (1)	369
第302図	井戸跡 (7)	319	第338図	D区第3号墳出土遺物 (2)	370
第303図	D区井戸跡 (1)	321	第339図	D区第3号墳出土遺物 (3)	371
第304図	D区井戸跡 (2)	323	第340図	D区第3号墳出土遺物 (4)	372
第305図	D区井戸跡 (3)	325	第341図	E区第1号墳	375
第306図	D区井戸跡 (4)	327	第342図	E区第2号墳	376
第307図	D区井戸跡 (5)	329	第343図	E区第2号墳出土遺物	377
第308図	E区井戸跡 (1)	330	第344図	E区第3号墳	379
第309図	E区井戸跡 (2)	332	第345図	古墳以外出土埴輪 (1)	381
第310図	E区井戸跡 (3)	333	第346図	古墳以外出土埴輪 (2)	382
第311図	E区井戸跡 (4)	334	第347図	溝跡区割図	384
第312図	井戸跡出土遺物 (1)	336	第348図	溝跡区割図 (1)	385
第313図	井戸跡出土遺物 (2)	337	第349図	溝跡断面図 (1)	386
第314図	井戸跡出土遺物 (3)	338	第350図	溝跡区割図 (2)	387
第315図	井戸跡出土遺物 (4)	339	第351図	溝跡断面図 (2)	388
第316図	井戸跡出土遺物 (5)	340	第352図	溝跡断面図 (3)	389
第317図	井戸跡出土遺物 (6)	341	第353図	溝跡断面図 (4)	390
第318図	井戸跡出土遺物 (7)	342	第354図	溝跡区割図 (3)	391
			第355図	溝跡断面図 (5)	392

第356図	溝跡断面図(6)	393	第381図	溝跡出土遺物(5)	418
第357図	溝跡断面図(7)	394	第382図	第47号溝跡出土木製品・種子	422
第358図	溝跡区割図(4)	395	第383図	性格不明遺構分布図	423
第359図	溝跡断面図(8)	396	第384図	第1号性格不明遺構	423
第360図	溝跡断面図(9)	397	第385図	第2号性格不明遺構	424
第361図	溝跡区割図(5)	398	第386図	第3号性格不明遺構	424
第362図	溝跡断面図(10)	399	第387図	第3号性格不明遺構遺物出土状況	426
第363図	溝跡断面図(11)	400	第388図	第3号性格不明遺構出土遺物(1)	427
第364図	溝跡断面図(12)	401	第389図	第3号性格不明遺構出土遺物(2)	428
第365図	溝跡区割図(6)	402	第390図	火葬墓跡位置図	430
第366図	溝跡断面図(13)	403	第391図	第1号火葬墓跡	430
第367図	溝跡断面図(14)	404	第392図	グリッドピット(1)	431
第368図	溝跡区割図(7)	405	第393図	グリッドピット(2)	432
第369図	溝跡断面図(15)	406	第394図	グリッド出土遺物(1)	433
第370図	溝跡断面図(16)	407	第395図	グリッド出土遺物(2)	434
第371図	溝跡区割図(8)	408	第396図	縄文時代の遺構	444
第372図	溝跡断面図(17)	409	第397図	縄文時代の川島町の自然堤防	445
第373図	溝跡断面図(18)	410	第398図	富田後遺跡の時期区分(1)	448
第374図	溝跡区割図(9)	411	第399図	富田後遺跡の時期区分(2)	449
第375図	溝跡断面図(19)	412	第400図	古墳時代前期の遺構の変遷(1)	450
第376図	D区第73号溝跡遺物出土状況	413	第401図	古墳時代前期の遺構の変遷(2)	451
第377図	溝跡出土遺物(1)	414	第402図	周溝の層位論的前後関係	453
第378図	溝跡出土遺物(2)	415	第403図	土器が納められた井戸跡と 周溝状遺構の時期別分布	458
第379図	溝跡出土遺物(3)	416			
第380図	溝跡出土遺物(4)	417			

表 目 次

(第1分冊)

第1表	周辺の遺跡一覧	9	第9表	第8号周溝状遺構出土遺物観察表	56
第2表	第2号住居跡出土遺物観察表	36	第10表	第9号周溝状遺構出土遺物観察表	59
第3表	第1号周溝状遺構出土遺物観察表	41	第11表	第10号周溝状遺構出土遺物観察表	61
第4表	第2号周溝状遺構出土遺物観察表	43	第12表	第12号周溝状遺構出土遺物観察表	63
第5表	第3号周溝状遺構出土遺物観察表	47	第13表	第13号周溝状遺構出土遺物観察表	64
第6表	第4号周溝状遺構出土遺物観察表	49	第14表	第15・16号周溝状遺構 出土遺物観察表	66
第7表	第5号周溝状遺構出土遺物観察表	51	第15表	第17号周溝状遺構出土遺物観察表	67
第8表	第6号周溝状遺構出土遺物観察表	53	第16表	第19号周溝状遺構出土遺物観察表	72

第17表	第21号周溝状遺構出土遺物觀察表·····74	第40表	D区第27号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 132
第18表	第23号周溝状遺構出土遺物觀察表·····76	第41表	D区第29号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 132
第19表	第27号周溝状遺構出土遺物觀察表·····80	第42表	D区第32号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 135
第20表	第28号周溝状遺構出土遺物觀察表·····84	第43表	D区第33号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 136
第21表	第35号周溝状遺構出土遺物觀察表·····85	第44表	D区第34号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 138
第22表	第29号周溝状遺構出土遺物觀察表·····88	第45表	D区第35号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 140
第23表	第30号周溝状遺構出土遺物觀察表·····90	第46表	D区第36号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 140
第24表	第31号周溝状遺構出土遺物觀察表·····91	第47表	D区第38号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 145
第25表	第34号周溝状遺構出土遺物觀察表·····93	第48表	D区第39号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 147
第26表	D区第1号周溝状遺構 出土遺物觀察表·····95	第49表	D区第41号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 148
第27表	D区第2号周溝状遺構 出土遺物觀察表·····97	第50表	D区第42号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 156
第28表	D区第3号周溝状遺構 出土遺物觀察表·····99	第51表	D区第46号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 162
第29表	D区第6号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 102	第52表	D区第48号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 165
第30表	D区第8·9号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 103	第53表	D区第44号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 167
第31表	D区第10号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 111	第54表	D区第50号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 171
第32表	D区第15·17号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 115	第55表	D区第51号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 173
第33表	D区第16号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 117	第56表	E区第1号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 175
第34表	D区第19号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 119	第57表	E区第2号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 177
第35表	D区第20·21号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 120	第58表	E区第3号周溝状遺構
第36表	D区第22号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 123		
第37表	D区第23号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 124		
第38表	D区第25号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 126		
第39表	D区第26·28号周溝状遺構 出土遺物觀察表····· 130		

	出土遺物観察表……………	179	第71表	第3号方形周溝墓出土遺物観察表…	215
第59表	E区第4号周溝状遺構 出土遺物観察表……………	180	第72表	第5号方形周溝墓出土遺物観察表…	223
第60表	E区第5号周溝状遺構 出土遺物観察表……………	182	第73表	第6号方形周溝墓出土遺物観察表…	229
第61表	E区第6号周溝状遺構 出土遺物観察表……………	186	第74表	第7号方形周溝墓出土遺物観察表…	230
第62表	E区第7号周溝状遺構 出土遺物観察表……………	189	第75表	E区第7号掘立柱建物跡 出土遺物観察表……………	260
第63表	E区第8・9号周溝状遺構 出土遺物観察表……………	190	第76表	土壙出土遺物観察表……………	304
第64表	E区第10号周溝状遺構 出土遺物観察表……………	196	(第2分冊)		
第65表	E区第13号周溝状遺構 出土遺物観察表……………	201	第77表	井戸跡計測表……………	335
第66表	E区第15号周溝状遺構 出土遺物観察表……………	205	第78表	井戸跡出土遺物観察表……………	344
第67表	E区第16号周溝状遺構 出土遺物観察表……………	206	第79表	井戸跡出土木製品観察表……………	352
第68表	E区第17号周溝状遺構 出土遺物観察表……………	207	第80表	D区第1号墳出土遺物観察表……………	355
第69表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表…	211	第81表	D区第2号墳出土遺物観察表……………	364
第70表	第2号方形周溝墓出土遺物観察表…	214	第82表	D区第3号墳出土遺物観察表……………	373
			第83表	E区第2号墳出土遺物観察表……………	378
			第84表	古墳以外出土埴輪観察表……………	383
			第85表	溝跡計測表……………	386
			第86表	溝跡出土遺物観察表……………	418
			第87表	第47号溝跡出土木製品観察表……………	422
			第88表	第3号性格不明遺構出土遺物観察表 ……………	428
			第89表	グリッド出土遺物観察表……………	435
			第90表	富田後遺跡の「周溝」……………	452

写真図版目次

卷頭図版 1	1 富田後遺跡遠景 (東から)	6 B区全景 (北東から)
	2 富田後遺跡全景	7 C区全景 (北から)
卷頭図版 2	1 E区第4号井戸跡出土遺物	8 C区全景 (東から)
	2 D区第9号井戸跡出土遺物	図版 2 1 C区全景 (西から)
卷頭図版 3	1 第5号方形周溝墓出土遺物	2 C～E区全景 (南西から)
	2 D区第10号周溝状遺構出土遺物	3 D区全景 (北東から)
図版 1	1 A・B区全景 (東から)	4 D区全景 (西から)
	2 A区全景 (南西から)	5 E区全景 (東から)
	3 B区全景 (西から)	6 E区全景 (北西から)
	4 B区全景 (南西から)	7 D区水没状況
	5 B区全景 (北東から)	8 第1号住居跡

图版 3	1 第 2 号住居跡	遺構
	2 第 3 号住居跡 (右手前)	6 第 21(中央)・22(手前)号周溝状遺構
	3 D区第 1 号住居跡	7 第 23(中央)・24(右)号周溝状遺構
	4 第 1 号周溝状遺構	8 第 23号周溝状遺構遺物出土狀況
	5 第 1 号周溝状遺構遺物出土狀況 (1)	图版 8 1 第 26号周溝状遺構
	6 第 1 号周溝状遺構遺物出土狀況 (2)	2 第 26(手前)・27(中央)号周溝状遺構
	7 第 1 号周溝状遺構遺物出土狀況 (3)	3 第 27号周溝状遺構遺物出土狀況
	8 第 2 号周溝状遺構	4 第 28号周溝状遺構遺物出土狀況 (1)
图版 4	1 第 2 号周溝状遺構遺物出土狀況	5 第 28号周溝状遺構遺物出土狀況 (2)
	2 第 3 号周溝状遺構	6 第 29(手前)・34(中央)号周溝状遺構
	3 第 3 号周溝状遺構遺物出土狀況 (1)	7 第 29号周溝状遺構遺物出土狀況
	4 第 3 号周溝状遺構遺物出土狀況 (2)	8 第 34号周溝状遺構遺物出土狀況
	5 第 4 号周溝状遺構	图版 9 1 第 29(右)・30(左)号周溝状遺構
	6 第 4 号周溝状遺構遺物出土狀況	2 第 30号周溝状遺構遺物出土狀況
	7 第 5(中央)・7(手前左)号周溝状遺構	3 D区第 1 号周溝状遺構
	8 第 6(奥)・9(手前)号周溝状遺構	4 D区第 2(手前)・4(奥)号周溝状遺構
图版 5	1 第 6 号周溝状遺構遺物出土狀況 (1)	5 D区第 2 号周溝状遺構遺物出土狀況
	2 第 6 号周溝状遺構遺物出土狀況 (2)	6 D区第 3 号周溝状遺構 (中央)
	3 第 3(中央)・7(手前)号周溝状遺構	7 D区第 4 号周溝状遺構
	4 第 8 号周溝状遺構	8 D区第 6(中央)・10(右)号周溝状遺構
	5 第 8 号周溝状遺構遺物出土狀況	图版 10 1 D区第 8(左)・9(右)号周溝状遺構
	6 第 9 号周溝状遺構	2 D区第 8 号周溝状遺構遺物出土狀況
	7 第 9 号周溝状遺構遺物出土狀況	3 D区第 9 号周溝状遺構遺物出土狀況
	8 第 10 号周溝状遺構	4 D区第 2(手前)・10(中央)号周溝状遺構
图版 6	1 第 10 号周溝状遺構遺物出土狀況 (1)	遺構
	2 第 10 号周溝状遺構遺物出土狀況 (2)	5 D区第 10 号周溝状遺構遺物出土狀況 (1)
	3 第 8(中央)・11(手前)号周溝状遺構	6 D区第 10 号周溝状遺構遺物出土狀況 (2)
	4 第 12 号周溝状遺構遺物出土狀況	7 D区第 10 号周溝状遺構遺物出土狀況 (3)
	5 第 13 号周溝状遺構	8 D区第 10 号周溝状遺構遺物出土狀況 (4)
	6 第 13 号周溝状遺構遺物出土狀況	图版 11 1 D区第 10 号周溝状遺構遺物出土狀況 (5)
	7 第 14(手前)・15(中央)・16 号周溝状遺構	2 D区第 10 号周溝状遺構遺物出土狀況 (6)
	8 第 14(手前)・16(中央)・19 号周溝状遺構	3 D区第 12 号周溝状遺構 (右奥)
图版 7	1 第 16 号周溝状遺構遺物出土狀況	4 D区第 6(左)・10(中央)・13(右)号周溝状遺構遺物出土狀況
	2 第 19 号周溝状遺構遺物出土狀況 (1)	5 D区第 15 号周溝状遺構
	3 第 19 号周溝状遺構遺物出土狀況 (2)	6 D区第 16 号周溝状遺構遺物出土狀況
	4 第 19 号周溝状遺構遺物出土狀況 (3)	7 D区第 17 号周溝状遺構遺物出土狀況
	5 第 21(中央)・22(左手前)・25 号周溝状	

- (中央)、(手前左から)第4・3号溝跡
- 8 D区第18号周溝状遺構 (中央奥)
- 図版12 1 D区第20(手前)・21(奥)号周溝状遺構
- 2 D区第22号周溝状遺構 (中央奥)
- 3 D区第22号周溝状遺構遺物出土状況(1)
- 4 D区第22号周溝状遺構遺物出土状況(2)
- 5 D区第22号周溝状遺構遺物出土状況(3)
- 6 D区第23号周溝状遺構 (中央)
- 7 D区第25号周溝状遺構遺物出土状況
- 8 D区第26(中央)・28(右奥)号周溝状遺構
- 図版13 1 D区第26号周溝状遺構遺物出土状況
- 2 D区第28号周溝状遺構遺物出土状況
- 3 D区第27(奥)・29(手前)号周溝状遺構
- 4 D区第30号周溝状遺構 (中央)
- 5 D区第31号周溝状遺構(中央)、(左から)第88・10・21号溝跡
- 6 D区第32号周溝状遺構(奥)、第47号溝跡
- 7 D区第32号周溝状遺構(手前)
- 8 D区第33号周溝状遺構(中央手前)
- 図版14 1 D区第34号周溝状遺構遺物出土状況
- 2 D区第35号周溝状遺構遺物出土状況(1)
- 3 D区第35号周溝状遺構遺物出土状況(2)
- 4 D区第36号周溝状遺構(中央)
- 5 D区第36号周溝状遺構遺物出土状況
- 6 D区第37号周溝状遺構(奥)
- 7 D区第38号周溝状遺構
- 8 D区第39号周溝状遺構(中央)
- 図版15 1 D区第39(奥)・42(手前)・48(中央)号周溝状遺構
- 2 D区第42号周溝状遺構遺物出土状況
- 3 D区第48号周溝状遺構遺物出土状況
- 4 第44号周溝状遺構(中央)、D区第3号墳
- 5 D区第46号周溝状遺構遺物出土状況
- 6 D区第50(中央)・33(右手前)号周溝状遺構
- 7 D区第50号周溝状遺構遺物出土状況
- 8 D区第51号周溝状遺構(右手前)
- 図版16 1 D区第52号周溝状遺構土層断面
- 2 E区第1(中央)・4・5号周溝状遺構
- 3 E区第2号周溝状遺構(奥)、E区第7(手前)・14号溝跡
- 4 E区第2号周溝状遺構遺物出土状況
- 5 E区第5・3・2・4・1号周溝状遺構
- 6 (左から)E区第5・3・7・2・4号周溝状遺構遺物出土状況
- 7 E区第5号周溝状遺構(中央)、第7号溝跡(手前)
- 8 (手前から)E区第7・5号周溝状遺構
- 図版17 1 E区第5号周溝状遺構遺物出土状況
- 2 E区第6号周溝状遺構、第27号溝跡
- 3 E区第6号周溝状遺構遺物出土状況
- 4 E区第7号周溝状遺構(手前)、第7号溝跡
- 5 E区第7号周溝状遺構遺物出土状況(1)
- 6 E区第7号周溝状遺構遺物出土状況(2)
- 7 E区第8号周溝状遺構(中央)
- 8 E区第2・6・14・9号周溝状遺構
- 図版18 1 E区第10号周溝状遺構
- 2 E区第10号周溝状遺構遺物出土状況
- 3 E区第11号周溝状遺構、第24号溝跡
- 4 E区第12・13号周溝状遺構、第4号土壇
- 5 E区第13号周溝状遺構遺物出土状況(中央)、第78(右)・82(左)号溝跡
- 6 E区第13号周溝状遺構遺物出土状況
- 7 E区第15号周溝状遺構
- 8 E区第15号周溝状遺構遺物出土状況
- 図版19 1 E区第16号周溝状遺構遺物出土状況
- 2 E区第17号周溝状遺構
- 3 E区第18号周溝状遺構
- 4 第1号方形周溝墓
- 5 第1号方形周溝墓遺物出土状況(1)

- | | | | | | |
|------|---|----------------------|------|---|----------------------|
| | 6 | 第1号方形周溝墓遺物出土状況(2) | | 3 | D区第6号掘立柱建物跡 |
| | 7 | 第2号方形周溝墓 | | 4 | D区第7号掘立柱建物跡 |
| | 8 | 第2号方形周溝墓(東溝)遺物出土状況 | | 5 | D区第7号掘立柱建物跡ピット1 |
| 図版20 | 1 | 第3号方形周溝墓 | | 6 | D区第8号掘立柱建物跡 |
| | 2 | 第3(奥)・4(手前)号方形周溝墓 | | 7 | D区第9号掘立柱建物跡 |
| | 3 | 第5号方形周溝墓 | | 8 | D区第10号掘立柱建物跡柱穴土層断面 |
| | 4 | 第5号方形周溝墓遺物出土状況(1) | 図版25 | 1 | D区第11(手前)・5号掘立柱建物跡 |
| | 5 | 第5号方形周溝墓遺物出土状況(2) | | 2 | D区第12号掘立柱建物跡 |
| | 6 | 第5号方形周溝墓遺物出土状況(3) | | 3 | E区第1号掘立柱建物跡 |
| | 7 | 第5号方形周溝墓遺物出土状況(4) | | 4 | E区第2号掘立柱建物跡 |
| | 8 | 第5号方形周溝墓遺物出土状況(5) | | 5 | E区第3号掘立柱建物跡 |
| 図版21 | 1 | 第5号方形周溝墓遺物出土状況(6) | | 6 | E区第6・7・5・4(奥)号掘立柱建物跡 |
| | 2 | 第5号方形周溝墓遺物出土状況(7) | | 7 | E区第4号掘立柱建物跡 |
| | 3 | 第6号方形周溝墓 | | 8 | E区第5号掘立柱建物跡 |
| | 4 | 第6号方形周溝墓(北溝)溝内土壙 | 図版26 | 1 | E区第6号掘立柱建物跡 |
| | 5 | 第6号方形周溝墓遺物出土状況(1) | | 2 | E区第7号掘立柱建物跡 |
| | 6 | 第6号方形周溝墓遺物出土状況(2) | | 3 | 第2(手前)・1号柵列跡 |
| | 7 | 第7号方形周溝墓 | | 4 | 第3・4号柵列跡、第13号掘立柱建物跡 |
| | 8 | 第1号掘立柱建物跡 | | 5 | 第5号柵列跡 |
| 図版22 | 1 | 第2号掘立柱建物跡 | | 6 | 第6号柵列跡 |
| | 2 | 第3(手前)・1(奥)号掘立柱建物跡 | | 7 | 第6号柵列跡(中央) |
| | 3 | 第5号掘立柱建物跡 | | 8 | E区第1号柵列跡 |
| | 4 | 第6号掘立柱建物跡 | 図版27 | 1 | E区第2号柵列跡 |
| | 5 | 第6(奥)・10(手前)号掘立柱建物跡 | | 2 | 第6号土壙 |
| | 6 | 第7号掘立柱建物跡 | | 3 | 第8号土壙遺物出土状況 |
| | 7 | (手前から)第11・7・9号掘立柱建物跡 | | 4 | 第13号土壙遺物出土状況 |
| | 8 | 第8号掘立柱建物跡 | | 5 | 第28号土壙遺物出土状況 |
| 図版23 | 1 | 第10号掘立柱建物跡 | | 6 | D区第1号土壙 |
| | 2 | 第12号掘立柱建物跡 | | 7 | D区第2号土壙 |
| | 3 | 第14号掘立柱建物跡 | | 8 | D区第7号土壙 |
| | 4 | 第15号掘立柱建物跡 | 図版28 | 1 | D区第10号土壙遺物出土状況 |
| | 5 | 第16号掘立柱建物跡 | | 2 | D区第13号土壙遺物出土状況 |
| | 6 | 第17号掘立柱建物跡 | | 3 | D区第21号土壙 |
| | 7 | D区第2号掘立柱建物跡 | | 4 | E区第1号土壙 |
| | 8 | D区第3号掘立柱建物跡 | | 5 | E区第7号土壙 |
| 図版24 | 1 | D区第4号掘立柱建物跡 | | 6 | E区第13号土壙 |
| | 2 | D区第5(奥)・11号掘立柱建物跡 | | | |

- | | | | | |
|------|---|-----------------|------|----------------------|
| | 7 | E区第16号土壤 | 4 | 第38(左)・43号井戸跡 |
| | 8 | E区第16号土壤遺物出土状況 | 5 | 第39号井戸跡 |
| 図版29 | 1 | E区第19・20号土壤 | 6 | 第40号井戸跡 |
| | 2 | E区第21・22(奥)号土壤 | 7 | 第41号井戸跡遺物出土状況(1) |
| | 3 | 第1号井戸跡 | 8 | 第41号井戸跡遺物出土状況(2) |
| | 4 | 第2号井戸跡 | 図版34 | 1 第42号井戸跡遺物出土状況(1) |
| | 5 | 第2号井戸跡遺物出土状況 | 2 | 第42号井戸跡遺物出土状況(2) |
| | 6 | 第5号井戸跡 | 3 | 第44号井戸跡 |
| | 7 | 第6号井戸跡 | 4 | 第45号井戸跡 |
| | 8 | 第7号井戸跡 | 5 | D区第1号井戸跡遺物出土状況(1) |
| 図版30 | 1 | 第8号井戸跡 | 6 | D区第1号井戸跡遺物出土状況(2) |
| | 2 | 第9号井戸跡(井戸粹) | 7 | D区第2号井戸跡 |
| | 3 | 第10号井戸跡 | 8 | D区第3号井戸跡 |
| | 4 | 第11号井戸跡 | 図版35 | 1 D区第6号井戸跡 |
| | 5 | 第11号井戸跡遺物出土状況 | 2 | D区第7号井戸跡遺物出土状況 |
| | 6 | 第12号井戸跡 | 3 | D区第8号井戸跡 |
| | 7 | 第14号井戸跡 | 4 | D区第9号井戸跡 |
| | 8 | 第15号井戸跡 | 5 | D区第9号井戸跡遺物出土状況(1) |
| 図版31 | 1 | 第13・16号井戸跡 | 6 | D区第9号井戸跡遺物出土状況(2) |
| | 2 | 第17号井戸跡 | 7 | D区第10号井戸跡 |
| | 3 | 第18号井戸跡 | 8 | D区第11号井戸跡 |
| | 4 | 第19号井戸跡 | 図版36 | 1 D区第13号井戸跡 |
| | 5 | 第20号井戸跡 | 2 | D区第14号井戸跡 |
| | 6 | 第21号井戸跡 | 3 | D区第14号井戸跡遺物出土状況(1) |
| | 7 | 第22号井戸跡 | 4 | D区第14号井戸跡遺物出土状況(2) |
| | 8 | 第23号井戸跡 | 5 | D区第14号井戸跡遺物出土状況(3) |
| 図版32 | 1 | 第24号井戸跡 | 6 | D区第14号井戸跡遺物出土状況(4) |
| | 2 | 第25号井戸跡 | 7 | D区第14号井戸跡遺物出土状況(5) |
| | 3 | 第26号井戸跡 | 8 | D区第14号井戸跡遺物出土状況(6) |
| | 4 | 第27号井戸跡 | 図版37 | 1 D区第14号井戸跡遺物出土状況(7) |
| | 5 | 第28号井戸跡 | 2 | D区第14号井戸跡遺物出土状況(8) |
| | 6 | 第29号井戸跡 | 3 | D区第15号井戸跡 |
| | 7 | 第30(奥)・31号井戸跡 | 4 | D区第16号井戸跡 |
| | 8 | 第32号井戸跡 | 5 | D区第17号井戸跡 |
| 図版33 | 1 | (左から)第33~35号井戸跡 | 6 | D区第18号井戸跡 |
| | 2 | 第35号井戸跡遺物出土状況 | 7 | D区第19号井戸跡 |
| | 3 | 第36号井戸跡 | 8 | D区第20号井戸跡(右)、 |

		H-17グリッドピット1 (左)	4	E区第17号井戸跡
図版38	1	D区第21号井戸跡	5	E区第18号井戸跡
	2	D区第22号井戸跡(手前)、第4号掘 立柱建物跡ピット3 (奥)	6	E区第19号井戸跡
	3	D区第23号井戸跡	7	D区第1号墳(奥)
	4	D区第24号井戸跡	8	D区第1号墳東側
	5	D区第26号井戸跡	図版43	1 D区第1号墳遺物出土状況(1)
	6	D区第27号井戸跡遺物出土状況(1)	2	D区第1号墳遺物出土状況(2)
	7	D区第27号井戸跡遺物出土状況(2)	3	D区第2号墳
	8	D区第28・30号井戸跡	4	D区第2号墳遺物出土状況(1)
図版39	1	D区第29号井戸跡	5	D区第2号墳遺物出土状況(2)
	2	D区第29号井戸跡遺物出土状況(1)	6	D区第2号墳遺物出土状況(3)
	3	D区第29号井戸跡遺物出土状況(2)	7	D区第2号墳遺物出土状況(4)
	4	D区第31号井戸跡	8	D区第2号墳遺物出土状況(5)
	5	D区第32号井戸跡	図版44	1 D区第2号墳遺物出土状況(6)
	6	D区第33号井戸跡	2	D区第3号墳
	7	D区第33号井戸跡遺物出土状況(1)	3	D区第3号墳遺物出土状況(1)
	8	D区第33号井戸跡遺物出土状況(2)	4	D区第3号墳遺物出土状況(2)
図版40	1	D区第34号井戸跡	5	D区第3号墳遺物出土状況(3)
	2	E区第1号井戸跡	6	D区第3号墳遺物出土状況(4)
	3	E区第2号井戸跡	7	E区第1号墳
	4	E区第3号井戸跡	8	E区第1号墳遺物出土状況
	5	E区第3号井戸跡遺物出土状況	図版45	1 E区第2号墳
	6	E区第4号井戸跡	2	E区第2号墳遺物出土状況(1)
	7	E区第4号井戸跡遺物出土状況	3	E区第2号墳遺物出土状況(2)
	8	E区第5号井戸跡	4	E区第2号墳遺物出土状況(3)
図版41	1	E区第6号井戸跡	5	E区第3号墳(奥)、第24号溝跡(右)
	2	E区第7号井戸跡遺物出土状況(1)	6	第1号溝跡遺物出土状況(1)
	3	E区第7号井戸跡遺物出土状況(2)	7	第1号溝跡遺物出土状況(2)
	4	E区第8号井戸跡	8	第10号溝跡(中央)、第1号周溝状遺構
	5	E区第10号井戸跡	図版46	1 第18・19号溝跡(中央)、第3号周溝 状遺構
	6	E区第11号井戸跡	2	第24・25(中央)・20(奥)号溝跡
	7	E区第12号井戸跡	3	第21号溝跡遺物出土状況
	8	E区第13号井戸跡	4	第23号溝跡(左)、第12号井戸跡(右)
図版42	1	E区第14号井戸跡	5	第26号溝跡、第15号井戸跡(手前)
	2	E区第15号井戸跡	6	(左から)第20・29・27・28号溝跡
	3	E区第16号井戸跡	7	(左から)第28・27・29・20号溝跡

	8	第32(左)・59(中央)・60(右)号溝跡			溝跡
図版47	1	第33(手前)・34号溝跡		5	D区第73号溝跡遺物出土状況(1)
	2	(左から)第32・31・30・38号溝跡		6	D区第73号溝跡遺物出土状況(2)
	3	第38号溝跡遺物出土状況		7	D区第76号溝跡、E区第2号墳(左)
	4	第41(中央)・32(右)号溝跡		8	D区第80号溝跡、第30・28(奥)号井戸跡
	5	第41号溝跡遺物出土状況	図版52	1	(左から)第1号方形周溝墓、E区第1号溝跡、第3号方形周溝墓
	6	第42号溝跡		2	E区第1号溝跡遺物出土状況
	7	第43号溝跡(中央)、第10号周溝状遺構		3	第2号溝跡、E区第5号周溝状遺構(左)
	8	(手前から)第62・44・56・54号溝跡		4	第3号溝跡、E区第2号方形周溝墓
図版48	1	(左から)第53・46号溝跡		5	E区第4号溝跡遺物出土状況
	2	第47号溝跡		6	E区第5号溝跡
	3	第48号溝跡		7	E区第10号溝跡
	4	第50号溝跡		8	E区第12号溝跡
	5	(左から)第50・52号溝跡、第29号井戸跡	図版53	1	E区第29号溝跡遺物出土状況
	6	第55(中央)・32(奥)号溝跡		2	第1号性格不明遺構
	7	第56号溝跡		3	第2号性格不明遺構
	8	(手前から)第62・32号溝跡		4	第3号性格不明遺構遺物出土状況
図版49	1	(左から)第50・63・64号溝跡		5	第1号火葬墓跡出土状況
	2	(手前から)第66号溝跡、第27号土壇		6	F-19グリッドピット1遺物出土状況
	3	第67号溝跡		7	G-7グリッドピット20遺物出土状況
	4	(左から)第68号溝跡、第37・27号土壇		8	K-5グリッドピット1遺物出土状況
	5	第69号溝跡	図版54	1	第2号住居跡(第28図1)
	6	第75号溝跡(中央)、C区全景		2	第1号周溝状遺構(第34図1)
	7	第77号溝跡		3	第3号周溝状遺構(第39図3)
	8	(手前から)第79・78・76号溝跡		4	第3号周溝状遺構(第39図24)
図版50	1	第80(中央)・82・81(奥)号溝跡		5	第3号周溝状遺構(第39図25)
	2	(左から)第85・84・83号溝跡		6	第4号周溝状遺構(第41図1)
	3	(左から)D区第15・4・3・91号溝跡	図版55	1	第8号周溝状遺構(第49図1)
	4	(左から)D区第20・58・19号溝跡		2	第8号周溝状遺構(第49図2)
	5	D区第19号溝跡遺物出土状況		3	第19号周溝状遺構(第68図1)
	6	D区第22号溝跡遺物出土状況		4	第19号周溝状遺構(第68図8)
	7	D区第31号溝跡(中央)		5	第19号周溝状遺構(第68図14)
	8	(左から)D区第37・36・38号溝跡		6	第19号周溝状遺構(第68図15)
図版51	1	(右から)D区第45・42・40・39・41号溝跡	図版56	1	第19号周溝状遺構(第68図25)
	2	D区第41号溝跡遺物出土状況		2	第19号周溝状遺構(第68図26)
	3	D区第49(中央)・50(左)号溝跡		3	第19号周溝状遺構(第68図24)
	4	(左から)D区第55・84・51・53・68号			

	4	第19号周溝状遺構 (第69図28)		5	D区第10号周溝状遺構 (第111図43)
	5	第27号周溝状遺構 (第80図2)		6	D区第10号周溝状遺構 (第111図44)
	6	第27号周溝状遺構 (第80図4)	図版63	1	D区第10号周溝状遺構 (第111図45)
図版57	1	第27号周溝状遺構 (第80図11)		2	D区第10号周溝状遺構 (第111図46)
	2	第28号周溝状遺構 (第83図1)		3	D区第10号周溝状遺構 (第111図47)
	3	第28号周溝状遺構 (第83図11)		4	D区第10号周溝状遺構 (第112図48)
	4	第28号周溝状遺構 (第83図16)		5	D区第10号周溝状遺構 (第112図49)
	5	第29号周溝状遺構 (第86図6)		6	D区第10号周溝状遺構 (第112図50)
	6	第29号周溝状遺構 (第86図7)	図版64	1	D区第16号周溝状遺構 (第117図2)
図版58	1	第29号周溝状遺構 (第86図11)		2	D区第16号周溝状遺構 (第117図4)
	2	第29号周溝状遺構 (第86図12)		3	D区第16号周溝状遺構 (第117図5)
	3	第30号周溝状遺構 (第88図3)		4	D区第19号周溝状遺構 (第120図3)
	4	第30号周溝状遺構 (第88図4)		5	D区第19号周溝状遺構 (第120図5)
	5	第30号周溝状遺構 (第88図9)		6	D区第21号周溝状遺構 (第122図5)
	6	第34号周溝状遺構 (第93図2)	図版65	1	D区第25号周溝状遺構 (第128図3)
図版59	1	第34号周溝状遺構 (第93図4)		2	D区第26号周溝状遺構 (第131図8)
	2	D区第1号周溝状遺構 (第95図10)		3	D区第28号周溝状遺構 (第131図13)
	3	D区第8号周溝状遺構 (第104図1)		4	D区第28号周溝状遺構 (第131図14)
	4	D区第9号周溝状遺構 (第104図7)		5	D区第28号周溝状遺構 (第131図19)
	5	D区第10号周溝状遺構 (第109図1)		6	D区第28号周溝状遺構 (第131図20)
	6	D区第10号周溝状遺構 (第109図3)	図版66	1	D区第34号周溝状遺構 (第143図11)
図版60	1	D区第10号周溝状遺構 (第109図4)		2	D区第34号周溝状遺構 (第143図4)
	2	D区第10号周溝状遺構 (第109図6)		3	D区第34号周溝状遺構 (第143図5)
	3	D区第10号周溝状遺構 (第109図8)		4	D区第34号周溝状遺構 (第143図12)
	4	D区第10号周溝状遺構 (第109図10)		5	D区第34号周溝状遺構 (第143図13)
	5	D区第10号周溝状遺構 (第109図11)		6	D区第35号周溝状遺構 (第145図1)
	6	D区第10号周溝状遺構 (第109図22)	図版67	1	D区第35号周溝状遺構 (第145図4)
図版61	1	D区第10号周溝状遺構 (第110図23)		2	D区第35号周溝状遺構 (第145図5)
	2	D区第10号周溝状遺構 (第110図24)		3	D区第35号周溝状遺構 (第145図6)
	3	D区第10号周溝状遺構 (第110図27)		4	D区第38号周溝状遺構 (第150図8)
	4	D区第10号周溝状遺構 (第110図28)		5	D区第38号周溝状遺構 (第150図15)
	5	D区第10号周溝状遺構 (第110図31)		6	D区第42号周溝状遺構 (第159図2)
	6	D区第10号周溝状遺構 (第110図34)	図版68	1	D区第42号周溝状遺構 (第159図4)
図版62	1	D区第10号周溝状遺構 (第110図35)		2	D区第42号周溝状遺構 (第159図5)
	2	D区第10号周溝状遺構 (第110図36)		3	D区第42号周溝状遺構 (第159図26)
	3	D区第10号周溝状遺構 (第110図37)		4	D区第42号周溝状遺構 (第159図30)
	4	D区第10号周溝状遺構 (第110図38)		5	D区第42号周溝状遺構 (第160図48)

- 6 D区第42号周溝状遺構 (第160图52)
- 图版69 1 D区第42号周溝状遺構 (第161图55)
2 D区第44号周溝状遺構 (第169图2)
3 D区第44号周溝状遺構 (第169图4)
4 D区第46号周溝状遺構 (第163图5)
5 D区第46号周溝状遺構 (第163图16)
6 D区第46号周溝状遺構 (第163图17)
- 图版70 1 D区第46号周溝状遺構 (第163图19)
2 D区第46号周溝状遺構 (第164图21)
3 D区第48号周溝状遺構 (第166图1)
4 D区第48号周溝状遺構 (第166图2)
5 D区第48号周溝状遺構 (第166图4)
6 D区第48号周溝状遺構 (第166图7)
- 图版71 1 D区第48号周溝状遺構 (第166图10)
2 D区第50号周溝状遺構 (第172图2)
3 D区第50号周溝状遺構 (第172图3)
4 D区第50号周溝状遺構 (第172图9)
5 D区第50号周溝状遺構 (第173图33)
6 D区第51号周溝状遺構 (第175图2)
- 图版72 1 D区第51号周溝状遺構 (第175图5)
2 E区第2号周溝状遺構 (第180图1)
3 E区第6号周溝状遺構 (第189图1)
4 E区第6号周溝状遺構 (第189图5)
5 E区第6号周溝状遺構 (第189图9)
6 E区第6号周溝状遺構 (第189图12)
- 图版73 1 E区第6号周溝状遺構 (第189图13)
2 E区第7号周溝状遺構 (第192图9)
3 E区第7号周溝状遺構 (第192图10)
4 E区第10号周溝状遺構 (第198图2)
5 E区第10号周溝状遺構 (第198图3)
6 E区第10号周溝状遺構 (第198图10)
- 图版74 1 E区第13号周溝状遺構 (第203图1)
2 E区第13号周溝状遺構 (第203图2)
3 E区第13号周溝状遺構 (第203图16)
4 E区第13号周溝状遺構 (第203图18)
5 E区第15号周溝状遺構 (第206图1)
6 E区第15号周溝状遺構 (第206图2)
- 图版75 1 E区第16号周溝状遺構 (第208图1)
2 第1号方形周溝墓 (第214图1)
3 第1号方形周溝墓 (第214图3)
4 第1号方形周溝墓 (第214图4)
5 第2号方形周溝墓 (第217图1)
6 第2号方形周溝墓 (第217图5)
- 图版76 1 第2号方形周溝墓 (第217图6)
2 第2号方形周溝墓 (第217图7)
3 第5号方形周溝墓 (第225图1)
4 第5号方形周溝墓 (第225图2)
5 第5号方形周溝墓 (第225图8)
- 图版77 1 第5号方形周溝墓 (第225图6)
2 第5号方形周溝墓 (第227图23)
3 第5号方形周溝墓 (第225图10)
- 图版78 1 第5号方形周溝墓 (第225图11)
2 第5号方形周溝墓 (第226图17)
3 第5号方形周溝墓 (第226图18)
4 第5号方形周溝墓 (第226图19)
5 第5号方形周溝墓 (第226图21)
6 第6号方形周溝墓 (第231图1)
- 图版79 1 第6号方形周溝墓 (第231图4)
2 第6号方形周溝墓 (第231图5)
3 第6号方形周溝墓 (第231图10)
4 第6号方形周溝墓 (第232图11)
5 第28号土壙 (第23图1)
6 D区第13号土壙 (第294图7)
- 图版80 1 D区第13号土壙 (第294图9)
2 E区第16号土壙 (第23图12)
3 第11号井戸跡 (第312图18)
4 第41号井戸跡 (第313图24)
5 第35号井戸跡 (第312图16)
6 第41号井戸跡 (第313图25)
- 图版81 1 第41号井戸跡 (第313图27)
2 第42号井戸跡 (第313图30)
3 D区第1号井戸跡 (第313图37)
4 D区第1号井戸跡 (第313图38)
5 D区第9号井戸跡 (第314图48)

- 6 D区第9号井戸跡 (第314図49)
- 図版82 1 D区第9号井戸跡 (第314図50)
2 D区第9号井戸跡 (第314図51)
3 D区第14号井戸跡 (第315図53)
4 D区第14号井戸跡 (第315図54)
5 D区第14号井戸跡 (第315図55)
6 D区第14号井戸跡 (第315図56)
- 図版83 1 D区第14号井戸跡 (第315図57)
2 D区第14号井戸跡 (第315図58)
3 D区第14号井戸跡 (第315図69)
4 D区第14号井戸跡 (第316図80)
5 D区第14号井戸跡 (第316図81)
6 D区第14号井戸跡 (第316図82)
- 図版84 1 D区第14号井戸跡 (第316図86)
2 D区第14号井戸跡 (第317図89)
3 D区第27号井戸跡 (第318図97)
4 D区第29号井戸跡 (第318図106)
5 D区第29号井戸跡 (第318図107)
6 D区第33号井戸跡 (第319図116)
- 図版85 1 E区第3号井戸跡 (第319図119)
2 E区第3号井戸跡 (第319図120)
3 E区第4号井戸跡 (第319図121)
4 E区第4号井戸跡 (第319図122)
5 E区第4号井戸跡 (第319図123)
6 E区第7号井戸跡 (第320図129)
- 図版86 1 E区第7号井戸跡 (第320図130)
2 D区第2号墳 (第329図12)
3 E区第2号墳 (第343図4)
4 第53号溝跡 (第377図18)
- 図版87 1 第16号溝跡 (第377図3)
2 第8号溝跡 (第377図9)
3 D区第22号溝跡 (第378図38)
4 D区第41号溝跡 (第378図43)
5 D区第73号溝跡 (第379図51)
- 図版88 1 D区第73号溝跡 (第379図62)
- 2 D区第73号溝跡 (第379図70)
3 E区第1号溝跡 (第380図97)
4 E区第1号溝跡 (第380図99)
5 E区第4号溝跡 (第381図113)
6 第3号性格不明遺構 (第388図1)
- 図版89 1 第3号性格不明遺構 (第388図4)
2 第3号性格不明遺構 (第388図5)
3 第3号性格不明遺構 (第388図6)
4 第3号性格不明遺構 (第388図16)
5 第3号性格不明遺構 (第388図22)
6 H-8グリッド (第394図19)
- 図版90 1 D区第3号墳 (第337図2)
2 D区第3号墳 (第337図4)
- 図版91 1 D区第3号墳 (第337図3)
2 D区第16号溝跡 (第345図1)
3 D区第7号井戸跡 (第345図3)
4 グリッド・表採 (第345図4)
- 図版92 1 D区第1号墳 (第326図9)
2 D区第2号墳 (第332図40)
3 D区第2号墳 (第332図43)
4 D区第2号墳 (第332図42)
- 図版93 1 D区第2号墳 (第334図54)
- 図版94 1 D区第2号墳 (第333図52)
2 土玉 3 石製品
4 貝巢穴痕泥岩 5 鉄製品
- 図版95 1 第9号井戸跡 (第321図11)
2 E区第17号井戸跡 (第323図22)
3 第35号井戸跡 (第322図18)
4 第35号井戸跡 (第322図17)
- 図版96 1 第9号井戸跡 (第322図12)
2 第9号井戸跡 (第322図13)
3 第35号井戸跡 (第322図19)
4 第39号井戸跡 (第323図20)
5 第47号溝跡 (第382図1)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

平成19年度からの新5か年計画『ゆとりとチャンスの埼玉プラン』に「渋滞のない円滑な自動車交通の実現」という基本目標を掲げている。このような中、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所が主体となって建設を進める首都圏中央連絡自動車道は県内を東西に結ぶ大動脈としてその完成が待望されている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、首都圏中央連絡自動車道建設に係る埋蔵文化財の保護について、昭和62年の入間・狭山・日高地区を皮切りに現在まで国土交通省などの関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

さて、本書で報告される個所については、工事計画に先立ち国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所長(当時)より平成13年5月9日付け大宮工第27号で埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて、県教育委員会教育長(以下「県教育長」)あての照会があった。当該個所は周知の埋蔵文化財包蔵地になっていなかったため、県教育長から平成13年11月21日付け教文第1137号で、今後試掘調査が必要となる範囲の一つとして回答した。実際に

試掘調査を実施したのは平成17年2月7日と8日で、古墳時代前期を中心とした遺構・遺物が確認された。この箇所は富田後遺跡(37-024)として平成17年2月8日、遺跡台帳に登録された。

その取扱いについて協議を重ねたが、現状保存は困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団(以下「事業団」)が受託することになった。文化財保護法第94条による埋蔵文化財発掘通知が大宮国道事務所長から平成13年3月30日付け大宮工第186号で提出された。それに対する保護法上必要な勧告は県教育長から平成17年3月31日付け教文第4-1059号で行われた。

文化財保護法第92条の規定による発掘調査届については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から地元川島町教育委員会経由で県教育長あてに提出された。これに対する県教育委員会としての発掘調査の指示は次の文書で行った。

平成17年6月20日付け教生文第2-23号

平成18年9月6日付け教生文第2-40号

(生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

富田後遺跡の発掘調査は、平成17年度(第1次)・18年度(第2次)に実施した。調査対象面積は、9,900㎡である。

平成17年度(富田後第1次)

富田後遺跡第1次の発掘調査は、平成17年6月1日から開始した。調査面積は2,400㎡である。

調査地点は、現道によって分断されていたため、便宜的にA～Eと命名し調査を行った。

平成17年6月中に事務手続き、事務所設置作業を行い、重機による表土除去作業を開始した。

6月中旬、人力で遺構確認を行い、A・B区から調査を実施した。6月下旬と8月上旬に基準点測量を実施した。

調査の進展に伴い順次、土層断面図、平面図等の作成、遺物の取り上げ、および写真撮影を行った。

平成17年12月に、遺構の分布状況を把握するため、空中写真撮影を実施した。

12月上旬、調査が終了したA・B区の重機による埋め戻しを行った。

事務処理等を含め、すべての作業を12月上旬に終了した。

平成18年度(富田後第2次)

富田後遺跡第2次の発掘調査は、平成18年8月1日から開始した。調査面積は、7,500㎡である。

C区の残り部分とD・E区を、人力で遺構確認を行い、順次、土層断面図、平面図等の作成、遺物の取り上げ、写真撮影を行った。

平成18年11月、平成19年1月に、遺構の分布状況を把握するため、空中写真撮影を実施した。

平成19年1月下旬、調査が終了したC～E区の重機による埋め戻しを行った。

事務処理、事務所撤去等を含め、すべての作業

を1月31日に終了した。

(2) 整理報告書の作成

富田後遺跡の整理・報告書作成事業は、平成21～23年度に実施した。以下、年度ごとの整理・報告書作成の経過を述べる。

なお、遺物の整理にあたって、コンテナ総数177箱の内、平成21年度に45箱、平成22年度に95箱、平成23年度に37箱を対象とすることとした。

平成21年度

平成21年度の整理・報告書作成は、平成21年10月1日から平成22年3月24日まで実施した。

10月当初から、遺物の水洗・注記作業と、同時に遺構図面の修正・第二原図の作成、および遺構写真整理を行った。続いてコンテナ45箱分の遺物についての接合・復元作業を行った。

11月からグラフィックソフトによる遺構図のデジタルトレースを開始した。続いて、遺構分布図、全体図の作成、遺構のデータ処理などの作業を3月末まで実施した。

平成22年度

平成22年度の整理・報告書作成は、平成22年4月8日から平成23年3月31日まで実施した。

4月当初から遺物実測・拓本、遺構図面の修正・第二原図の作成、遺構図のデジタルトレース作業、併せて遺構分布図、全体図の作成、遺構のデータ処理、遺構図版の版組みなどを3月末まで実施した。

遺物の接合・復元作業は、調査区ごとに行う必要から4月と9月～3月に、水洗・注記作業は5月～8月に行った。

8月より遺物図版の版組み、12月より遺構写真整理、報告書の割り付けを開始し、3月末まで行った。

平成23年度

平成23年度の整理・報告書作成は、平成23年4月8日から平成23年9月30日まで実施した。

4月当初から5月下旬にかけて、コンテナ37箱分の遺物の接合・復元作業を行った。また、平成22年度から継続している遺構図面の修正・第二原図の作成、グラフィックソフトによる遺構図のデジタルトレース、および遺物の実測・拓本、遺構図の作成や、遺物実測図のコピーによる仮版組み等の作業を実施した。

これらと併行して、4月当初から6月にかけて、

遺物実測図のトレースを行った。

6月末から7月上旬にかけて、遺物の写真撮影を行い、遺物写真図版の編集作業を開始した。

その後、報告書の割り付けと原稿執筆を9月末にかけて行った。

9月、作業が終了した段階で、遺構図面類・出土遺物を分類・整理し、収納作業を行った。

9月下旬に、入札により印刷会社を決定し、入稿した。

その後、3回の校正を経て、11月下旬に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成17年度（発掘調査）

理事長	福田 陽 充	調査部	
常務理事兼管理部長	保 永 清 光	調査部長	今 泉 泰 之
管理部		調査部副部長	坂 野 和 信
管理部副部長	村 田 健 二	主席調査員(調査第二担当)	劔 持 和 夫
主 席	高 橋 義 和	統括調査員	大 谷 徹
		主任調査員	福 田 聖
		調査員	村 端 和 樹

平成18年度（発掘調査）

理事長	福田 陽 充	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調査部長	今 泉 泰 之
(常務理事兼総務部長)	保 永 清 光	調査部副部長	小 野 美 代 子
総務部		主幹兼調査第一課長	金 子 直 行
総務部副部長	昼 間 孝 志	主 査	黒 坂 禎 二
総 務 課 長	高 橋 義 和	主 査	上 野 真 由 美
		主 査	福 田 聖
		主 事	篠 田 泰 輔

平成21年度（報告書作成）

理 事 長	刈 部 博	調 査 部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	整 理 第 一 課 長	宮 井 英 一
総 務 課 長	田 中 雅 人	主 査	鈴 木 孝 之

平成22年度（報告書作成）

理 事 長	藤 野 龍 宏	調 査 部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行	調 査 監 兼 整 理 第 一 課 長	劔 持 和 夫
総 務 課 長	田 中 雅 人	主 査	鈴 木 孝 之

平成23年度（報告書作成）

理 事 長	藤 野 龍 宏	調 査 部	
常務理事兼総務部長	根 本 勝	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	劔 持 和 夫
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行	主 幹 兼 整 理 第 一 課 長	細 田 勝
総 務 課 長	矢 島 将 和	主 査	鈴 木 孝 之

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

関東平野は、西に関東山地・丹沢山地、北に三
国山地・足尾山地、東に筑波山地が連なり、南は
多摩丘陵・三浦丘陵・下総丘陵に取り囲まれた盆
地状の地形となっている。

関東平野は、台地と低地に大別できる。台地は、
下総台地・猿島台地・大宮台地・武蔵野台地など
があり、関東平野における主要な地形を形成して
いる。

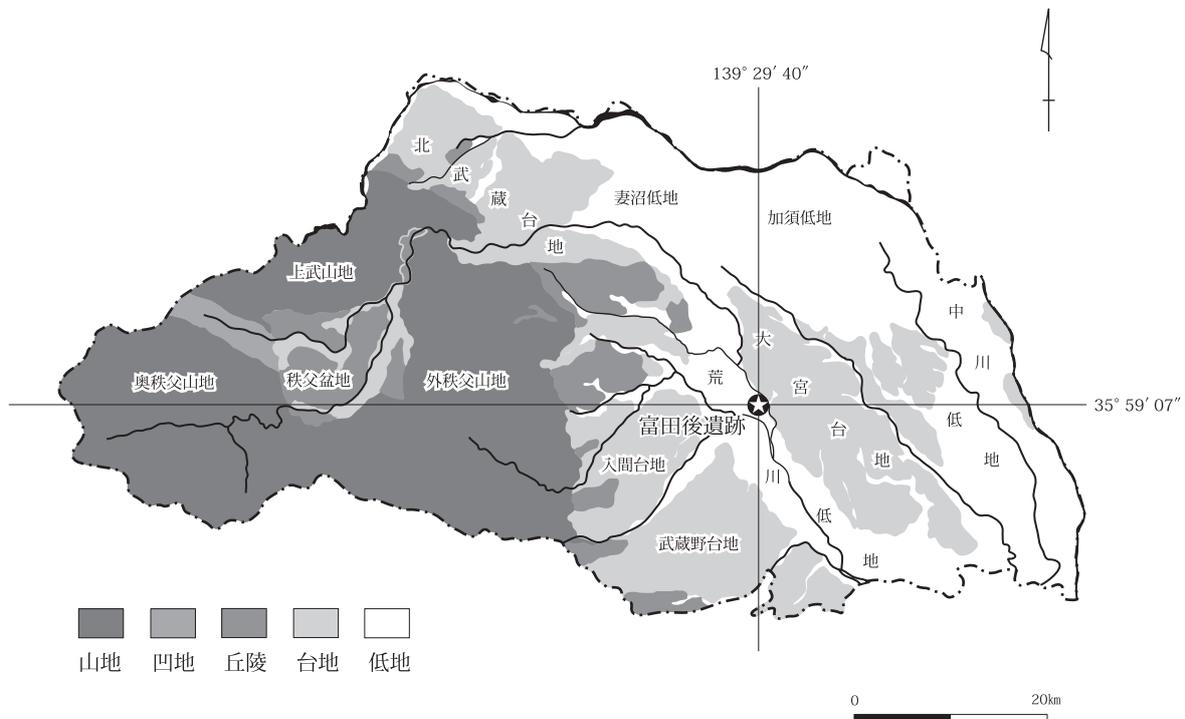
低地は、台地を刻んだ平野内で高度的に最も低
い一帯で、低地名は、その低地を流れる河川名を
冠するものが大部分である。

富田後遺跡が立地する川島町は、埼玉県のはぼ
中央部、荒川低地の中流部に位置する。川島町は、
大小の河川によって形成された自然堤防・河川の
流路跡・後背湿地からなる。自然堤防と後背湿地、
沖積平野の河川中流部に特徴的な地形であり、川

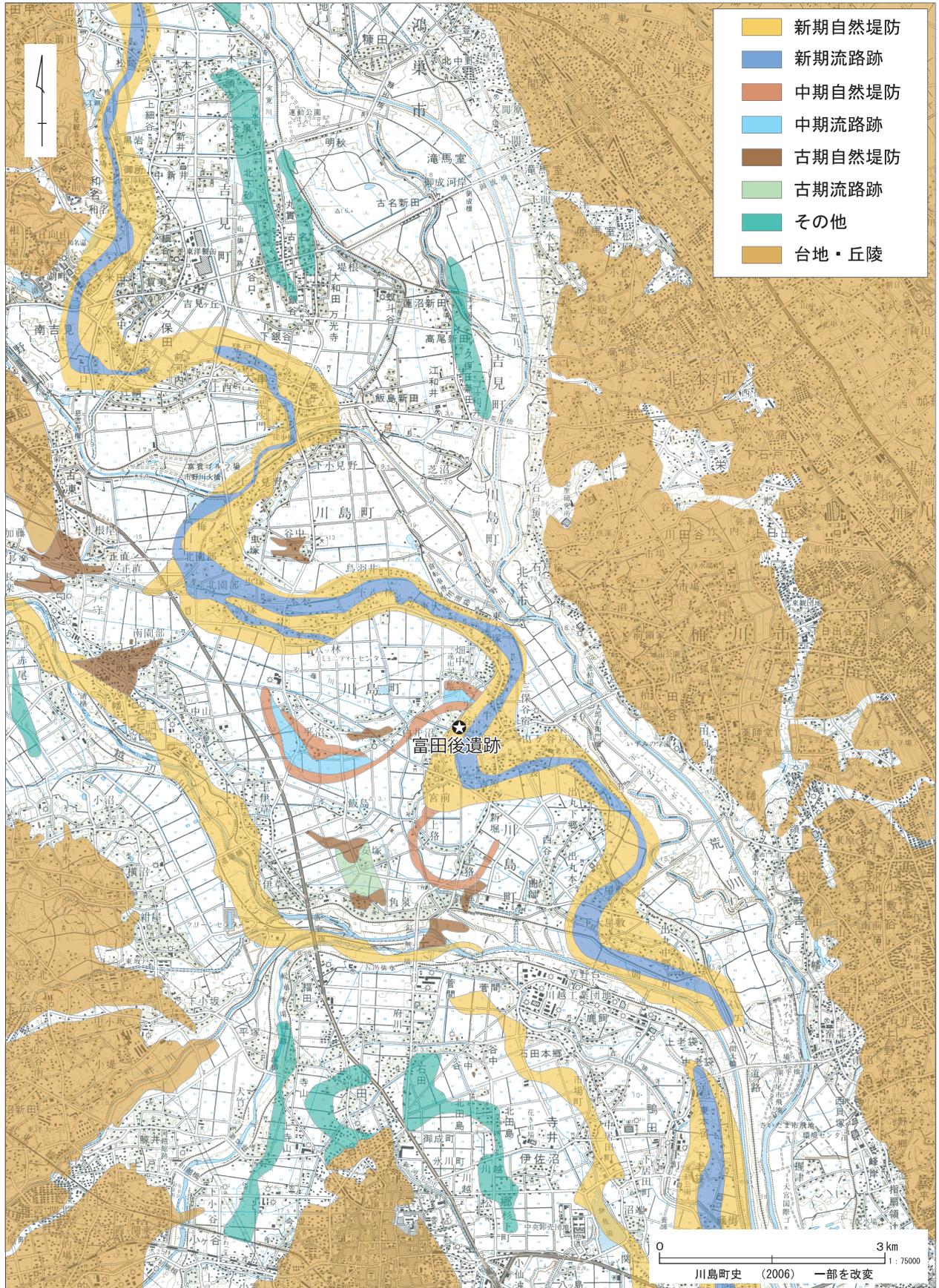
島町はこれらの地形が発達した地域である。その
地形景観は、現在に至るまで極めて良好に保存さ
れており、関東随一といわれている。

川島町は、隣接する市町とは河川によって画さ
れている。北は市野川により吉見町と、東は荒川
により上尾市・桶川市と、南は入間川により川越
市と、西は越辺川・都幾川により坂戸市・東松山
市と画されている。

川島町域では、大小の河川は概ね北西方向から
南東方向に向かって流下している。町域の西、東
松山市高坂付近では、越辺川と都幾川が合流し、
さらに下流の川越市との境界付近では入間川と合
流する。そして入間川は、上尾市・さいたま市と
の境界付近で荒川に合流する。町域の北では市野
川が東流して、北本市・桶川市付近で荒川に合流
している。



第1図 埼玉県の地形



第2図 遺跡周辺の地形

川島町における現在の土地利用は、自然堤防上は宅地や畑地、後背湿地や流路跡の多くは水田域となっている。

川島町の自然堤防は、古期・中期・新期の三期に分類されている(川島町2005)。古期自然堤防は、断続的に併行する飯島と安塚の自然堤防で、その間が旧流路跡とされている。両自然堤防の標高と幅は、前者が標高11.5~11.9m、幅約150m、後者が標高10.9~11.3m、幅約100mである。現在は、水田面である旧流路跡の標高は10.5~10.9m、幅は450mと広い。

中期自然堤防では、平沼に認められる並行する二筋の自然堤防があり、その間が旧流路とされる。

二筋の自然堤防のうち、北側に位置する自然堤防の後背湿地(北側)は、自然堤防から約250m離れた地点で、標高10.9m、自然堤防近辺で11.1mである。この自然堤防は、標高11.4~11.6m、幅約200m。両自然堤防の間、現水田面である旧流路跡の標高は10.3~10.4m、幅150mである。南側の自然堤防は、標高12.1~12.3m、幅約120m、自然堤防南の後背湿地は標高約10.7mとなっている。

この二筋の中期流路跡のうち、左岸側に位置する自然堤防上には、平沼一丁田遺跡(岡田2009)、右岸の自然堤防上には白井沼遺跡(栗岡2007)が立地している。

両遺跡ともに、縄文時代中期の遺構と遺物が検出されており、自然堤防が縄文時代中期には形成されていたと考えられる。この中期自然堤防は、新期自然堤防によって分断されている。中期自然堤防については、宮前から上貉下貉にかけて、半円形を成して明瞭に残存しているが、これと並行する自然堤防は認められず、旧流路の痕跡は失われている。

このみごとな円弧を描く自然堤防内側の水田面の標高は10.5~11.0m、外側の水田面では10.5~

11.1mである。自然堤防の標高は、川島町管内図(平成9年9月測図、平成10年2月修正)をみると、新期自然堤防との接点では標高11.6mである。

新期自然堤防では、鳥羽井の自然堤防については薬師堂付近の標高13.4mの地点が最高位である。しかしこの自然堤防については、標高12.0~12.2mの高度が一般的であるといわれている。この自然堤防南側の、現水田面である流路跡の中央付近では、標高11.1m前後の高さを示している。

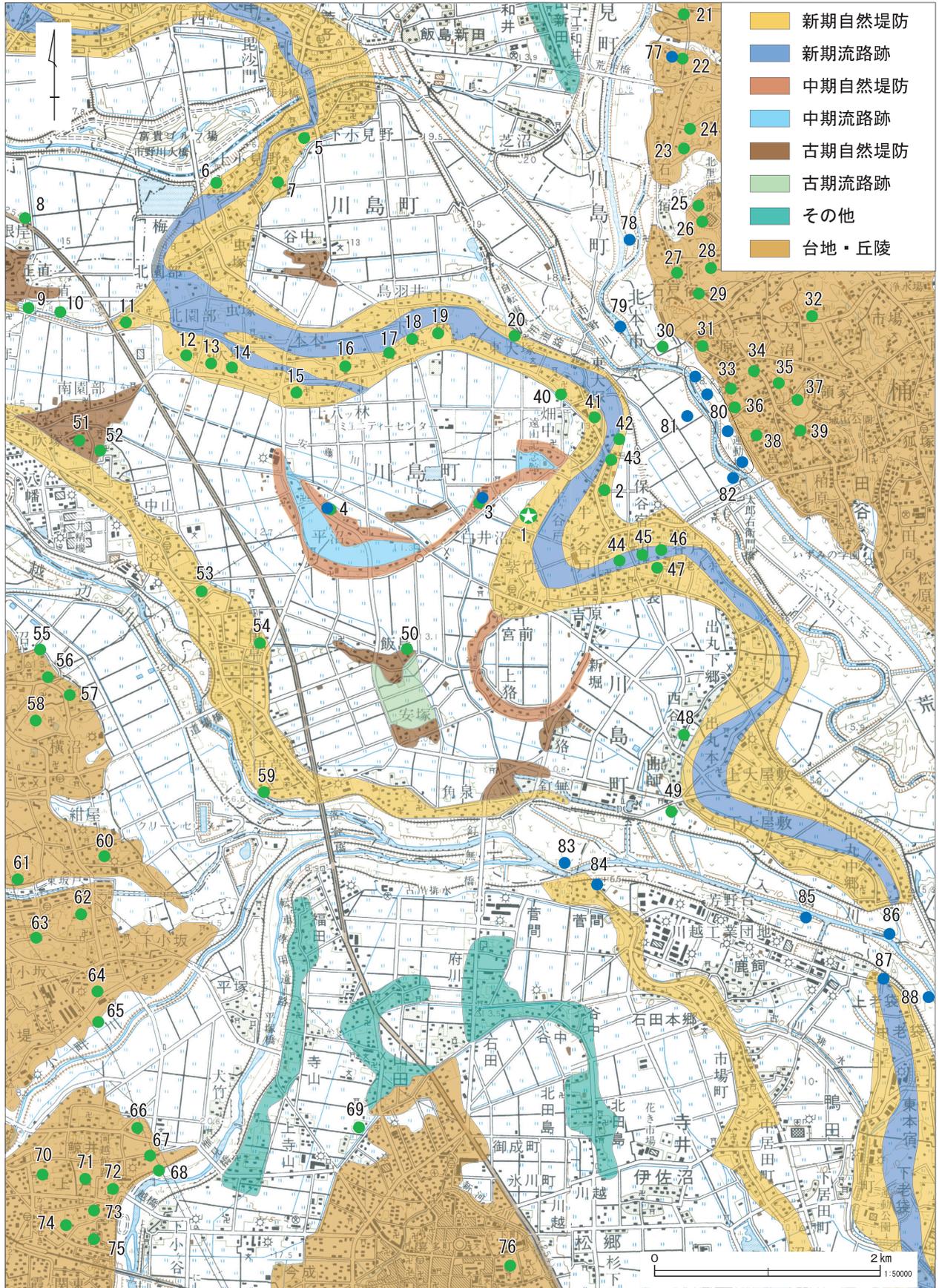
下谷ツ林の自然堤防の標高は、11.2~12.0mであり、鳥羽井の自然堤防の標高より若干低い。南にある後背湿地の標高は北の10.7mから南の10.3mというように、南に向かって次第に低くなっていく。

下小見野から出丸本にかけて、並行する二筋の自然堤防が存在する。その間に旧流路が存在し、富田後遺跡は、旧流路の右岸側に立地している。そして左岸側の自然堤防上、約700m上流に元宿遺跡(鈴木2009)が存在する。

富田後遺跡が存在する自然堤防は11.5~12.7mというように高低差が大きく、最大幅は約500m、自然堤防北側の後背湿地では、標高11.7mを測る。元宿遺跡が存在する、左岸側の自然堤防との間の旧流路跡では、標高11.4~11.5m、最大幅約350m、その南の後背湿地では、標高11.1~11.3mを測る。

なお、この他に越辺川沿いにも新期自然堤防が認められる。

町内の芝沼堤外遺跡(金子2004)や東野遺跡(岡田2009)は、現在の荒川右岸側に立地する遺跡で、現地地表下5m程の位置から、縄文時代前期の遺構や遺物が検出されている。しかし両遺跡とも、現地地形からは遺跡が立地していたであろう自然堤防を窺い知ることはできない。このことから、ほかにも埋没している自然堤防が存在する可能性が考えられる。



第3図 周辺の遺跡

2. 歴史的環境

川島町内における発掘調査例は少ないが、町史編纂事業や、近年の首都圏中央連絡自動車道の新設事業、入間川河川改修工事事業に伴う発掘調査などの成果によって、徐々に過去の姿が浮かび上がりがつつある。

以下に、富田後遺跡の所在する川島町を中心に、時代ごとに歴史的環境を概観していく。

旧石器時代

川島町では、旧石器時代の遺跡は確認されていない。旧石器時代には、川島町は位置的・地質学

第1表 周辺の遺跡一覧

市町村	番号	遺跡名	時代
川島町	1	富田後遺跡	縄文 古墳 奈良・平安 中・近世
川島町	2	元宿遺跡	縄文 弥生 古墳 奈良・平安 中・近世
川島町	3	白井沼遺跡	縄文 古墳
川島町	4	平沼一丁田遺跡	縄文 古墳 中・近世
川島町	5	宮ノ町遺跡	奈良・平安
川島町	6	安楽寺遺跡	古墳 奈良・平安
川島町	7	稲荷塚遺跡	古墳
川島町	8	正直稲荷町遺跡	古墳 奈良・平安 中・近世
川島町	9	山王塚古墳	古墳
川島町	10	正直玉作遺跡	古墳
川島町	11	塚ノ腰古墳	古墳
川島町	12	吹塚古墳	古墳 奈良・平安 中・近世
川島町	13	華藏院地藏堂遺跡	古墳 中・近世
川島町	14	西見寺遺跡	奈良・平安
川島町	15	極楽寺遺跡	古墳 奈良・平安 中・近世
川島町	16	上八ッ林古墳	古墳
川島町	17	宮ヶ谷戸遺跡	古墳 中・近世
川島町	18	柳町遺跡A区	古墳
川島町	19	柳町遺跡B区	古墳 奈良・平安
川島町	20	大塚古墳	古墳
北本市	21	宮岡遺跡	古墳 奈良・平安
北本市	22	雷電遺跡	縄文 古墳 中・近世
北本市	23	問屋坂遺跡	古墳
北本市	24	市場I遺跡	縄文 奈良・平安 中・近世
北本市	25	諏訪山北遺跡	古墳
北本市	26	諏訪山南遺跡	古墳 中・近世
北本市	27	下宿遺跡	縄文 古墳 奈良・平安 中・近世
北本市	28	元屋敷遺跡	縄文 古墳 奈良・平安
北本市	29	庚塚遺跡	古墳 中・近世
桶川市	30	東台I遺跡	古墳
桶川市	31	台原遺跡	弥生 古墳
桶川市	32	大平遺跡	旧石器 縄文 古墳 中・近世
桶川市	33	西台遺跡	縄文 古墳
桶川市	34	前原遺跡	縄文 古墳 中・近世
桶川市	35	中台II遺跡	古墳
桶川市	36	川田谷古墳群	古墳
桶川市	37	永久保I遺跡	弥生
桶川市	38	若宮台遺跡	古墳
桶川市	39	三ツ木遺跡	弥生 古墳 中・近世
川島町	40	村並遺跡	弥生 古墳 奈良・平安
川島町	41	尾崎遺跡	古墳 奈良・平安 中・近世
川島町	42	富士浅間塚古墳	古墳
川島町	43	愛宕塚古墳	古墳
川島町	44	養竹院内古墳	古墳
川島町	45	廣徳寺古墳	古墳 中・近世
川島町	46	廣徳寺遺跡	中・近世
川島町	47	慶徳寺古墳	古墳

市町村	番号	遺跡名	時代
川島町	48	西谷遺跡	古墳
川島町	49	浅間塚古墳	古墳
川島町	50	森谷稲荷古墳	古墳
川島町	51	上廓天神社遺跡	奈良・平安
川島町	52	中廓正泉寺遺跡	奈良・平安
川島町	53	堂地遺跡	古墳 奈良・平安 中・近世
川島町	54	上伊草堀ノ内遺跡	奈良・平安 中・近世
坂戸市	55	牛塚山古墳群	古墳
坂戸市	56	小沼堀之内遺跡	古墳
坂戸市	57	木曾免遺跡	旧石器 弥生 古墳 奈良・平安 中・近世
坂戸市	58	北谷遺跡	縄文 古墳 中・近世
川島町	59	東福院遺跡	中・近世
坂戸市	60	高窪遺跡	古墳
坂戸市	61	景台遺跡	縄文 中・近世
坂戸市	62	天王山古墳群	古墳
坂戸市	63	上谷遺跡	古墳
坂戸市	64	下小坂古墳群	奈良・平安
川越市	65	登戸遺跡	縄文 弥生 古墳 中・近世
川越市	66	会下遺跡	弥生 古墳 奈良・平安 中・近世
川越市	67	花見堂遺跡	弥生 古墳 奈良・平安 中・近世
川越市	68	浅間下遺跡	古墳 奈良・平安 中・近世
川越市	69	南山田遺跡	弥生 古墳
川越市	70	日枝神社遺跡	古墳 中・近世
川越市	71	龍光遺跡	奈良・平安 中・近世
川越市	72	河越館跡	奈良・平安 中・近世
川越市	73	天王遺跡	奈良・平安 中・近世
川越市	74	山王久保遺跡	奈良・平安 中・近世
川越市	75	霞ヶ関遺跡	弥生 古墳 奈良・平安 中・近世
川越市	76	川越城遺跡	中・近世
桶川市	77	宮岡II遺跡	縄文
川島町	78	芝沼堤外遺跡	縄文
川島町	79	荒川河床市野川合流地点遺跡	縄文
桶川市	80	荒川河床内遺跡	縄文
川島町	81	東野遺跡	縄文
川島町	82	荒川河床太郎右衛門橋付近遺跡	縄文
川島町	83	入間川河床遺跡A地点	縄文
川越市	84	入間川西河床遺跡	縄文
川島町	85	入間川河床遺跡D地点	縄文
川島町	86	入間川河床遺跡G地点	縄文
川越市	87	入間川東河床遺跡	縄文
川越市	88	上老袋遺跡	縄文

的にみて、現在の荒川筋に形成されていた谷の中にあつたものと推定されている。その後、沖積世以降の河川堆積によって形成されていったと考えられている。

このことから、川島町周辺では、後期旧石器時代の遺跡は発見されていない。但し、荒川対岸(左岸)の台地上では、多数の旧石器時代の遺跡が確認されている。

縄文時代

川島町では、草創期・早期の土器群は出土していない。現在確認されている最も古い遺物は、入間川河床遺跡D地点から出土した縄文時代早期後葉から前期初頭にかけての土器である。

町域内で、前期の土器が出土しているのは芝沼堤外遺跡(78)と東野遺跡(81)である。

東野遺跡では、前期終末の十三菩提式期の住居跡8軒、土壇48基、性格不明遺構1基、集石土壇1基が検出されている。台地上の遺跡では検出例が乏しい前期終末期の集落跡が確認された点で重要な遺跡といえる。

白井沼遺跡(3)と三竹遺跡では、縄文時代中期の土器が、平沼一丁田遺跡(4)では集石土壇に伴って中期の土器が出土した。また、富田後遺跡(1)と元宿遺跡(2)では、土壇内から縄文時代後期の土器が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、町内の村並遺跡(40)で中期の条痕文系土器が出土しているが、遺構は確認されていない。なお、村並遺跡と同じ、新期の自然堤防上に立地する元宿遺跡でも、中期の土器が1点出土している。今後、調査例が増えれば、この時期の遺跡が検出される可能性がある。

町外に目を転じれば、東松山市反町遺跡・銭塚遺跡・代正寺遺跡・大西遺跡、坂戸市附島遺跡・木曾免遺跡(57)で弥生時代中期の集落が検出されている。多くは台地上に立地しているが、東松山市反町遺跡では、自然堤防上に立地する中期の集

落が確認されている。なお埼玉県北部では、熊谷市北島遺跡およびその周辺地域でも、自然堤防上に中期の住居跡が確認されている。

弥生時代後期の遺跡は、坂戸台地・高坂台地・東松山台地・大宮台地などの台地上に立地している。なお、当地域は、高坂台地・東松山台地を中心に、後期の吉ヶ谷式土器が盛んに用いられた地域であるが、現在までのところ、川島町内の自然堤防上では、後期の遺跡は確認されていない。

古墳時代

川島町域で集落が多数営まれ始めるのは、古墳時代前期である。近年、首都圏中央連絡自動車道をはじめとした開発事業に伴う発掘調査によって、川島町域内の自然堤防上から、古墳時代前期の遺跡が次々と検出されている。新期自然堤防上に、北から安楽寺遺跡(6)・宮ヶ谷戸遺跡(17)・柳町遺跡(18・19)・村並遺跡・尾崎遺跡(41)・富田後遺跡・元宿遺跡・白井沼遺跡・平沼一丁田遺跡・西谷遺跡(48)等の存在が確認されている。富田後遺跡・元宿遺跡が立地する新期自然堤防に分断され、細長く弧状を描く中期自然堤防上には白井沼遺跡が立地し、この自然堤防と旧流路を挟んだ対岸には平沼一丁田遺跡が立地している。

同じく町内の越辺川に面した自然堤防上には堂地遺跡(53)がある。このほか、玉作りの製作途中の遺物が数多く出土した正直玉作遺跡(10)がある。

川島町内では、富田後遺跡を含む自然堤防上の集落跡で、周溝状遺構と呼ばれる遺構が多数検出されている。周溝状遺構は、従来、方形周溝墓とされていた遺構であるが、周囲に溝を巡らせた居住施設とされる遺構であり、尾崎遺跡・白井沼遺跡・平沼一丁田遺跡・元宿遺跡などでも確認されている。

なお、富田後遺跡の西約8kmに位置する反町遺跡も、自然堤防上の遺跡であるが、周溝状遺構は1基も確認されていない。同時期で、同様の立地

条件にある集落でありながら、竪穴住居と周溝状遺構という違いが何に起因するのか、分布状況を含めて、その解明が今後の課題といえる。

川島町の北隣の吉見町では、富田後遺跡・元宿遺跡と同じ旧流路に面した自然堤防上に、三ノ耕地遺跡がある。この遺跡では、古墳時代前期の前方後方形周溝墓2基が検出され、東海系の土器が多数出土している。

三ノ耕地遺跡に近接する吉見丘陵上には、前方後方墳である山の根古墳が存在する。

台地上の遺跡では、東松山市内の東松山台地上に、番清水遺跡が存在する。また、この番清水遺跡や、古墳時代前期を意味する五領式土器の標識遺跡として著名な五領遺跡が立地する台地の突端部付近には、下道添遺跡が立地している。

都幾川を挟んだ対岸の高坂台地には、諏訪山遺跡・高坂三番町遺跡が、台地下の自然堤防上には反町遺跡が存在する。

川島町内では、古墳時代中期の遺構・遺物は現在確認されていない。

廣徳寺古墳(45)・大塚古墳(20)・富士浅間塚古墳(42)・愛宕塚古墳(43)・養竹院内古墳(44)・浅間塚古墳(49)等は、後期の古墳である可能性が高い。また、三竹遺跡・富田後遺跡でも古墳が検出されている。

後期の集落跡としては、村並遺跡・尾崎遺跡・元宿遺跡・堂地遺跡・尾崎遺跡・宮ヶ谷戸遺跡・正直玉作遺跡・極楽寺遺跡などがある。

なお、白井沼遺跡・平沼一丁田遺跡の立地している自然堤防は中期自然堤防であるが、この2遺跡以外の他はいずれも新期自然堤防に立地している。

奈良・平安時代

川島町内におけるこの時期の遺跡の調査例は少

なく、奈良・平安時代の遺跡として、正直稻荷町遺跡(8)・尾崎遺跡・村並遺跡・元宿遺跡・堂地遺跡・西見寺遺跡(14)・極楽寺遺跡(15)・三竹遺跡などがあげられるにとどまる。

なお、三竹遺跡からは、「貴」・「長」・「玉」等が墨書された須恵器坏が出土しており、周辺に集落が存在していた可能性も考えられる。

中・近世

文献資料の上では、川島町域には三尾谷(三保谷)・小見野(尾美野)などの字名のあったことが知れる。『吾妻鏡』の中にみられる武蔵武士、三尾谷十郎広徳や小見野四郎盛行は、これらの地を根拠地としていたとされる。ちなみに、三尾谷十郎広徳は、三保谷(三尾谷)郷を名字としている。

また歴史にまつわる地名として、「元宿」が現存しているが、その周辺は「宿」の存在が想定されている地点であり、地名はこの宿に由来していると考えられる。このことは元宿遺跡の出土遺物からも裏付けられる。

町内の中世遺跡として、三尾谷十郎広徳の館跡とされる廣徳寺遺跡(46)のほか、廣徳寺古墳・平沼一丁田遺跡・白井沼遺跡・宮ヶ谷戸遺跡・尾崎遺跡・極楽寺遺跡・吹塚古墳(12)・正直稻荷町遺跡・上伊草堀ノ内遺跡(54)・華蔵院地藏堂遺跡(13)・東福院遺跡(59)・堂地遺跡・三竹遺跡・元宿遺跡・富田後遺跡を含め16遺跡が知られている。遺跡や板碑の分布状況から、すべての中・近世遺跡が自然堤防上に展開していることが分かる。

以上の遺跡の内、発掘調査が行われたのは、堂地遺跡・白井沼遺跡・元宿遺跡・富田後遺跡・平沼一丁田遺跡・三竹遺跡の6遺跡である。しかし、今後発掘調査の事例が増せば、この時期の遺跡もさらに増加すると推測される。

III 遺跡の概要

富田後遺跡は、埼玉県比企郡川島町大字牛ヶ谷戸字富田後388番地他に所在し、川島町役場の東約1 kmに位置している。調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴うもので、平成17年6月1日から平成17年11月30日、平成18年8月1日から平成19年1月31日まで、延べ12ヶ月間実施された。

遺跡は、川島町中央よりやや東寄りを、北西から南東へと流下する河川によって形成された新期自然堤防上に立地している(第2図)。この旧流路は蛇行が激しく、幅に違いがあるものの、両岸にはほぼ途切れることなく自然堤防が続いている。富田後遺跡は、この旧流路が北から東へほぼ直角に流れ下った地点の右岸に位置している。遺跡付近の標高は12m前後で、旧流路との比高差は1 m程である。この旧流路の対岸、750m東(上流)には元宿遺跡が所在する。さらに、富田後遺跡の西側の中期自然堤防上には白井沼遺跡(本遺跡の西約400m)が所在し、その対岸に位置する自然堤防上には、平沼一丁田遺跡(本遺跡の西約1.4km)が所在している。この2遺跡からは、縄文時代中期の土器が出土しており、この時期には自然堤防が形成されていたことがわかる。また、富田後遺跡や元宿遺跡でも縄文時代後期の土器が検出されており、新期自然堤防がこの時期には形成されていたことが分かる。富田後遺跡の推定範囲は、南北約330m、東西約210mである。今回は、そのほぼ中央部を南西から北東にかけて、幅46m、延長約240m、面積9,900㎡の発掘調査を行った。調査区は、遺跡が立地する自然堤防をほぼ東西に横断する形となる。調査区の、遺跡が立地する自然堤防内での最大比高差は80cm程である。

調査の結果検出された遺構は、住居跡4軒、掘立柱建物跡35棟、柵列跡7基、方形周溝墓7基、周溝状遺構96基、井戸跡98基、土壇103基、古墳跡6

基、溝跡216条、性格不明遺構3基、火葬墓1基、のほか、多数のピットである。

周溝状遺構は、古墳時代前期の居住施設と考えられる形態のひとつであり、自然堤防上の遺跡にみられることが多い。富田後遺跡の大きな特徴として以下の2点が挙げられる。

①周溝状遺構が大多数を占め、竪穴住居は例外的であること。

②井戸を埋めるに当たり、土器を納めていると考えられる例が極めて多いこと。

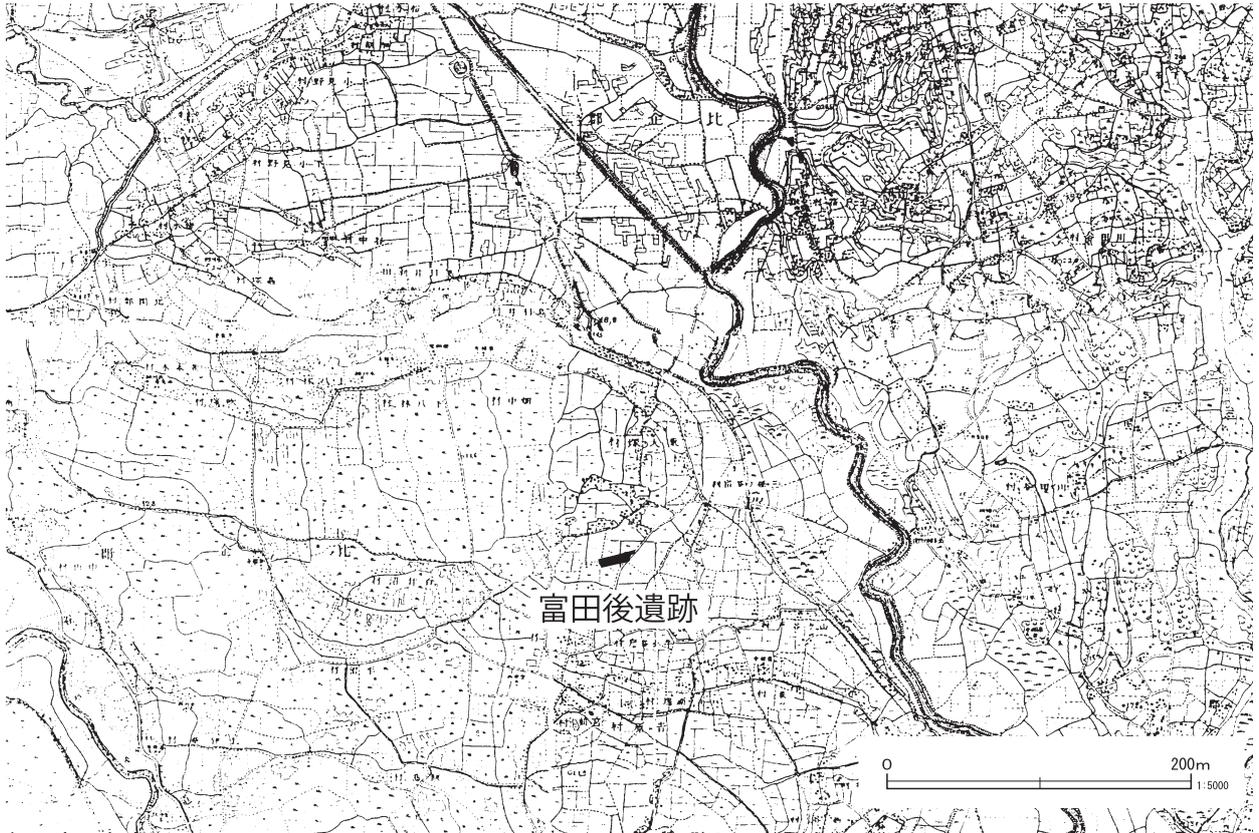
①については、遺構数や、遺構の集中度からみても、関東地方屈指であるといえる。なぜ居住施設の選択肢として、周溝状遺構を採用したのか、今後解明しなければならない課題である。

②については、この時期の井戸跡と推定される28基のうち、土器が納められていると考えられるものが10~11例あるのは、希有な事例である。この時期における井戸祭祀の事例としてのみでなく、その比率の高さも特徴的であり、一般の集落とは性格を異にした集落であった可能性も考えられる。

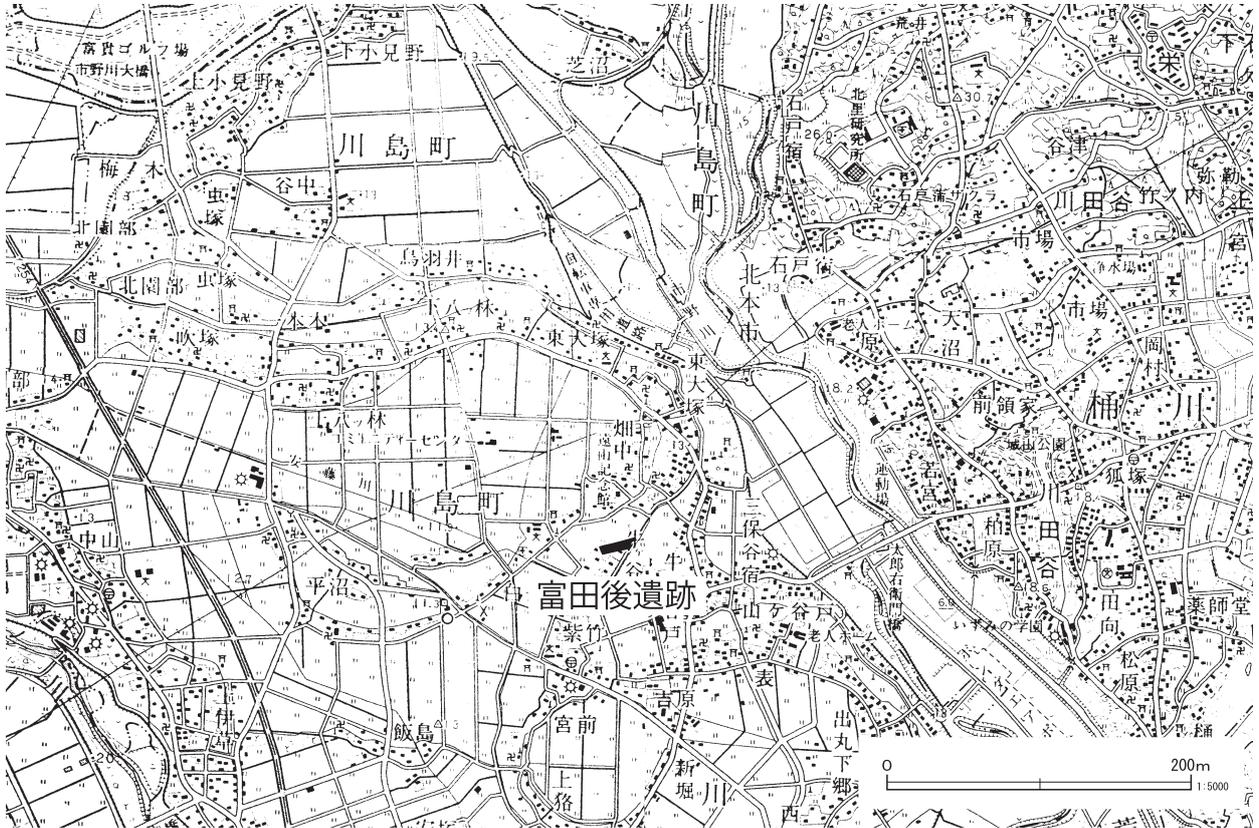


第4図 基本土層図

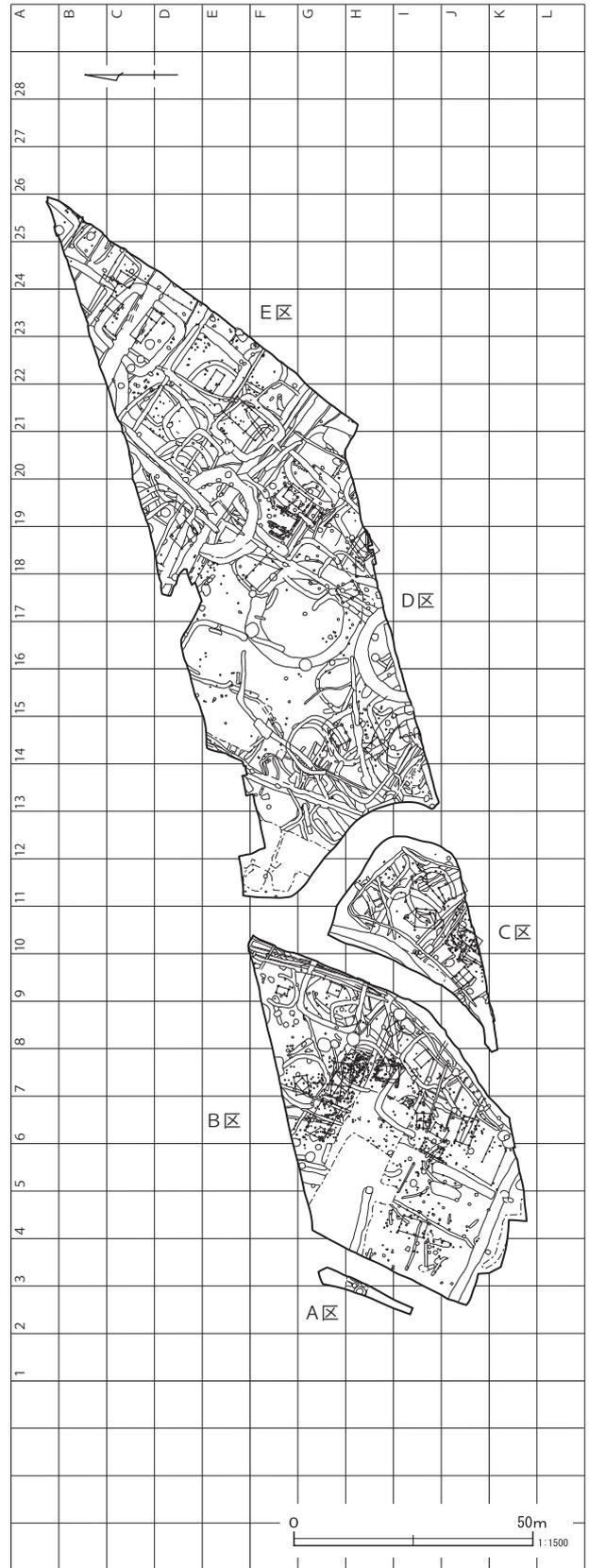
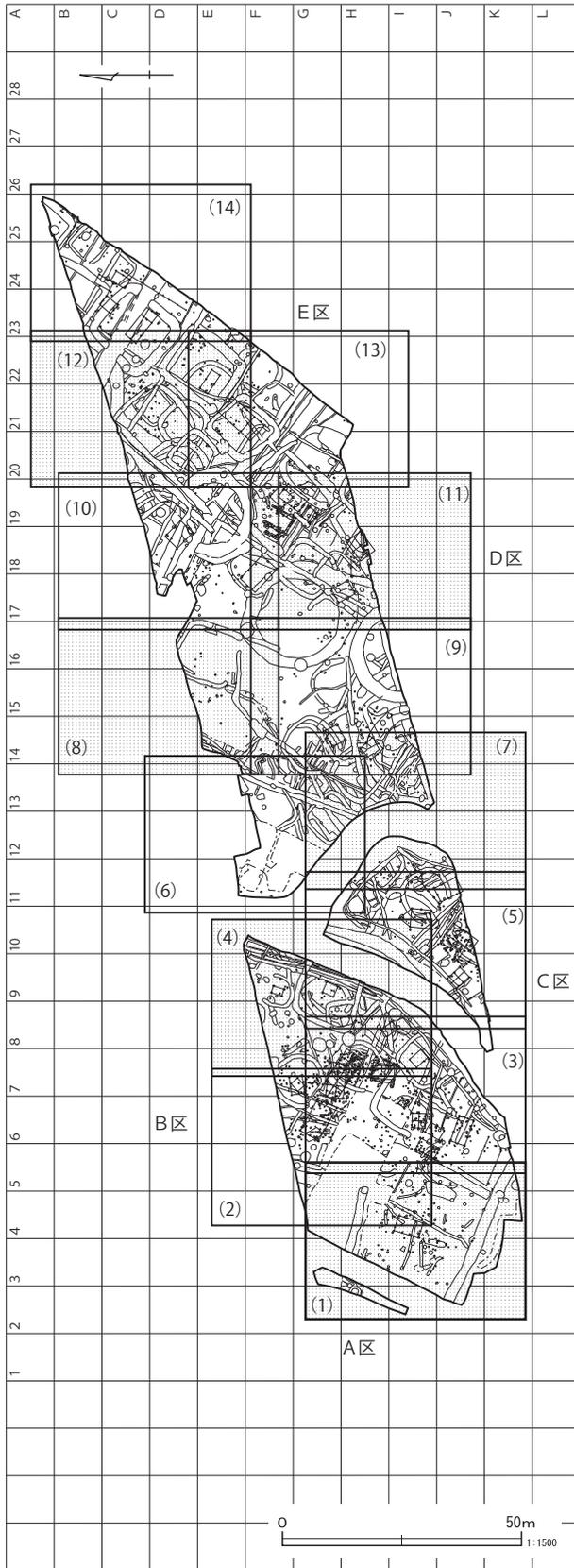
迅速測図（上尾・川越・鴻巣・熊谷）



地形図（上尾・川越・鴻巣・熊谷）



第5図 遺跡の位置



第6図 遺跡全体区割図



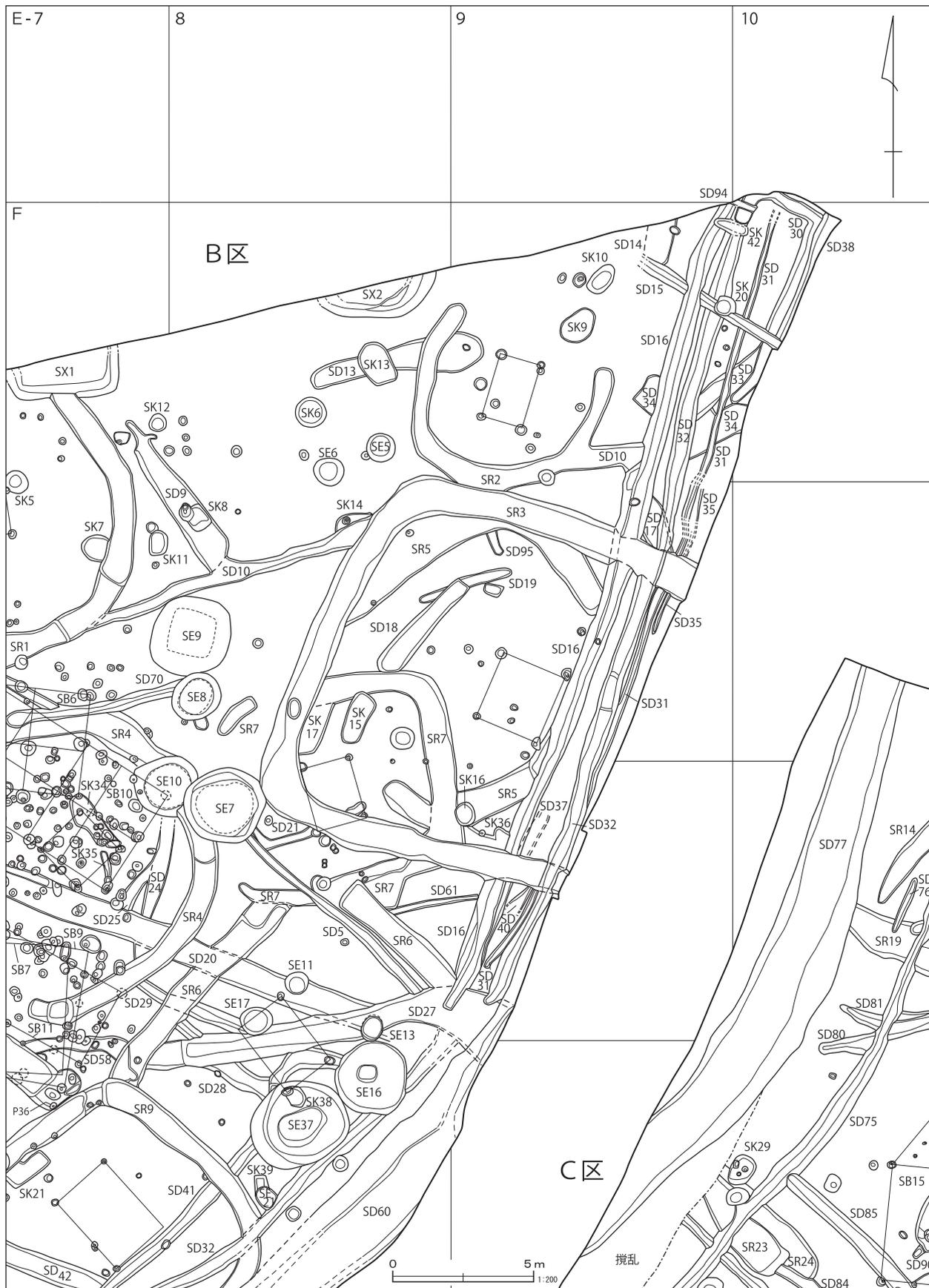
第7图 区割图(1)



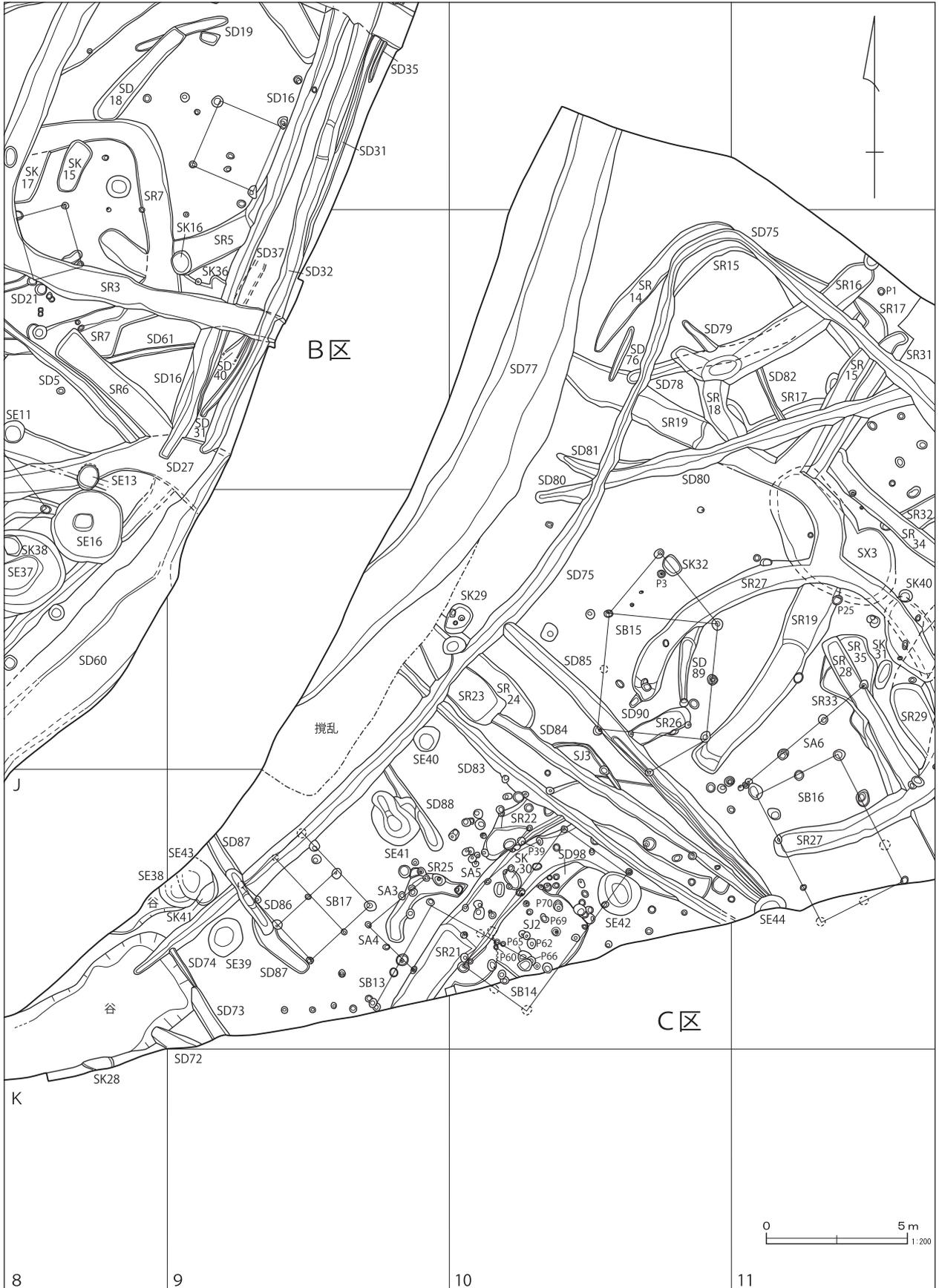
第8図 区割図(2)



第9図 区割図(3)



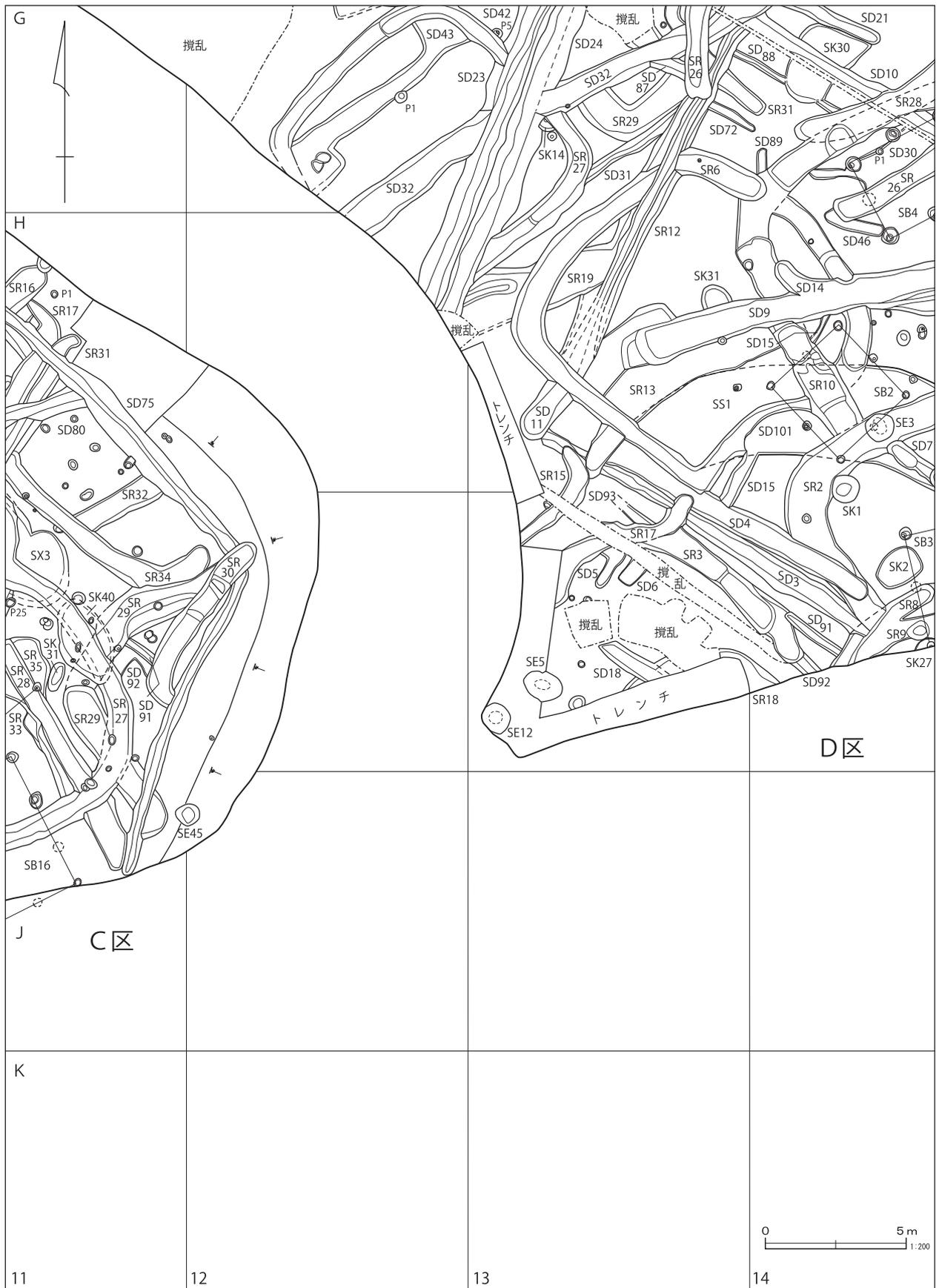
第10図 区割図 (4)



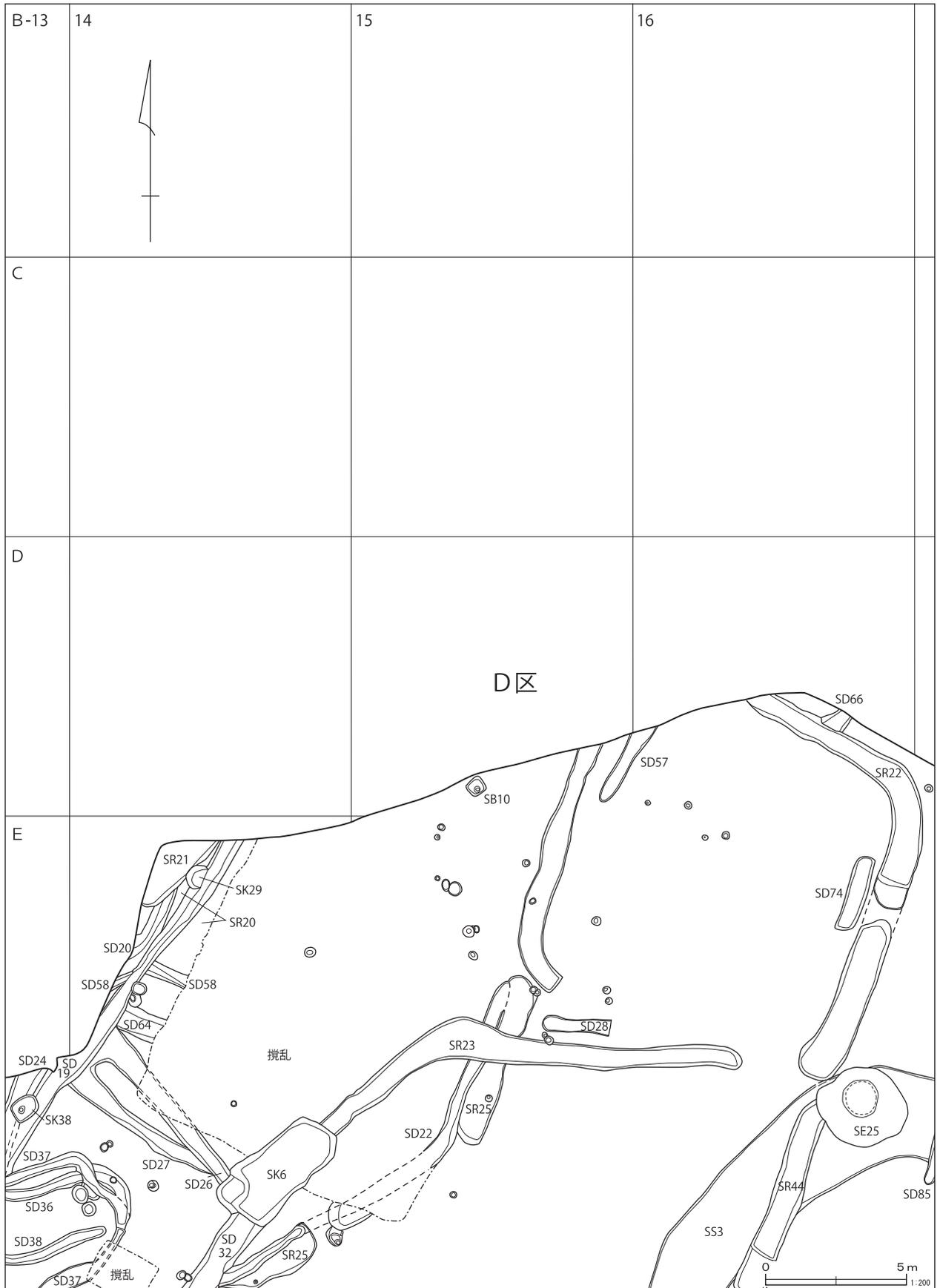
第11图 区割图 (5)



第12図 区割図 (6)



第13図 区割図 (7)



第14图 区割图 (8)



第15図 区割図 (9)



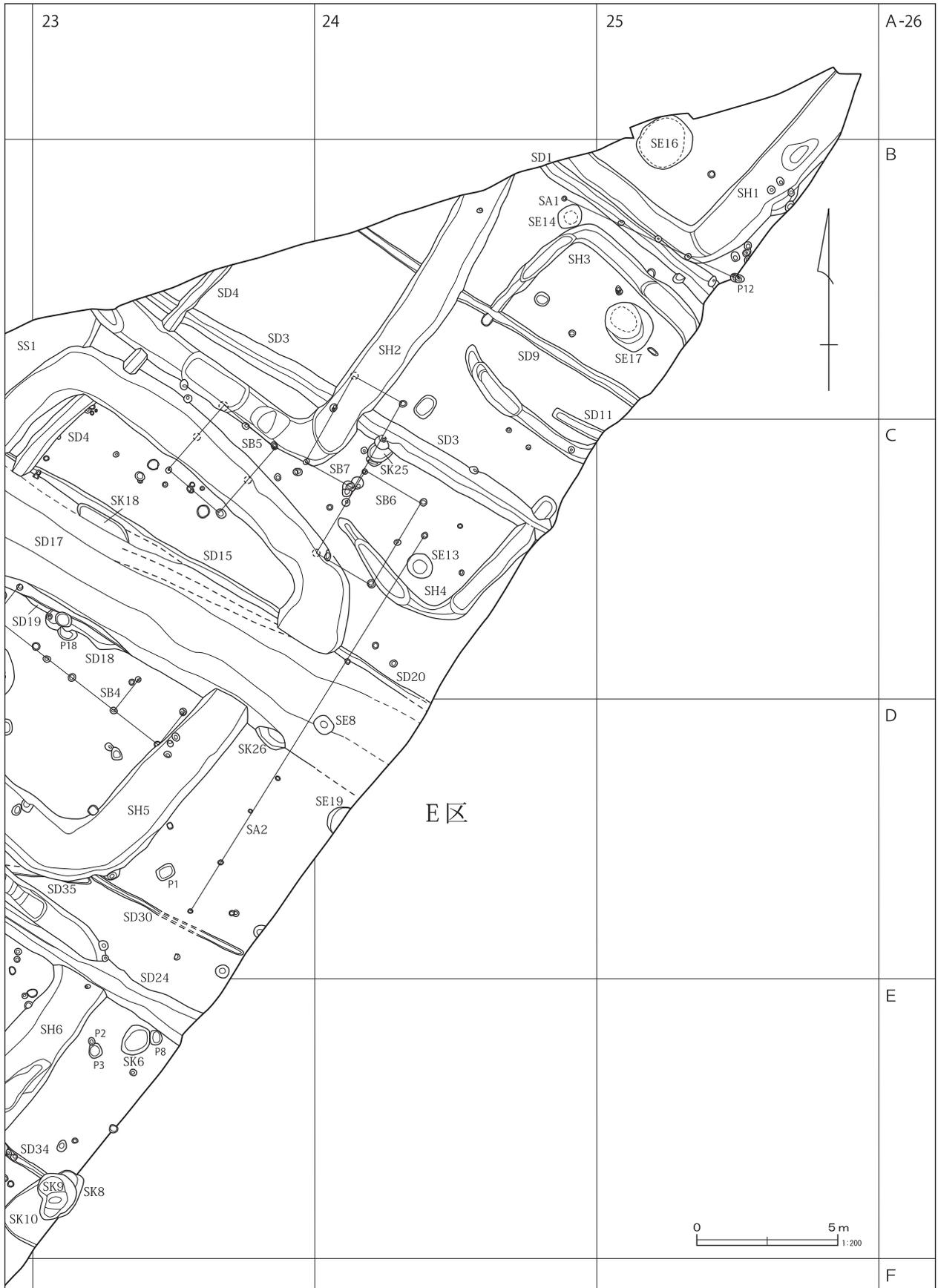
第16図 区割図 (10)



第18图 区割图 (12)



第19图 区割图 (13)



第20図 区割図 (14)

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土壇

縄文時代の遺構は土壇が5基検出されている。土壇から出土した土器は、いずれも後期前葉の堀之内2式土器で、土壇の時期も同じと考えられる。

第28号土壇 (第21～23図)

K-8グリッドに位置する。北側は谷地形であるため、調査の過程でプランが失われており、南側は調査区外に続き、平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。残存する遺構の規模は、長径1.10m、短径0.40m、深さ11cmである。

土壇内からは複数の土器片が検出された(第22図)が、いずれも同一個体で、深鉢が単独で埋設されていたと考えられる。第23図1～5は、同一個体の朝顔形深鉢形土器である。推定される口径22cm、底径は10.5cmである。口縁部に刻みを施す隆帯を巡らせる土器で、隆帯上には縦位の8字状貼付文を施している。口唇部の上面と口唇部直下の内面には、1本の沈線を巡らしている。体部の文様は、器面の磨滅が著しいため不明瞭であるが、残存している文様から、2本の沈線を巡らせ、その中に対向する弧状の沈線文を施すと考えられる。文様内には無節Lの縄文を充填する。

D区第23号土壇 (第21～23図)

F-21グリッドに位置する。D区第75号溝跡と重複し、本遺構の北側部分はプランが失われている。平面形は楕円形と推定される。断面形は皿状である。残存する遺構の規模は、長径0.52m、短径0.43m、深さ12cmである。

土壇内からは同一個体の複数の土器片が検出された(第22図)。第23図6～9は深鉢形土器の胴部破片である。沈線によって、楕円文などが施文される。文様内には、単節LRの縄文を充填している。

D区第24号土壇 (第21～23図)

H・I-14グリッドに位置する。D区第15号井戸跡、D区第1号墳によって遺構の一部が失われている。平面形は楕円形と推定される。断面形は皿状である。残存する遺構の規模は、長径0.60m、短径0.24m、深さ13cmである。

土壇内からは同一個体の複数の土器片が検出された(第22図)。第23図10は出土した深鉢形土器である。口縁部に刻みを施す隆帯を巡らせる。口唇部直下の内面には、沈線を1本巡らし、胴部には沈線を2本帯状に巡らせている。器面が磨滅しているため不明瞭であるが、文様内には斜方向の地文の痕跡が認められるが、原体は不明である。

D区第25号土壇 (第21・23図)

G-17グリッドに位置する。D区第3号墳と重複している。平面形は楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径0.84m、短径0.66m、深さ11cmである。長軸方位はN-8°-Eである。

土壇の底面からは、炭化物が検出された。第23図11は出土した深鉢形土器の底部の破片である。底径は8cmである。底面には網代痕が認められる。

E区第16号土壇 (第21～23図)

E-21グリッドに位置する。E区第8・18号周溝状遺構によって、本遺構の北側部分のプランが失われている。平面形は楕円形と推定される。断面形は逆台形である。残存する遺構の規模は、長径1.25m、短径0.70m、深さ20cmである。

土壇内からは、第23図12の土器が検出された。単独で埋設された深鉢と考えられる。12は、開く口縁部から胴上部にゆるやかな括れを持ち、胴下半で丸みを持つ器形である。推定される口径は32.2cmである。胴部文様は沈線によって、胴部の括れから上部のみに施文される。文様は縦位の3本1組

の沈線文を施文し、その間に波状や弧状の文様を施文している。また、口唇部直下の内面には沈線

を1本巡らしている。

(2) グリッド出土遺物

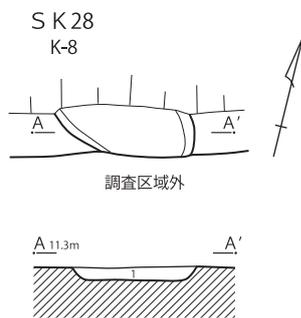
グリッド内出土の縄文時代の遺物を一括した。
出土土器 (第24図1~13)

1~13は出土した土器である。1~8は朝顔形深鉢形土器の口縁部の破片である。1・2は口縁部に隆帯を貼付しないもので、3~8は隆帯を貼付するものである。隆帯には刻みが入り、5以外の隆帯上には8字状貼付文が施されている。1~5の口唇部直下の内面には、沈線を巡らせている。6~8は内面に円文や刺突文を施文する。6の突起上面には、渦巻き文が施される。1・2は単節LR、7は無節Lの縄文を文様内に充填している。9・10は無文の口縁部から頸部で屈曲し、胴部が丸

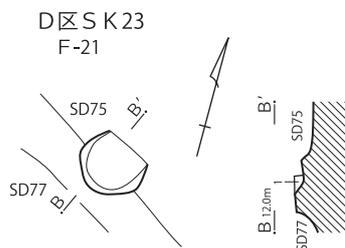
みを持つ器形の土器片である。11・12は粗製の深鉢形土器の胴部破片である。13は底部の破片である。時期は後期前葉の堀之内2式期である。

出土石器 (第24図14~16)

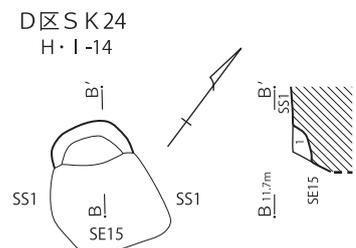
14~16は出土した石器である。14・15は打製石斧で、14は側縁部の一部を欠損するもので、残存する長さ9.0cm、幅5.4cm、厚さ2.3cm、重さ162.7g、石材は緑泥片岩である。15は基部を欠損するもので、残存する長さ9.75cm、幅9.2cm、厚さ2.7cm、重さ236.0gで石材はホルンフェルスである。16はスクレパーで、基部を欠損する。残存する長さ7.9cm、幅6.8cm、厚さ2.3cm、重さ175.6gで石材はチャートである。



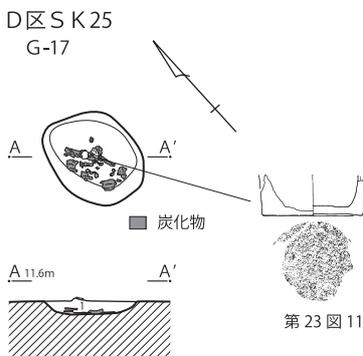
S K 28
1 暗黄灰色土 暗黄灰色土ブロック (1 cm) 多量



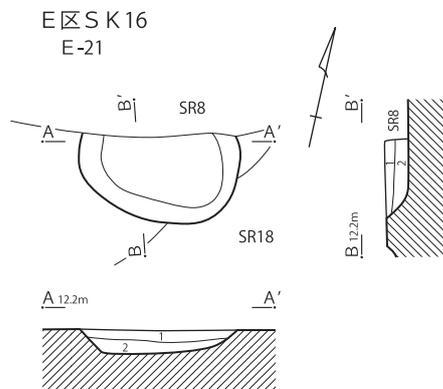
S K 23
1 明黄灰褐色土 地山よりやや暗い



S K 24
1 黄褐色土 鉄分やや多量 炭化物微量



S K 25
1 黄褐色土 炭化物含む

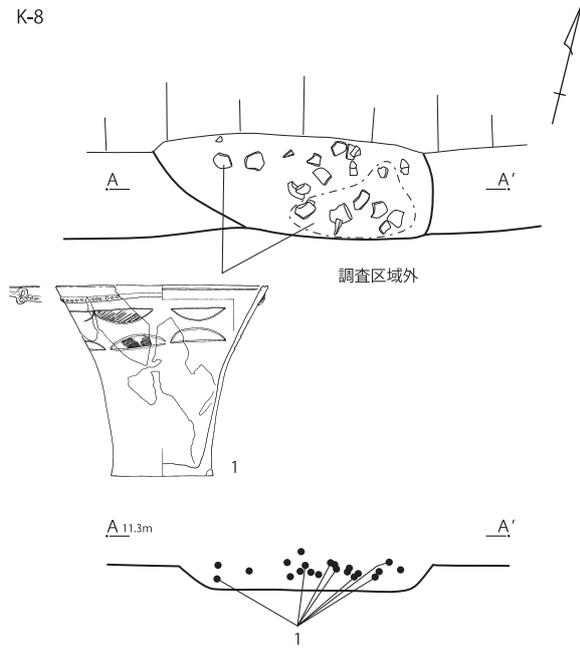


S K 16
1 黄褐色土 炭化物・黒色土粒子少量 鉄分多量
2 黄褐色土 炭化物微量 鉄分多量 粘性やや強い

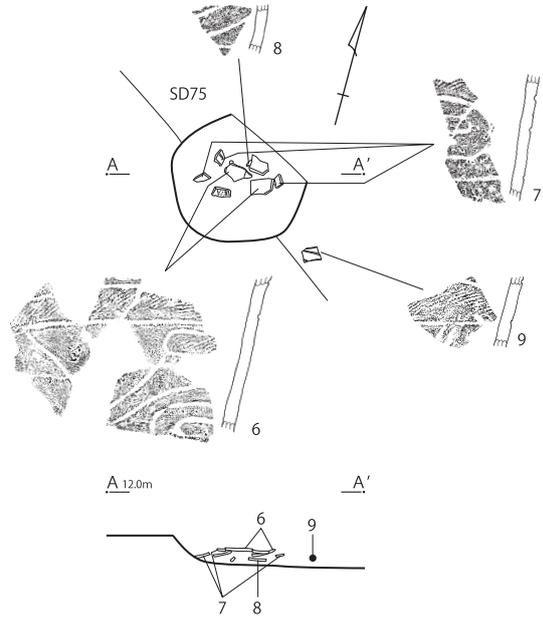


第21図 土壌

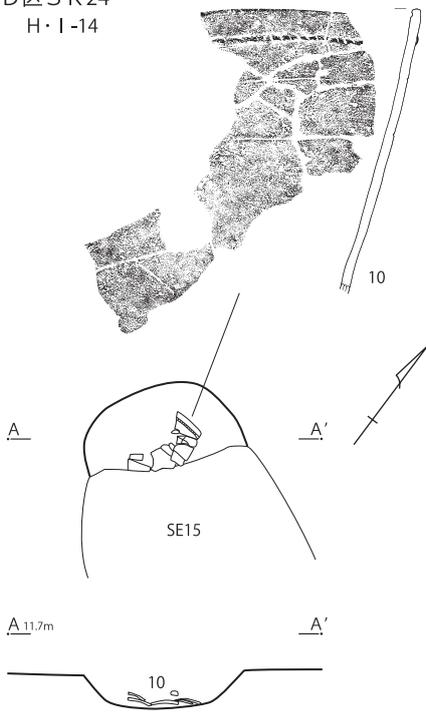
S K 28
K-8



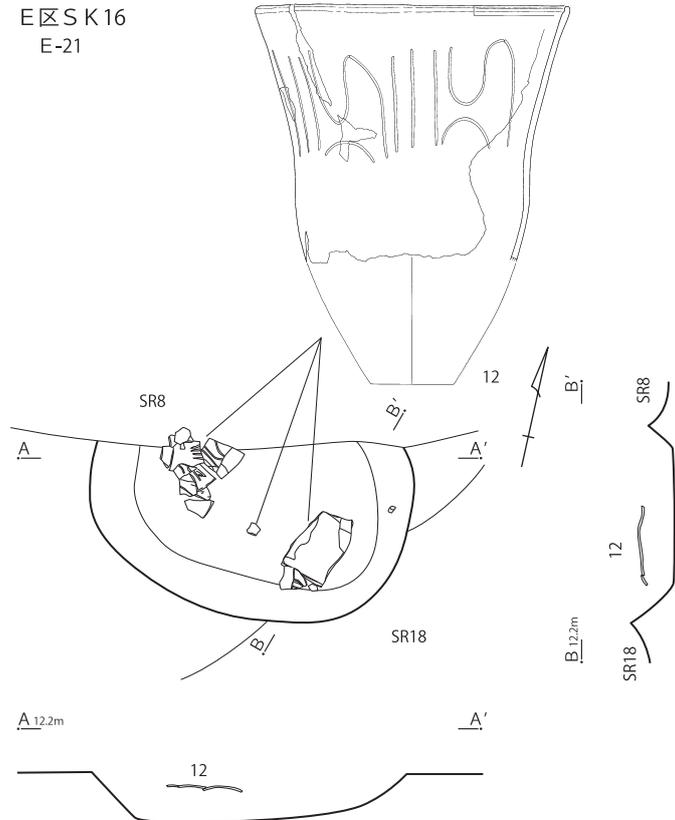
D区 S K 23
F-21



D区 S K 24
H·I-14

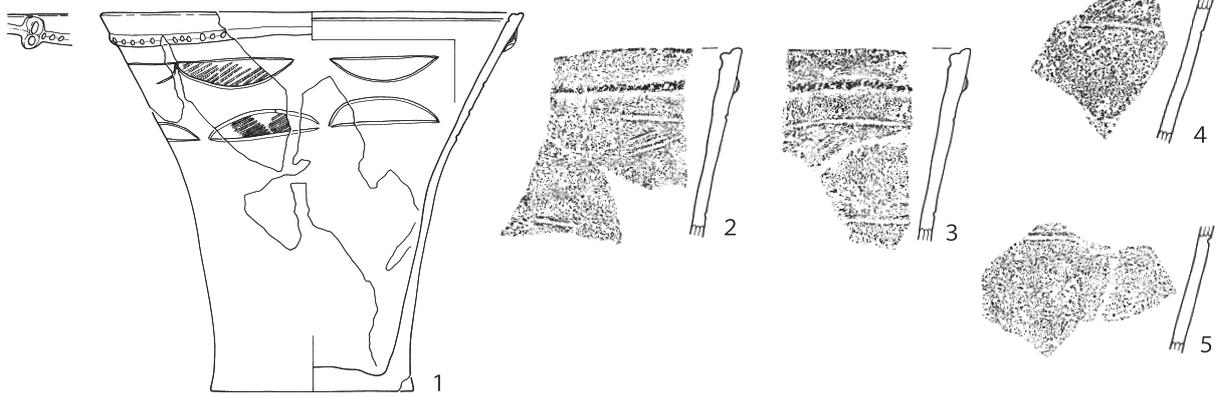


E区 S K 16
E-21



第22図 土壌遺物出土状況

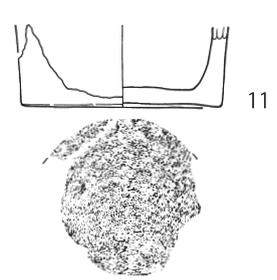
SK28 (1~5)



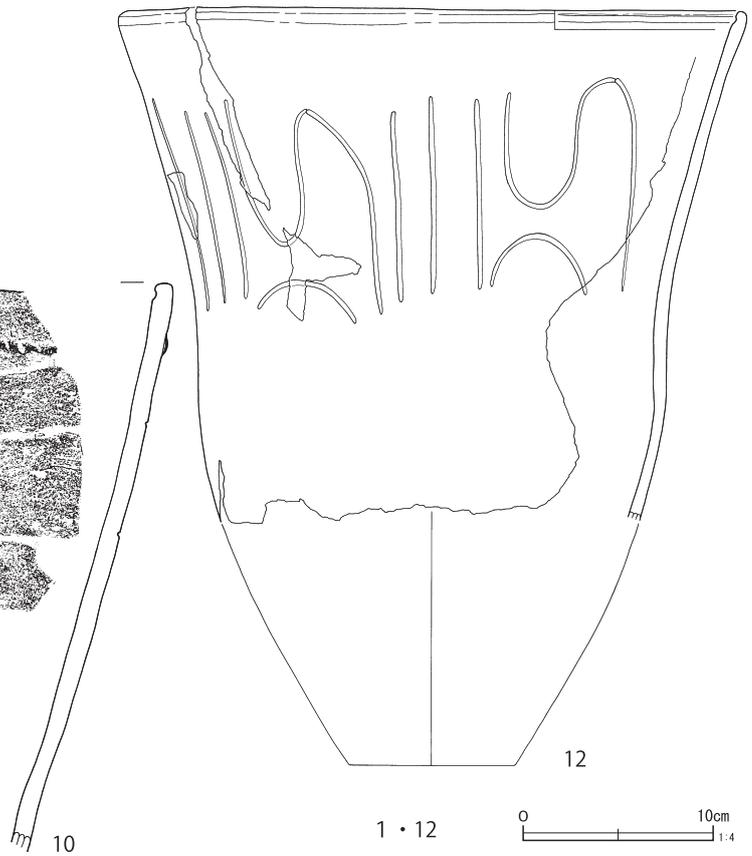
D区SK23 (6~9)



D区SK25 (11)



E区SK16 (12)



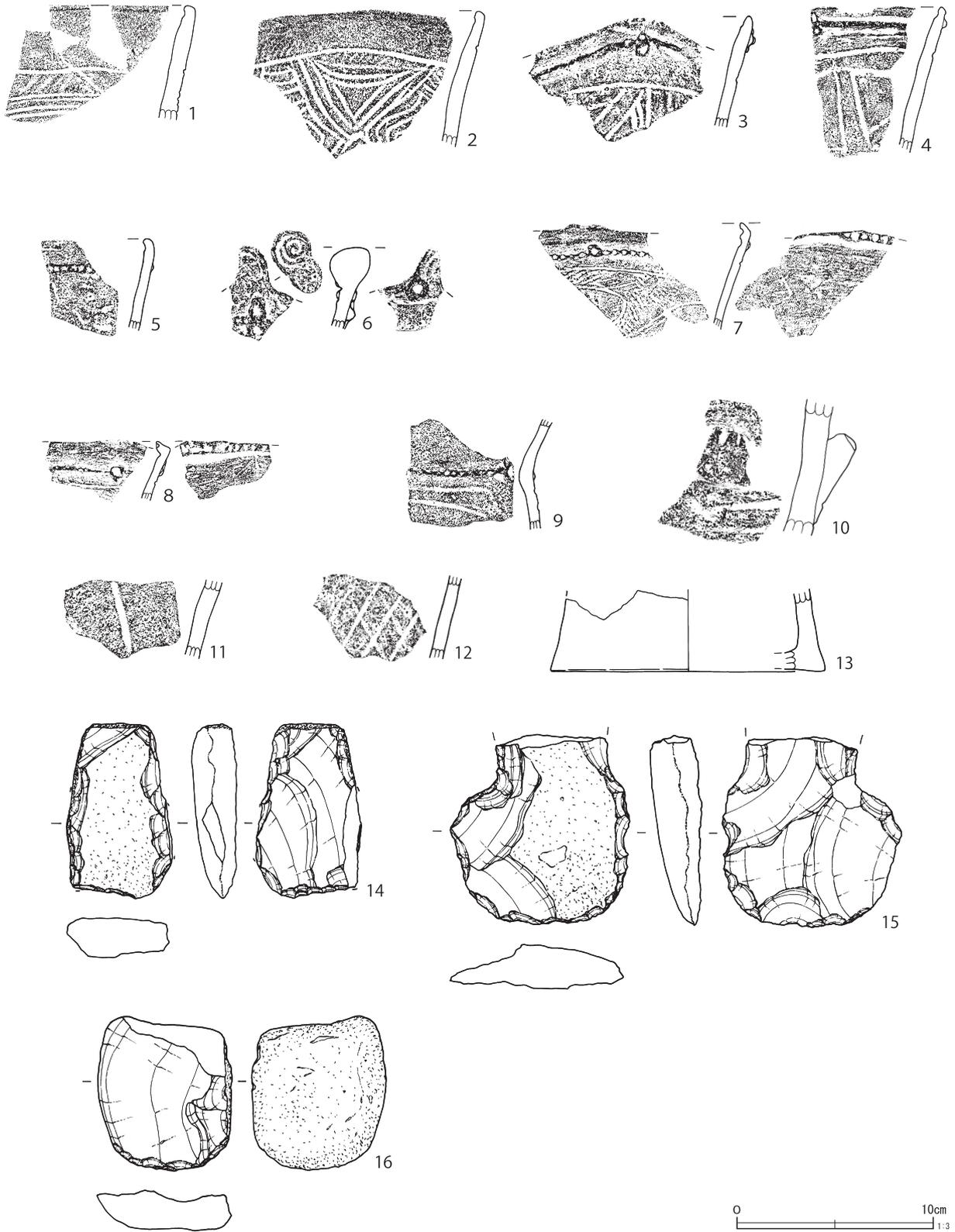
D区SK24 (10)



1 · 12 0 10cm 1:4

2 ~ 11 0 10cm 1:3

第23图 土壙出土遺物



第24図 グリッド出土遺物

2. 古墳時代～中・近世の遺構と遺物

(1) 住居跡

検出された住居跡はB区1軒、C区2軒、D区1軒の併せて4軒で、A・E区では検出されなかった。4軒とも部分的な検出であり、遺存度はきわめて低い。なお、命名に当たっては、B～C区は連番とした。そのため、区名の表記をしていない。しかしD区については、調査の工程上、C・D区を並行して行ったため遺構名の重複を避けるために、区名を冠してD区第1号住居跡とした。

第1号住居跡（第26図）

第1号住居跡はG-5グリッドに位置する。重複するピットより古いと判断した。

本住居跡の南部分は、後世の土取りのためプランは失われていた。そのため、住居跡の平面形は、やや四隅に丸みをもつ方形、もしくは長方形と推定されるにとどまる。

確認できた平面規模は、東西方向が4.41mであるが、南北方向は1.03mまで確認できたのみであった。確認面からの深さは7～10cmである。主軸方位は特定できないが、N-16°-E、もしくはN-74°-Wと推定される。

第1号住居跡では、東西方向の壁周溝が1条、

南北方向の壁周溝が2条検出できたのみである。

壁周溝の上場幅は10～33cm、下場幅は5～25cm、深さは5cmであり、断面形は緩やかな逆台形である。

掘り方をもたず、土層断面の第1層は貼床ではなく、床面の硬化範囲を図示したものである。

床面の凹凸は小さく、比較的平坦であった。床面や壁周溝の直上には、ほぼ満遍なく炭化物が認められたが、焼土の分布や、床面・壁周溝に被熱の痕跡がないことから、焼失家屋ではないと考えられる。

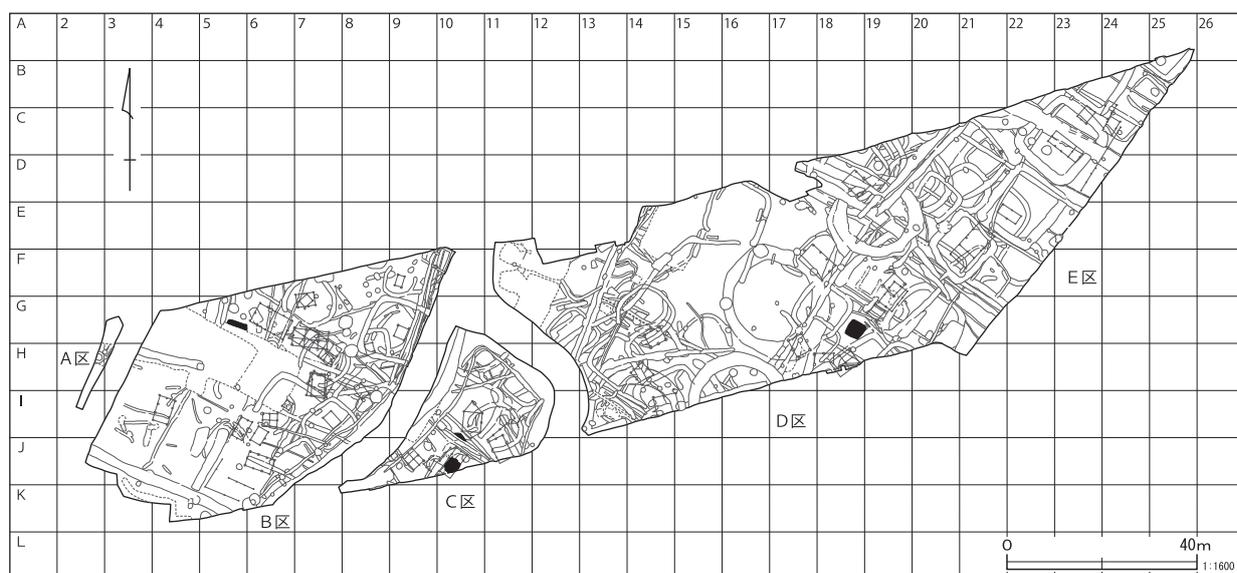
柱穴・炉・貯蔵穴などは確認されなかった。

遺物は土師器の小破片が1点出土したが、図化には至らなかった。

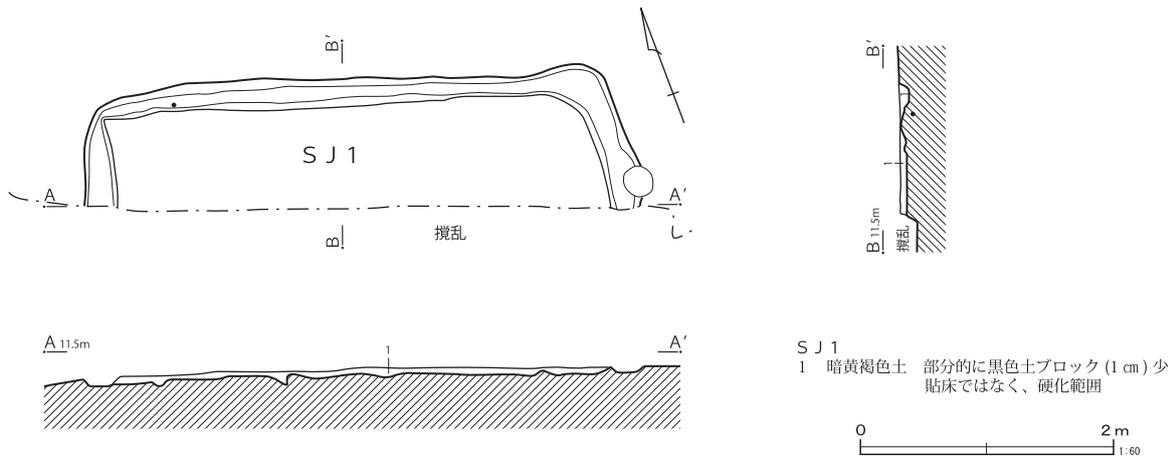
第2号住居跡（第27・28図）

J-10グリッドに位置する。第21号周溝状遺構、第13・14号掘立柱建物跡に壊されている。また、多数のピットと重複しているが、いずれのピットも住居跡より新しいと推定される。第25号周溝状遺構とも重複しているが、覆土が極めて浅いことから、新旧関係を特定することはできなかった。

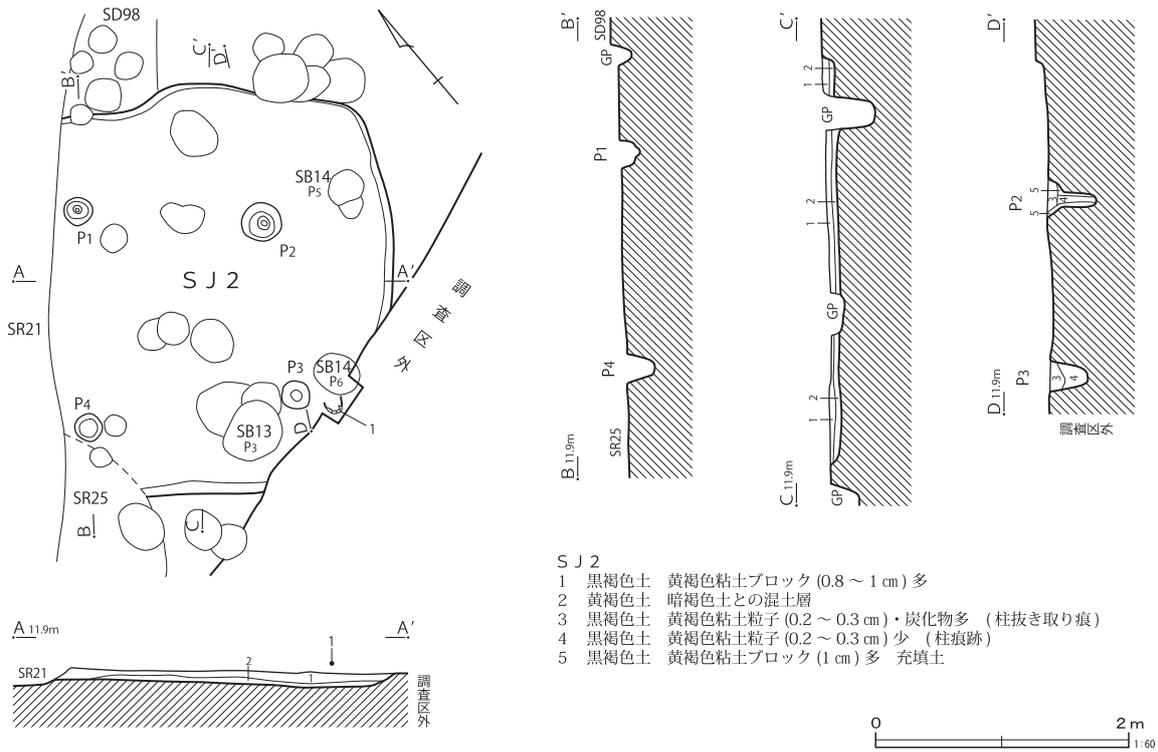
これらの重複関係のため、本住居跡の北西側部



第25図 住居跡分布図



第26図 第1号住居跡



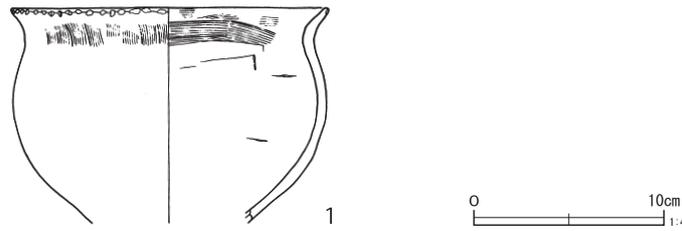
第27図 第2号住居跡

分は失われており、また、南側部分の一部が調査区外に続いている。

確認できた範囲では、住居跡の平面形は、四隅に丸味をもつ方形、もしくは長方形と推定される。東辺はやや膨らみをもち、北辺はやや歪んだ状態

で検出された。壁面の立ち上がりは緩やかである。

確認できた平面規模は、北東-南西方向は3.26mであるが、北西-南東方向は2.70mまで確認できたのみであった。確認面からの深さは9~12cmである。主軸方位は、N-41°-E、もしくは



第28図 第2号住居跡出土遺物

第2表 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ2	C	土師器	鉢	60	(16.6)		[11.3]	A C F	普通	にぶい 黄橙	No.1 口縁上部横ナデ 器面風化している

N-49°-Wと推定される。

P 1～P 4を本住居跡の柱穴と判断した。柱穴間距離はP 1-P 2間が1.50m、P 2-P 3間が1.40m、P 3-P 4間が1.68m、P 4-P 1間が1.73mであり、柱穴の配置にはやや歪みがあるといえる。

各柱穴の径と深さは、P 1が20×23×14cm、P 2が28×31×38cm、P 3が22×22×30cm、P 4が22×23×20cmである。各ピットとも、平面形は円形、もしくはほぼ円形である。

P 2の土層断面図における第4層は柱痕跡であり、第5層は柱穴への充填土である。

床面は凹凸が少なく比較的平坦である。床面には炭化物の分布や硬化は認められなかった。

壁周溝・炉・貯蔵穴などは確認されなかった。

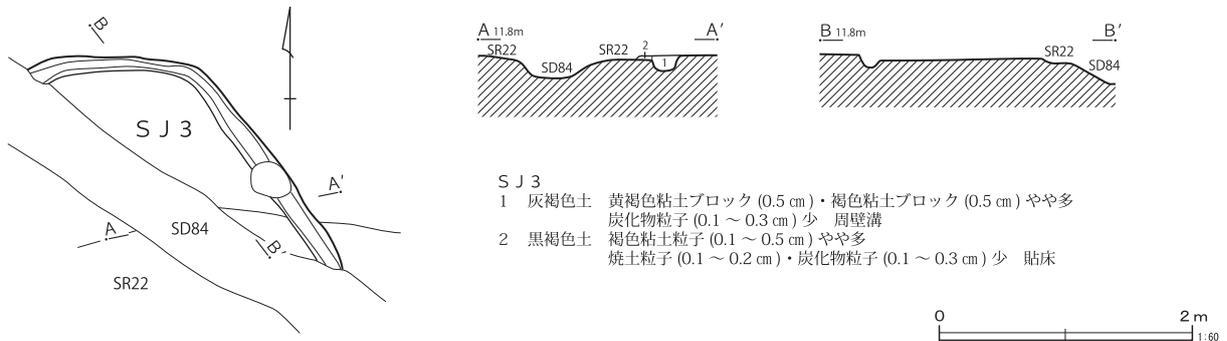
図化できた遺物は、土師器鉢1点(1)であった。

第3号住居跡(第29図)

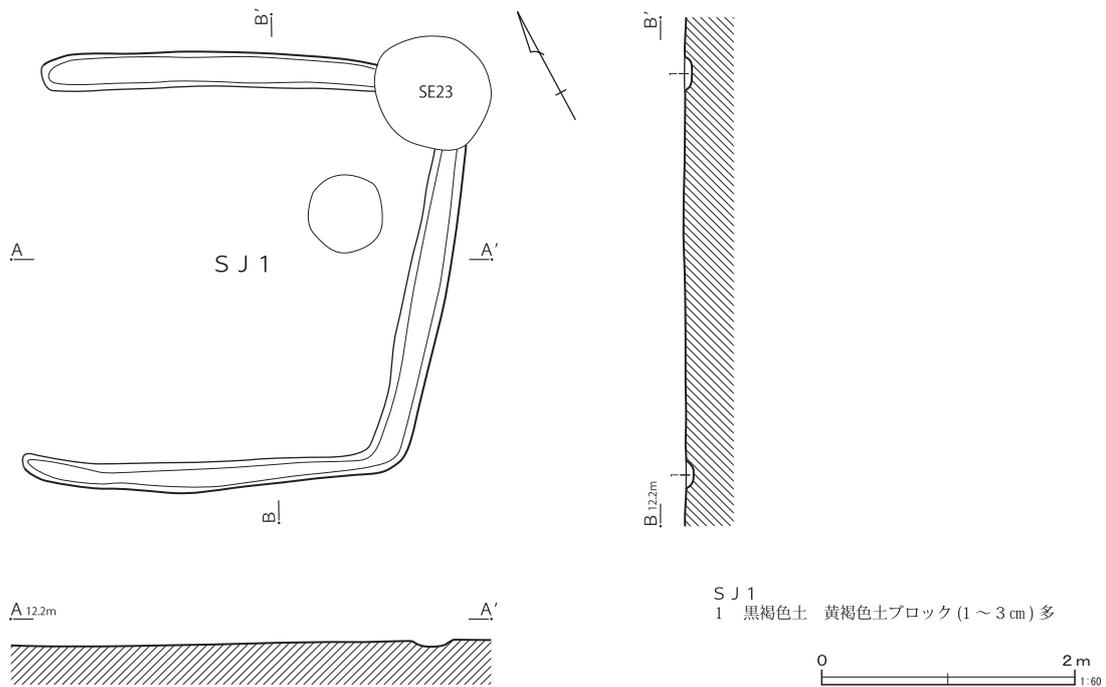
I・J-10グリッドに位置する。重複する第22号周溝状遺構、第84号溝跡と、1つのピットに壊されていると推定される。

確認できた範囲が限られているため、住居跡の平面形については四隅に丸味をもつ方形、または長方形と推定されるにとどまる。

検出できた平面規模は、北西-南東方向で1.49m、北東-南西方向で0.87m、確認面からの深さは10~13cmである。主軸方位はN-35°-W、もしくはN-55°-Eと推定される。



第29図 第3号住居跡



第30図 D区第1号住居跡

壁周溝が確認されている。上場幅は10~20cm、下場幅は4~12cm、確認面からの深さは10~13cmである。断面形がU字状を呈する壁周溝の幅は、上場・下場とも不規則である。

床面は凹凸が少なく比較的平坦である。床面には炭化物の分布や硬化は認められなかった。

柱穴・炉・貯蔵穴などは確認されなかった。

遺物は出土しなかった。

D区第1号住居跡（第30図）

G-18・19グリッドに位置する。土取りされているため、表土を除去した時点で検出された。そのため、壁周溝を除いて覆土はなく他遺構との重複関係は不明であるが、D区第23号井戸跡とピットに壊されていると推定される。

壁周溝が「コ」の字状に検出された。これが本

住居跡本来の形態であるのか、西辺が失われた結果であるのか結論が出せないため、平面形についてはやや歪みをもつ方形、もしくは長方形といえるにとどまる。

検出された範囲内において、住居跡の平面規模は、南北3.53mであるが、東西は3.39mまでの確認である。確認面からの深さ6cm、主軸方位はN-29°-E、もしくはN-61°-Wと推定される。

壁周溝の上場幅は16~32cm、下場幅は7~18cm、確認面からの深さは5~6cmである。

床面は凹凸が少なく比較的平坦である。床面には炭化物の分布や硬化は認められなかった。

柱穴・炉・貯蔵穴などは確認されなかった。

遺物は出土しなかった。

(2) 周溝状遺構

富田後遺跡で検出された周溝状遺構は、B区13基、C区21基、D区44基、E区18基の計96基である。平面形が方形周溝墓のように整然としておらず、溝の幅が狭く、浅い等の特徴をもつ溝状の遺構を周溝状遺構とした。周溝に囲まれた部分には、周溝状遺構に伴うピットが存在する可能性があるが、判然としないものも多く、明確なものについてのみ記述した。

なお、周溝状遺構同士を結んでいるかのような、短い溝跡が5条検出されている。この溝跡については、周溝状遺構同士を結んでいる「連結溝」と想定した。そのため、連結溝については、「(9) 溝跡」ではなく、この項で扱うこととした。

すべての周溝状遺構および連結溝の時期は、古墳時代前期であると考えられる。

周溝状遺構の分布をみると、B区東半部～E区西半部にわたってほぼ満遍なく確認されている。B区西半部とD区中央部の分布が希薄なのは、この部分が土取りのため削平されたことが要因であると考えられる。そのためかこの地区では、周溝状遺構に限らず全体的に遺構が少なく、他の遺構

に比べ深度のある古墳跡の周溝や、溝跡・掘立柱建物跡の柱穴が分布しているのみであった。

第1号周溝状遺構、第5・10号溝跡 (第32～34図)

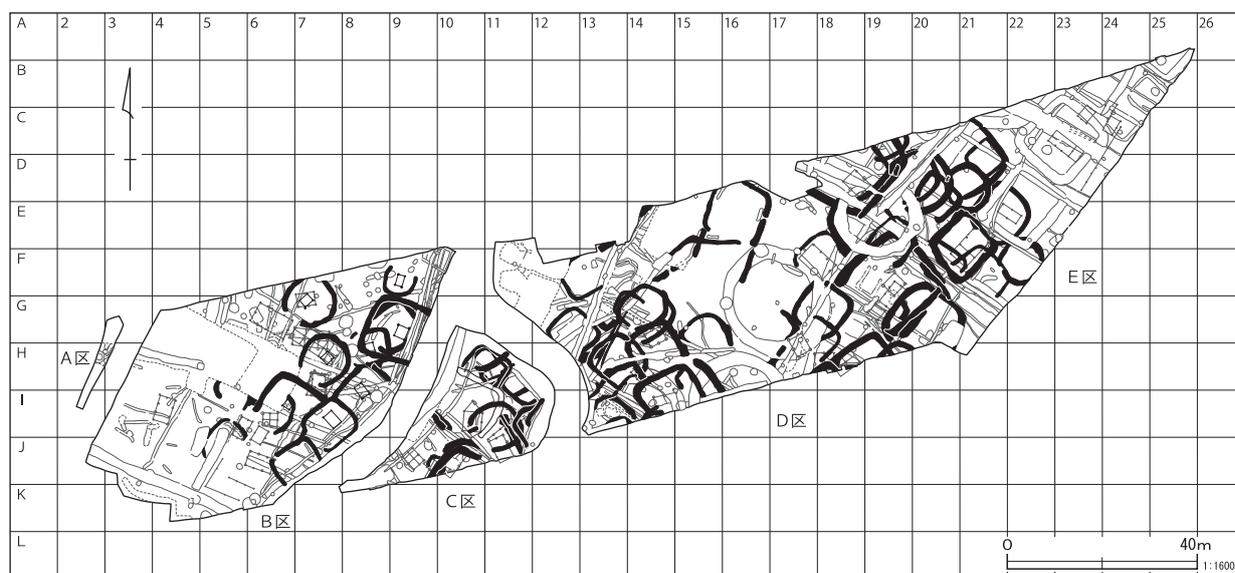
F・G-6・7グリッドに位置する。第5・10号掘立柱建物跡、第5・7号土壇、第8・12号溝跡のほか、第1号性格不明遺構、多数のピットと重複しているが、いずれも本遺構より新しいと推定される。遺構の北部分は調査区外に続いている。

第1号周溝状遺構は、南西側が3.8m開口している。平面形は円形に近い。

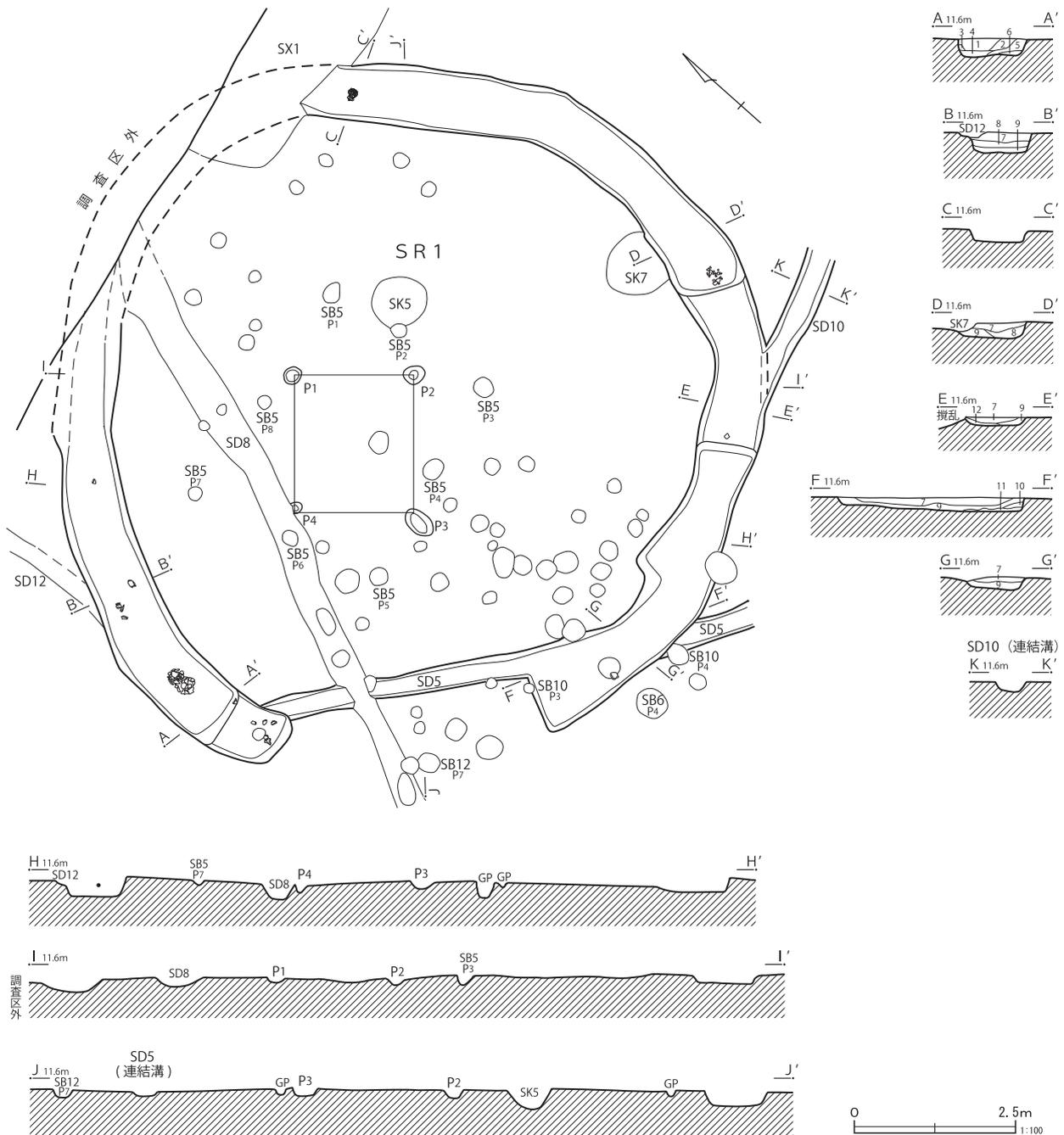
遺構の規模は、外法11.0×11.4m、内法9.16×9.30m、主軸方位はN-40°-Eである。周溝の規模は上場幅0.80～1.05m、下場幅0.69～0.88m、深さ10～32cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかではあるものの、土層断面A-A'、B-B'はやや急であるといえる。断面形は皿形、もしくは逆台形である。

周溝に囲まれた部分にある多数のピットの内、位置関係や分布の規模等から、P1～P4を本遺構の柱穴と判断した。



第31図 周溝状遺構分布図

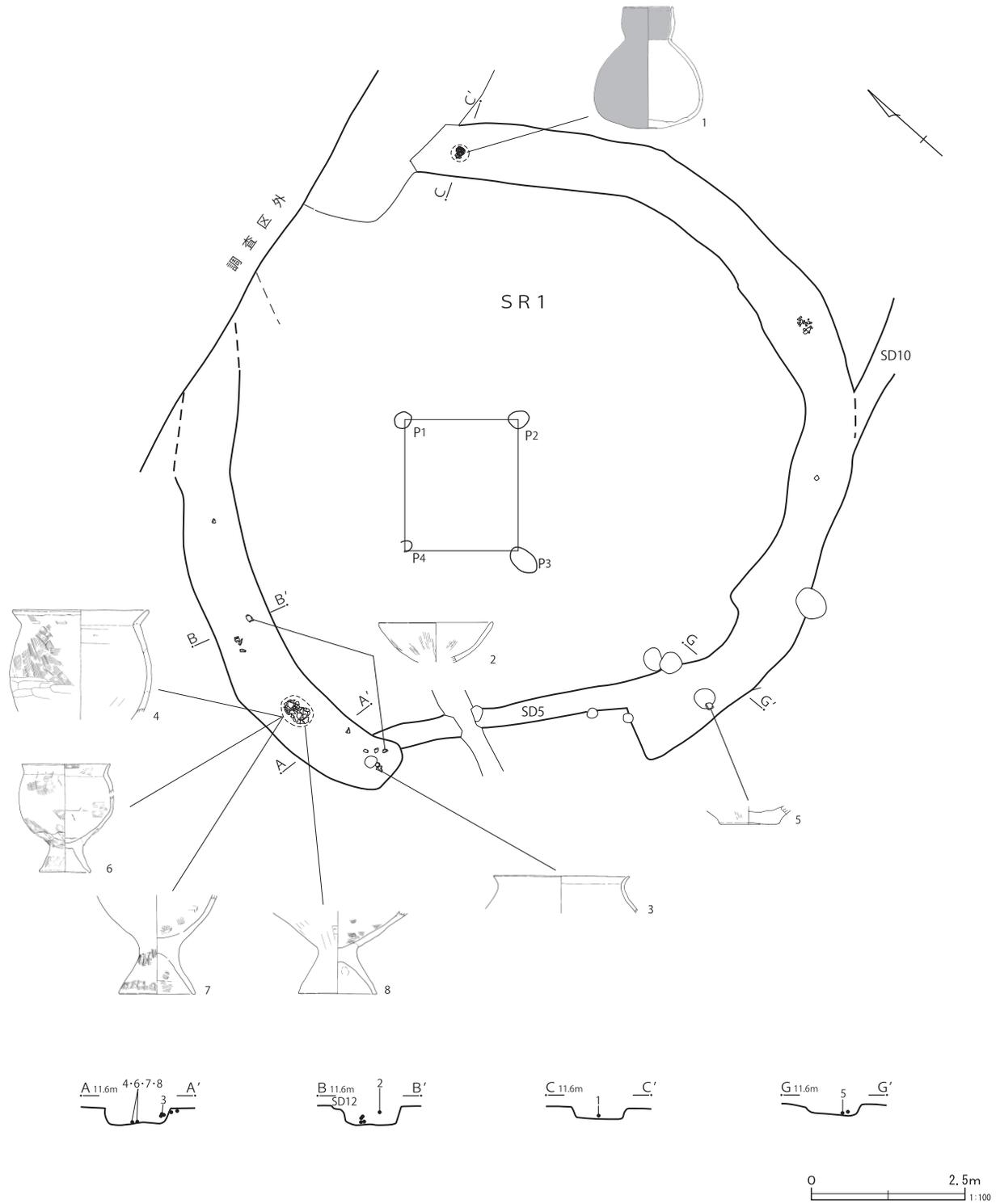


第32図 第1号周溝状遺構、第5・10号溝跡

各柱穴の短径×長径×深さは、P1が20×22×11cm、P2が20×30×10cm、P3が32×52×13cm、P4が15×15×11cmである。各柱穴間の距離はP1-P2間が1.90m、P2-P3間が2.30m、

P3-P4間が1.90m、P4-P1間が2.18mであり、やや不均衡であるといえる。

P1~P4を本遺構の柱穴とした場合、周溝に囲まれた部分では西寄り、開口部に接近した位



第33図 第1号周溝状遺構遺物出土状況

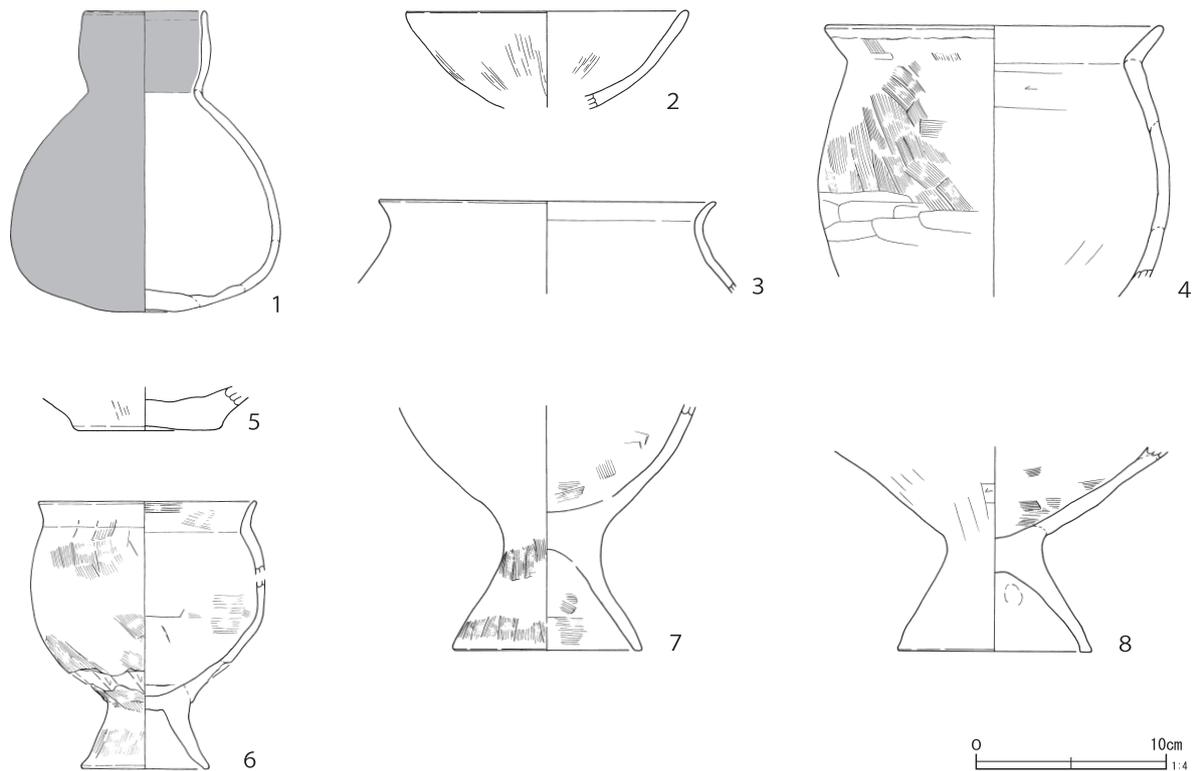
置に相当するといえる。

開口部西側近くの周溝内から、土師器甕(4)・台付甕(6~8)が土圧で潰れた状態で出土した。

図化できた遺物は、壺・高坏・台付甕など計8

点(1~8)である。

なお第5号溝跡は、北西から南東へと底面が低くなっている溝であるが、部分的に第1号周溝状遺構の開口部西側と開口部東側を結ぶ形になって



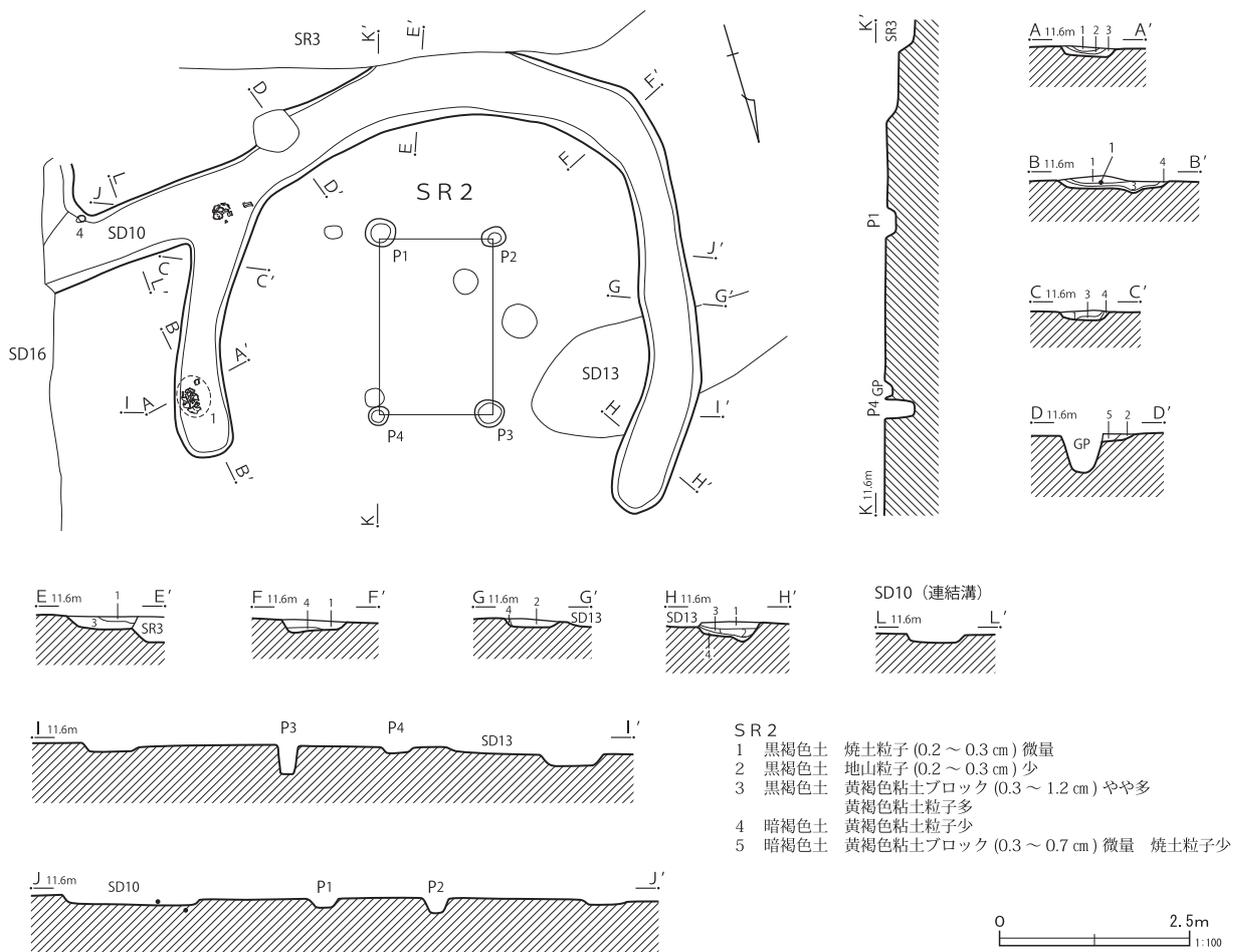
第34図 第1号周溝状遺構出土遺物

第3表 第1号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR1	B	土師器	壺	60	(6.2)	3.8	15.8	A G	普通	淡赤橙	No.1 口縁内部・外面赤彩
2	SR1	B	土師器	高坏	30	(14.8)		[5.1]	A C G	普通	灰白	No.3・10 器面風化著しい
3	SR1	B	土師器	甕	10	(17.8)		[4.9]	A C F	普通	灰白	No.12 器面風化著しく調整痕はみえない 外面は二次的被熱により赤色化している
4	SR1	B	土師器	甕	20	(17.5)		[14.3]	C D	不良	濁灰	No.13~15 No.13 器面風化している 口縁部横ナデ ハケの後一部ヘラナデ
5	SR1	B	土師器	壺	75		7.8	[2.3]	A F G	普通	灰白	No.18 器面風化著しい
6	SR1	B	土師器	台付甕	40	(11.2)	6.6	14.1	A C F G	普通	灰黄褐	No.13~15 口縁部内外面横ナデ
7	SR1	B	土師器	台付甕	40		9.6	[12.7]	A C F	普通	にぶい 橙	No.13~15
8	SR1	B	土師器	台付甕	80		10.1	[10.8]	A G	普通	にぶい 黄橙	No.13~15

いる。さらに第10号溝跡から第3号周溝状遺構、次いで第2号周溝状遺構を経て、周溝に溜まった水を谷地形へ導水した連結溝と推定される。第5号溝跡の、開口部を連結している部分での規模は、全長4.10m、上場幅30~40cm、下場幅22~29cm、深さ4~9cm、方位はN-52°-Wを指す。断面形は

皿状、もしくは逆台形である。また、本遺構と第3号周溝状遺構を連結する部分での第10号溝跡の規模は、全長10.10m、上場幅42~68cm、下場幅15~58cm、深さ11~14cm、方位はN-73°-Eを指す。断面形は、皿状もしくは逆台形である。



第35図 第2号周溝状遺構、第10号溝跡

第2号周溝状遺構、第10号溝跡 (第35・36図)

F-8・9、G-9グリッドに位置する。極めて規模の小さい周溝状遺構である。第3号周溝状遺構より新しく、第13号溝跡より古い。また、その他の重複する遺構よりも古いと考えられる。

第2号周溝状遺構は、北側が5.05m開口している。平面形は比較的U字形に近い。

遺構の規模は、外法5.90×6.70m、内法5.45×5.55m、主軸方位はN-16°-Eである。周溝の規模は上場幅0.53～0.85m、下場幅0.45～0.65m、深さ10～23cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿形に近い。

周溝に囲まれた部分にある多数のピットの内、

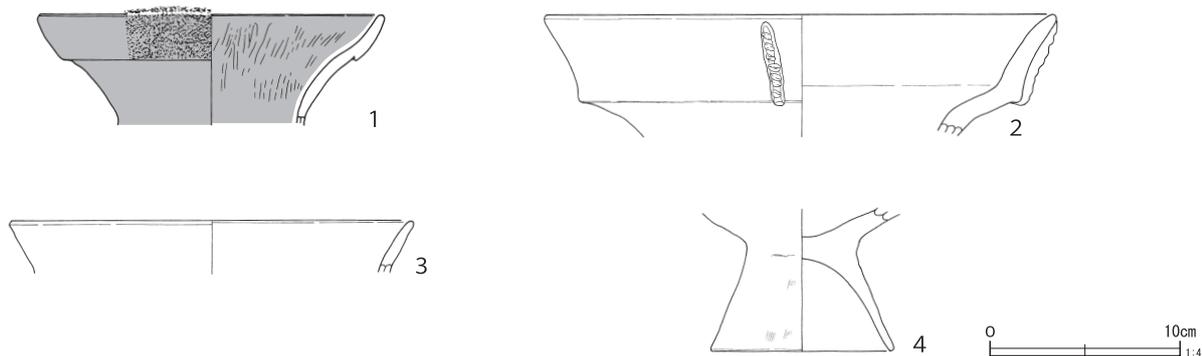
位置関係や分布の規模等から4つを、本遺構の柱穴と判断した (P1～P4)。

各柱穴の短径×長径×深さは、P1が36×38×8cm、P2が28×31×18cm、P3が38×40×40cm、P4が21×25×8cmである。各柱穴間の距離はP1-P2間が1.50m、P2-P3間が2.30m、P3-P4間が1.50m、P4-P1間が2.30mであり、長方形に整然と配置されている。

P1～P4を本遺構の柱穴とする場合、周溝に囲まれた部分のほぼ中央に位置している。

図化できた遺物は、土師器の壺・台付甕など計4点 (1～4) である。

なお、第5号溝跡の一部は第1号周溝状遺構の開口部西側と開口部東側を結び、次いで第10号溝



第36図 第2号周溝状遺構出土遺物

第4表 第2号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR2	B	土師器	壺	30	(9.0)		[5.9]	A C F	普通	明褐	No.1 明確ではないが単節LRの縄文 内面赤彩 外面赤彩 内面へラ磨き 外面風化著しく調整みえず
2	SR2	B	土師器	壺	10	(26.6)		[6.5]	C D E	普通	明赤褐	南溝 内外面ともヘラミガキと思われる棒状浮文1条のみ遺存
3	SR2	B	土師器	甗	15	(21.0)		[2.8]	A B C F G	普通	にぶい褐	南溝 内外面横ナデ
4	SR2	B	土師器	台付甗	70		(9.3)	[7.5]	A F G	普通	にぶい黄橙	No.4 器面風化著しく調整痕は殆どみえない

跡は、第1号周溝状遺構と第3号周溝状遺構、さらに本遺構を経て、周溝に溜まった水を谷地形へ導水した連結溝と推定される。本遺構と谷地形を連結する第10号溝跡の規模は、全長2.30m、上場幅74~80cm、下場幅54~67cm、深さ9~12cm、方位はN-85°-Eを指す。断面形は皿状、もしくは逆台形である。

第3号周溝状遺構、10号溝跡 (第37~39図)

F-8、G・H-8・9グリッドに位置する。極めて規模の大きな周溝状遺構であるといえる。第7号周溝状遺構より新しく、第2・5号周溝状遺構、第16・21号溝跡、第17号土壇より古いと考えられる。また、その他の重複する遺構よりも古いと考えられる。

第3号周溝状遺構は、東側は調査区外に続いているため平面形は不明であるが、方形もしくは長方形と推定される。

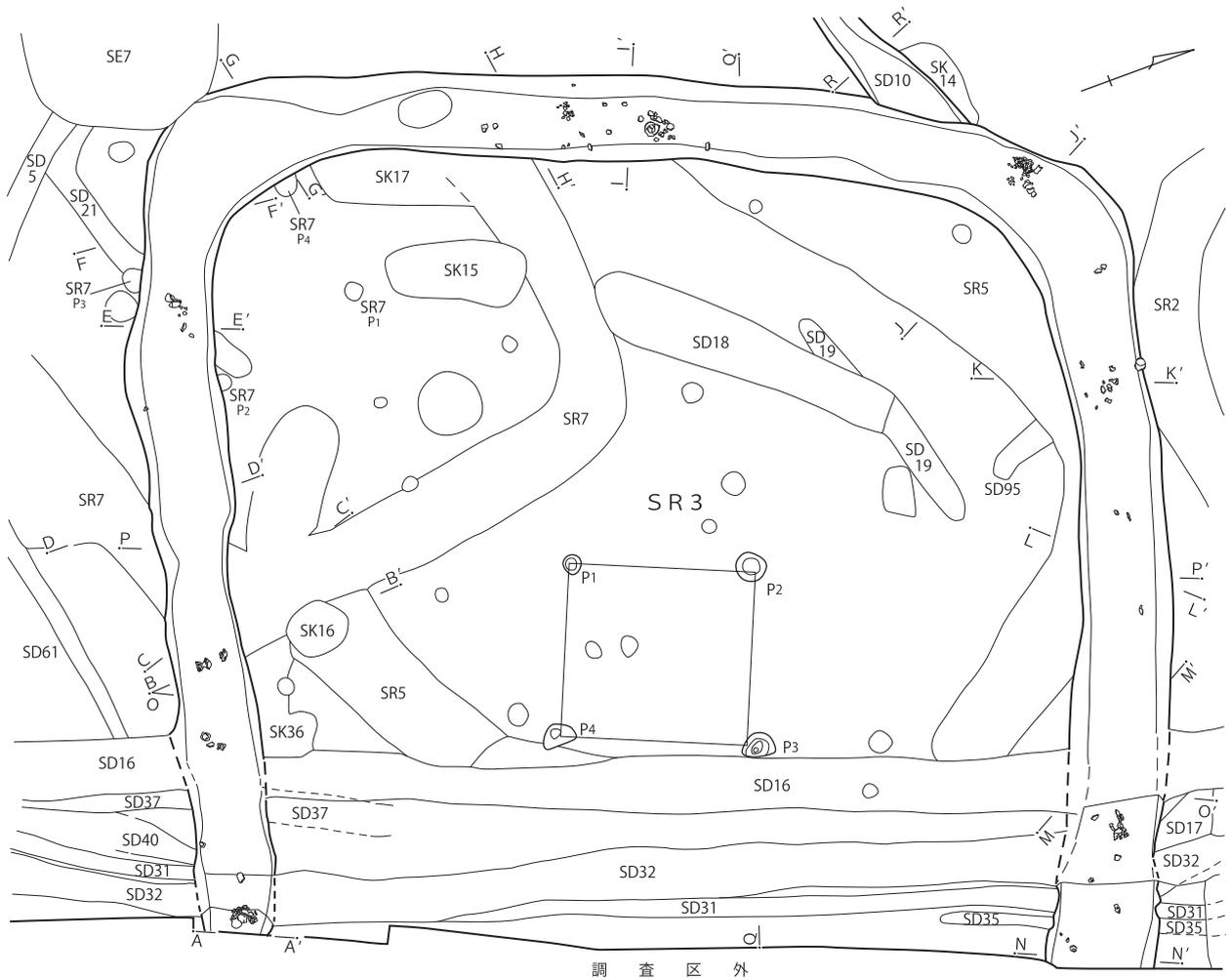
遺構の規模は、南北方向で外法13.55m、内法

11.30m、主軸方位はN-22°-E、またはN-68°-Wと推定される。周溝の規模は上場幅1.00~1.48m、下場幅0.85~1.13m、深さ25~55cmである。

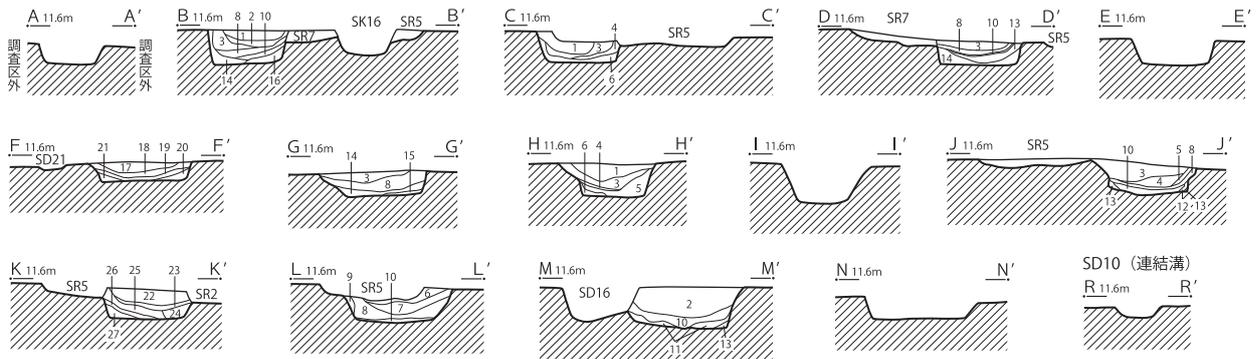
周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形、もしくは箱形に近い。土層断面にみられる第17層は埋め戻し土である。

周溝に囲まれた部分にある多数のピットの内、位置関係や分布の規模等からP1~P4を、本遺構の柱穴と判断した。

各柱穴の短径×長径×深さは、P1が22×24×18cm、P2が38×40×22cm、P3が28×48×18cm、P4が30×48×40cmである。各柱穴間の距離はP1-P2間が2.45m、P2-P3間が2.52m、P3-P4間が2.70m、P4-P1間が2.45mであり、ややばらつきがある。柱穴の配置は正方形に近い。土層断面O-O'にみられるP3の第1層は柱痕跡であり、第2層は柱穴への充填土である。



調査区外

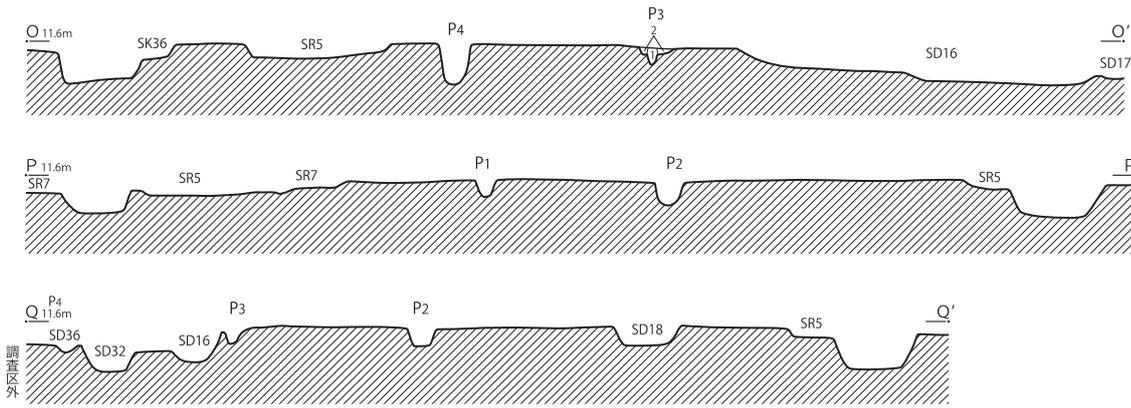


SR 3

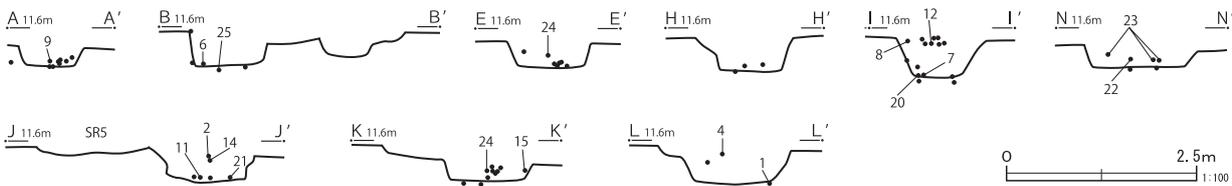
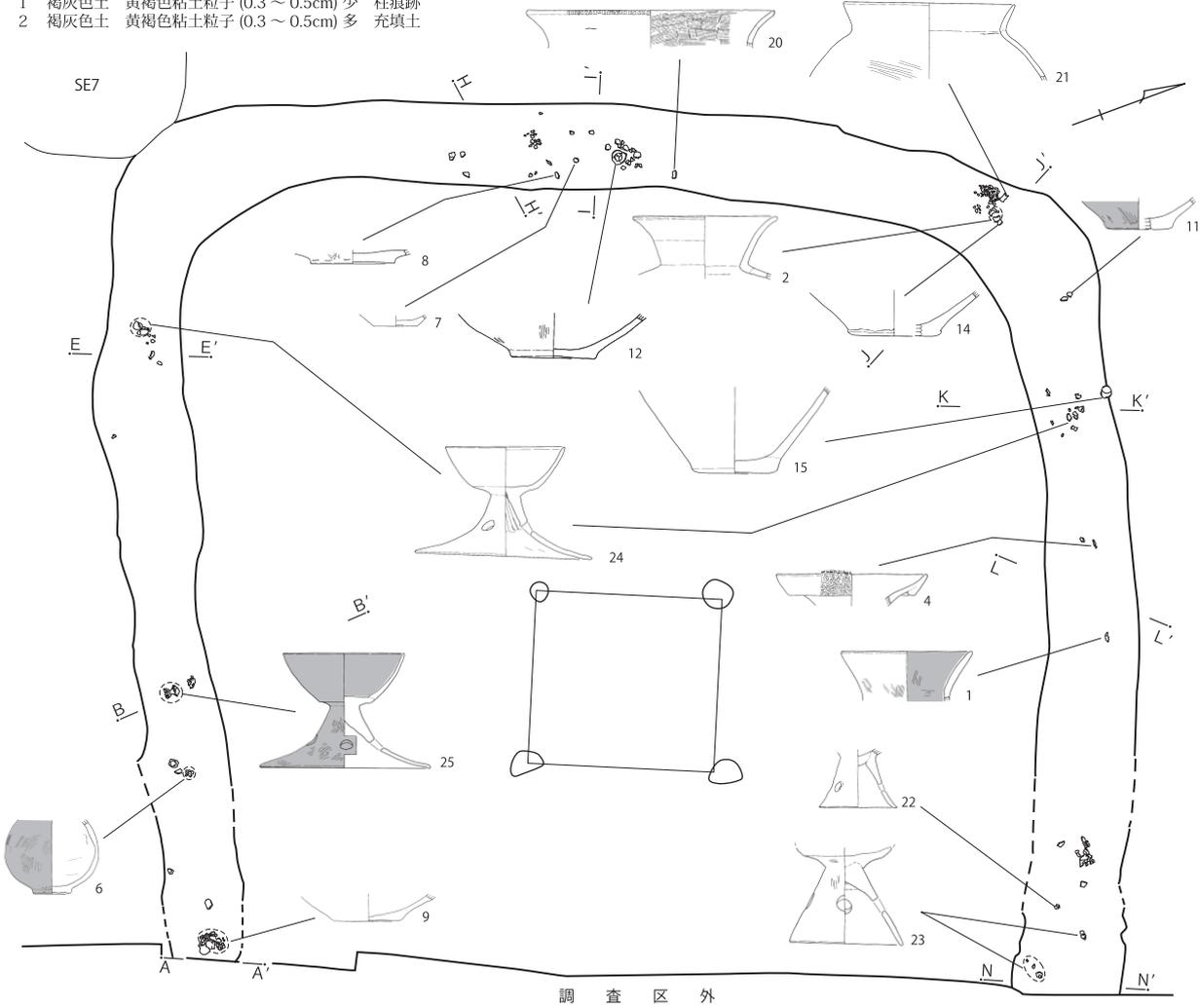
- 1 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.7 ~ 1 cm) 少
- 2 暗褐色土 焼土粒子・黄褐色粘土ブロック (0.2 ~ 0.6 cm) 少
- 3 灰褐色土 焼土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 少
- 4 灰褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 ~ 2 cm) 多
- 5 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.7 ~ 1 cm) 少
- 6 褐色土 焼土粒子 (0.4 cm) やや少
- 7 褐色土 焼土粒子 (0.4 cm) 微量
- 8 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 少
- 9 黄褐色土 地山ブロック (0.5 cm) 少
- 10 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 多
- 11 暗褐色土 炭化物粒子微量
- 12 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) 多
- 13 黒色土 炭化物粒子少
- 14 暗褐色土 褐色地山ブロック (0.3 ~ 0.7 cm) やや多

- 15 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) 多
- 16 褐色土 焼土粒子 (0.4 cm) やや少
- 17 暗褐色土 黄灰褐色土ブロック多 しまりやや弱 粘性弱 埋戻し土
- 18 黒褐色土 灰褐色土ブロック (0.2 ~ 1 cm) やや多 炭化物粒子微量 しまり強 粘性弱 埋戻し土
- 19 黒褐色土 灰褐色土ブロック (0.5 cm) 少 炭化物粒子微量 しまりやや弱 粘性やや弱 埋戻し土
- 20 黒褐色土 黄褐色土ブロック (0.5 cm) 多 しまり・粘性やや弱 自然堆積
- 21 暗灰褐色土 黄褐色土粒子 (0.2 cm) 多 しまり弱 粘性やや弱 自然堆積
- 22 暗褐色土 地山粒子微量 焼土粒子少
- 23 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 多
- 24 暗灰色土 焼土粒子・黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) やや多
- 25 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.3 ~ 1.2 cm) やや多 黄褐色粘土粒子多
- 26 暗褐色土 黄褐色粘土少
- 27 黒色土 炭化物層

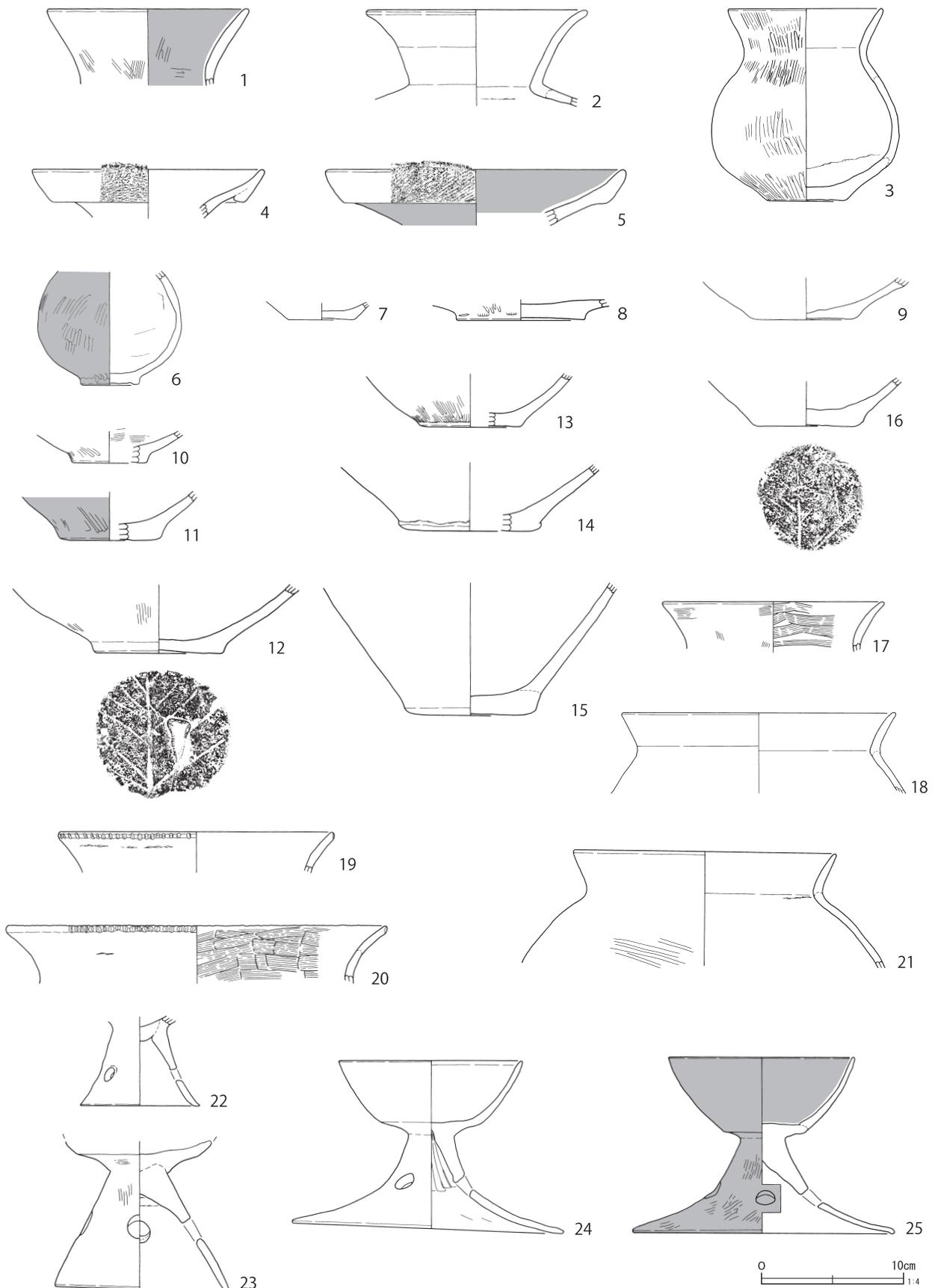
第37図 第3号周溝状遺構、第10号溝跡



- SR3 P3
 1 褐灰色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5cm) 少 柱痕跡
 2 褐灰色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5cm) 多 充填土



第38图 第3号周溝状遺構遺物出土狀況



第39图 第3号周沟状遗构出土遗物

第5表 第3号周溝状遺構出土遺物観察表

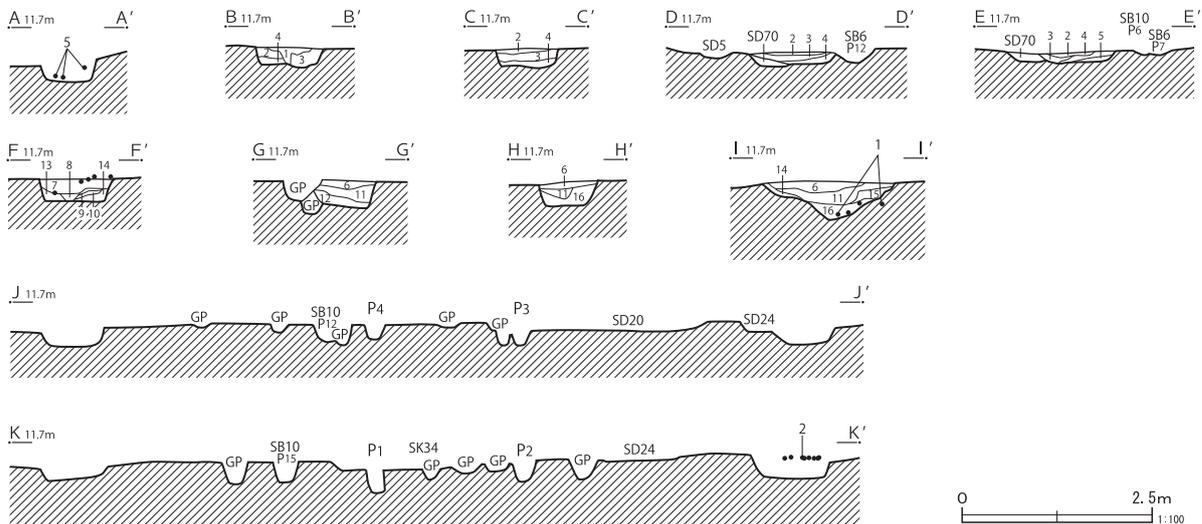
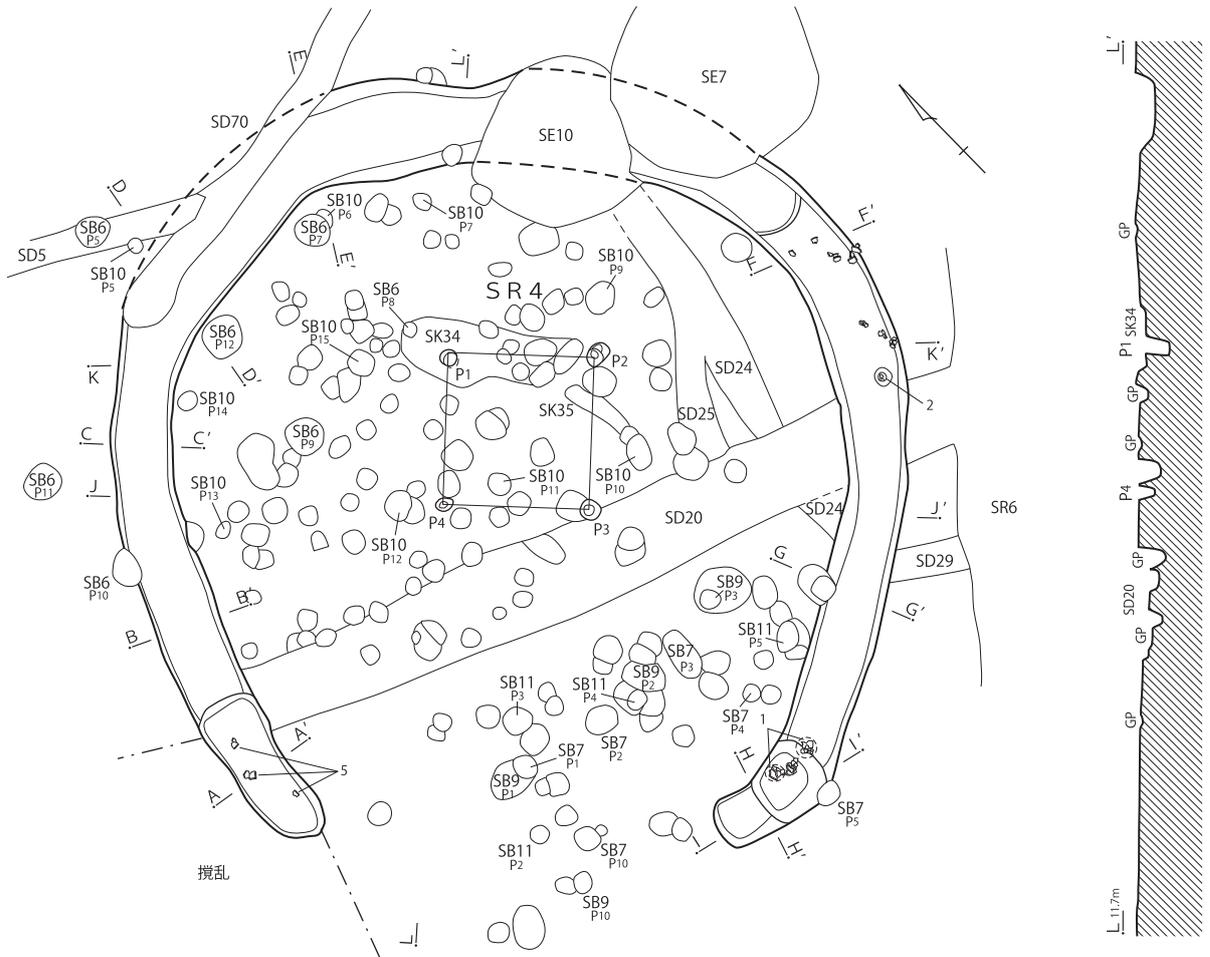
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR3	B	土師器	壺	45	(13.8)		[5.4]	A F G	普通	明赤褐	No.5 器面風化著しい 口縁部横ナデ 内面赤彩
2	SR3	B	土師器	壺	45	(15.1)		[6.7]	C D E F	普通	橙	No.22 器面風化著しい 口縁部外面横ナデ
3	SR3	B	土師器	小型壺	100	10.4	5.1	13.2	A C F	普通	にぶい橙	口縁部内外面横ナデ 外面ハケの後ヘラ磨き
4	SR3	B	土師器	壺	15	(16.0)		[3.4]	A F	普通	にぶい橙	No.6 口縁部に網目状捺糸文 内外面赤彩か 器面風化著しい
5	SR3	B	土師器	壺	10	(20.8)		[4.0]	A C F	普通	浅黄橙	北溝 無筋Lの横位施文 器面風化著しい 内外面赤彩
6	SR3	B	土師器	小型壺	65		4.0	[8.0]	A C F	普通	にぶい橙	No.55 一括 器面風化している 外面赤彩
7	SR3	B	土師器	甗	90		4.5	[1.2]	A G	普通	にぶい橙	No.39 器面風化著しい 内面黒色処理 外面二次的被熱のため赤色化
8	SR3	B	土師器	壺	50		8.8	[1.5]	A C G	普通	灰白	No.32 器面風化している 外面に黒斑
9	SR3	B	土師器	甗	60		7.0	[3.0]	A C F G	普通	灰白	No.60 器面風化著しく調整不明
10	SR3	B	土師器	壺	20		(5.2)	[2.3]	A F	普通	にぶい橙	北溝 器面風化著しい
11	SR3	B	土師器	壺	25		7.0	[3.5]	A C F	普通	橙	No.20 外面赤彩 器面風化している
12	SR3	B	土師器	甗	85		8.8	[4.9]	A B C F G	普通	にぶい橙	No.30 内外面とも風化著しく調整不明 底部木葉痕あり
13	SR3	B	土師器	壺	50		7.1	[3.8]	F G	普通	灰白	下層 器面風化著しい
14	SR3	B	土師器	壺	15		(10.0)	[4.8]	B C D F G I	普通	にぶい黄橙	No.23 器面風化著しい
15	SR3	B	土師器	甗	40		(9.2)	[9.4]	C D F I	普通	浅黄橙	No.16 風化著しく調整不明
16	SR3	B	土師器	壺	80		6.8	[3.2]	A C D G	普通	にぶい橙	No.53 器面風化著しく調整不明 底部木葉痕あり
17	SR3	B	土師器	甗	30	(15.2)		[3.5]	A D G	普通	橙	器面(特に外面)は風化著しい 内面に黒斑あり
18	SR3	B	土師器	甗	10	(19.0)		[5.6]	B C F	普通	にぶい褐	北溝 器面風化著しい 口縁部内外面横ナデ
19	SR3	B	土師器	甗	20	(19.2)		[2.9]	A C	普通	浅黄橙	口縁部横ナデか
20	SR3	B	土師器	甗	15	(26.4)		[4.1]	A F	普通	浅黄橙	No.25 外面風化著しい 口唇部キザミあり
21	SR3	B	土師器	甗	40	(18.2)		[8.0]	A D F G	普通	にぶい橙	No.21 器面風化している 外面に黒斑 口縁部内外面横ナデ
22	SR3	B	土師器	高坏	65		(8.4)	[6.4]	A F G	普通	にぶい橙	No.1 器面風化著しく調整痕はみえない 穿孔3ヶ所
23	SR3	B	土師器	高坏	35		(11.8)	[10.1]	B C D F G	普通	にぶい橙	No.56・57 器面風化著しい 穿孔4ヶ所(外からの穿孔)
24	SR3	B	土師器	高坏	60	12.8	(19.0)	11.9	A C D F I	不良	淡橙	No.10・43 器面風化著しい 口縁部内外面横ナデ 脚部三孔(外からの穿孔)
25	SR3	B	土師器	高坏	85	12.9	18.2	12.5	A C F G	普通	にぶい橙	No.52 器面風化著しい 坏部内外面・脚部外面赤彩 穿孔4ヶ所

P1～P4を本遺構の柱穴とする場合、周溝に囲まれた部分のほぼ中央に位置していると推定される。

図化できた遺物は、土師器の壺・高坏・甗など計25点(1～25)である。

第10号溝跡は、第1号周溝状遺構と本遺構、さらに第2号周溝状遺構を経て、周溝に溜まった水を

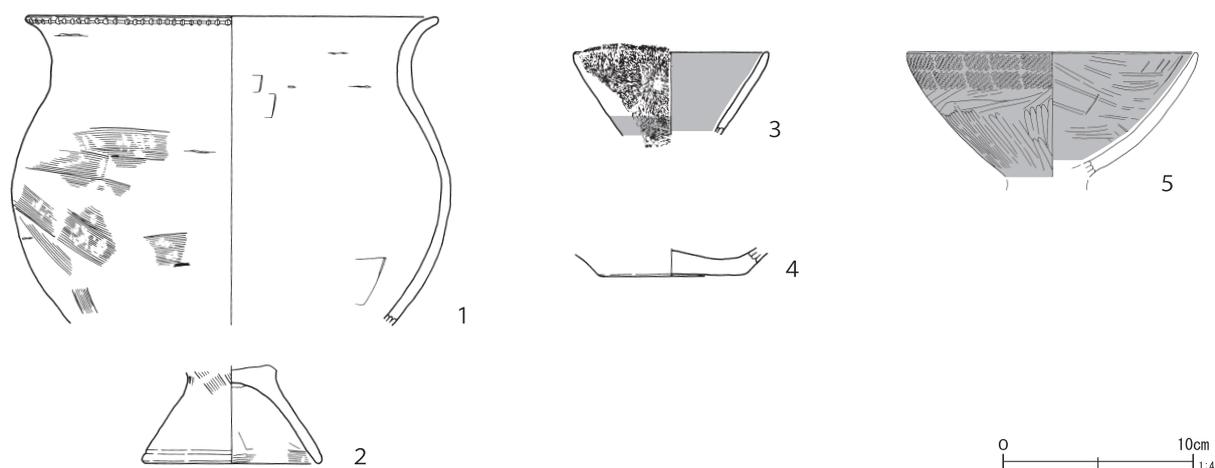
谷地形へ導水した連結溝と推定される。なお、第10号溝跡の、第1号周溝状遺構と本遺構を連結している部分の規模は、全長10.10m、上場幅42～68cm、下場幅15～58cm、深さ11～14cm、方位はN-73°-Eを指す。断面形は皿状、もしくは逆台形である。



SR 4

- | | | | |
|---------|--|---------|-------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・ 焼土粒子少 | 10 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) |
| 2 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 少 | 11 黒色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 微量 |
| 3 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 多 | 12 暗褐色土 | 褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.7 cm) 多 |
| 4 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 少 | 13 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 多 |
| 5 黒褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 少 | 14 黒色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 微量 |
| 6 明暗褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 微量 | 15 黒色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 多 |
| 7 暗褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 微量 褐色土ブロック (0.5 cm) 多 | 16 黒色土 | 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) 疎らに少 |
| 8 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 少 | 17 暗褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 多 |
| 9 黒色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 微量 | | |

第40図 第4号周溝状遺構



第41図 第4号周溝状遺構出土遺物

第6表 第4号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR4	B	土師器	甕	40	(21.6)		[16.2]	C E F G	不良	浅黄橙	No.19・22 器面風化著しい 口縁部内外面横ナデ
2	SR4	B	土師器	台付甕	100		9.2	[5.2]	A C D F	普通	灰白	No.14 器面風化著しい
3	SR4	B	土師器	埴	15	(10.2)		[4.4]	C F	普通	灰白	単節 LR を用い縦横方向に施文後、軽くナデが行われており、縄文は不明瞭 器面風化著しい 内外面赤彩
4	SR4	B	土師器	壺	75		(8.0)	[1.5]	A	普通	灰褐	器面風化している
5	SR4	B	土師器	高坏	90	15.2		[6.6]	A C D	普通	赤	No.16~18 内外面赤彩 縄文原体 LR 横回転上→下

第4号周溝状遺構 (第40・41図)

G・H-7・8グリッドに位置する。第70号溝跡より新しく、第6・7・9～11号掘立柱建物跡、第7・10号井戸跡より古い。その他の重複する遺構のいずれよりも古いと考えられるが、詳細は不明である。

第4号周溝状遺構は、南西側が5.20m開口している。平面形は円形に近い。

遺構の規模は、外法10.25×10.46m、内法8.83×8.95m、主軸方位はN-46°-Eである。周溝の規模は上場幅0.80～1.35m、下場幅0.59～0.95m、深さ15～48cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりはやや急で、断面形は逆台形、または箱形に近い。

周溝に囲まれた部分にある多数のピットの内、

位置関係や分布の規模等からP1～P4を、本遺構の柱穴と判断した。

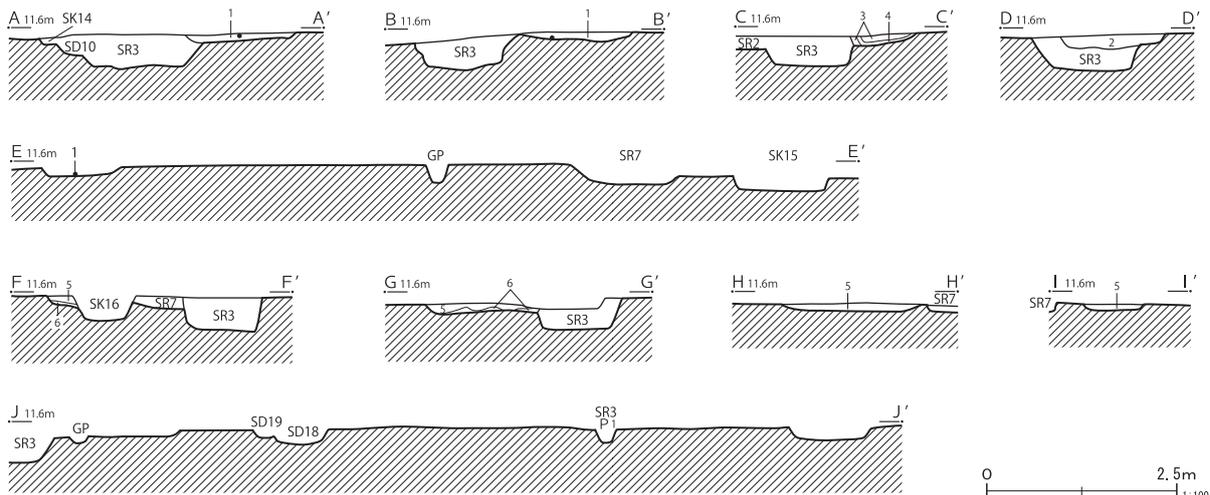
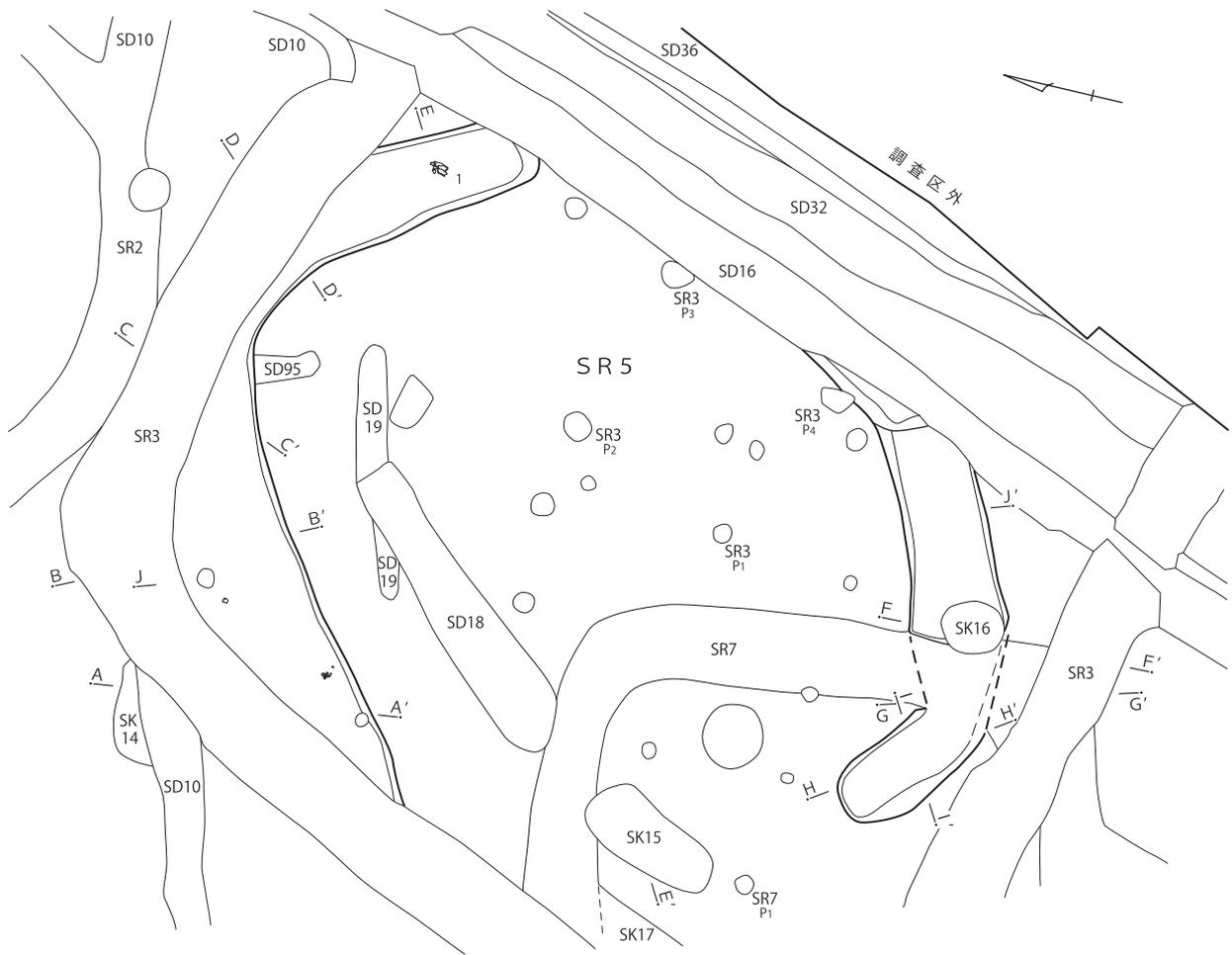
各柱穴の短径×長径×深さは、P1が20×22×42cm、P2が28×30×24cm、P3が24×26×30cm、P4が18×25×20cmである。各柱穴間の距離はP1-P2間が1.90m、P2-P3間が2.05m、P3-P4間が1.90m、P4-P1間が1.94mであり、ほぼ方形に整然と配置されている。

P1～P4を本遺構の柱穴とする場合、周溝に囲まれた部分の、開口部よりやや奥まった部分に位置している。

図化できた遺物は、土師器の壺・高坏・台付甕など計5点(1～5)である。

第5号周溝状遺構 (第42・43図)

G・H-8・9グリッドに位置する。土層断面の観察から、第3号周溝状遺構より新しく、第16号

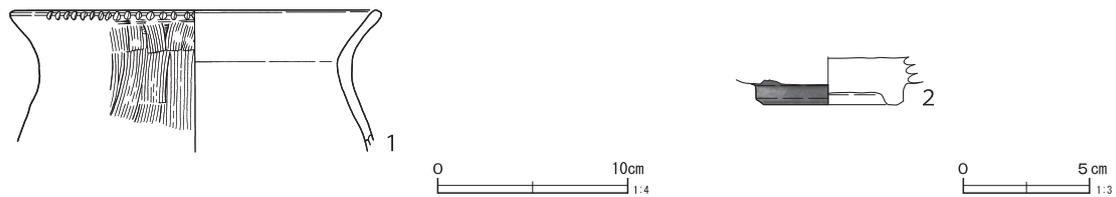


SR 5

- 1 暗褐色土 地山ブロック (0.3 ~ 0.7 cm) やや多
- 2 暗褐色土 焼土ブロック・黄褐色粘土ブロック (0.2 ~ 0.6 cm) 少
- 3 黒褐色土 焼土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 微量

- 4 暗褐色土 黄褐色粘土粒子少
- 5 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 ~ 5 cm) 多 埋戻し土
- 6 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (2 ~ 3 cm) 多 埋戻し土

第42図 第5号周溝状遺構



第43図 第5号周溝状遺構出土遺物

第7表 第5号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SR5	B	土師器	甕	15	(19.0)		[7.5]	A F	普通	黒褐		No.1 器面風化著しい 外面煤付着 口縁部内外面横ナデ
2	SR5	B	陶器	碗	65		5.8	[1.8]	G	良好	灰白緻密	轆轤	青磁 貫入多い 畳付ごく一部(偶然に付いたもの)施釉 削出し高台 底部静止糸切か 畳付胎土目(小)あり 産地不明 中世か

溝跡、第16号土壇より古いことが分かる。その他の重複する多数の遺構の大部分よりも古いと推定されるが、詳細は不明である。

第5号周溝状遺構は、南西側が5.70mほど開口しているが、その規模については不明である。平面形は隅丸方形に近い。

遺構の規模は、北東-南西方向で外法10.46m、北西-南東方向で内法7.82m、主軸方位はN-60°-Eである。周溝の規模は上場幅0.95~[1.52]m、下場幅0.76~[1.45]m、深さ8~17cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は皿状に近い。土層断面にみられる第5・6層は埋め戻し土である。

実測できた遺物は、土師器の甕1点(1)と、この他に、後世の攪乱により中世と推定される青磁碗の高台部が1点(2)出土した。

第6号周溝状遺構、第58号溝跡(第44・45図)

H・I-7・8、H-9グリッドに位置する。直線状の周溝2条が検出された。土層断面の観察から、第7号周溝状遺構、第37号井戸跡より新しく、第9号周溝状遺構、第5・16・20・28・29・41号溝跡より古いことが分かる。これらの他に重複している多数の遺構との新旧関係については詳細

不明である。

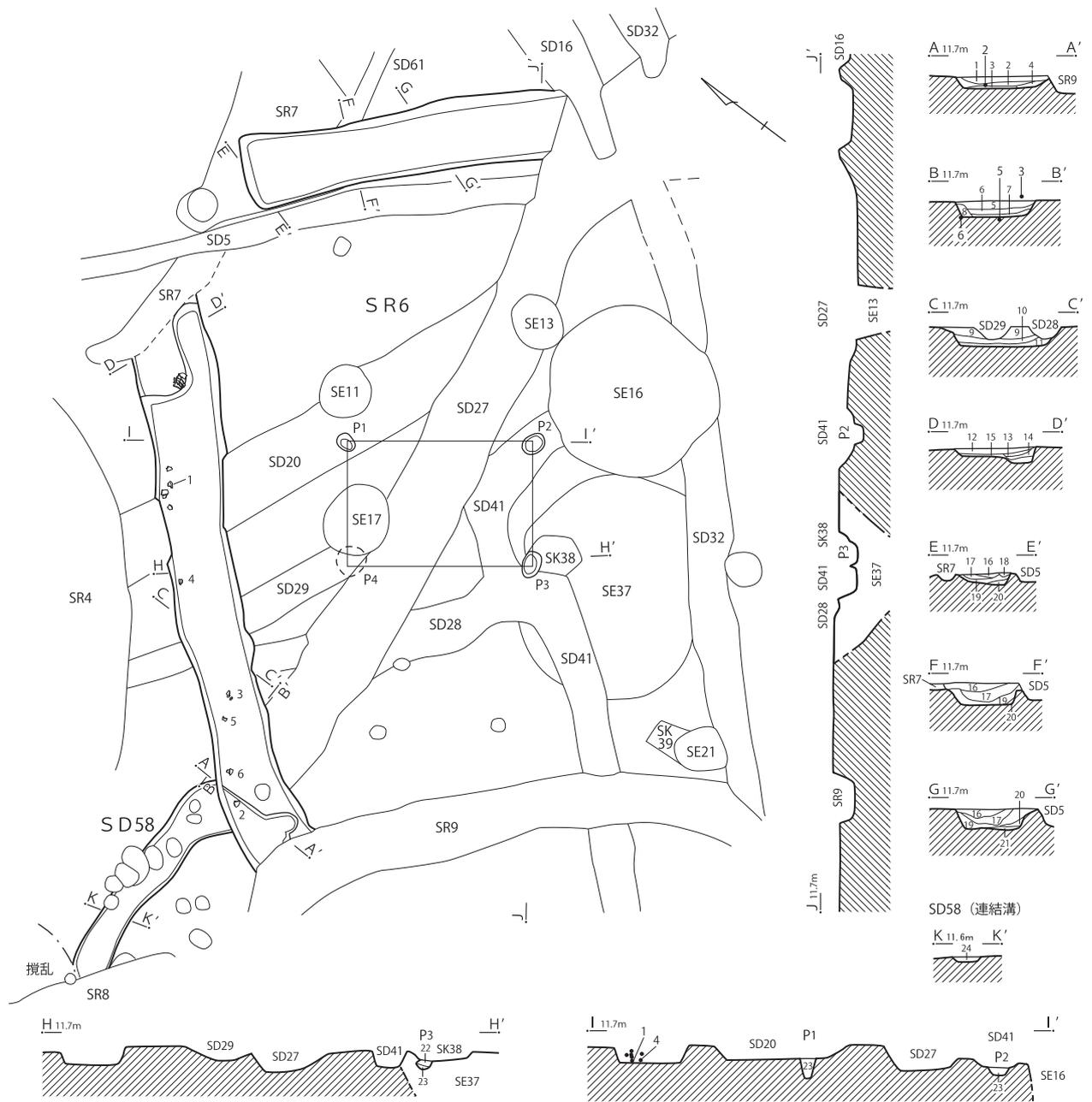
部分的な検出であるため平面形は不明であるが、方形もしくは長方形と推定される。北部分が1.80m開口している。

遺構の規模は、外法は北東-南西方向で10.66m、北西-南東方向で6.88mまで、内法は北東-南西方向で9.55m、北西-南東方向で5.32mまでの確認である。主軸方位はN-53°-E、またはN-37°-Wと推定される。周溝の規模は上場幅0.89~1.09m、下場幅0.70~0.80m、深さ18~35cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は逆台形、もしくは皿状に近い。

周溝に囲まれた部分にある多数のピットの内、位置関係や分布の規模等からP1~P3を、本遺構の柱穴と判断した。1基については、失われていると判断した。

各柱穴の短径×長径×深さは、P1が23×30×50cm、P2が28×42×45cm、P3が32×40×52cm、各柱穴間の距離はP1-P2間が2.90m、P2-P3間が1.80mである。柱穴の配置は長方形と推定される。土層断面H-H'にみられるP3の第22



SR 6

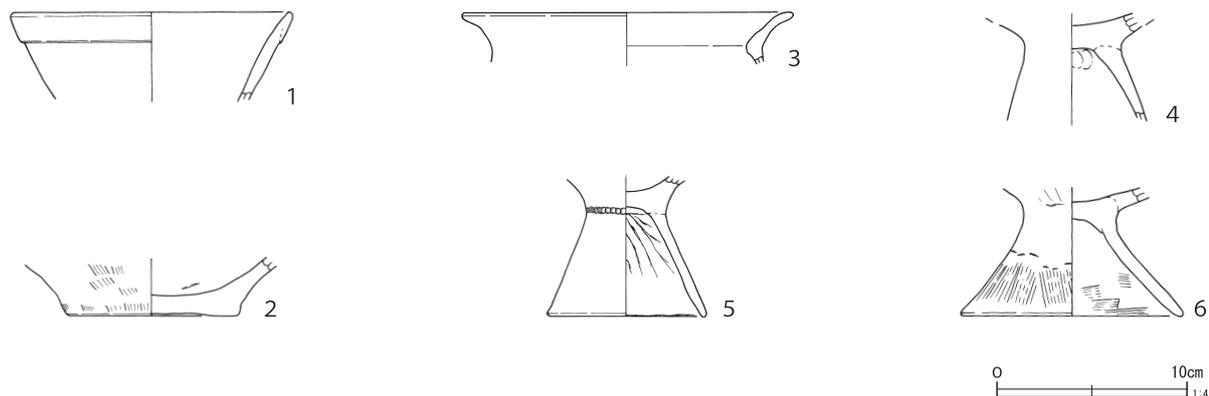
- 1 暗褐色土 地山粒子 (0.4 cm) やや多
- 2 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm)・褐色地山粒子 (0.3 cm) 多
- 3 黒色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 cm) やや多 炭化物粒子少
- 4 暗褐色土 褐色粘土ブロック (1 cm) やや多
- 5 黒褐色土 焼土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm)・黄褐色粘土ブロック (0.2 ~ 0.7 cm) 微量
- 6 黒褐色土 焼土粒子 (0.2 cm) 少 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 微量
- 7 黒色土 炭化物粒子 (0.4 cm) 微量 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) やや多 焼土粒子 (0.2 cm) 少
- 8 黒褐色土 焼土粒子 (0.2 cm) やや多 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 多 炭化物ブロック (0.1 ~ 0.7 cm) 微量
- 9 暗褐色土 褐色粘土ブロック (0.2 ~ 0.7 cm) やや多
- 10 黒褐色土 褐色粘土粒子 (0.4 cm) (0.5 ~ 0.6 cm) 少
- 11 黒褐色土 炭化物粒子・褐色地山粒子 (0.2 cm) 少
- 12 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 微量 褐色地山ブロック (0.5 cm) 多
- 13 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 少

- 14 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 多
- 15 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.6 cm・1 ~ 1.5 cm) 多 褐色ブロック (0.7 cm) 多
- 16 暗褐色土 暗褐色土粒子少 酸化鉄マーブル状に少 しまり強 粘性やや強
- 17 黄褐色土 黄褐色土ブロック (2 cm) 斑らに多 しまり強 粘性やや強 埋戻し土
- 18 暗褐色土 黄褐色土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 斑らに少 しまり・粘性強
- 19 暗褐色土 黄褐色土ブロック (1 cm)・黄褐色土粒子 (0.1 cm)・黒褐色土少 しまり・粘性強
- 20 暗褐色土 褐色土粒子 (0.2 cm) 斑らに多 しまり・粘性強
- 21 黒褐色土 黒褐色土中に黄褐色土粒子少 しまり・粘性強
- 22 褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 少 抜取痕か
- 23 褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 多 埋戻し土

SD 58 (連結溝)

- 24 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 多 埋戻し土

第44図 第6号周溝状遺構、第58号溝跡



第45図 第6号周溝状遺構出土遺物

第8表 第6号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR6	B	土師器	壺	5	(14.4)		[4.8]	C F	普通	にぶい 黄橙	No.3 器面風化著しく調整痕はみえない
2	SR6	B	土師器	甕	70		9.0	[3.1]	A B C F G	普通	にぶい 黄橙	No.10 器面風化している
3	SR6	B	土師器	甕	20	(17.2)		[2.7]	A B C F G	普通	にぶい 黄橙	No.7 口縁部内外面横ナデ 器面風化している
4	SR6	B	土師器	台付甕	95			[5.7]	A F G	普通	にぶい 黄橙	No.6 脚部内面上部指頭圧痕 内面下部ナデか 器面風化著しく調整痕は見えない
5	SR6	B	土師器	台付甕	80		8.1	[7.5]	C D G	普通	灰白	No.8 器面風化している 端部内外面横ナデ
6	SR6	B	土師器	台付甕	90		11.6	[6.8]	A C F	普通	にぶい 黄橙	No.9

層は柱痕跡と考えられる。土層断面H-H'のP3第23層、土層断面I-I'のP1・2第23層は埋戻し土である。

P1～P4を本遺構の柱穴とする場合、周溝に囲まれた部分のほぼ中央に位置していると推定される。

図化できた遺物は、土師器の壺・台付甕など計6点(1～6)である。

なお、本遺構の西側部分で検出された第58号溝跡は、本遺構と第8号周溝状遺構をつなぐ連結溝と判断した。直線的に伸び、断面形は皿状である。規模は、全長[3.90]m、上場幅が0.45～0.72m、下場幅が0.40～0.72m、深さは6～10cmである。方位はN-90°を指す。

第8号周溝状遺構の周溝内に水が溜まった際、微地形的にみて連結溝(第58号溝跡)を通じて本遺構の周溝に流下し、さらに第60号溝跡ほかの溝に

流れ込んだものと推定される。連結溝で結ばれた遺構は、同時期に機能していたと考えられる。

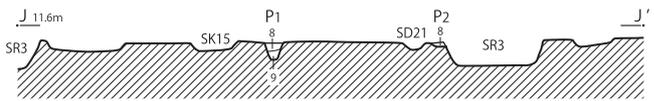
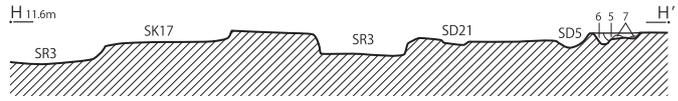
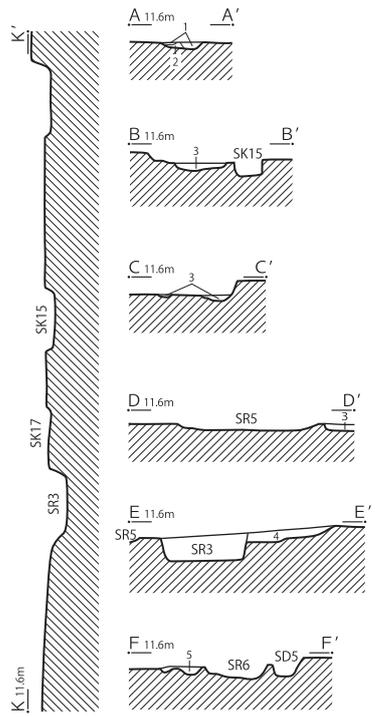
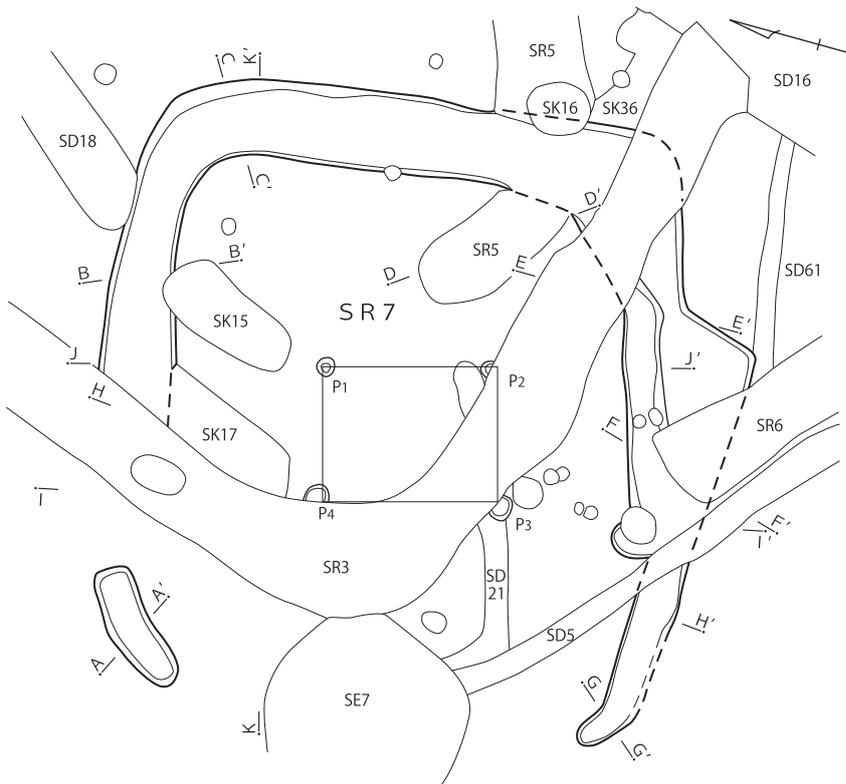
第7号周溝状遺構(第46図)

G-8、H-8・9グリッドに位置する。第3・6号周溝状遺構、第16・17号土壇より古い。また、その他の重複する遺構よりも古いと考えられる。

第7号周溝状遺構は、西側部分が5.40mにわたって開口している。南溝は後世の攪乱を受けているのか、南に向かって歪んでいる。平面形は「コ」の字状に近い。

遺構の規模は、南北方向で外法8.58m、内法5.82m、東西方向で外法8.16m、内法6.70m、主軸方位はN-82°-Eである。周溝の規模は上場幅0.58～1.68m、下場幅0.42～0.89m、深さ8～30cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。



- SR7
- | | | | |
|--------|---|---------|--|
| 1 暗褐色土 | 褐色土ブロック (2 cm)・黄褐色土ブロック (0.5 cm) 少
しまり強 粘性弱 埋戻し土 | 6 黒褐色土 | 黄褐色土ブロック (0.3 ~ 1 cm)・褐色土ブロック (0.5 ~ 1 cm) 若干
しまりやや強 粘性弱 |
| 2 黄褐色土 | 暗灰色土粒子マーブル状に少 しまり強 粘性弱 | 7 暗灰褐色土 | 黄褐色土ブロック (0.5 cm) 少 褐色土ブロック (0.5 ~ 1 cm) やや多
しまりやや弱 粘性やや強 |
| 3 暗褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 疎らに少 | 8 暗褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (0.8 ~ 1 cm) 多 埋戻し土 |
| 4 褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (1 ~ 2 cm) 多 | 9 暗褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 少 柱拔取痕か |
| 5 黒褐色土 | 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 微量
褐色土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) やや多 しまりやや強
粘性弱 埋戻し土 | | |

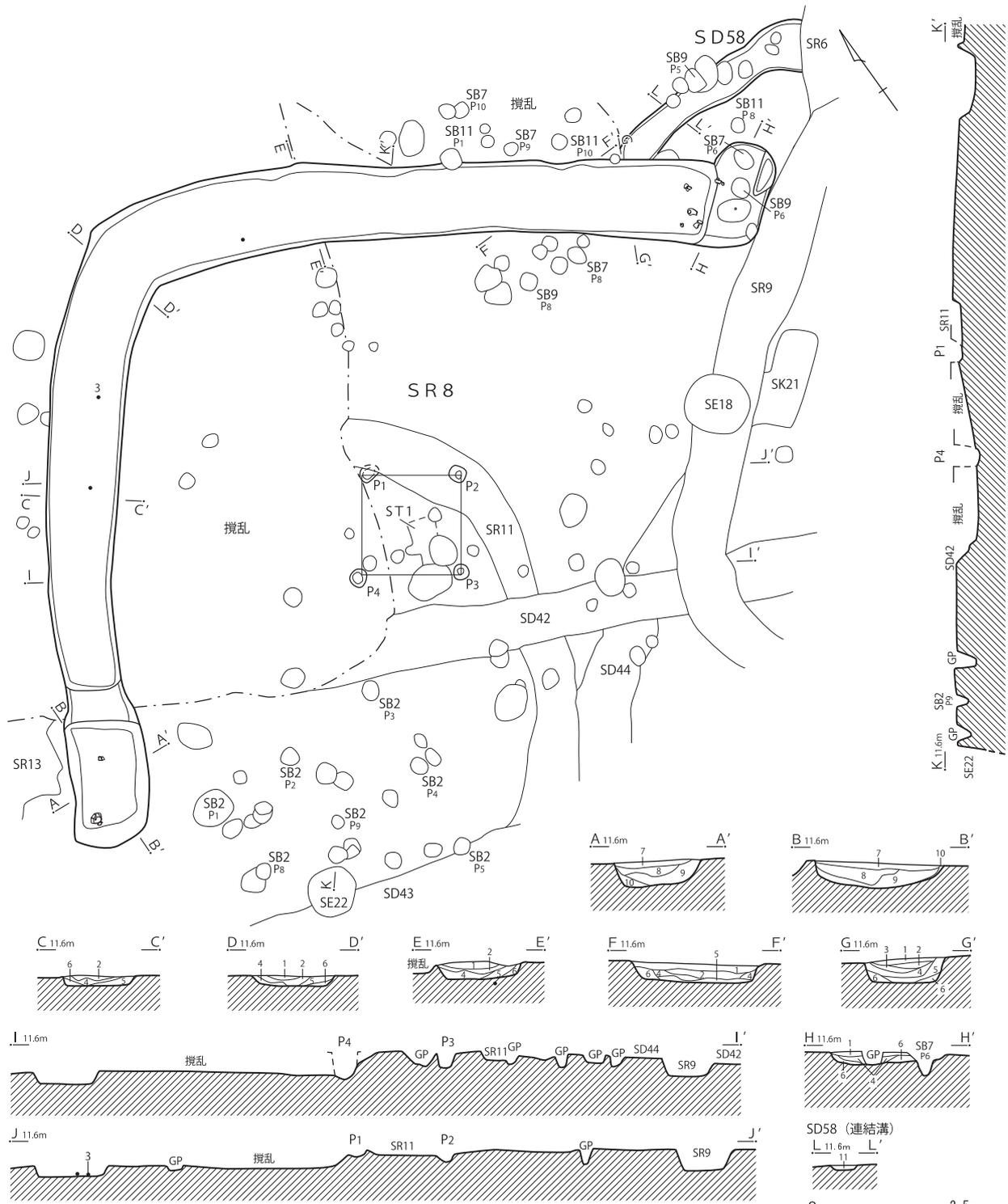
第46図 第7号周溝状遺構

周溝に囲まれた部分にある多数のピットの内、位置関係や分布の規模等から P1 ~ P4 を、本遺構の柱穴と判断した。

各柱穴の短径×長径×深さは、P1が22×24×22cm、P2が(20)×22×7cm、P3が(36)×36×8cm、P4が(28)×34×8cmである。各柱穴間

の距離は P1 - P2間が2.15m、P2 - P3間が1.85m、P3 - P4間が2.40m、P4 - P1間が1.85mであり、ややばらつきがある。柱穴の配置は比較的整然としており、正方形に近い長方形である。

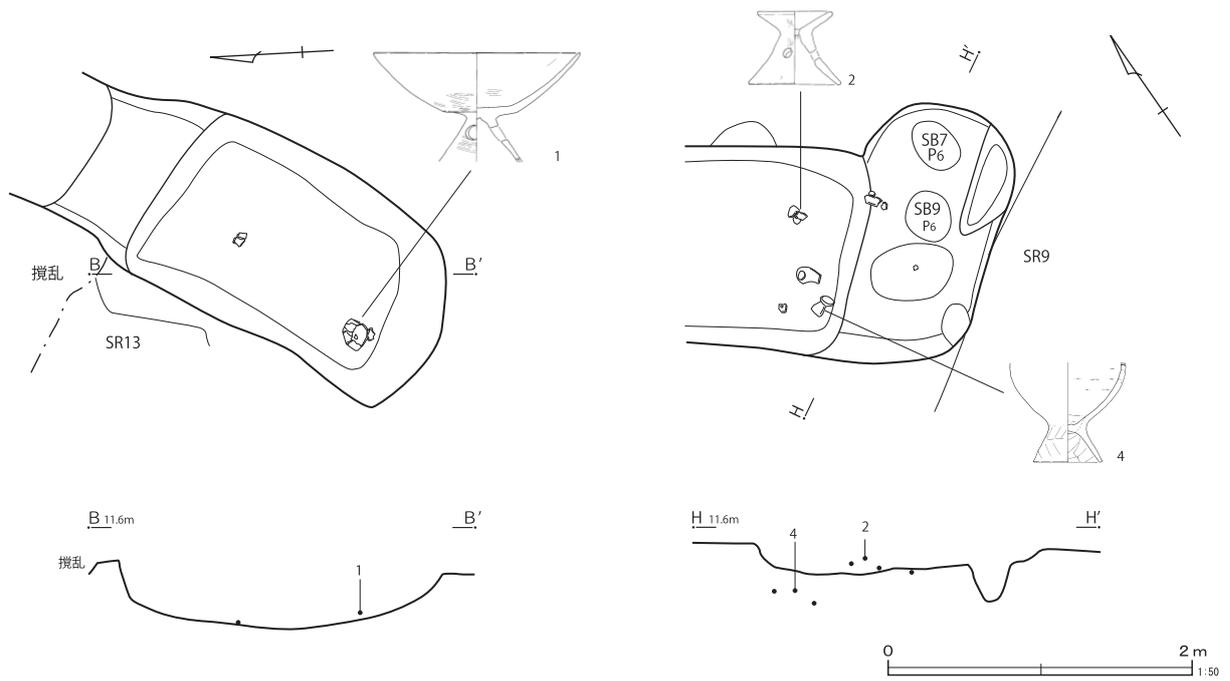
土層断面にみられる第1・5・8層は埋戻し土



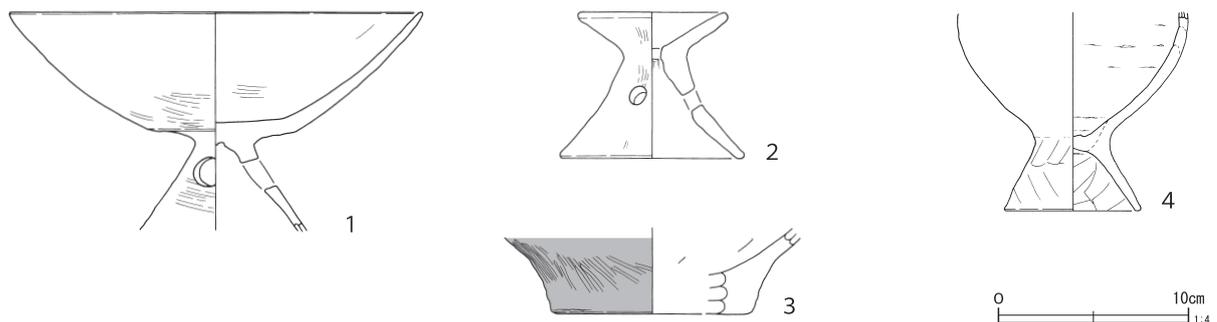
- SR 8
- 1 暗褐色土 暗灰色粘土ブロック (0.5 cm) 少 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 1 cm) 微量 褐色地山粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) やや多
 - 2 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.2 ~ 1 cm) 多 褐色地山粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) やや多 粘土ブロックが不均一に混入 埋戻し土
 - 3 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) やや多 焼土粒子 (0.1 cm) 微量
 - 4 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.2 ~ 1 cm) 多 褐色地山粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) やや多 粘土ブロックが不均一に混入
 - 5 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.2 ~ 1 cm) 少 褐色地山粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 微量
 - 6 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 多 褐色地山粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 少

- 7 暗褐色土 褐色粘土ブロック (0.5 cm) ・ 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) やや多
 - 8 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック多 炭化物粒子 (0.2 cm) 微量
 - 9 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) やや多 焼土粒子 (0.3 cm) 少 炭化物粒子 (0.2 cm) 微量
 - 10 黄褐色土 地山粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 少 炭化物粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) やや多 黒褐色土ブロック (1 cm) を均質に少
- SD 58 (連結溝)
- 11 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 多 埋戻し土

第47図 第8号周溝状遺構、第58号溝跡



第48図 第8号周溝状遺構遺物出土状況



第49図 第8号周溝状遺構出土遺物

第9表 第8号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR8	B	土師器	高坏	75	(21.7)		[11.5]	A C D F G	普通	にぶい 橙	No.10 穿孔3ヶ所(外からの穿孔)
2	SR8	B	土師器	器台	60	7.7	(9.5)	7.7	A C F G	普通	灰白	No.6 口縁端部内外面横ナデ 穿孔3ヶ所(外からの穿孔) 器面荒れている
3	SR8	B	土師器	壺	40		(10.5)	[4.5]	A C F	普通	橙	No.2 器面風化著しい 外面赤彩
4	SR8	B	土師器	台付甕	40		7.0	[10.4]	A C F	普通	にぶい 赤褐	No.4 外面へラ削り後へラナデか

であり、第9層は柱抜き痕と考えられる。

P1～P4を本遺構の柱穴とする場合、周溝に囲まれた部分のほぼ中央に位置していると推定される。

遺物は出土しなかった。

第8号周溝状遺構、第58号溝跡 (第47～49図)

H・I-6・7グリッドに位置する。ほぼ直線の周溝がL字状に検出された。第2・7・9・11号掘立柱建物跡よりも古い。ともに遺構の深度が浅いため、第11号周溝状遺構との新旧関係は捉えら

れなかったが、それ以外の遺構よりも古いと推定される。

部分的な検出であるため平面形は不明であるが、方形もしくは長方形と推定される。周溝が途切れているのか、開口しているかについても不明であるが、前者の可能性が高いと思われる。

遺構の規模は、北東-南西方向の外法は11.30m、内法は10.15m、北西-南東方向の外法は11.90m、内法は10.78mと推測される。主軸方位はN-36°-E、またはN-54°-Wと推定される。周溝の規模は上場幅0.95~1.45m、下場幅0.80~1.21m、深さ17~42cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形、もしくは皿状に近い。

周溝に囲まれた部分にある多数のピットの内、位置関係や分布の規模等からP1~P4を、本遺構の柱穴と判断した。

各柱穴の短径×長径×深さは、P1が(18)×30×10cm、P2が25×28×18cm、P3が22×25×25cm、P4が24×28×42cmである。各柱穴間の距離はP1-P2間が1.40m、P2-P3間が1.65m、P3-P4間が1.66m、P4-P1間が1.70mである。柱穴の配置は比較的整った方形である。

覆土中には、黄褐色粘土ブロックが混入していることから埋め戻しと推定されるが、単なる埋め戻しではなく、貼床として埋められた可能性も否定できない。

P1~P4を本遺構の柱穴とする場合、周溝に囲まれた部分の中央ではなく、やや西寄りに位置していると推定される。

西端部近くの周溝内から、土師器高坏(1)が土圧で潰れた状態で出土した。図化できた遺物は、土師器の高坏・器台・台付甕など計4点(1~4)である。

なお、本遺構の東側部分で検出された第58号溝跡は、本遺構と第6号周溝状遺構をつなぐ連結溝

と判断した。平面形は直線状に近く、断面形は皿状である。規模は、全長[3.90]m、上場幅が0.45~0.72m、下場幅が0.42~0.72m、深さは6~10cmである。方位はN-90°を指す。

本遺構の周溝内に水が溜まった際、微地形的にみて連結溝(第58号溝跡)を通じて第6号周溝状遺構の周溝に流下し、さらに第60号溝跡ほかに流れ込んだものと推定される。

第9号周溝状遺構、第99号溝跡(第50・51図)

I・J-7・8グリッドに位置する。ほぼ直線の周溝が「コ」の字状に検出された。第6号周溝状遺構より新しく、第32・41・60号溝跡、第18号井戸跡よりも古い。

周溝はほぼ直線状で、全体の平面形は「コ」の字状に近い。南西部分が5.65mの規模で開口している。

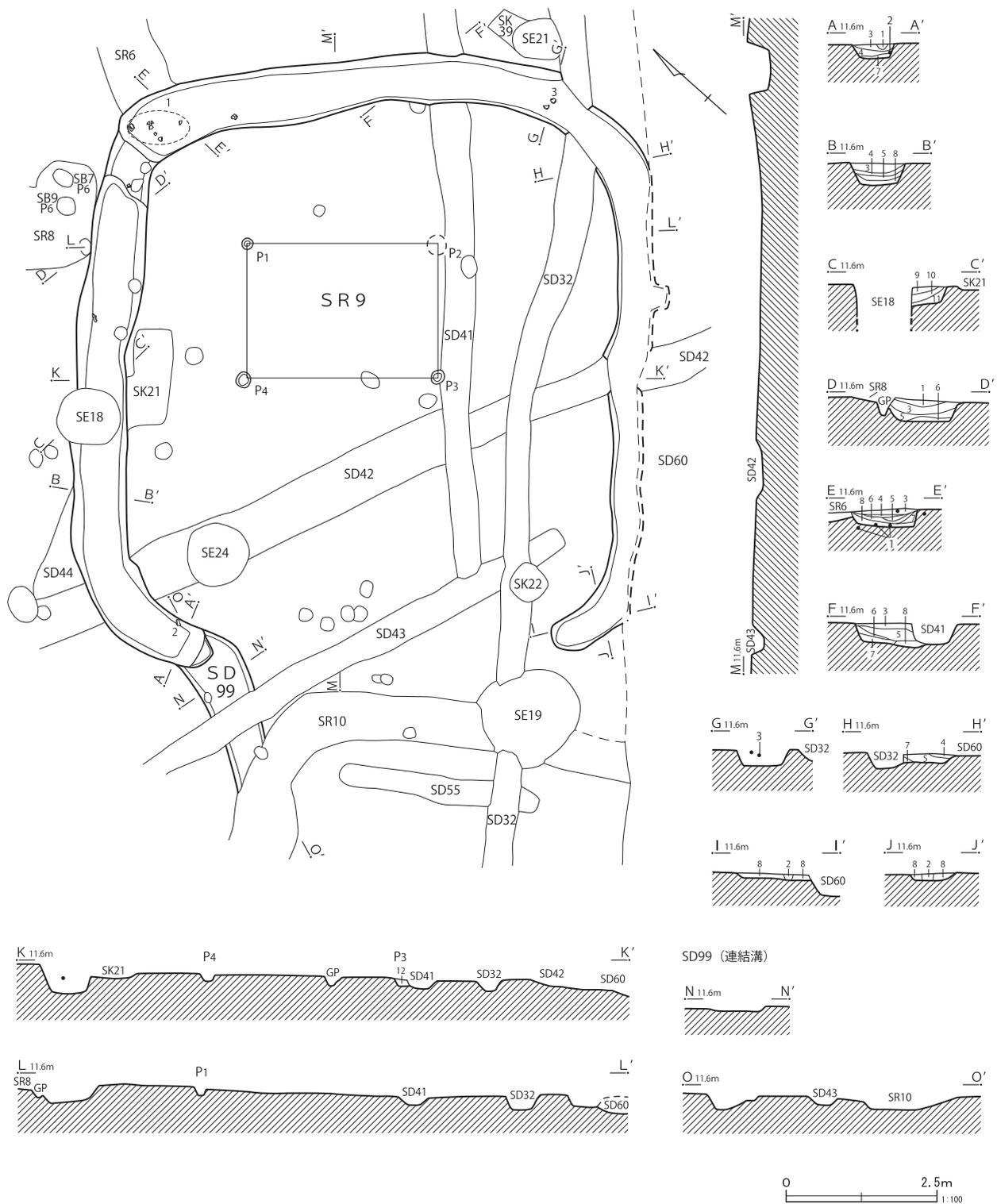
遺構の規模は、北東-南西方向の外法は10.05m、内法は8.70m、北西-南東方向の外法は9.40m、内法は8.02m、主軸方位はN-49°-Eである。周溝の規模は上場幅0.66~0.95m、下場幅0.48~0.71m、深さ11~40cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、方台部側では垂直に近い部分も認められる。断面形は逆台形、もしくは箱形に近い。

周溝に囲まれた部分にある多数のピットの内、位置関係や分布の規模等からP1・P3・P4を、本遺構の柱穴と判断した。P2については、失われていると推定した。

各柱穴の短径×長径×深さは、P1が18×22×11cm、P3が18×20×12cm、P4が20×22×12cmである。各柱穴間の距離はP3-P4間が3.22m、P4-P1間が2.25mである。なお、P2を平面図の位置に仮定すれば、柱穴間の距離は、P1-P2間は3.15m、P2-P3間は2.23mとなる。柱穴の配置は比較的整った長方形といえる。

図示はしていないものの、P1の土層断面には



SR 9

- 1 暗褐色土 地山粒子 (0.1 cm) 微量
- 2 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) やや多
- 3 暗褐色土 褐色地山粒子 (0.4 cm) やや多
- 4 黒色土 褐色地山粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 微量 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 少
- 5 黒褐色土 褐色地山粒子 (0.2 ~ 0.5 cm)・黄褐色粘土粒子 (0.3 cm) 多
- 6 黒褐色土 褐色地山粒子 (0.3 cm) やや多
- 7 暗褐色土 褐色地山粒子 (0.3 cm)・黄褐色粘土粒子 (0.3 cm) 多
- 8 黒褐色土 褐色地山ブロック (0.5 cm) やや多
黄褐色粘土ブロック (2 ~ 3 cm) 多

- 9 暗褐色土 褐色地山粒子 (0.2 ~ 0.4 cm)・黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 多
焼土粒子 (0.1 cm) 微量
- 10 黒色土 褐色地山粒子 (0.2 cm) 微量
黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 多
焼土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少
- 11 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.2 ~ 0.6 cm) 多
焼土粒子 (0.4 cm) 微量
- 12 褐灰色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 多 埋戻し土か

第50図 第9号周溝状遺構、第99号溝跡



第51図 第9号周溝状遺構出土遺物

第10表 第9号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR9	B	土師器	高坏	50	16.8		6.2	G	普通	にぶい 橙	No.3~5 口唇部内外面横ナデ 口縁部内外面に亘る黒斑あり 器面荒れている
2	SR9	B	土師器	高坏	20	(19.0)		[3.0]	A C G	普通	灰白	No.9 単節 LR 横線 内面へラ磨き へラ磨き部分赤彩 器面風化著しい
3	SR9	B	土師器	壺	80		4.0	[2.5]	A C F G	普通	灰白	No.7 器面荒れている 内外面赤彩

柱痕跡が認められた。

さらに周溝の覆土中には、黄褐色粘土ブロックが混入していることから埋め戻しと推定されるが、単なる埋め戻しではなく、貼床として埋められた可能性も否定できない。

P 1～P 4を本遺構の柱穴とする場合、周溝に囲まれた部分の中央ではなく、やや北西寄りであり、開口部からは奥まった位置に配置されているといえる。

図化できた遺物は、土師器の高坏・壺など計3点（1～3）である。

なお、本遺構の西側部分で検出された第99号溝跡は、本遺構と第10号周溝状遺構をつなぐ連結溝と判断した。平面形はやや湾曲するものの比較的直線状に近く、断面形は皿状である。規模は、全長 [2.50] m、上場幅が0.66～0.90m、下場幅が0.50～0.82m、深さは10cmである。方位はN-22°-Eを指す。

本遺構の周溝内に水が溜まった際、微地形的にみて連結溝（第99号溝跡）を通じて第10号周溝状遺構の周溝に流下し、さらに第60号溝跡ほかに流れ込んだものと推定される。

第10号周溝状遺構、第99号溝跡（第52・53図）

J-6・7グリッドに位置する。ほぼ直線の周

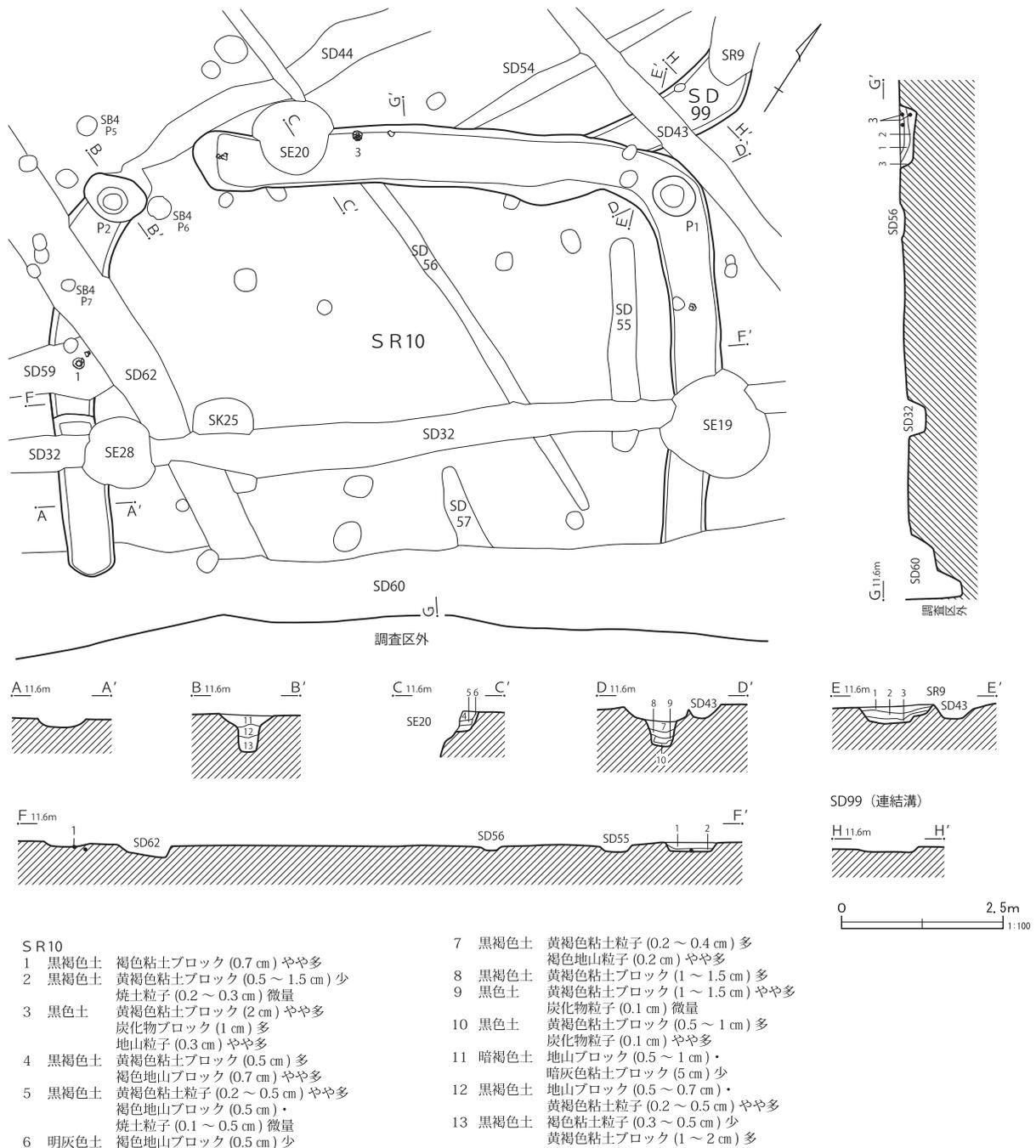
溝が「コ」の字状に検出された。第59号溝跡より新しく、第60号溝跡、第4号掘立柱建物跡、第19・20・28号井戸跡よりも古い。各遺構の深度が浅いため、その他の重複する多数の遺構との新旧関係は捉えられなかったが、あくまでも推測ではあるが、大部分の遺構よりも古いと考えられる。

周溝はやや湾曲するもののほぼ直線状で、全体の平面形は「コ」の字状に近い。但し、第60号溝跡により南溝が失われている可能性や、調査区外に続いている可能性も考えられる。また、西側コーナーについても、周溝が浅いため、開口しているのかプランが途切れているのかの判断はできなかった。ちなみに、西側コーナーの開口の規模は0.90m程である。

遺構の規模は、北東-南西方向の外法は10.45m、内法は8.96m、北西-南東方向については外法6.66m、内法5.70mまでの確認である。

主軸方位は、南東側を開口部とすればN-32°-Wであるが、西側コーナー部分を開口部と仮定すればN-62°-Eとなる。周溝の規模は上場幅0.66～1.10m、下場幅0.50～0.66m、深さ12～28cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は逆台形、もしくはは



第52図 第10号周溝状遺構、第99号溝跡

皿形に近い。

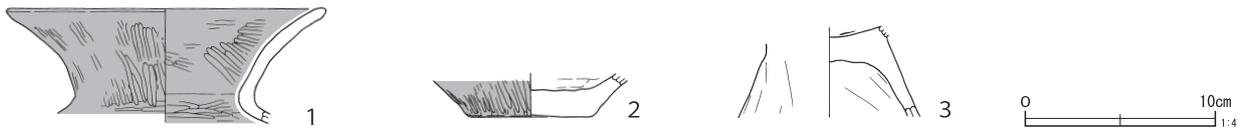
P1・P2を溝内土壌と判断した。両ピットの短径×長径×深さは、P1が56×65×66cm、P2が70×96×58cmであり、ともにコーナー部分に位置する点で共通するが、断面形はP1が箱形に近いのに対し、P2はロート状である。

覆土内には黄褐色粘土ブロックが多く含まれて

おり、埋め戻しによるものと推定される。

図化できた遺物は、土師器の壺・台付甕など計3点（1～3）である。

なお、本遺構の北側部分で検出された第99号溝跡は、本遺構と第9号周溝状遺構をつなぐ連結溝と判断した。平面形はやや湾曲するものの比較的直線状に近く、断面形は皿状である。規模は、全



第53図 第10号周溝状遺構出土遺物

第11表 第10号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR10	B	土師器	壺	85	16.8		[6.0]	A B C F G	普通	にぶい 黄橙	No.6 南溝 外面・口縁部内面赤彩
2	SR10	B	土師器	壺	70		6.6	[2.3]	C D E F	普通	灰白	J-7G 器面風化している 外面赤彩
3	SR10	B	土師器	台付甕	95			[4.7]	A F G	普通	赤褐	No.2 器面風化著しい

長 [2.50] m、上場幅が0.66~0.90m、下場幅が0.50~0.82m、深さは10cmである。方位はN-22°-Eを指す。

第9号周溝状遺構の周溝内に水が溜まった際、微地形的にみて連結溝(第99号溝跡)を通じて本遺構の周溝に流下し、さらに第60号溝跡ほかに流れ込んだものと推定される。

第11号周溝状遺構 (第54図)

I-6グリッドに位置する。北側から西側にかけて土取りによる攪乱を受けているため、一部分のみの検出となった。第2号掘立柱建物跡よりも古い。また、その他の重複する遺構の大部分よりも古いと推定されるが、詳細は不明である。

南側は周溝が途切れているが、開口部であるのか、さらに南に向かって続いていたものが失われてしまった結果であるかについては判断できなかった。周溝は湾曲しているが、平面形は不明である。

周溝の規模は、直線距離で8.90mまで確認できたにとどまり、主軸方位は不明である。周溝の上場幅0.52~1.00m、下場幅0.40~0.90m、深さ10~15cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は皿状に近い。

遺物は出土しなかった。

第12号周溝状遺構 (第55・56図)

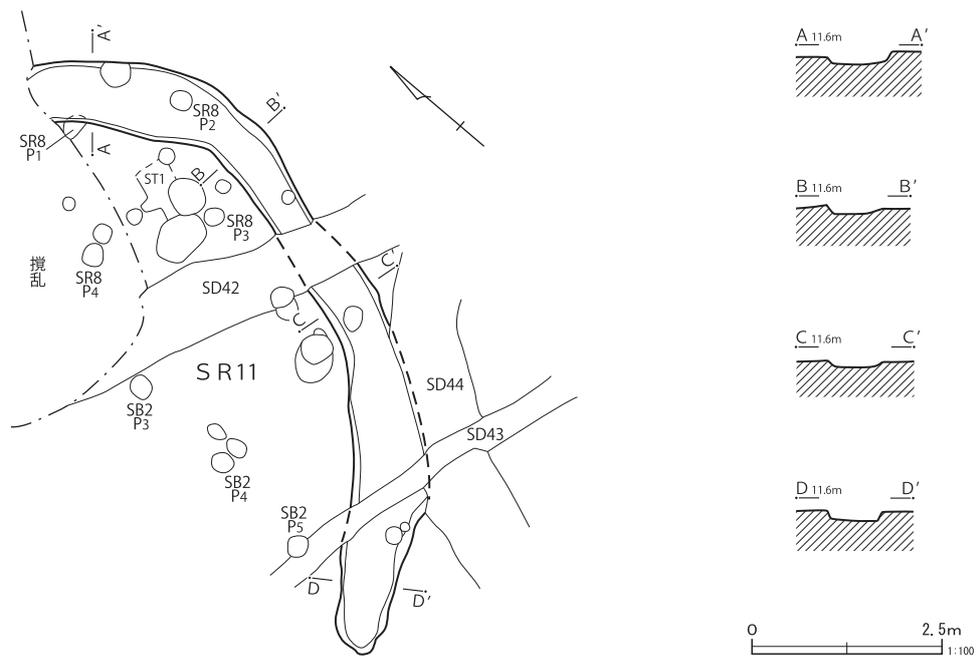
I・J-5グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡、第25・26号井戸跡、第46・53溝跡よりも古い。その他の重複する多数の遺構の大部分よりも古いと推定されるが、詳細は不明である。

南側では周溝が途切れている。北側については開口している形となっているが、本遺跡の周溝状遺構の開口部は南西側が多く、北側では周溝が途切れている可能性が高いと思われる。平面形については、開口部の有無は不明ではあるものの、円形または楕円形であると推定される。

遺構の規模は、ともに直線距離で西溝が9.60m、東溝が4.55mまでの確認であり、主軸方位は不明である。周溝の上場幅は0.60~0.72m、下場幅0.45~0.70m、深さ8~16cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は逆台形、もしくは皿状に近い。覆土中には、黄褐色粘土ブロックが層状ではなく疎らに混入しており、埋め戻された結果であると考えられる。

実測できた土師器は壺1点(1)である。西溝南端部から土師器壺の破片がややまとまった状態で出土したが、土取りの際に削り取られ、胴部の



第54図 第11号周溝状遺構

みの破片であったため図化には至らなかった。

第13号周溝状遺構 (第57・58図)

H-5、I-5・6グリッドに位置する。後世の土取りによる攪乱のため、遺構の南端部のみが確認された。重複するピットよりも古いと推定されるが、詳細は不明である。

南側では5.28mの規模で開口している。平面形は円形、または楕円形であると推定される。

遺構の規模は、ともに直線距離で西溝が3.15m、東溝が3.18mまでの確認である。主軸方位はN-21°-Eと推定される。周溝の上場幅は0.52~1.82m、下場幅0.35~0.55m、深さ15~32cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は皿形、もしくは碗形に近い。覆土中には、黄褐色粘土ブロックが層状ではなく疎らに混入しており、埋め戻された結果であると考えられる。

図化できた土師器は鉢1点(1)である。

第14号周溝状遺構 (第59図)

H-10・11グリッドに位置する。西溝のみ確認さ

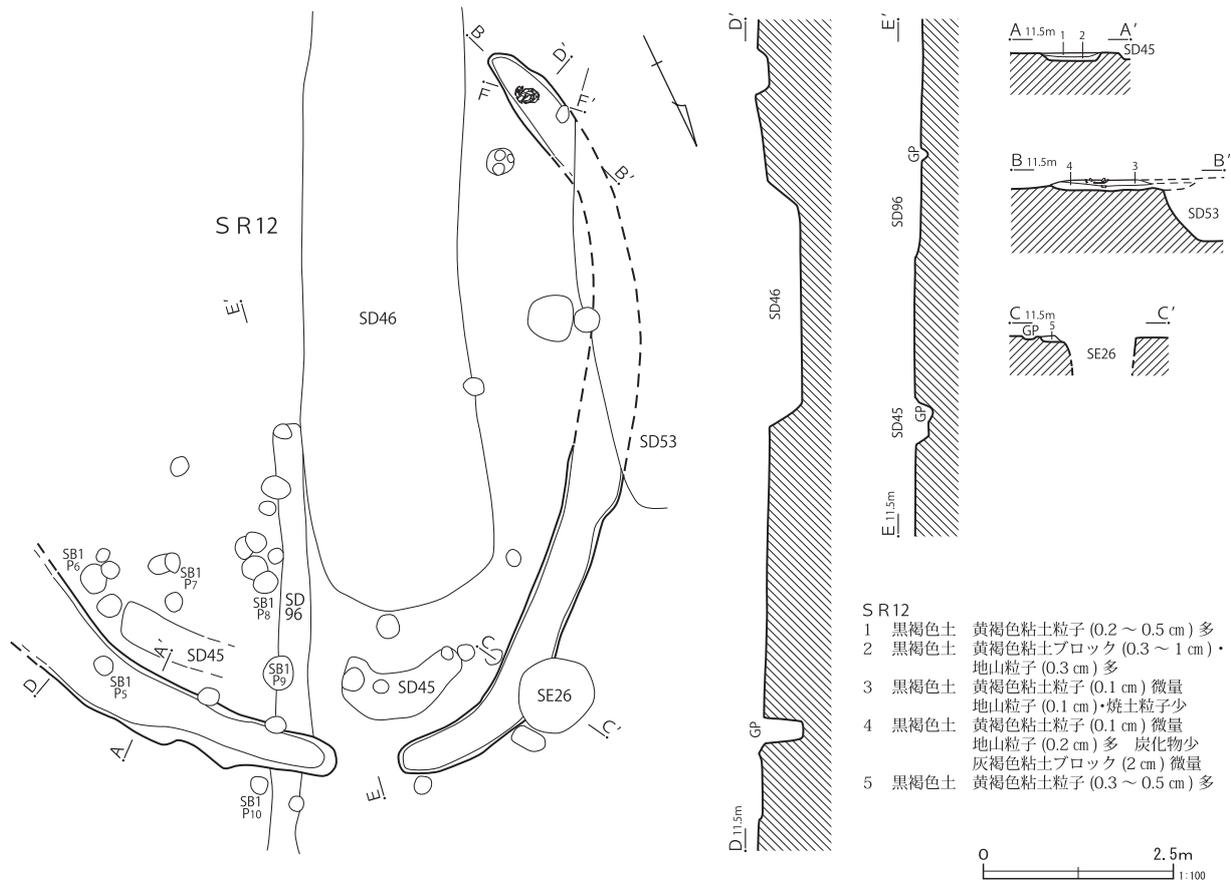
れた。第75号溝跡より古いが、第15号周溝状遺構との新旧関係は不明である。

南側では周溝が途切れている。この部分は、方位的には開口部である可能性が高いと考えられるが、明確ではない。平面形については、開口部の有無は不明ではあるものの方形、または長方形であると推定される。

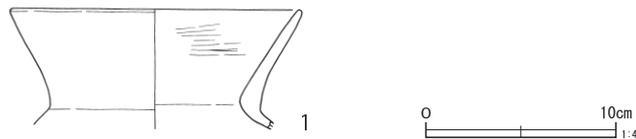
遺構の規模は、直線距離で6.58mまでの確認である。南端部が開口部である場合、主軸方位はN-42°-Eと推定される。周溝の上場幅は0.42~0.71m、下場幅0.45~0.58m、深さ9~18cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は皿状に近い。覆土中には、黄褐色粘土ブロックが層状ではなく疎らに混入しており、埋め戻された結果であると考えられる。

土師器の小破片が出土したが、図化には至らなかった。



第55図 第12号周溝状遺構



第56図 第12号周溝状遺構出土遺物

第12表 第12号周溝状遺構出土遺物観察表

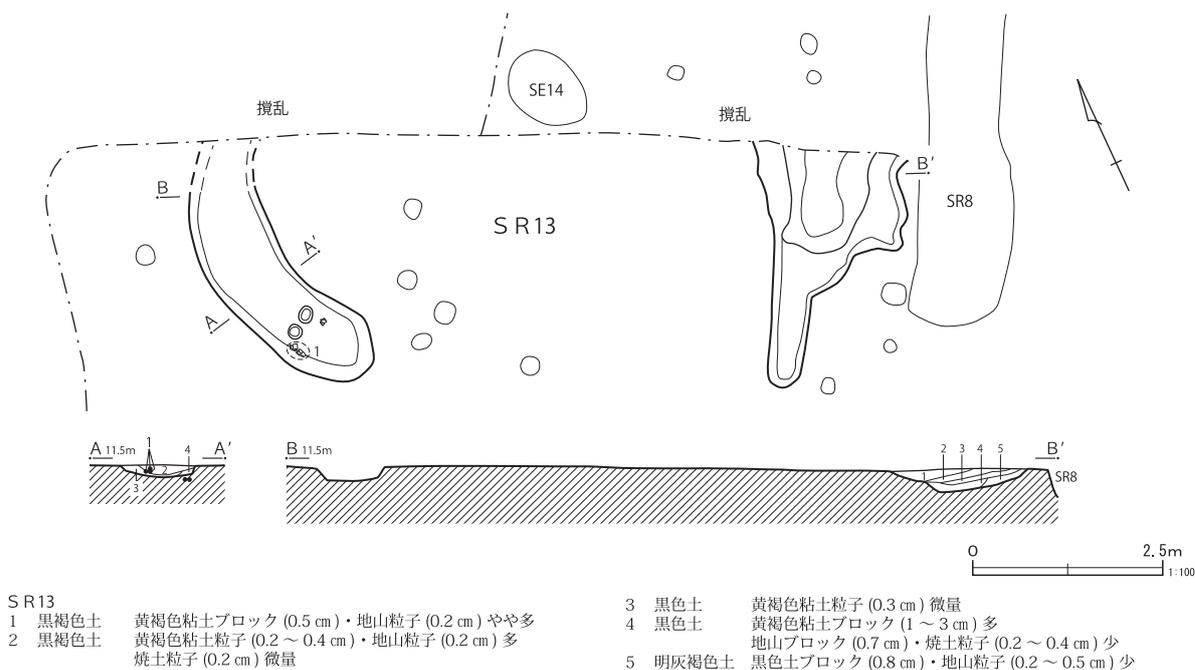
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR12	B	土師器	壺	20	(15.6)		[6.3]	A C F G	普通	にぶい 橙	口縁上部内外面横ナデ 器面風化著しい

第15号周溝状遺構 (第60・62図)

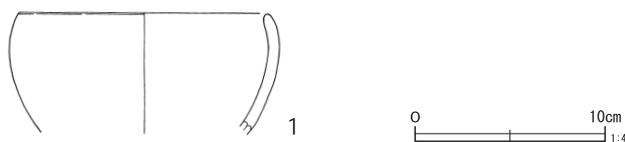
H-10・11グリッドに位置する。ほぼ直線の周溝が「コ」の字状に検出された。第17号周溝状遺構より新しく、第19・31号周溝状遺構、第75・80号溝跡、第3号性格不明遺構よりも古い。第14・16・18号周溝状遺構、第78・79・82号溝跡との新旧関係は捉え

られなかった。

周溝は歪んでいるが直線状で、全体の平面形は「コ」の字状に近いが、南西溝は確認されなかった。南西部分は、開口している可能性と、第19号周溝状遺構との重複により失われている可能性とが考えられるが特定するには至らなかった。



第57図 第13号周溝状遺構



第58図 第13号周溝状遺構出土遺物

第13表 第13号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR13	B	土師器	鉢	35	(13.0)		6.4	G	普通	浅黄橙	No. 1

遺構の規模は、北西-南東方向の内法は6.35mであるが、外法・主軸方位・上場幅・下場幅などの法量は得られなかった。なお、周溝の深さは10~28cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は浅い部分では皿状であるが、深い部分では逆台形に近い。

実測できた土師器は、壺(1)・台付甕(2)の計2点である。

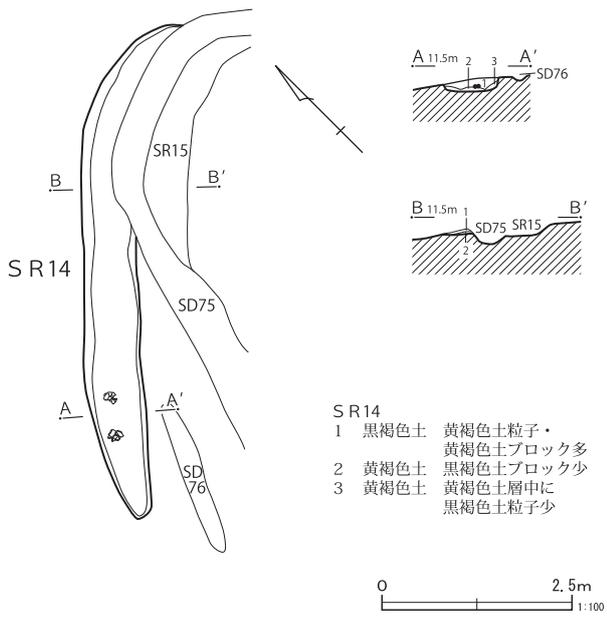
第16号周溝状遺構(第61・62図)

H-10・11グリッドに位置する。東溝のみ確認さ

れた。第78・79号溝跡よりも古い。第15・17・18号周溝状遺構、第82号溝跡との新旧関係は不明である。

南・北側とも周溝が途切れているが、周溝が途切れているのか、開口しているのかの特定はできなかった。平面形については、開口部の有無が不明ではあるものの、方形または長方形である可能性が高い。

遺構の規模は、直線距離で7.78mまでの確認であり、主軸方位は不明である。周溝の上場幅は1.06~1.36m、下場幅0.78~0.88m、深さ32~48cmで



第59図 第14号周溝状遺構

ある。

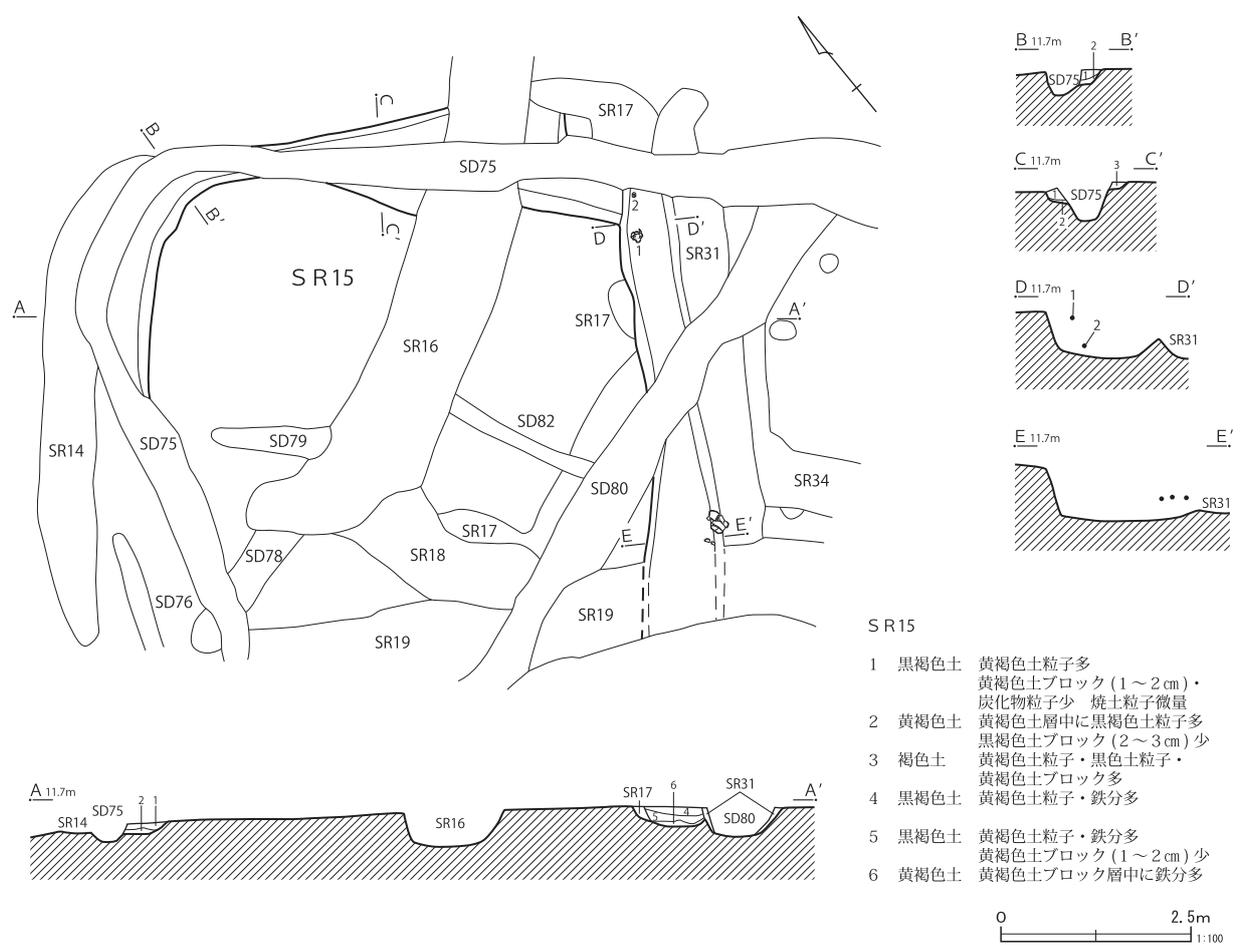
周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形である。覆土中には、黄褐色粘土ブロックが層状ではなく疎らに混入しており、埋め戻された結果であると考えられる。

実測できた土師器は、壺（3）・台付甕（4）の計2点である。

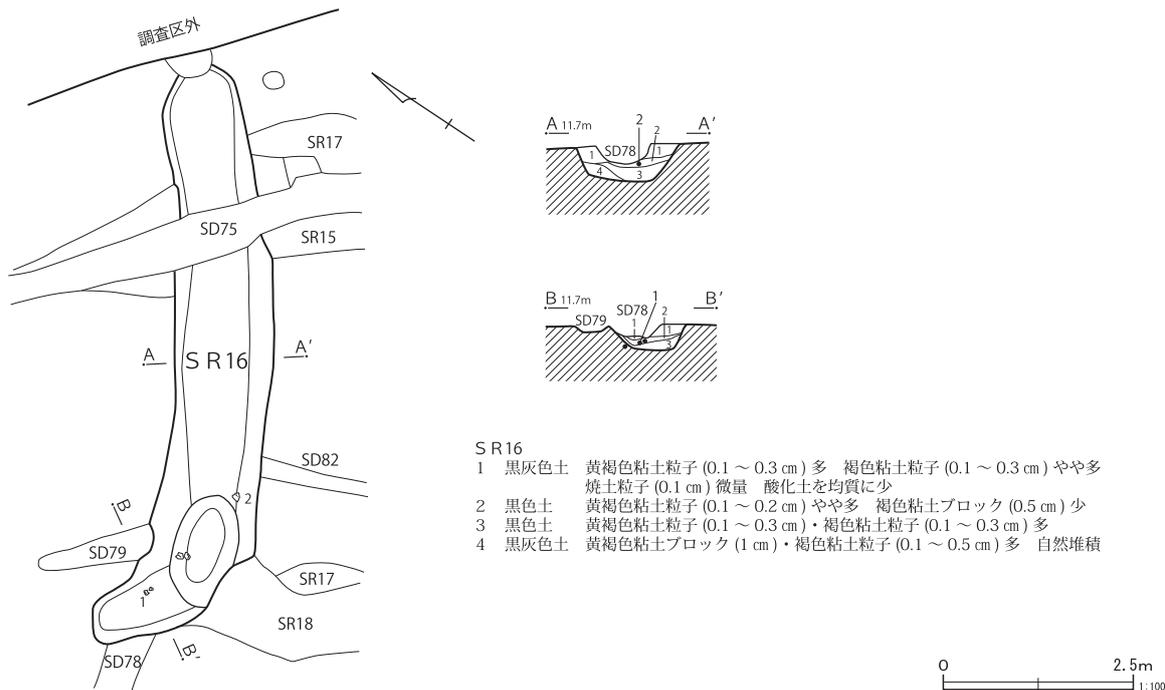
第17号周溝状遺構（第63・64図）

H-10・11グリッドに位置する。歪んだ周溝が「コ」の字状に検出された。第18号周溝状遺構より新しく、第15号周溝状遺構、第80号溝跡より古い。第16・19・31号周溝状遺構との新旧関係は捉えられなかった。

北溝は確認できなかった。この部分は、開口し



第60図 第15号周溝状遺構



第61図 第16号周溝状遺構



第62図 第15・16号周溝状遺構出土遺物

第14表 第15・16号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR15	C	土師器	壺	60		6.0	[3.5]	A C F	普通	浅黄橙	No.2 器面風化著しい
2	SR15	C	土師器	小型台付甗	75		(5.0)	[4.0]	F G	普通	にぶい橙	No.1 内外面ヘラナデか 器面風化著しい
3	SR16	C	土師器	壺	30	(8.4)		[3.5]	A C F G	普通	灰白	No.1 内外面ヘラ磨きか 器面風化著しい
4	SR16	C	土師器	台付甗	80		(7.7)	[5.4]	E	普通	明赤褐	No.5 器面風化著しい

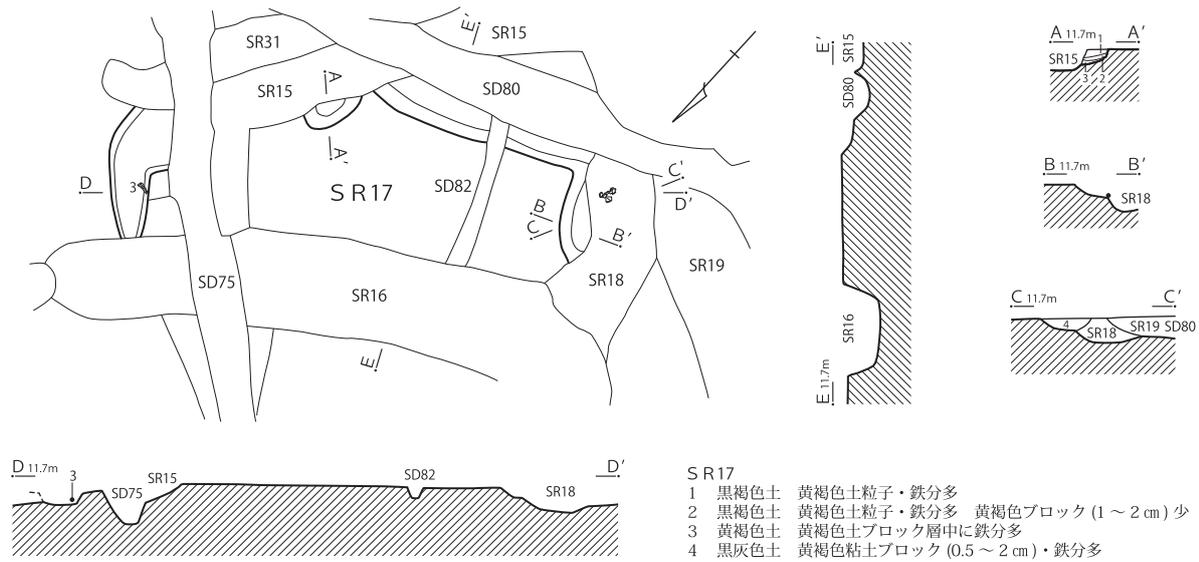
ている可能性と、第16号周溝状遺構との重複により失われている可能性とが考えられるが、特定するには至らなかった。周溝は歪んでいるが直線に近く、全体の平面形は概ね「コ」の字状である。

遺構の規模は、北東-南西方向の内法は5.35mであるが、外法・主軸方位・上場幅・下場幅など

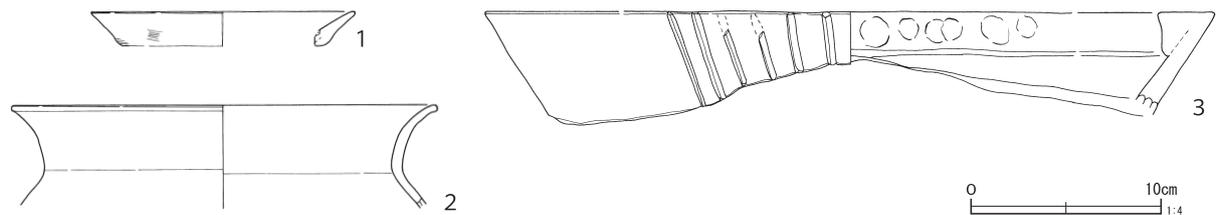
の法量は得られなかった。なお、周溝の深さは15~20cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は皿状である。

実測できた土師器は、壺2点・甗の計3点(1~3)である。3は、口縁部内面の成形から



第63図 第17号周溝状遺構



第64図 第17号周溝状遺構出土遺物

第15表 第17号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR17	C	土師器	壺	20	(13.8)		[1.8]	A C	普通	橙	H-11G 器面風化著しい 内面黒斑あり
2	SR17	C	土師器	甕	20	(22.2)		[5.5]	A C F	普通	にぶい 橙	H-10G 内外面風化著しく調整不明瞭
3	SR17	C	土師器	壺	15	(38.2)		[5.5]	A D G	普通	灰黄	No.2 突帯6本単位か 口縁部内面指頭圧痕あり 器面風化著しい 胎土粒子粗い

大廓式の特徴をもつものと判断した。

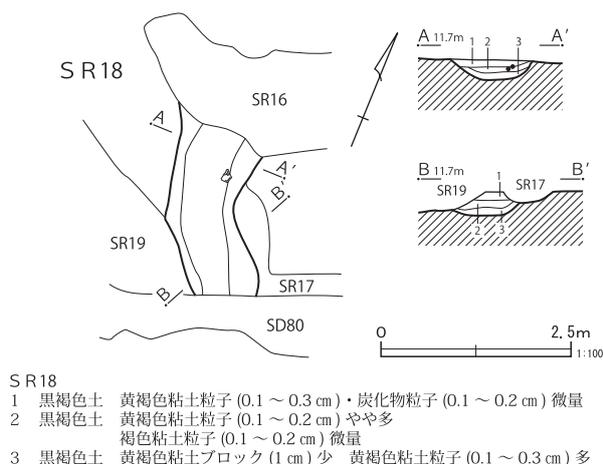
第18号周溝状遺構 (第65図)

H-10・11グリッドに位置する。周溝の平面形と方位からみて、西溝と推定される。検出範囲は極めて小規模である。第17・19号周溝状遺構、第80号溝跡よりも古いが、第15・16号周溝状遺構との新旧関係は不明である。

平面形については円形、もしくは楕円形と推測される。

検出できた規模は、直線距離で2.50m、上場幅は0.89~1.10m、下場幅は0.55~0.60m、深さは28~31cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。



第65図 第18号周溝状遺構

遺物は出土しなかった。

第19号周溝状遺構 (第66~69図)

H・I-10・11グリッドに位置する。ほぼ直線の周溝がL字状に検出された。第15・18号周溝状遺構より新しく、第15号掘立柱建物跡、第77・78・80号溝跡、第3号性格不明遺構より古い。その他の遺構との新旧関係は捉えられなかった。

部分的な検出であるため確定はできないが、平面形は方形、もしくは長方形と推定される。周溝が途切れているのか、開口しているかについても不明であるが、前者の可能性が高いと思われる。

遺構の規模は、南北方向の外法は11.30m、内法は10.05m、東西方向の外法は12.05m、内法は10.57mまでの確認である。主軸方位はN-28°-E、またはN-62°-Wと推定される。周溝の規模は上場幅0.95~1.46m、下場幅0.70~1.15m、深さ25~39cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形、もしくは箱形に近い。

南端部近くとコーナー付近の周溝内から、土師器の破片が比較的まとまった状態で出土した。図化できた遺物は、土師器の罎・壺・高坏・台付甕

など計35点(1~35)である。

第21号周溝状遺構 (第70・71図)

J-9・10グリッドに位置する。ほぼ直線の周溝がL字状に検出された。西側部分については調査区外に続いている。第2号住居跡、第22・25号周溝状遺構、第83・98号溝跡、第30号土壇、第42号井戸跡より新しく、第13・14号掘立柱建物跡、第3・4号柵列跡より古い。その他の遺構との新旧関係は捉えられなかった。

部分的な検出であるため確定はできないが、平面形は方形、もしくは長方形と推定される。東側部分については、周溝が途切れているのか、開口しているかについても不明であるが、前者の可能性のほうが高いと思われる。

検出できた周溝の規模は、直線距離で11.50m、上場幅1.25~1.70m、下場幅1.00~1.30m、深さ20~22cmである。主軸方位については不明である。

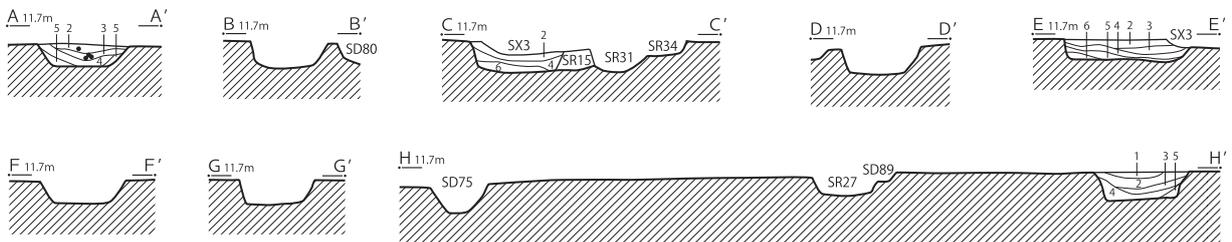
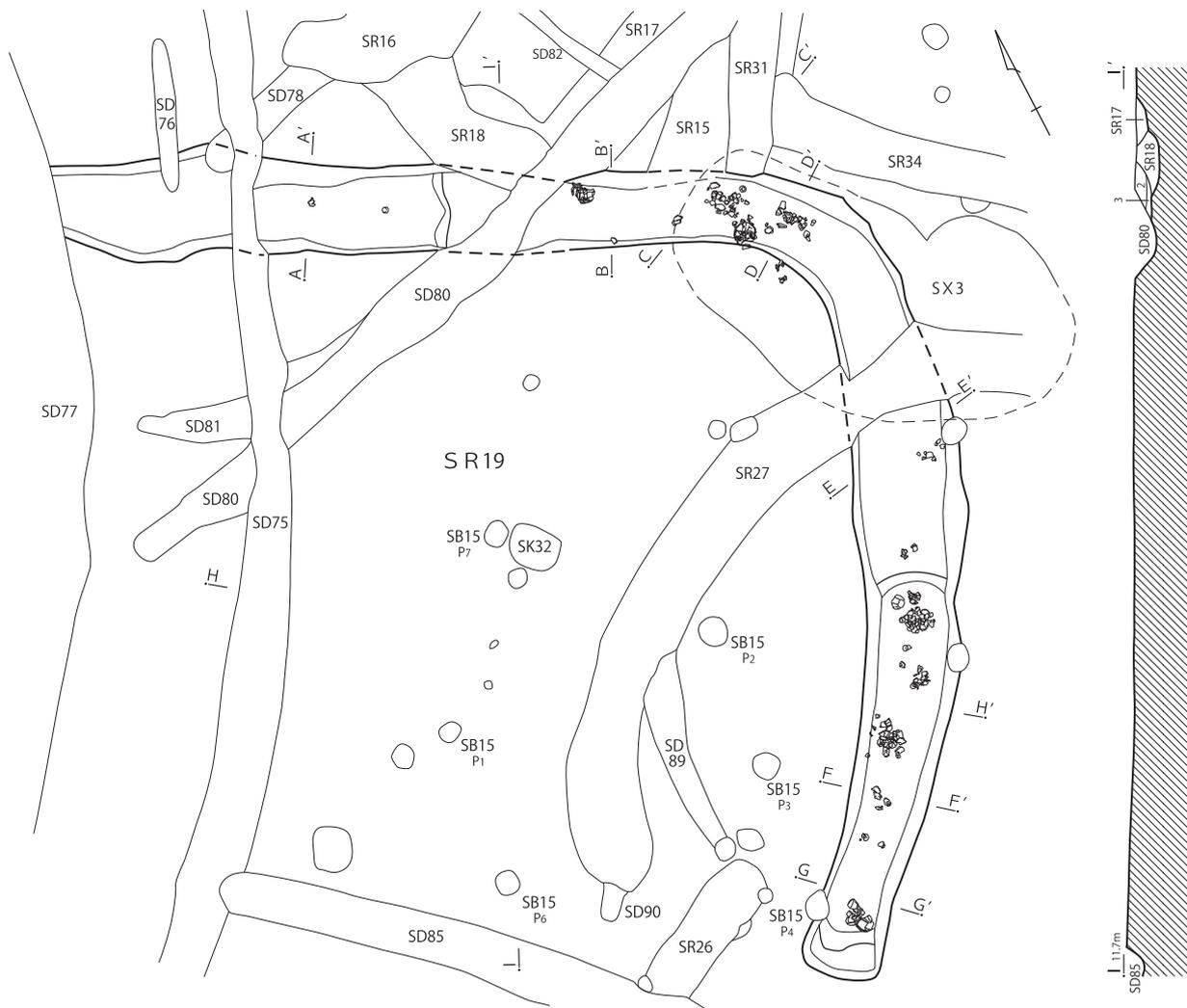
周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は皿状に近い。土層断面にみる第4・5層は自然堆積、第1・3層も自然堆積と推定される。第2層は斑状に分布する黄褐色粘土ブロックの存在から埋め戻しと考えられる。

本遺構の西側部分の落ち込みは周溝に沿うように位置していることから、溝内土壇の可能性が考えられる。この落ち込み部分は調査区外に続いたため、長さについては3.65mまでの確認である。幅は1.22~1.66m、確認面からの深さは36cm、周溝底面との比高差は20cm程である。

図化できた遺物は手捏ね土器の破片1点(1)である。

第22号周溝状遺構 (第72図)

J-10グリッドに位置する。周溝の平面形と方位からみて、北溝と推定される。検出範囲は極めて小規模である。第3号住居跡より新しく、第21号周溝状遺構、第4号柵列跡、第84・85号溝跡より古い。その他の遺構との新旧関係は不明である。

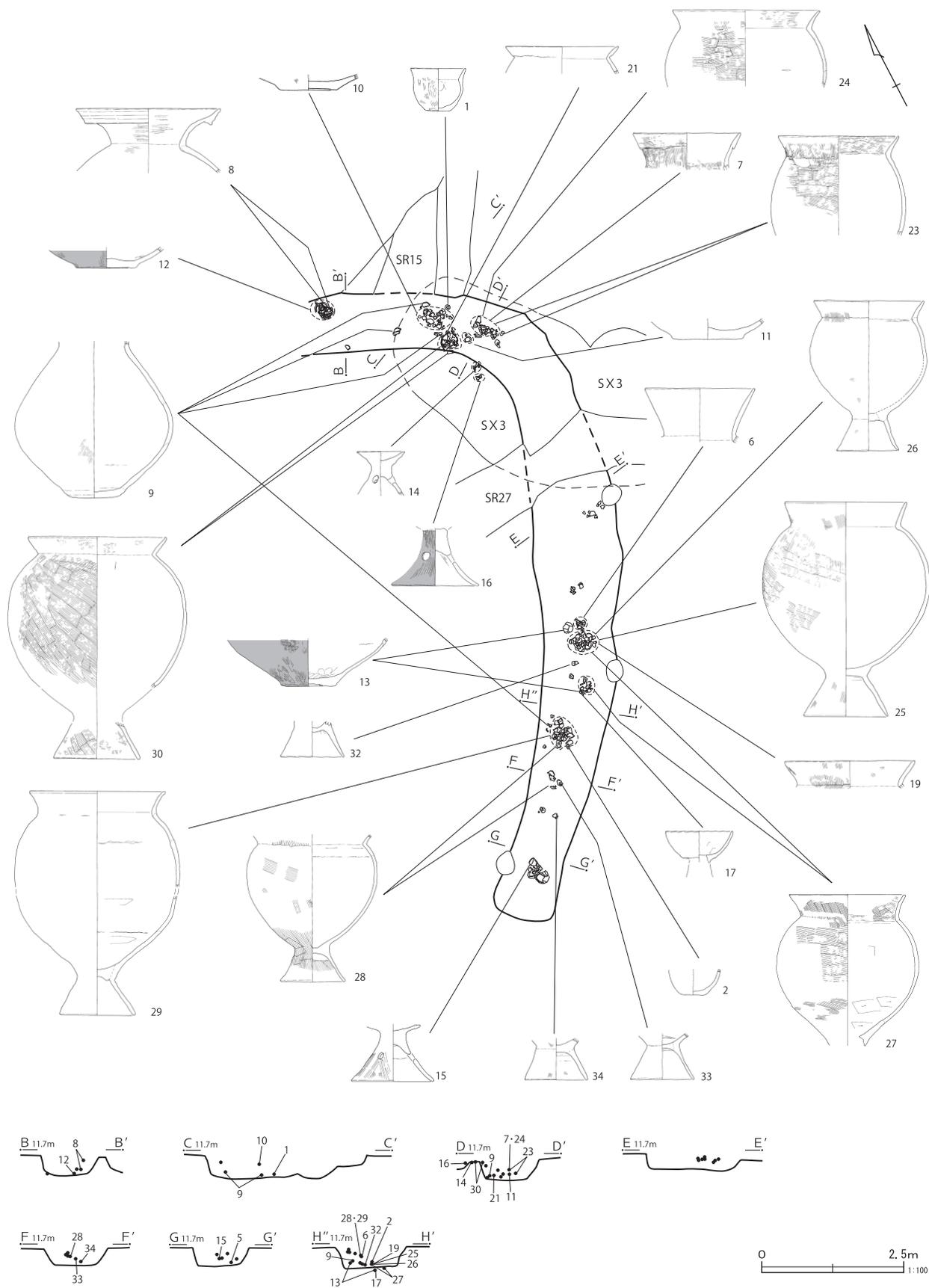


SR19

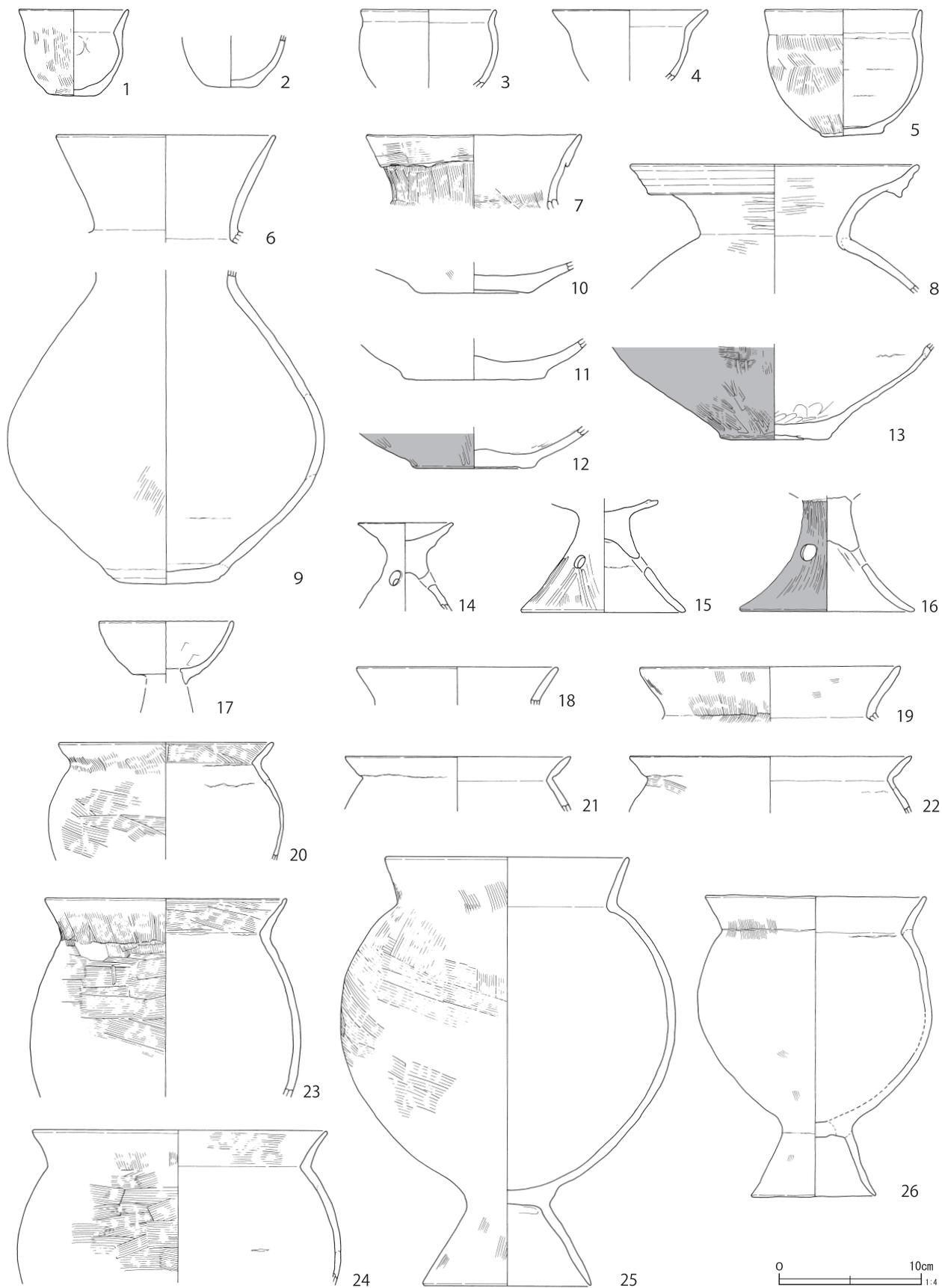
- 1 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) ・褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 多 焼土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 微量
- 2 黒灰色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) やや多 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 微量
- 3 黒灰色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少
- 4 黒灰色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) 多 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少
- 5 黒灰色土 黄褐色粘土ブロック (1 ~ 2 cm) 多 崩落土
- 6 黄褐色土 黄褐色土ブロック層に黒褐色土ブロック少



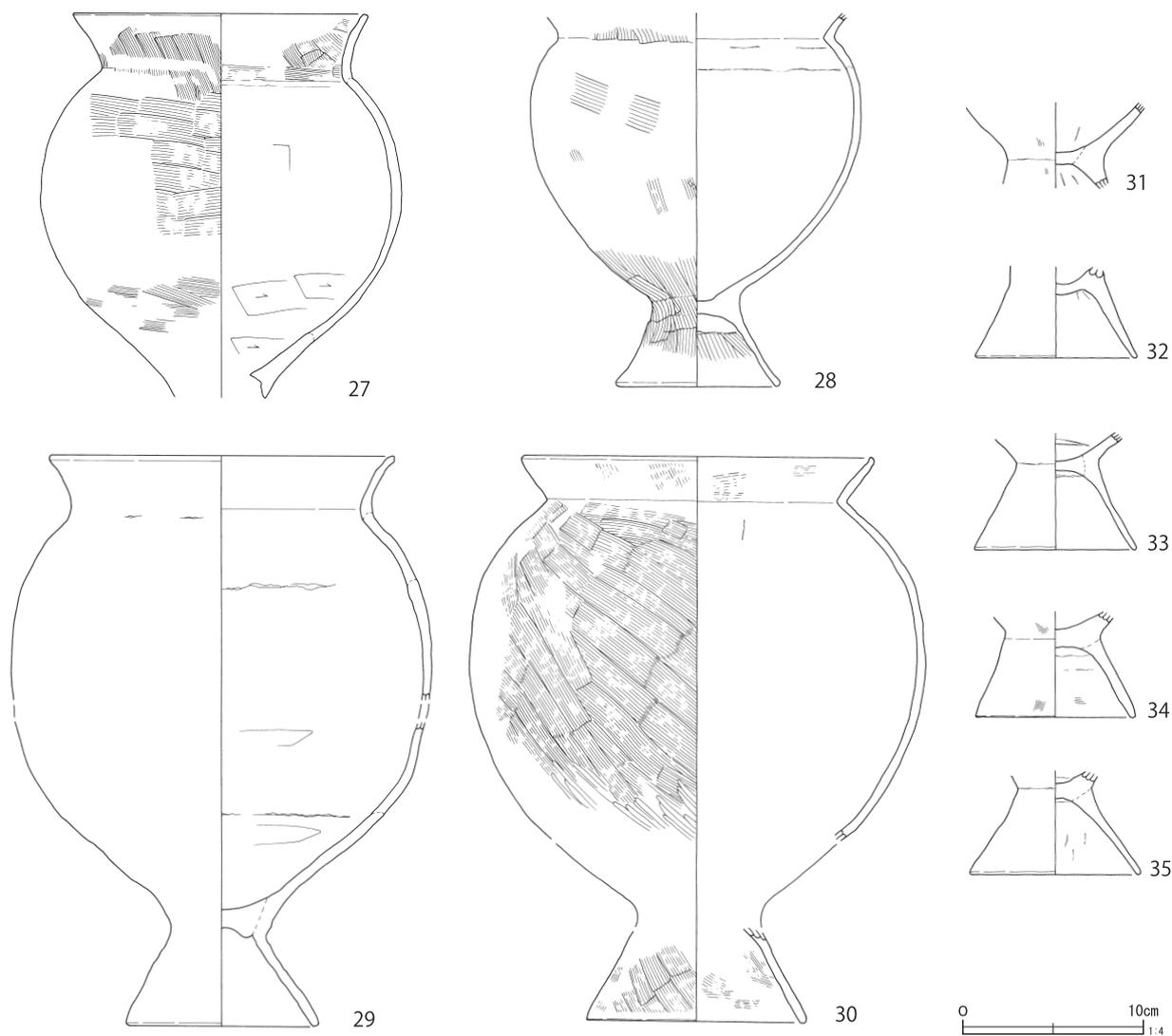
第66図 第19号周溝状遺構



第67图 第19号周溝状遺構遺物出土狀況



第68图 第19号周溝状遺構出土遺物 (1)



第69図 第19号周溝状遺構出土遺物（2）

第16表 第19号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR19	C	土師器	罎	100	7.6	3.2	6.0	A C F	普通	にぶい 橙	No.55 口縁部内外面横ナデ 内面頸部指頭 圧痕 器面風化著しい 外面に大黒斑
2	SR19	C	土師器	罎	65		3.4	[3.6]	A C G	普通	褐灰	No.22 被熱か 内面ナデか 器面風化著 しく調整痕はみえない
3	SR19	C	土師器	埴	20	(9.4)		[5.5]	A C F G	普通	にぶい 橙	I-11G 風化著しく調整不明瞭
4	SR19	C	土師器	罎	20	10.9		5.0	A C D G	普通	明褐	I-11G 器面風化著しく調整不明
5	SR19	C	土師器	小型甗	60	10.9	4.4	8.9	A C D F	普通	にぶい 橙	口縁部内外面横ナデ 内外面に黒斑 外面 は被熱による赤色化が顕著 SX3のNo.7と 接合
6	SR19	C	土師器	壺	60	(15.4)		[7.6]	C F	普通	浅黄橙	No.30 器面風化著しく調整不明
7	SR19	C	土師器	壺	40	(15.0)		[5.2]	A C D F G	普通	橙	No.42 内側全面ハケか 器面風化著しい
8	SR19	C	土師器	壺	55	20.2		[9.1]	A B C D F G	普通	にぶい 黄橙	No.6・13 口縁部内外面横ナデ 器面風化 著しく調整不明瞭

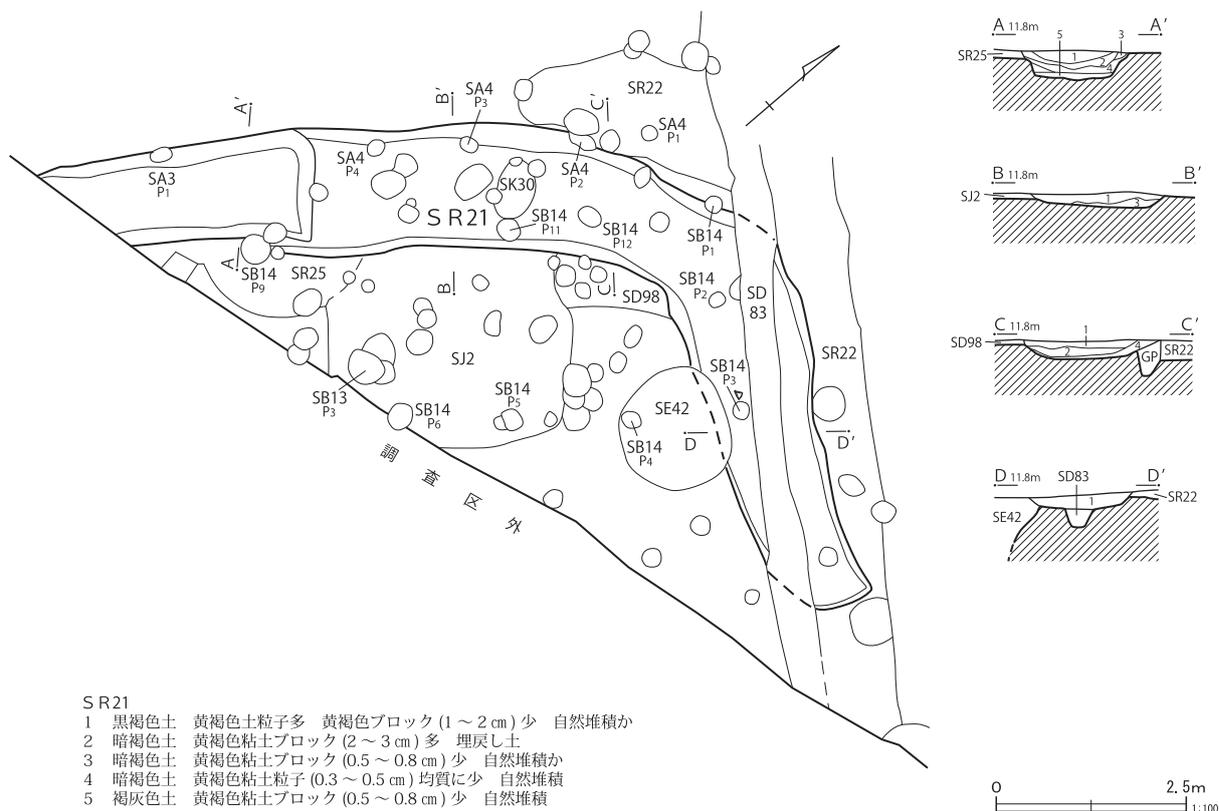
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
9	SR19	C	土師器	壺	10		7.6	[22.1]	C F G	不良	にぶい 橙	No.3・23・52・54 器面風化著しい
10	SR19	C	土師器	壺	40		(8.2)	[2.2]	A C	普通	浅黄橙	No.51 器面風化著しい
11	SR19	C	土師器	甕	50		10.0	[2.9]	A C F G	普通	にぶい 橙	No.44 器面風化著しい
12	SR19	C	土師器	壺	40		(8.7)	[2.9]	A G	普通	明黄褐	No.14 外面赤彩 器面風化著しい
13	SR19	C	土師器	壺	60		7.6	[6.8]	A B C F G	普通	にぶい 黄橙	No.27・29 外面赤彩 器面風化著しい
14	SR19	C	土師器	器台	70	6.6		[6.2]	A C F G	普通	橙	No.38 器面風化著しく調整不明
15	SR19	C	土師器	高坏	70		11.2	[7.9]	C D F G	普通	にぶい 橙	No.12 穿孔3ヶ所(外側からの穿孔) 器面風化著しい
16	SR19	C	土師器	高坏	40		(12.0)	[8.2]	A C G	普通	赤褐	No.37 外面赤彩 内面赤彩か
17	SR19	C	土師器	高坏	95	9.3		[4.4]	A C F G	普通	にぶい 橙	No.27 器面風化著しい
18	SR19	C	土師器	甕	15	(14.0)		[2.8]	C E F G	不良	にぶい 黄橙	器面風化著しい
19	SR19	C	土師器	甕	20	(18.2)		[3.8]	A C D F	普通	にぶい 黄橙	No.32 口縁部内外面横ナデ 器面風化著しい
20	SR19	C	土師器	甕	40	(15.0)		[8.2]	A C D G	普通	灰褐	No.19 内面横ナデ
21	SR19	C	土師器	甕	20	(15.9)		[3.9]	A C F G	普通	にぶい 橙	No.47 口縁部内外面横ナデ 器面風化著しい
22	SR19	C	土師器	甕	5	(20.0)		[4.0]	A C	普通	橙	口縁部内外面横ナデ 器面風化著しい
23	SR19	C	土師器	甕	40	(17.0)		[14.0]	A C F G	普通	にぶい 橙	No.40・42
24	SR19	C	土師器	甕	15	(20.6)		[10.8]	A C	普通	にぶい 橙	No.42 口縁部内面ハケにて横ナデ 器面は風化
25	SR19	C	土師器	台付甕	50	(17.0)	11.8	30.3	C	普通	にぶい 黄褐	No.32 口縁部内外面横ナデか 上端指頭圧痕あり 器面風化著しい 外面煤付着
26	SR19	C	土師器	台付甕	60	(15.3)	(8.6)	21.4	C D F G	不良	浅黄	No.32 口縁部内外面横ナデ 器形に歪みあり 器面風化著しく調整不明瞭
27	SR19	C	土師器	台付甕	55	16.0		[20.3]	A D F	普通	灰黄褐	No.28・32 I-11G
28	SR19	C	土師器	台付甕	20		(8.7)	[20.7]	A C D G	普通	橙	No.17・21 I-11G 口縁部内外面横ナデ 外面・肩部・脚部被熱により赤色化 一部煤付着
29	SR19	C	土師器	台付甕	35	(18.8)	(10.1)	[31.9]	C D F G	普通	にぶい 橙	No.21 器面風化著しい 胴部外面に黒斑あり 胴部外面下位被熱により赤色化
30	SR19	C	土師器	台付甕	40	(19.2)		[31.4]	A C F	普通	にぶい 黄橙	No.45・49 口縁部内外面横ナデ 器面風化している 内外面に黒斑あり
31	SR19	C	土師器	台付甕	60			[4.7]	C G	普通	橙	器面風化著しい
32	SR19	C	土師器	台付甕	95		8.7	[5.1]	C D F G	普通	橙	No.26
33	SR19	C	土師器	台付甕	60		(9.0)	[6.5]	C D F G	普通	にぶい 黄橙	No.18 器面風化著しく調整不明 内外面被熱のため一部赤色化
34	SR19	C	土師器	台付甕	90		8.7	[5.9]	C D F G	普通	橙	No.15 端部内外面横ナデ 器面風化著しい
35	SR19	C	土師器	台付甕	35		(9.2)	[5.8]	A C F	普通	橙	内外面ヘラ磨きか 器面風化著しい

西端部が開口部であるか否かは不明であるが、可能性は高いと推測される。平面形については円形、もしくは楕円形と推測される。

検出できた規模は、直線距離で6.38m、上場幅は1.35m、下場幅は1.18m、深さは5～26cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

第1層内から、多量の土師器の小破片が出土したが、図化に至るものはなかった。



第70図 第21号周溝状遺構



第71図 第21号周溝状遺構出土遺物

第17表 第21号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR21	C	土師器	手捏ね	25	(5.6)		[2.0]	AG	普通	にぶい 橙	J-10G 外面に黒斑あり 器面風化している

第23号周溝状遺構 (第73・74図)

I-9・10グリッドに位置する。周溝の平面形と方位からみて、西溝と推定される。検出範囲は極めて小規模である。第24号周溝状遺構より古く、第84号溝跡については、本遺構の方が新しいと推定される。その他の遺構との新旧関係は不明である。

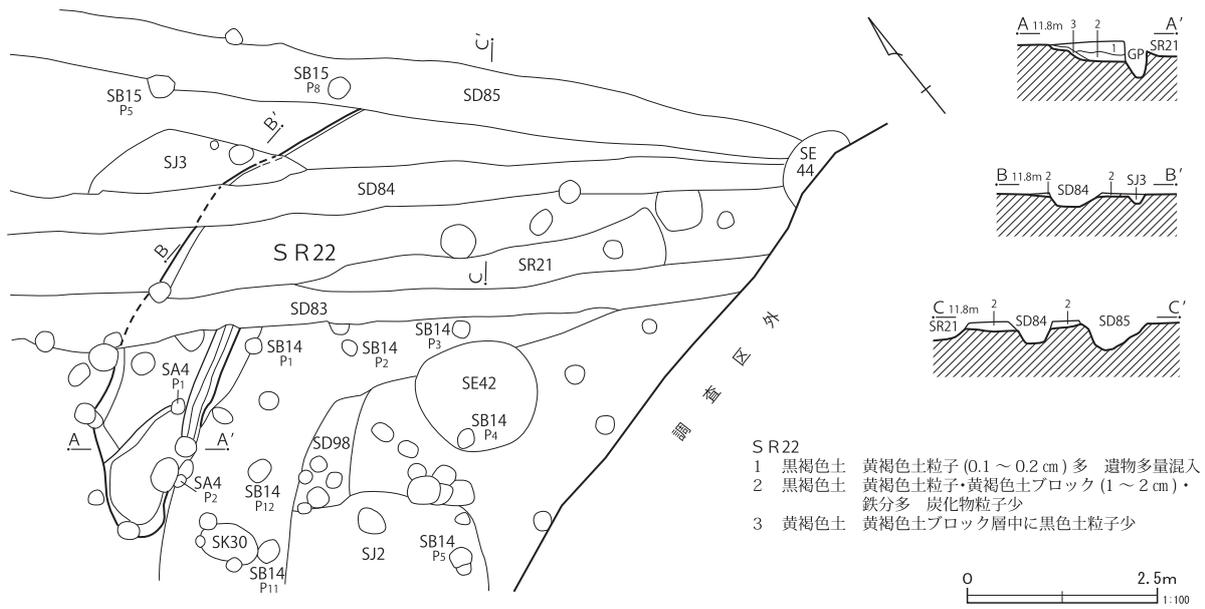
南端部が開口部であるか否かについては不明であるが、可能性は高いと考えられる。平面形・主

軸方位については不明である。

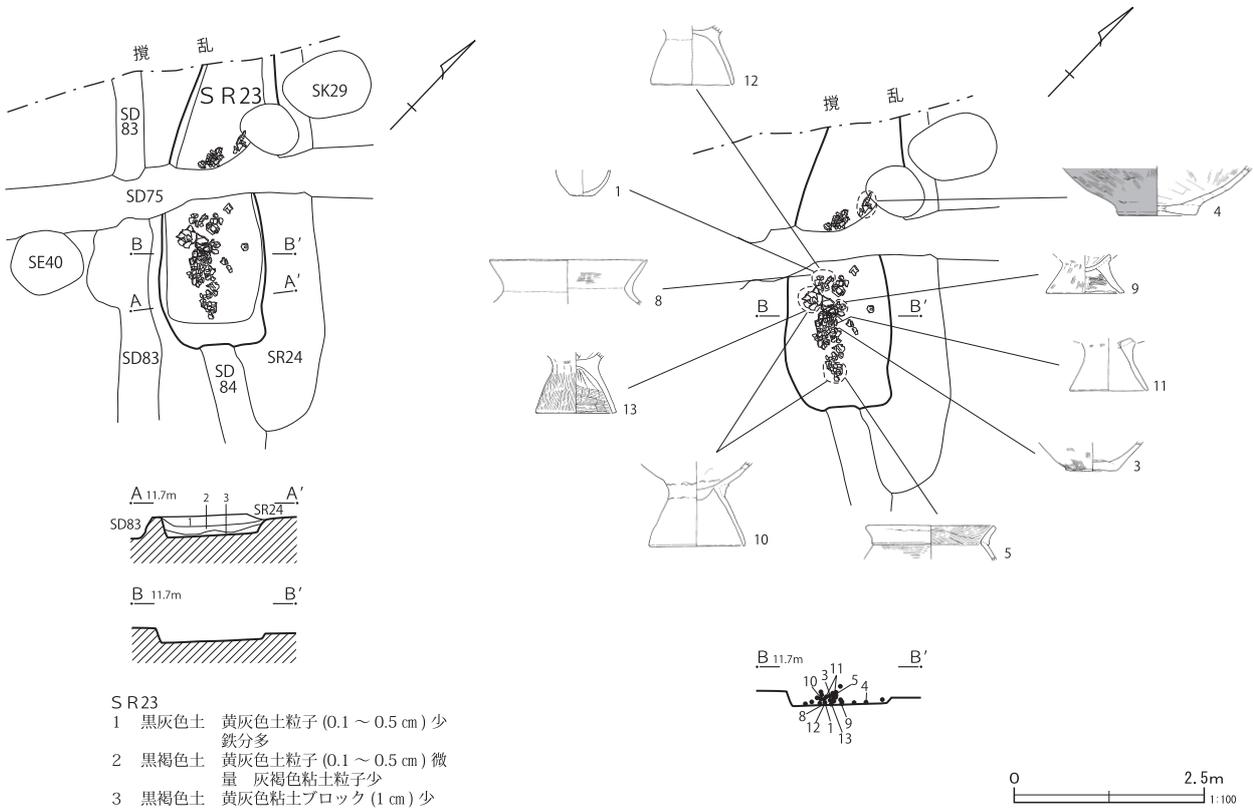
規模は上場幅0.95~1.42m、下場幅0.70~1.25m、深さ26~36cmであるが、長さについては3.80mまでの検出にとどまる。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形である。

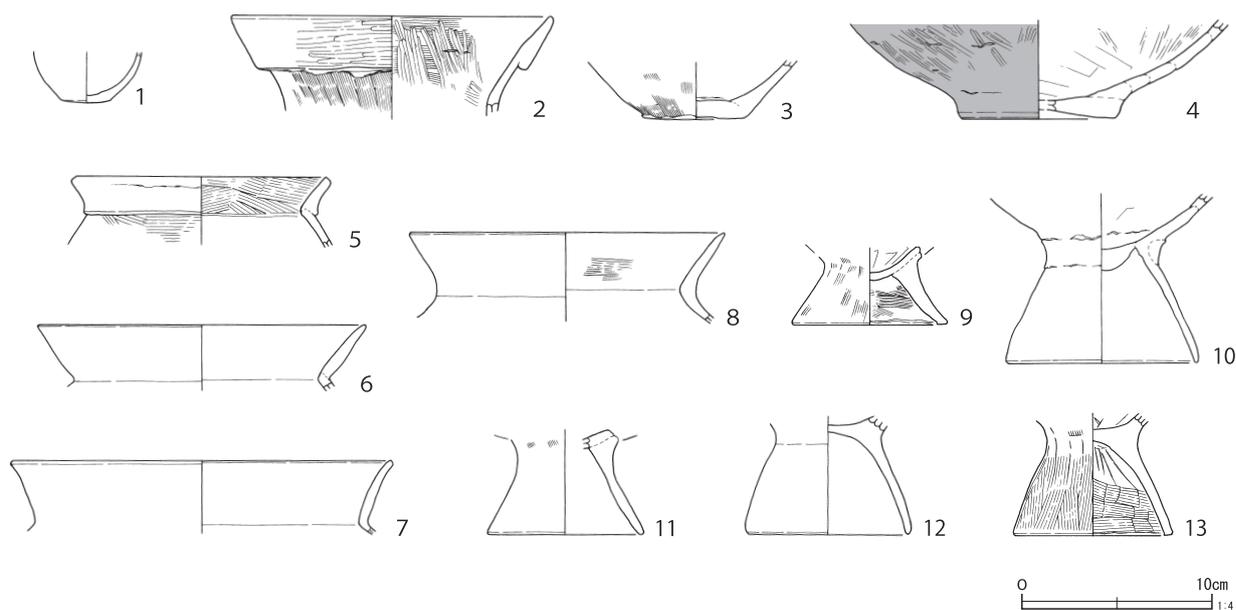
図化できた遺物は、土師器の壺・台付甕など計13点(1~13)である。



第72図 第22号周溝状遺構



第73図 第23号周溝状遺構・遺物出土状況



第74図 第23号周溝状遺構出土遺物

第18表 第23号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR23	C	土師器 埴	45		2.5	[2.7]	A C D F	普通	にぶい黄橙	No.15 器面風化著しい 内外面ともナデカ
2	SR23	C	土師器 壺	40	(16.8)		5.3	A C D F G	普通	にぶい橙	I-9G
3	SR23	C	土師器 壺	70		5.5	[3.1]	C D F I	普通	にぶい黄橙	No.17 外面に黒斑あり 器面風化している
4	SR23	C	土師器 壺	40		(8.0)	[5.2]	A B C D F G	普通	にぶい黄橙	No.18 外面赤彩
5	SR23	C	土師器 甕	25	(13.3)		[3.7]	A D F	普通	にぶい黄橙	No.1
6	SR23	C	土師器 甕	20	(17.4)		[3.5]	A C F	普通	橙	I-10G 口縁部内外面横ナデ 器面風化著しい
7	SR23	C	土師器 甕	20	(20.0)		[3.9]	A C	普通	にぶい橙	No.16
8	SR23	C	土師器 甕	25	(16.6)		[4.7]	C D F G	普通	にぶい黄橙	No.15 口縁部内外面横ナデ 器面風化著しい
9	SR23	C	土師器 台付甕	100		8.0	[4.0]	A B C D F G	普通	灰黄褐	No.21
10	SR23	C	土師器 台付甕	50		(10.0)	[8.9]	A C G	普通	にぶい橙	No.1・26・29 器面風化著しい
11	SR23	C	土師器 台付甕	20		(8.2)	[5.5]	A C D F	普通	橙	No.22・23 器面風化著しい
12	SR23	C	土師器 台付甕	65		(8.5)	[6.2]	C D	普通	にぶい橙	No.15 I-10G 内外面ヘラナデカ 内外面摩滅・風化著しい
13	SR23	C	土師器 台付甕	65		8.3	[6.4]	C D E F	普通	にぶい橙	No.36

第24号周溝状遺構 (第75図)

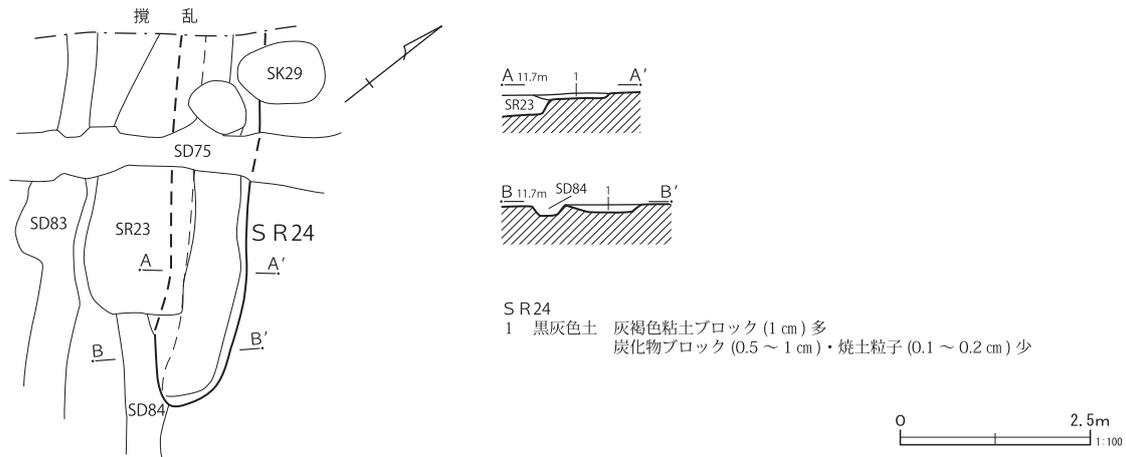
I-10グリッドに位置する。北側は土取りによる攪乱を受けており、検出範囲は極めて小規模である。第23号周溝状遺構より新しいが、その他の遺構との新旧関係は不明である。

南端部が開口部であるか否かについては不明で

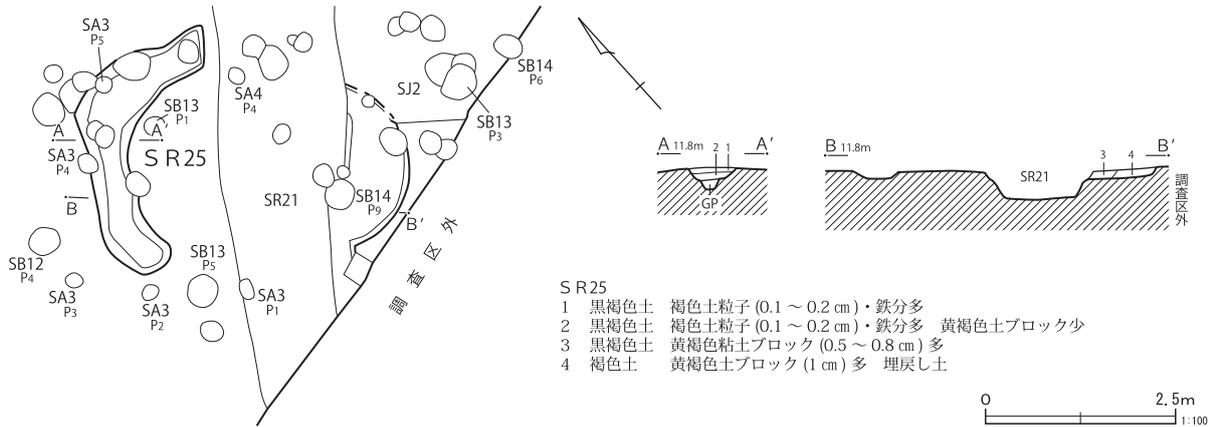
あるが、可能性は高いと推測される。平面形・主軸方位については不明である。

検出できた規模は、直線距離で4.92m、上場幅は0.97~1.00m、下場幅は0.61~0.70m、深さは8~10cmである。

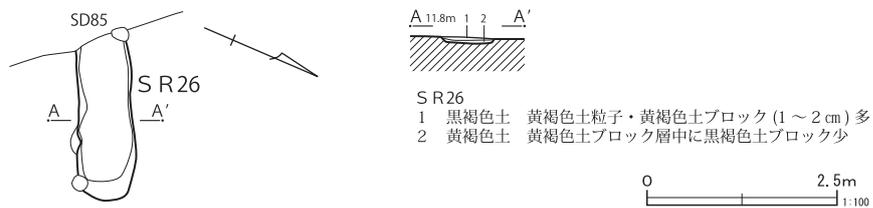
周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上が



第75図 第24号周溝状遺構



第76図 第25号周溝状遺構



第77図 第26号周溝状遺構

りは緩やかで、断面形は皿状である。

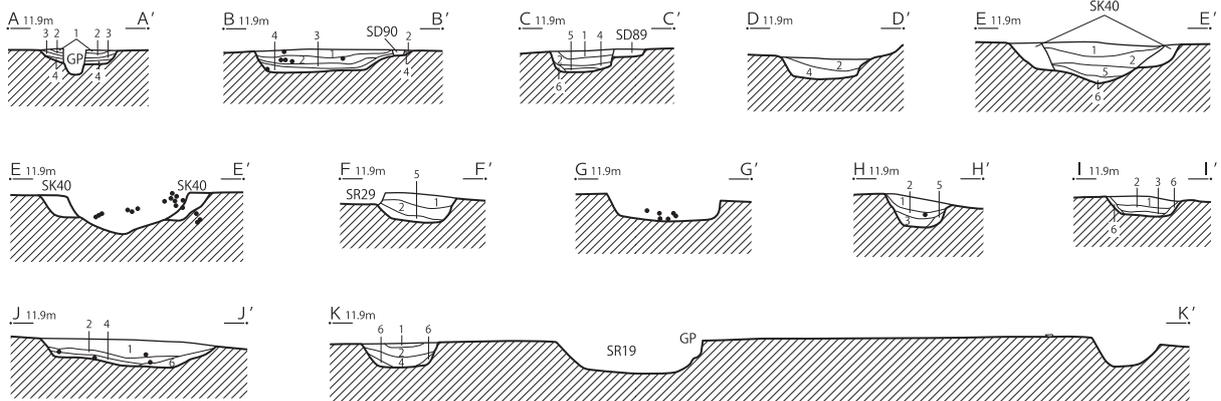
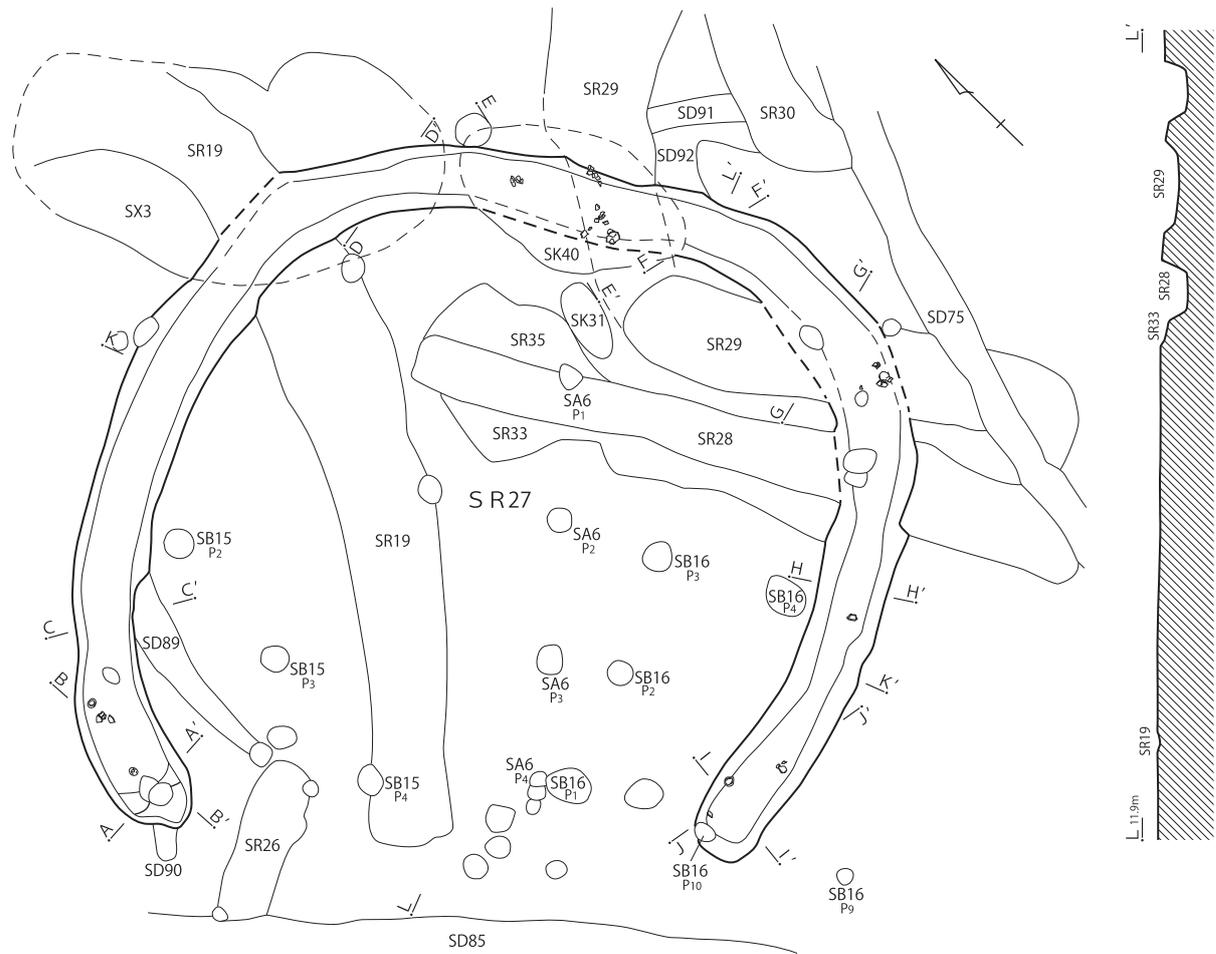
遺物は出土しなかった。

第25号周溝状遺構 (第76図)

J-9・10グリッドに位置する。第21号周溝状遺構、第13・14号掘立柱建物跡、第3号柵列跡よりも

古いが、その他の遺構との新旧関係は不明である。

北東部と南西部で周溝が途切れているが、前者については周溝が失われており、後者についてはその方位からみて、開口部の可能性が高い。平面形は円形である。

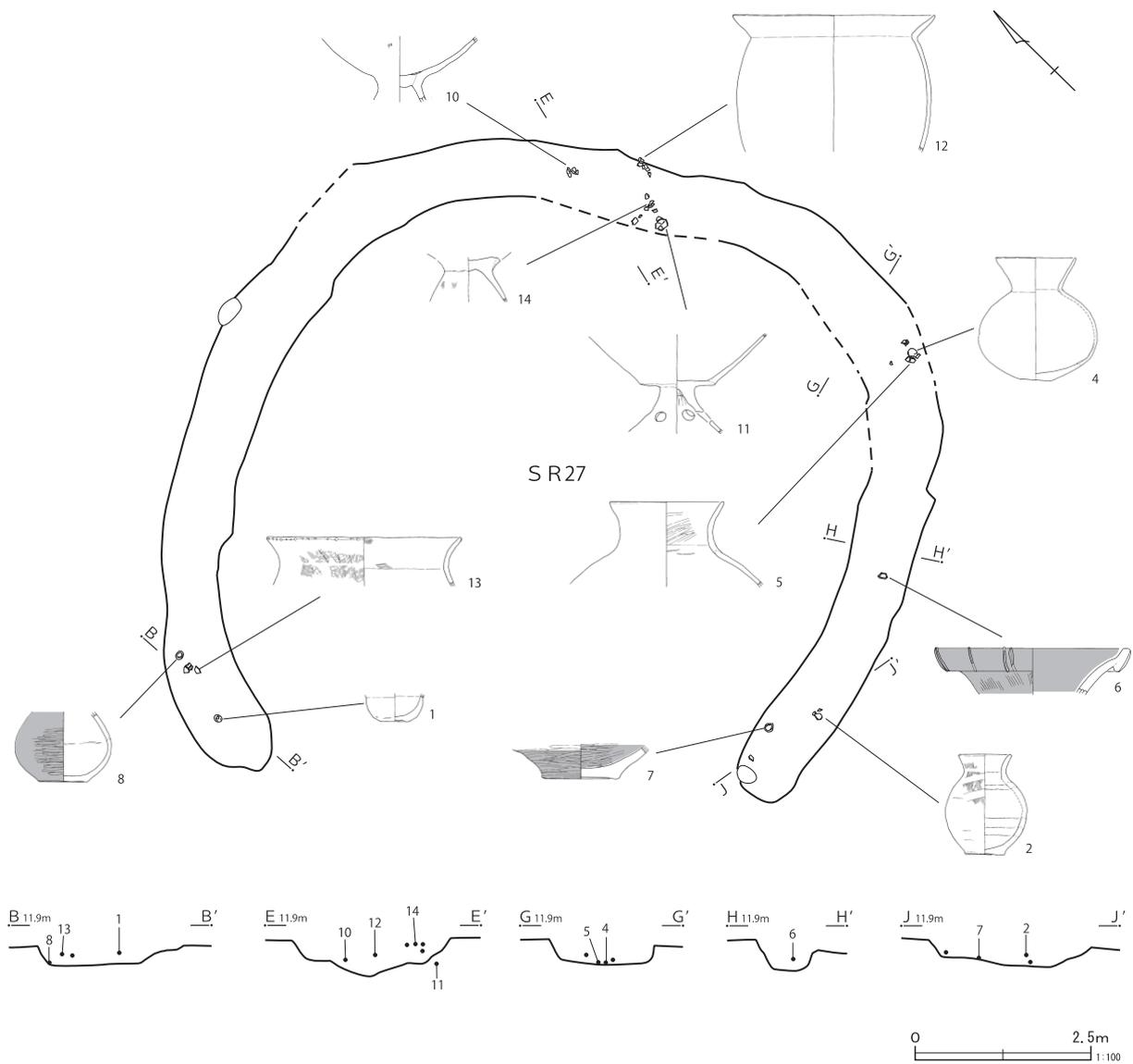


SR27

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・鉄分多 炭化物粒子少
- 2 黒褐色土 黒褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 微量
- 3 黄褐色土 黒褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少
- 4 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少
2層との境に部分的に炭化物が帯状に入る
- 5 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 極多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 多 鉄分少
最下面に炭化物が帯状に入る
- 6 黄褐色土 黄褐色土ブロック極多



第78図 第27号周溝状遺構



第79図 第27号周溝状遺構遺物出土状況

北西-南東方向の外法は4.45m、内法は不明、北東-南西方向については外法3.30m、内法2.60mと推測される。南西を開口部とすると主軸方位はN-48°-Eとなる。上場幅は0.53~0.80m、下場幅は0.25~0.55m、深さは10~18cmである。

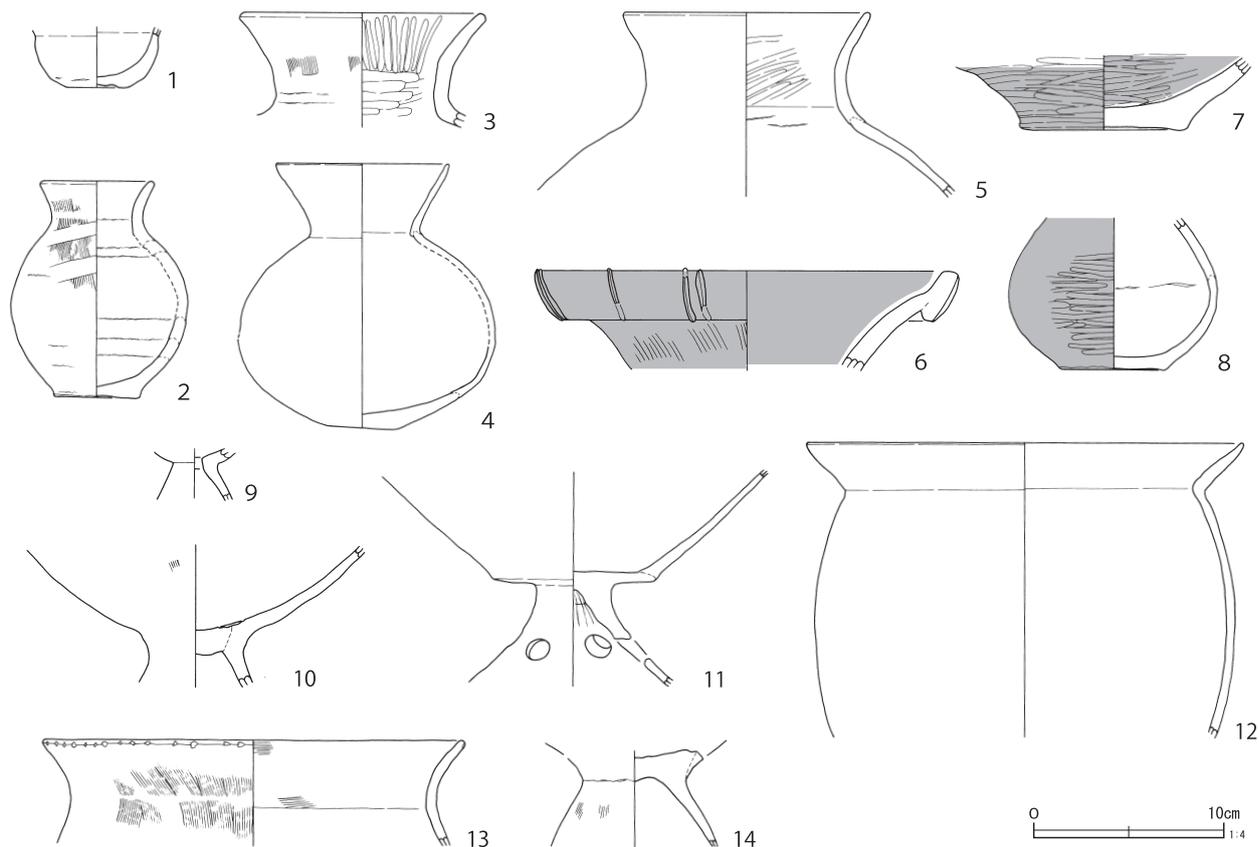
周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。土層断面にみられる第4層は、斑状に分布する黄褐色土ブロックが多く、埋め戻し土である。

遺物は出土しなかった。

第26号周溝状遺構 (第77図)

I-10グリッドに位置する。第15号掘立柱建物跡、第85号溝跡よりも古いと推定されるが、重複するピットとの新旧関係は不明である。

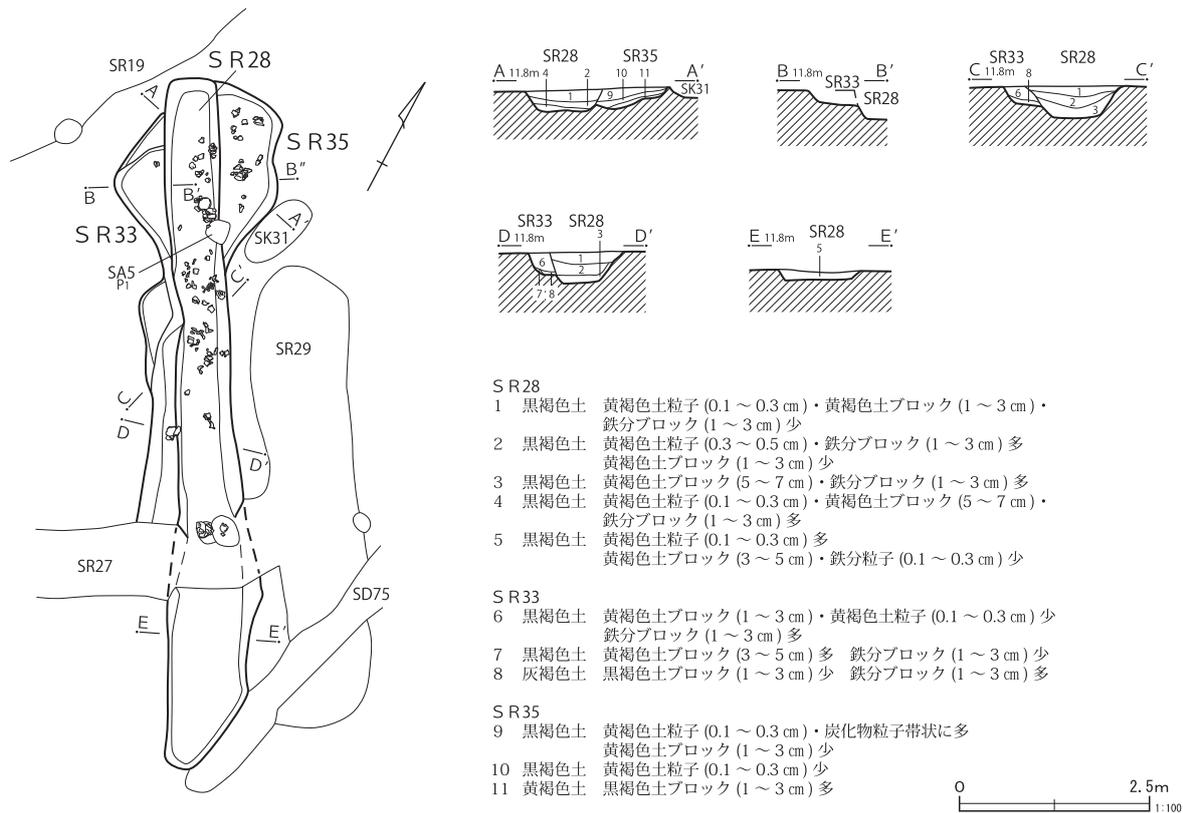
第85号溝跡の西側には本遺構の続きは確認されておらず、検出範囲は極めて小規模である。遺構の大部分が失われていること、北側であること、この2点から周溝の北端部が開口部の可能性は極めて低いと考えられる。平面形・主軸方位は不明である。



第80図 第27号周溝状遺構出土遺物

第19表 第27号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR27	C	土師器	罎	70		3.1	[3.2]	A C F	普通	にぶい黄橙	No.11 外面に大黒斑
2	SR27	C	土師器	小型壺	100	5.6	4.5	11.4	A C D F G	普通	淡黄	No. 3 口縁部内外面横ナデ
3	SR27	C	土師器	壺	20	(12.5)		[6.0]	A D F G	普通	にぶい黄橙	No.111 SX3 口縁端部内外面横ナデ
4	SR27	C	土師器	小型壺	95	9.0	3.6	13.9	A B C F G	普通	橙	No.10 器面は剥離著しく傷みも激しい為調整不明
5	SR27	C	土師器	壺	30	(12.8)		[9.7]	A C F G	普通	にぶい橙	No.11 口縁部上部内外面横ナデか 内外面風化著しく調整不明
6	SR27	C	土師器	壺	20	(22.2)		[5.2]	A E F	普通	にぶい赤褐	No.5 内外面赤彩 棒状浮文3本で1単位か 単位数不明 内面へう磨きか 器面風化著しい
7	SR27	C	土師器	壺	85		8.8	[3.9]	C	普通	浅黄橙	No.2 内外面赤彩・黒斑あり
8	SR27	C	土師器	小型壺	90		5.4	[8.0]	A D G	普通	にぶい黄橙	No.9 外面赤彩 器面風化著しい
9	SR27	C	土師器	器台	65			[2.7]	A C	普通	灰白	南東上層 J-11G 器面風化著しく調整不明
10	SR27	C	土師器	高坏	45			[7.4]	A C F	普通	橙	No.20 内外面風化著しく調整不明瞭
11	SR27	C	土師器	高坏	40			[11.3]	A C D F	不良	にぶい橙	No.14 SR29 脚部僅かな段違いの6孔あり(完全に残っている孔は2孔、外側からの穿孔) 器面風化著しく調整不明
12	SR27	C	土師器	甕	5	(22.8)		[15.7]	A C D F	不良	にぶい黄橙	No.19 SR27・29 口縁部内外面横ナデ 器面風化著しい
13	SR27	C	土師器	台付甕	15	(22.0)		[5.6]	A C F	普通	にぶい黄橙	No.8 口唇部刻み目あり 口縁部内外面横ナデ 内外面風化著しく調整不明
14	SR27	C	土師器	台付甕	60			[5.1]	A C D F G	普通	褐	No.17



第81図 第28・33・35号周溝状遺構

検出できた規模は、直線距離で2.17m、上場幅は0.70~0.80m、下場幅は0.55~0.65m、深さは10cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

遺物は出土しなかった。

第27号周溝状遺構 (第78~80図)

I-10・11、J-11グリッドに位置する。第40号土壇、第89号溝跡より新しく、第29号周溝状遺構、第15・16号掘立柱建物跡、第5号柵列跡、第90号溝跡、第3号性格不明遺構より古い。その他の重複する遺構との新旧関係は捉えられなかった。

平面形は円形で、南西部分が6.22mの規模で開口している。

遺構の規模は、北西-南東方向の外法は10.53m、内法は8.69m、北東-南西方向の外法は9.10m、内法は8.20m、主軸方位はN-55°-Eであ

る。上場幅は0.98~1.03m、下場幅は0.40~0.55m、深さは20~55cmである。

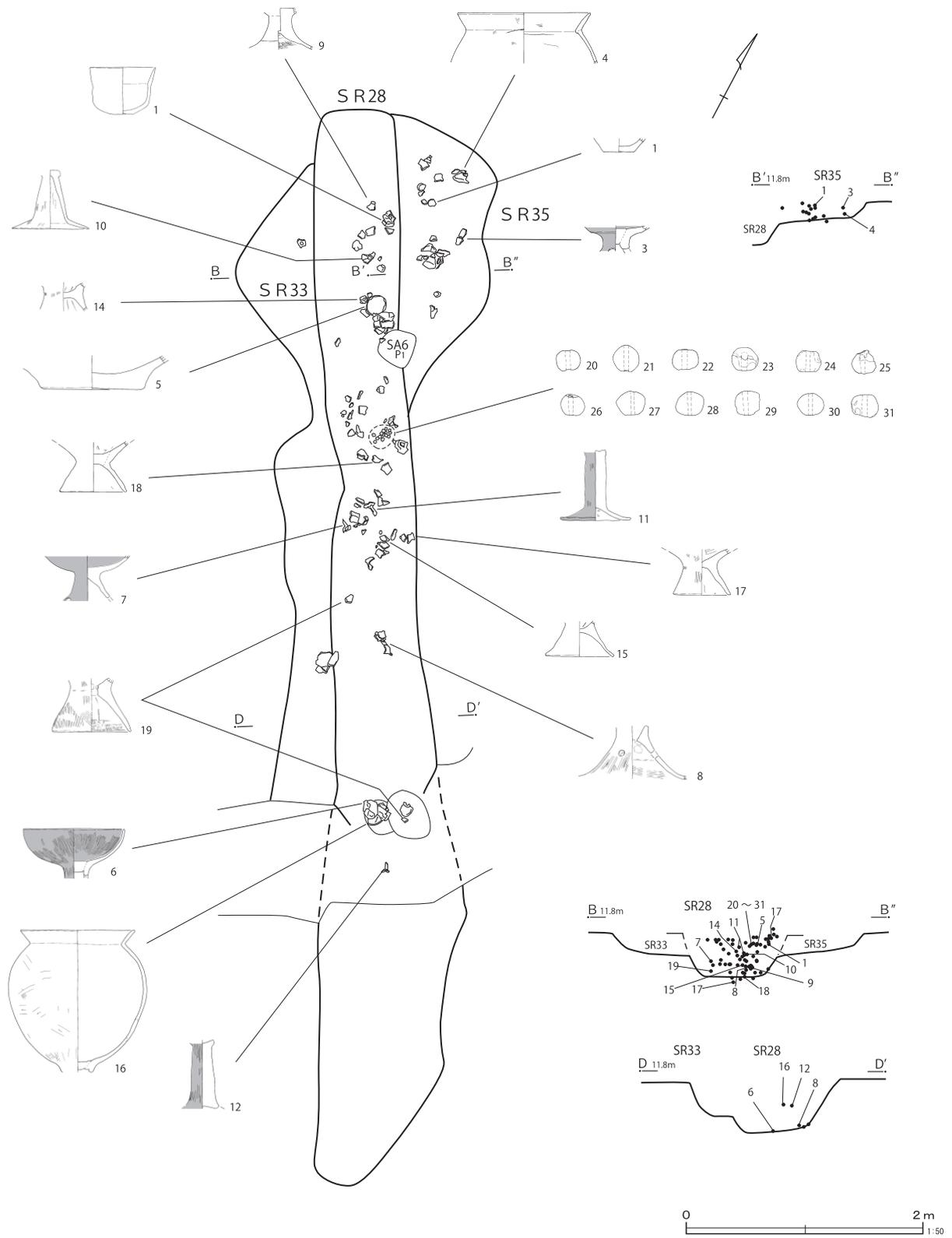
周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は逆台形、もしくは皿状である。

実測できた土師器は、壺・高坏・甕など計14点(1~14)である。

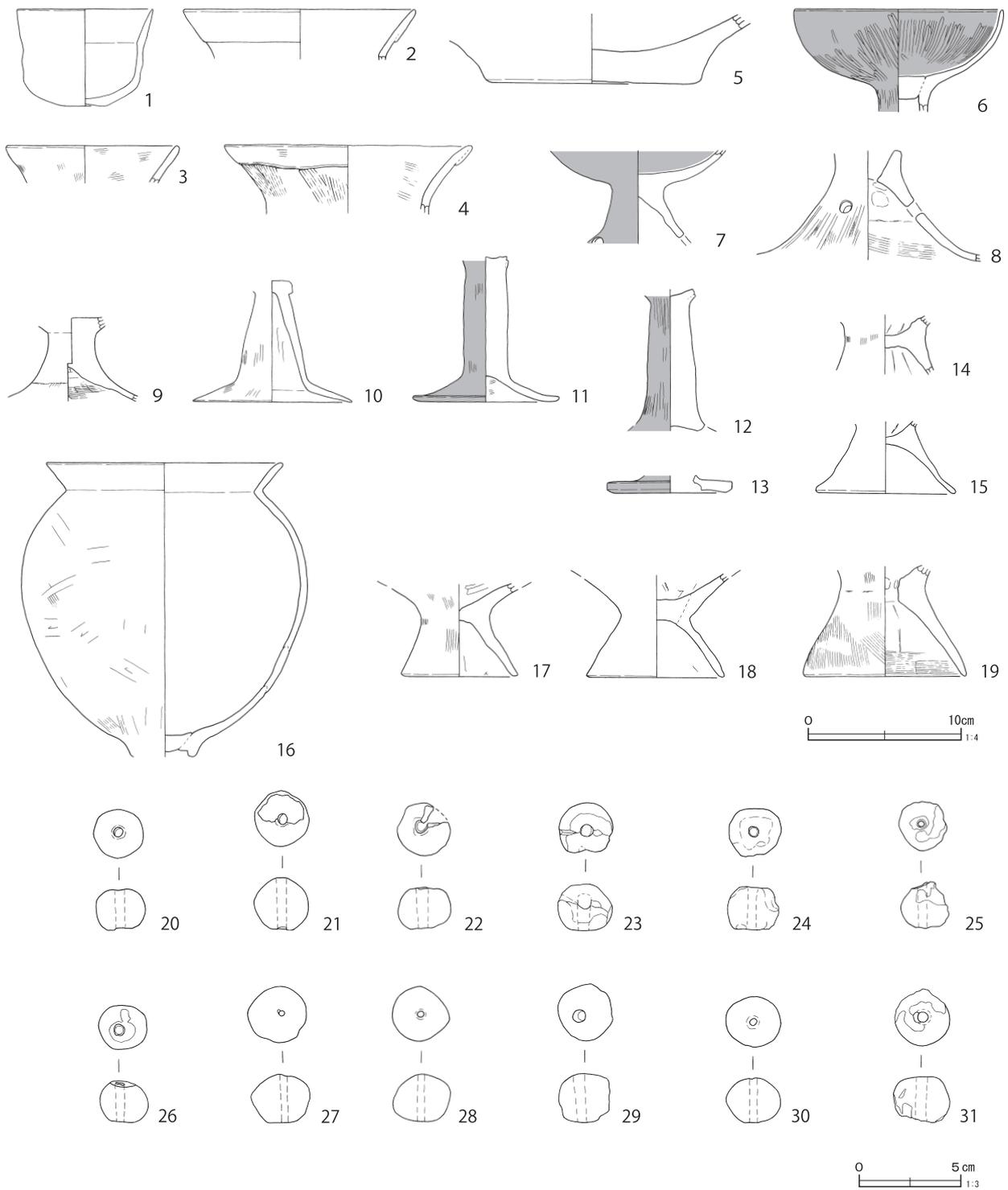
第28号周溝状遺構 (第81~83図)

I・J-11グリッドに位置する。第33・35号周溝状遺構より新しく、第5号柵列跡より古い。その他の重複遺構との新旧関係については不明である。

南北とも端部が閉じているが、周溝が失われているのか、あるいは開口しているかについては不明である。周溝が直線状であることから、平面形は方形、または長方形と推測される。主軸方位は不明であるが、この周溝自身の方位はN-27°-W



第82図 第28・35号周溝状遺構遺物出土状況



第83図 第28号周溝状遺構出土遺物

である。

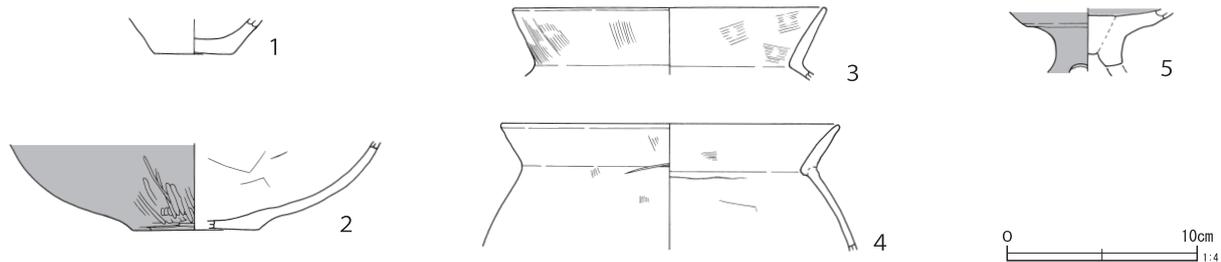
検出できた規模は、全長9.14m、上場幅は0.70～1.22m、下場幅は0.54～0.84m、深さは12～42cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりはやや急であり、断面形は逆台形、浅い部分では皿状である。

遺物は、周溝北半部に分布しており、土玉12点

第20表 第28号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR28	C	土師器	埴	60	(8.8)	3.0	6.4	C F G	普通	灰白	No.55 器面風化著しい 器形歪んでいる
2	SR28	C	土師器	甕	15	(15.0)		[3.3]	A C	普通	橙	I-11G 口縁部内外面横ナデ 器面風化著しい
3	SR28	C	土師器	壺	40	(11.0)		[2.5]	A B D G	普通	にぶい黄橙	I-11G 口縁部内外面ハケ後横ナデ
4	SR28	C	土師器	甕	20	(16.0)		[4.5]	A C D F	普通	にぶい黄橙	I-11G
5	SR28	C	土師器	壺	82		13.0	[4.6]	A C D	普通	にぶい黄橙	No.44 器面風化著しく調整不明 底部内外面に黒斑あり
6	SR28	C	土師器	高坏	65	(13.4)		[6.7]	A C D F	普通	浅黄橙	No.15 内外面赤彩
7	SR28	C	土師器	高坏	50			[6.1]	A C F	普通	にぶい黄橙	No.18 坏部内外面・脚部外面赤彩 穿孔3ヶ所 内外面風化著しい
8	SR28	C	土師器	高坏	70			[7.3]	C D F G	普通	橙	No.6 穿孔3ヶ所(外側から穿孔) 内面指頭圧痕あり 器面風化著しい
9	SR28	C	土師器	高坏	60			[5.5]	A C D E F G	普通	橙	No.53 器面風化著しい
10	SR28	C	土師器	高坏	40		(10.3)	[7.9]	A C	普通	明赤褐	No.47 端部内外面横ナデ 内面ヘラナデか
11	SR28	C	土師器	高坏	75		(9.6)	[9.5]	A B C D E F	普通	橙	No.19 外面赤彩 脚部下位内外面ハケ後横ナデ 器面風化著しい
12	SR28	C	土師器	高坏	80			[9.3]	A C F	普通	にぶい黄橙	No.1 外面赤彩 器面風化している 胎土は緻密
13	SR28	C	土師器	高坏	30		(8.2)	[1.1]	A B C D G	普通	明赤褐	I-11G 外面赤彩
14	SR28	C	土師器	台付甕	70			[3.9]	A C D F G	普通	橙	No.45 風化著しい
15	SR28	C	土師器	台付甕	40		(8.8)	[4.7]	C D E G	普通	浅黄	No.11 外面端部横ナデ 外面風化著しく調整不明瞭
16	SR28	C	土師器	台付甕	40	(15.2)		[19.3]	A C D F	普通	にぶい黄橙	No.2 口縁部内外面横ナデ 内面ヘラナデか 調整不明瞭
17	SR28	C	土師器	台付甕	80		(6.9)	[6.1]	A C D G	普通	浅黄橙	No.8・13 外面端部横ナデ 器面風化著しい
18	SR28	C	土師器	台付甕	90		8.5	[6.7]	A C D	普通	明黄褐	No.27 器面風化著しい 脚部内外面に黒斑あり
19	SR28	C	土師器	台付甕	90		10.3	[7.3]	A B C D F	普通	にぶい黄橙	No.3・7 接合部に指頭圧痕あり 器面風化している
20	SR28	C	土製品	土玉	85	径2.4×2.4cm	高さ2.0cm	孔径0.5~0.4cm	重さ10.4g			No.25
21	SR28	C	土製品	土玉	80	径2.7×2.6cm	高さ2.5cm	孔径0.5~0.4cm	重さ12.8g			No.25 風化著しい
22	SR28	C	土製品	土玉	80	径2.6×2.6cm	高さ2.0cm	孔径0.6~0.4cm	重さ9.8g			No.25 風化著しい
23	SR28	C	土製品	土玉	50	径2.6×2.5cm	高さ2.3cm	孔径0.6~0.5cm	重さ10.1g			No.25 風化著しい
24	SR28	C	土製品	土玉	80	径2.5×2.4cm	高さ2.1cm	孔径0.5~0.4cm	重さ11.3g			No.25
25	SR28	C	土製品	土玉	70	径2.3×2.3cm	高さ2.2cm	孔径0.4~0.3cm	重さ9.5g			No.25
26	SR28	C	土製品	土玉	90	径2.8×2.7cm	高さ2.0cm	孔径0.5~0.4cm	重さ10.3g			No.25
27	SR28	C	土製品	土玉	85	径2.7×2.9cm	高さ2.4cm	孔径0.3cm	重さ15.8g			No.25
28	SR28	C	土製品	土玉	95	径2.8×2.7cm	高さ2.4cm	孔径0.35cm	重さ14.6g			No.25
29	SR28	C	土製品	土玉	95	径2.7×2.6cm	高さ2.5cm	孔径0.6~0.4cm	重さ17.1g			No.25
30	SR28	C	土製品	土玉	95	径2.5×2.2cm	高さ2.2cm	孔径0.35cm	重さ12.9g			No.25
31	SR28	C	土製品	土玉	90	径2.7×2.8cm	高さ2.3cm	孔径0.5cm	重さ13.7g			No.25



第84図 第35号周溝状遺構出土遺物

第21表 第35号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR35	C	土師器	壺	70		4.0	[1.9]	A C D	普通	灰	No.7 外面全体に黒色
2	SR35	C	土師器	壺	20		(6.6)	[4.6]	A C D G	普通	にぶい 橙	SR35 SR28・33・35 I-11G 外面赤彩
3	SR35	C	土師器	甕	25	(16.1)		[3.6]	A C D G	普通	明赤褐	No.6 器面風化著しい
4	SR35	C	土師器	甕	10	(17.8)		[6.7]	C D F	普通	橙	No.14 内面ヘラナデカ 器面風化著しい
5	SR35	C	土師器	高坏	60			[3.3]	A B C D F G	普通	橙	I-11G 坏部内外面・脚部外面赤彩 坏部内面に黒斑 穿孔3ヶ所 器面風化著しい

(20~31)がまとまった状態で出土した。図化できた遺物は、土玉を含めて計31点(1~31)である。

第29号周溝状遺構(第85・86図)

I-11・12、J-11グリッドに位置する。やや湾曲する周溝が、L字状に検出された。第27・30号周溝状遺構より新しく、第34号周溝状遺構、第75・91号溝跡より古い。その他の重複遺構との新旧関係は不明である。

覆土各層には黄褐色粘土ブロックが層状ではなく疎らに混入しており、埋め戻された結果であると考えられる。

部分的な検出であるため平面形は不明であるが、西溝が直線状であることから、方形もしくは長方形と推測される。周溝が途切れているのか、開口しているかについても不明であるが、前者の可能性が高いと思われる。

遺構の規模は全長が西溝で6.12m、北溝で5.12mと推定される。主軸方位は不明である。周溝の規模は上場幅1.18~1.43m、下場幅0.73~1.00m、深さ28~40cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形、もしくは塊形に近い。

北溝内から、土師器の破片がまとまった状態で出土したが、本遺構の周溝を埋め戻す際に投棄されたと推定される。

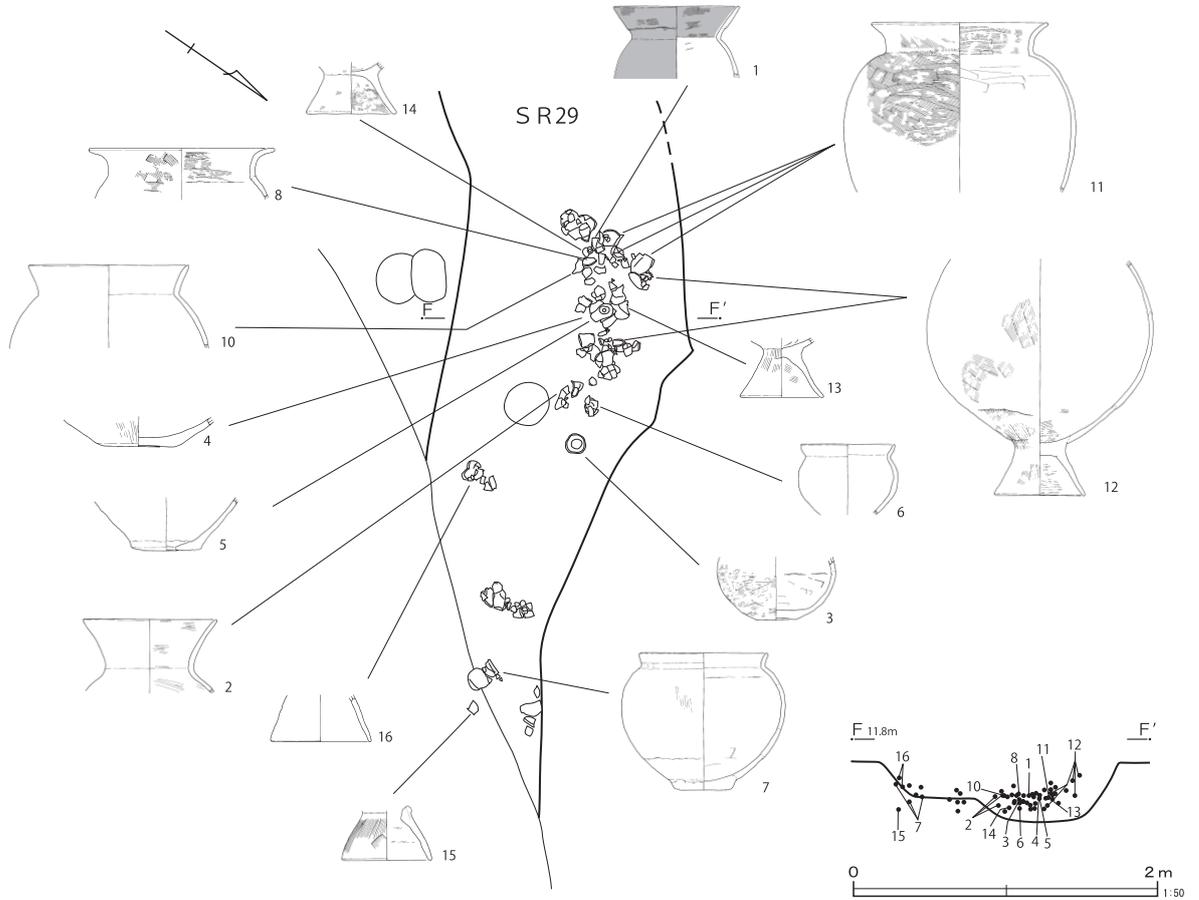
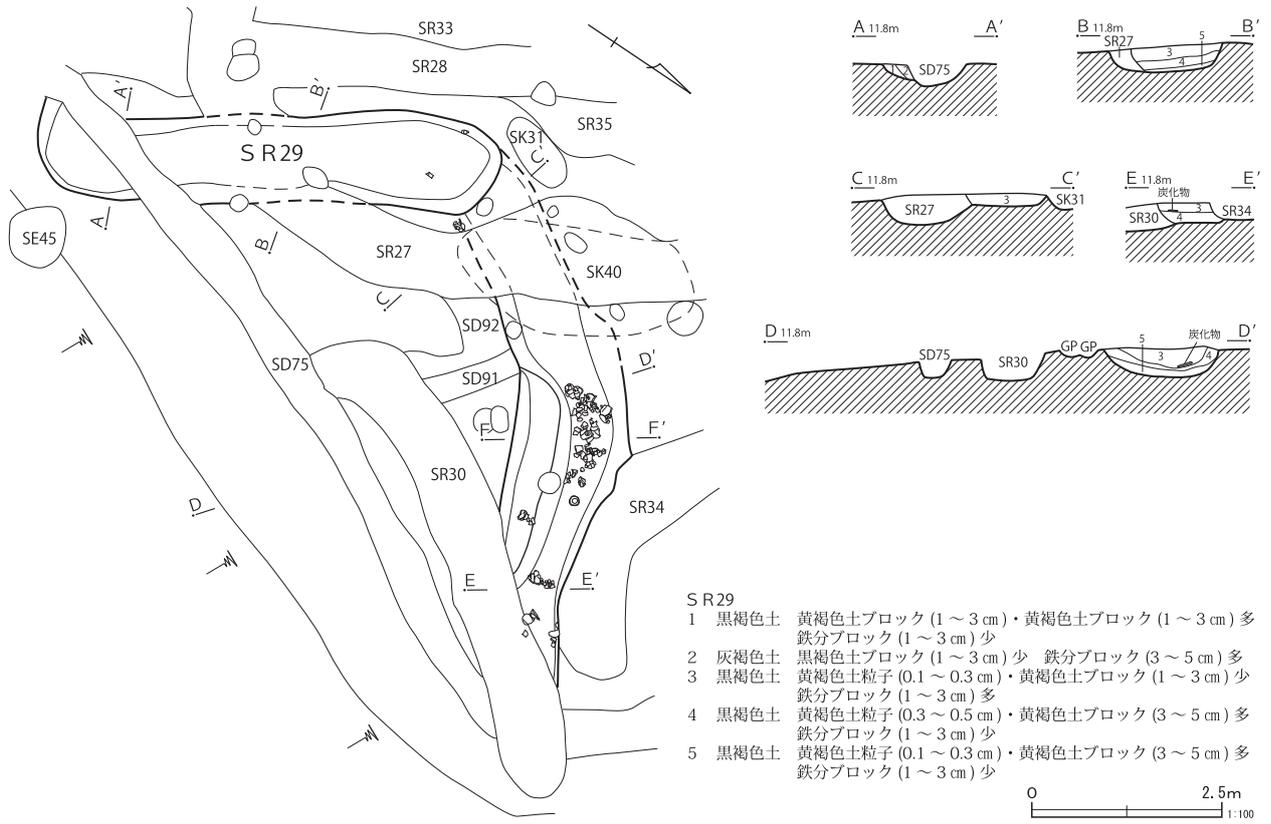
図化できた遺物は、土師器の壺・甕・台付甕など計16点(1~16)である。

第30号周溝状遺構(第87・88図)

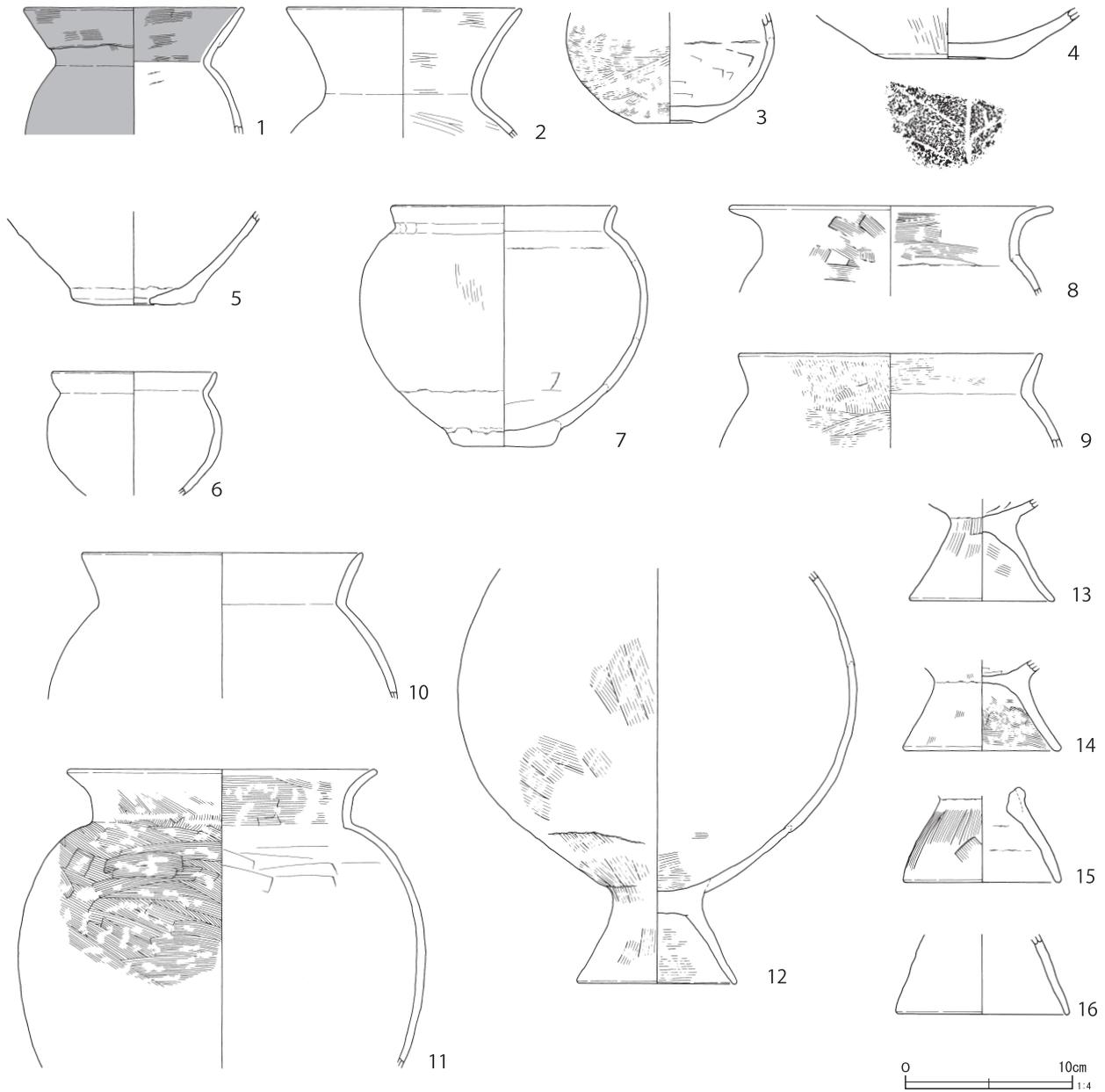
I-11・12グリッドに位置する。やや湾曲する周溝が、L字状に検出された。第29号周溝状遺構、第75・91号溝跡より古い。その他の重複遺構との新旧関係は不明である。

部分的な検出であるため平面形は不明であるが、西溝がやや直線状であることから、方形もしくは長方形の可能性が考えられる。周溝が途切れているのか、開口しているかについても不明であるが、前者の可能性が高いと思われる。

西溝は全長6.57m、この周溝自身の方位はN-34°-Eである。周溝の規模は上場幅0.83~0.92m、



第85図 第29号周溝状遺構・遺物出土状況



第86図 第29号周溝状遺構出土遺物

下場幅0.62～0.69m、深さ38cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形に近い。

図化できた遺物は、土師器の壺・甕・器台など計9点（1～9）である。

第31号周溝状遺構（第89・90図）

H-11グリッドに位置する。第15号周溝状遺構より新しく、第3号性格不明遺構、第34号周溝状遺構、第80号溝跡より古い。その他の重複遺構との新

旧関係については不明である。確認範囲は極めて小規模である。

南側は第3号性格不明遺構に壊され、北側については、周溝が閉じているのか、またはプランが失われているのか、あるいは開口しているかは不明である。周溝が直線状であることから、平面形は方形、または長方形と推測される。主軸方位は不明であるが、この周溝自身の方位はN-30°-Eである。

第22表 第29号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR29	C	土師器	小型壺	35	(12.8)		[7.6]	A C	普通	にぶい黄褐	No.32 口縁部内外面横ナデ 外面・口縁部内面赤彩 器面風化著しい
2	SR29	C	土師器	壺	60	(13.8)		[7.8]	A C D F	普通	明黄褐	No.11 器面風化著しい
3	SR29	C	土師器	小型壺	70		4.0	[6.6]	A C D F	普通	にぶい黄橙	No.10
4	SR29	C	土師器	壺	45		(7.6)	[3.1]	A	普通	にぶい橙	No.23 器面風化著しい 底部木葉痕あり
5	SR29	C	土師器	甗	70		7.4	[5.7]	C D E I	普通	にぶい黄橙	No.23 焼成後穿孔 外面被熱により赤色化風化著しく調整不明
6	SR29	C	土師器	甗	45	(9.6)		[7.4]	A C G	普通	褐	No.12 口縁内外面横ナデか 外面被熱により赤色化 器面風化著しい
7	SR29	C	土師器	甗	30	(13.1)	6.0	14.5	C D F G	普通	にぶい黄橙	No.4 口縁部内外面横ナデ 器面風化している
8	SR29	C	土師器	甗	20	(18.9)		[5.4]	A C D	普通	浅黄	No.36
9	SR29	C	土師器	甗	20	(17.8)		5.6	A C F	普通	にぶい褐	口縁部内外面ハケ後横ナデ
10	SR29	C	土師器	甗	15	(16.6)		[8.8]	A C	普通	にぶい黄橙	No.37 風化著しく調整不明瞭
11	SR29	C	土師器	甗	25	(18.0)		[17.9]	A C D F I	普通	にぶい黄橙	No.28・29・31 口縁部内外面横ナデ
12	SR29	C	土師器	台付甗	40		9.4	[24.9]	A C F	普通	にぶい褐	No.15・28 端部内外面横ナデ 風化著しく調整不明瞭
13	SR29	C	土師器	台付甗	90		8.4	[6.1]	A C D	普通	明赤褐	No.22 外面被熱により赤色化 内外面風化著しく調整不明瞭
14	SR29	C	土師器	台付甗	70		(9.2)	[5.5]	A C D F	普通	にぶい黄橙	No.33 外面風化著しく調整不明瞭
15	SR29	C	土師器	台付甗	25		(9.3)	[5.2]	A C D F	普通	にぶい黄橙	No.5
16	SR29	C	土師器	台付甗	30		(10.2)	[4.8]	A C D F	普通	橙	No.9 内外面ヘラナデか 外面は被熱により赤色化 風化著しい

検出できた規模は、全長6.05m、上場幅0.62～0.65m、下場幅0.34～0.42m、深さは36～41cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形である。

図化できた土師器は、台付甗・高坏など計5点(1～5)である。

第32号周溝状遺構 (第91図)

H・I-11グリッドに位置する。第34号周溝状遺構より古い。東側は第75号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

周溝が直線状であることから、平面形は方形または長方形と推測される。主軸方位は不明であるが、この周溝自身の方位はN-58°-Eである。

検出できた規模は、全長3.05m、上場幅0.85～1.05m、下場幅0.68～0.82m、深さは11cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は逆台形である。

遺物は出土しなかった。

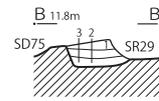
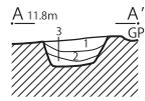
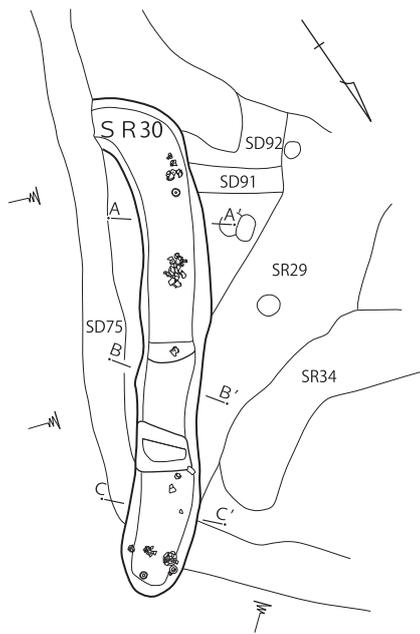
第33号周溝状遺構 (第81図)

I・J-11グリッドに位置する。第28号周溝状遺構、第5号柵列跡よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係については不明である。

北端部が閉じているが、周溝が失われているのか、あるいは開口しているかについては不明である。周溝が直線状であることから、平面形は方形または長方形と推測される。主軸方位は不明であるが、この周溝自身の方位は本遺構よりも新しい第28号周溝状遺構と同様にN-27°-Wである。

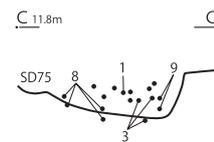
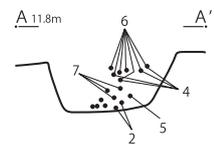
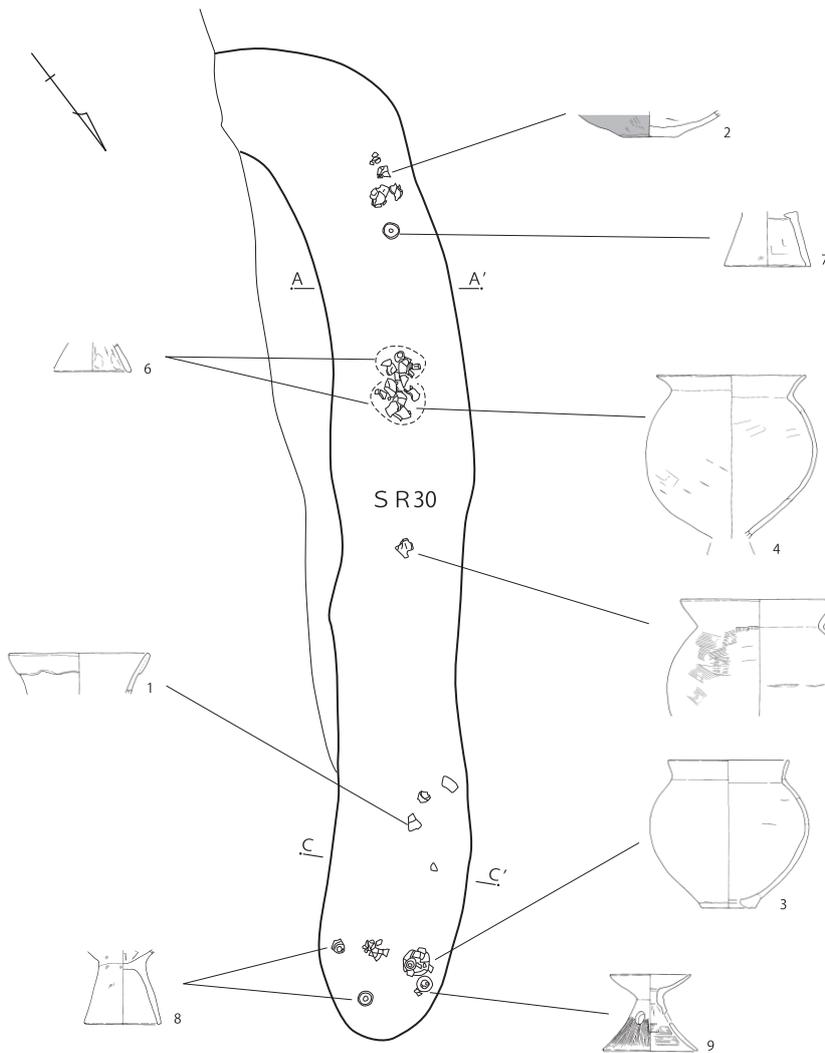
検出できた規模は、全長5.38m、上場幅・下場幅は不明、深さは21～30cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がり

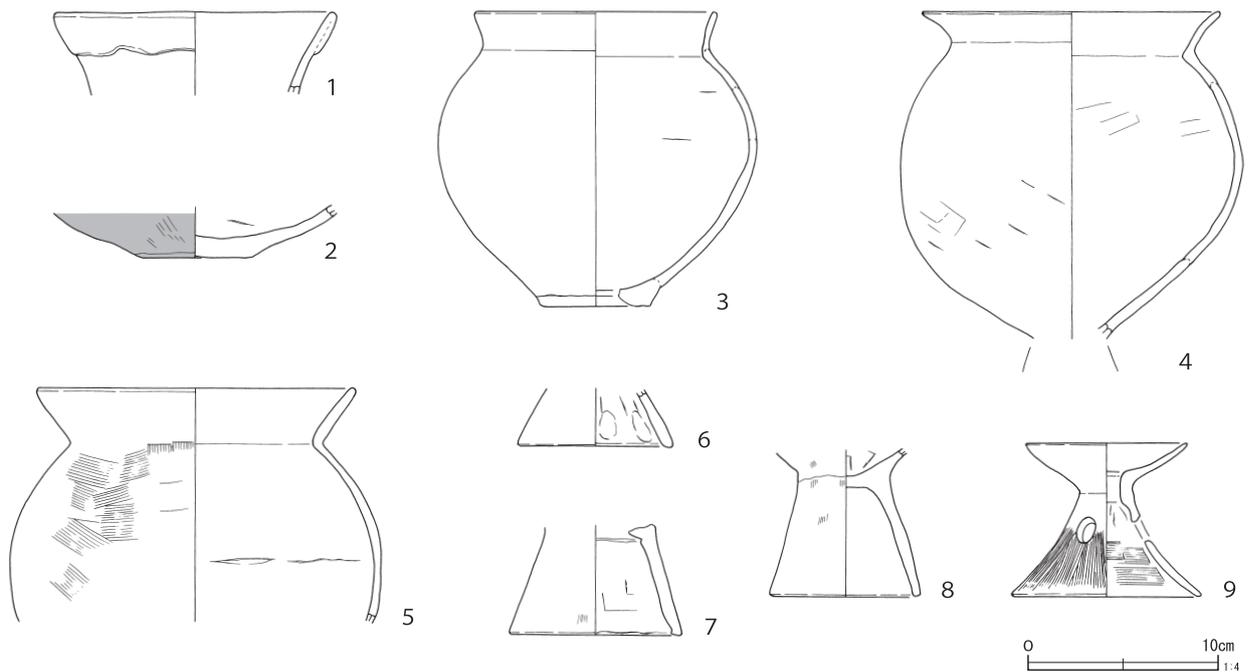


SR30

- 1 黒色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・ 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) ・ 鉄分ブロック (1 ~ 3 cm) 少
- 2 黒色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・ 鉄分ブロック (1 ~ 3 cm) 多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少
- 3 黒色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 黄褐色土ブロック (3 ~ 5 cm) 極多 鉄分ブロック (1 ~ 3 cm) 少



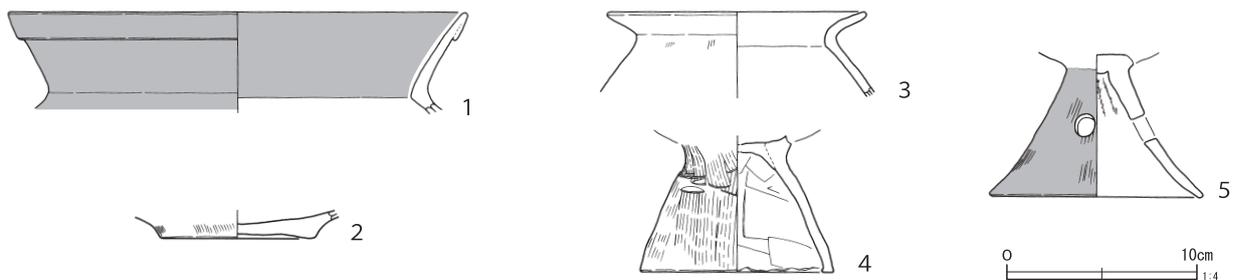
第87図 第30号周溝状遺構・遺物出土状況



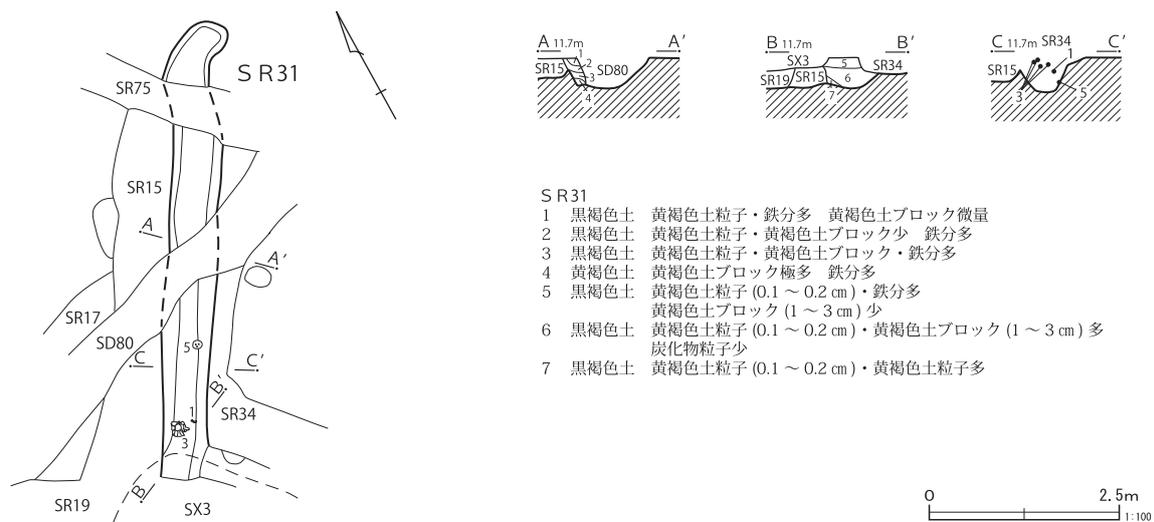
第88図 第30号周溝状遺構出土遺物

第23表 第30号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR30	C	土師器	壺	25	(14.6)		[4.4]	C F	普通	にぶい 黄橙	No.7 内外面器面風化著しく調整不明瞭
2	SR30	C	土師器	壺	60		(5.8)	[2.7]	A C D F	普通	にぶい 橙	No.14 外面赤彩 器面風化著しい
3	SR30	C	土師器	甔	70	(12.6)	5.8	15.6	C D F G	普通	にぶい 黄橙	No.5 底部焼成後穿孔 胴部外面に黒斑 胴部内面下半に炭化物付着 内外面風化・摩滅著しく調整不明瞭
4	SR30	C	土師器	台付甔	70	15.5		[17.3]	A B F G	普通	にぶい 黄橙	No.11 I-12G 口縁部内外面横ナデ 胴部外面炭化物付着 器面風化著しい
5	SR30	C	土師器	甔	25	(16.7)		[12.3]	A C D F	普通	褐	No.10 G-12G 口縁部内外面横ナデ 器面風化著しい
6	SR30	C	土師器	台付甔	25		(8.0)	[3.0]	A C D F G	普通	にぶい 橙	No.11・12 脚部内面下半指頭圧痕あり
7	SR30	C	土師器	台付甔	90		9.0	[5.8]	A C F	普通	にぶい 赤	No.13 脚部内面横方向のナデ 工具の当たり痕あり 外面風化著しく調整不明瞭
8	SR30	C	土師器	台付甔	95		7.4	[7.8]	A D	普通	明褐	No.1・2 器面風化著しい
9	SR30	C	土師器	器台	80	(8.5)	9.8	8.1	C D E F G	普通	にぶい 橙	No.4 器受部内外面横ナデ 穿孔3ヶ所 (外から内側への穿孔) 器面風化著しい



第89図 第31号周溝状遺構出土遺物

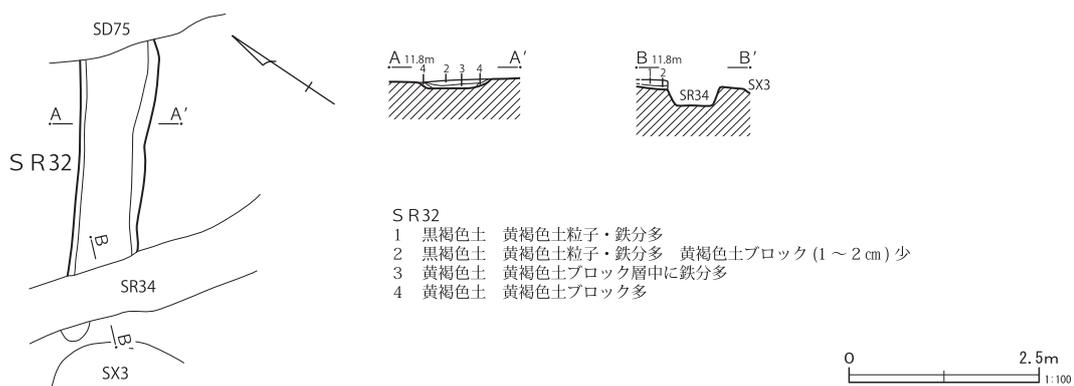


- SR31
- 1 黒褐色土 黄褐色土粒子・鉄分多 黄褐色土ブロック微量
 - 2 黒褐色土 黄褐色土粒子・黄褐色土ブロック少 鉄分多
 - 3 黒褐色土 黄褐色土粒子・黄褐色土ブロック・鉄分多
 - 4 黄褐色土 黄褐色土ブロック極多 鉄分多
 - 5 黒褐色土 黄褐色土粒子(0.1～0.2cm)・鉄分多
黄褐色土ブロック(1～3cm)少
 - 6 黒褐色土 黄褐色土粒子(0.1～0.2cm)・黄褐色土ブロック(1～3cm)多
炭化物粒子少
 - 7 黒褐色土 黄褐色土粒子(0.1～0.2cm)・黄褐色土粒子多

第90図 第31号周溝状遺構

第24表 第31号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR31	C	土師器	壺	10	(24.0)		[5.3]	A C F	普通	にぶい 橙	No.3 SR19 内外面赤彩 器面摩滅調整不明瞭
2	SR31	C	土師器	甕	70		7.8	[1.5]	A D	普通	にぶい 黄	No.4
3	SR31	C	土師器	甕	10	(13.6)		[4.5]	A B C F	普通	橙	口縁部内外面横ナデカ 内外面摩滅著しい
4	SR31	C	土師器	台付甕	25		(10.0)	[7.2]	A C D F	良好	灰黄褐	外面工具当たり痕顕著 内面削りに近いヘラナデ
5	SR31	C	土師器	高坏	90		11.0	[7.5]	A B C F G	普通	にぶい 黄橙	No.2 穿孔3ヶ所(外から内に穿孔) 外面赤彩



- SR32
- 1 黒褐色土 黄褐色土粒子・鉄分多
 - 2 黒褐色土 黄褐色土粒子・鉄分多 黄褐色土ブロック(1～2cm)少
 - 3 黄褐色土 黄褐色土ブロック層中に鉄分多
 - 4 黄褐色土 黄褐色土ブロック多

第91図 第32号周溝状遺構

りは緩やかで、断面形は皿状である。

土師器の小破片が少量出土したが、図化には至らなかった。

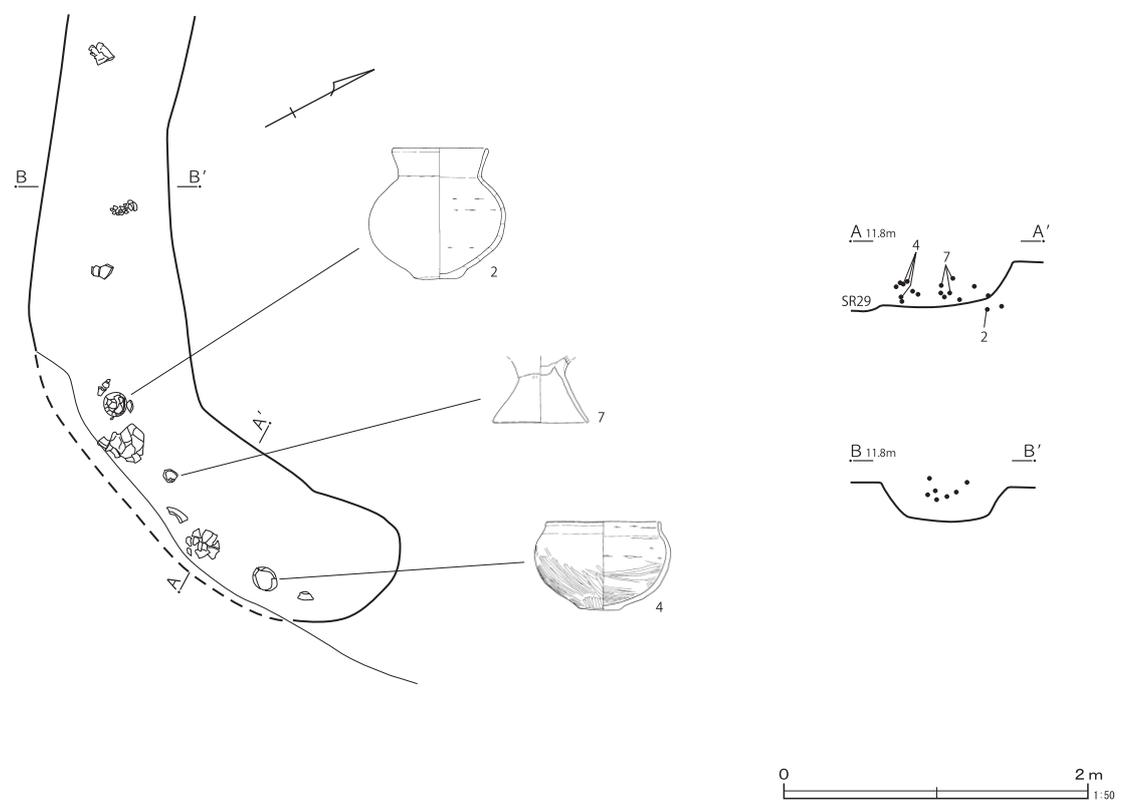
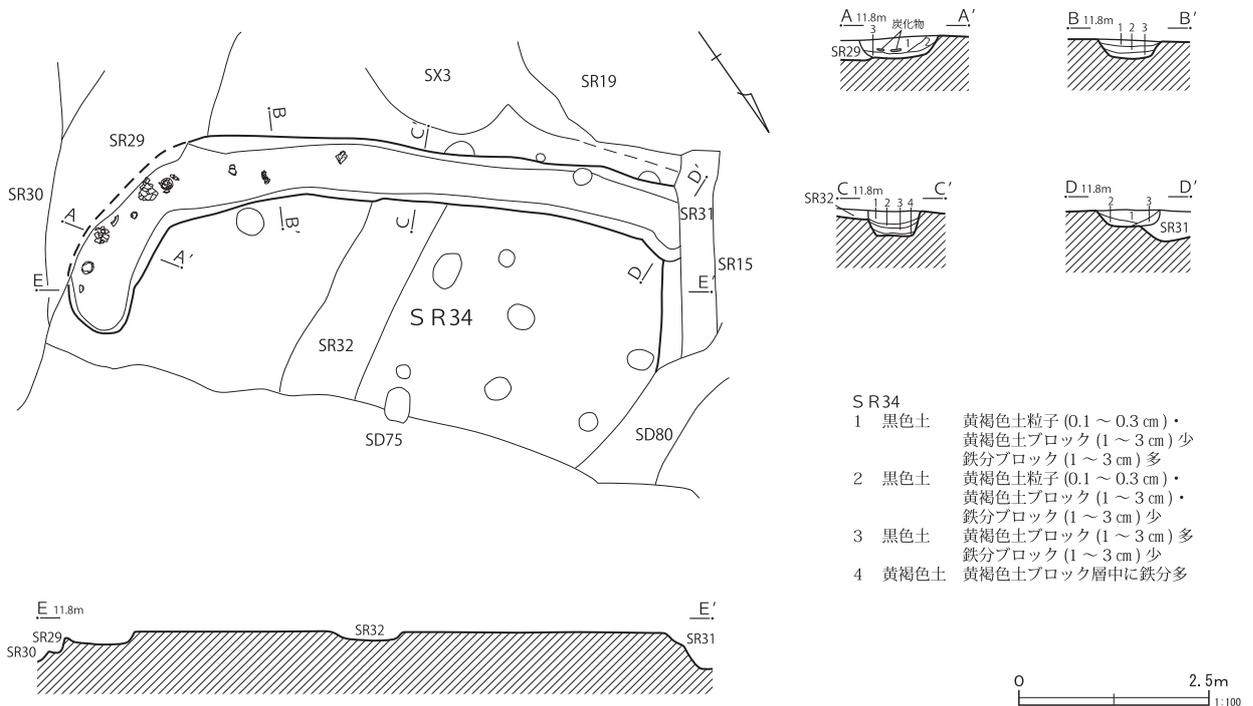
第34号周溝状遺構 (第92・93図)

H-11、I-11・12グリッドに位置する。やや湾

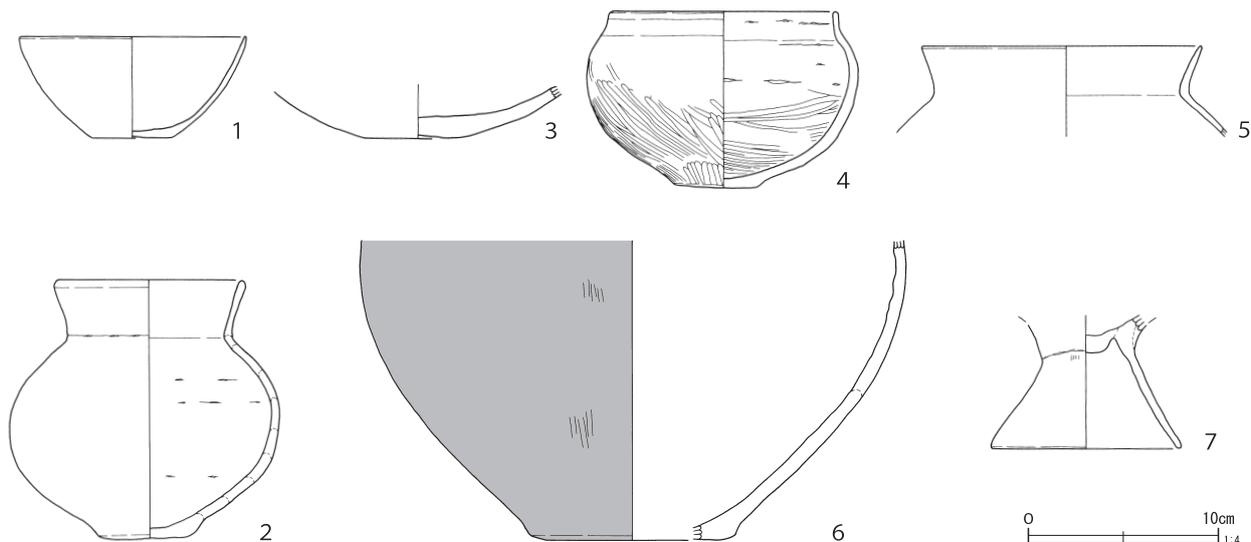
曲する周溝が、短く「コ」の字状に検出された。

第29・31・32号周溝状遺構より新しく、第80号溝跡より古い。

北溝は確認されなかった。平面形については、円形・楕円形、もしくは方形・長方形のいずれと



第92図 第34号周溝状遺構・遺物出土状況



第93図 第34号周溝状遺構出土遺物

第25表 第34号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR34	C	土師器	碗	50	(11.9)	4.2	5.4	A C F G	普通	橙	内外面とも風化著しく調整痕は認められない
2	SR34	C	土師器	小型壺	60	(9.6)	5.0	13.6	C D F G	不良	にぶい 橙	No.7 器面風化著しく調整痕は認められない
3	SR34	C	土師器	壺	75		5.4	[2.8]	A C F	普通	灰黄	器面風化著しく調整痕は認められない
4	SR34	C	土師器	鉢	80	11.7	4.3	9.3	C D F G	普通	灰黄	No.2 外面黒斑あり
5	SR34	C	土師器	甕	15	(14.7)		[4.8]	A C F	普通	にぶい 橙	一括 口縁部内外面横ナデか 内外面とも風化著しく調整痕は認められない
6	SR34	C	土師器	壺	25		(10.6)	[15.8]	C F G	普通	橙	外面赤彩 内外面摩滅著しい
7	SR34	C	土師器	台付甕	95		10.0	[7.1]	A C D G	普通	明赤褐	No.5 器面風化著しく調整痕は殆どみえない

も判別できなかった。

検出できた範囲での遺構の規模は、北西－南東方向の内法は7.08m。周溝の規模は、上場幅0.70～1.02m、下場幅0.46～0.80m、深さは29～33cmである。外法・主軸方位については不明である。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形、または箱形である。

南東端は周溝が途切れているが、深さが30cm程あることから、周溝が失われているのではなく、開口部の可能性も考えられる。

遺物は、この付近の周溝内である程度まとまって出土した。図化できた土師器は、壺・鉢・台付

甕など計7点（1～7）である。

第35号周溝状遺構（第81・82・84図）

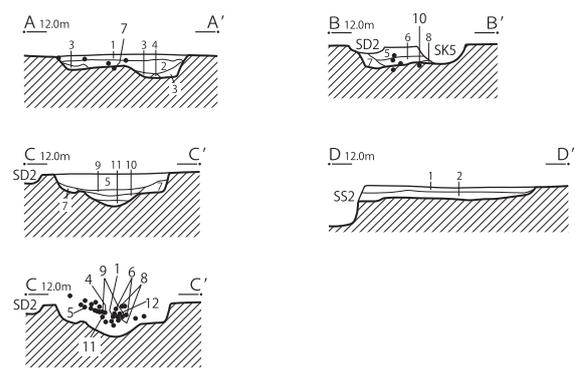
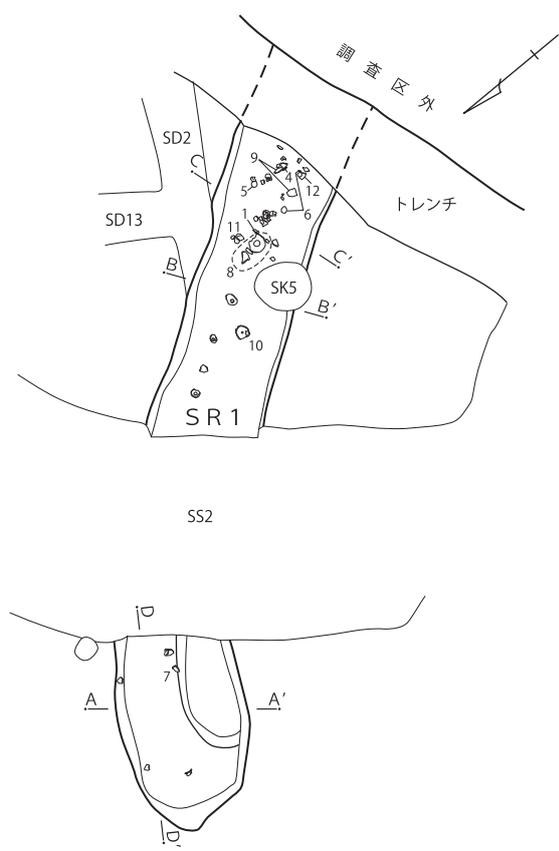
I－11グリッドに位置する。第28号周溝状遺構、第5号柵列跡より古いが、その他の重複遺構との新旧関係については不明である。

北端部が閉じているが、周溝が失われていたか、あるいは開口していたかは不明である。

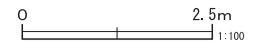
主軸方位は不明である。検出できた範囲での規模は、全長2.36m、上場幅・下場幅は不明、深さは28～32cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状に近い。

図化に至った土師器は、壺・高坏など計5点



- SR 1
- 1 暗褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 均質に少
 - 2 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 少
 - 3 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 少
 - 4 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (1 cm) 多
 - 5 黒褐色土 黄褐色粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少
黄褐色土ブロック (1 ~ 2 cm) 微量
 - 6 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 多
黄褐色土ブロック (1 ~ 2 cm) 少 炭化物帯状に少
 - 7 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 mm)・黄褐色土ブロック (1 ~ 2 cm) 多
 - 8 黄褐色土 黄褐色土ブロック極多
 - 9 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少
 - 10 暗褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 多
黄褐色土ブロック (1 ~ 2 cm) 少 炭化物帯状に少
 - 11 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm)・黄褐色土ブロック (1 ~ 5 cm) 多
埋戻し土



第94図 D区第1号周溝状遺構

(1~5)である。

D区第1号周溝状遺構 (第94・95図)

H・I-15・16グリッドに位置する。D区第2号墳、D区第5号土壘、D区第2号溝跡よりも古い。

周溝の北端部が閉じているが、周溝が失われているのか、開口しているのかは不明である。周溝南側は、調査区外に続いていると推定される。周溝が直線状であることから、平面形は方形または長方形と推測される。主軸方位は不明であるが、この周溝自身の方位はN-42°-Wである。

検出できた規模は全長9.24m、上場幅1.50~1.70m、下場幅1.30~1.41m、深さは18~42cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは浅い部分では緩やかであるが、深い部分では

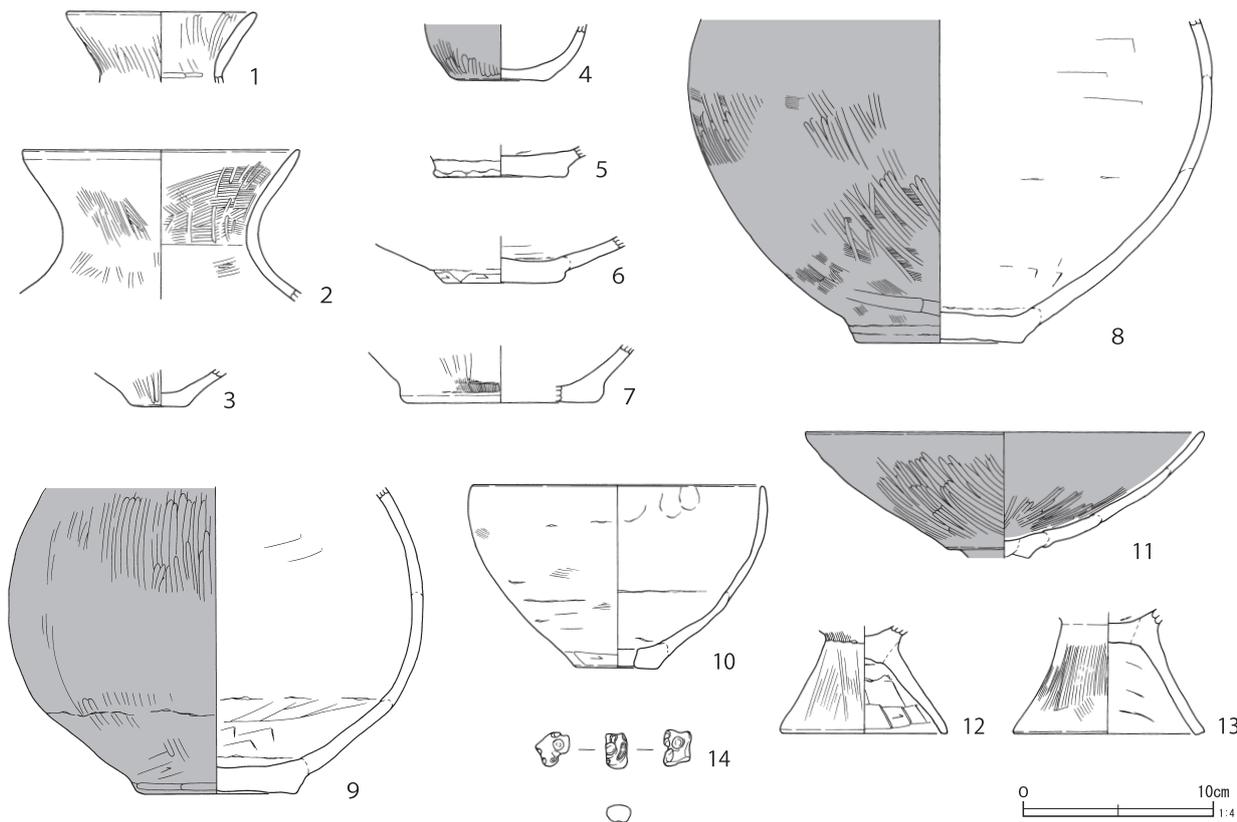
比較的急であり、断面形は前者では皿状、後者では逆台形である。土層断面にみる第11層は、斑状に分布する黄褐色土ブロックから埋め戻し土であると考えられる。

図化できた土師器は、壺・高坏・甑・台付甕などのほか、貝巢穴痕泥岩を合わせ計14点(1~14)である。

D区第2号周溝状遺構、D区第101号溝跡

(第96・97図)

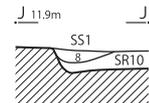
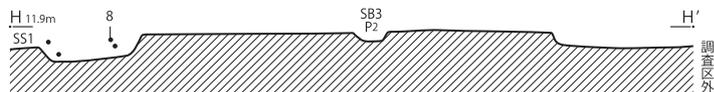
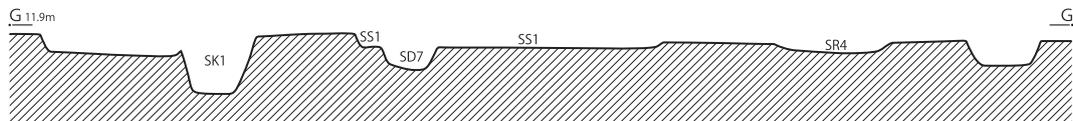
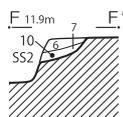
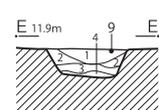
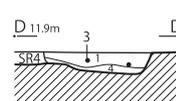
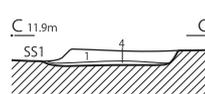
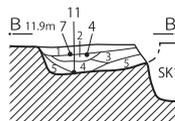
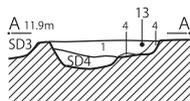
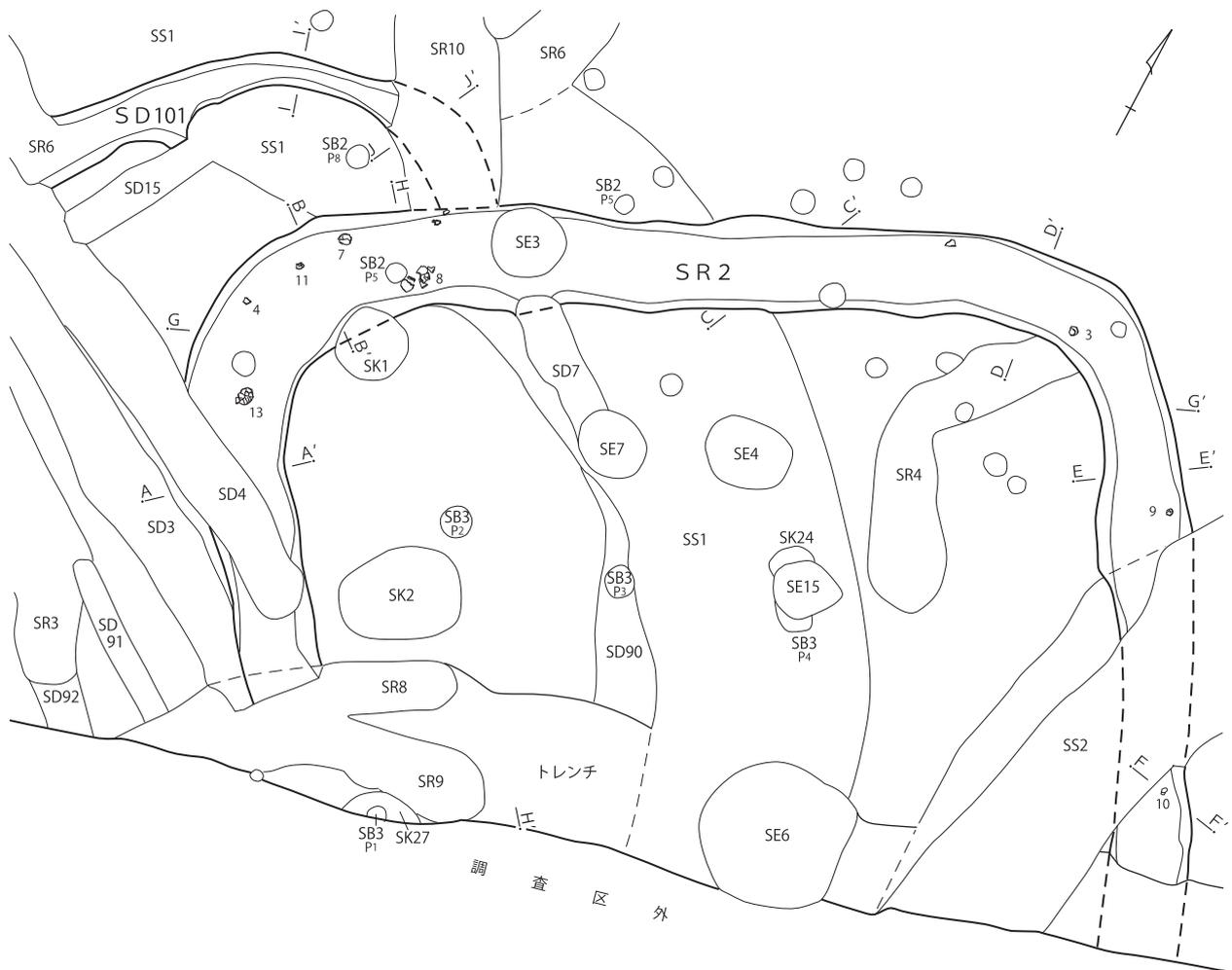
H・I-14・15グリッドに位置する。D区第4号周溝状遺構、D区第4号溝跡より新しく、D区第1・2号墳、D区第3・4・6・7号井戸跡、D区第7号溝跡、D区第1号土壘より古い。その他の重複遺構との新旧関係については捉えられなかった。



第95図 D区第1号周溝状遺構出土遺物

第26表 D区第1号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR1	D	土師器	小型壺	45	(9.6)		[3.8]	A C D F I	普通	明赤褐	No.24 外面へラ磨き 器面風化著しい
2	SR1	D	土師器	壺	30	(14.6)		[8.0]	A C F	普通	にぶい 橙	口縁部内外面ハケ後へラ磨き 肩部内外面へラ磨き
3	SR1	D	土師器	小型壺	70		3.0	[2.0]	A F	普通	にぶい 黄橙	一括 外面へラ磨き 内面へラナデか
4	SR1	D	土師器	小型壺	55		5.0	[3.0]	A C D F G	普通	橙	No.7 外面へラ磨き・赤彩
5	SR1	D	土師器	壺	75		6.9	[1.7]	A D E F	普通	褐	No.16 外面へラ磨き 内面へラナデ 底部手持ちへラ削り
6	SR1	D	土師器	壺	45		6.2	[2.5]	A C D F	普通	にぶい 橙	No.12・18 外面へラ磨き 内面へラナデ 底部手持ちへラ削り
7	SR1	D	土師器	壺	20		(10.2)	[3.1]	A F	普通	橙	No.33 外面ハケ後へラ磨き 内面へラナデ 器面風化著しい 内面に黒斑あり
8	SR1	D	土師器	壺	60		9.0	[17.1]	A C D F	普通	橙	一括 No.25 外面ハケ後へラ磨き 内面ナデ 外面赤彩・黒斑あり
9	SR1	D	土師器	壺	35		8.4	[16.1]	A C D F	普通	にぶい 橙	No.6・11 外面へラ磨き、一部へラ削り痕あり 内面へラナデ 底部へラ削り 内外面に黒斑あり 外面赤彩
10	SR1	D	土師器	甑	75	(15.4)	4.3	9.6	A C F	普通	にぶい 黄褐	No.28 口縁部内外面横ナデ 口縁部内面に指頭庄痕あり 外面ハケとハケナデか 器面風化著しい
11	SR1	D	土師器	高坏	65		20.8	[6.6]	A C F G	普通	にぶい 橙	No.26 内外面へラ磨き 内外面赤彩 口縁部内外面に黒斑あり
12	SR1	D	土師器	台付甕	95		8.7	[5.7]	A C D F G	普通	にぶい 橙	No.9 外面ハケ 内面へラナデ
13	SR1	D	土師器	台付甕			(10.0)	[6.5]	A C D	普通	赤褐	外面ハケ 内面へラナデ
14	SR1	D	具巢穴 痕泥岩						長さ1.9cm 幅1.8cm 厚さ1.0cm 重さ2.0g		にぶい 橙	7孔か 被熱のため赤色化している

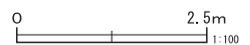


SR 2

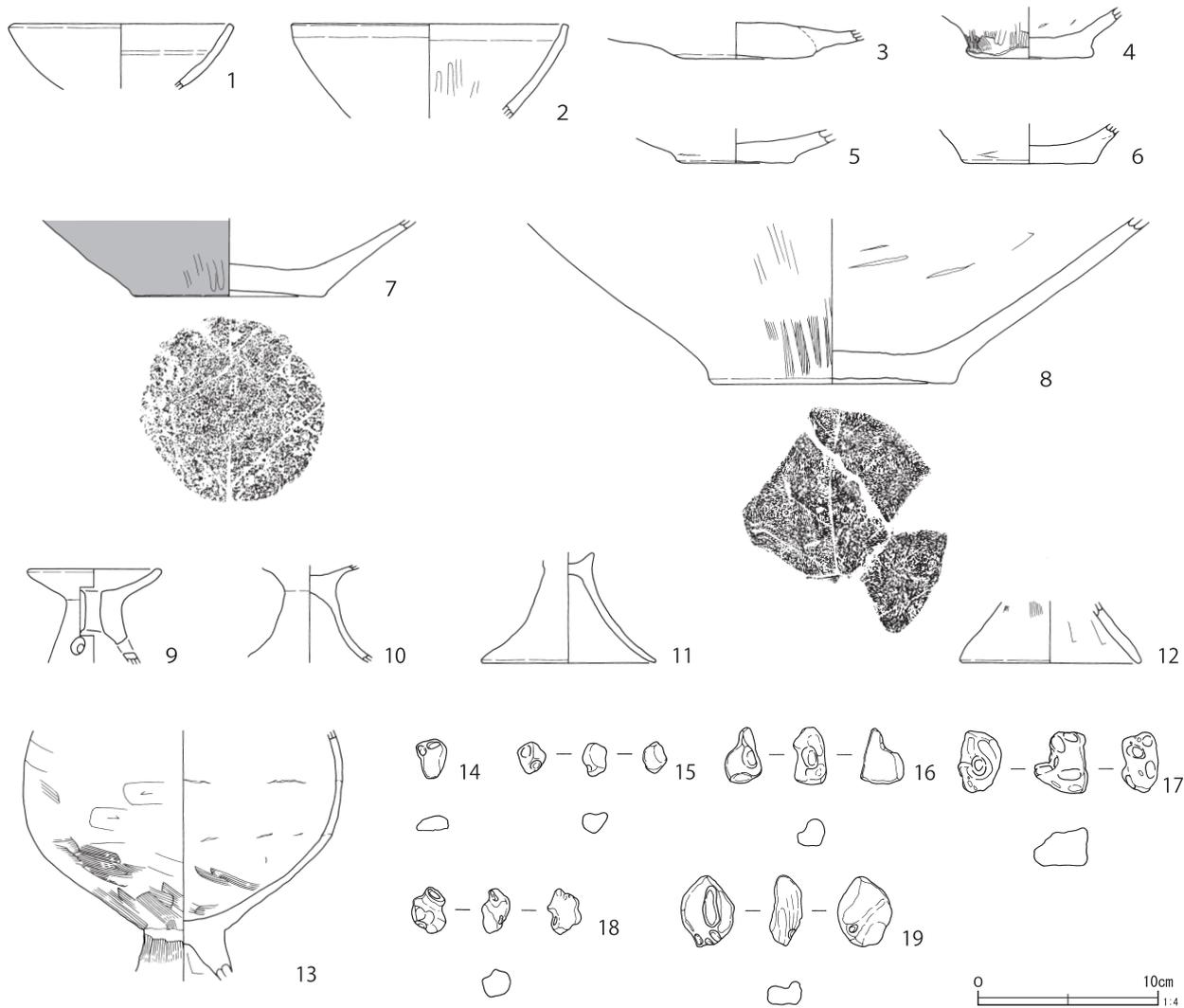
- 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・ 焼土粒子 (0.1 cm) 微量
- 2 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) ・ 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) やや多
- 3 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 cm) 多 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少 焼土粒子 (0.5 cm) 微量
- 4 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) ・ 黄褐色粘土ブロック (1 ~ 3 cm) ・ 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) 多 埋戻し土
- 5 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.1 ~ 0.8 cm) やや多 焼土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) 少
- 6 黒褐色土 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) やや多
- 7 黒褐色土 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少 黄褐色粘土ブロック (0.5 cm) やや多

SD101 (連結構)

- 8 黒灰色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 cm) 少 鉄分多



第96図 D区第2号周溝状遺構、第101号溝跡



第97図 D区第2号周溝状遺構出土遺物

第27表 D区第2号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR2	D	土師器	高坏	30	(12.0)		[3.6]	C F G	普通	橙	器面風化著しい
2	SR2	D	土師器	壺	20	(14.9)		[5.2]	A F	普通	浅黄	口縁部内外面横ナデ 外面へラ磨きか 内面へラ磨き 外面摩滅している
3	SR2	D	土師器	壺	70		(8.5)	[2.0]	C D F	普通	橙	No.10 外面へラ磨きか 内面へラナデ 底部へラ削りか 器面風化著しい
4	SR2	D	土師器	壺	85		6.9	[2.9]	A C F G	普通	にぶい黄橙	No.2 外面ハケ後へラ磨き 内面・底部へラナデ 器面は荒れている 外面に黒斑
5	SR2	D	土師器	壺	70		(6.5)	[1.9]	A E F	普通	にぶい黄橙	風化著しく調整不明瞭
6	SR2	D	土師器	壺	25		(7.2)	[2.2]	C F G	普通	にぶい黄橙	内外面・底部へラナデか 器面風化著しい
7	SR2	D	土師器	壺	70		10.6	[4.3]	C G	普通	橙	No.3 外面へラ磨き 内面へラナデか 底部木葉痕あり 外面赤彩 器面風化著しい
8	SR2	D	土師器	壺	50		13.3	[9.2]	A C D	普通	にぶい黄橙	No.5 10-A 外面ハケ後へラ磨きか 内面へラナデか 底部木葉痕あり 器面風化著しい 胴～底部外面に黒斑あり
9	SR2	D	土師器	器台	75	(7.3)		[5.2]	A B C D F	普通	にぶい黄橙	No.11 坏部穿孔1ヶ所(上部から) 脚部穿孔3ヶ所(外側から) 内外面摩滅・風化著しい

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
10	SR2	D	土師器	高坏	75			[5.4]	A B E F	普通	にぶい 橙	No.12 器面風化著しく調整不明瞭
11	SR2	D	土師器	高坏	75		9.6	[6.1]	C F	普通	にぶい 橙	No.8 器面風化著しい
12	SR2	D	土師器	台付甕	55		(9.7)	[3.4]	A C D G	普通	橙	外面ハケ 内面ヘラナデ
13	SR2	D	土師器	台付甕	80			[13.9]	A C D F	普通	にぶい 褐	No.1 外面胴部中位ヘラ削り 外面胴部下 位から脚部ハケ 脚部内面ヘラナデ 内面 ハケとヘラナデ
14	SR2	D	貝巢穴 痕泥岩			長さ4.0cm 重さ1.5g	幅2.9cm	厚さ1.3cm			にぶい 黄橙 か	被熱によりわずかに赤色化している 2孔 か
15	SR2	D	貝巢穴 痕泥岩			長さ1.7cm 重さ1.1g	幅2.4cm	厚さ1.0cm			にぶい 黄橙 か	被熱によりわずかに赤色化している 3孔 か
16	SR2	D	貝巢穴 痕泥岩			長さ3.1cm 重さ6.3g	幅2.3cm	厚さ1.5cm			にぶい 黄橙 か	被熱によりわずかに赤色化している 2孔 か
17	SR2	D	貝巢穴 痕泥岩			長さ3.4cm 重さ9.7g	幅2.9cm	厚さ2.1cm			にぶい 黄橙 か	被熱によりわずかに赤色化している 9孔 まで確認できる
18	SR2	D	貝巢穴 痕泥岩			長さ2.5cm 重さ3.7g	幅1.8cm	厚さ1.4cm			にぶい 黄橙 か	被熱によりわずかに赤色化している 5孔 か(わかりづらい)
19	SR2	D	貝巢穴 痕泥岩			長さ4.0cm 重さ11.0g	幅2.9cm	厚さ1.3cm			にぶい 黄橙 か	被熱によりわずかに赤色化している 6孔 か

周溝はやや歪んでいるが直線に近い。南側部分は調査区外に続いたため、平面形は概ね「コ」の字状に検出された。南溝は確認されなかった。

遺構の規模は、東西方向は外法13.00m、内法10.75m、南北方向は外法9.38m、内法8.15mまでの確認である。上場幅0.94~1.70m、下場幅0.65~1.45m、深さは20~40cmである。開口部の有無が不明であるため、主軸方位は不明であるが、強いて計測するならば、主軸方位はN-26°-W、もしくはN-64°-Eと推定される。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形、浅い部分では皿状である。土層断面にみる第4層は、斑状に分布する黄褐色粘土ブロックから埋め戻しと考えられる。

実測できた土師器は、壺・器台・台付甕などのほか、貝巢穴痕泥岩を含め計19点(1~19)である。

なお、本遺構の西側部分で検出されたD区第101号溝跡は、本遺構とD区第6号周溝状遺構をつなぐ連結溝と判断した。平面形は円弧状に近く、断面形は皿状である。規模は、南西コーナーを起点として全長4.90m、上場幅が0.36~0.95m、下場幅が0.16~0.52m、深さは6~10cmである。溝の方位

は概ねN-58°-Eである。

本遺構の周溝内に水が溜まった際、微地形的にみて連結溝(D区第101号溝跡)を通じてD区第6号周溝状遺構の周溝に流下し、さらに西側の溝に流れ込んだと推測される。

D区第3号周溝状遺構(第98・99図)

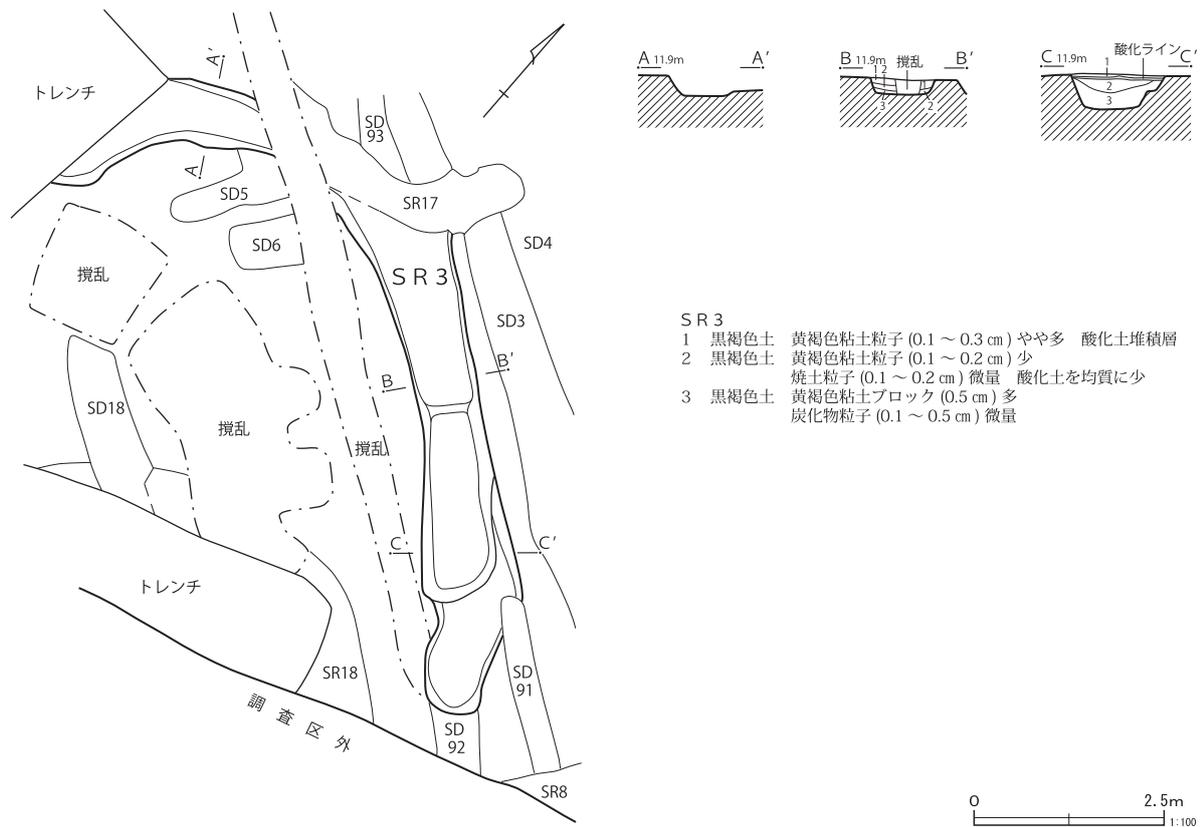
I-13・14グリッドに位置する。D区第1号墳、D区第5号溝跡より古い。この他の重複する他遺構との新旧関係については不明である。西側は調査区外に続くが、南側については開口部であるのか、あるいは調査区外にまで続くのかは判断できなかった。周溝はやや歪んでいるが円弧状で、「く」の字状にちかい。

周溝の規模は、上場幅0.88~0.95m、下場幅0.75~0.82m、深さは19cmである。

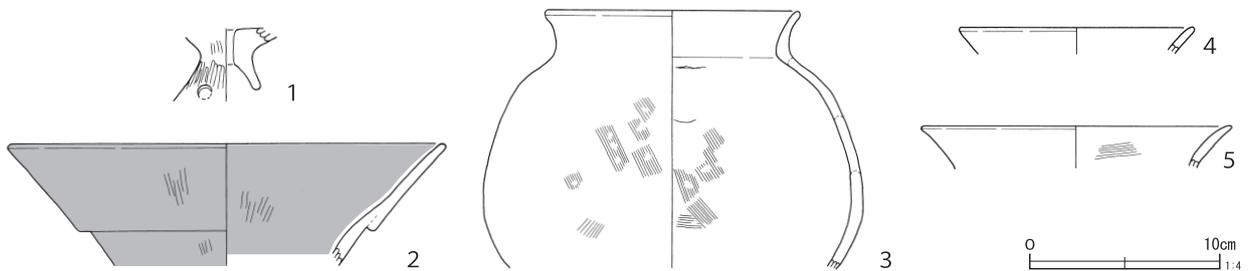
周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形、浅い部分では皿状である。

南端部近くに周溝内に収まる形で長方形の落ち込みがあるが、溝内土壌であろうか。平面規模は0.97×2.45m、深さは45cmである。

実測できた土師器は、壺・甕など計5点(1~5)である。



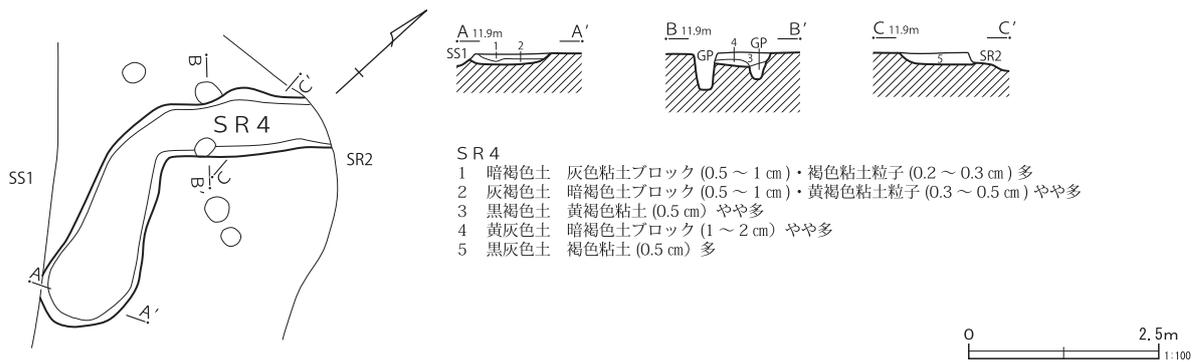
第98図 D区第3号周溝状遺構



第99図 D区第3号周溝状遺構出土遺物

第28表 D区第3号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR3	D	土師器	器台	70			[3.8]	A C D G	普通	明褐	脚部外面へラ磨き 内面ナデか 穿孔3ヶ所 器面風化している
2	SR3	D	土師器	壺	20	(22.8)		[6.4]	B C F	普通	橙	内外面へラ磨き 内外面赤彩 器面風化著しい
3	SR3	D	土師器	甗	15	(13.2)		[13.6]	B C F G	普通	橙	口縁部内外面横ナデか 胴部外面ハケ 胴部内面ハケによるナデか
4	SR3	D	土師器	壺	15	(12.4)		[1.4]	C F G	普通	橙	器面風化著しい
5	SR3	D	土師器	甗	20	(16.2)		[2.2]	A C D F	普通	にぶい黄橙	内面ハケ後横ナデか 器面風化著しい



第100図 D区第4号周溝状遺構

D区第4号周溝状遺構 (第100図)

H-15グリッドに位置する。1つのピットより新しく、D区第2号周溝状遺構とD区第1号墳、および1つのピットより古い。その他のピットとの新旧関係については不明である。

本遺構の平面形は、やや「く」の字状である。

周溝の規模は、全長4.90mで、上場幅0.70~1.05m、下場幅0.56~0.95m、深さは15~18cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

遺物は出土しなかった。

D区第6号周溝状遺構、D区第101号溝跡

(第101・102図)

G・H-13・14グリッドに位置する。D区第10号周溝状遺構より新しく、D区第12・19号周溝状遺構、D区第1号墳、D区第9・11号溝跡より古い。その他の重複遺構との新旧関係については捉えられなかった。

図上では、北東溝のD区第10号周溝状遺構との重複する部分が開口しているかのような表現となっているが、これはD区第10号周溝状遺構との重複によってプランが失われていることによるものである。開口部は、D区第101号溝跡の東側、南東コーナーの西側部分が相当すると推測される。開口の規模は不明であるが、1.00~1.10m程である

と推定される。北西-南東方向の溝はほぼ直線であるが、その他の3条の溝はやや湾曲する。平面形はやや丸みを帯びた方形に近い。

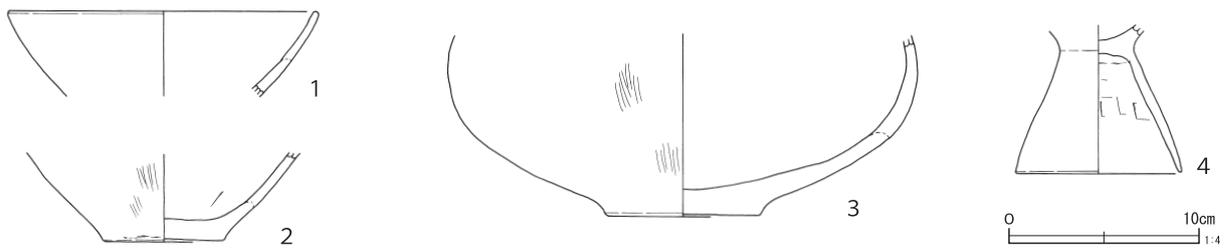
遺構の規模は、南西-北東方向は外法10.56m、内法9.05m、北西-南東方向は外法9.84m、内法8.40m、周溝の上場幅0.73~1.10m、下場幅0.55~0.76m、深さは20~40cmである。開口部は明確ではないものの、D区第101号溝跡の位置する溝であると仮定するならば、主軸方位はN-49°-Wとなる。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりはやや急で、断面形は逆台形、もしくは壘形である。

土師器の小破片が比較的多く出土したが、接合率が極めて低く、実測できた土師器は壺・高坏・台付甕など計4点(1~4)にとどまった。

なお、本遺構の南東側部分で検出されたD区第101号溝跡は、本遺構とD区第2号周溝状遺構をつなぐ連結溝と判断した。平面形は円弧状に近く、断面形は皿状である。規模は、南コーナーを起点として全長4.90m、上場幅が0.36~1.80m、下場幅が0.16~0.52m、深さは6~15cmである。溝の方位は概ねN-58°-Eである。

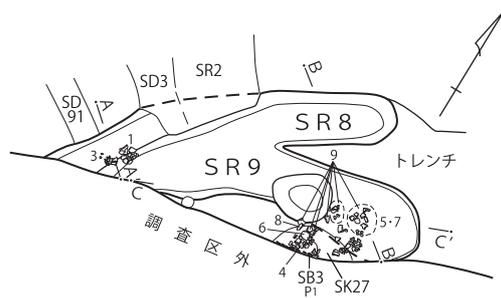
D区第2号周溝状遺構の周溝内に水が溜まった際、微地形的にみて連結溝(D区第101号溝跡)を通じて本遺構の周溝に流下し、さらに西側の溝に



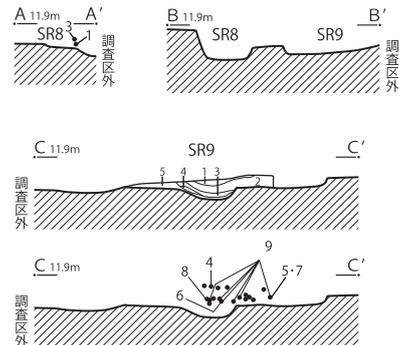
第102図 D区第6号周溝状遺構出土遺物

第29表 D区第6号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR6	D	土師器	高坏	10	(16.2)		[4.5]	A C F	普通	浅黄橙	No.1 器面風化著しく調整不明
2	SR6	D	土師器	壺	60		6.4	[4.7]	A C F	普通	浅黄橙	No.1 外面へラ磨きか 内面へラナデ 底面へラナデか 器面風化著しい
3	SR6	D	土師器	壺	40		(8.0)	[9.5]	C F G	普通	にぶい橙	No.2 胴部外面へラ磨きか 胴部内面・底部へラナデか
4	SR6	D	土師器	台付甕	95		8.7	[7.8]	C D F G	普通	橙	No.3 内面へラナデ 器面風化著しい



- SR9
- 1 黒灰色土 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・炭化物粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少
 - 2 黒灰色土 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) やや多
 - 3 黒褐色土 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少 炭化物粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) やや多
 - 4 灰褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 cm) 少 炭化物粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 微量
 - 5 黄灰色土 黒褐色土ブロック (0.5 ~ 1 cm) 少



第103図 D区第8・9号周溝状遺構

流れ込んだと推測される。

D区第8号周溝状遺構 (第103・104図)

I-14グリッドに位置する。D区第1号墳より古い。遺構の深度が浅く、重複するD区第9号周溝状遺構との新旧関係については把握することができなかった。また、他の重複遺構についても同様である。

東側は、試掘トレンチにより失われており、また西側は調査区外に続いているため、検出範囲は

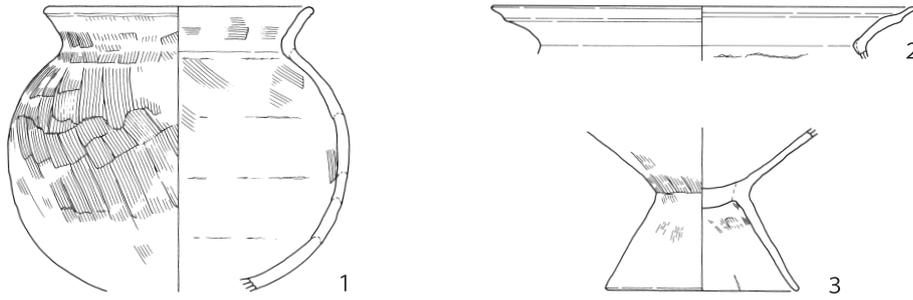
極めて小規模である。本遺構の平面形は円弧状である。

周溝の規模は、全長4.40mで、上場幅0.65m、下場幅0.50m、深さは5~48cmである。主軸方位は不明である。

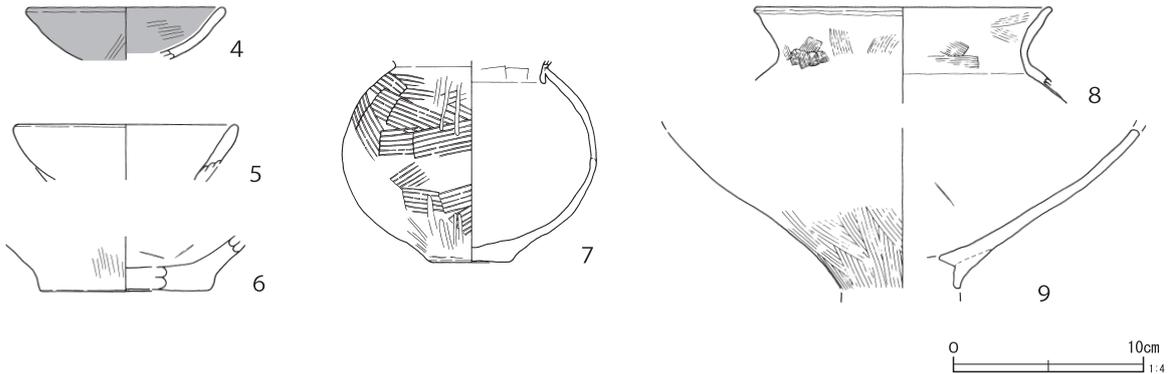
周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急であり、断面形は浅い部分では皿状であるが、深い部分では逆台形である。

図化できた土師器は3点 (1~3) である。

SR8



SR9



第104図 D区第8・9号周溝状遺構出土遺物

第30表 D区第8・9号周溝状遺構出土遺物観察表

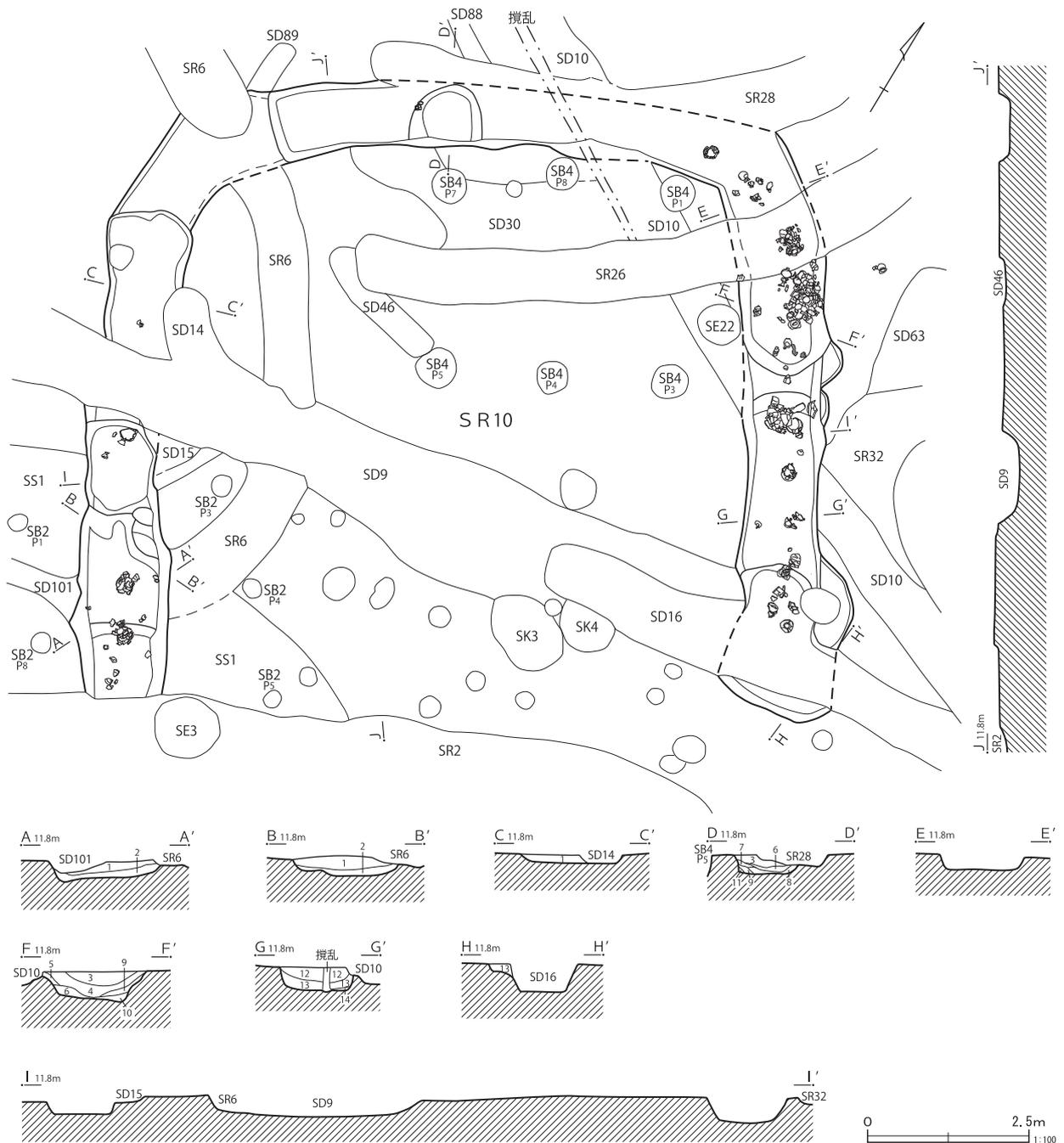
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR8	D	土師器	甕	50	(14.0)		[15.0]	A C D F G	普通	橙	No.2 口縁部内外面横ナデ 外面ハケ内面ハケナデ
2	SR8	D	土師器	甕	20	(22.0)		[2.8]	A B C F G	普通	橙	口縁上部内外面横ナデか 器面風化著しく調整不明瞭
3	SR8	D	土師器	台付甕	70		10.0	[8.6]	A C F G	普通	にぶい 橙	No.1 外面ハケ 内面ヘラナデか 脚部内面ハケとヘラナデ 器面風化している
4	SR9	D	土師器	器台	20	(10.3)		[2.7]	B C D F G	普通	にぶい 黄橙	No.13 内外面ヘラ磨き・赤彩
5	SR9	D	土師器	壺	40	(11.3)		[2.9]	A C D F	普通	橙	No.1 器面風化著しい
6	SR9	D	土師器	壺	20		(8.8)	[2.9]	A C D	普通	にぶい 黄橙	No.7 外面ヘラ磨き 内面・底部ヘラナデ
7	SR9	D	土師器	小型壺	85		4.0	[10.5]	A C F	普通	にぶい 赤褐	No.1 胴部外面ハケ後部分的にヘラ磨き 内面ヘラナデか 外面に黒斑あり
8	SR9	D	土師器	甕	15	(15.4)		[5.1]	A C D	普通	灰黄褐	No.9 口縁部内外面ハケ後横ナデ 肩部外面ハケか 内面ヘラナデか
9	SR9	D	土師器	台付甕	50			[8.3]	A C D E F G	普通	橙	No.1・5~7・10・12 外面ハケ 内面ヘラナデ 欠け口は輪積み部分

D区第9号周溝状遺構 (第103・104図)

I-14グリッドに位置する。D区第1号墳より古い。遺構の深度が浅く、重複するD区第8号周溝状遺構との新旧関係を把握することができなかった。また、他の重複遺構についても同様である。

東側は、試掘トレンチにより失われており、また西側は調査区外に続いているため、検出範囲は極めて小規模である。本遺構の平面形は円弧状である。

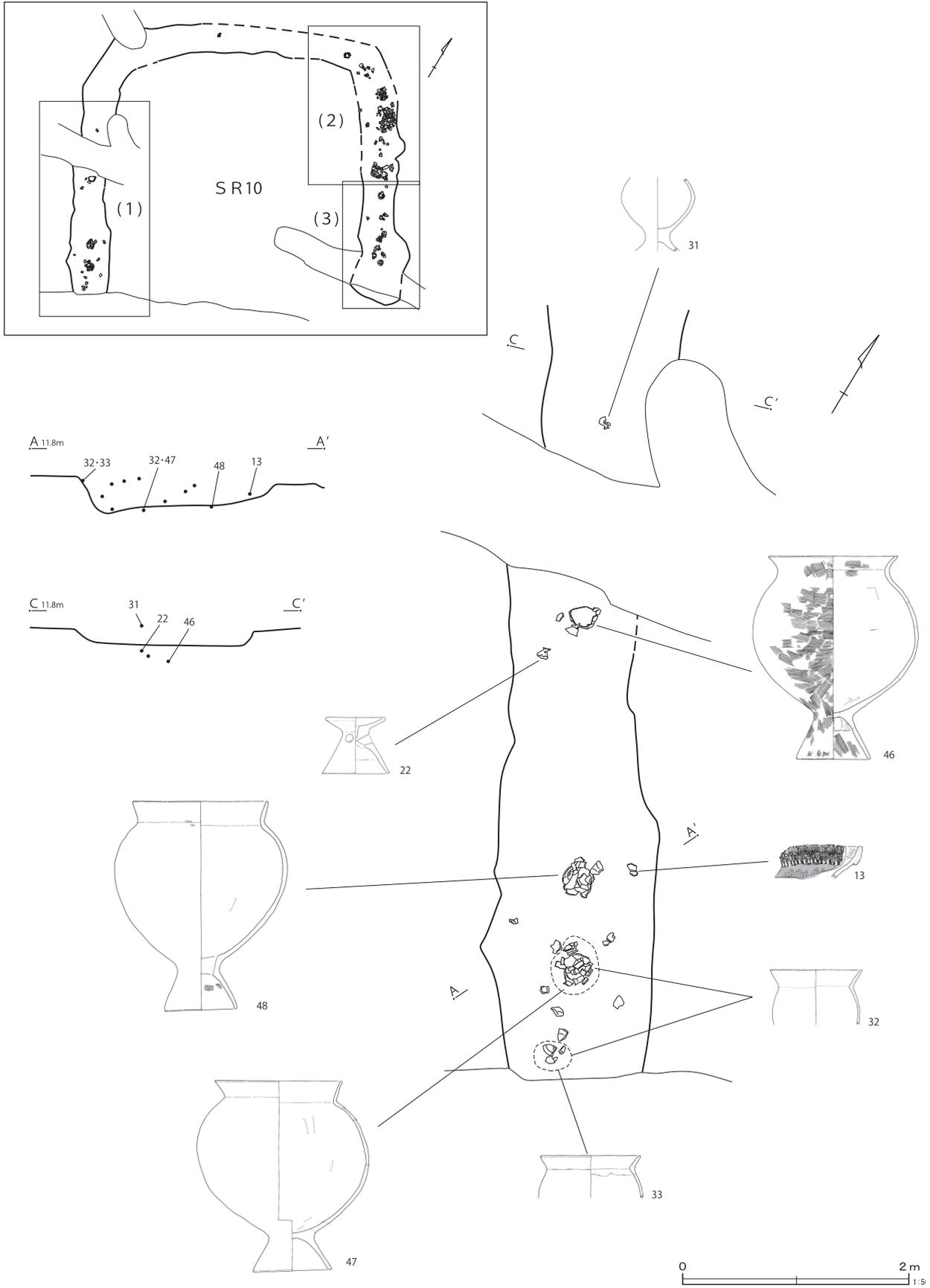
周溝の規模は、全長3.50mで、上場幅0.72m、下場幅0.62~(0.80)m、深さは5~28cmである。主



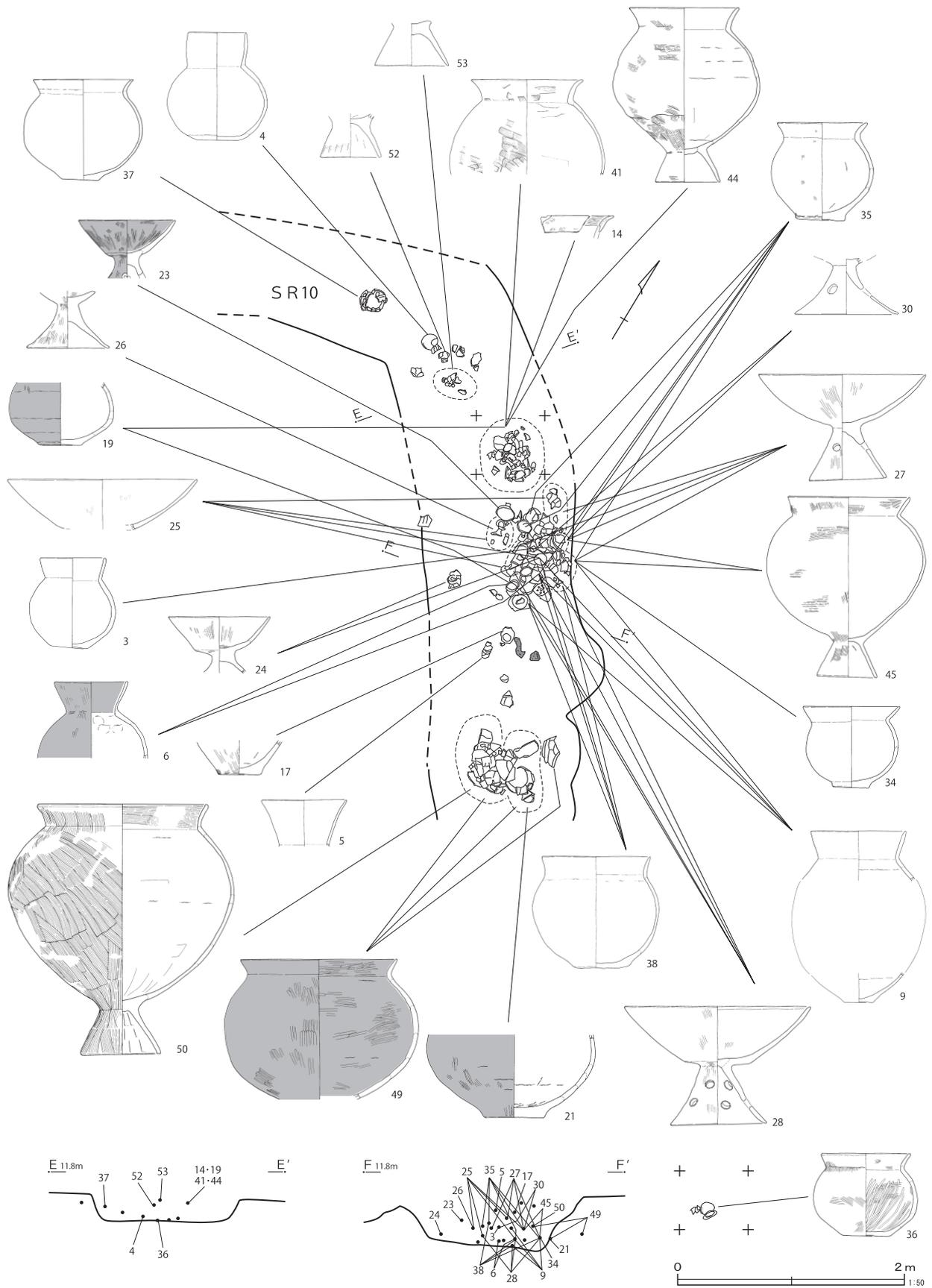
SR10

- 1 黒灰色土 黄褐色粘土粒子(0.2 cm)・褐色粘土粒子(0.2 cm)少 焼土粒子(0.1 cm)微量
- 2 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック(0.2~1 cm)多 褐色粘土ブロック(0.2~0.8 cm)・黒色土ブロック(0.5~1 cm)やや多
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒子(0.1~0.3 cm)・鉄分粒子(0.1~0.3 cm)多 自然堆積
- 4 黒褐色土 黄褐色土粒子(0.1~0.3 cm)・黄褐色土ブロック(1~3 cm)・鉄分粒子(0.1~0.3 cm)少 自然堆積
- 5 黄褐色土 黄褐色土ブロック(1~3 cm)多 黒褐色土粒子(0.1~0.3 cm)・鉄分粒子(0.1~0.3 cm)少 自然堆積
- 6 灰褐色土 黄褐色土粒子(0.1~0.3 cm)極多 黒褐色土粒子(0.1~0.3 cm)多 黒褐色土ブロック(1~3 cm)・鉄分粒子(0.2~0.4 cm)少 自然堆積
- 7 黒褐色土 黄褐色土粒子(0.1~0.3 cm)多 鉄分粒子(0.1~0.3 cm)少 自然堆積
- 8 黒褐色土 黄褐色土粒子(0.1~0.3 cm)多 鉄分粒子(0.1~0.3 cm)少 自然堆積
- 9 黒褐色土 黄褐色土粒子(0.1~0.3 cm)多 鉄分粒子(0.1~0.3 cm)少 自然堆積
- 10 黒褐色土 黄褐色土粒子(0.1~0.3 cm)微量 黄褐色土ブロック(3~5 cm)少 自然堆積
- 11 黄褐色土 鉄分粒子(0.1~0.3 cm)少 自然堆積
- 12 黒褐色土 黄褐色粘土粒子(0.3~0.5 cm)少 焼土粒子(0.1~0.2 cm)微量 鉄分均質にやや多
- 13 黒褐色土 灰色粘土粒子(0.1~0.2 cm)多 灰色粘土ブロック(1 cm)微量 鉄分均質に少
- 14 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック(2~5 cm)多

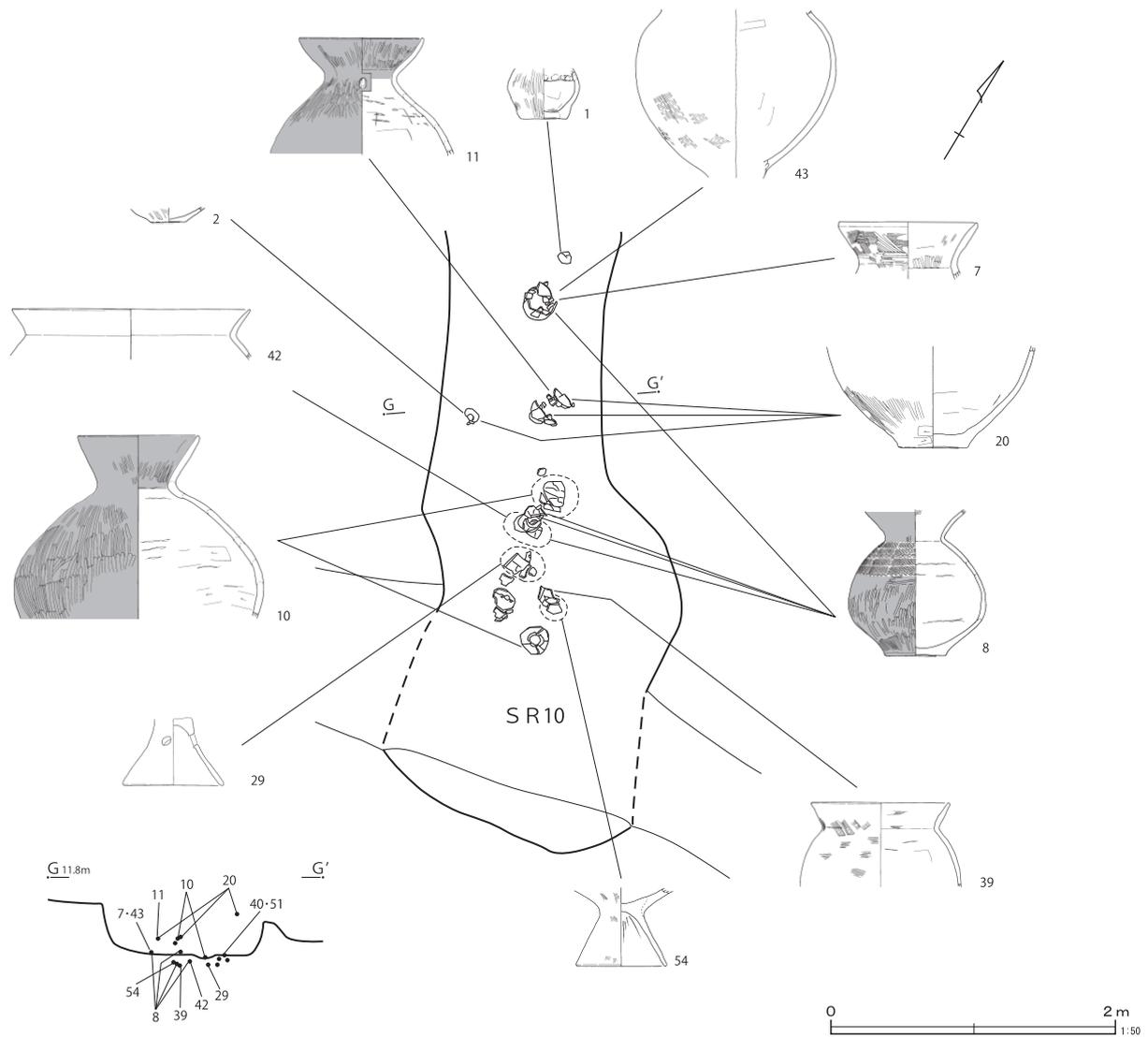
第105図 D区第10号周溝状遺構



第106图 D区第10号周沟状遗构遗物出土状况(1)



第107图 D区第10号周溝状遺構遺物出土狀況(2)



第108図 D区第10号周溝状遺構遺物出土状況（3）

軸方位は不明である。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

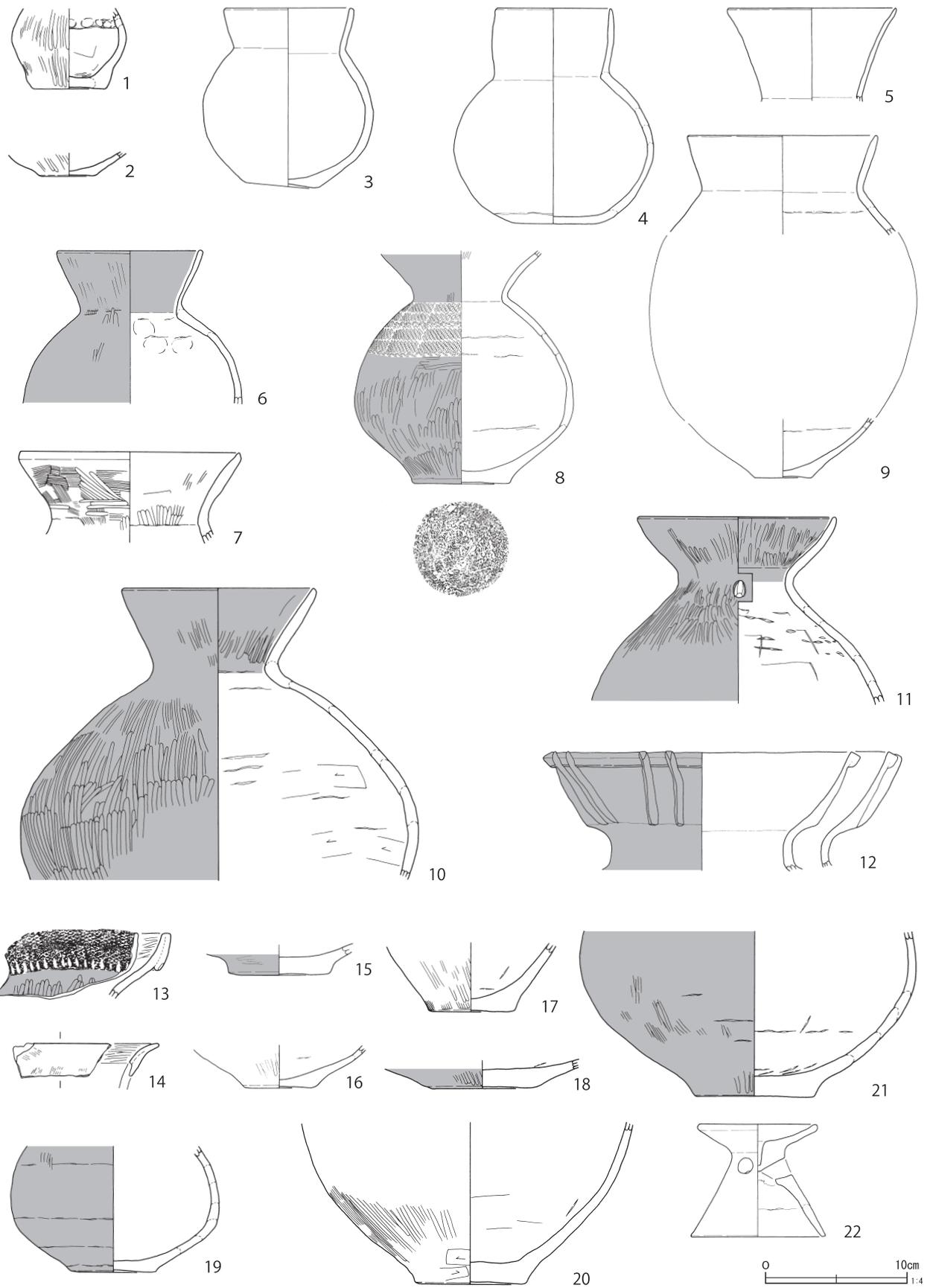
周溝の底面まで掘り下げた段階で、土壌状の落ち込みが検出されたが、溝内土壌であるのか、別遺構であるのかは確認できなかった。平面形は楕円形で、短径×長径×確認面からの深さは66.2×80.1×36.8cm、周溝底面からの深さは17.9cmである。

周溝東端部から、土師器の破片が比較的まとまった状態で出土した。これらの土師器の内、図化できたのは壺・甕など計6点（4～9）である。

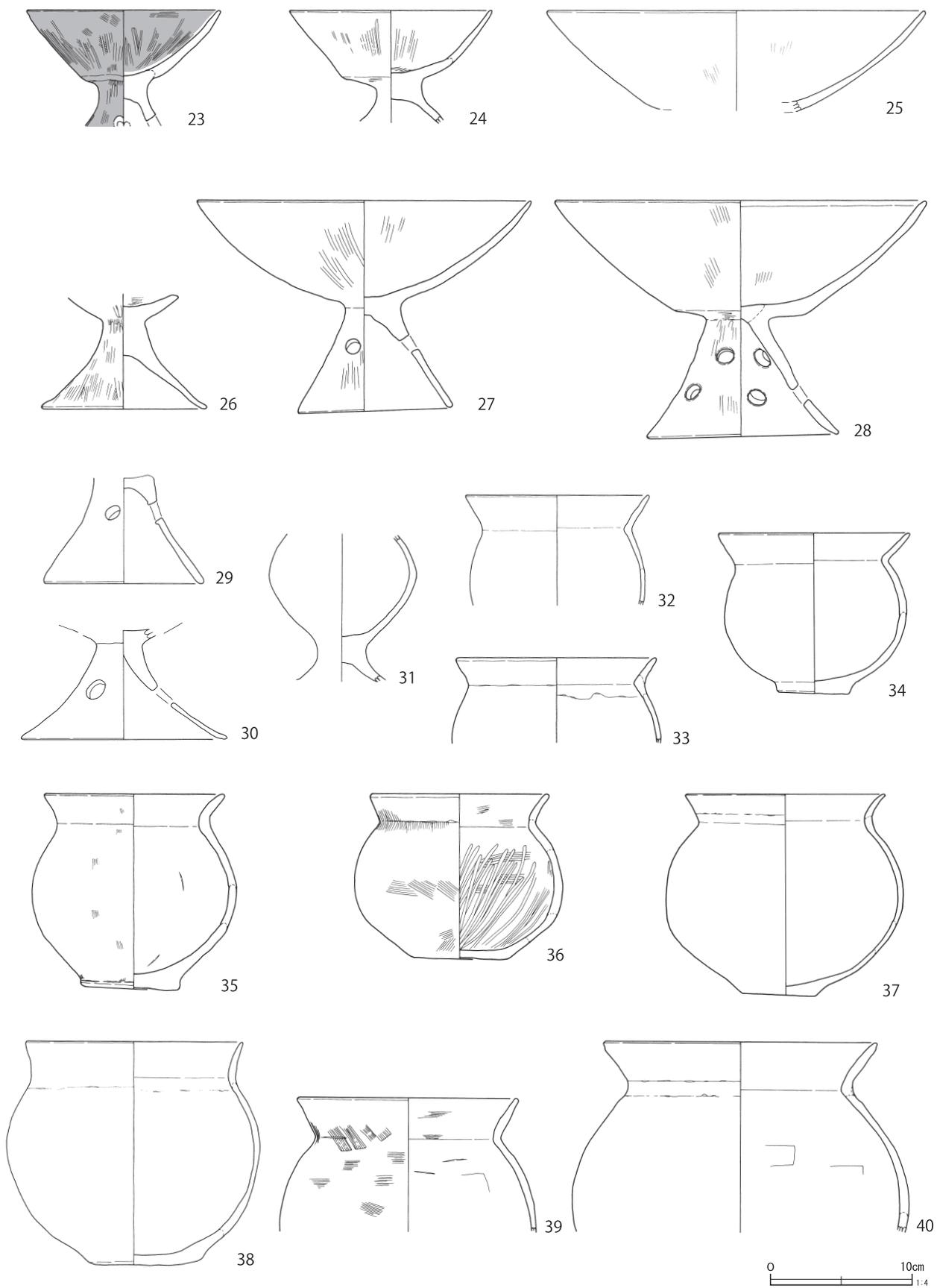
D区第10号周溝状遺構（第105～112図）

G・H-13～15グリッドに位置する。ほぼ直線の周溝が「コ」の字状に検出された。D区第26号周溝状遺構より新しく、D区第6・28号周溝状遺構、D区第10・14・16・46号溝跡、D区第1号墳より古い。その他の重複遺構との新旧関係については捉えられなかった。

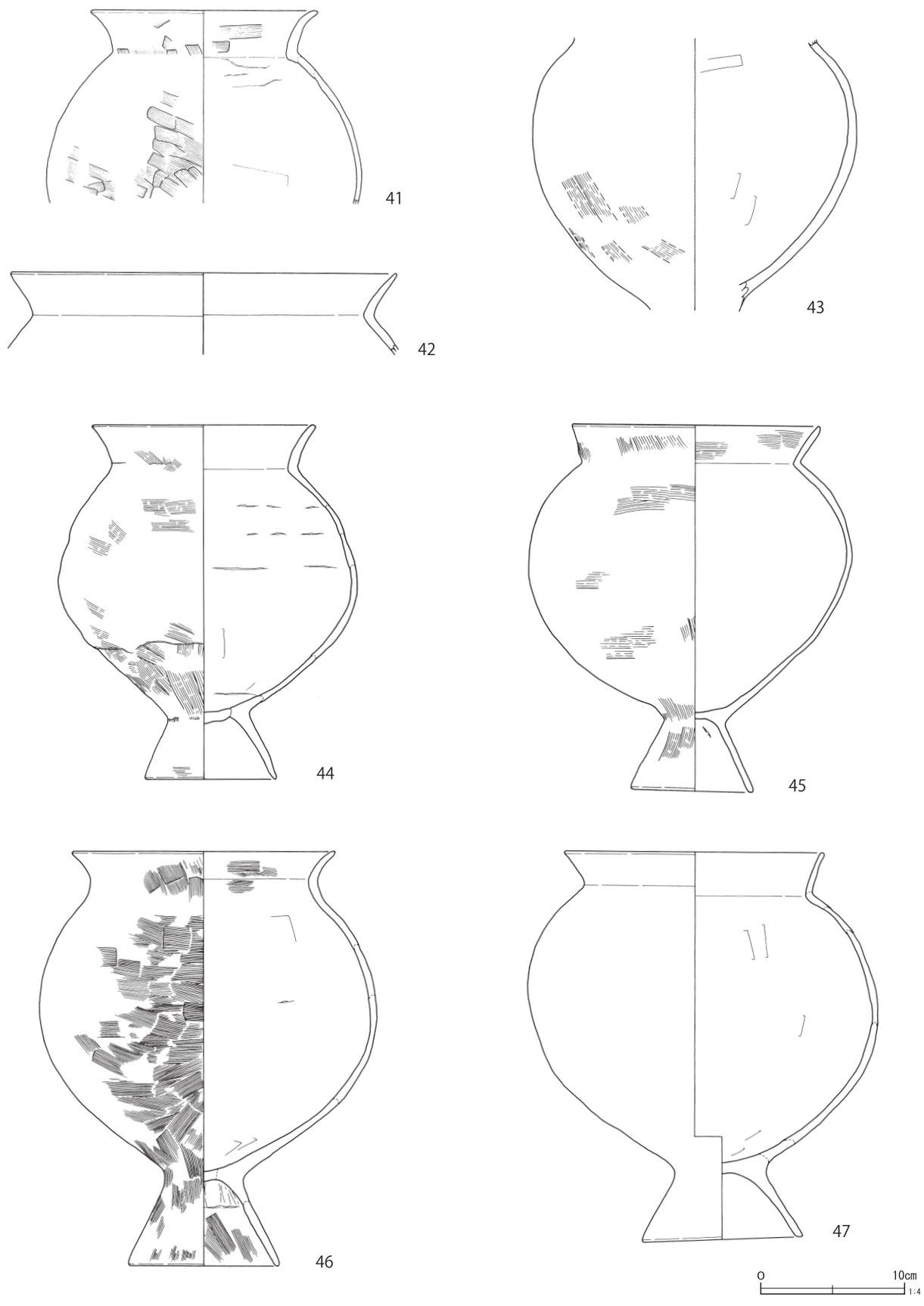
周溝はやや湾曲するものの直線状で、平面形は「コ」の字状に近い。南溝は確認されなかったこと、東溝南端が閉じていること、以上の2点から開口部と推定される。開口の規模は8.59mである。



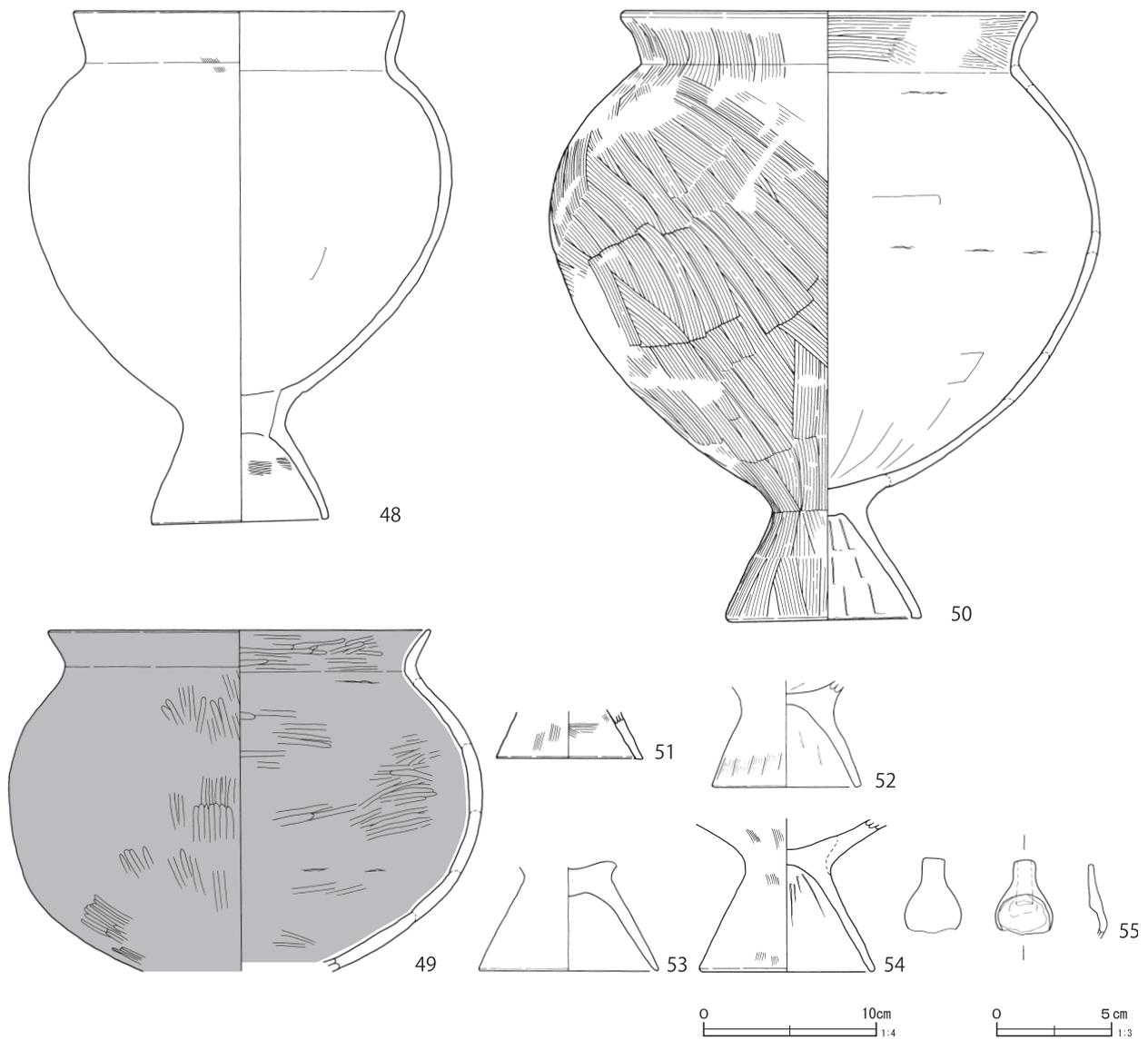
第109图 D区第10号周溝状遺構出土遺物 (1)



第110图 D区第10号周沟状遗构出土遗物(2)



第111图 D区第10号周沟状遗构出土遗物(3)



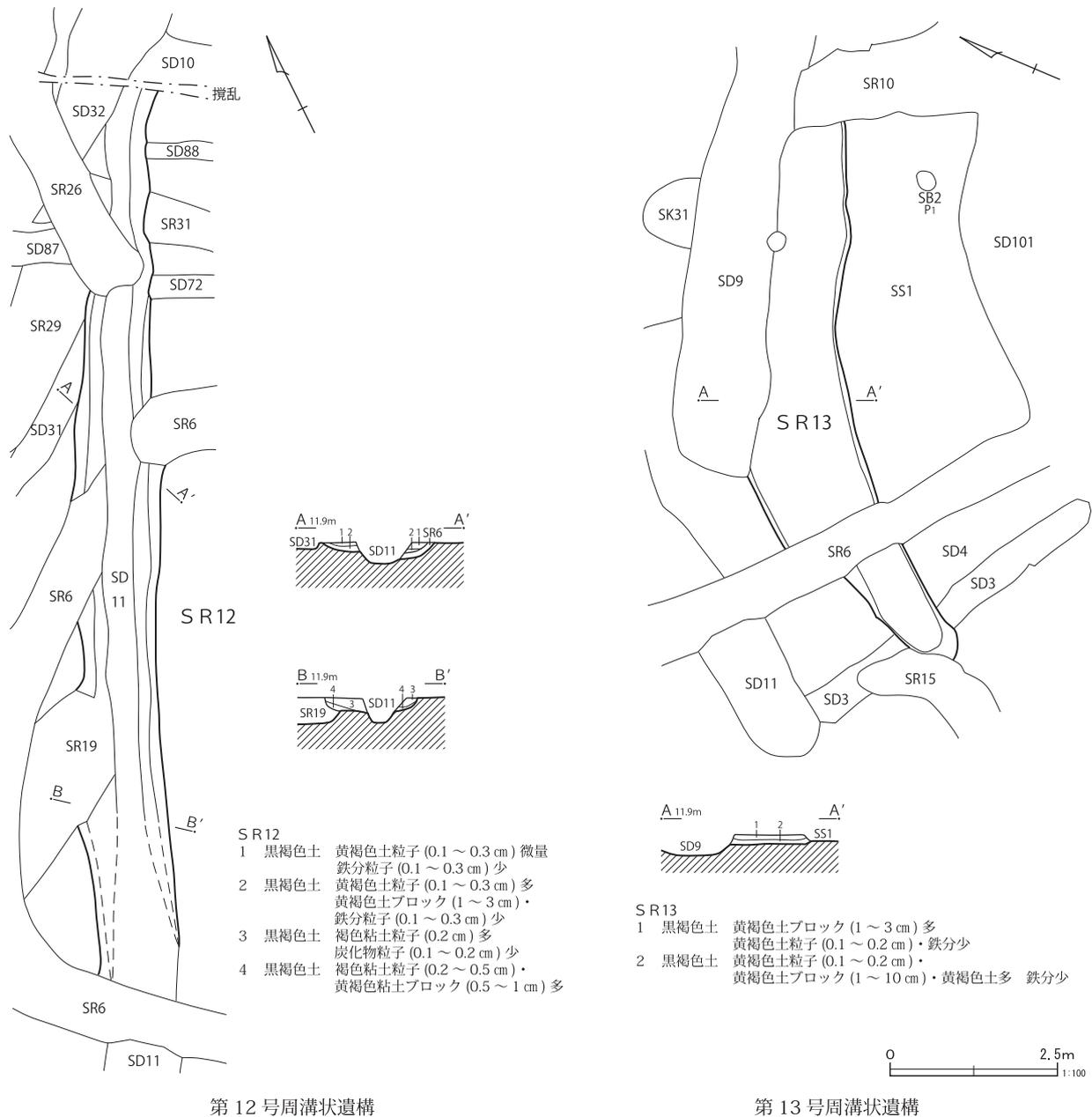
第112図 D区第10号周溝状遺構出土遺物（4）

第31表 D区第10号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR10	D	土師器	小型壺	60		5.0	[5.7]	A B F G	普通	浅黄橙	No.51 外面へラ磨き 内面上位指頭圧痕あり 中・下位へラナデとナデ 底部へラナデ 外面に黒斑あり 器面風化している
2	SR10	D	土師器	小型壺	75		3.8	[1.7]	A C D G	普通	にぶい黄橙	No.55 外面粗いへラ磨き 内面・底部へラナデ 外面に黒斑あり
3	SR10	D	土師器	小型壺	95	8.8	4.7	12.6	A C D F	普通	橙	No.34 器面風化著しく調整不明
4	SR10	D	土師器	壺	85	(8.0)	5.8	15.3	A C D F G I	普通	にぶい黄橙	No.19 器面風化著しく調整不明 外面に黒斑あり
5	SR10	D	土師器	壺	30	(11.8)		[6.6]	A B C F G	普通	橙	No.45 器面風化著しく調整不明瞭
6	SR10	D	土師器	小型壺	70	10.0		[10.8]	A C E F	普通	にぶい黄橙	No.38・40 口縁部外面ハケ後へラ磨き 口縁部内面へラ磨きか 内面上位に指頭圧痕ありそれ以下へラナデとナデか 外面・口縁部内面赤彩

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
7	SR10	D	土師器	壺	20	(15.3)		[6.4]	A D F G	普通	にぶい黄橙	No.52 外面ハケ後粗いヘラ磨き 内面ヘラナデ後ヘラ磨き 造りは非常に雑である
8	SR10	D	土師器	壺	95		6.6	[16.5]	A C D	普通	にぶい黄橙	No.58~60 口縁部内外面・胴部中・下位ヘラ磨き 肩部原体 LR 横回転上→下方へ施文 縄文施文後 L 原体の結節を回転施文 内面ヘラナデか 底部ヘラナデ 口縁部・胴部中・下位外面に赤彩
9	SR10	D	土師器	壺	60	(13.0)	3.9	[24.3]	A C D G	普通	橙	No.35・37・38・41 器面風化著しい
10	SR10	D	土師器	壺	40	13.5		[20.7]	A F	普通	にぶい黄橙	No.57・68 外面・口縁部内面ヘラ磨き 胴部内面ヘラナデ 外面・口縁部内面赤彩 器面風化している
11	SR10	D	土師器	壺	60	13.6		[13.3]	A C D G	普通	にぶい橙	No.53 口縁部内面・外面ヘラ磨き 胴部内面ヘラナデ 外面・口縁部内面赤彩 器面風化している
12	SR10	D	土師器	壺	20	(21.1)		[8.4]	A F G	普通	橙	No.77 外面赤彩
13	SR10	D	土師器	壺	5			[4.6]	A F	普通	にぶい黄橙	No.11 外面口縁部網目状捺糸文あるが風化の為不明 外面ヘラ磨き 内外面赤彩
14	SR10	D	土師器	甕	5			[2.3]	A B D F G	普通	にぶい橙	No.25 口縁外面ハケ後横ナデか 口縁内面横ナデ後ヘラ磨きか 器面風化している
15	SR10	D	土師器	壺	80		(7.2)	[2.1]	F G	普通	にぶい橙	外面ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナデか 底部ヘラ削り 外面赤彩 器面風化著しい
16	SR10	D	土師器	壺	60		(4.2)	[3.0]	A C F	普通	にぶい橙	外面ヘラ磨き 内面ヘラナデか 底部ヘラ削り 外面に黒斑あり 器面風化している
17	SR10	D	土師器	壺	50		6.0	[4.9]	A C D F	普通	灰黄褐	No.44 外面ハケ後ヘラ磨き 内面ヘラナデ 底部ヘラナデか 器面風化している
18	SR10	D	土師器	壺	40		7.4	2.0	A C D F G I	普通	にぶい黄橙	外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 底部ヘラナデか 外面赤彩 器面は風化著しい
19	SR10	D	土師器	壺	70		6.0	[8.9]	A C F	普通	浅黄	No.25・40 外面ヘラ磨きか 内面・底部ヘラナデか 外面赤彩・黒斑 器面風化著しい
20	SR10	D	土師器	壺	65		(7.8)	[11.5]	A C D F G	普通	にぶい褐	No.53~55 胴部内面下位ヘラナデ 内面底部ナデ
21	SR10	D	土師器	壺	85		8.0	[11.7]	A C F	普通	にぶい橙	No.49 胴部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 底部ヘラナデか 外面に黒斑あり 外面赤彩 器面風化著しく調整不明瞭
22	SR10	D	土師器	器台	70	(8.1)	(9.1)	8.0	A C D F I	普通	橙	No.10 坏部上部からの穿孔は途中で止まっている 脚部穿孔3ヶ所(外側から) 内外面風化著しく調整不明瞭
23	SR10	D	土師器	高坏	95	13.4		[8.2]	A C F G	普通	にぶい橙	口縁上部内外面横ナデ 外面ハケ後ヘラ磨き 穿孔4ヶ所(外から内) 内外面赤彩
24	SR10	D	土師器	高坏	95	14.0		[8.0]	A G	普通	橙	No.29・35 内外面ヘラ磨き 器面風化著しく調整不明瞭
25	SR10	D	土師器	高坏	60	(26.4)		[7.1]	A C D F	普通	橙	No.26・28・36・38・42 内外面ヘラ磨き 器面風化著しい
26	SR10	D	土師器	高坏	80		(11.4)	[8.1]	C D F	普通	にぶい橙	No.28 外面ハケ後ヘラ磨き 内面ヘラ磨きか 脚部内面ヘラナデか 器面風化している
27	SR10	D	土師器	高坏	70	23.4	(10.5)	15.0	A C D	普通	黄橙	No.26・33・36・37 外面ヘラ磨き 内面ヘラナデか 器面風化著しい 穿孔3ヶ所
28	SR10	D	土師器	高坏	80	26.0	13.3	16.8	C D F G	普通	橙	No.37・38・41・42 器面風化著しい 坏部内外面・脚部外面ヘラ磨き 穿孔段違いに10孔(上段5孔下段5孔)
29	SR10	D	土師器	高坏	90		11.0	[7.5]	A C F G	普通	にぶい橙	No.61 外面ヘラ磨きか 脚部内面ヘラナデか 穿孔3ヶ所
30	SR10	D	土師器	高坏	80		14.0	[7.7]	A C D	普通	橙	No.34・36 外面ヘラ磨きか 内面ヘラナデか 穿孔4ヶ所 器面風化著しい
31	SR10	D	土師器	小型台付甕	45			[10.4]	A D	普通	黄橙	No.7 外面ヘラナデとナデか 内面・底部内面ナデか 器面風化著しい
32	SR10	D	土師器	甕	30	(12.7)		[7.8]	A C D	普通	にぶい黄橙	No.1・5 器面は風化著しく調整不明
33	SR10	D	土師器	甕	60	(13.8)		[6.1]	A C D F	普通	橙	口縁部内外面横ナデ 胴部外面ヘラ削りか 胴部内面ヘラナデか 器面風化著しい
34	SR10	D	土師器	鉢	80	13.2	4.8	11.3	A C F	普通	にぶい橙	No.37 器面風化著しく調整不明瞭
35	SR10	D	土師器	小型甕	80	12.4	6.8	13.8	A C F G	普通	にぶい黄橙	No.31・32・36~38 口縁部内外面横ナデ 胴部外面ハケ・内面ヘラナデ 底部ヘラナデか 器面風化著しい

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
36	SR10	D	土師器	甕	100	12.3	6.7	11.8	A B C D F	普通	にぶい 橙	No.70 口縁部内外面横ナデか 外面ハケ後 ヘラ磨きか 内面ハケ後ヘラ磨き 器面風 化著しい
37	SR10	D	土師器	甕	70	13.8	5.1	14.3	A C D E F	普通	橙	No.18 口縁部内外面横ナデか 内外面風化 著しく調整不明瞭
38	SR10	D	土師器	甕	80	15.0	7.8	15.8	A C D E F	普通	橙	No.31・37・38・41 口縁部内外面横ナデか 胴部外面ヘラ削り・内面ヘラナデか 口縁 部内外面・胴部外面に黒斑あり
39	SR10	D	土師器	甕	30	(15.3)		[9.5]	A B C D G	普通	明褐色	No.67 口縁部内外面ハケ後横ナデか 胴部 外面ハケ・内面ヘラナデ 器面風化著しい
40	SR10	D	土師器	甕	25	(19.0)		[13.5]	C D F I	普通	橙	No.63 口縁部内外面横ナデ 胴部外面ヘラ ナデか 胴部内面ヘラナデ 器面風化著し い
41	SR10	D	土師器	甕	50	15.2		[13.4]	A C D F G	普通	浅黄褐	No.25 口縁部内外面横ナデ 胴部外面ハ ケ・内面ヘラナデ
42	SR10	D	土師器	甕	15	(26.6)		[5.7]	A C D	普通	にぶい 橙	No.60
43	SR10	D	土師器	台付甕	60			[18.9]	A F G	普通	灰黄褐	No.52 外面ハケ 内面ヘラナデか 器面風 化著しい
44	SR10	D	土師器	台付甕	70	15.2	9.0	24.6	A C D F	普通	にぶい 黄橙	No.25 口縁部ハケ後横ナデか 被熱による 赤色化顕著 外面煤付着 胴部内面輪積み 痕が比較的顕著 器面風化著しい
45	SR10	D	土師器	台付甕	65	17.0	8.2	25.5	A C F G	普通	にぶい 黄橙	No.36・37 外面ハケ 内面・脚部内面ヘラ ナデ 器面風化著しい
46	SR10	D	土師器	台付甕	60	(18.0)	10.2	29.2	A C F	普通	にぶい 黄褐	No.8 外面・口縁部内面非常に目の細かい ハケ 胴部内面ヘラナデ 脚部内面上位は 指押さえ
47	SR10	D	土師器	台付甕	80	17.8	11.0	27.2	A C E F	普通	にぶい 橙	口縁部内外面横ナデか 胴部～脚部外面ハ ケナデか 内面ヘラナデか 器面風化著し い 胴部内外面に大黒斑あり 胴部外面被 熱のため一部赤色化した部分あり
48	SR10	D	土師器	台付甕	80	19.0	10.2	29.8	A C D F	普通	褐灰	No.6 口縁部内外面横ナデか 胴部外面ハ ケナデか 胴部内面ヘラナデか 被熱のた め胴～脚部外面の一部が赤色化している 胴部外面に大黒斑あり 口縁部内面に黒斑 あり 内外面風化著しい
49	SR10	D	土師器	壺	70	21.6		[19.9]	A B C F G	普通	にぶい 褐	No.48～50 口縁部内外面横ナデ 内外面ヘ ラ磨き 全面赤彩 器面風化著しい
50	SR10	D	土師器	台付甕	80	23.5	11.1	35.5	A C F	普通	にぶい 赤褐	No.48・72 口縁部内外面横ナデ 内面・脚 部内面ヘラナデ 内面胴部下位炭化物付着 胴部外面に大黒斑あり 被熱により胴部下 半が赤色化している
51	SR10	D	土師器	台付甕	45		(8.4)	[2.7]	A D F	普通	にぶい 褐	No.63 外面ハケ 内面ハケ後ナデ 器面風 化著しく調整不明瞭
52	SR10	D	土師器	台付甕	90		8.1	[6.2]	A C D E	普通	橙	No.20 外面ハケ 内面ヘラナデか 脚部内 面ヘラナデ
53	SR10	D	土師器	台付甕	40.0		(10.2)	[6.0]	C	普通	にぶい 橙	No.23 外面被熱のため若干赤色化している 器面風化著しい
54	SR10	D	土師器	台付甕	80		9.8	[8.8]	C D F	普通	橙	No.66 外面ハケ 内面・脚部内面ヘラナデ 器面風化著しい
55	SR10	D	土製品	不明	80	長さ4.2cm 幅3.2cm 注ぎ口1.2cm×1.2cm 注ぎ口(穴)0.8cm×0.7cm 重さ12.7g			A F	普通	橙	壺のミニチュアまたは飯事か



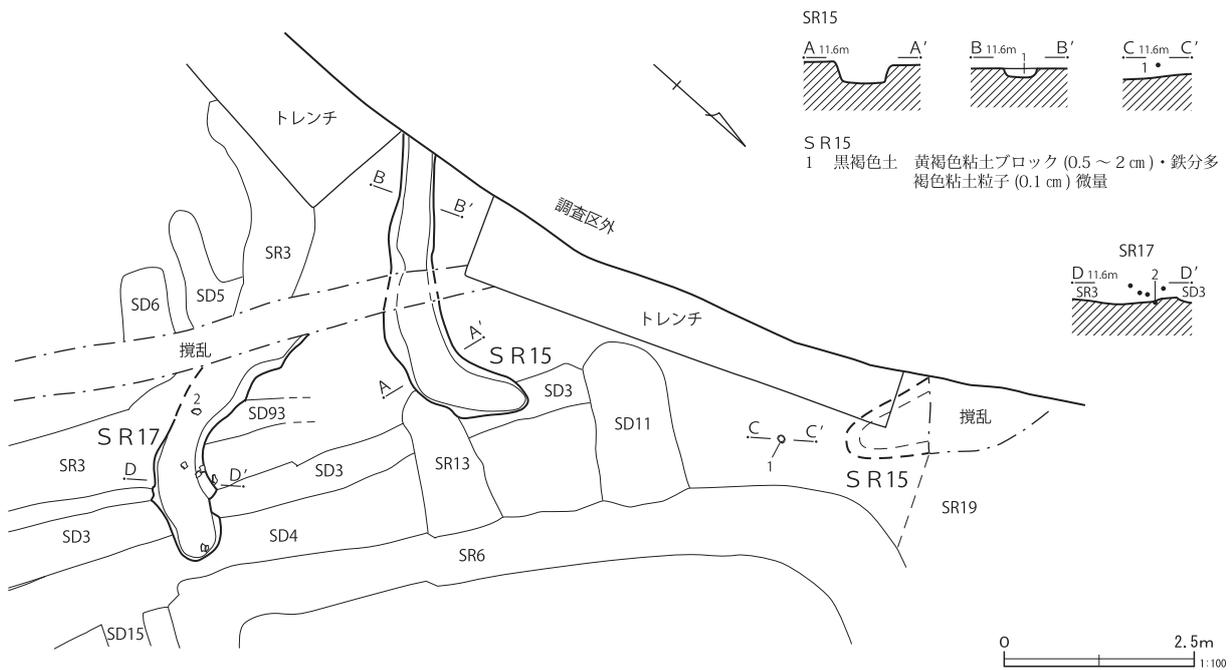
遺構の規模は、東西方向の外法11.50m、内法9.11m、南北方向の外法9.95m、内法8.95mで、主軸方位はN-30°-Wである。周溝の規模は、上場幅1.11~1.25m、下場幅0.83~0.91m、深さ15~50cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は浅い部分では皿状であるが、深い部分では逆台形に近い。

西溝の中央から南半にかけてと、東溝全域から土師器片がまとまった状態で出土した。これらの土師器片の接合率は比較的高く、図化できた遺物は55点(1~55)に上った。

D区第12号周溝状遺構 (第113図)

G・H-13グリッドに位置する。D区第6・19号周溝状遺構より新しく、D区第11号溝跡より古い。他の重複遺構との新旧関係については不明であ



第114図 D区第15・17号周溝状遺構



第115図 D区第15・17号周溝状遺構出土遺物

第32表 D区第15・17号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR15	D	土師器	台付甕	85		8.8	[7.6]	A C F	普通	浅黄橙	No.1 内側底面ヘラナデ 脚部内面上位に指頭圧痕 脚部内面ヘラナデ 器面風化著しい
2	SR17	D	土師器	台付甕	75		8.7	[6.7]	C D F G	普通	橙	No.5 外面被熱・風化著しい

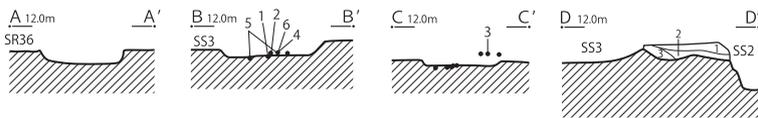
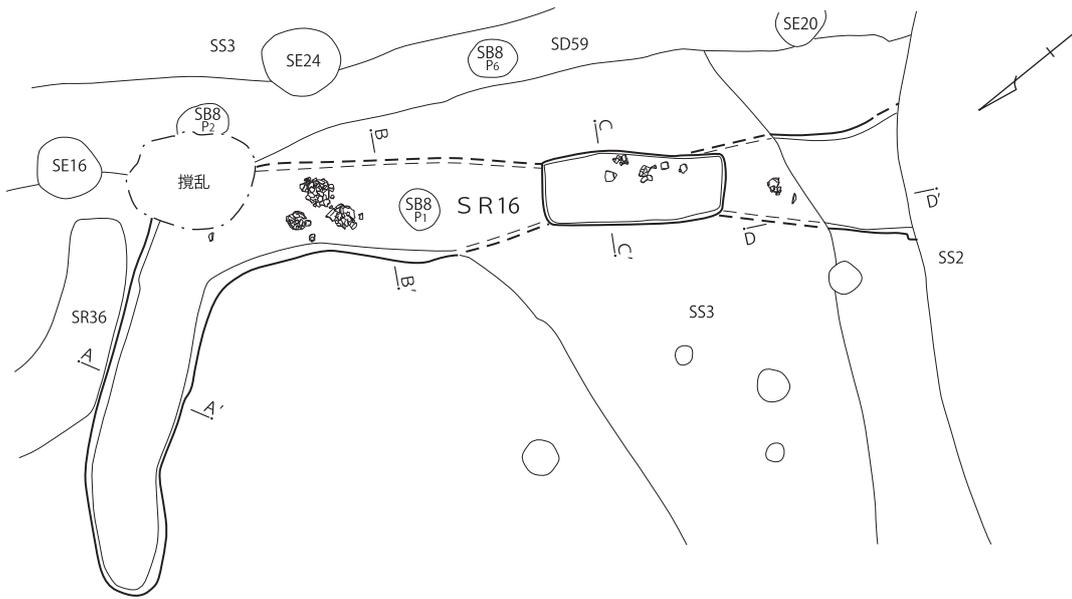
る。

湾曲や屈曲した部分はみられず、南北方向の一条のみの検出である。周溝は南北両端とも途切れている。北側は攪乱によるものであるが、南側については、他遺構との重複のためと推測される。本遺構の平面形は直線状である。

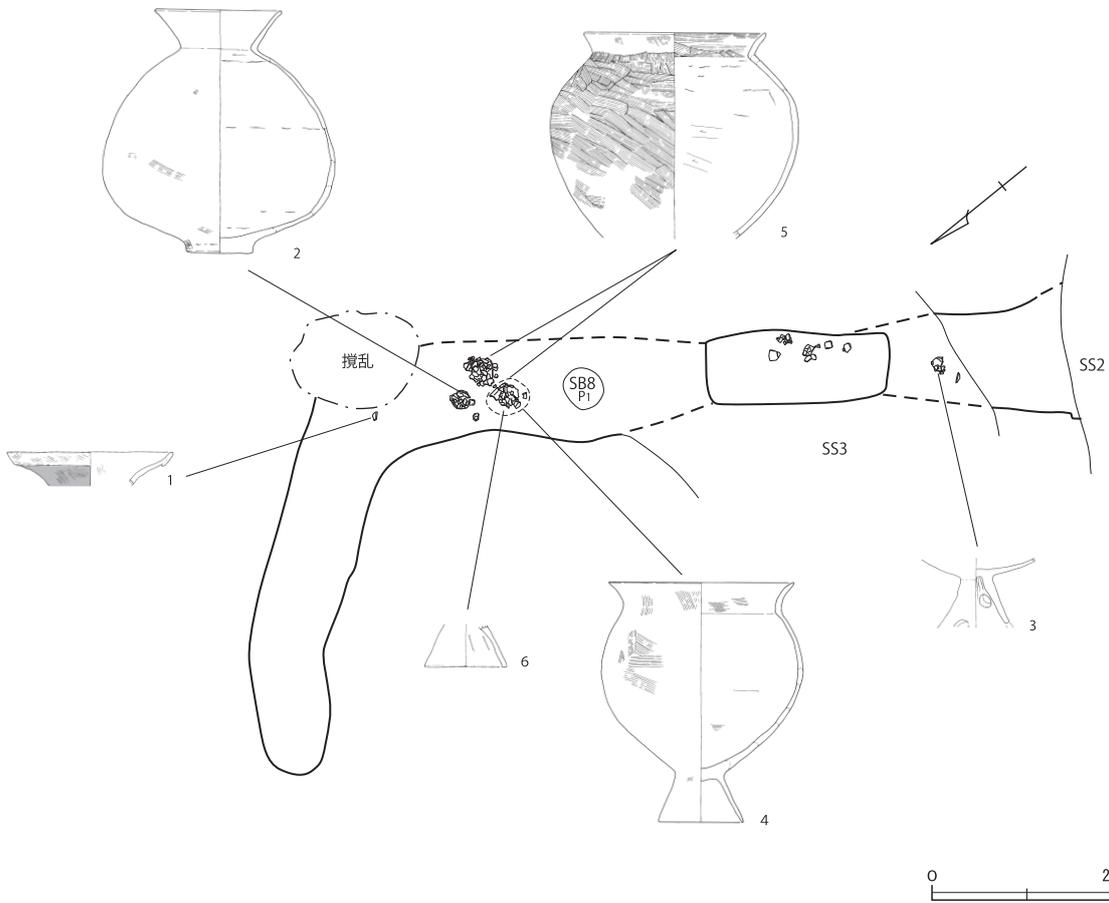
検出された周溝の規模は、全長13.36m、上場幅1.40~1.75m、下場幅1.00~1.25m、深さは21~50cmである。周溝の方位はN-26°-Eである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

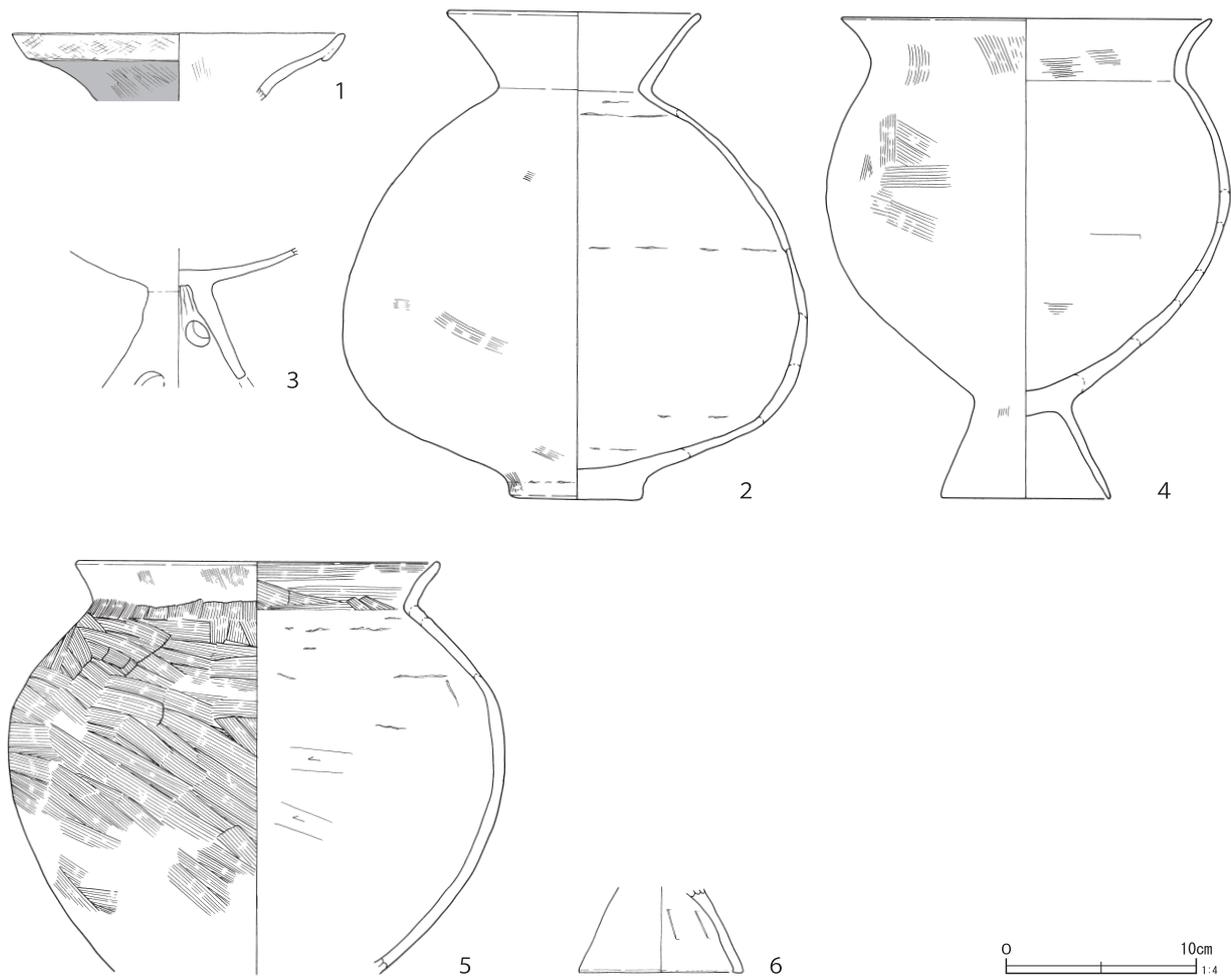
遺物は出土しなかった。



- SR16
- 1 黒褐色土 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 微量
 - 2 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.2 ~ 0.7 cm) やや多
 - 3 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 少
 - 褐色粘土ブロック (0.5 cm) 多
 - 褐色粘土ブロック (1 cm) 少



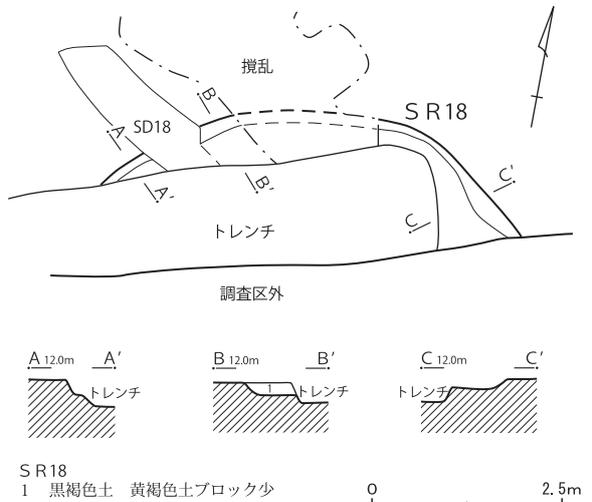
第116図 D区第16号周溝状遺構・遺物出土状況



第117図 D区第16号周溝状遺構出土遺物

第33表 D区第16号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR16	D	土師器	壺	60	17.6		[3.5]	A F	普通	明赤褐	No.1 口縁部網目状捻糸文 内外面ヘラ磨き 頸部外面赤彩 器面風化著しい
2	SR16	D	土師器	壺	50	(13.1)	7.0	25.8	C F G	普通	にぶい黄橙	No.2 口縁部内外面横ナデ後ヘラ磨きか 外面ハケ後ヘラ磨きか 内面・底部ヘラナデか 外面に黒斑 器面風化著しい
3	SR16	D	土師器	高坏	60			[7.4]	C D F	普通	にぶい橙	No.11 内外面ヘラ磨きか 脚部内面上位紋り 中・下位ヘラナデとナデか 段違いの穿孔6ヶ所(上段3孔下段3孔外面からの穿孔)
4	SR16	D	土師器	台付甕	90	19.2	8.8	25.5	A C D F G	普通	にぶい褐	No.5・15・16 口縁部内外面横ナデ 外面ハケ 内面・脚部内面ヘラナデか 器面風化著しい 外面被熱のため一部赤色化 外面一部煤付着
5	SR16	D	土師器	甕	70	18.8		[21.7]	A C F	普通	にぶい赤褐	No.4・5 口縁部内外面ハケ後横ナデ 胴部外面ハケ 内面ヘラナデ 外面に黒斑
6	SR16	D	土師器	台付甕	35		(8.6)	[4.5]	A C	普通	にぶい橙	No.5 外面ナデか 内面ヘラナデ



第118図 D区第18号周溝状遺構

D区第13号周溝状遺構 (第113図)

H-13・14グリッドに位置する。D区第9号溝跡、D区第1号墳よりも古い、他の重複遺構との新旧関係については不明である。

やや湾曲した南西-北東方向の、一条のみの検出である。周溝は両端とも途切れている。北東側は他遺構との重複のためと推測されるが、南西側は開口部の可能性が考えられる。本遺構の平面形は湾曲しており、この範囲からの所見であるが、円形、もしくは楕円形と推定される。

検出された周溝の規模は、全長8.28m、上場幅0.90~1.75m、下場幅0.75~1.60m、深さは14cmである。本遺構の主軸方位は不明である。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

遺物は出土しなかった。

D区第15号周溝状遺構 (第114・115図)

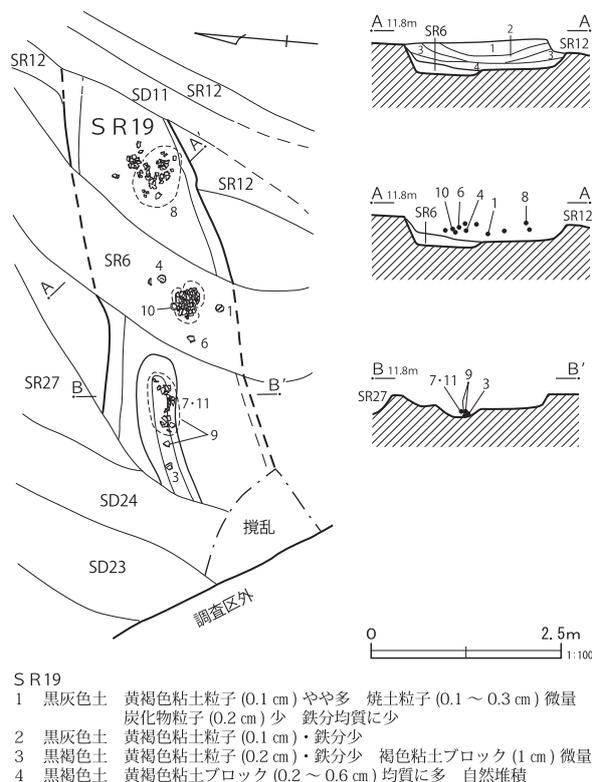
H・I-13グリッドに位置する。北側は閉じているが、南側は調査区外に続いている。D区第1号墳よりも古い、この他の重複遺構との新旧関係については不明である。

やや湾曲した南西-北東方向の、一条のみの検出である。北側で周溝が閉じているが、方位的にみて、開口部とは考えにくい。本遺構の平面形は湾曲しており、この範囲からの所見であるが、全体的には円形、もしくは楕円形と推定される。

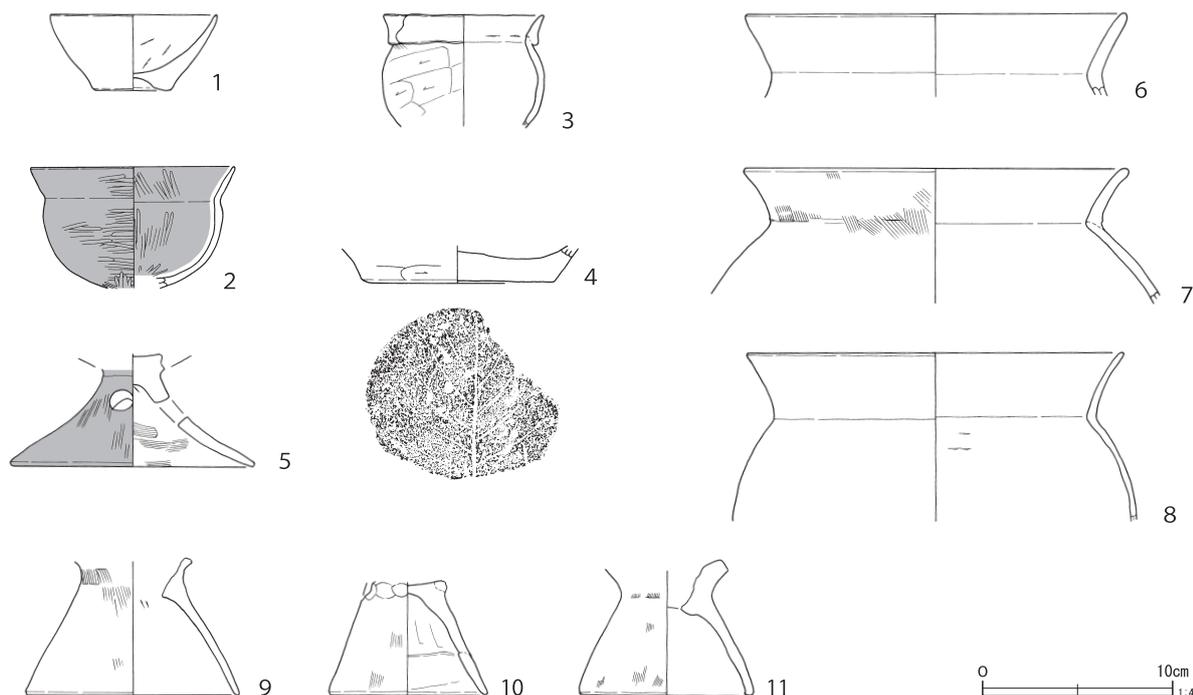
検出された周溝の規模は、全長4.02m、上場幅0.45~0.80m、下場幅0.35~0.50m、深さは12~25cmである。本遺構の主軸方位は不明である。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は浅い部分では皿状であるが、深い部分では逆台形である。

図化した遺物(1)は、位置的に本遺構に帰属する可能性が高いと判断した。そのため、北側に周溝が存在すると考え、あくまでも参考として推定線を示した。周溝内からは遺物は出土しなかった。



第119図 D区第19号周溝状遺構



第120図 D区第19号周溝状遺構出土遺物

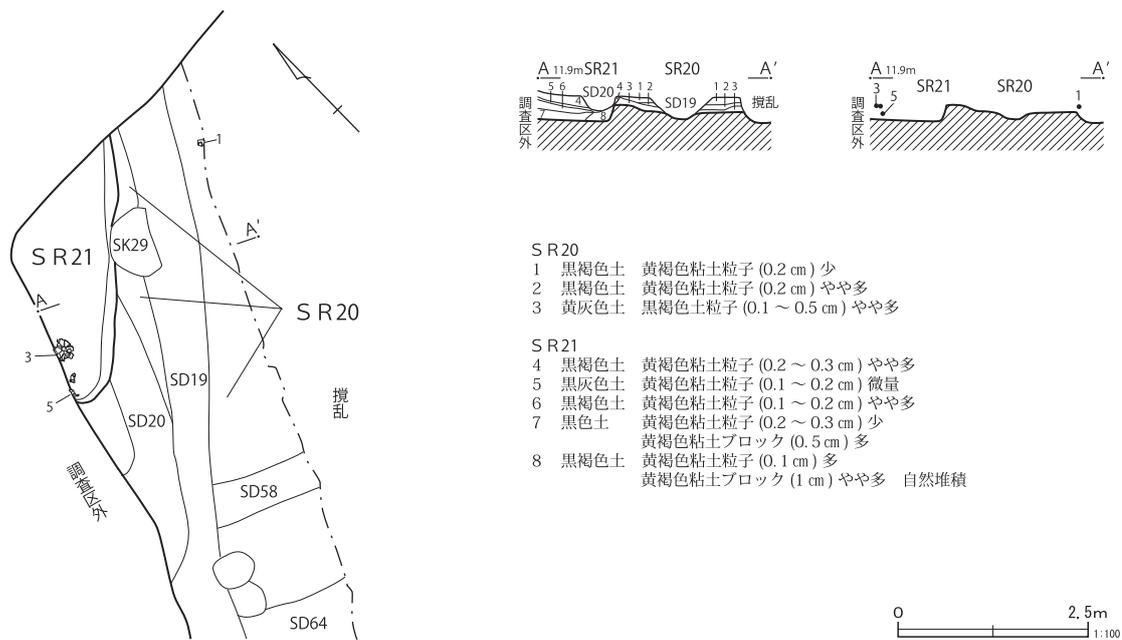
第34表 D区第19号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR19	D	土師器	小型鉢	90	(8.8)	4.0	4.0	A B C F G	普通	にぶい 黄橙	No.9 外面ヘラナデとナデか 内面ヘラナデ 底部ヘラナデとナデ 器面風化している 底部外面に黒斑あり
2	SR19	D	土師器	坏	20	(10.6)		[6.4]	A C F G	普通	明赤褐	内外面ヘラ磨き 内外面赤彩 器面風化している
3	SR19	D	土師器	小型壺	25	(8.4)		[5.9]	C D F G	普通	にぶい 黄橙	No.1 口縁部内外面横ナデ 胸部外面ヘラ削り 内面ナデか 口縁内面～胸部外面にかけて大黒斑 器面風化している
4	SR19	D	土師器	壺	65		10.2	[1.9]	A F	普通	褐灰	No.10 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部木葉痕あり
5	SR19	D	土師器	高坏	90		(12.6)	[5.9]	A B C D F G	普通	褐	外面ヘラ磨き 脚部上位ヘラナデ 穿孔3ヶ所 外面赤彩 器面風化している
6	SR19	D	土師器	甕	50	(19.8)		[4.4]	A C D F	普通	明赤褐	No.7 口縁部内外面ハケ後横ナデか
7	SR19	D	土師器	甕	15	(20.2)		[7.1]	B C D F	普通	にぶい 褐	No.3 口縁部内外面横ナデか 頸部外面ハケ 内面ヘラナデか 器面風化している
8	SR19	D	土師器	甕	10	(19.8)		[8.9]	C D E G	普通	にぶい 黄橙	No.13 口縁部内外面横ナデか 胸部外面ハケか 内面ヘラナデか 内外面摩滅・風化著しい
9	SR19	D	土師器	台付甕	55		11.1	[7.2]	C F I	普通	にぶい 橙	No.2・3 外面ハケ 脚部内面ヘラナデか
10	SR19	D	土師器	台付甕	95		8.2	[6.0]	A C F G	普通	明赤褐	No.5 外面ハケ 脚部内面ヘラナデ 体部と脚部の接合部分指頭圧痕あり
11	SR19	D	土師器	台付甕	30		(9.0)	[7.1]	A B D F G	普通	赤橙	No.3 外面ハケ 脚部内面ヘラナデか

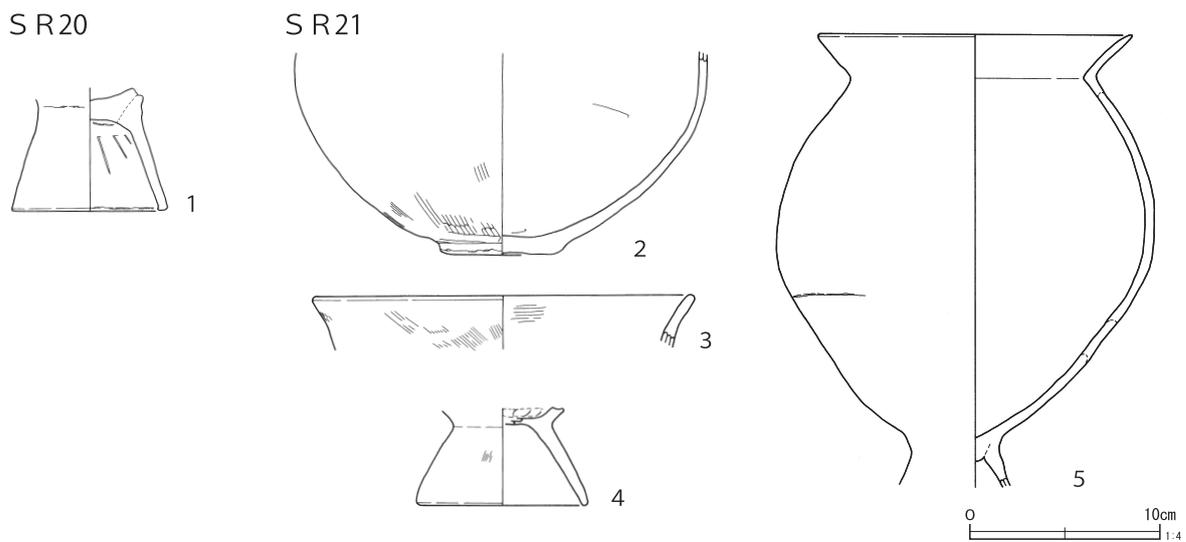
D区第16号周溝状遺構 (第116・117図)

G-17、H-16・17グリッドに位置する。僅かに湾曲する周溝が、L字状に検出された。D区第2・3号墳よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係については不明である。

部分的な検出であるため平面形は不明であるが、東溝がやや直線状であることから、方形もしくは長方形の可能性が考えられる。周溝は北端部が閉じているが、南端部は途切れている。前者については開口しているのか、周溝が失われている

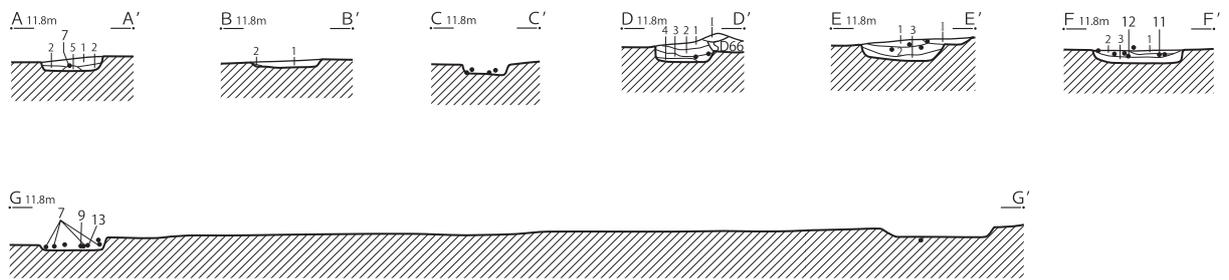
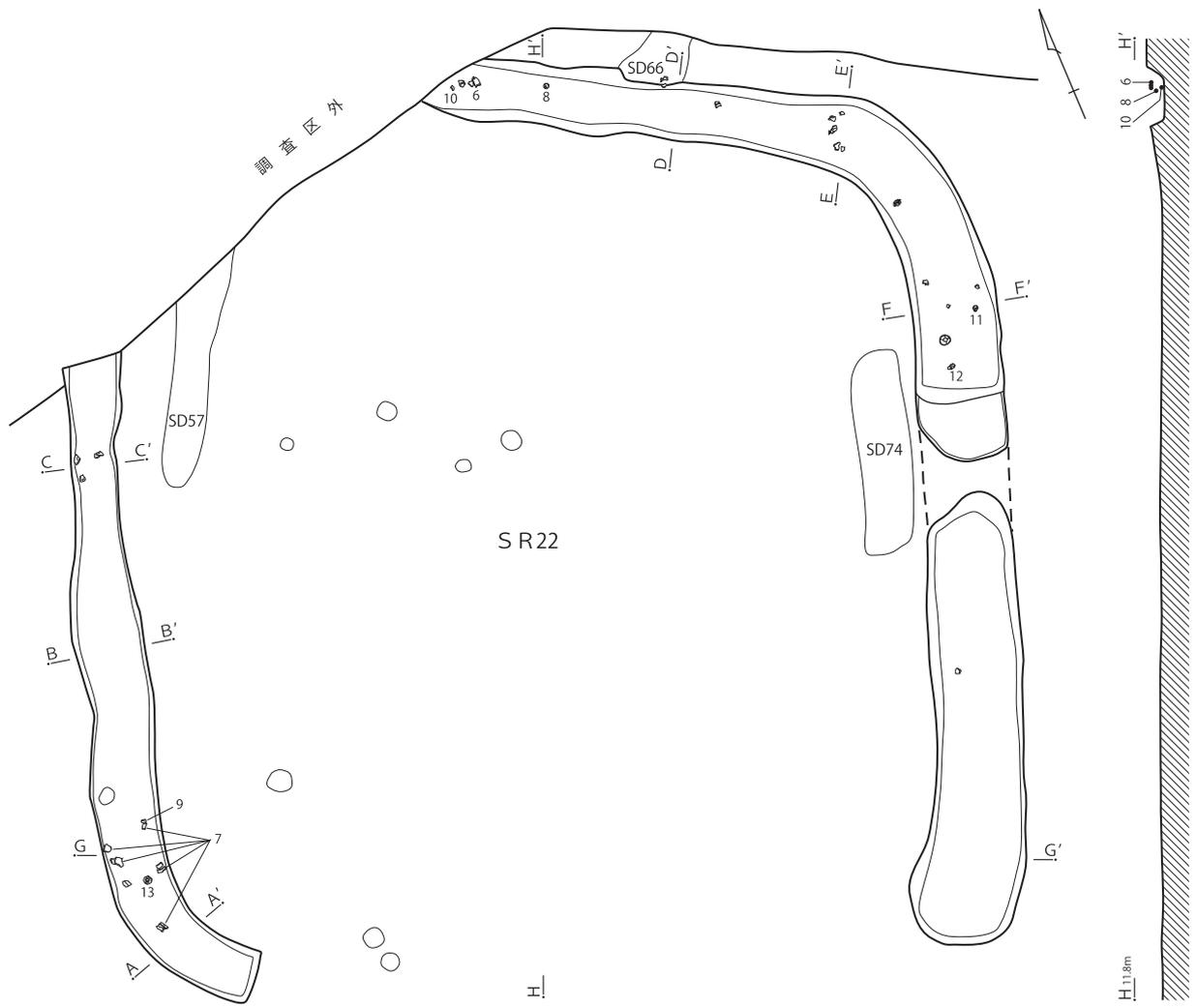


- SR20
- 1 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) 少
 - 2 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) やや多
 - 3 黄灰色土 黒褐色土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) やや多
- SR21
- 4 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) やや多
 - 5 黒灰色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 微量
 - 6 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) やや多
 - 7 黒色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 少
黄褐色粘土ブロック (0.5 cm) 多
 - 8 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 cm) 多
黄褐色粘土ブロック (1 cm) やや多 自然堆積



第35表 D区第20・21号周溝状遺構出土遺物観察表

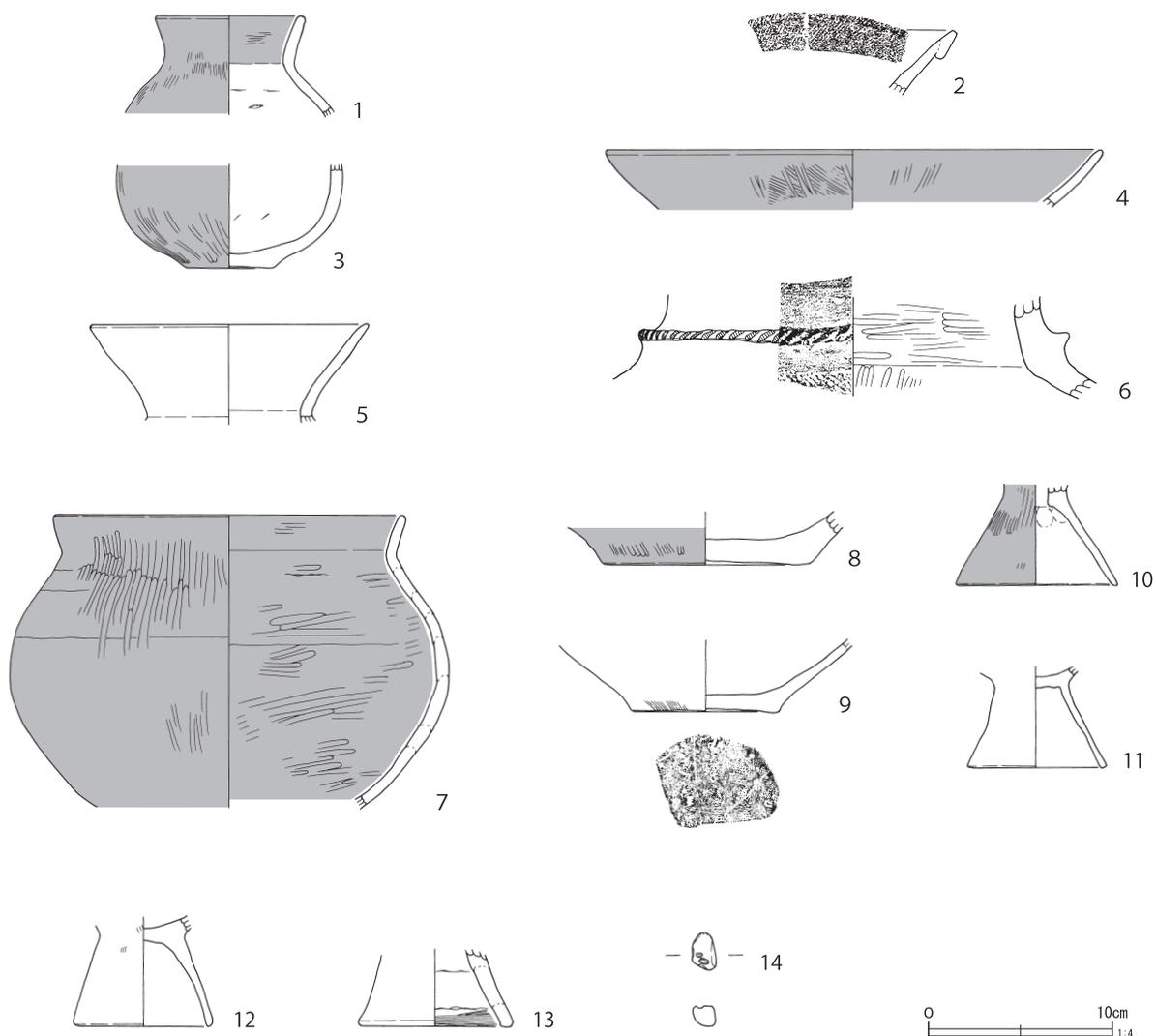
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR20	D	土師器	台付甗	95		8.2	[6.4]	A C D E F	普通	赤褐	
2	SR21	D	土師器	壺	30		5.9	[10.7]	C D F	普通	にぶい 橙	外面ハケ後ヘラ磨き 内面ヘラナデ 内外 面風化著しい
3	SR21	D	土師器	甗	20	(19.7)		[2.8]	A C D	普通	にぶい 黄橙	No.3 口縁部内外面横ナデ
4	SR21	D	土師器	台付甗	55		(8.8)	[5.1]	B C D F	普通	にぶい 橙	器面風化著しい 被熱のため赤色化してい る 脚部ヘラナデか
5	SR21	D	土師器	台付甗	75	16.2		[24.0]	C F	普通	浅黄	No.1 器面風化著しく調整痕はみえない



- SR22
- 1 灰褐色土 耕作土
 - 1 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 多 黄褐色土ブロック (1 cm) 微量
 - 2 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少
 - 3 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) ・炭化物少
 - 4 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 ~ 5 cm) 多
 - 5 黒褐色土 黄褐色土ブロック極多



第123図 D区第22号周溝状遺構



第124図 D区第22号周溝状遺構出土遺物

のか特定できなかった。後者については、周溝が失われている可能性が高いと思われる。

周溝の規模は、全長が東溝5.22m、南溝9.30mで計14.52m、主軸方位は不明である。上場幅は1.11~1.55m、下場幅0.90~1.30m、深さ10~25cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

D区第3号墳の周溝内に、隅丸の長方形の落ち込みが検出されたが、溝内土壌であるのか否かについては特定できなかった。

東溝のコーナー近くで、土師器の破片がまとまった状態で出土した。図化できた遺物は、土師器の壺・高坏・甕など計6点（1~6）である。

D区第17号周溝状遺構（第114・115図）

I-13グリッドに位置する。北側は閉じているが、南側は攪乱によって失われている。D区第1号墳よりも古いが、この他の重複遺構との新旧関係については特定できなかった。

やや湾曲した北東-南西方向の、一条のみの検出である。北側で周溝が閉じているが、方位的にみて、開口部とは考えにくい。本遺構の平面形は

第36表 D区第22号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR22	D	土師器	壺	75	7.8		[5.5]	A F	普通	橙	口縁部内面～外面へラ磨き 胴部上位内面へラナデか 外面・口縁部内面赤彩
2	SR22	D	土師器	壺	5			[3.5]	A F G	普通	浅黄橙	D-16G 口縁上部内外面単節 LR の縄文へラミガキか
3	SR22	D	土師器	小型壺	40		4.8	[5.7]	A G	普通	灰黄褐	D-16G 内面へラナデ 器面風化著しい 内外面とも黒ずんでいる(焼成時) 外面赤彩
4	SR22	D	土師器	高坏	20	(26.9)		[3.2]	A D F	普通	赤褐	D-16G 内外面風化著しく調整不明瞭 内外面赤彩
5	SR22	D	土師器	壺	20	(15.2)		[5.5]	A C D F	普通	橙	内外面へラ磨きか 器面風化著しい
6	SR22	D	土師器	壺	20			[5.4]	A B C D F G	普通	にぶい黄橙	No.16 網目は無節 R の縄文 外面ハケ状工具による押庄 内面へラ磨き
7	SR22	D	土師器	甕	35	(19.0)		[16.0]	F	普通	にぶい橙	No.2～4・6・9 内外面へラ磨き 内外面赤彩
8	SR22	D	土師器	壺	90		11.4	[2.9]	A F	普通	浅黄橙	No.15 外面へラ磨き 内面へラナデか 底部へラ削り 外面赤彩 器面風化著しい
9	SR22	D	土師器	壺	30		(8.0)	[4.0]	A C F	普通	浅黄橙	No.1 外面ハケ後へラ磨きか 内面へラナデか 底部木葉痕あり 器面風化著しく調整不明瞭
10	SR22	D	土師器	器台	70		8.7	[5.5]	A B F G	普通	にぶい橙	No.19 D-16G 脚部内面上部に指頭庄痕あり 風化著しい 外面赤彩
11	SR22	D	土師器	台付甕	95		7.5	[5.5]	A C	普通	明褐	No.4 D-16G
12	SR22	D	土師器	台付甕	50		(7.0)	[6.0]	A B C D G	普通	橙	No.2 被熱のため器面は劣化・赤色化している
13	SR22	D	土師器	台付甕	75		8.4	[4.3]	A D F	普通	橙	No.7 被熱により赤色化している 外面風化著しく調整不明瞭
14	SR22	D	貝巢穴痕泥岩			長さ2.0cm 重さ4.3g	幅1.3cm	厚さ1.1cm			灰褐	3孔 被熱によりわずかに赤色化

僅かではあるが湾曲しており、極めて小規模な範囲からの所見であるが、円形、もしくは楕円形と推定される。

検出された周溝の規模は、全長3.18m、上場幅0.60～0.80m、下場幅0.43～0.55m、深さは10cmである。本遺構の主軸方位は不明である。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは極めて緩やかで、断面形は皿状である。

図化できた遺物は、土師器の台付甕1点(2)である。

D区第18号周溝状遺構(第118図)

I-13・14グリッドに位置する。南側は調査区外に続き、西側は試掘トレンチによって失われているが、それ以南は調査区外に続くとは推定される。本遺構は深度が極めて浅いため、重複遺構との新旧関係については特定できなかった。

本遺構の検出された範囲内において周溝は湾曲しており、極めて小規模な範囲からの所見である

が、平面形は円形、もしくは楕円形と推定される。

検出された周溝の規模は、全長5.60m、上場幅・下場幅・主軸方位は不明、深さは18cmである。

周溝底面は平坦であり、壁面の立ち上がりは極めて緩やかで、断面形は皿状である。

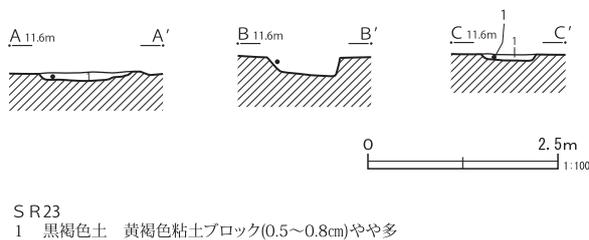
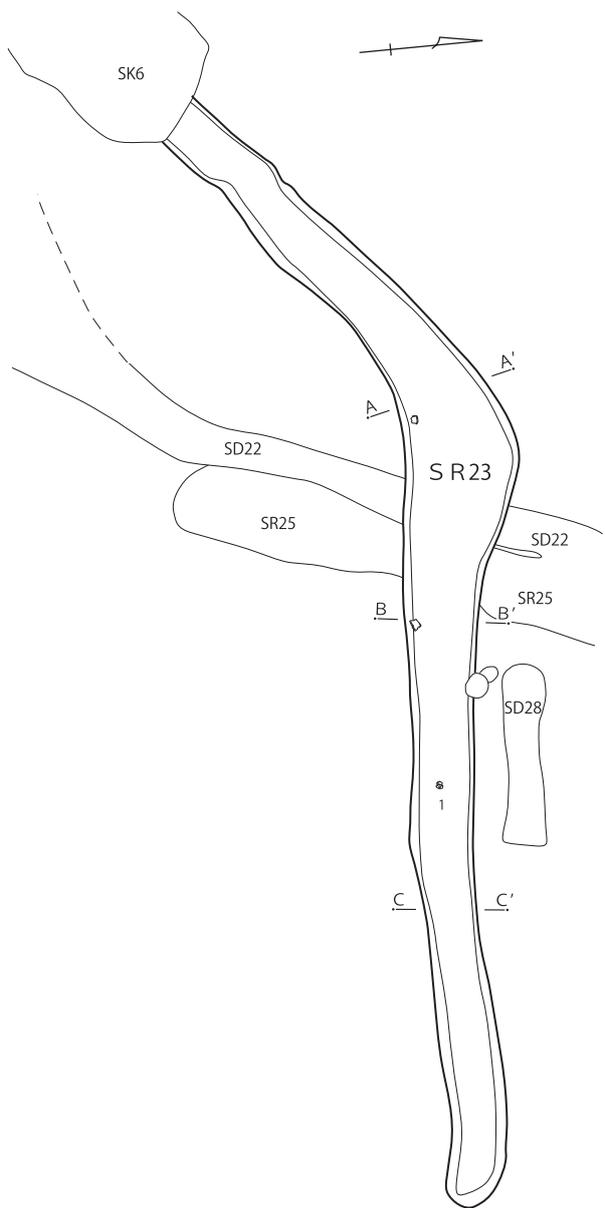
土層断面を観察した限りでは、黄褐色の粘土ブロックが層状ではなく、斑文状に混入していることから、自然堆積ではなく人為的埋め戻しと判断した。

遺物は出土しなかった。

D区第19号周溝状遺構(第119・120図)

H-12・13グリッドに位置する。D区第6号周溝状遺構より新しく、D区第12号周溝状遺構、D区第11号溝跡より古い。その他の重複遺構との新旧関係については不明である。

南西-北東方向の、一条のみの検出である。周溝は西側が調査区外に続き、東側は途切れている。後者については、他遺構との重複のためと推測さ



SR23
1 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック(0.5~0.8cm)やや多

第125図 D区第23号周溝状遺構

れる。本遺構の周溝は直線に近いが、検出範囲からは平面形は特定できなかった。

検出された周溝の規模は、全長5.26m、上場幅1.40~[1.70] m、下場幅1.25~[1.50] m、深さは19~40cmである。周溝の方位はN-66°-Eである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりはやや急であり、断面形は浅い部分では皿状であるものの、深い部分では逆台形である。

周溝の西端部では、溝状の落ち込みが認められた。この溝状の落ち込みの規模は、全長2.12m、上場幅0.35~0.52m、下場幅0.18~0.22m、確認面からの深さは30cmである。方位は周溝と同様に、N-66°-Eである。この落ち込みからは土師器の小型壺(3)・甕(7)・台付甕(9・11)が出土した。平面的な位置としては、D区第6号周溝状遺構の周溝内に土師器小型鉢(1)・壺(4)・甕(6・8)・台付甕(10)が図示されているが、D区第19号周溝状遺構の覆土中から出土したものである。

図化できた土師器は、壺・甕など計11点(1~11)である。

D区第20号周溝状遺構 (第121・122図)

E-14グリッドに位置する。D区第21号周溝状遺構、D区第19・20号溝跡より古い。東側部分は攪乱を受けている。

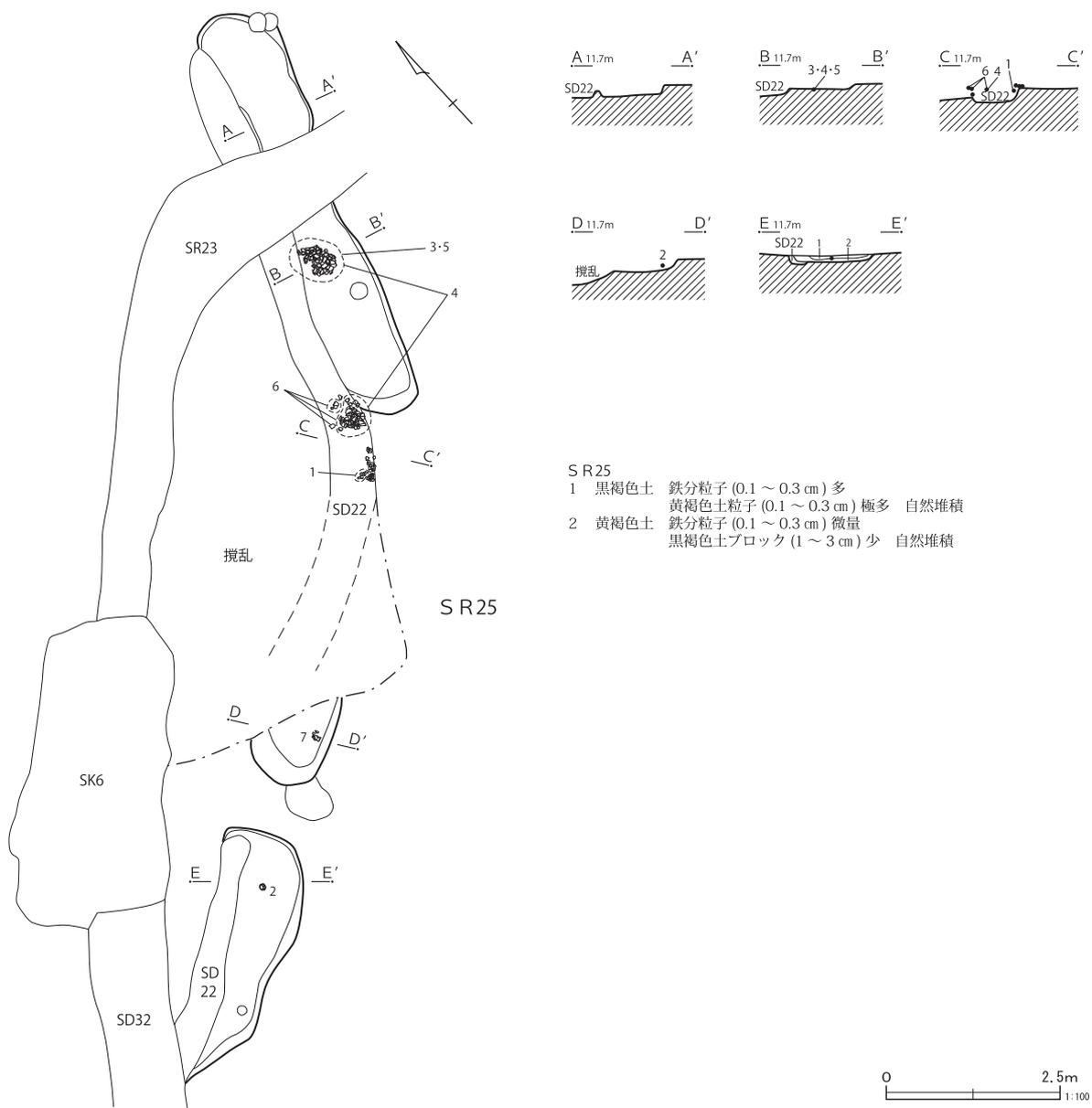
遺構としてのプランは失われており、覆土のみの検出である。そのため、周溝の深さ20cm、周溝底



第126図 D区第23号周溝状遺構出土遺物

第37表 D区第23号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR23	D	土師器	器台	85			[3.9]	A C F G	普通	にぶい 黄褐	No.1 穿孔3ヶ所 外面へラ磨きか 内面へラナデか 器面風化著しい



第127図 D区第25号周溝状遺構

面は比較的平坦というデータ以外、平面形・断面形・規模・主軸方位等は不明である。

図化できた土師器は台付甕1点(1)である。

D区第21号周溝状遺構 (第121・122図)

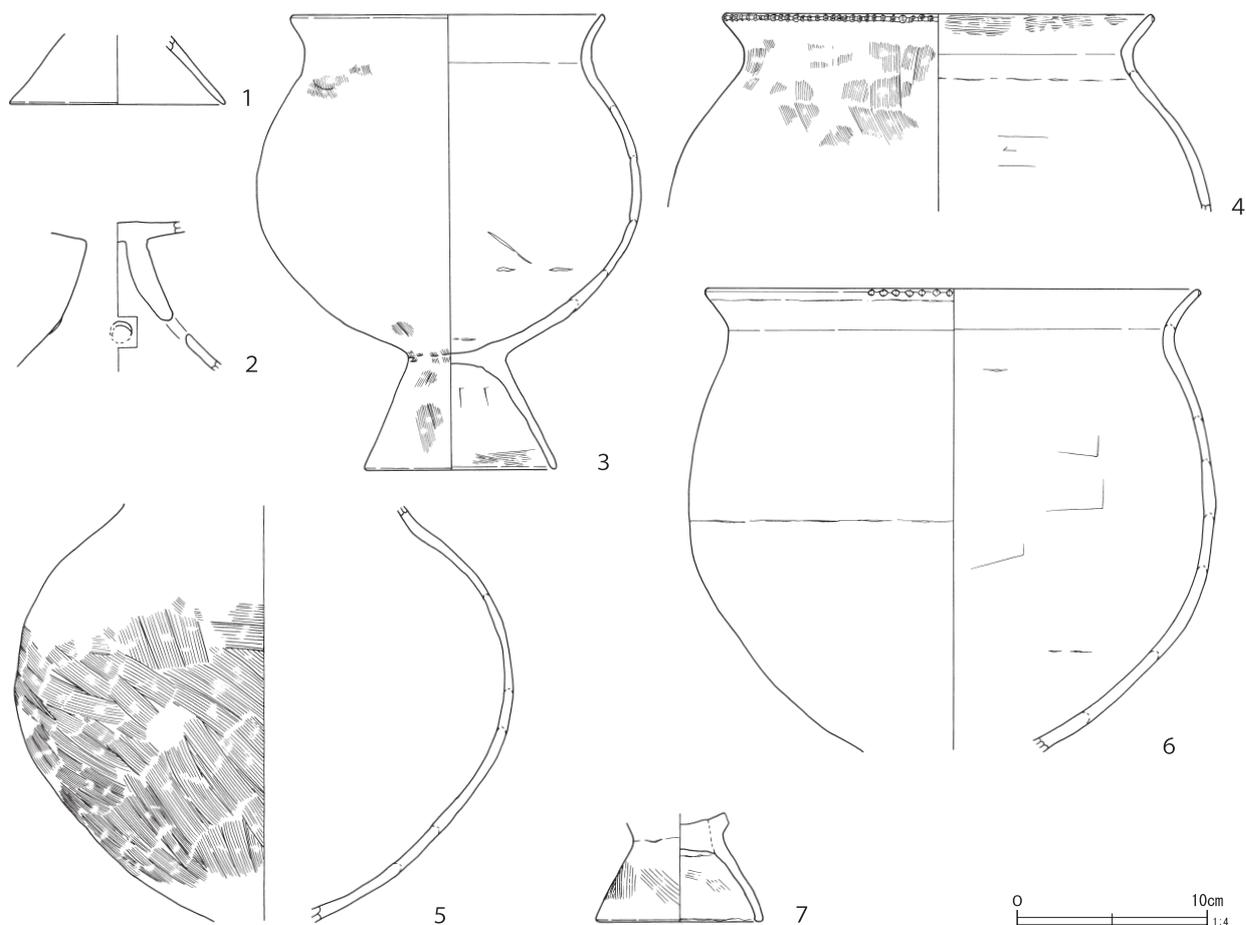
E-14グリッドに位置する。北・西側は調査区外に続く。D区第20号周溝状遺構よりも新しいと推定される。また、D区第20号溝跡よりは古いが、その他の重複遺構との新旧関係については不明である。

極めて部分的な検出範囲であるため、平面形や規模・主軸方向などは不明である。

検出された範囲内での規模は、南北3.55m、東西1.34m、深さ35cmである。

底面は比較的平坦であり、壁面の立ち上がりは急で、断面形は箱形である。平面・断面の形状や覆土の特徴から、本遺構を周溝状遺構と判断した。

図化できた土師器は、壺・台付甕など計4点(2~5)である。



第128図 D区第25号周溝状遺構出土遺物

第38表 D区第25号周溝状遺構出土遺物観察表

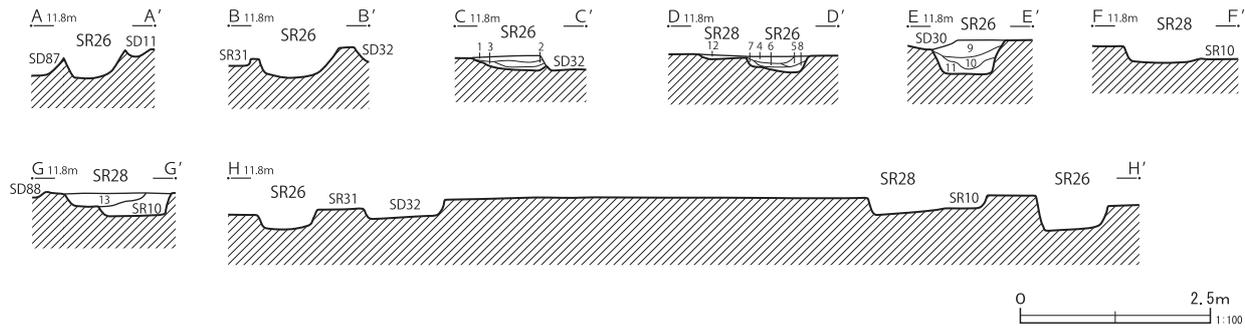
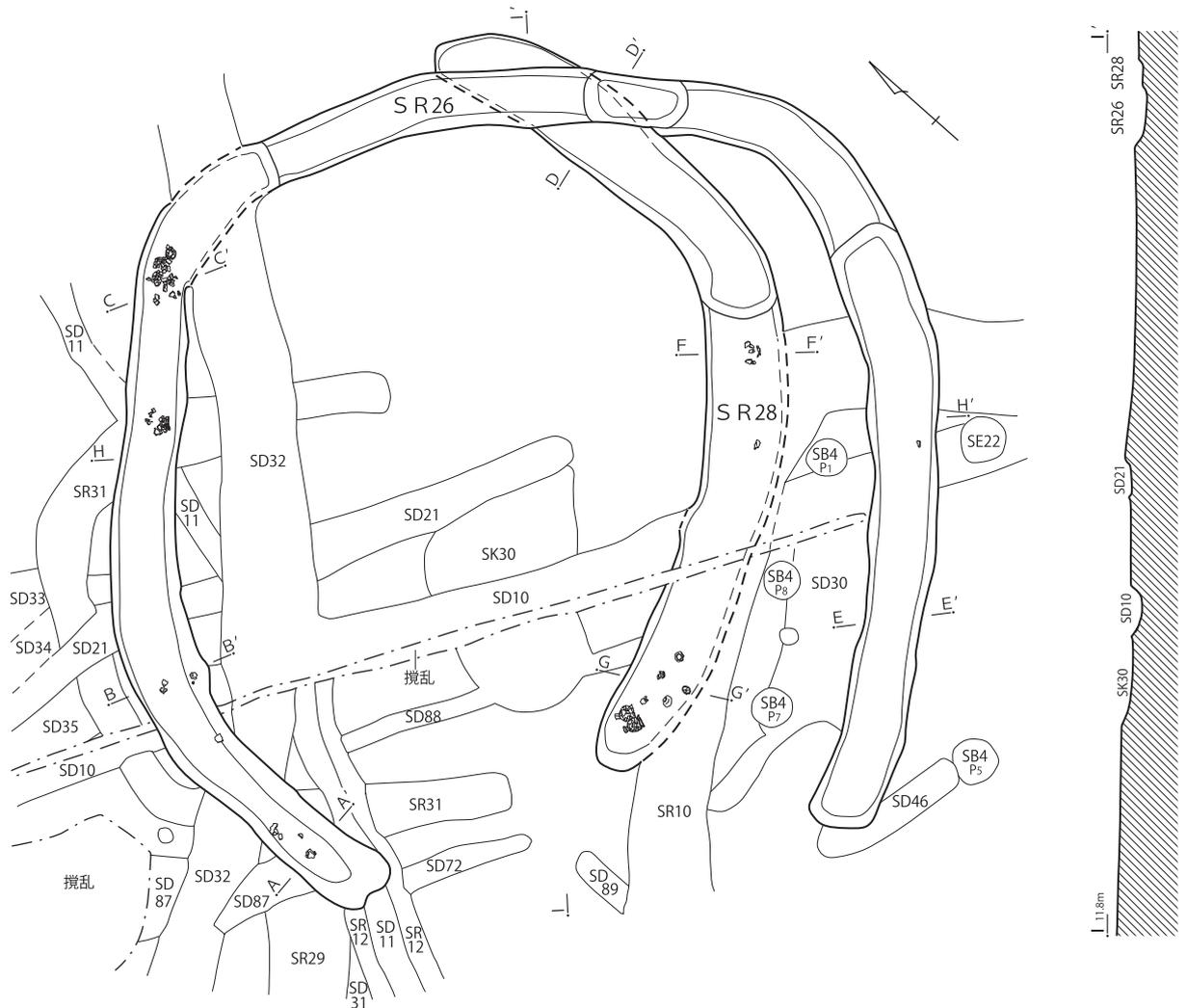
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR25	D	土師器	高坏	30		(11.2)	[3.7]	A F	普通	橙	No.9 器面摩滅し調整不明瞭
2	SR25	D	土師器	器台	60			[7.9]	A C D G	普通	灰黄	No.10 器面風化著しく調整みえない 穿孔4ヶ所
3	SR25	D	土師器	台付甕	45	(16.2)	9.8	24.0	A C D F	普通	にぶい黄橙	No.1 F-15G 外面ハケ 内面・脚部内面ヘラナデ 器面摩滅著しく調整不明瞭 被熱のため外面は一部赤色化している
4	SR25	D	土師器	甕	30	(22.2)		[10.4]	A F G	普通	にぶい褐	No.1・5 SR-24・F-15Gと接合 口縁部内外面横ナデ 内面ヘラナデか 器面風化著しい
5	SR25	D	土師器	台付甕	40			[22.1]	A B C F G	普通	灰褐	No.25 SR-23・SR-24・F-15G 外面上煤付着・黒斑あり 外面上位摩滅激しい 内面風化著しい
6	SR25	D	土師器	甕	40	(25.6)		[24.5]	A C D E F	普通	赤褐	No.1・3~5 SR-24・F-15Gと接合 口縁部内外面横ナデ 胴部外面ヘラナデか 外面風化・被熱により赤色化している
7	SR25	D	土師器	台付甕	40		(8.6)	[5.8]	A C F	普通	にぶい橙	No.11 器面風化著しい

D区第22号周溝状遺構 (第123・124図)

D・E-15~17グリッドに位置する。D区第66号溝跡よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関

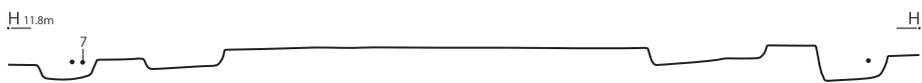
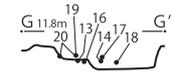
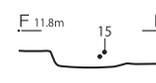
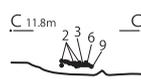
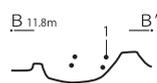
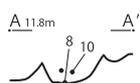
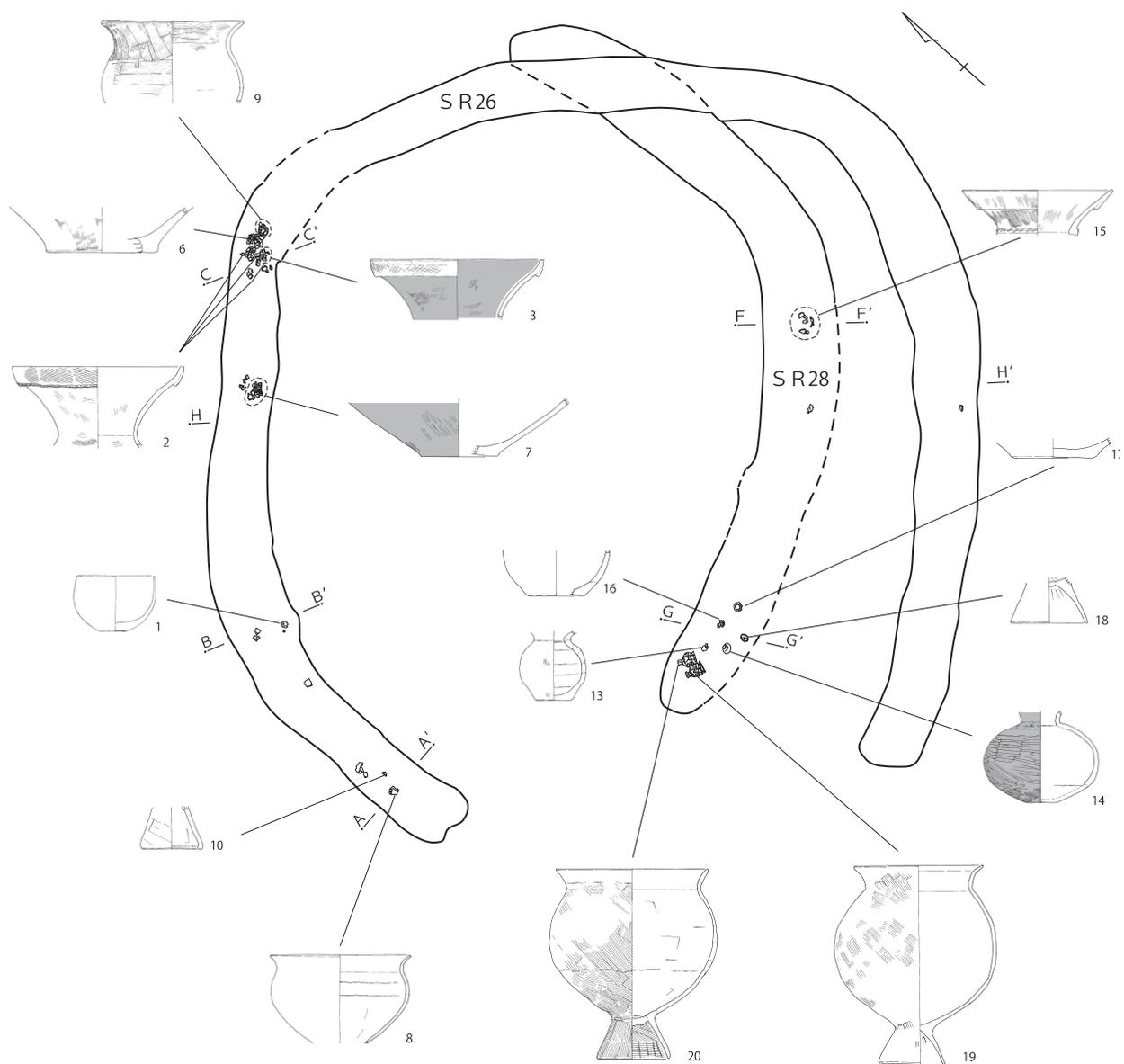
係は捉えられなかった。

周溝は僅かに湾曲するものの直線状で、全体の平面形は「コ」の字状に近い。南溝は確認されな



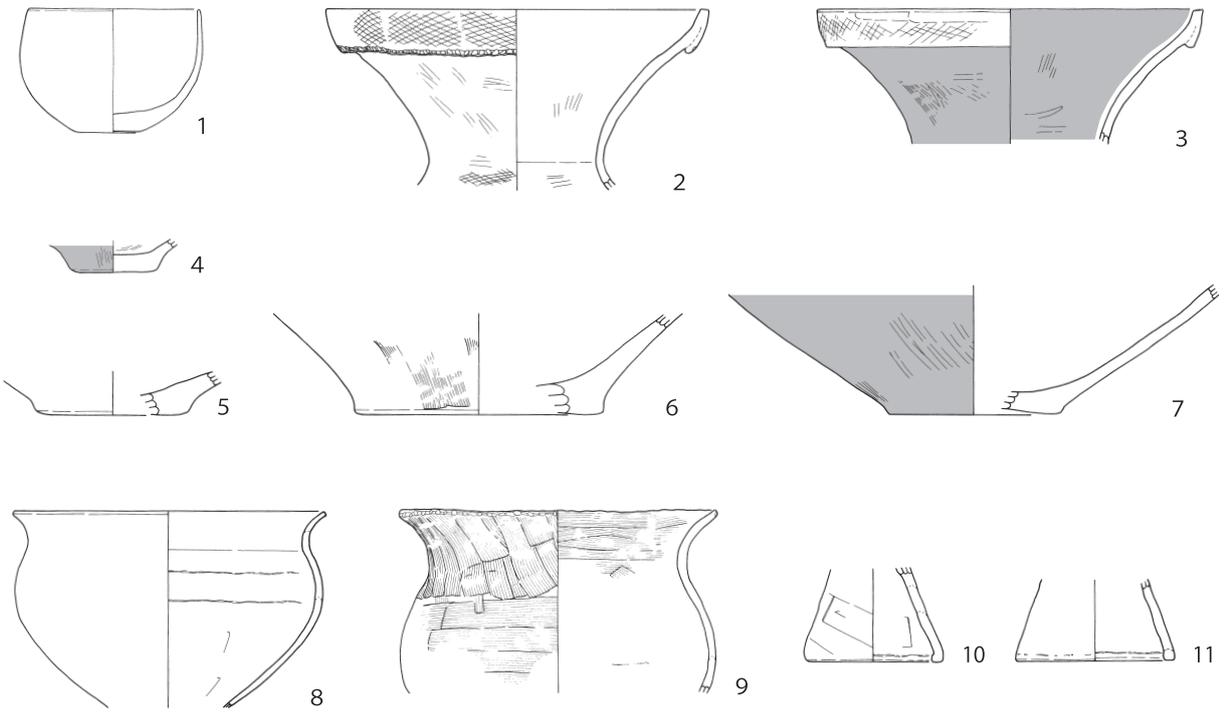
- SR26**
- | | | | |
|--------|---|-------------|--|
| 1 黒褐色土 | 褐色粘土ブロック (0.2 ~ 1 cm) やや多 | 8 黒褐色土 | 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・黄褐色土ブロック (3 ~ 5 cm) 極多 |
| 2 黒褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (0.5 cm) 多 | 9 暗褐色土 | 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 自然堆積 |
| 3 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) やや多 | 10 黒褐色土 | 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 極多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少 |
| 4 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 多 鉄分小 | 11 黒褐色土 | 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) 多 自然堆積 |
| 5 黒褐色土 | 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) ・鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少 | | 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少 自然堆積 |
| 6 黒褐色土 | 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 自然堆積 | | 黄褐色土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 多 自然堆積 |
| 7 黄褐色土 | 黄褐色土ブロック (2 ~ 4 cm) 多 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少 | | 黄褐色土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 極多 黄褐色土ブロック (3 ~ 5 cm) 少 |
| 8 黒褐色土 | 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 極多 自然堆積 | | 自然堆積 |
| | 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少 黄褐色土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) ・鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 自然堆積 | SR28 | |
| | 黄褐色土 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 自然堆積 | 12 黒褐色土 | 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少 |
| | 黒褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・黒褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 微量 | | 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 微量 自然堆積 |
| | 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 自然堆積 | 13 黒褐色土 | 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 微量 |
| | 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・黄褐色土ブロック (3 ~ 5 cm) 極多 | | 鉄分粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 少 自然堆積 |
| | 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 自然堆積 | | |

第129図 D区第26・28号周溝状遺構

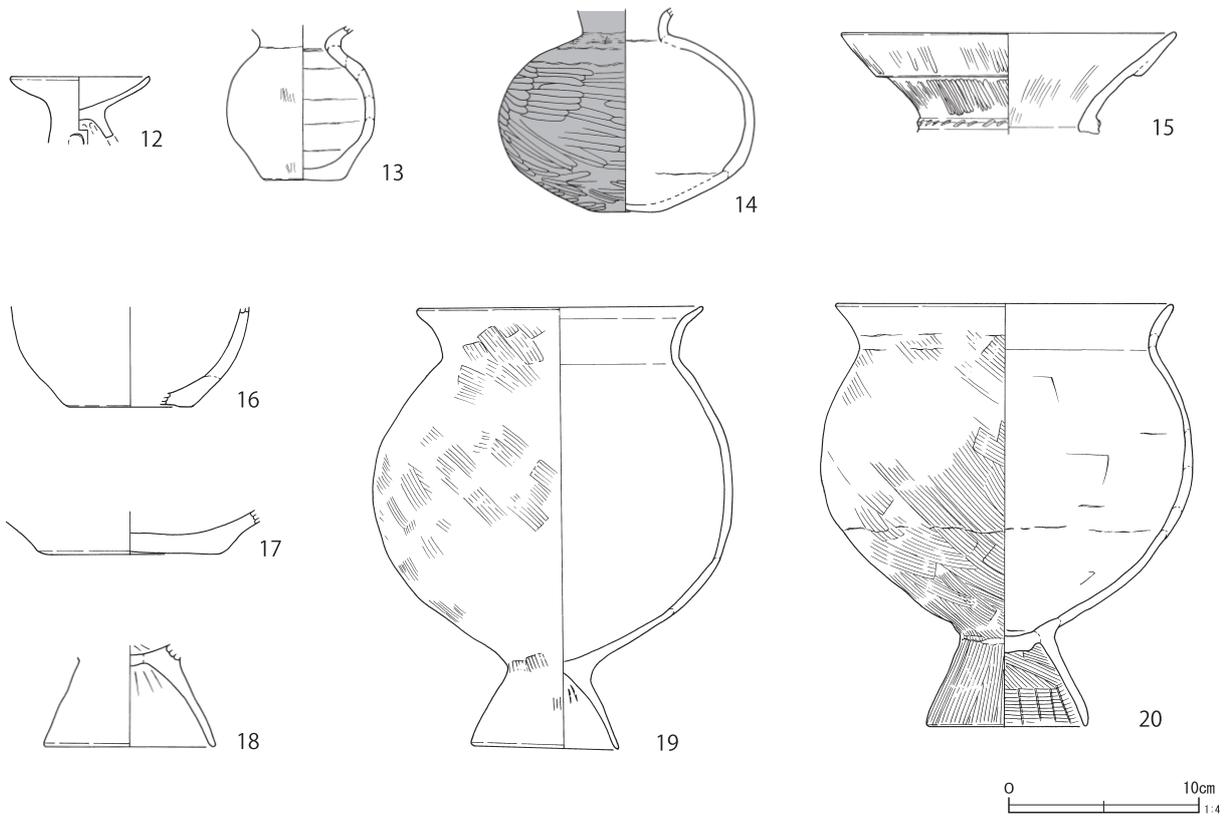


第130图 D区第26・28号周溝状遺構遺物出土状況

SR26



SR28



第131图 D区第26·28号周沟状遗构出土遗物

第39表 D区第26・28号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR26	D	土師器	埴	70	(8.9)	3.1	6.5	A C D F G	普通	にぶい 橙	No.24 内面ヘラナデか 器面風化著しい
2	SR26	D	土師器	壺	30	(20.0)		[9.5]	A B C F G	普通	にぶい 橙	No.8・9・13 口縁部・頸部外面網目状捺糸文 口縁中・下位内外面ヘラ磨き
3	SR26	D	土師器	壺	25	(20.4)		[7.1]	F G	普通	にぶい 黄橙	No.8 口縁部外面網目状捺糸文 内外面ヘラ磨き 口縁部外面以外赤彩 器面風化著しい
4	SR26	D	土師器	壺	30		(4.6)	[1.7]	A F	普通	明赤褐	G-13G 内外面ヘラ磨き 底部ヘラナデか 外面赤彩
5	SR26	D	土師器	壺	15		(8.0)	[2.3]	A B C F G	普通	浅黄橙	G-13G 器面風化著しく調整不明
6	SR26	D	土師器	壺	20		(13.0)	[5.3]	C F G	普通	浅黄橙	No.4 内面・底部ヘラナデか
7	SR26	D	土師器	壺	15		(9.0)	[6.8]	A D F	普通	橙	No.21 外面ヘラ磨き 内面・底部ヘラナデか 外面赤彩 器面は荒れている
8	SR26	D	土師器	甕	40	(16.2)		[10.4]	A F G	普通	にぶい 橙	No.30 口縁部内外面横ナデ 外面風化著しく調整不明瞭
9	SR26	D	土師器	甕	70	(16.6)		[9.6]	A C F	普通	にぶい 黄橙	No.3 口縁部内外面横ナデ ハケ目は一部摩滅している 外面に黒斑あり
10	SR26	D	土師器	台付甕	90		7.0	[4.9]	A F	普通	灰褐	No.29 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ
11	SR26	D	土師器	台付甕	40		(8.2)	[4.3]	A F	普通	褐灰	G-14G 内外面ともヘラナデか 外面被熱のため少し赤色化している
12	SR28	D	土師器	高坏	65	(7.0)		[3.6]	A F G	普通	にぶい 橙	G-14G 器面風化著しく調整不明 外面に黒斑あり 穿孔4ヶ所
13	SR28	D	土師器	小型壺	90		4.2	[8.2]	B C E F	普通	にぶい 橙	No.3 外面ヘラ磨きか 内面ナデか 底部ヘラナデか 器面風化著しい 外面に黒斑あり
14	SR28	D	土師器	壺	95		2.6	[10.8]	A D G J	普通	淡黄	No.2 肩部に結節縄文が横位に施文 原体・単位等は摩滅著しく不明 深い結節部のみ残る 内面ヘラナデとナデか 外面赤彩
15	SR28	D	土師器	壺	40	(17.4)		[5.4]	A C D F	普通	にぶい 黄橙	No.9 内外面ヘラ磨き 頸部外面に刻み痕 器面風化著しい
16	SR28	D	土師器	小型壺	25		(6.8)	[5.3]	A F	普通	明赤褐	No.5 外面ヘラ削りか 内面ヘラナデか 器面は被熱により赤色化している
17	SR28	D	土師器	壺	85		9.5	[2.3]	C D E F G	普通	橙	No.7 器面風化著しく調整不明
18	SR28	D	土師器	台付甕	95		8.8	[5.4]	C D F K	普通	橙	No.6 器面風化・被熱により赤色化著しい
19	SR28	D	土師器	台付甕	80	14.8	7.7	23.1	A C D F G	普通	にぶい 黄橙	No.1 口縁上部内外面横ナデ
20	SR28	D	土師器	台付甕	85	17.5	8.3	22.3	C D F G	普通	にぶい 黄橙	No.1・2 口縁部内外面横ナデ 外面に大黒斑と煤付着あり

かったこと、西・東溝南端が閉じていること、以上の2点から、開口部と推定される。開口の規模は8.59mである。

東溝中央部が途切れているのは、周溝の深度が浅いためと考えられる。この部分の北側では、周溝内にテラス状の高まりが認められた。

遺構の規模は、東西方向の外法12.78m、内法10.68m、南北方向の外法12.50m、内法10.82mで、主軸方位はN-23°-Eである。周溝の規模は、上場幅0.62~1.50m、下場幅0.46~1.18m、深さ12~35cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上が

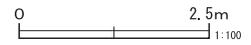
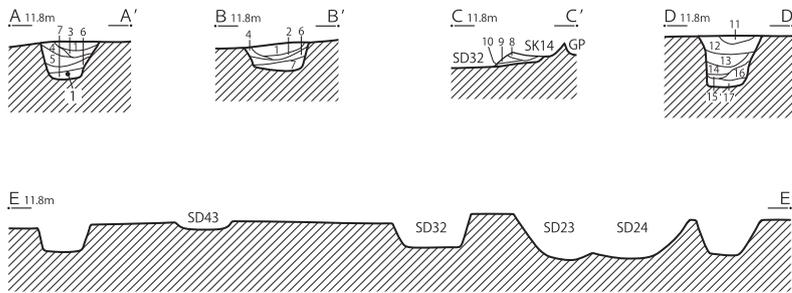
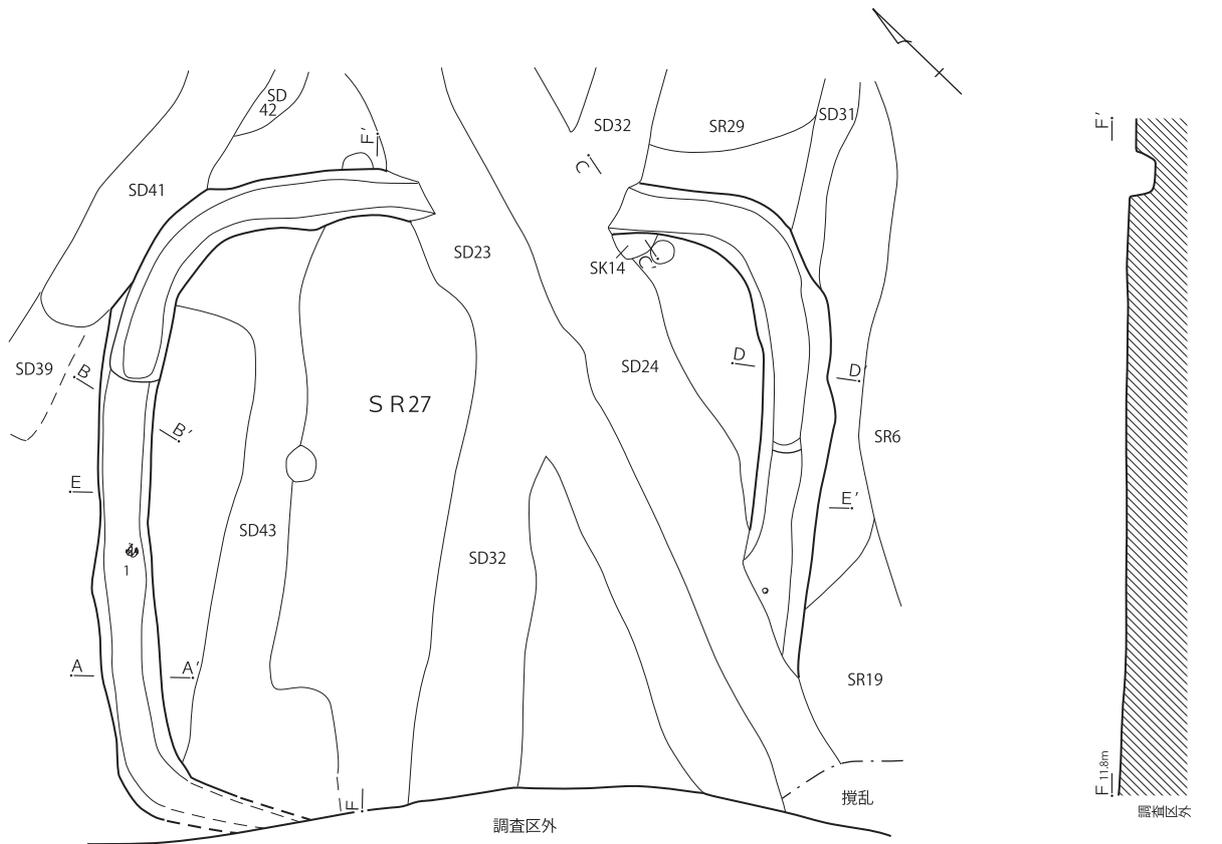
りは比較的急で、断面形は逆台形、もしくは箱形である。

図化できた遺物は、土師器の壺・台付甕などのほか、貝巢穴痕泥岩1点を含め計14点(1~14)である。

D区第23号周溝状遺構(第125・126図)

E-15・16、F-14・15グリッドに位置する。D区第6号土壇よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係については不明である。

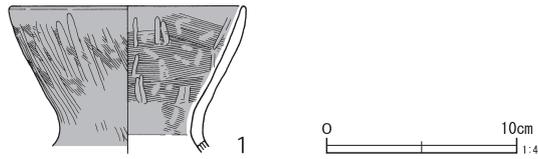
周溝は、南西-北東方向から東西方向に巡る「く」の字状を呈する一条のみの検出である。検出範囲が小さいため、全体的な平面形は特定でき



SR27

- 1 黒灰色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) ・鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少
- 2 黒褐色土 炭化物を帯状に少
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少
- 4 黒灰色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 極多
- 5 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少
- 6 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 極多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 微量
- 7 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 極多 黄褐色土ブロック (3 ~ 5 cm) ・鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 微量
- 8 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 微量 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少
- 9 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 極多 黄褐色土ブロック (2 ~ 4 cm) 多 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 微量
- 10 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 黄褐色土ブロック (2 ~ 4 cm) 極多 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 微量
- 11 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) 少
- 12 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) 少 鉄分均質に多
- 13 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 少 炭化物粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 微量
- 14 黒褐色土 黄灰色粘土 (0.1 ~ 0.5 cm) やや多 褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 微量
- 15 黒褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・黄灰色粘土ブロック (1 cm) 少
- 16 黒褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 均質に多
- 17 黒褐色土 黄灰色粘土ブロック (1 ~ 4 cm) 多

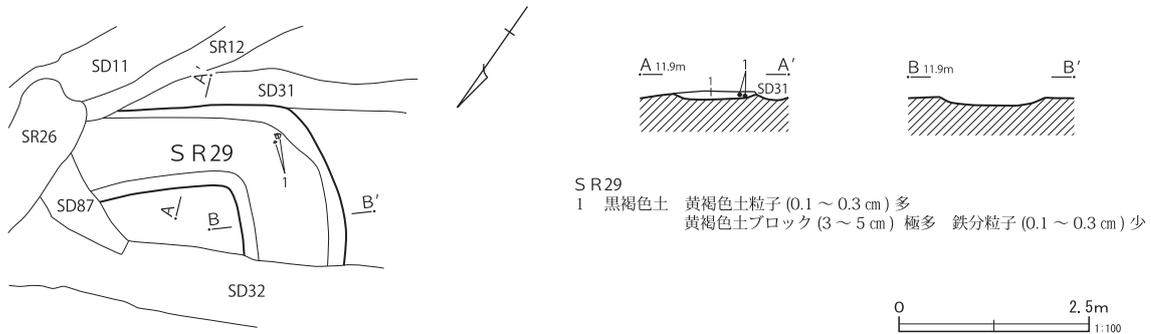
第132図 D区第27号周溝状遺構



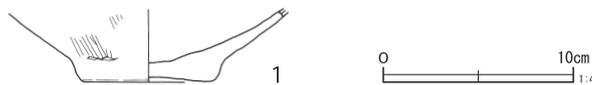
第133図 D区第27号周溝状遺構出土遺物

第40表 D区第27号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR27	D	土師器	壺	90	12.3		[7.7]	A C E F	普通	にぶい 黄橙	No.2 内外面ハケ後へラ磨き 内面のへラ磨きは粗い 器面風化している 外面・口縁部内面赤彩



第134図 D区第29号周溝状遺構



第135図 D区第29号周溝状遺構出土遺物

第41表 D区第29号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR29	D	土師器	壺	25		(6.8)	[3.8]	A C D F	普通	明赤褐	No.1・2 外面へラ磨きか 外面に黒斑あり 二次的被熱と思われる 器面風化著しい

なかった。

検出された周溝の規模は、南西-北東部分が5.80m、東西部分が10.20mで全長16.00m、上場幅0.70~1.52m、下場幅0.50~0.80m、深さは10~28cmである。主軸方位は不明である。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりはやや急であり、断面形は浅い部分では皿状で

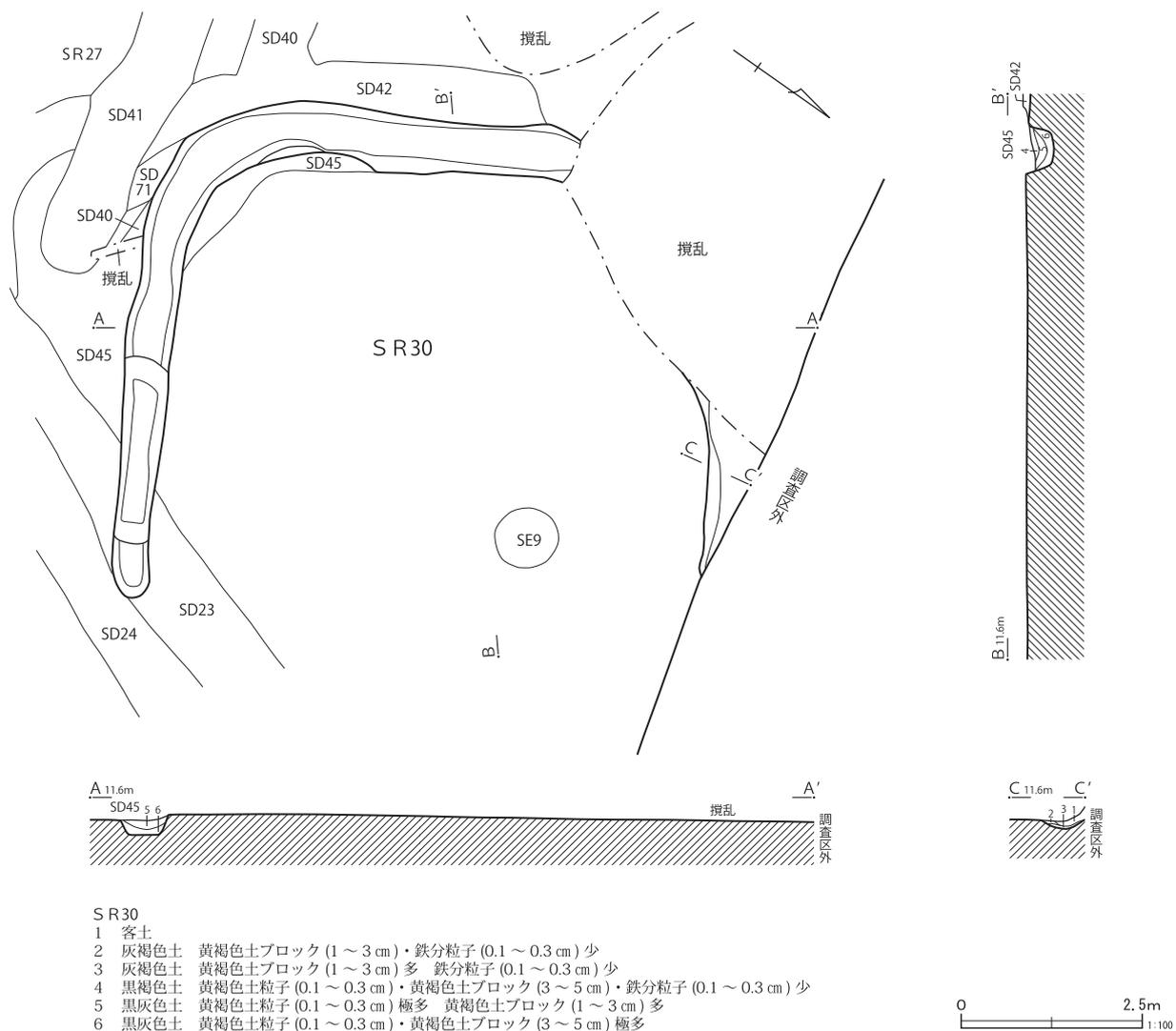
あるものの、深い部分では逆台形である。

図化できた土師器は器台1点(1)である。

D区第25号周溝状遺構 (第127・128図)

E-15、F-14・15グリッドに位置する。D区第22号溝跡よりも新しいが、その他の重複遺構との新旧関係については不明である。

周溝は、3箇所に分断された形で検出された、



第136図 D区第30号周溝状遺構

1条のみの検出である。検出範囲が小さいため、平面形は特定できなかった。

検出された周溝の規模は、北溝が6.25m、この溝が途切れる箇所から南溝までが6.25m、南溝が3.52mで全長16.02m、上場幅 [0.90] ~ [0.95] m、下場幅0.80 ~ [0.90] m、深さは10~20cmである。主軸方位は不明である。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

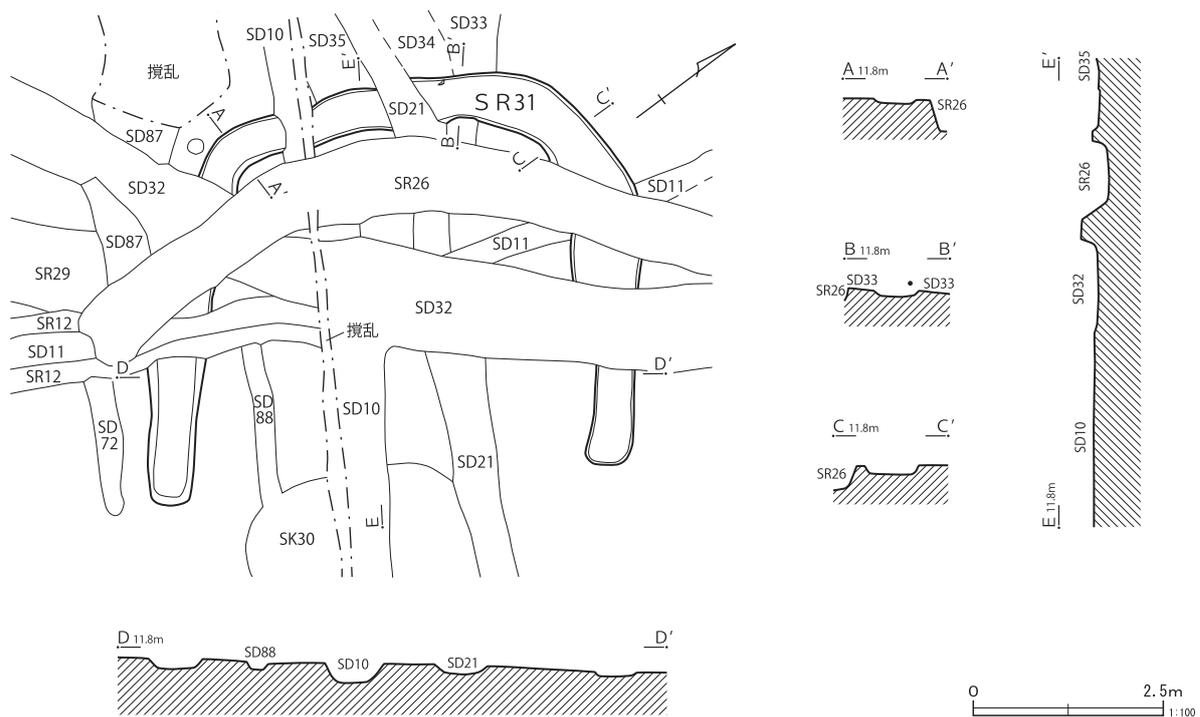
図化できた土師器は、高坏・台付甕など計7点(1~7)である。

D区第26号周溝状遺構 (第129~131図)

F-13・14、G-13~15、H-14グリッドに位置する。周溝がほぼ円形に巡る形で検出された。D区第10・28号周溝状遺構、D区第10・21・30・32・46号溝跡よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係については捉えられなかった。

南西部分が5.72mの規模で開口している。

遺構の規模は、北西-南東方向の外法11.28m、内法9.58m、北東-南西方向の外法11.18m、内法9.85mで、主軸方位はN-38°-Eである。周溝の規模は、上場幅0.80~1.07m、下場幅0.32~0.80m、深



第137図 D区第31号周溝状遺構

さ25～48cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は浅い部分では皿状であるが、深い部分では逆台形に近い。

北溝中央で、土壙状の落ち込みが検出された。この落ち込み部分の、周溝底面との比高差は4～12cm程で、短径×長径×深さは、65×142×18cmである。この他に、土壙状ではないものの西溝・東溝で落ち込みが確認されている。これらの周溝底面との比高差は、前者が10cm弱、後者が20cm弱である。

西溝の北コーナーから土師器片（2・3・6・9）がまとまった状態で出土した。図化できた土師器は11点（1～11）である。

D区第27号周溝状遺構（第132・133図）

G-12・13、H-13グリッドに位置する。ほぼ直線の周溝が「コ」の字状に検出された。D区第31号溝跡より新しく、D区第23・24・32・43号溝跡、D区第14号土壙より古い。その他の重複遺構との新

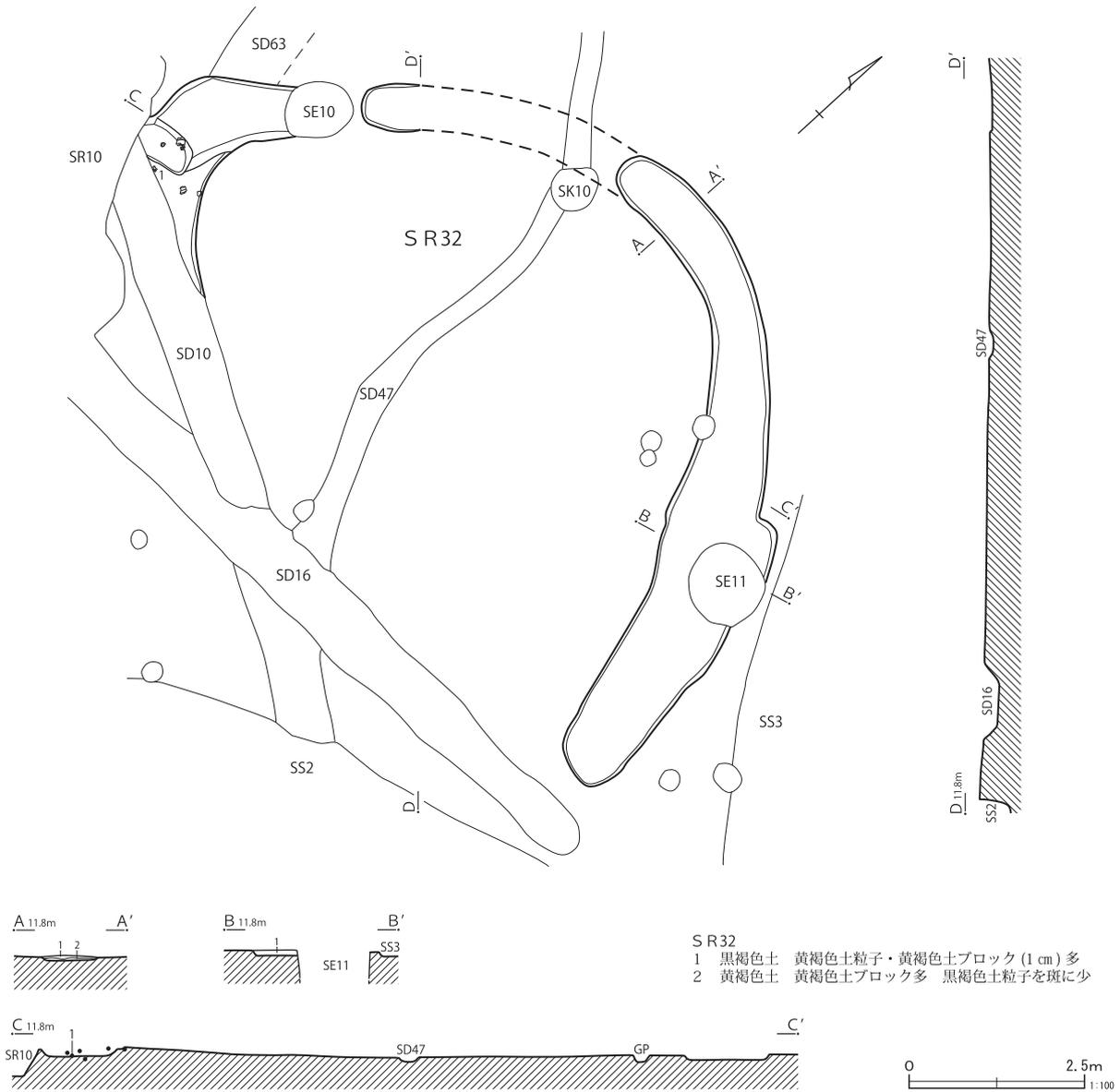
旧関係については不明である。

周溝は僅かに湾曲するものの直線状で、全体の平面形は「コ」の字状に近い。南西部分が調査区外に続いていること、重複する溝跡によってプランが失われていることなどから、開口部であるのか否かについては判断できなかった。南西端部に、破線で周溝を図示したが、あくまでも推定によるものであり、開口部の可能性は否定できない。

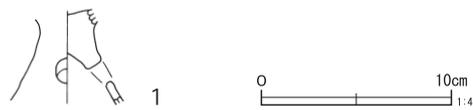
西溝と東溝では、周溝内に段差が認められた。それぞれの比高差は、前者で5cm、後方で10cm程である。

遺構の規模は、北西-南東方向の外法9.52m、内法7.98m、北東-南西方向の外法[8.88]m、内法[8.40]m。南西部分が開口部であれば、主軸方位はN-45°-Eとなる。周溝の規模は、上場幅0.70～1.02m、下場幅0.50～0.55m、深さ15～70cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは急で、断面形は逆台形、もしくは箱形である。



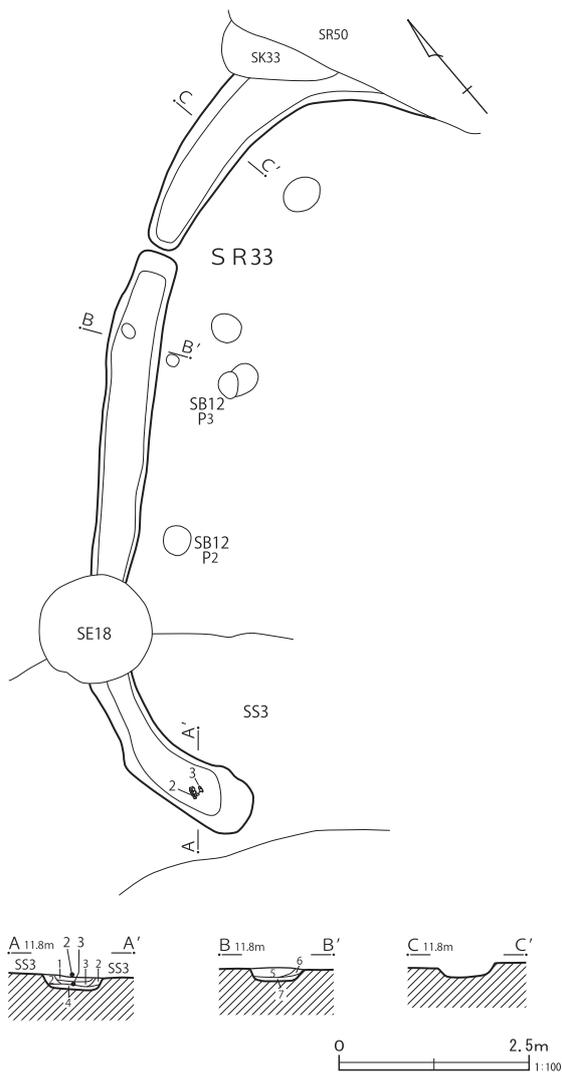
第138図 D区第32号周溝状遺構



第139図 D区第32号周溝状遺構出土遺物

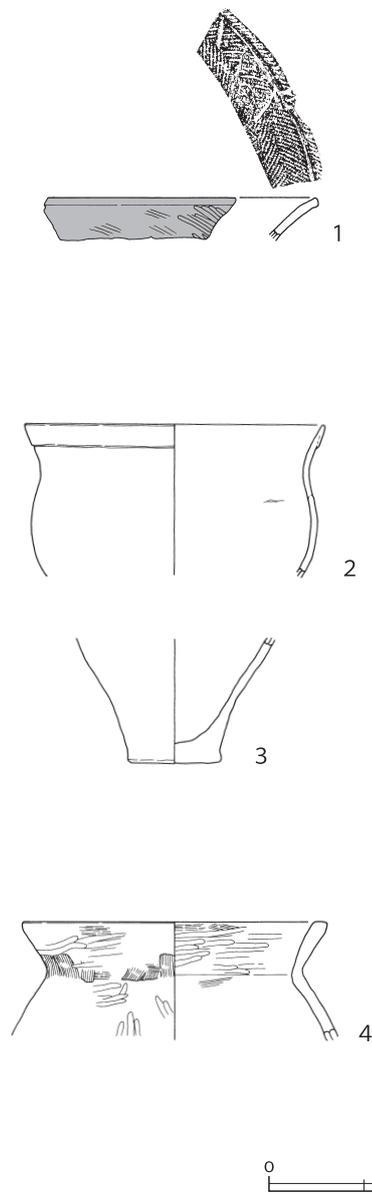
第42表 D区第32号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR32	D	土師器	器台	55			[4.9]	A C D F	普通	にぶい 橙	No.3 穿孔4ヶ所(外面からの穿孔) 器面 風化著しく調整不明



- SR33
- 1 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少
黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 微量
 - 2 黒灰色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少
黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 極多
 - 3 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 極多
黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少
 - 4 黒褐色土 黒褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 微量
 - 5 暗褐色土 黄褐色土ブロック (0.5 cm) 多 自然堆積
 - 6 黒褐色土 黄褐色土ブロック (0.5 cm) 若干 自然堆積
 - 7 灰黄褐色土 暗褐色土ブロック (5 cm) 若干 自然堆積

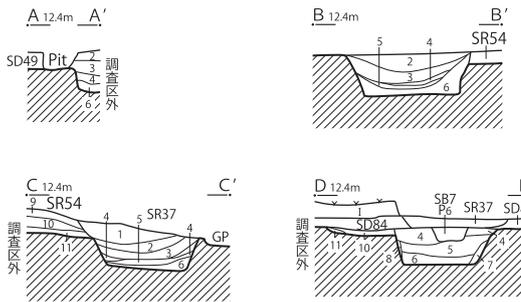
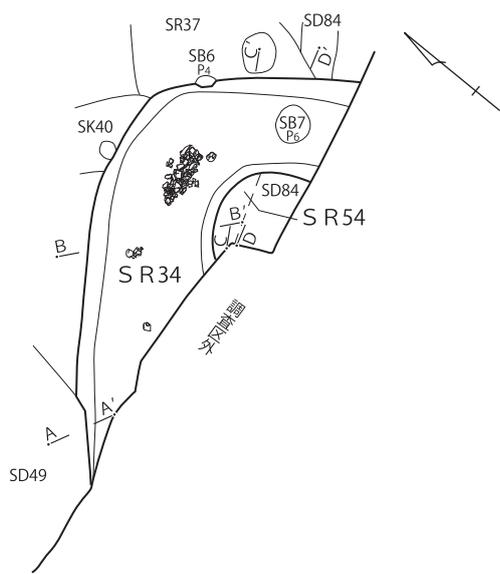
第140図 D区第33号周溝状遺構



第141図 D区第33号周溝状遺構出土遺物

第43表 D区第33号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR33	D	土師器	壺	5			[2.3]	A G	普通	にぶい 黄橙	F-17G 口唇部・口縁上部内面単節 LR、口縁下部単節 RL 縄文 口縁部外面へラ磨き 内外面赤彩
2	SR33	D	土師器	甕	30	(15.6)		[8.0]	A C F	普通	浅黄橙	No.1 器面風化著しく調整不明瞭
3	SR33	D	土師器	壺	55		4.7	[6.5]	A D G	普通	淡黄	No.1 F-17G 器面風化著しい 外面に黒斑あり
4	SR33	D	土師器	甕	20	(15.8)		[6.2]	A C F	普通	にぶい 黄橙	F-17G 口縁部内外面ハケ後へラ磨き

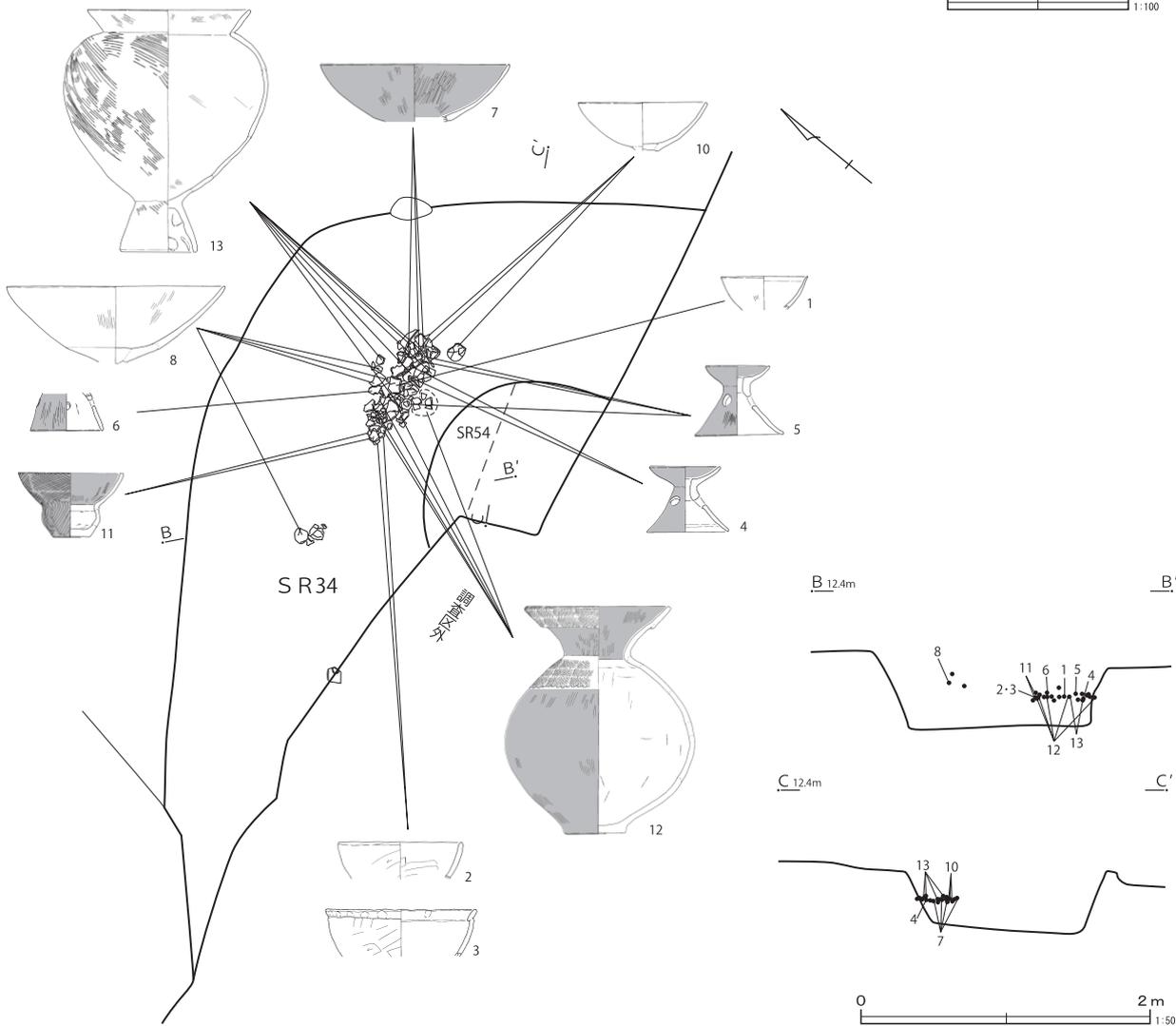


SR34

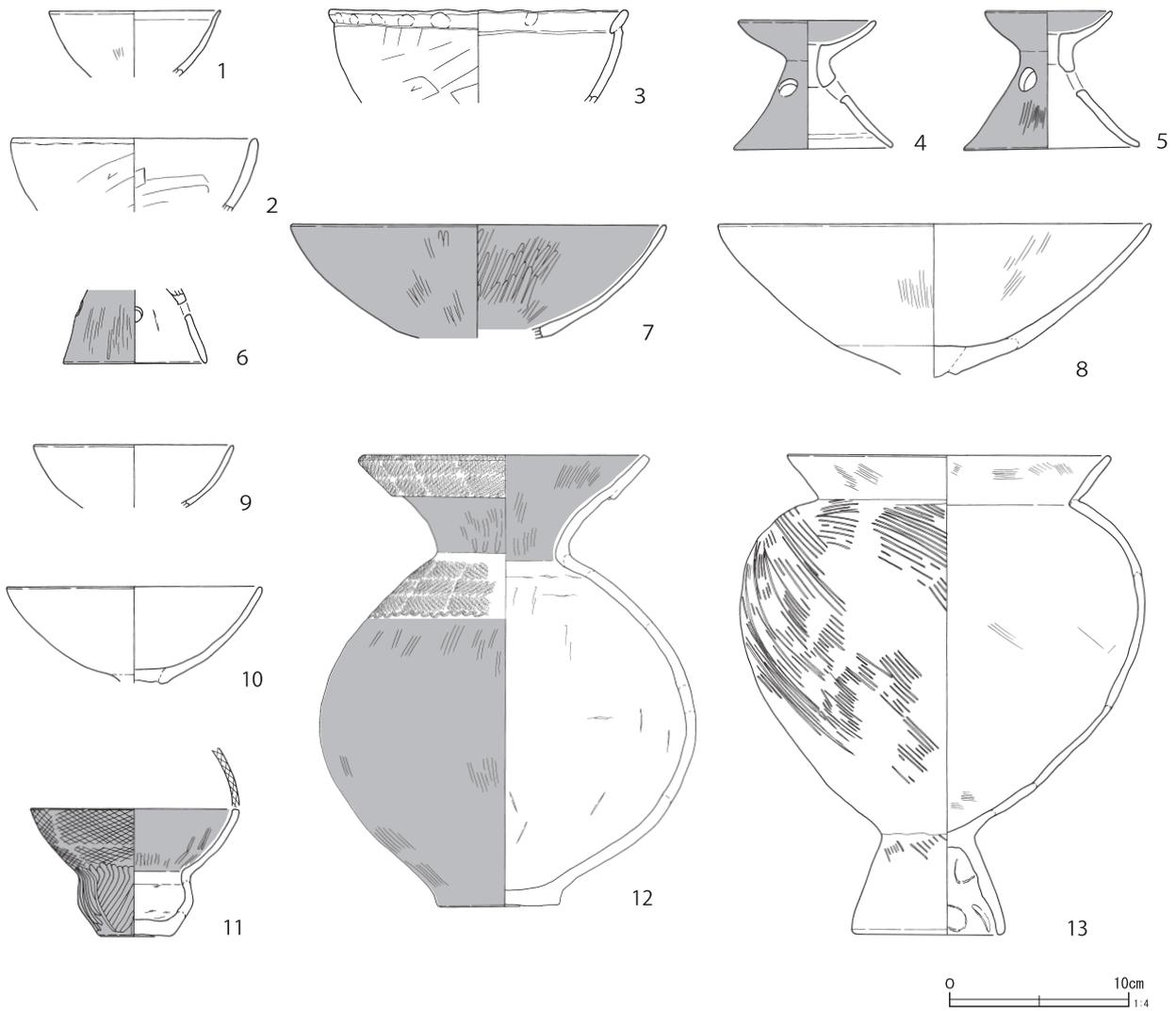
- 1 灰褐色土 耕作土
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒子・炭化物微量 鉄分多
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒子多 黄褐色土ブロック (1 cm) 少 焼土粒子微量
- 4 黒褐色土 黄褐色土粒子少
- 5 黒褐色土 黄褐色土粒子極多 炭化物微量
- 6 黒褐色土 黄褐色土粒子・炭化物微量 黒色強
- 7 黒褐色土 黄褐色土粒子極多 黄褐色土ブロック (1~2 cm) 多 炭化物微量
- 8 黒褐色土 黄褐色粘土粒子極多 黄褐色土ブロック少
- 9 黒褐色土 黄褐色粘土粒子極多 黄褐色土ブロック微量

SR54

- 9 黒褐色土 黄褐色土粒子微量
- 10 黒褐色土 黄褐色土粒子・黄褐色土ブロック (1 cm) 微量
- 11 黒褐色土 黄褐色土粒子多 黄褐色土ブロック (1~5 cm) 極多



第142図 D区第34・54号周溝状遺構・遺物出土状況

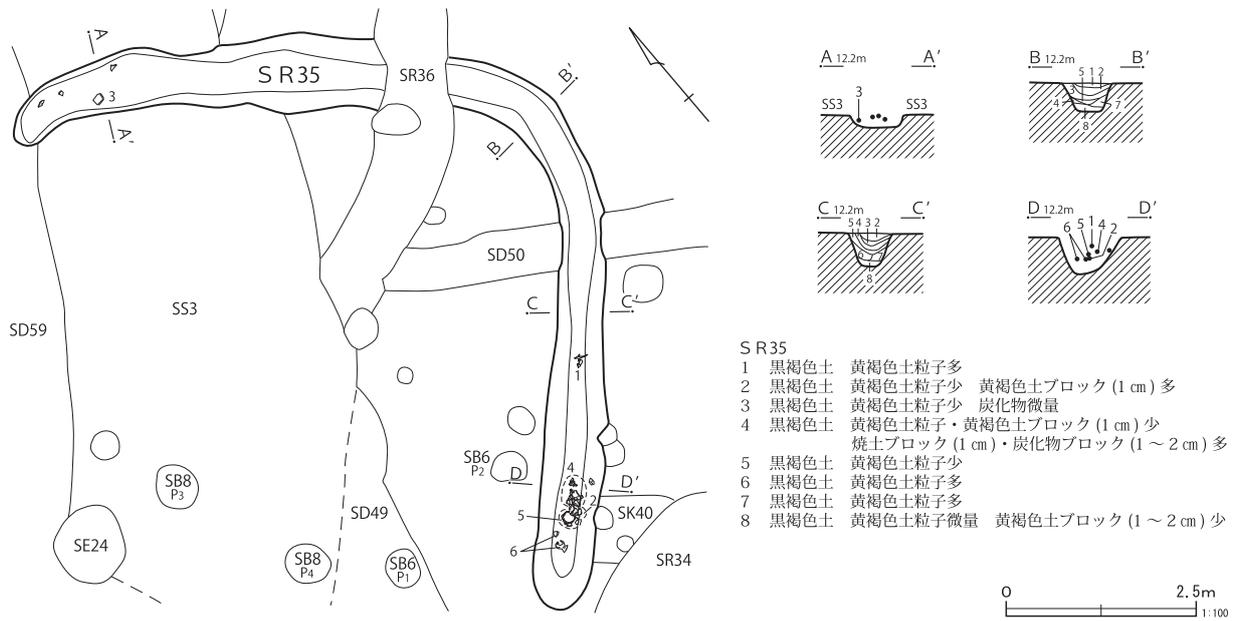


第143図 D区第34号周溝状遺構出土遺物

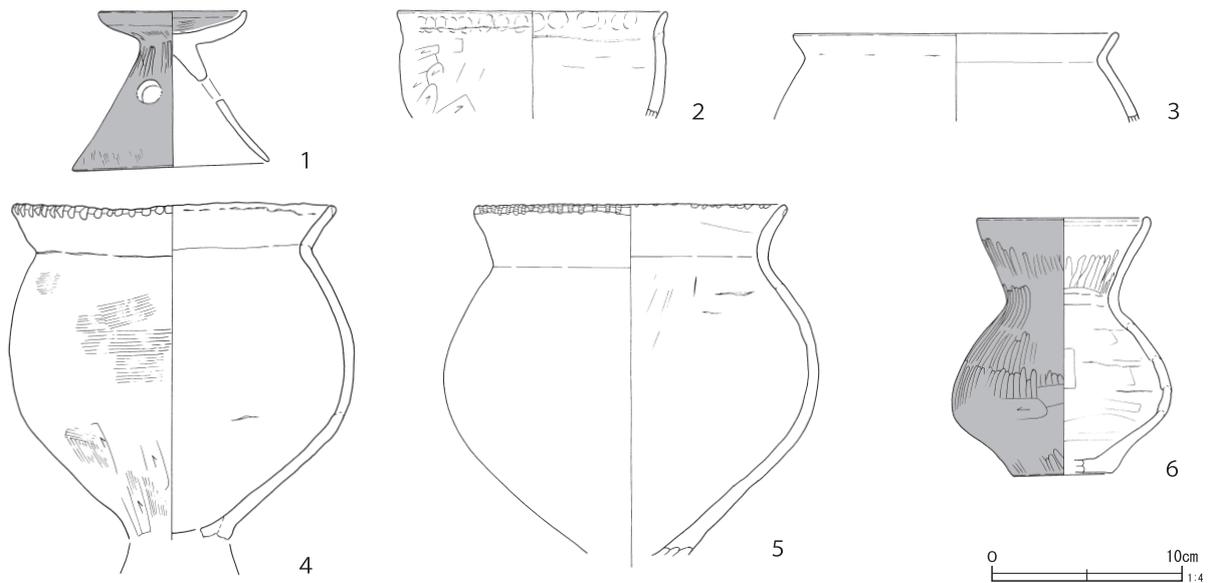
第44表 D区第34号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR34	D	土師器	鉢	25	(9.6)		[3.7]	A F	普通	橙	No.21 口縁部内外面横ナデ 外面ヘラ磨き 内面ヘラ磨きか
2	SR34	D	土師器	鉢	20	(13.6)		[4.1]	A D G	普通	明赤褐	No.38 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ
3	SR34	D	土師器	鉢	15	(16.4)		[5.1]	B C F G	普通	にぶい 赤褐	No.38 口縁部内外面指頭圧痕あり
4	SR34	D	土師器	器台	98	7.5	8.5	7.1	A C D G	普通	明赤褐	No.27・40 内外面ヘラ磨きか 脚部内面下位横ナデか 穿孔3ヶ所(外側からの穿孔) 器面風化著しい 口縁部外~内面・脚部内面に黒斑あり 外面・坏部内面赤彩
5	SR34	D	土師器	器台	80	7.0	9.7	7.6	A B C F G	普通	にぶい 橙	No.11・30・40・42 外面ハケ後ヘラ磨き 坏部内面・脚部内面ヘラナデか 器面風化著しい 外面・坏部内面赤彩か
6	SR34	D	土師器	高坏	80		7.8	[4.1]	A C F I	普通	にぶい 橙	No.45 外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 外面赤彩
7	SR34	D	土師器	高坏	70	20.8		[6.3]	F	普通	にぶい 橙	No.6・8・16・42・一括 内外面ヘラ磨き・赤彩 内外面とも器面は荒れている
8	SR34	D	土師器	高坏	55	24.2		[8.6]	A F	普通	にぶい 橙	No.19~21・41 一括 内外面ヘラ磨き 外面に黒斑2ヶ所あり 器面風化著しい
9	SR34	D	土師器	高坏か	20	(11.0)		[3.5]	A C F	普通	にぶい 黄橙	内外面ヘラ磨き・赤彩か 器面風化著しく調整不明瞭

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
10	SR34	D	土師器	高坏	75	14.0		[5.3]	A F G	普通	明赤褐	No.1・4・8 内外面ヘラ磨きか 器面は風化著しい 口縁部外面へ内面に黒斑あり
11	SR34	D	土師器	罎	85	11.0	4.0	7.2	A B C F G	普通	にぶい橙	No.36・38 口縁部外面ヘラ磨き後網目状の捺糸文 口縁部内面ヘラ磨き 胴部内面ヘラナデとナデ 底部ヘラ削り 外面・口縁部内面赤彩
12	SR34	D	土師器	壺	75	15.5	6.8	25.6	A B D F G	普通	橙	No.22・31・33・34・39 一括 口縁LR 体上半RL-LR非結束 縄文施文後に結束回転 胴部中位〜下位内外面ヘラ磨き 外面・口縁部内面赤彩
13	SR34	D	土師器	台付甕	40	17.6	8.3	27.1	A C D F	普通	にぶい黄橙	No.8・12・18・28・31・41・一括 口縁部内外面横ナデか 内面ヘラナデか 脚部内面指頭圧痕あり



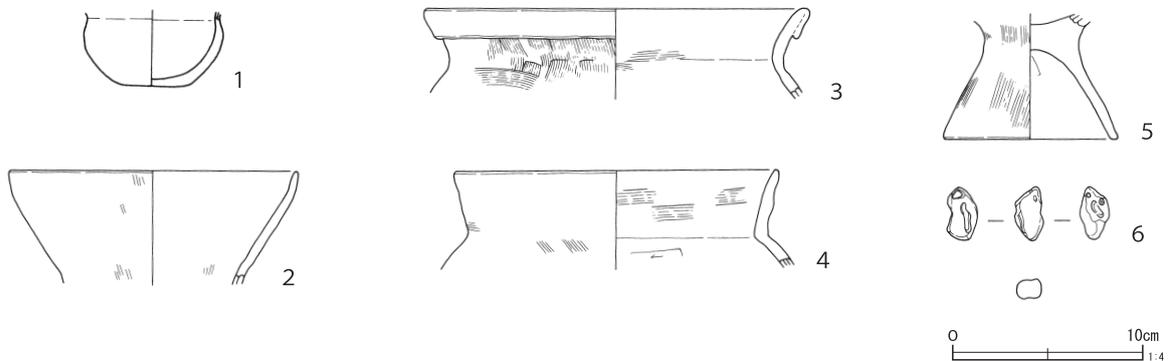
第144図 D区第35号周溝状遺構



第145図 D区第35号周溝状遺構出土遺物

第45表 D区第35号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR35	D	土師器	器台	95	7.4	10.0	8.2	A C D G	普通	にぶい黄橙	No.5 口縁部内外面横ナデ 外面ハケ後へラ磨き 器受部内面へラ磨き 脚部内面へラナデか 器面風化著しい 外面・器受部内面赤彩 穿孔3ヶ所
2	SR35	D	土師器	鉢	20	(14.0)		[5.7]	A C D F	普通	明赤褐	No.3 口縁部内外面指頭圧痕あり 内面へラナデか
3	SR35	D	土師器	甕	15	(17.0)		[4.7]	A F	普通	にぶい黄橙	No.7 口縁部内外面横ナデ 器面風化著しい
4	SR35	D	土師器	台付甕	80	16.4		[17.6]	A C D F G	普通	にぶい赤褐	No.3 口縁部内外面横ナデ後刻み 胴部外面へラ削り後一部ハケ 内面へラナデか
5	SR35	D	土師器	台付甕	70	16.0		[19.1]	A D G	普通	明褐	No.3 口縁部外面・口唇部横ナデ 口縁部内面横ナデとへラナデ 胴部外面へラ削りとへラナデ 胴部内面へラナデ
6	SR35	D	土師器	小型壺	50	9.0	(5.1)	13.6	A B C F G	普通	にぶい橙	No.1・2 口縁部内外面横ナデ 器面風化している 外面に黒斑あり 外面赤彩



第146図 D区第36号周溝状遺構出土遺物

第46表 D区第36号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR36	D	土師器	手捏ね	80		2.7	[3.0]	A C F	普通	にぶい黄橙	No.4 器面風化している
2	SR36	D	土師器	壺	40	(15.0)		[6.0]	A F G	普通	にぶい橙	G-18G 内外面へラ磨きか 器面風化著しい
3	SR36	D	土師器	壺	20	(20.0)		[4.7]	A C F	普通	明赤褐	G-18G 口縁部内外面横ナデ 器面風化著しい
4	SR36	D	土師器	甕	30	(17.0)		[5.2]	A D F J	普通	にぶい橙	G-18G 口縁上部横ナデ 器面風化している
5	SR36	D	土師器	台付甕	95		9.0	[6.6]	A F G	普通	橙	No.3 端部内外面横ナデ 脚部内面へラナデとナデ 器面風化している
6	SR36	D	貝巢穴痕泥岩			長さ2.8cm 重さ2.8g		幅1.5cm 厚さ1.0cm			にぶい黄橙	被熱により赤色化している 4孔

図化できた遺物は土師器壺1点(1)である。

D区第28号周溝状遺構(第129~131図)

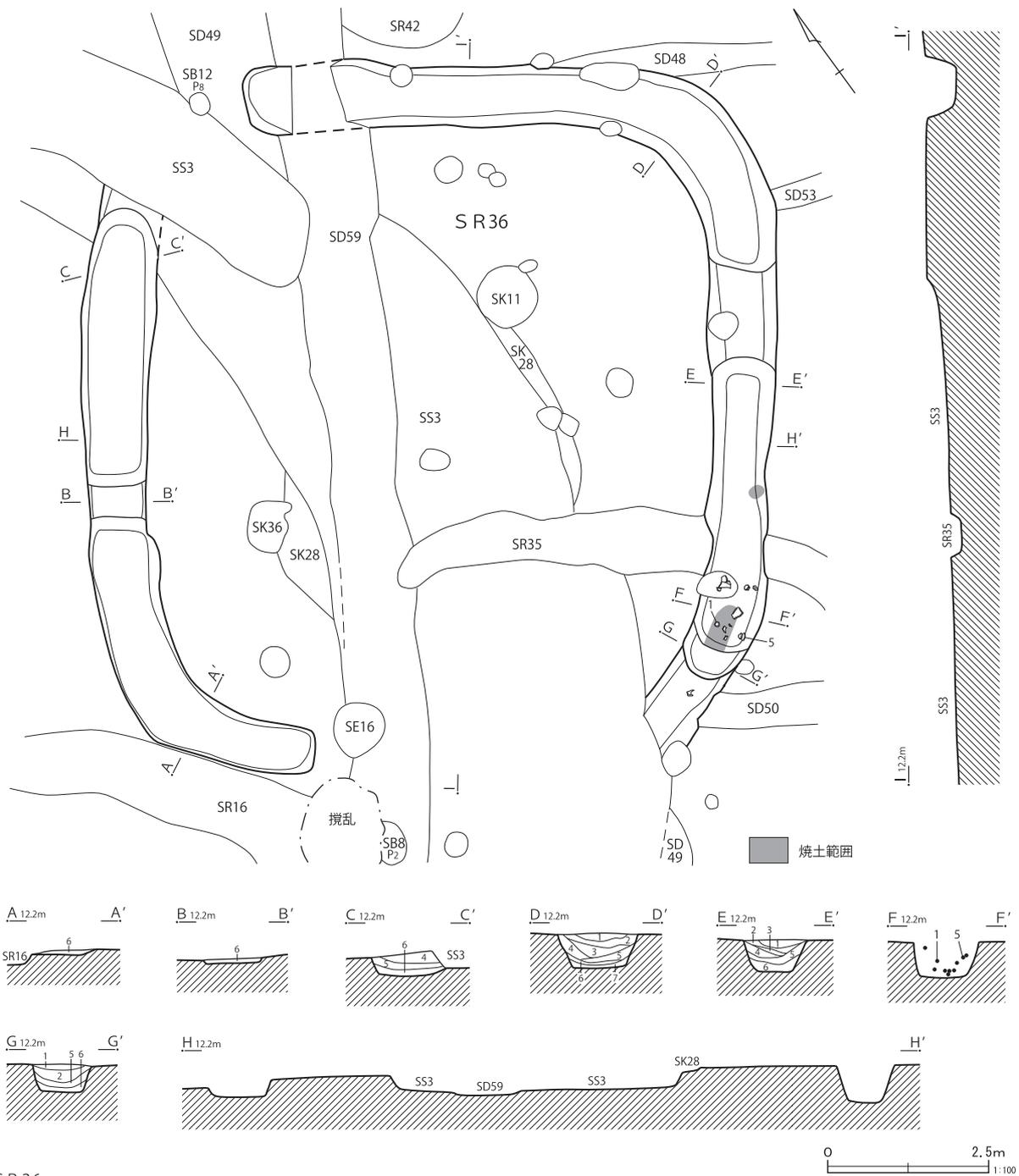
F・G-14グリッドに位置する。円弧状に検出された。D区第10・26号周溝状遺構より新しく、D区第10号溝跡より古い。その他の重複遺構との新旧関係については不明である。

両端部ともに途切れている。北側は周溝が失わ

れているためと思われるが、南側については開口部の可能性が考えられる。平面形は円形、または楕円形であると推定される。

周溝内の、中央部よりやや北寄りの地点には段差が認められた。周溝底面との比高差は10cm程である。

周溝の規模は、全長12.19m、上場幅1.10~1.15m、



SR 36

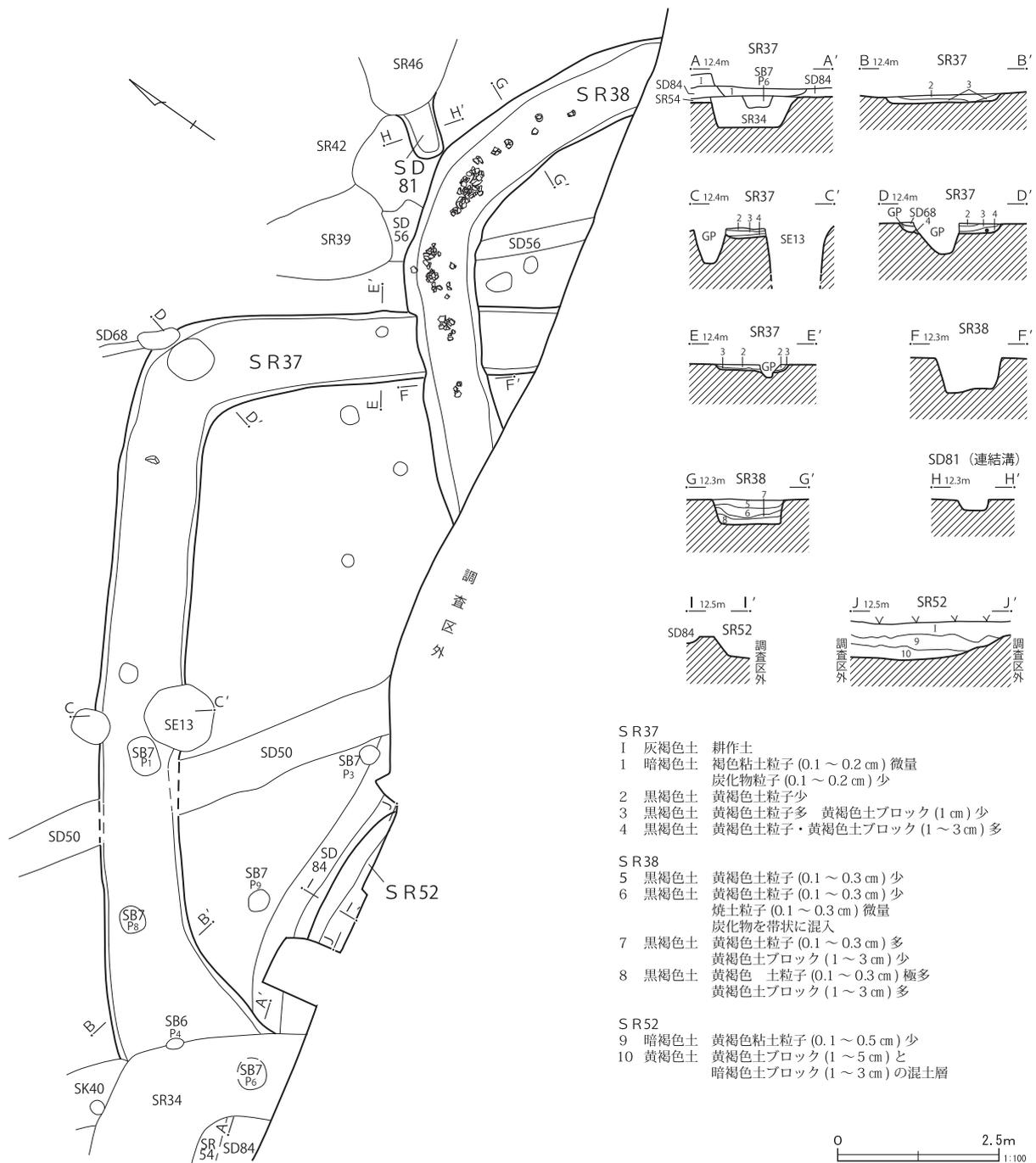
- | | |
|--|---|
| 1 黒褐色土 黄褐色土粒子・黄褐色土ブロック (1~2 cm) 多 | 5 黒褐色土 黄褐色土粒子多 黄褐色土ブロック (1~2 cm)・炭化物ブロック少 |
| 2 黒褐色土 黄褐色土粒子多 黄褐色土ブロック (1 cm) 少 炭化物微量 | 6 黒褐色土 黄褐色土粒子・黄褐色土が混入多 |
| 3 黒褐色土 黄褐色土粒子・黄褐色土ブロック (1~8 cm) 多 炭化物少 | 7 黒褐色土 黄褐色土粒子多 黄褐色土ブロック (3~5 cm)・炭化物少 |
| 4 黒褐色土 黄褐色土粒子少 炭化物微量 | |

第147図 D区第36号周溝状遺構

下場幅0.70~0.74m、深さ20~30cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は逆台形、もしくは皿状である。

周溝南端部近くで、台付甕2点 (19・20) が土圧で潰れた状態で出土した。またその地点近くからは、壺2点 (13, 14) が完形に近い形で出土している。図化できた土師器は、壺・高坏・台付甕など



第148図 D区第37・38・52号周溝状遺構、第81号溝跡

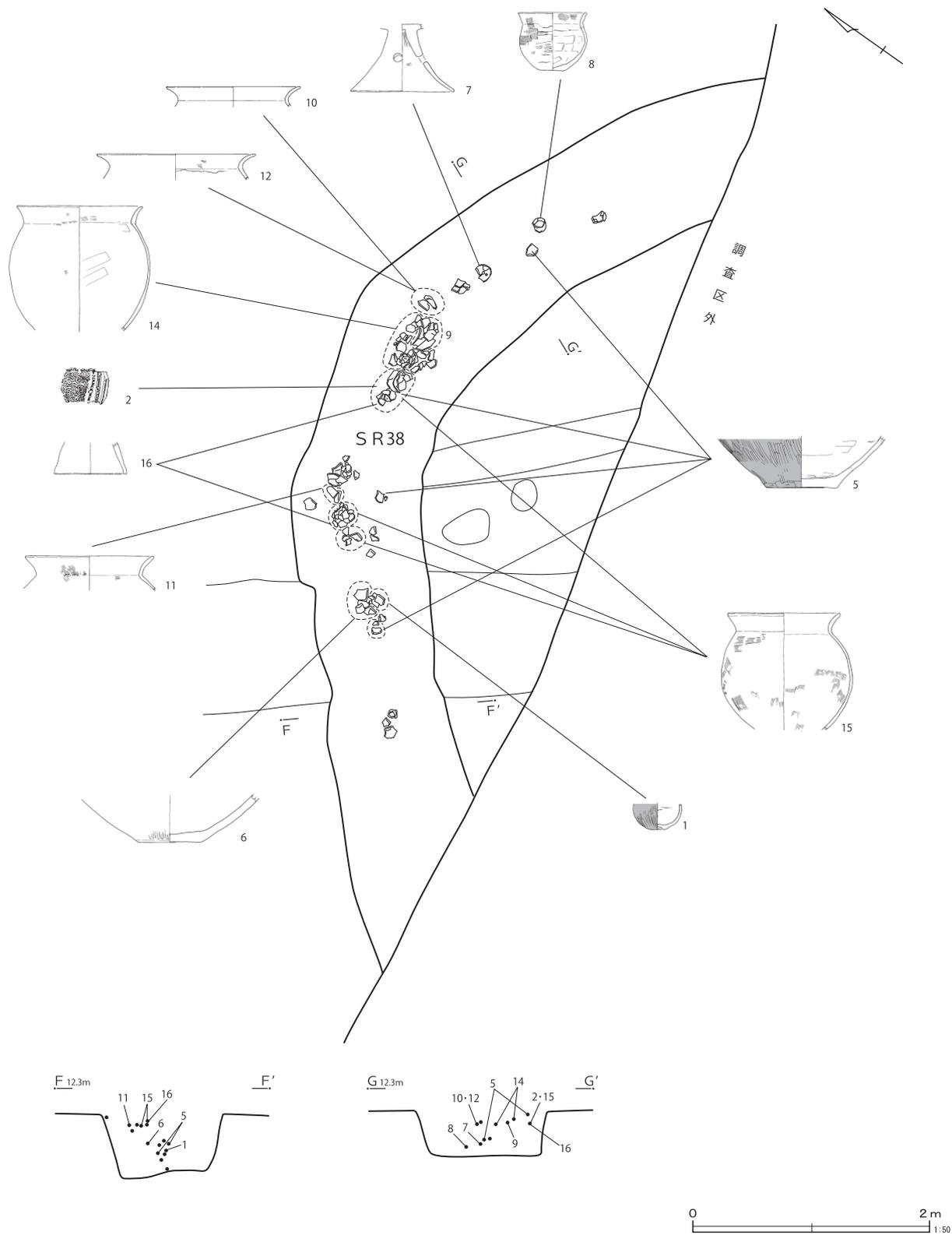
計9点 (12~20) である。

D区29号周溝状遺構 (第134・135図)

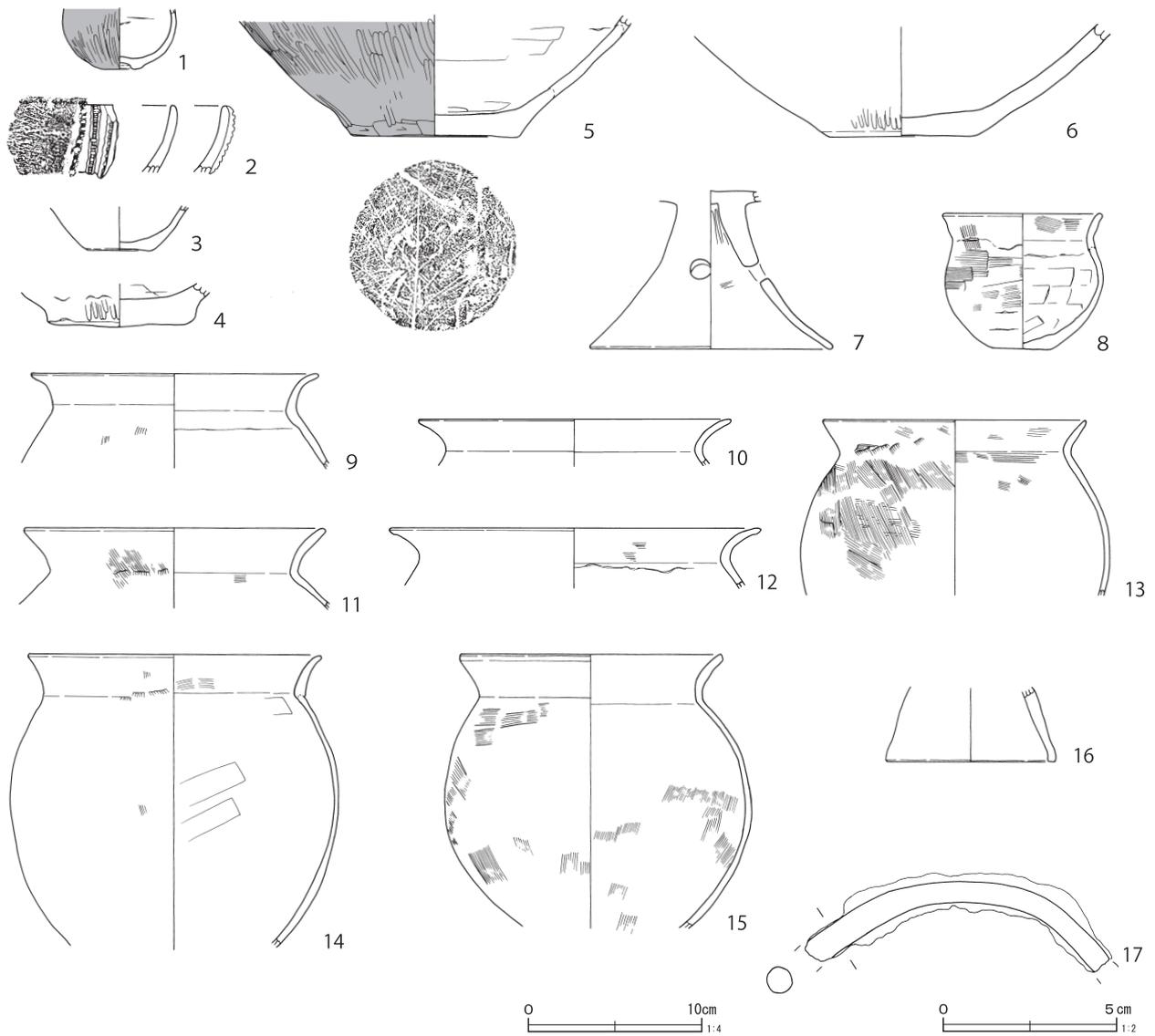
G-13グリッドに位置する。ほぼ直角に湾曲する周溝が、L字状に検出された。遺構の深度が浅いため、土層断面の観察による重複遺構との新旧関係の把握はできなかった。

部分的な検出であるため平面形は不明であるが、周溝が直線状であること、ほぼ直角なコーナーをもつことなどの点から、方形もしくは長方形の可能性が高いと考えられる。

周溝の規模は、全長が東西溝2.55m、南北溝1.42mで計3.97m、主軸方位は不明である。上場幅



第149图 D区第38号周沟状遺構遺物出土狀況



第150図 D区第38号周溝状遺構出土遺物

は1.11~1.35m、下場幅0.75~0.95m、深さ10cmである。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは極めて緩やかで、断面形は皿状である。

図化できた遺物は土師器の壺1点(1)である。

D区第30号周溝状遺構 (第136図)

F・G-12・13グリッドに位置する。ほぼ直線の周溝が「コ」の字状に検出された。D区第23・40・42・45号溝跡よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係については捉えられなかった。

周溝はほぼ直線状で、北東部分には周溝は認め

られないが、開口部であるのか、遺構の深度が浅いため周溝が失われた結果であるのかは特定できなかった。仮に開口部であった場合、開口の規模は7.4m、主軸方位はN-59°-Eと推定される。

遺構の規模は、北東-南西方向の外法6.92m、内法6.15m、南東-北西方向の内法7.55mである。周溝の規模は、上場幅0.50~0.75m、下場幅0.35~0.55m、深さ10~30cmである。

周溝の南東端近くで、土壇状の落ち込みが検出された。規模は短径60cm、長径262cm、周溝底面との比高差は15~25cm程である。

第47表 D区第38号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR38	D	土師器	埴	40		1.6	[3.6]	A C F	普通	にぶい 橙	No.7 H-19G 外面へラ磨き 内面へラナ デとナデ 外面赤彩
2	SR38	D	土師器	壺	5			[3.8]	A F	普通	橙	No.16 外面付加条の縄文か 細いRの縄文 を付加する 外面刺突文あり 器面風化著 しい
3	SR38	D	土師器	小型壺	50		3.6	[2.6]	A C D F	普通	にぶい 黄橙	器面風化著しい
4	SR38	D	土師器	壺	50		8.4	[2.5]	A C F	普通	にぶい 橙	H-19G 内面へラナデ 外面へラ磨き一部 ナデか 底部へラ削り 器面風化著しい
5	SR38	D	土師器	壺	70		9.6	[7.1]	A C F	普通	にぶい 赤褐	No.4・15・16・24 H-19G 外面へラ磨き 外面下位へラ削り 内面へラナデ 内外面 に黒斑あり 外面赤彩 底部木葉痕あり
6	SR38	D	土師器	甕	40		(8.2)	[6.4]	A C G	普通	明赤褐	No.6 外面下位へラ磨き 内面・底部へラ ナデか 器面風化著しい
7	SR38	D	土師器	器台	90		13.5	[9.2]	A C D	普通	明赤褐	No.23 外面へラ磨きか 内面上端絞りか 内面中・下位ハケナデとへラナデか 器面 風化著しく調整不明 穿孔3ヶ所(外面か ら穿孔)
8	SR38	D	土師器	小型壺	80	(8.9)	3.5	7.8	A C D F	普通	橙	No.5 口縁部内外面横ナデ 胴部内外面へ ラナデ 底部手持ちへラ削り 外面に黒斑 あり
9	SR38	D	土師器	甕	20	(16.4)		[5.5]	A D F	普通	にぶい 黄橙	No.19 口縁部内外面横ナデ 外面ハケか 内面へラナデか 器面風化著しい
10	SR38	D	土師器	甕	15	(17.8)		[2.7]	A C F	普通	明赤褐	No.21 口縁部内外面横ナデ 器面風化著し しい
11	SR38	D	土師器	甕	20	(17.2)		[4.7]	A C F	普通	橙	No.13 口縁部内外面横ナデ 外面ハケ 内 面ハケナデか 器面風化著しい
12	SR38	D	土師器	甕	15	(21.2)		[3.5]	A C F G	普通	橙	No.21 口縁部内外面横ナデ 外面へラナデ か 器面風化著しい
13	SR38	D	土師器	甕	60	15.2		[10.1]	A C D F	普通	にぶい 赤褐	No.11・14・17・19 口縁部内外面横ナデ 外面ハケ 内面ハケナデとへラナデか 器 面風化している
14	SR38	D	土師器	甕	40	(16.8)		[16.9]	A C F	普通	にぶい 黄橙	No.18・20 口縁部内外面横ナデ 外面ハケ か 内面へラナデか 器面風化著しい 外 面僅かに煤付着 外面被熱により僅かに赤 色化した部分あり
15	SR38	D	土師器	甕	80	15.0		[15.0]	A C D F	普通	明褐	No.10・11・16
16	SR38	D	土師器	台付甕	35		(9.8)	[4.3]	F G	普通	橙	No.11・16 H-19G 器面風化著しく調整不 明
17	SR38	D	鉄製品	不明								長さ8.8cm 径0.7cm 重さ21.4g 錆化著しい 両端部欠損

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較の急で、断面形は逆台形、もしくは箱形である。

土師器の小破片が1点出土したが、図化には至らなかった。

D区第31号周溝状遺構 (第137図)

F・G-13・14グリッドに位置する。やや湾曲するものの、直線状の周溝が「コ」の字状に検出された。D区第10・21号溝跡よりも古いのが、遺構の深度が浅いため、覆土の土層観察による、その他の重複遺構との新旧関係の把握はできなかった。

周溝は、北溝がやや湾曲するもののほぼ直線状である。南東部分には周溝は認められないが、開口部であるのか、遺構の深度が浅いため周溝が失

われた結果であるのかは特定できなかった。仮に開口部であった場合、開口の規模は5.26m、主軸方位はN-58°-Wと推定される。

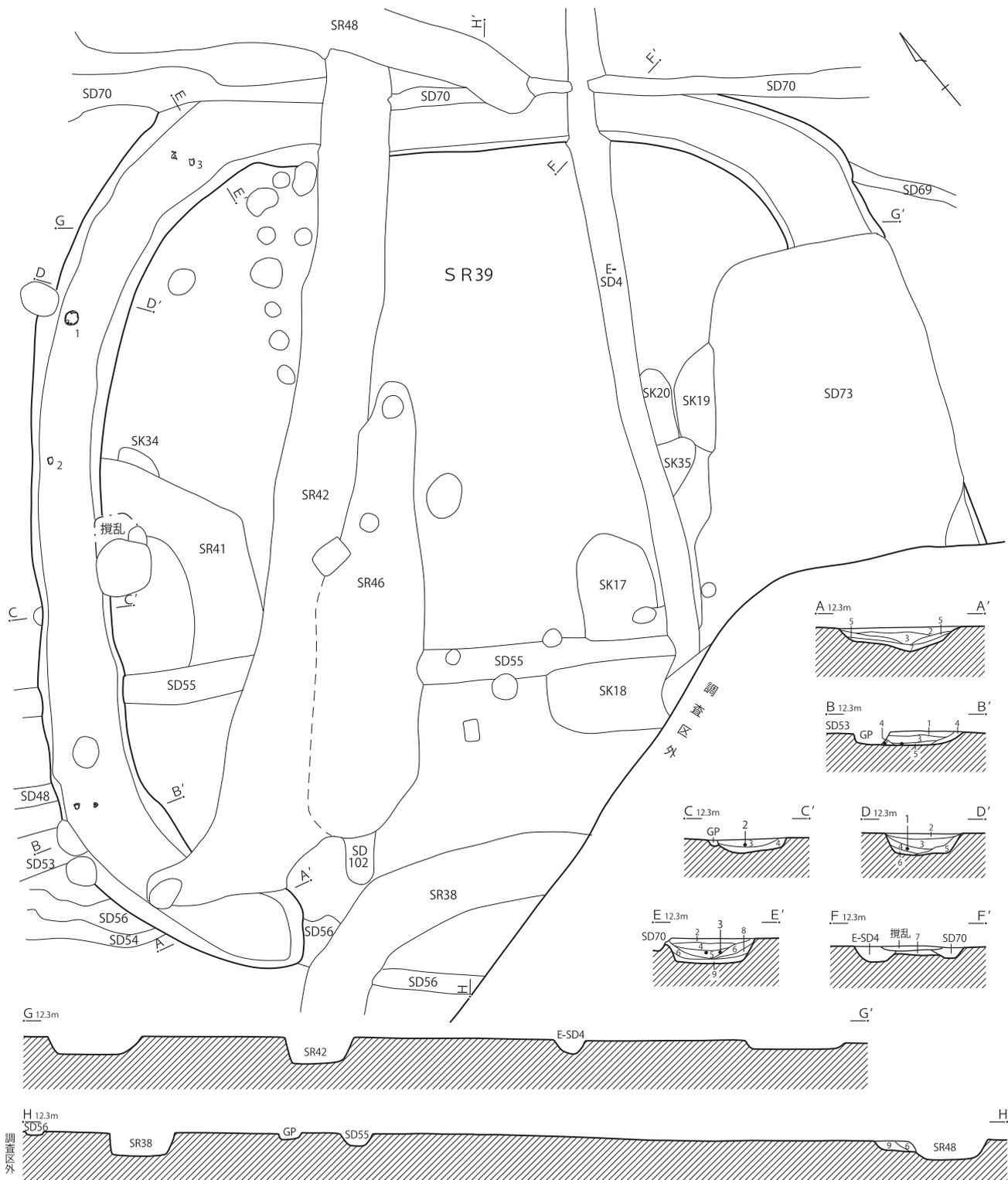
遺構の規模は、南西-北東方向の外法6.45m、内法5.13m、南東-北西方向の外法5.38m、内法4.78mである。周溝の規模は、上場幅0.55~0.95m、下場幅0.45~0.87m、深さ10~13cmである。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

遺物は出土しなかった。

D区第32号周溝状遺構 (第138・139図)

G-15・16、H-16グリッドに位置する。D区第10・11号井戸跡よりも古いのが、遺構が浅いため、覆

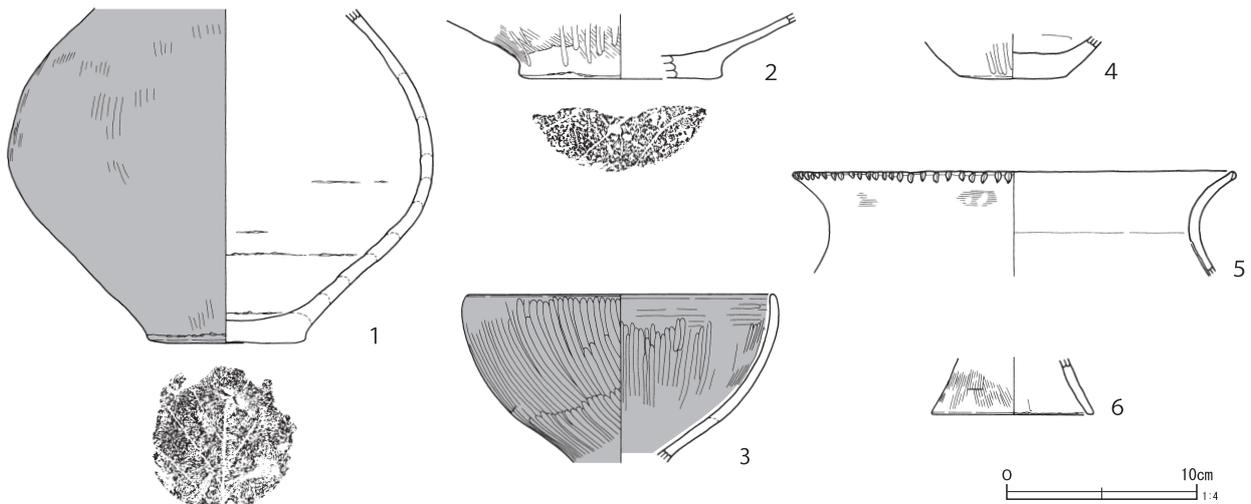


SR39

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm)・黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 極多
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少
- 4 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm)・黄褐色土ブロック (3 ~ 5 cm) 多
炭化物粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 少

- 5 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 極多 黄褐色土ブロック (3 ~ 5 cm) 多
焼土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 微量
- 6 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm)・黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少
- 7 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多
- 8 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm)・黄褐色土ブロック (3 ~ 10 cm) 多
- 9 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 多

第151図 D区第39号周溝状遺構



第152図 D区第39号周溝状遺構出土遺物

第48表 D区第39号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR39	D	土師器	甗	70		8.3	[17.6]	A C F	不良	にぶい黄橙	No.4 外面へラ磨き 内面へラナデか 外面に黒斑あり 外面赤彩 底部木葉痕あり
2	SR39	D	土師器	壺	30		(10.6)	[3.4]	A C F	普通	浅黄橙	No.3 外面ハケ後粗いへラ磨き 内面へラナデか 底部木葉痕あり
3	SR39	D	土師器	高坏	55	16.0		[8.9]	A B C F I	普通	にぶい黄橙	No.6 内外面へラ磨き 内外面赤彩
4	SR39	D	土師器	壺	60		5.7	[2.3]	A B C D F	普通	橙	G-19G 外面へラ磨き 内面へラナデ 底面へラナデか 器面風化している 外面に黒斑あり
5	SR39	D	土師器	甗	20	(23.0)		[5.5]	A B D F G	普通	にぶい褐	G-19G 口縁部内外面横ナデ 口唇部に刻み目あり 外面ナデか 内面へラナデ
6	SR39	D	土師器	甗	40		(8.4)	[2.9]	A C F	普通	にぶい橙	G-19G 外面ハケ 内面へラナデ 被熱のため器面は風化・赤色化している

土の土層観察による、その他の重複遺構との新旧関係は把握できなかった。

周溝は、半円状に検出された。南側部分には周溝は認められないが、開口部であるのか、遺構が浅いため周溝が失われた結果であるのかは特定できなかった。仮に開口部であった場合、主軸方位はN-30°-Wと推定される。

遺構の規模は、南北方向の外法8.25m、内法7.58m、東西方向の内法 [7.45] mである。周溝の規模は、上場幅0.75~1.65m、下場幅0.60~1.50m、深さ10~15cmである。

周溝南西部近くで、土塊状の落ち込みが確認された。この落ち込みの平面形は長楕円形で、規模

は短径0.56m、長径0.85m、確認面からの深さは30cm程、周溝との比高差は10cm程である。

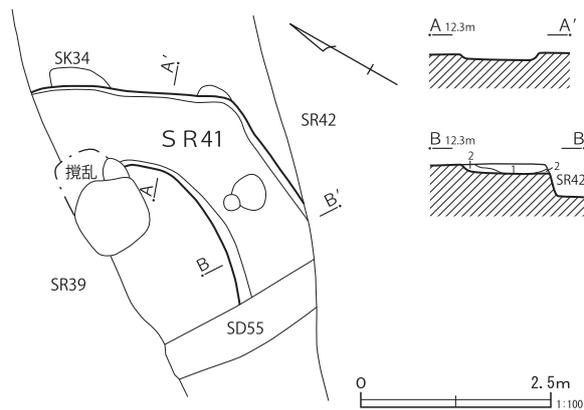
周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

図化できた遺物は1点(1)である。

D区第33号周溝状遺構 (第140・141図)

E-17・18、F-17グリッドに位置する。やや湾曲するものの、直線状の周溝が短く「コ」の字状に検出された。

D区第3号墳、D区第18号井戸跡、D区第12号掘立柱建物跡よりも古い。遺構の深度が浅いため、覆土の土層観察による、その他の重複遺構との新旧関係の把握はできなかった。



SR41
 1 黒褐色土 黄褐色土粒子(0.1~0.5cm)・黄褐色土ブロック(1~2cm)多
 2 黄褐色土 黄褐色土主体の層で黒褐色土を斑に少

第153図 D区第41号周溝状遺構

周溝は、北溝がやや湾曲するものの直線状である。西溝および、東溝の一部が検出された。南側は遺構が失われているが、南西部については開口部の可能性が考えられる。主軸方位は不明である。

遺構の規模は、全長13.15m、上場幅0.52~0.90m、下場幅0.38~0.60m、深さ17~20cmである。

土層断面の観察から、自然堆積(第5~7層)した周溝を埋め戻している(第1~4層)と考えられる。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状、もしくは逆台形である。

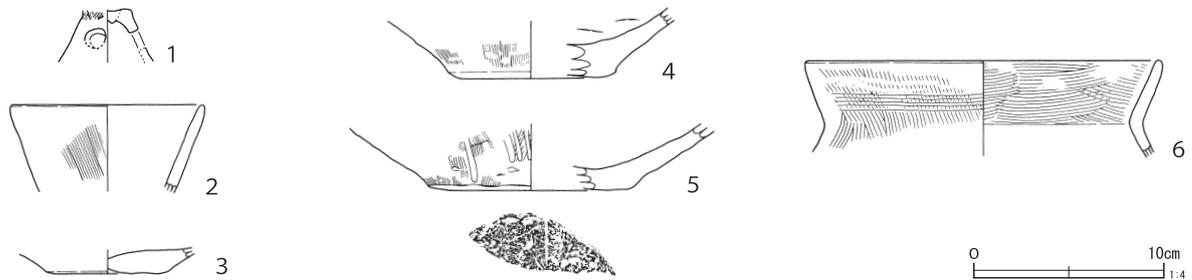
図化できた土師器は、壺・甕など計4点(1~4)である。

D区第34号周溝状遺構(第142・143図)

H-17・18グリッドに位置する。やや湾曲するものの、直線状の周溝が短くL字状に検出された。

D区第54号周溝状遺構より新しく、D区第37号周溝状遺構、D区第49・84号溝跡、D区第6・7号掘立柱建物跡よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係は把握できなかった。

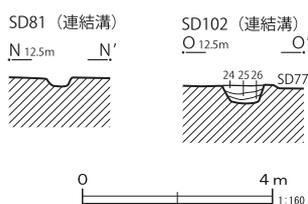
周溝は北東コーナー部分に相当し、西側・南側は調査区外に続いており、L字状に検出されたのみにとどまる。なお、D区第54号周溝状遺構については覆土と周溝底面のみ確認であり、壁面は検出されなかった。東溝および、北溝の一部のみが



第154図 D区第41号周溝状遺構出土遺物

第49表 D区第41号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR41	D	土師器	器台	50			[2.7]	A B C F G	普通	にぶい 黄橙	G-19G 調整不明瞭 穿孔3ヶ所
2	SR41	D	土師器	壺	15	(10.0)		[4.6]	A C D E	普通	橙	G-19G 外面ハケ後へラ磨きか 器面風化著しい
3	SR41	D	土師器	壺	30		(6.4)	[1.3]	A C F	普通	橙	G-19G 器面風化著しく調整痕はみえない
4	SR41	D	土師器	甕	15		(9.0)	[3.0]	A F G	普通	にぶい 赤褐	G-19G 外面ハケ 内面へラナデ 底部へラ削り
5	SR41	D	土師器	壺	20		(10.8)	[3.5]	A C F	普通	灰褐	G-19G 外面ハケ後粗いへラ磨き 内面へラナデか 底部木葉痕あり
6	SR41	D	土師器	甕	25	(18.4)		[5.0]	A D F	普通	にぶい 黄橙	G-19G 外面・口縁部内外面ハケ後横ナデ



- S R 48
- 17 黒褐色土 褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 微量 炭化物粒子 (0.3 cm)・焼土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少
 - 18 黒褐色土 褐色粘土ブロック (0.5 cm) やや多 鉄分多
 - 19 黄灰色土 暗褐色土ブロック (0.5 ~ 1 cm) やや多
 - 20 暗褐色土 褐灰色土との混土層 焼土少
 - 21 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック (0.3 ~ 0.5 cm) 少
 - 22 暗褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.1 cm) 疎らに少
 - 23 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 均質に少
- S D 102 (連結構)
- 24 黒褐色土 褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 微量 鉄分少
 - 25 黒灰色土 黄灰色粘土ブロック (2 ~ 10 cm) 多 酸化土ブロック (0.5 cm) 均質に少
 - 26 黄灰色土 黒灰色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少

第156図 D区第42・46・48号周溝状遺構、第81・102号溝跡(2)

検出された。検出された部分的範囲内において、平面形は方形、または長方形と推定されるが、主軸方位は不明である。

遺構の規模は全長6.80m、上場幅1.35~1.71m、下場幅1.00~1.28m、深さ55~63cmである。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形、もしくは箱形である。

コーナー部分からまとまった形で土師器が出土した。図化できた土師器は、壺・器台・埴・台付甕など13点(1~13)である。

D区第35号周溝状遺構(第144・145図)

G-17・18、H-18グリッドに位置する。やや湾曲するものの、直線状の周溝がL字状に検出された。D区第3号墳、D区第6号掘立柱建物跡、D区第49・50号溝跡よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係については捉えられなかった。

周溝は西端部で途切れているが、深度が浅いことから、プランが失われている可能性がある。これに対して、南端部は確認面からの深さが50cmであることから、プランが失われているという可能性は低く、開口部ではないかと推定される。全体的な平面形は方形、もしくは長方形と推測される。

遺構の規模は、北溝が6.90m、東溝が5.56mで全長12.46m、周溝の方位は北溝がN-50°-W、東溝がN-40°-Eである。周溝の規模は、上場幅0.60~1.05m、下場幅0.43~0.55m、深さ17~50cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形、もしくは塀形

である。

東溝の南端部近くで土師器片がまとまった状態で確認された。図化できた遺物は、土師器の小型壺・器台・甕など計6点(1~6)である。

D区第36号周溝状遺構(第146・147図)

F・G-17・18グリッドに位置する。D区第3号墳、D区第48~50号溝跡よりも古い、その他の重複遺構との新旧関係については不明である。

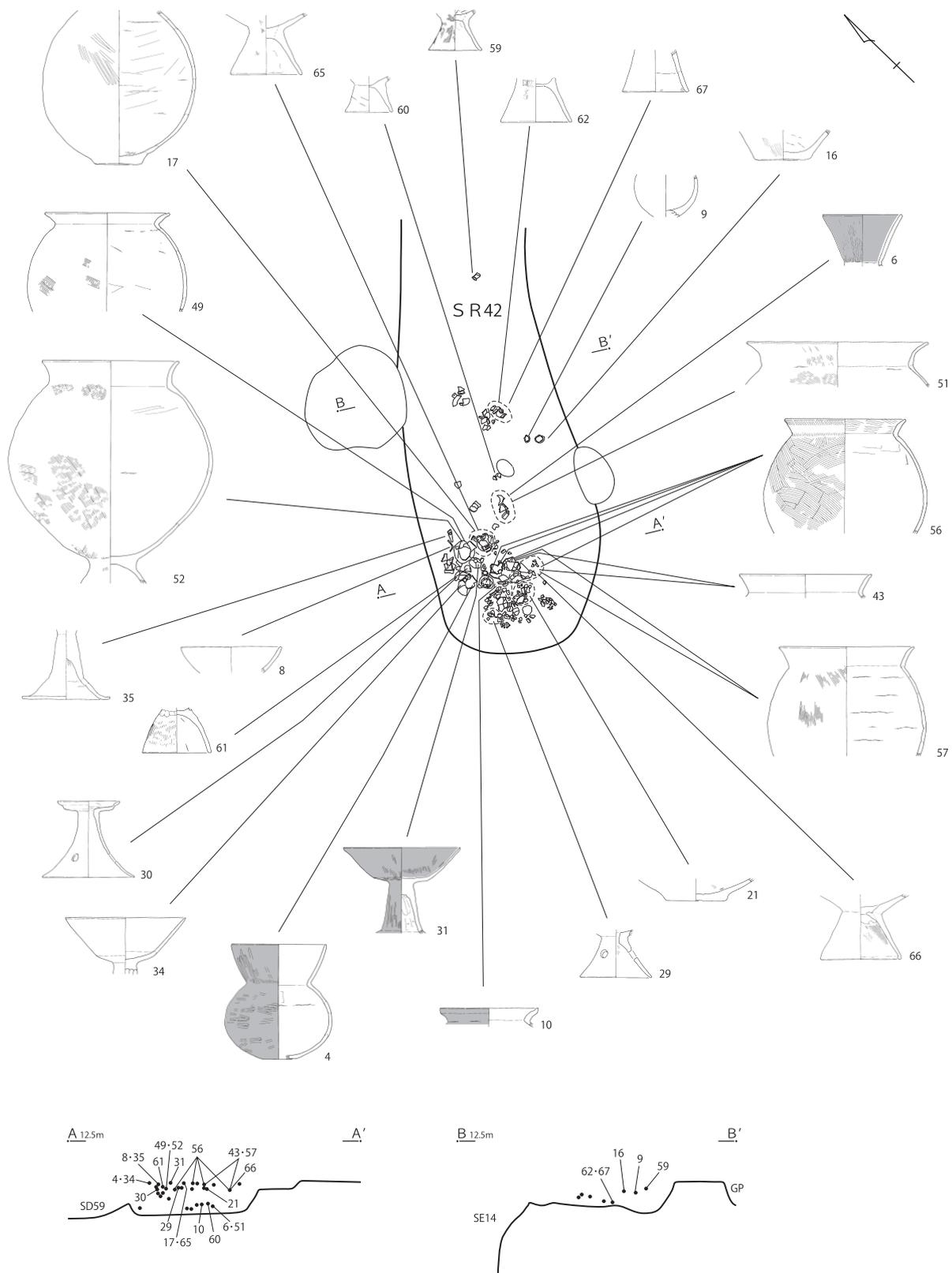
東溝の南端部は、D区第3号墳によって失われている。西溝の南端部付近は、きわめて遺存状況が悪い、開口部であるのか、あるいはプランが失われているのか特定することはできなかった。

西溝と東溝では、周溝内に段差が認められた。段差は、西溝では3箇所、東溝では4箇所認められた。周溝底面との比高差は、西溝では北側の段差から10cm弱、10cm弱、5cm程で、東溝では北側の段差から20cm弱、15cm、5cm、10cm程の比高差をもつ。

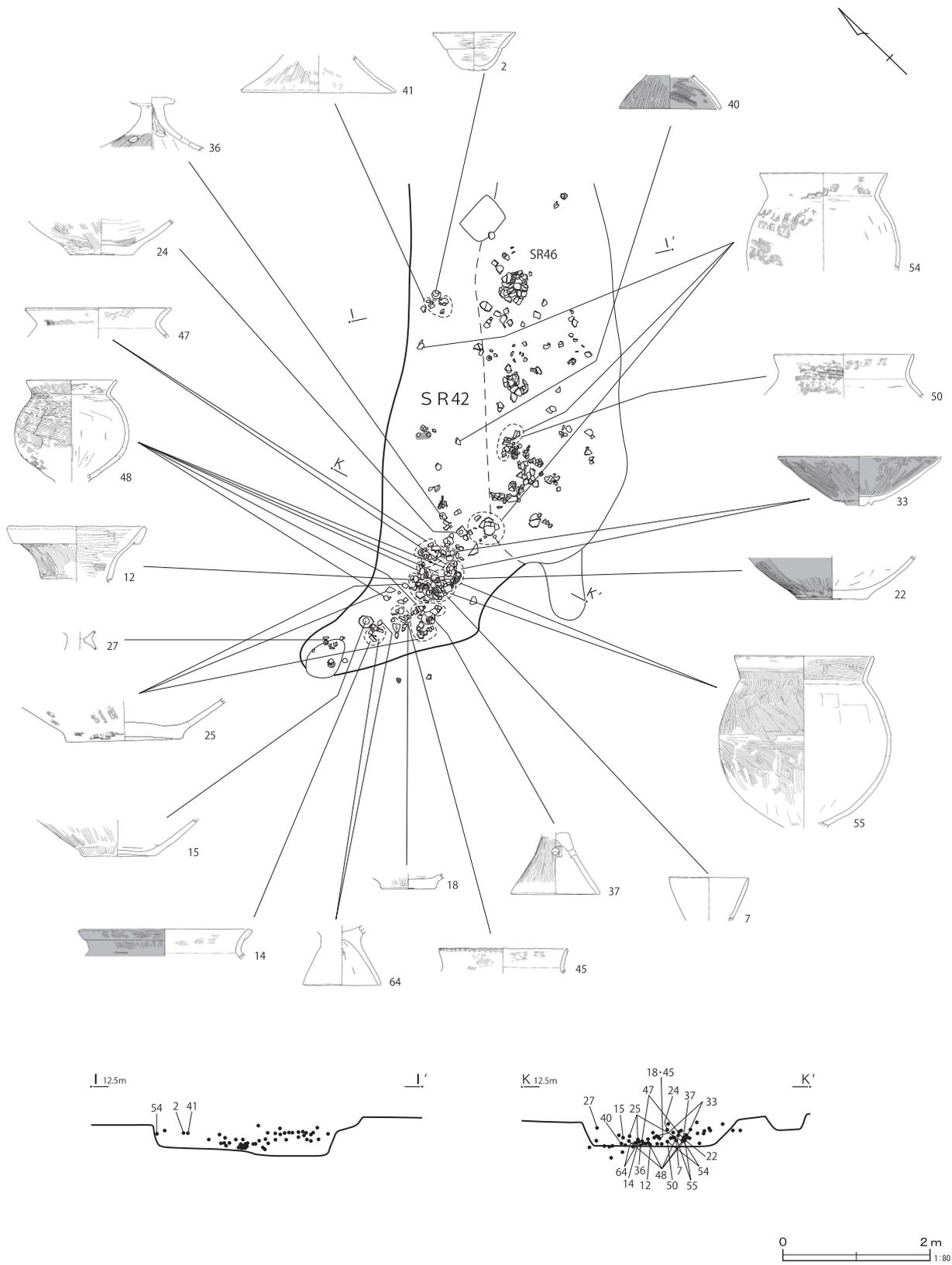
遺構の規模は、北東-南西方向の外法10.95m、内法9.32m、北西-南東方向の外法10.88m、内法8.75m。南西部分が開口部であれば、主軸方位はN-52°-Eとなる。周溝の規模は、上場幅0.78~1.22m、下場幅0.78~0.82m、深さ8~55cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは急で、断面形は浅い部分では皿状であるが、深い部分では逆台形、もしくは箱形である。

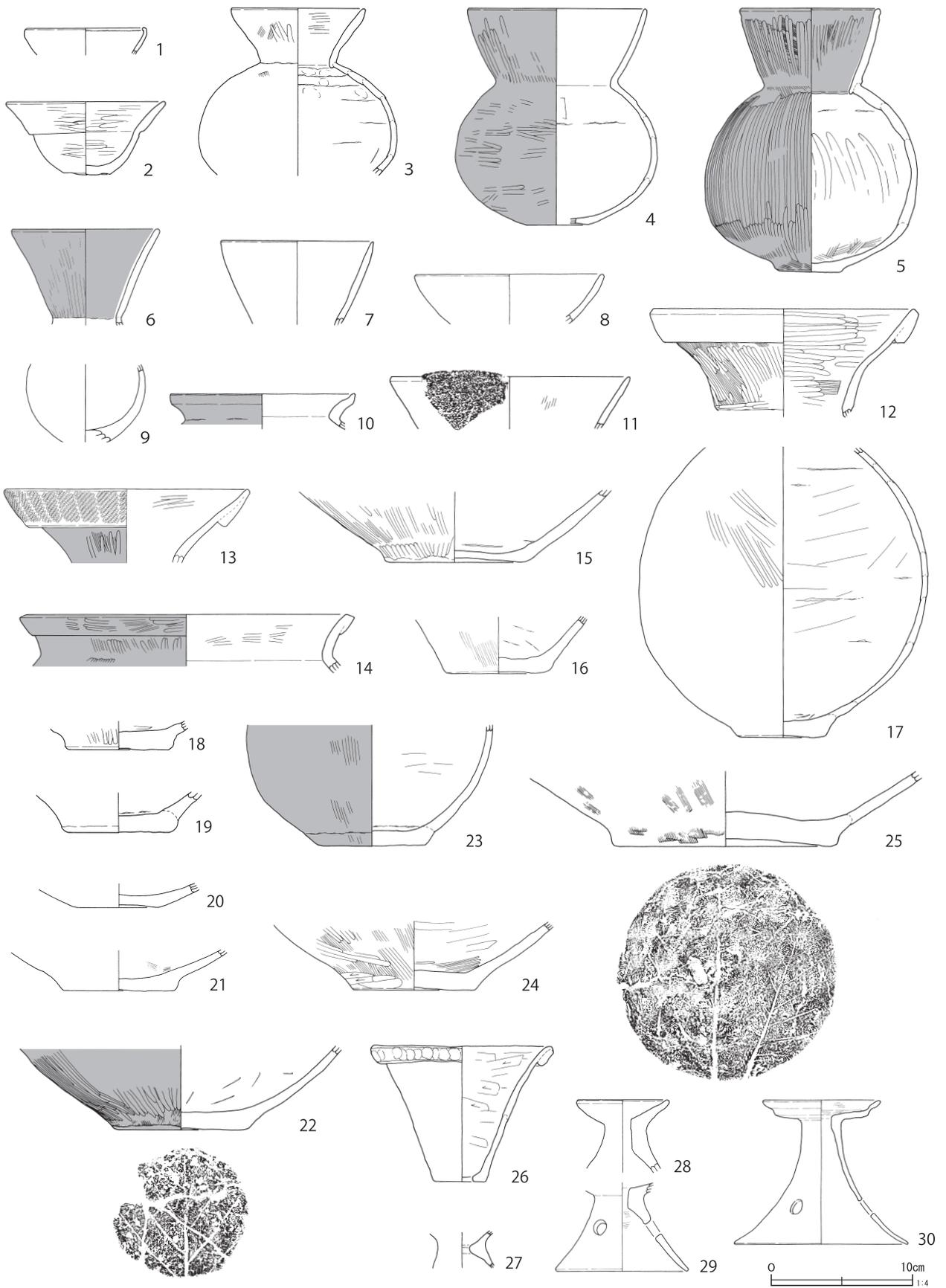
図化できた遺物は、土師器の壺・甕などのほか、貝巣穴痕泥岩1点を含む計6点(1~6)である。



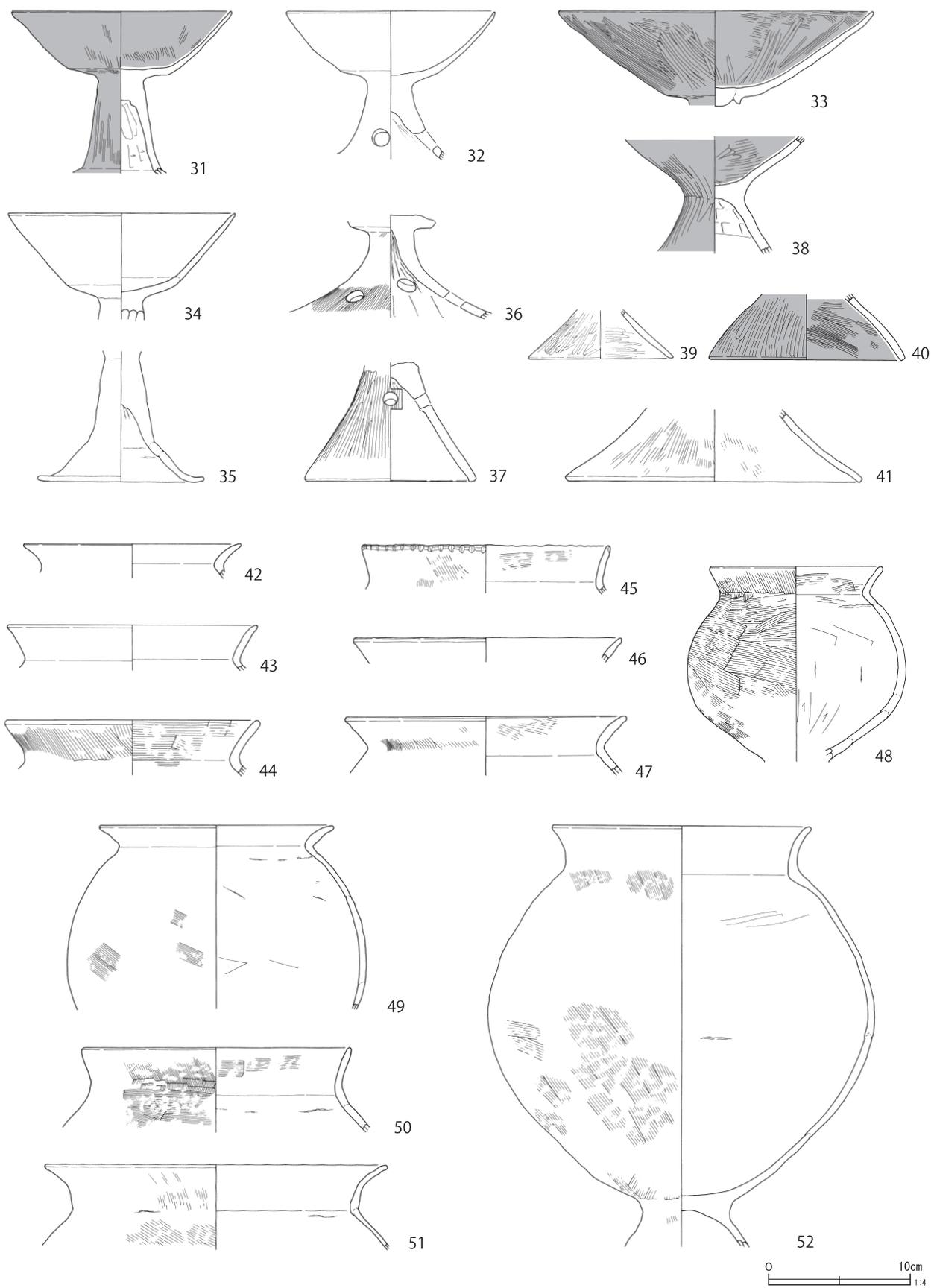
第157图 D区第42号周沟状遺構遺物出土狀況(1)



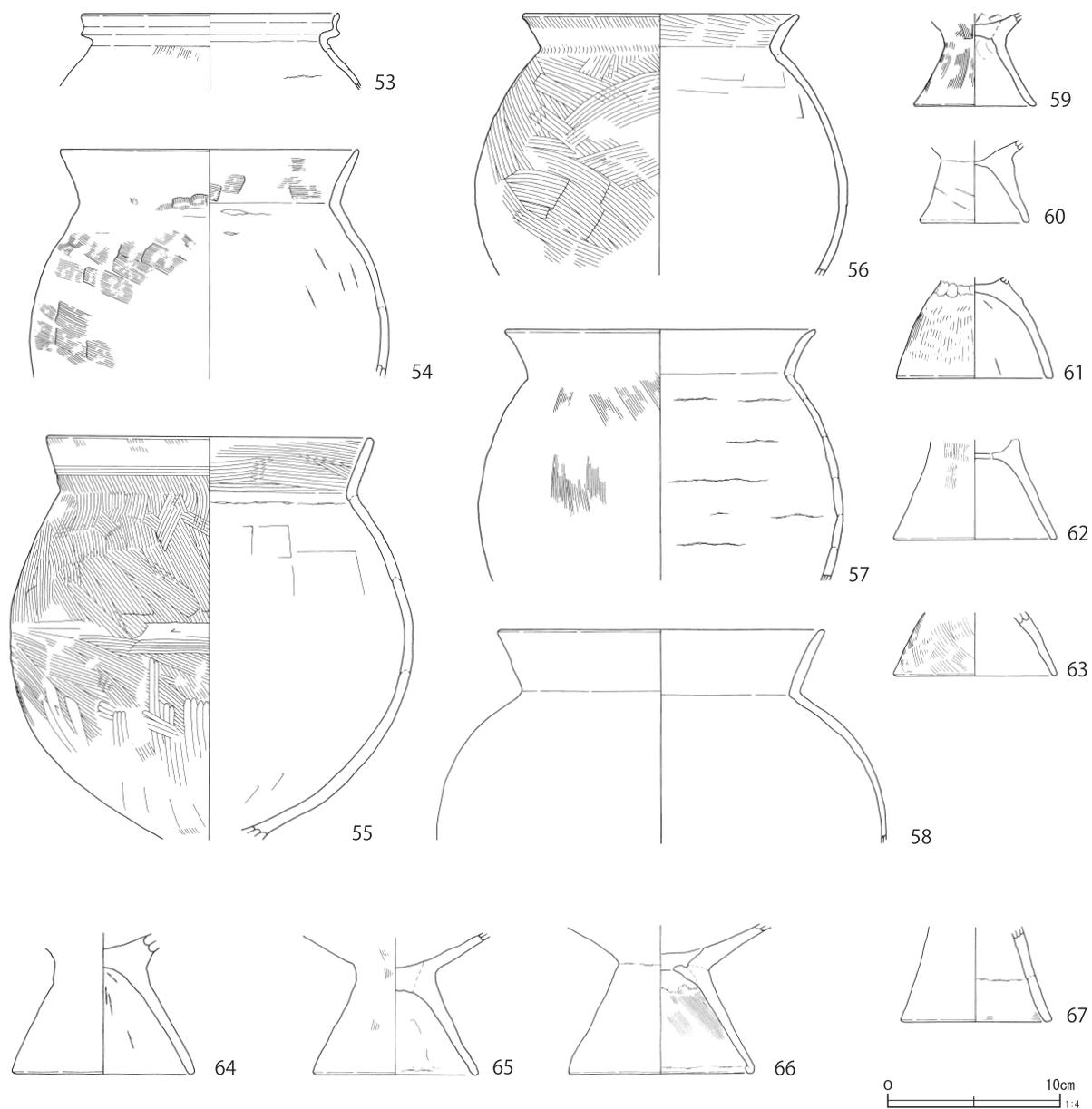
第158图 D区第42号周溝状遺構遺物出土狀況（2）



第159图 D区第42号周沟状遗构出土遗物 (1)



第160图 D区第42号周沟状遗构出土遗物(2)



第161図 D区第42号周溝状遺構出土遺物（3）

D区第37号周溝状遺構（第148図）

G・H-18・19グリッドに位置する。やや湾曲するものの、直線状の周溝がL字状に検出された。D区第34号周溝状遺構、D区第84号溝跡、D区第7号掘立柱建物跡より新しく、D区第13号井戸跡、D区第6号掘立柱建物跡、D区第50号溝跡、およびピットよりは古い。その他の重複遺構との新旧関係は把握できなかった。

周溝は北東コーナー部分に相当し、南側は調査

区外に続いており、L字状に検出されたのみにとどまる。なお、検出された部分的範囲内において、平面形は方形、または長方形と推定されるが、主軸方位や開口部の有無については確認できなかった。

確認された遺構の規模は、西溝10.46m、東溝5.40mで全長15.86m、上場幅1.02～2.02m、下場幅0.86～1.81m、深さ12～18cmである。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは緩

第50表 D区第42号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR42	D	土師器	埴	15	(8.2)		[1.9]	A C F	普通	にぶい 橙	器面風化著しい 手捏ね
2	SR42	D	土師器	埴	60	11.1	3.3	5.1	A B C D F	普通	橙	遺物集中区No.1 口縁部内外面横ナデ 器面風化しておりミガキ痕は見えずらい
3	SR42	D	土師器	埴	40	(9.4)		[11.8]	A C F	普通	にぶい 黄橙	遺物集中区No.6 口縁部内外面ハケ後へら磨き 胴部外面ハケ後へら磨きか 胴部内面上位指頭圧痕あり 中・下位へらナデとナデ 胴部内面輪積み痕顕著
4	SR42	D	土師器	埴	30	(12.4)	(4.4)	15.3	A C D F	普通	にぶい 褐	No.13 外面へら磨き 口縁部内面へら磨きか 胴部内面へらナデか 外面赤彩
5	SR42	D	土師器	壺	85	9.5	4.7	18.6	C D F G	普通	にぶい 黄橙	No.45 外面ハケ後へら磨き 内面へらナデと指ナデ 胴部外面に大黒斑あり 器面は荒れている 外面・口縁部内面赤彩
6	SR42	D	土師器	埴	80	10.3		[6.8]	A F G	普通	にぶい 橙	No.23 外面磨き 内面磨きか 風化のため調整不明瞭 内外面赤彩
7	SR42	D	土師器	埴	20	(10.6)		[5.9]	A C F	普通	橙	遺物集中区No.91 外面へら磨きか 器面摩滅している
8	SR42	D	土師器	高坏	35	(13.2)		[3.5]	D F G	普通	にぶい 橙	No.20 F-18G 器面風化著しい 内外面ともへら磨きか
9	SR42	D	土師器	高坏	50			[5.5]	A C F	普通	浅黄橙	No.34 F-18G 器面風化著しく調整不明 外面に黒斑あり
10	SR42	D	土師器	壺	25	(13.0)		[2.5]	A C G	普通	橙	No.7 口縁部内外面横ナデ 内面全体的に黒色 外面赤彩
11	SR42	D	土師器	壺	5	(16.8)		[3.7]	A B G	普通	にぶい 黄橙	F-18G 外面擦糸文か 内面へら磨きか 内外面風化している
12	SR42	D	土師器	壺	25	(18.5)		[7.6]	A D F	普通	灰黄褐	遺物集中区No.106 口縁部外面横ナデ
13	SR42	D	土師器	壺	45	(17.0)		[5.3]	A C F	普通	明黄褐	No.41 原体 RL 縦回転 口唇上にも縄文施文原体 RL 横回転 頸部外面ハケ後へら磨き 内面へら磨き 頸部外面赤彩 器面風化著しい
14	SR42	D	土師器	甕	20	(22.6)		[3.6]	A G	普通	にぶい 橙	No.105 口縁部内外面へら磨き 外面赤彩
15	SR42	D	土師器	壺	65		9.8	[5.0]	A F	普通	明赤褐	遺物集中区No.103 外面へら磨き 内面へらナデか
16	SR42	D	土師器	壺	65		7.2	[4.0]	A C F	普通	橙	No.27 外面へら磨き 内面へらナデ
17	SR42	D	土師器	壺	40		6.4	[20.5]	B C D F I	普通	にぶい 黄橙	No.17 外面へら磨き 内面へらナデ 底部へらナデか 外面風化のため調整不明瞭 外面に黒斑あり
18	SR42	D	土師器	壺	75		7.0	[2.1]	A C D F J	普通	橙	遺物集中区No.99 外面へら磨き 内面へらナデ 胴部～底部外面に黒斑あり
19	SR42	D	土師器	壺	25		(7.0)	[2.8]	A C F G	普通	橙	F-18G 内外面風化著しい
20	SR42	D	土師器	壺	75		5.7	[1.6]	A C F	普通	浅黄橙	F-18G 内面へらナデ 外面へら磨きか 底面へらナデか 器面風化著しい
21	SR42	D	土師器	壺	75		7.7	[2.8]	A B C D G	普通	明黄褐	No.3 外面へら磨きか 内面ハケとへらナデか 底部へらナデか 器面風化著しい
22	SR42	D	土師器	壺	40		9.6	[6.0]	A C F	普通	にぶい 褐	遺物集中区No.92② A-A'バルト 外面へら磨き 内面へらナデ 内面に工具の当り痕がみられる 外面赤彩 底部木葉痕あり
23	SR42	D	土師器	壺	70		7.6	[8.6]	A C	普通	赤橙	外面へら磨き 内面・底部へらナデか 外面赤彩 器面風化著しく調整不明瞭
24	SR42	D	土師器	壺	70		8.6	[4.9]	A C D F J	普通	にぶい 黄橙	遺物集中区No.78 外面ハケ後粗いへら磨き 内面へらナデ
25	SR42	D	土師器	壺	60		15.8	[5.3]	A C D F	普通	にぶい 橙	遺物集中区No.94・95・108 外面ハケ後へら磨きか 内面へらナデか 底部木葉痕あり
26	SR42	D	土師器	甗	85	12.5	3.5	9.6	A C F	普通	にぶい 赤褐	F-19G 口縁部外面指頭圧痕あり 内面へら削り
27	SR42	D	土師器	器台	85			[2.5]	A C E F	普通	にぶい 黄橙	遺物集中区No.111 器面風化著しく調整不明

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
28	SR42	D	土師器	器台	70	6.3		[5.1]	A B C D F G	普通	灰黄	F-19G 坏部内外面横ナデ 坏部底部に穿孔あり(上面からの穿孔) 器面風化著しく調整不明瞭
29	SR42	D	土師器	器台	70		(9.2)	[6.3]	B C F G	普通	橙	No.6 外面へラ磨きか 脚部内面ハケナデか 穿孔3ヶ所(外からの穿孔) 坏底部に穿孔あり(上からの穿孔) 内外面風化・摩滅のため調整不明瞭
30	SR42	D	土師器	器台	70	8.2	(12.3)	10.2	A B C D F G	普通	にぶい 橙	No.14 外面・坏部内面へラ磨きか 内面へラナデか 穿孔3ヶ所(外からの穿孔) 器面風化著しい 脚部外面に黒斑あり
31	SR42	D	土師器	高坏	65	(15.6)		[11.4]	A C F	普通	浅黄橙	No.16 外面・坏部内面へラ磨き 脚部内面上半指ナデ下半へラナデ 器面風化著しい 坏部外面に黒斑あり 外面・坏部内面赤彩
32	SR42	D	土師器	高坏	75	14.7		[10.4]	A C F G	普通	浅黄橙	No.43 穿孔3ヶ所(外からの穿孔) 器面風化著しい
33	SR42	D	土師器	高坏	50	(22.0)		[6.7]	A C F	普通	にぶい 橙	遺物集中区No.89・92① 内外面ハケ後へラ磨き・黒斑・赤彩あり
34	SR42	D	土師器	高坏	50	(16.0)		[7.5]	A C F	普通	浅黄橙	No.13 器面風化著しく調整不明
35	SR42	D	土師器	高坏	35		(11.7)	[9.2]	C D F G	普通	にぶい 橙	No.20 外面へラ磨きか 脚部内面上位絞り内面中・下位ナデか 器面風化著しい
36	SR42	D	土師器	器台	80			[7.2]	B C D F G	普通	にぶい 黄橙	遺物集中区No.73 外面へラ磨き 内面へラナデ 穿孔6ヶ所(上段3孔下段3孔 外からの穿孔)
37	SR42	D	土師器	高坏	40		(11.8)	[8.4]	A C F G	普通	にぶい 黄橙	遺物集中区No.107 外面へラ磨き 内面ナデ 穿孔4ヶ所(外からの穿孔)
38	SR42	D	土師器	高坏	60			[8.3]	A C F	普通	灰黄褐	A-A' 南側 外面・坏部内面赤彩
39	SR42	D	土師器	器台	20		(10.2)	[3.4]	A C D	普通	明褐	内外面へラ磨き
40	SR42	D	土師器	高坏	15		(13.3)	[4.6]	D F G	普通	にぶい 橙	遺物集中区No.67 外面へラ磨き 内面ハケ内外面赤彩
41	SR42	D	土師器	高坏	20		(20.6)	[5.1]	A D F G	普通	橙	遺物集中区No.3 内外面へラ磨き
42	SR42	D	土師器	甕	15	(15.2)		[2.4]	A C G	普通	橙	F-18G 口縁部内外面横ナデか 器面風化著しい
43	SR42	D	土師器	甕	30	(17.3)		[3.2]	A C D	普通	明黄褐	No.9・10 口縁部内外面横ナデか 頸部外面ハケか 頸部内面へラナデか 器面風化著しい
44	SR42	D	土師器	甕	15	(17.7)		[3.9]	A F	普通	にぶい 褐	B-B' 中 B-B' 南側 口縁部内外面横ナデ
45	SR42	D	土師器	甕	20	(17.2)		[3.4]	A F G	普通	灰黄褐	遺物集中区No.99 口縁部内外面横ナデ 器面風化している
46	SR42	D	土師器	甕	5	(18.8)		[1.7]	C D F	普通	黒褐	F-18G 口縁部内外面横ナデか 器面風化著しい
47	SR42	D	土師器	甕	25	(19.6)		[4.2]	A F	普通	にぶい 褐	遺物集中区No.92 口縁上部内外面横ナデ 頸部外面ハケ 頸部内面へラナデか
48	SR42	D	土師器	小型 台付甕	60	12.0		[13.7]	A C F	普通	にぶい 赤褐	No.91~93・96・108 SR40・42A-A' 南側 口縁上部内外面横ナデ ハケ目は比較的深めである 被熱により胴部下半は赤色化顕著
49	SR42	D	土師器	甕	20	(16.4)		[13.0]	A C G		普通	No.18
50	SR42	D	土師器	甕	20	(18.6)		[5.9]	A F	普通	にぶい 黄橙	遺物集中区No.66 口縁上部内外面横ナデ 肩部内面へラナデ
51	SR42	D	土師器	甕	20	(24.0)		[5.9]	A C F	普通	橙	No.23 口縁部内外面ハケ後横ナデ 頸部内面へラナデか 器面風化著しく調整不明瞭
52	SR42	D	土師器	台付甕	40	(18.0)		[29.9]	A C F G	普通	にぶい 褐	No.18 F-18G 口縁部内外面横ナデ 外面ハケ 内面・脚部内面へラナデか 被熱により器面風化・赤色化(傷みが激しい)
53	SR42	D	土師器	S字状 口縁 台付甕	20	(14.8)		[4.4]	A C G	普通	にぶい 橙	B-B' 南側 口縁上部内外面横ナデか 肩部外面ハケ内面へラナデか
54	SR42	D	土師器	甕	30	(17.2)		[13.3]	A C F	普通	にぶい 赤褐	遺物集中区No.21・66・80 口縁部内外面横ナデ 内面へラナデ 器面摩滅している

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
55	SR42	D	土師器	台付甕	80	18.8		[23.7]	A C D F	普通	灰黄褐	遺物集中区No.91・92 口縁上部内外面ハケ後横ナデ 内面ヘラナデ 遺存度は比較的良好 被熱により部分的に少し赤色化している 外面煤付着
56	SR42	D	土師器	甕	30	15.8		[15.2]	C D F G	普通	にぶい黄橙	No.10~12・44 口縁部内外面横ナデ 外面ハケ 内面ヘラナデ
57	SR42	D	土師器	甕	25	(18.0)		[14.6]	A C D F G I	普通	にぶい黄橙	No.9・10 口縁部内外面横ナデか 外面ハケ 内面ナデか 器面風化著しい 内面は輪積み痕顕著
58	SR42	D		甕	25	(18.6)		[12.4]	A C D F	普通	橙	遺物集中区No.4・31 口縁部内外面横ナデか 外面ハケか 内面ヘラナデか 器面風化著しい
59	SR42	D	土師器	台付甕	50		(6.8)	[5.4]	A C F	普通	灰黄褐	No.31 外面ハケ 坏部ヘラナデ 脚部内面ヘラナデとナデ 脚部内面上位に指頭圧痕あり
60	SR42	D	土師器	小型台付甕	80		6.3	[4.8]	C D F	普通	橙	No.25 外面ヘラナデ 内面・脚部内面ヘラナデか 器面風化著しく調整不明瞭
61	SR42	D	土師器	台付甕	60		(9.0)	[5.9]	A C F G	普通	にぶい褐	No.15 外面ハケ 脚部上位外面に指頭圧痕あり 部内面ヘラナデか
62	SR42	D	土師器	台付甕	40		(9.4)	[5.8]	A C F	普通	明赤褐	No.28 器面風化著しく調整不明瞭
63	SR42	D	土師器	台付甕	80		9.0	[3.7]	A C F	普通	にぶい橙	F-19G 内面ヘラナデか 内外面に黒斑あり
64	SR42	D	土師器	台付甕	55		(10.0)	[8.1]	A C D G	普通	赤褐	No.104・105 器面は非常に荒れている 被熱により器面は赤色化
65	SR42	D	土師器	台付甕	60		9.5	[8.2]	A B C D G	普通	橙	No.17 外面ハケ 底部内面ヘラナデか 脚部内面ヘラナデ 端部一部に指頭圧痕あり
66	SR42	D	土師器	台付甕	60		10.7	[8.6]	A C D F I	普通	にぶい黄橙	No.19 F-18G 脚部内面ヘラナデか 器面風化著しい
67	SR42	D	土師器	台付甕	30		(8.8)	[5.5]	A F G	普通	にぶい橙	No.28 外面ハケ 内面ハケナデ 内外面風化・摩滅著しく調整不明瞭

やかで、断面形は皿状である。

土師器片が出土したが、図化には至らなかった。

D区第38号周溝状遺構、D区第81号溝跡

(第148~150図)

G-19、H-19・20グリッドに位置する。周溝が円弧状に、短く検出された。南側については、調査区外に続いている。重複遺構との重複部分に、土層断面が設定されていないため、残念ながら他遺構との新旧関係については、いずれも不明である。

なお、検出された部分的範囲内において、平面形は円形、または楕円形と推定されるが、主軸方位や開口部の有無については確認できなかった。

確認された遺構の規模は、全長8.38m、上場幅1.07~1.12m、下場幅0.72~0.80m、深さ38~52cmである。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは急

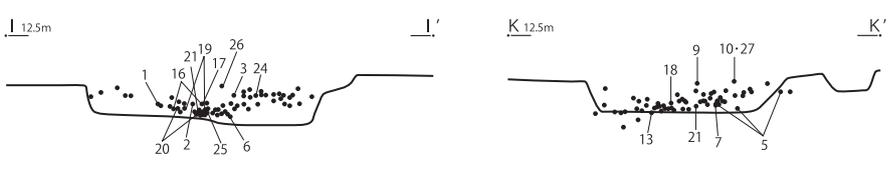
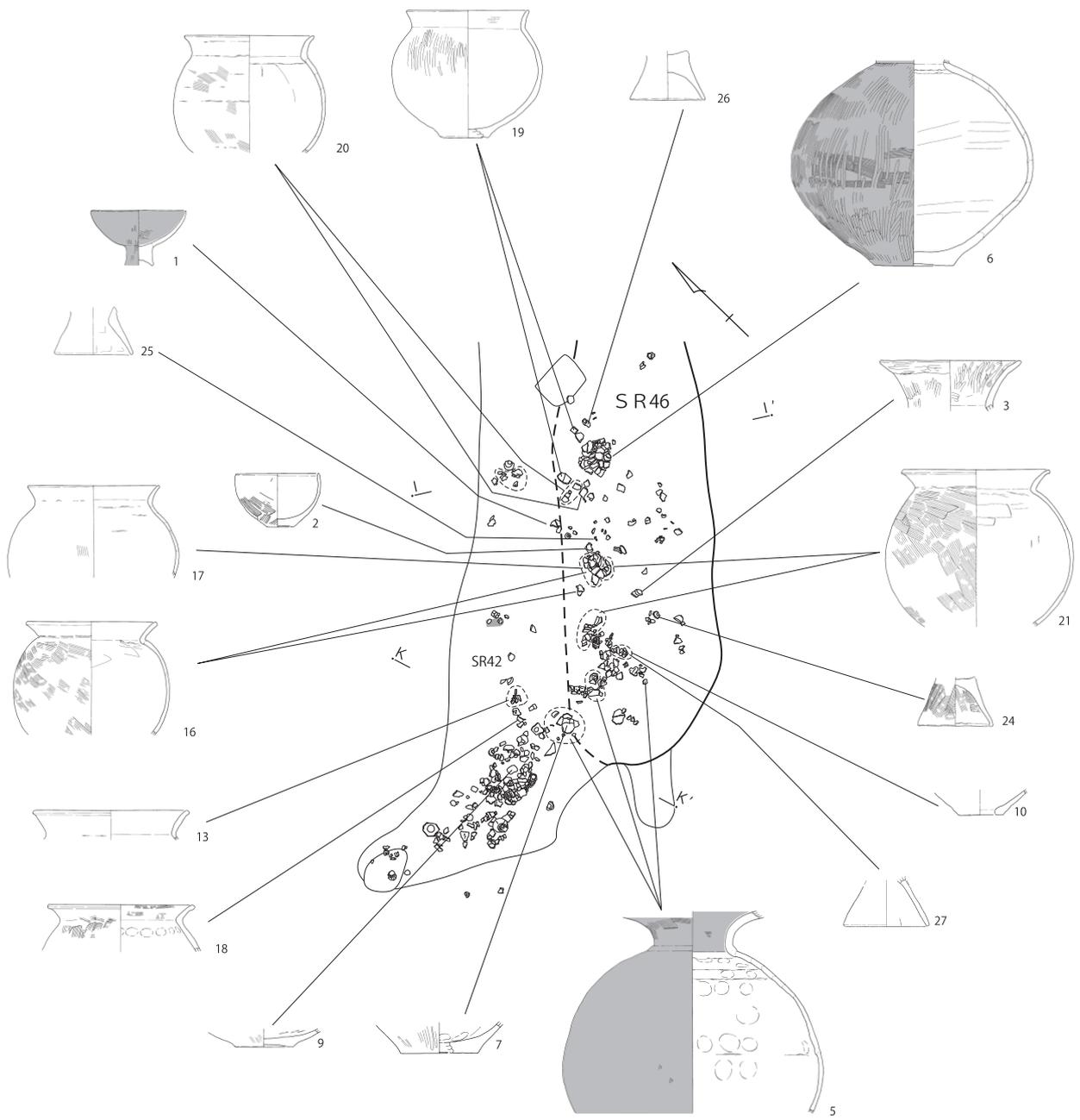
で、断面形は逆台形、もしくは箱形である。

検出範囲の中央部分から、土師器片が周溝底面から浮いた状態で、分布しているのが確認された。土師器の壺・器台・甕のほか、鉄製品1点を含め、図化できたのは計17点(1~17)である。

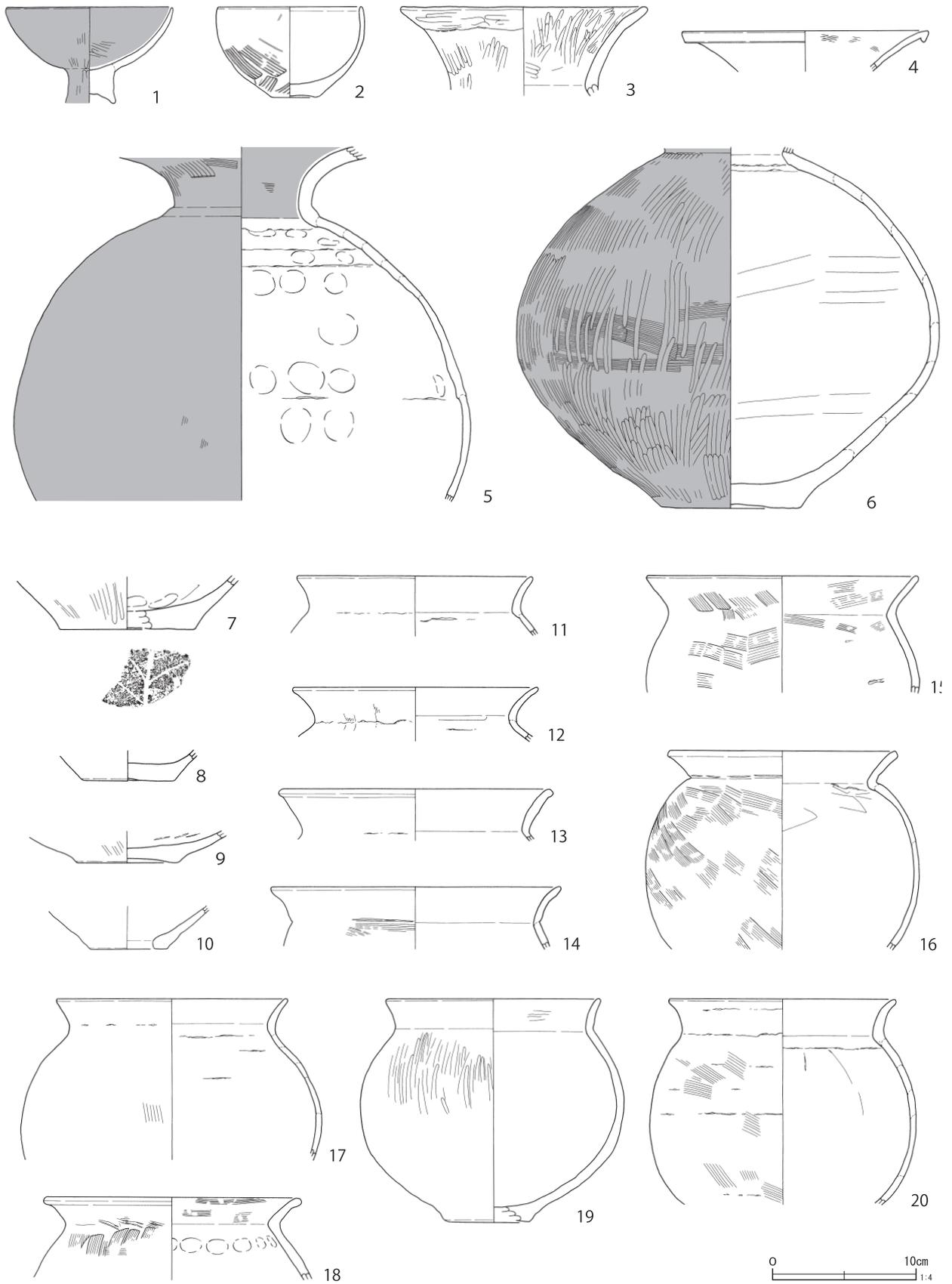
周溝の北側に、一部プランが失われているが、溝跡(D区第81号溝跡)が検出された。この溝跡の規模や位置関係から本遺構と、D区第46号周溝状遺構、もしくはD区第42号周溝状遺構とを結ぶための連結溝と推定した。

この溝跡の規模は、全長0.79m、上場幅0.42~0.60m、下場幅0.41~0.43m、深さ18cmである。溝跡の方位はN-41°-Eである。

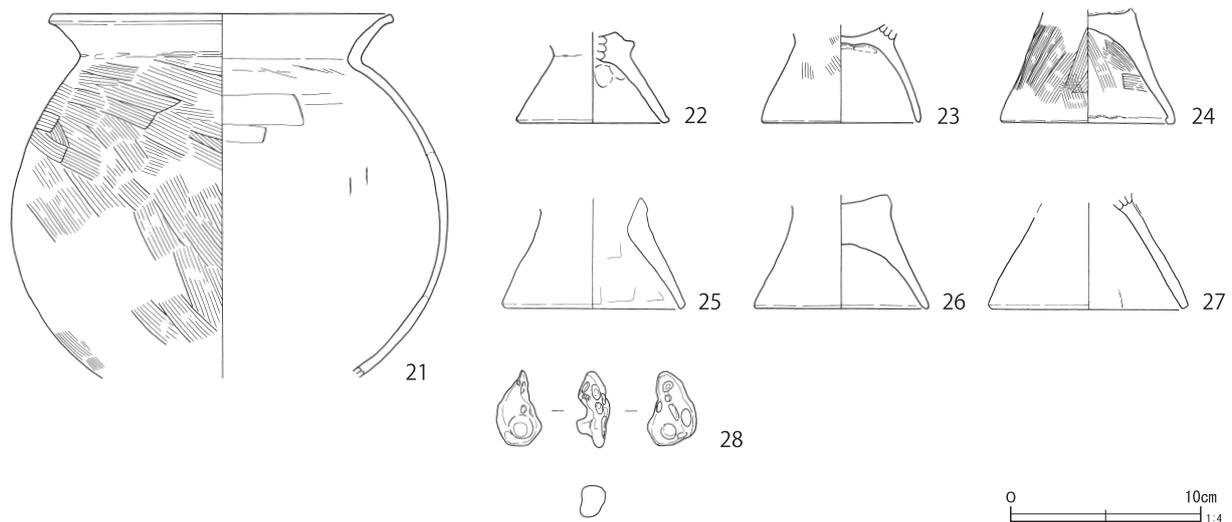
D区第38号周溝状遺構→D区第81号溝跡→D区第46号周溝状遺構またはD区第42号周溝状遺構、その後、D区第48号周溝状遺構(後述)→D区第102号溝跡→E区第15号周溝状遺構(後述)といった関



第162图 D区第46号周沟状遺構遺物出土狀況



第163图 D区第46号周沟状遗构出土遗物 (1)



第164図 D区第46号周溝状遺構出土遺物（2）

連の中で、各周溝状遺構の周溝内に溜まった水を排水していた可能性が推定される。但し、流下の方向はあくまでも推測である。

D区第39号周溝状遺構（第151・152図）

F-19・20、G-19~21、H-20グリッドに位置する。D区第42号周溝状遺構、D区第5号掘立柱建物跡、D区第48・70号溝跡、E区第4号溝跡より古いが、その他の重複遺構との重複部分には、土層断面が設定されていないため、残念ながら他遺構との新旧関係については、いずれも不明である。

周溝は僅かに湾曲するものの直線状で、全体の平面形は「コ」の字状に近い。東溝南端部は調査区外に続く。西溝南端部は途切れているが、開口部の可能性が考えられる。

遺構の規模は、南東-北西方向の外法16.35m、北東-南西方向の外法[15.23]m、内法[12.22]m。南西部分が開口部であれば、主軸方位はN-39°-Eとなる。周溝の規模は、上場幅1.18~1.58m、下場幅0.95~1.20m、深さ20~43cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩く、断面形は皿状、もしくは逆台形である。

図化できた遺物は、土師器壺・甕など計6点（1~6）である。

D区第41号周溝状遺構（第153・154図）

G-19グリッドに位置する。直線状の周溝が短くL字状に検出された。D区第42号周溝状遺構、D区第55号溝跡より古い。本遺構は深度が浅いため、その他の重複遺構との新旧関係は把握できなかった。

検出された周溝は、南東コーナー部分に相当すると推定されるが、プランとしてL字であるのか、円弧であるのか特定できない。そのため、平面形が方形または長方形であるのか、円形または楕円形であるのかは判断できなかった。

確認された遺構の規模は、北溝2.30m、東溝2.10mで全長4.40m、上場幅1.05~1.22m、下場幅0.90~0.95m、深さ10~14cmである。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

図化できた遺物は、土師器壺・甕など計6点（1~6）である。

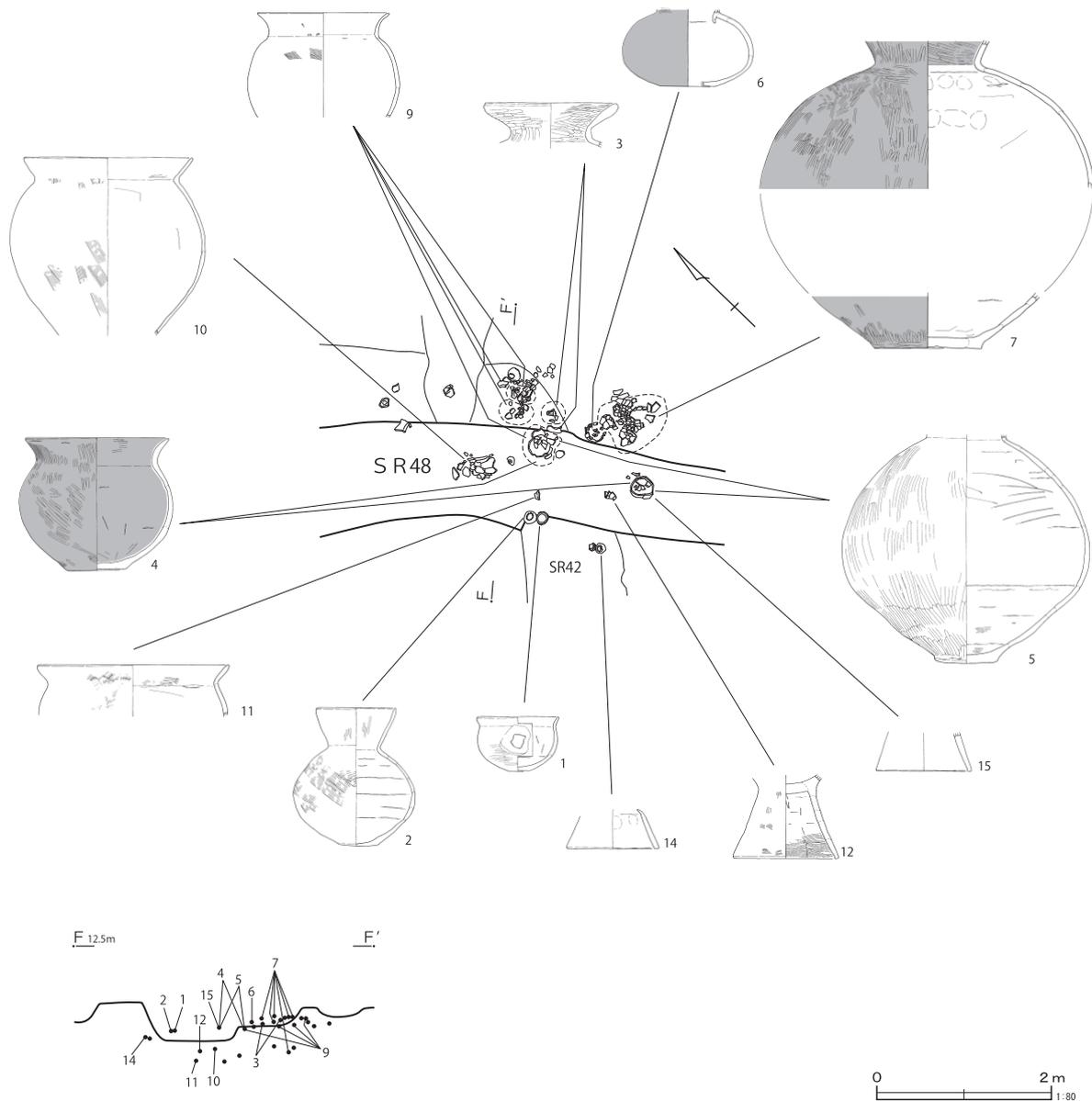
D区第42号周溝状遺構、D区第102号溝跡

（第155~161図）

E・G-19・20、F-18~20グリッドに位置する。D区第39・41号周溝状遺構、D区第55号溝跡、E区第2号墳より新しく、D区第46・48号周溝状遺

第51表 D区第46号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR46	D	土師器	高坏	60	11.5		[6.7]	A C F	普通	浅黄橙	No.22 内外面へら磨き 器面摩滅著しく調整不明瞭 内外面赤彩
2	SR46	D	土師器	小型鉢	70	(10.0)	3.0	[6.3]	A C D	普通	明赤褐	遺物集中区No.27 外面ハケか 内面へらナデか 器面風化している 外面に黒斑あり
3	SR46	D	土師器	壺	45	(16.7)		[6.2]	A C D G	普通	明褐	遺物集中区No.48 外面へら削り後へら磨き 内面へら磨き
4	SR46	D	土師器	壺	20	(17.0)		[2.8]	A C F	普通	にぶい橙	B-B' 南側 器面風化著しく調整不明瞭
5	SR46	D	土師器	壺	40			[24.8]	B C D E F G K	不良	橙	遺物集中区No.55・65・80 A-A ベルト B-B' 南側 外面ハケ後へら磨きか 内面指頭圧痕とへらナデか 器面風化著しい 胴部外面に黒斑あり 外面・口縁部内面赤彩
6	SR46	D	土師器	壺	90		9.8	[25.2]	A C D F	普通	にぶい赤褐	No.12 外面ハケ後磨き 内面へらナデ 外面赤彩 器面風化している 胴部外面に大黒斑あり
7	SR46	D	土師器	壺	30	(9.4)		[3.7]	A C D	普通	明褐	遺物集中区No.80 外面へらミガキ 内面へらナデと指頭圧痕 底部木葉痕あり 器面風化著しい
8	SR46	D	土師器	壺	90		6.4	[2.1]	A C D F	普通	橙	No.84 内面へらナデか 器面風化著しい
9	SR46	D	土師器	壺	75		7.0	[2.2]	A C D F J	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.85 外面へら磨き 内面へらナデ 器面風化している 胴部～底部外面に大黒斑あり
10	SR46	D	土師器	甗	70		[5.4]	[3.0]	A C E F	普通	橙	遺物集中区No.56 器面風化著しい
11	SR46	D	土師器	甗	20	(16.4)		[4.2]	A F	普通	橙	B-B' 北 口縁部内外面横ナデか 器面風化著しい
12	SR46	D	土師器	甗	20	(16.9)		[3.7]	A E F	普通	橙	B-B' 南側 口縁外面ハケ後横ナデ 口縁内面へらナデ後横ナデか 器面風化著しい
13	SR46	D	土師器	甗	30	(18.8)		[3.6]	C D F G	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.72 B-B' 南 口縁部内外面横ナデか 器面風化著しい
14	SR46	D	土師器	甗	15	(20.0)		[4.4]	A C D F G	普通	にぶい黄橙	B-B' 南側
15	SR46	D	土師器	甗	20	(18.6)		[8.1]	A C D	普通	にぶい赤褐	B-B' 南側 口縁部内外面ハケ後横ナデ 胴部外面ハケ 胴部内面へらナデ一部ハケ
16	SR46	D	土師器	甗	65	15.7		[13.9]	A C F	普通	にぶい赤褐	遺物集中区No.26・30 B-B' 南側 口縁部内外面横ナデ 外面ハケ 内面へらナデ 器面風化著しい 被熱のため赤色化著しい
17	SR46	D	土師器	甗	60	(16.0)		[11.2]	C D F G	不良	橙	遺物集中区No.30 口縁部内外面横ナデか 外面ハケか 内面へらナデか 器面風化・摩滅著しく調整不明瞭
18	SR46	D	土師器	甗	20	(17.4)		[5.7]	A C D F	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.75 口縁部内外面横ナデ 肩部内面指頭圧痕あり 器面風化している
19	SR46	D	土師器	甗	50	14.6	(6.0)	15.6	A E	普通	赤褐	遺物集中区No.10・20 外面へら磨き 内面へらナデか 器面風化著しい 内外面に黒斑あり
20	SR46	D	土師器	甗	25	(15.5)		[14.3]	A C D E	普通	にぶい橙	遺物集中区No.17・19 口縁部内外面横ナデ 胴部外面ハケ後ナデか 胴部内面へらナデ
21	SR46	D	土師器	甗	70	17.9		[19.2]	A C E F	普通	橙	遺物集中区No.28・66 B-B' 南 口縁部内外面横ナデ 外面ハケ 内面へらナデ 器面風化している 二次的被熱のため赤色化している
22	SR46	D	土師器	台付甗	40		(7.4)	[4.8]	A C D F	普通	橙	B-B' 南側 脚部外面へらナデか 脚部内面ナデ 被熱のため器面は風化・赤色化している
23	SR46	D	土師器	台付甗	60		(8.0)	[5.2]	A C D	普通	明褐	B-B' 北 脚部内面上位指頭圧痕あり 脚部内面中・下位へらナデか 器面被熱のため風化・赤色化している
24	SR46	D	土師器	台付甗	45		(9.0)	[6.0]	A B C F G	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.49 坏底部に指頭圧痕あり
25	SR46	D	土師器	台付甗	35		(9.4)	[5.8]	A C D F J	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.31 外面へらナデとナデか 内面へらナデ
26	SR46	D	土師器	台付甗	45		(9.0)	[6.0]	A C D F G	普通	橙	遺物集中区No.5 器面風化著しく調整痕はみえない
27	SR46	D	土師器	台付甗	25		(10.0)	[6.1]	C F	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.56 内外面へらナデか 風化著しく調整不明瞭
28	SR46	D	貝巢穴痕泥岩			長さ3.9cm 重さ6.0g					橙	7孔 被熱のため激しく赤色化している



第165図 D区第48号周溝状遺構遺物出土状況

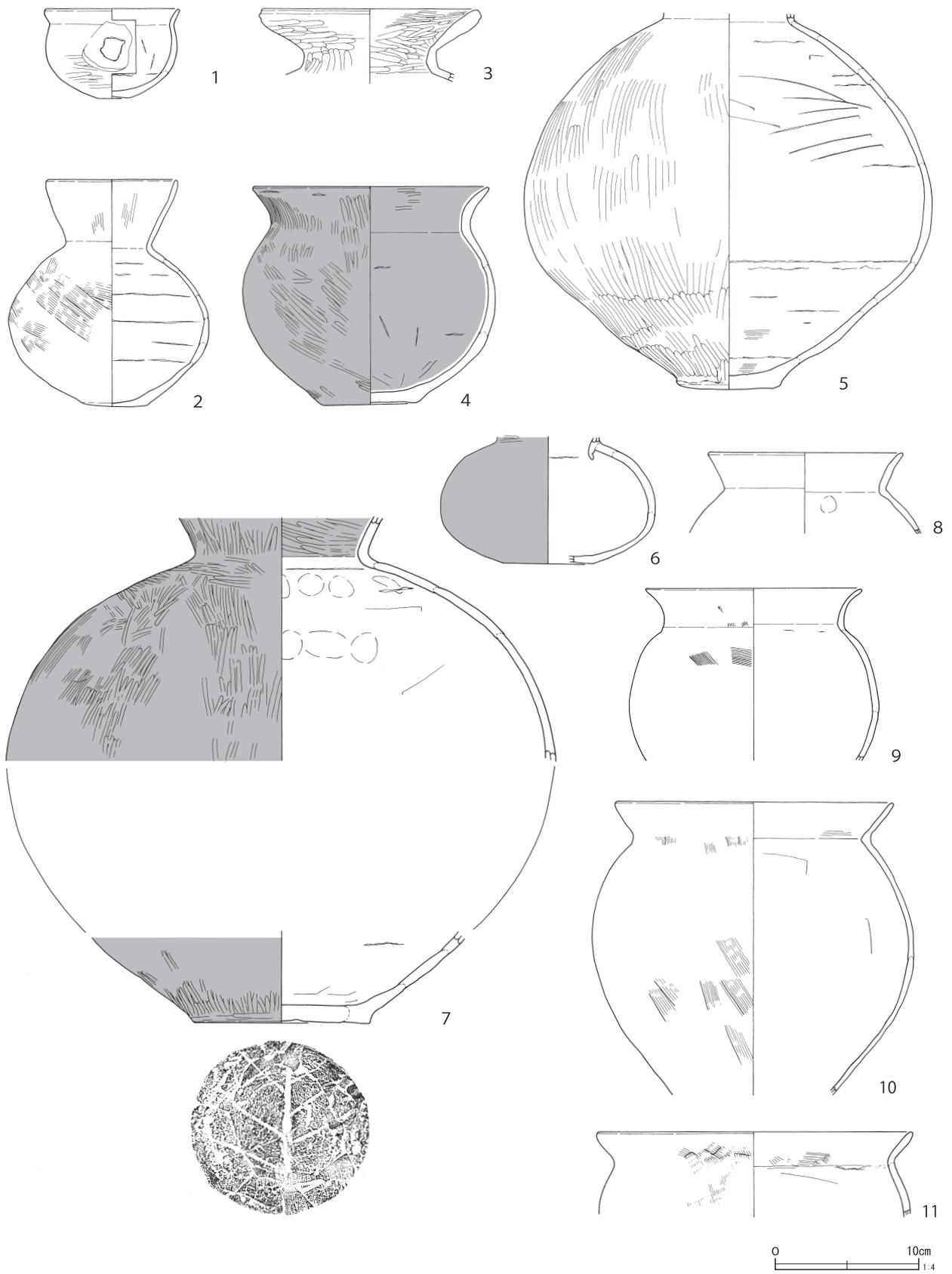
構、D区第59～61・70・75・77号溝跡、E区第6号溝跡、D区第5号掘立柱建物跡、D区第14号井戸跡よりは古い。その他の重複遺構との重複部分には、土層断面が設定されていないため、残念ながら他遺構との新旧関係については、いずれも不明である。

周溝は僅かに湾曲するものの直線状で、全体の平面形は「コ」の字状に近い。西溝・東溝の南端部は途切れているが、開口部の可能性が考えられ

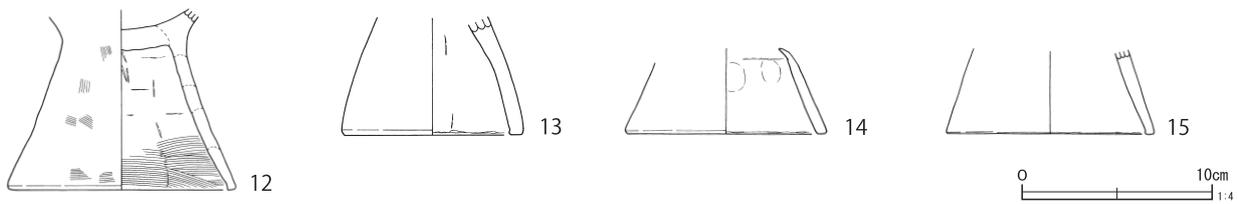
る。

遺構の規模は、南東－北西方向の外法18.20m、内法15.10m、北東－南西方向の外法18.00m、内法16.41m。南西部分が開口部であれば、主軸方位はN-47°-Eとなる。周溝の規模は、上場幅1.15～2.40m、下場幅0.56～1.68m、深さ12～52cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩い部分と急な部分とがある。断面形は浅い部分では皿状、もしくは碗状であるが、深い部分



第166图 D区第48号周沟状遗构出土遗物 (I)



第167図 D区第48号周溝状遺構出土遺物（2）

第52表 D区第48号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR48	D	土師器	壺	100	9.2	6.2	2.1	A C D G	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.27 口縁部内外面横ナデか胴部外面へラ磨き 胴部内面へラナデか器面風化著しい 胴部に穿孔1ヶ所 外面に黒斑
2	SR48	D	土師器	小型壺	85	9.0	4.5	15.8	A C E F	普通	橙	遺物集中区No.28 口縁部内外面へラ磨きか内面へラナデか 器面風化著しい
3	SR48	D	土師器	壺	35	(15.2)		[5.1]	A C D F J	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.11・12 内外面へラ磨き 内面に大黒斑あり
4	SR48	D	土師器	壺	80	16.4	6.4	15.2	A C F	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.13・23 外面へラ磨き 内面へラナデ 器面風化している 胴部～底部外面に黒斑あり 全面赤彩
5	SR48	D	土師器	壺	60		7.1	[26.3]	C D E F	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.13・23 外面へラ磨き 内面へラナデ 器面風化している 胴～底部外面に黒斑あり
6	SR48	D	土師器	小型壺	40		6.2	[8.8]	A C F G	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.15 外面へラ磨きか 内面へラナデか 器面風化著しい 外面に赤彩・黒斑あり
7	SR48	D	土師器	壺	50		12.2	[35.5]	A C	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.16・17・19～22 F-20G 外面へラ磨き 内面へラナデと指押さえ 外面・頸部内面赤彩 底部木葉痕あり
8	SR48	D	土師器	甕	15	(13.4)		[5.6]	A C D G	普通	明黄褐	遺物集中区 口縁部内外面横ナデか 肩部内面に指頭圧痕あり 器面風化著しい
9	SR48	D	土師器	甕	70	(15.0)		[11.9]	C D E F	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.5・9・10・13 口縁部内外面ハケ後へラ削り 内面へラナデか 器面風化し調整不明瞭
10	SR48	D	土師器	甕	40	(19.4)		[20.4]	A B C F G	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.31 口縁部内外面ハケ後横ナデか 内面へラナデか
11	SR48	D	土師器	甕	15	(21.9)		[5.9]	A C D F G	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.29 口縁部内外面横ナデ
12	SR48	D	土師器	台付甕	65		(11.8)	[9.5]	B C F	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.24 外面ハケとナデか 坏部内面へラナデ 脚部内面ハケナデ
13	SR48	D	土師器	台付甕	25		(9.3)	[6.1]	A D G	普通	黄褐	G-20G 遺物集中区 外面へラナデか 内面へラナデ 器面風化著しい
14	SR48	D	土師器	台付甕	82		10.5	[4.5]	C D F	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.25 外面へラナデか 内面上部指頭圧痕あり 器面風化著しく調整不明瞭
15	SR48	D	土師器	台付甕	15		(11.0)	[4.5]	A D F G	普通	にぶい黄橙	遺物集中区No.23 外面ハケか

では逆台形、または箱形である。

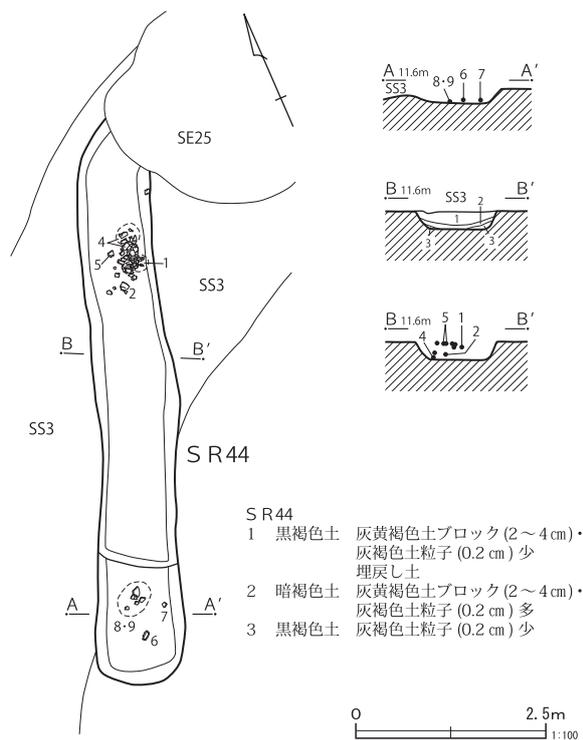
西溝・北溝・東溝には、それぞれ段差が認められる。各段差の周溝底面との比高差は、西溝では15cm程、北溝では10cm程、東溝では10cm程である。

東溝の北側コーナーと、西溝・東溝の南端部から、まとまった状態で土師器片が出土している。これらはいずれも、黄褐色粘土ブロックが混入する覆土中から出土しており、投棄されたものと推

定される。また、東溝の覆土（土層断面H-H'の第8層）中には、投棄されたものと考えられる焼土がまとまって出土している。

図化できた遺物は、土師器壺・高坏・器台・甕・台付甕など計67点（1～67）である。

本遺構の、北東コーナー際において溝跡（D区第102号溝跡）が検出された。この溝跡の規模や周溝状遺構との位置関係からみて、本遺構もしくは



第168図 D区第44号周溝状遺構

D区第48号周溝状遺構と、E区第15号周溝状遺構とを結ぶ連結溝と推定した。

溝跡の平面形は、ほぼ直線状である。周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形である。

規模は、全長2.46m、上場幅0.46~0.85m、下場幅0.30~0.40m、深さ35cmである。溝跡の方位はN-43°-Eである。

D区第38号周溝状遺構→D区第81号溝跡→D区第46号周溝状遺構(後述)または本遺構、その後、D区第48号周溝状遺構(後述)→D区第102号溝跡→E区第15号周溝状遺構(後述)といった関連の中で、各周溝状遺構の周溝内に溜まった水を排水していた可能性が推定される。但し、流下の方角はあくまでも推測である。

D区第44号周溝状遺構(第168・169図)

F-16グリッドに位置する。直線状の周溝が1条検出された。D区第3号墳、D区第25号井戸跡よ

りも古い。

検出された範囲内での推定であるが、直線状であることから、平面形は方形、もしくは長方形である可能性が高い。

周溝の規模は、全長7.46m、上場幅0.98~1.16m、下場幅0.62~0.80m、深さ18~20cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。周溝南部には、周溝底面との比高差10~15cm程のテラス状の部分をもつ。

中途(土層断面第3・2層)までは自然堆積であるが、その上面(同第1層)は埋め戻しであると推定される。

図化できた遺物は、土師器壺・甕など計9点(1~9)である。

D区第46号周溝状遺構、D区第81号溝跡

(第155・156・162~164図)

G-19・20グリッドに位置する。直線状の周溝が短く1条検出された。D区第42号周溝状遺構、D区第55号溝跡より新しい。

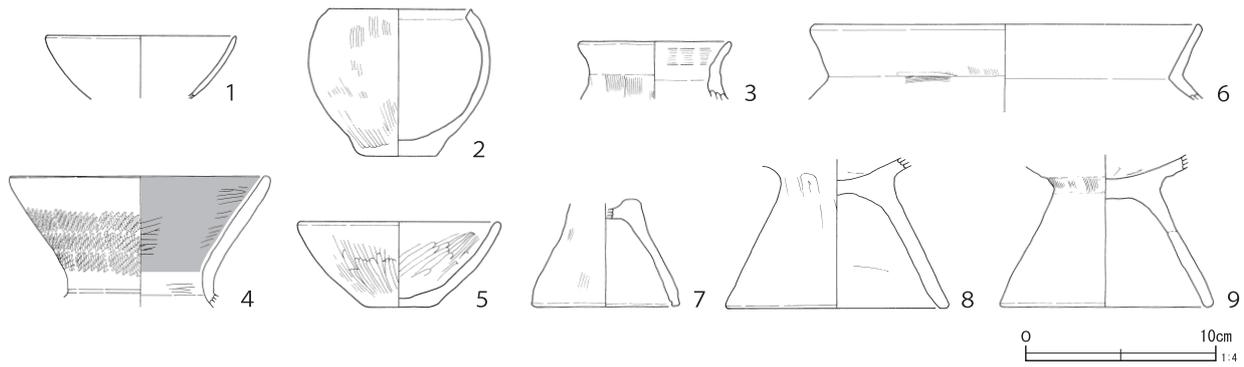
検出された範囲内での推定であるが、直線状であることから、平面形は方形、もしくは長方形であると考えられる。

周溝の規模は、全長7.82m、上場幅0.78~[1.53]m、下場幅0.52~[1.15]m、深さ37~51cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状であるが、落差15cm程の段をもつ部分がある。

遺物は、周溝南半部に比較的まとまった状態で分布していた。図化できた遺物は、土師器壺・高坏・甕などのほか、貝巢穴痕泥岩1点を含む計28点(1~28)であった。

周溝の西側に、一部プランが失われているが、溝跡(D区第81号溝跡)が検出された。この溝跡の規模や位置関係からD区第38号周溝状遺構と本遺構、もしくはD区第42号周溝状遺構とを結ぶための連結溝と推定した。



第169図 D区第44号周溝状遺構出土遺物

第53表 D区第44号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR44	D	土師器	埴	20	(10.0)		[3.3]	A C F G	普通	橙	No.8 器面風化著しい
2	SR44	D	土師器	壺	45	(7.6)	4.0	7.7	A F	普通	にぶい 橙	No.5 口縁部外面横ナデ 胴部外面へラ磨き 胴部内面へラナデとナデか
3	SR44	D	土師器	小型壺	80	(7.9)		[3.0]	A B C F	普通	にぶい 黄橙	口縁上部内外面ハケ後横ナデ
4	SR44	D	土師器	壺	70	(13.4)		[6.9]	A D F	普通	にぶい 橙	No.9・11 原体RL横回転 全体に風化著しく詳細不明 施文状況は復元を含む 内面へラ磨き 内面風化 内面赤彩
5	SR44	D	土師器	壺	35	(10.7)	(3.6)	4.5	A C F	普通	にぶい 黄橙	No.12 内外面へラ磨き 外面に黒斑あり
6	SR44	D	土師器	甕	25	(20.2)		[4.0]	A C D	普通	にぶい 黄橙	No.1 口縁部内外面横ナデ 器面風化著しい
7	SR44	D	土師器	台付甕	30		(7.8)	[5.4]	A F G	普通	橙	No.2 脚部外面ハケ 内面ナデか
8	SR44	D	土師器	台付甕	50		(11.6)	[7.8]	A F	普通	橙	No.3 脚部内外面へラナデか 外面煤付着 器面風化している
9	SR44	D	土師器	台付甕	75		10.8	[8.0]	A E F	普通	明赤褐	No.3 脚部外面ハケ後へラナデか 坏部・脚部内面へラナデ 器面風化著しい

この溝跡の規模は、全長0.79m、上場幅0.42～0.60m、下場幅0.41～0.43m、深さ18cmである。溝跡の方位はN-41°-Eである。

D区第38号周溝状遺構→D区第81号溝跡→本遺構またはD区第42号周溝状遺構、その後、D区第48号周溝状遺構（後述）→D区第102号溝跡→E区第15号周溝状遺構（後述）といった関連の中で、各周溝状遺構の周溝内に溜まった水を排水していた可能性が推定される。但し、流下の方向はあくまでも推測である。

D区第48号周溝状遺構、D区第102号溝跡

(第155・156・165～167図)

F・G-20グリッドに位置する。直線状の周溝が1条検出された。D区第42号周溝状遺構より新し

く、D区第70号溝跡より古い。D区第77・86号溝跡との新旧関係については把握できなかった。

検出された範囲内での推定であるが、直線状であることから、平面形は方形、もしくは長方形である可能性が高い。

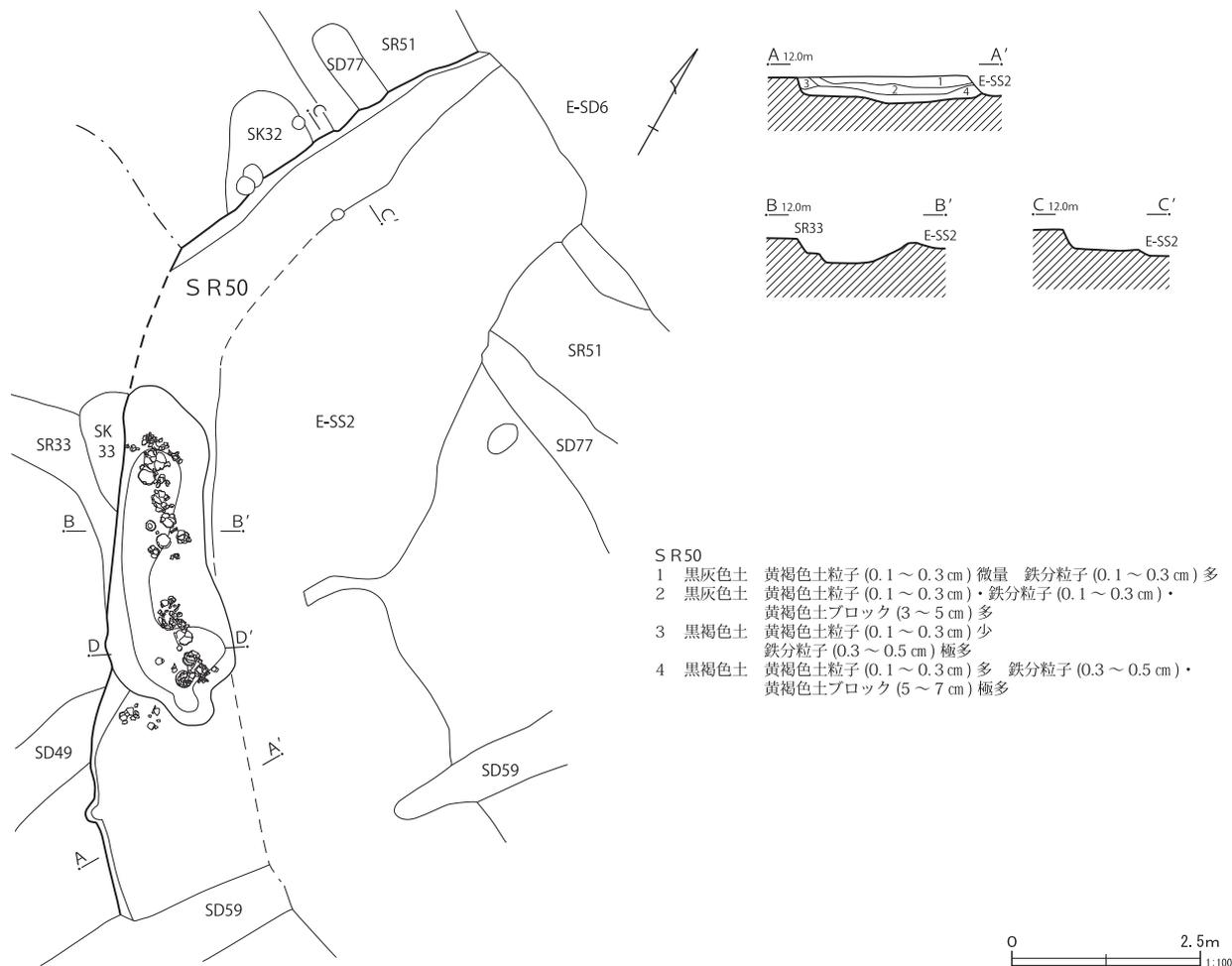
周溝の規模は、全長9.75m、上場幅0.72～1.55m、下場幅0.48～1.17m、深さ25～57cmである。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は逆台形である。

遺物は、周溝南半部に比較的まとまった状態で分布していた。

図化できた遺物は、土師器壺・甕など計15点（1～15）であった。

本遺構の、北壁に接するような状態で、溝跡（D



第170図 D区第50号周溝状遺構

区第102号溝跡) が検出された。この溝跡の規模や周溝状遺構との位置関係からみて、D区第42号周溝状遺構、その後本遺構と、E区第15号周溝状遺構とを結ぶ連結溝と推定した。

D区第38号周溝状遺構→D区第81号溝跡→D区第46号周溝状遺構、またはD区第42号周溝状遺構、その後、本遺構→D区第102号溝跡→E区第15号周溝状遺構といった関連の中で、各周溝状遺構の周溝内に溜まった水を排水していた可能性が推定される。但し、流下の方向はあくまでも推測である。

D区第50号周溝状遺構 (第170~173図)

D～F-18グリッドに位置する。円弧状の周溝が1条検出された。E区第2号墳、D区第49号溝跡、E区第6号溝跡よりも古いが、その他の重複

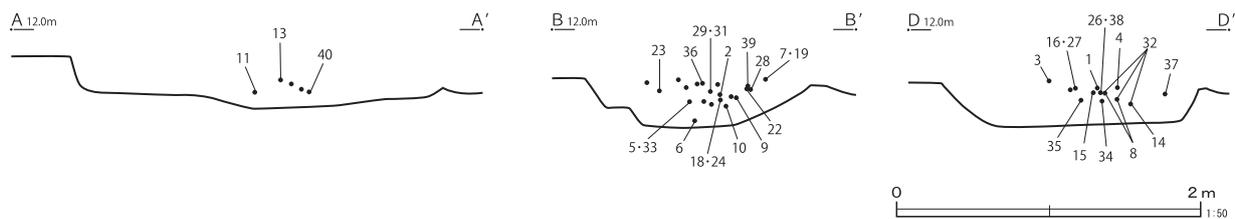
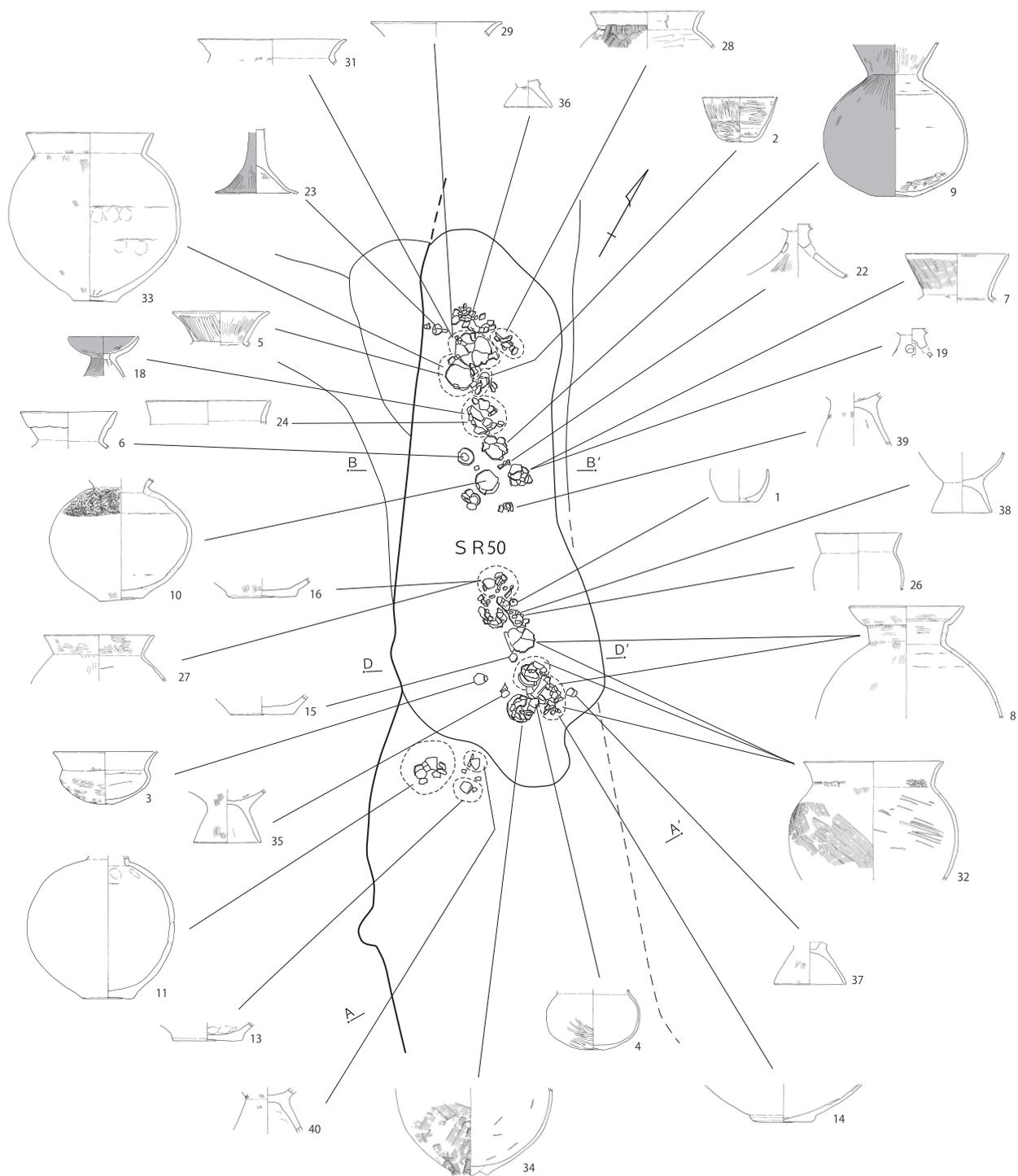
遺構との接点に土層断面が設定されていないため、新旧関係は確認できなかった。検出されたのは、周溝の西側プランと溝内土壌と推定される遺構のみである。

検出された範囲内での推定であるが、円弧状であることから、平面形は円形、もしくは楕円形である可能性が高い。

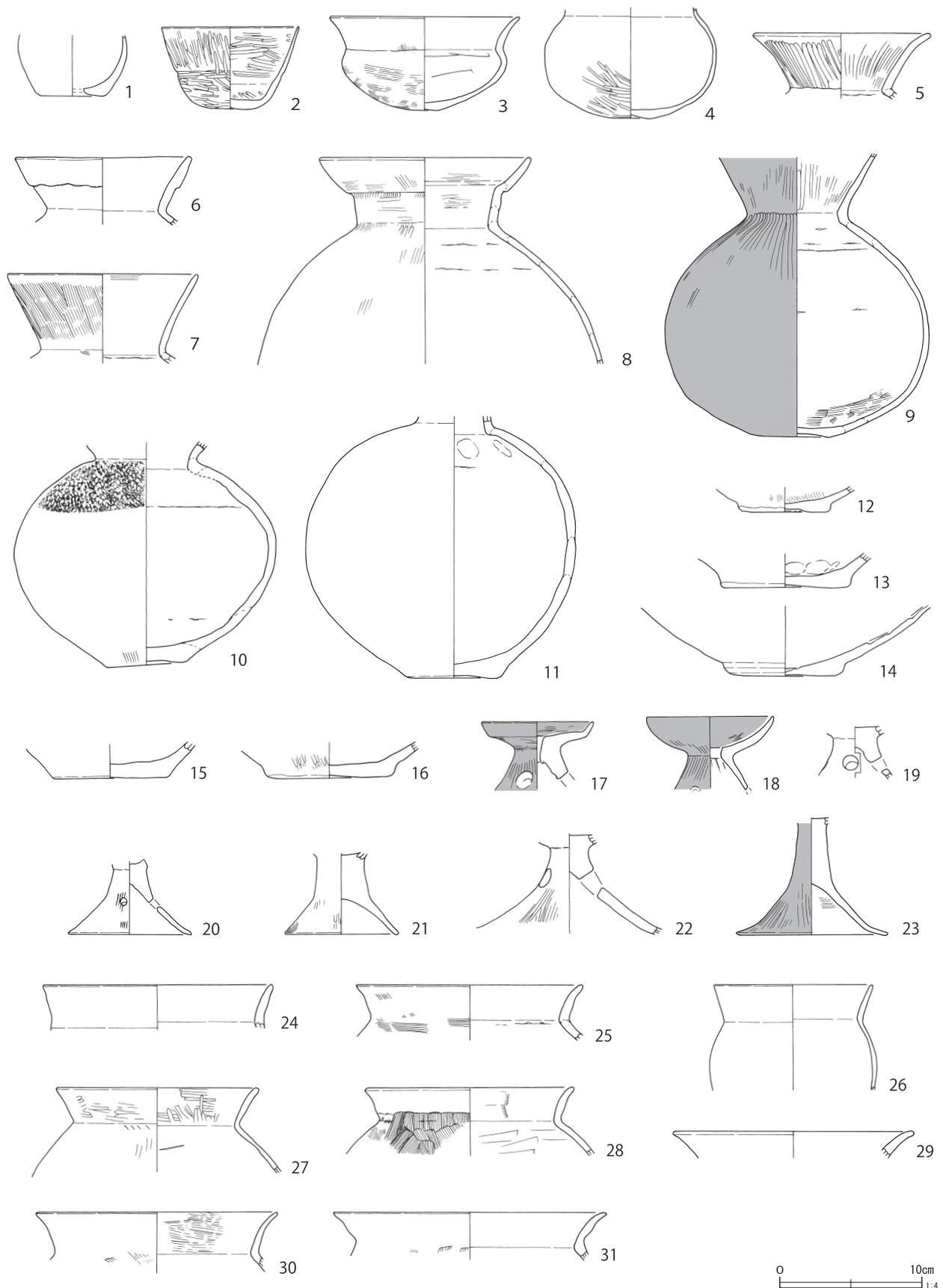
周溝の規模は、全長12.60m、深さ36cmである。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形である。

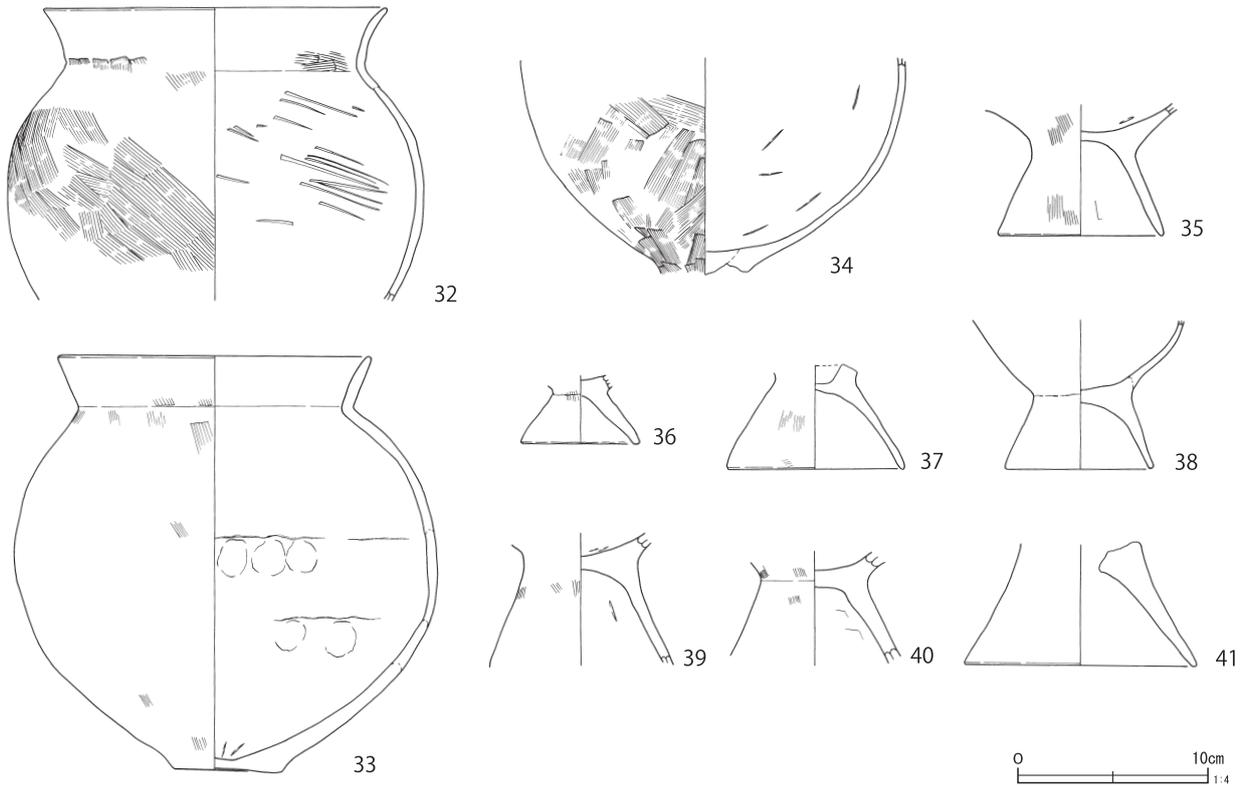
溝内土壌と推定される遺構の平面形は、歪んだ長楕円形で、規模は全長4.55m、上場幅1.10～1.64m、下場幅0.32～1.10m、深さは28～38cm、主軸方位はN-38°-Wである。遺物の大部分は、この



第171图 D区第50号周沟状遺構遺物出土狀況



第172图 D区第50号周沟状遗构出土遗物(1)



第173図 D区第50号周溝状遺構出土遺物（2）

第54表 D区第50号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR50	D	土師器	甑か	85		4.5	[4.3]	A C D G	普通	明赤褐	No.15 被熱により風化・赤色化している 焼成後穿孔か
2	SR50	D	土師器	坩	95	9.6	2.6	5.8	A B C D	普通	明黄褐	No.32 内外面ともへら磨き 器面風化している
3	SR50	D	土師器	坩	40	(13.2)	2.0	6.6	A C D F G	普通	にぶい黄橙	No.6 口縁外面ハケ後・内外面横ナデ
4	SR50	D	土師器	坩	40		2.6	[7.9]	A C D F I	普通	にぶい橙	No.9 外面へら磨き 内面へらナデか 外面黒斑あり 風化著しく調整不明瞭
5	SR50	D	土師器	壺	30	(12.3)		[4.6]	A C D F	普通	にぶい橙	No.33 口縁上部内外面ハケ横ナデ後へら磨き 器面風化している
6	SR50	D	土師器	壺	95	12.0		[4.7]	A C F G	普通	橙	No.23 器面風化著しく調整不明瞭
7	SR50	D	土師器	壺	85	13.2		[6.3]	A C F G	普通	橙	No.25 内面へらナデか
8	SR50	D	土師器	壺	50	14.5		[14.6]	C D F	普通	にぶい橙	No.12・14 口縁内外面ハケ後へら磨き 器面風化している
9	SR50	D	土師器	壺	45		4.6	[19.7]	C F G I	普通	橙	No.26 外面へら磨き 内面へらナデ 胴部外面赤彩・黒斑あり
10	SR50	D	土師器	壺	85		5.4	[15.8]	A C F G	普通	明赤褐	No.22 肩部外面擬縄文 口縁部内外面横ナデか 外面へら磨きか 内面へらナデか 器面風化著しい
11	SR50	D	土師器	壺	60		6.8	[18.3]	A C F G	普通	にぶい橙	No.1 E-18G 口縁部内外面横ナデか 器面風化著しい 外面に黒斑あり
12	SR50	D	土師器	壺	45		(6.6)	[1.8]	C D F G	普通	にぶい黄橙	E-18G 内外面ハケ 風化著しく調整不明瞭
13	SR50	D	土師器	壺	70		8.8	[2.4]	A C D G	普通	橙	No.2 内面指頭圧痕あり 器面風化著しい
14	SR50	D	土師器	壺	35		(8.0)	[5.0]	C D F G	普通	橙	No.13 風化のため調整不明
15	SR50	D	土師器	壺	60		7.8	[2.4]	A C D G	普通	橙	No.11 内面へらナデか 器面風化著しい

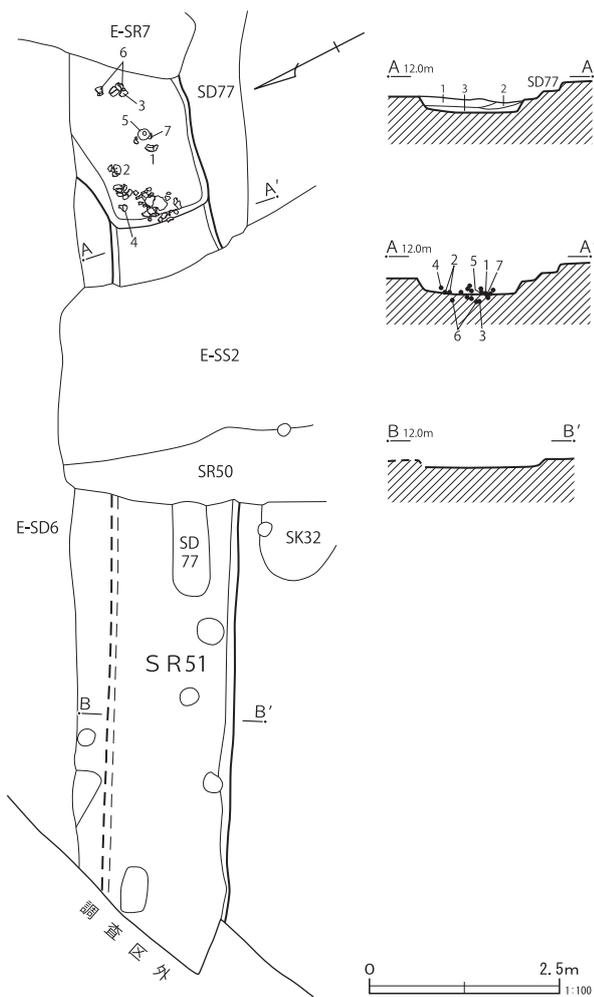
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
16	SR50	D	土師器	壺	50		(9.0)	[2.5]	A C D F G I	普通	浅黄	No.16 外面ハケ後へラ磨き 内面へラナデとナデか
17	SR50	D	土師器	器台	70	(7.8)		[4.8]	A B C D F	普通	にぶい 橙	E-18G 坏部底部上からの穿孔あり 穿孔3ヶ所(上からの穿孔) 坏部口縁部内外面横ナデ後へラ磨き 坏底部～脚部ハケ後へラ磨き 器面風化している 外面に大黒斑あり 坏部内面・外面赤彩
18	SR50	D	土師器	器台	45	(8.8)		[5.0]	A B C D F	普通	橙	No.27 外面へラ磨き 坏部底部上からの穿孔あり 脚部穿孔3ヶ所 外面・坏部内面赤彩
19	SR50	D	土師器	高坏	70			[3.7]	A C F	普通	橙	No.25 穿孔4ヶ所 外面赤彩か 風化著しく調整不明瞭
20	SR50	D	土師器	高坏	40		(8.6)	[5.2]	A B C D G	普通	橙	E-18G 外面へラ磨き 内面へラナデか 穿孔3ヶ所 風化著しく調整不明瞭 外面赤彩か
21	SR50	D	土師器	高坏	60		(7.8)	[5.7]	C D F	普通	にぶい 黄橙	E区SS2 E-18G 内面・脚部外面へラ磨き 脚部内面へラナデか 器面風化著しい
22	SR50	D	土師器	高坏	30			[7.1]	C D E F	普通	にぶい 黄橙	No.24 外面へラ磨き 内面へラナデか 穿孔3ヶ所(外からの穿孔)
23	SR50	D	土師器	高坏	55		(10.0)	[8.3]	A C D F G	普通	にぶい 橙	No.30 外面へラ磨き 内面へラナデ 外面赤彩 風化著しく調整不明瞭
24	SR50	D	土師器	甕	35	(16.0)		[3.2]	A C D F	普通	橙	No.27 口縁部内外面横ナデか 器面風化著しい
25	SR50	D	土師器	甕	10	(16.0)		[4.0]	A C D F	普通	灰黄	E-18G 口縁部内外面ハケ後横ナデ
26	SR50	D	土師器	甕	15	(11.2)		[7.4]	A D F	普通	橙	No.17 器面風化著しく調整痕はみえない
27	SR50	D	土師器	甕	30	(13.9)		[6.0]	D F	普通	にぶい 褐	No.16 口縁部内面・外面へラ磨き 器面風化著しい 胴部外面に黒斑
28	SR50	D	土師器	甕	25	(14.6)		[4.9]	A C D F	普通	にぶい 橙	No.35 外面ハケと削り 内面ナデ 口縁部内面ハケナデ
29	SR50	D	土師器	甕	15	(16.6)		[1.9]	A D F G	普通	にぶい 黄橙	No.34 口縁部内外面横ナデか 器面風化著しい
30	SR50	D	土師器	甕	25	(17.0)		[4.3]	A C D F G	普通	灰黄褐	E-18G 口縁部内外面ハケ後横ナデか 器面風化している
31	SR50	D	土師器	甕	20	(19.2)		[3.4]	A B C F G	普通	にぶい 橙	No.34 口縁部内外面横ナデか
32	SR50	D	土師器	甕	40	(18.0)		[15.4]	A C D F	普通	にぶい 黄橙	No.12～14 口縁部内面ハケ後横ナデ 胴部外面ハケ 胴部内面へラナデ
33	SR50	D	土師器	甕	70	16.2	5.7	21.7	A C	普通	にぶい 橙	No.33 口縁部内外面横ナデか 外面ハケ内面へラナデと指頭圧痕 器面風化著しい 外面被熱のため一部赤色化している
34	SR50	D	土師器	台付甕	70			[11.5]	A C D F	普通	にぶい 赤褐	No.10 外面ハケ 内面へラナデ 器面風化著しい
35	SR50	D	土師器	台付甕	80		(8.5)	[6.9]	A C D F G	普通	にぶい 橙	No.7 外面ハケ 坏部内面・脚部内面へラナデ
36	SR50	D	土師器	台付甕	80		6.0	[3.6]	G	普通	灰黄	No.36 坏部内面ナデか 脚部外面ハケ 脚部内面ナデ 内外面風化著しい
37	SR50	D	土師器	台付甕	80		(9.2)	[5.5]	A C D G	普通	橙	No.8 外面ハケ 脚部内面へラナデか 器面風化著しく調整痕は殆どみえない
38	SR50	D	土師器	台付甕	70		(7.5)	[7.9]	A B C D F	普通	にぶい 橙	No.17 器面風化著しく調整痕はみえない
39	SR50	D	土師器	台付甕	50			[7.0]	A C D	普通	橙	No.19 外面ハケ 坏部内面・脚部内面へラナデ
40	SR50	D	土師器	台付甕	55			[5.9]	A C D F	普通	橙	No.5 内面へラナデか 脚部内面へラナデ 器面風化著しい
41	SR50	D	土師器	台付甕	60		(12.2)	[6.4]	A C F G	普通	にぶい 橙	E-18G 内外面風化著しい

土壌内からの出土であった。

図化できた遺物は、土師器壺・埴・高坏・器台甕・台付甕など計41点（1～41）である。

D区第51号周溝状遺構（第174・175図）

D-17・18、E-18グリッドに位置する。直線状の周溝が1条検出された。西側は、調査区外に続



- SR51
 1 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm)・焼土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多
 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 微量 炭化物ブロック (1 ~ 3 cm) 少
 2 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 極多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少
 3 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm)・黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm)・
 炭化物ブロック (1 ~ 3 cm) 多

第174図 D区第51号周溝状遺構

く。E区第2号墳、E区第6号溝跡より古いが、その他の重複遺構との新旧関係については確認できなかった。直線状ではあるものの、東側は北に向かって湾曲する可能性が高い。

検出された範囲内での推定であるが、直線状であることから、平面形は方形、もしくは長方形である可能性が高い。

周溝の規模は、全長11.80m、上場幅1.38~1.62m、下場幅1.20~1.30m、深さは13~22cm、主軸方位はN-63°-Wである。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

周溝東側の、北に向かって湾曲する部分には段差があり、周溝底面との比高差は10cm程である。

図化できた遺物は、土師器壺・高坏・台付甕など計7点(1~7)である。

D区第52号周溝状遺構 (第148図)

H-18グリッドに位置する。周溝は、東西溝北側の上場・下場のみを検出である。検出範囲が小さいため、平面形は特定できなかった。

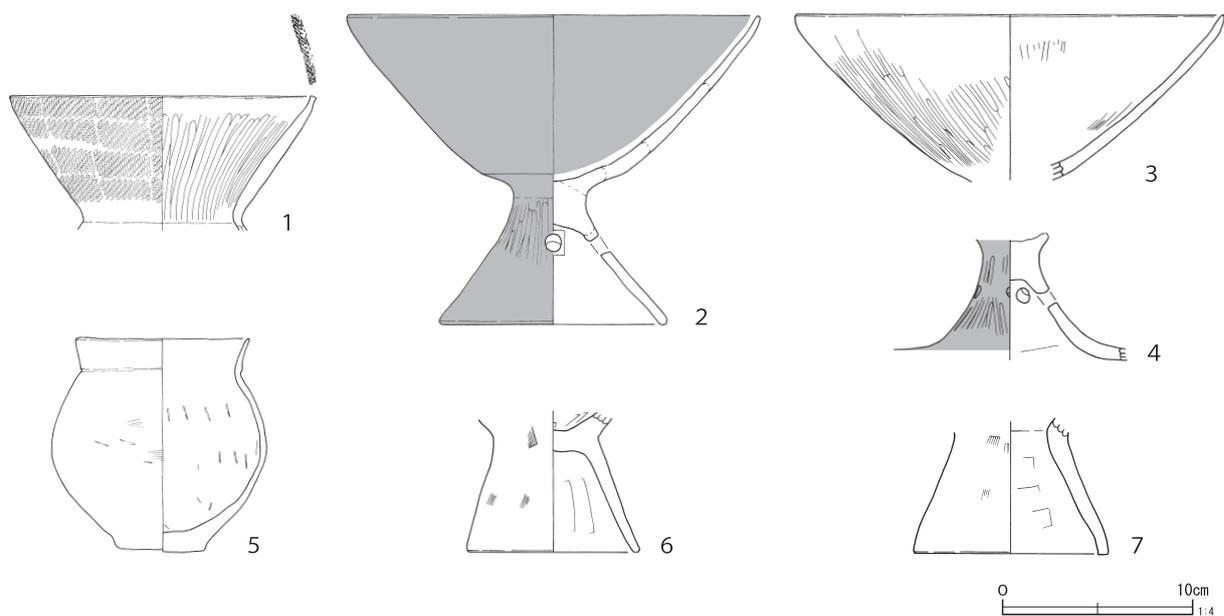
検出された範囲内での周溝の規模は、全長2.42m、幅0.53m、深さは35cmまでの確認である。

周溝底面は比較的平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかであり、断面形は浅い逆台形である。

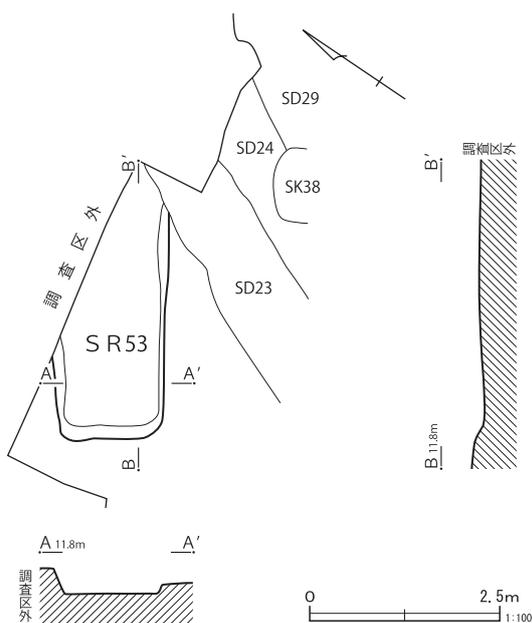
遺物は出土しなかった。

第55表 D区第51号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR51	D	土師器	壺	40	(15.6)		[7.1]	A F	普通	明赤褐	No.9 原体 LR 横回転左→右・上→下 内面縦磨き
2	SR51	D	土師器	高坏	45	(21.7)	11.9	16.3	B C D F G	普通	にぶい黄橙	No.10・11 脚部外面一部に磨き 器面風化著しい 坏部内面・外面赤彩
3	SR51	D	土師器	高坏	20	(22.8)		[8.7]	C D F I	普通	浅黄橙	No.5 内外面ヘラ磨き 器面風化している 外面に黒斑あり
4	SR51	D	土師器	高坏	75			[6.4]	A D F	普通	明赤褐	No.12 外面ヘラ磨き 内面ヘラナデとナデ穿孔4ヶ所(外からの穿孔・等間隔の穿孔ではない)
5	SR51	D	土師器	小型壺	100	9.0	4.5	11.2	A C D F	普通	明黄褐	No.6 口縁部内外面横ナデか 胴部外面ハケとヘラナデの後ナデか 器面風化著しい 外面に大黒斑あり
6	SR51	D	土師器	台付甕	80		8.9	[7.4]	A C D F J	普通	明赤褐	No.14 外面ハケか 坏部内面・脚部内面ヘラナデ 器面風化している 被熱のため赤色化している
7	SR51	D	土師器	台付甕	25		(10.4)	[7.0]	A C D F J	普通	にぶい黄橙	No.8 外面ハケか 内面ヘラナデ 器面風化している



第175図 D区第51号周溝状遺構出土遺物



第176図 D区第53号周溝状遺構

D区第53号周溝状遺構 (第176図)

E・F-13グリッドに位置する。直線状の周溝が1条検出された。東側は、調査区外に続く。D区第23号溝跡よりも古い。直線状ではあるものの、東側は北に向かって湾曲する可能性が高い。

検出された範囲内での推定であるが、直線状であることから、平面形は方形、もしくは長方形である可能性が高い。

周溝の規模は、全長3.71m、上場幅1.40~1.49m、下場幅1.20~1.28m、深さ11~35cm、主軸方位はN-57°-Eである。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形である。

遺物は出土しなかった。

D区第54号周溝状遺構 (第142図)

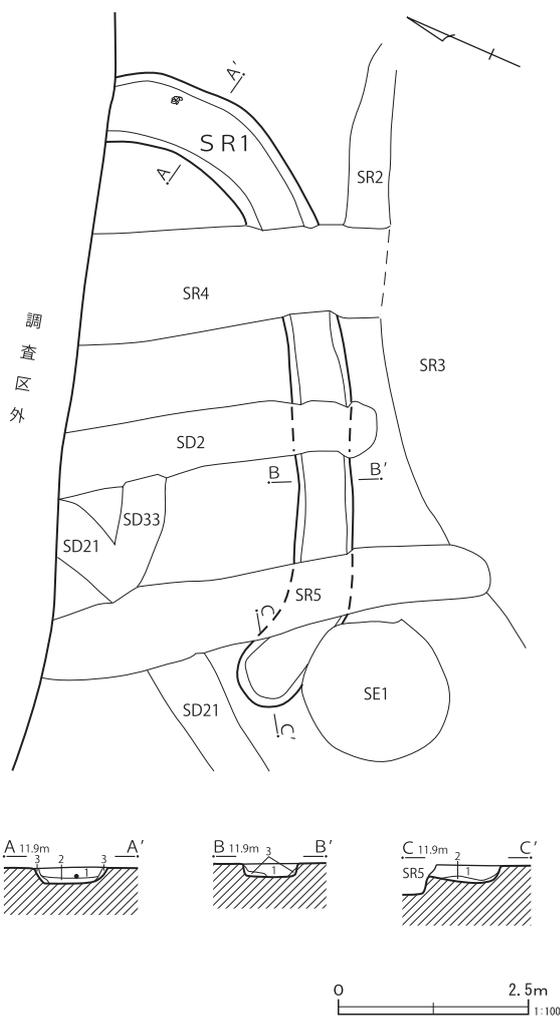
H-18グリッドに位置する。D区第34号周溝状遺構、D区第84号溝跡よりも古い。周溝の覆土と底面のみが検出された。底面の形状と覆土の内容から、本遺構を周溝状遺構と判断した。

周溝の深さは31cmである。

遺物は出土しなかった。

E区第1号周溝状遺構 (第177・178図)

C・D-19グリッドに位置する。円弧状の周溝が1条検出された。北側は調査区外に続く。E区第5号周溝状遺構、E区第1号井戸跡よりも古い。E区第4号周溝状遺構、E区第2号溝跡との新旧



- SR1
 1 黒褐色土 鉄分粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 疎らに少
 2 灰褐色土 鉄分ブロック (3 ~ 5 cm) 斑に多
 3 灰褐色土 鉄分ブロック (3 ~ 5 cm) 斑に多 黒色土ブロック少 (崩落土)

第177図 E区第1号周溝状遺構



第178図 E区第1号周溝状遺構出土遺物

第56表 E区第1号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR1	E	土師器	壺	5	(16.2)		[2.4]	A C F J	普通	橙	器面風化著しい

関係については捉えられなかった。

検出された範囲内での推定であるが、円弧状であることから、平面形は円形、もしくは楕円形である可能性が高い。

周溝の規模は、全長8.50m、上場幅0.73~0.98m、下場幅0.48~0.83m、深さ18~22cmである。部分的検出のため、主軸方位は不明である。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形である。

図化できた遺物は、土師器壺1点(1)である。
E区第2号周溝状遺構 (第179・180図)

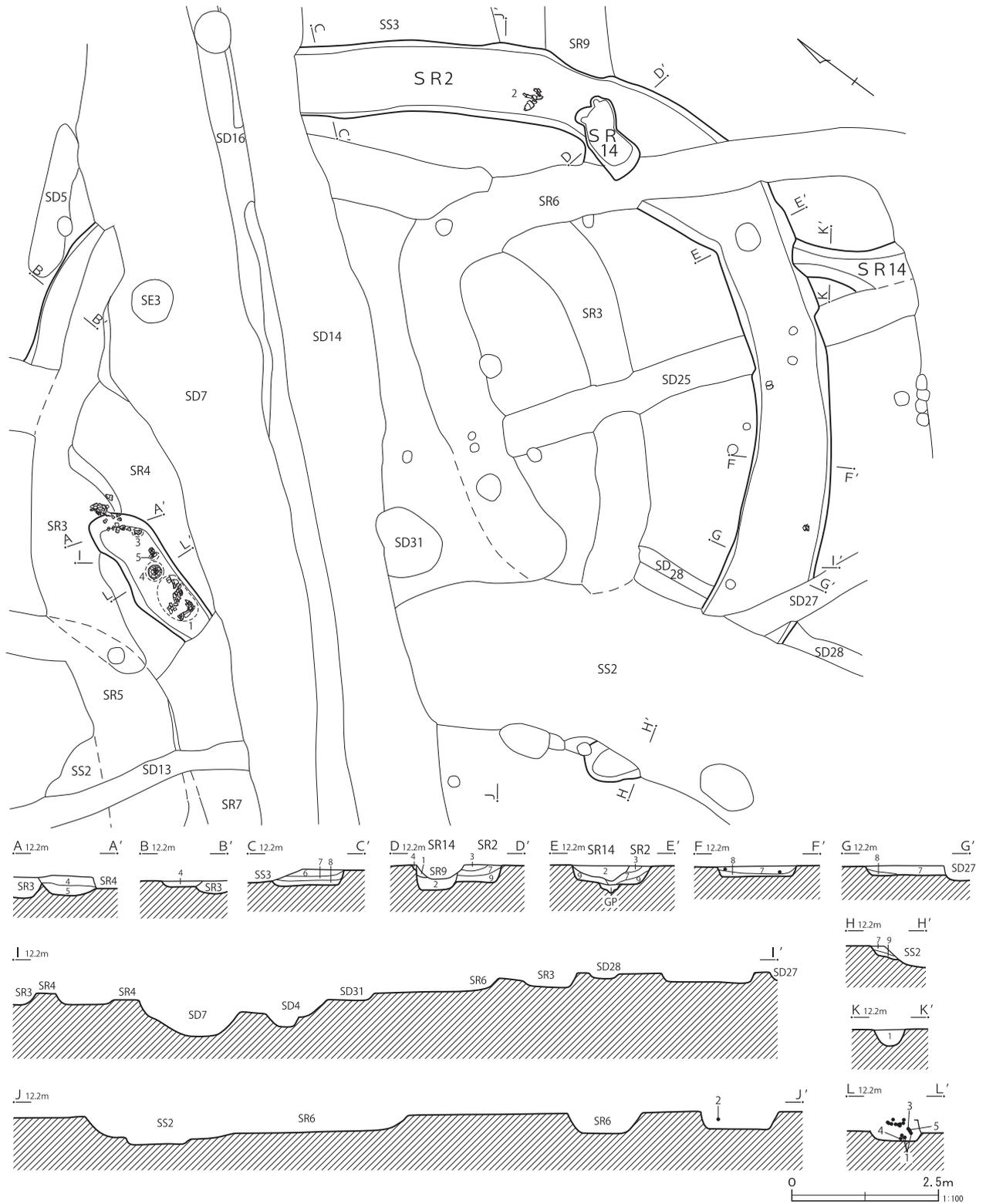
C・D-19・20、E-20グリッドに位置する。周溝が円弧状に検出された。E区第3号周溝状遺構より新しく、E区第9・14号周溝状遺構、E区第4・7・14・27号溝跡、E区第2・3号墳より古いが、その他の重複遺構との新旧関係については捉えられなかった。

検出された範囲内での推定であるが、円弧状であることから、平面形は円形である可能性が高い。周溝が2箇所途切れているが、開口部であるか否かについては特定できなかった。

周溝の規模は、東西方向の外法12.76m、内法10.80m、南北方向の外法13.96m、上場幅0.76~1.85m、下場幅0.48~1.66m、深さ8~30cm、主軸方位は不明である。

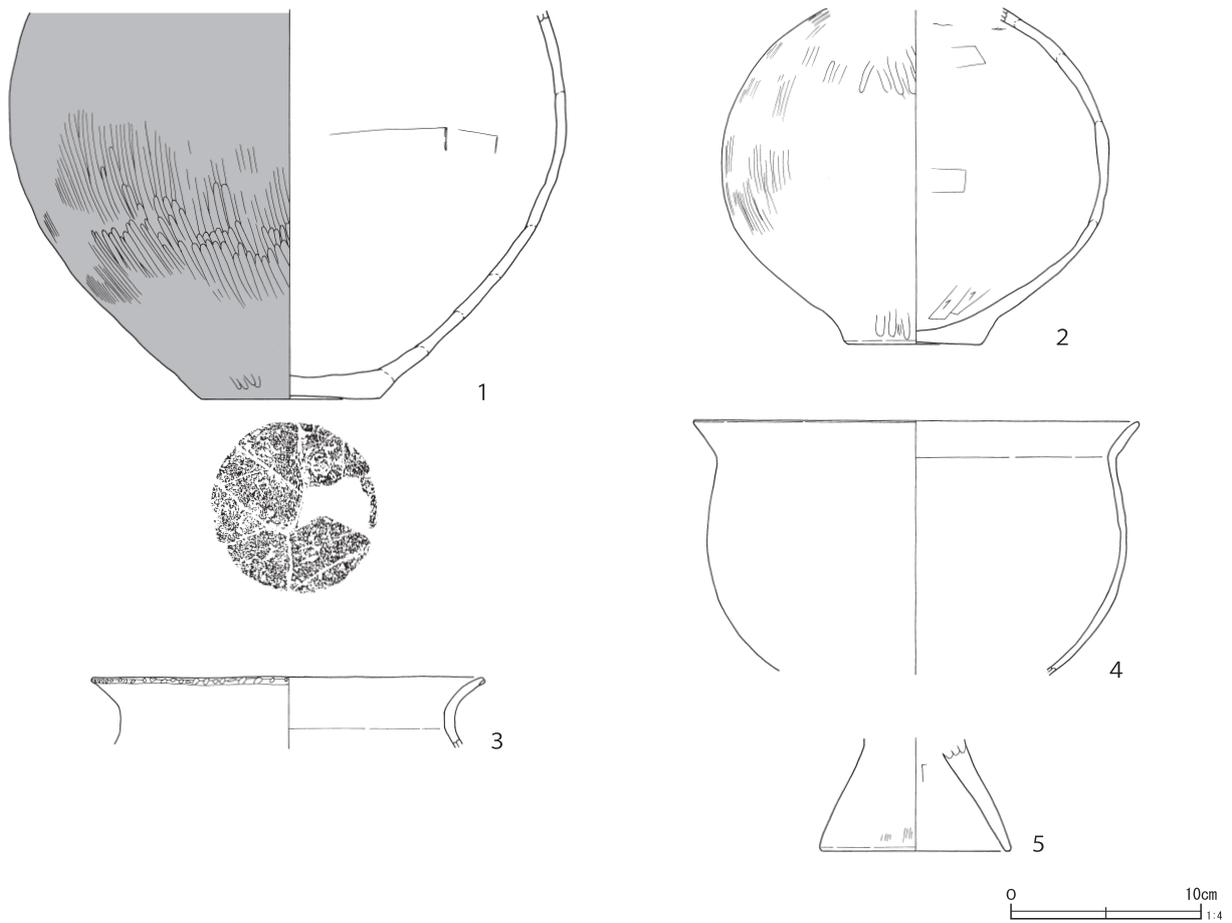
周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形である。土層断面第2層に分布する斑状の粘土ブロックから埋め戻しと考えられる。

図化できた遺物は、土師器壺・甕など計5点(1~5)である。



- | | |
|--|---|
| <p>SR 14</p> <p>1 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・白色土粒子やや多</p> <p>2 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 ~ 3 cm) 多 黒色土ブロック (0.5 cm) 少 褐色粘土ブロック (0.5 cm) やや多 埋戻し土</p> <p>SR 2</p> <p>3 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) ・黄褐色粘土ブロック (1 cm) 多 埋戻し土 (SDか)</p> | <p>4 黒褐色土 鉄分粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 疎らに少</p> <p>5 黒褐色土 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少 鉄分粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 均質に多</p> <p>6 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 微量 白色土粒子少</p> <p>7 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少 炭化物粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 微量 白色粒子やや多</p> <p>8 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) ・褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) 多 黄褐色粘土ブロック (1 cm) やや多</p> <p>9 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) ・褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) 多</p> |
|--|---|

第179図 E区第2・14号周溝状遺構



第180図 E区第2号周溝状遺構出土遺物

第57表 E区第2号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR2	E	土師器	壺	75		9.4	[20.6]	A D F J	普通	赤褐	No.15~17 外面へラ磨き 内面へラナデ 器面風化著しい 底部木葉痕あり 外面赤彩
2	SR2	E	土師器	壺	5		(6.9)	[17.7]	A C D F J	良好	灰黄	No.19 外面へラ磨き 内面へラナデ 底部へラナデか 器面風化著しい 外面に大黒斑あり
3	SR2	E	土師器	甕	15	(20.4)		[3.9]	A C D F	普通	橙	No.11 口縁部内外面横ナデ 器面風化著しい 口唇部にある刻みは並びがやや不均等
4	SR2	E	土師器	甕	35	(23.5)		[3.4]	A C D F	普通	橙	No.14 器面は被熱のため著しく荒れて赤色化している
5	SR2	E	土師器	台付甕	20		(10.0)	[6.0]	A C F G J	普通	橙	No.13 外面ハケか 内面へラナデ 器面風化著しい 外面被熱のためやや赤色化している

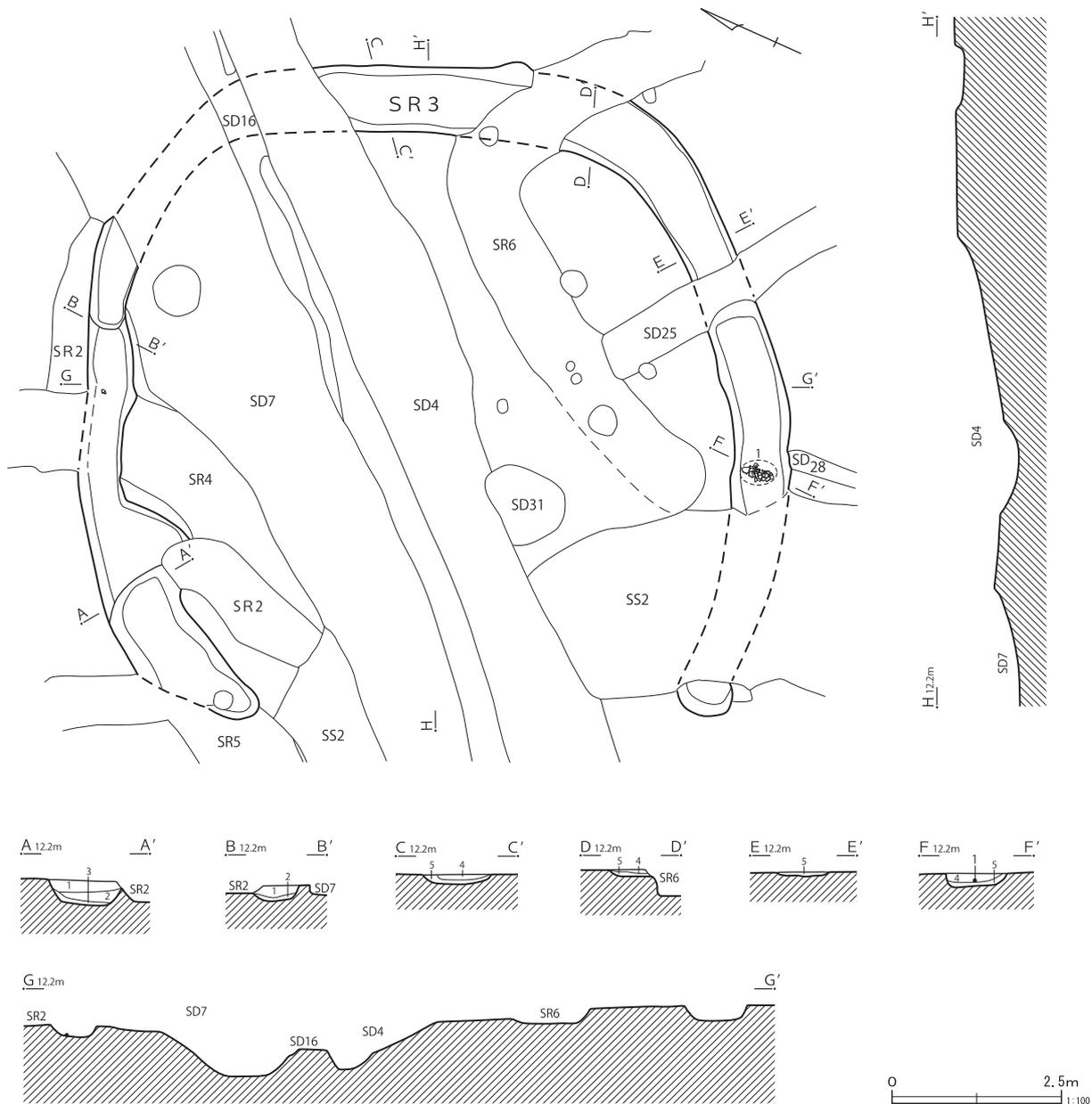
E区第3号周溝状遺構 (第181・182図)

C~E-19・20グリッドに位置する。周溝が円弧状に検出された。E区第2・6号周溝状遺構、E区第2号墳、E区第13・14号溝跡よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係については捉えられ

なかった。

平面形は、やや丸味を帯びた「コ」の字状である。南西部では6.22mにわたって周溝が途切れているが、開口部である可能性が考えられる。

周溝の規模は、北東-南西方向の外法9.72m、内

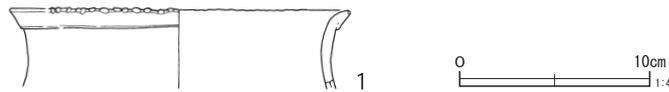


第181図 E区第3号周溝状遺構

法8.78m、北西-南東方向の外法10.32m、内法8.63m、上場幅0.58~1.40m、下場幅0.42~1.20m、深さ6~33cm、周溝が途切れている部分が開口部の場合、主軸方位はN-61°-Eとなる。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは深い部分では比較的急で、断面形は浅い部分で皿状、深い部分では逆台形である。

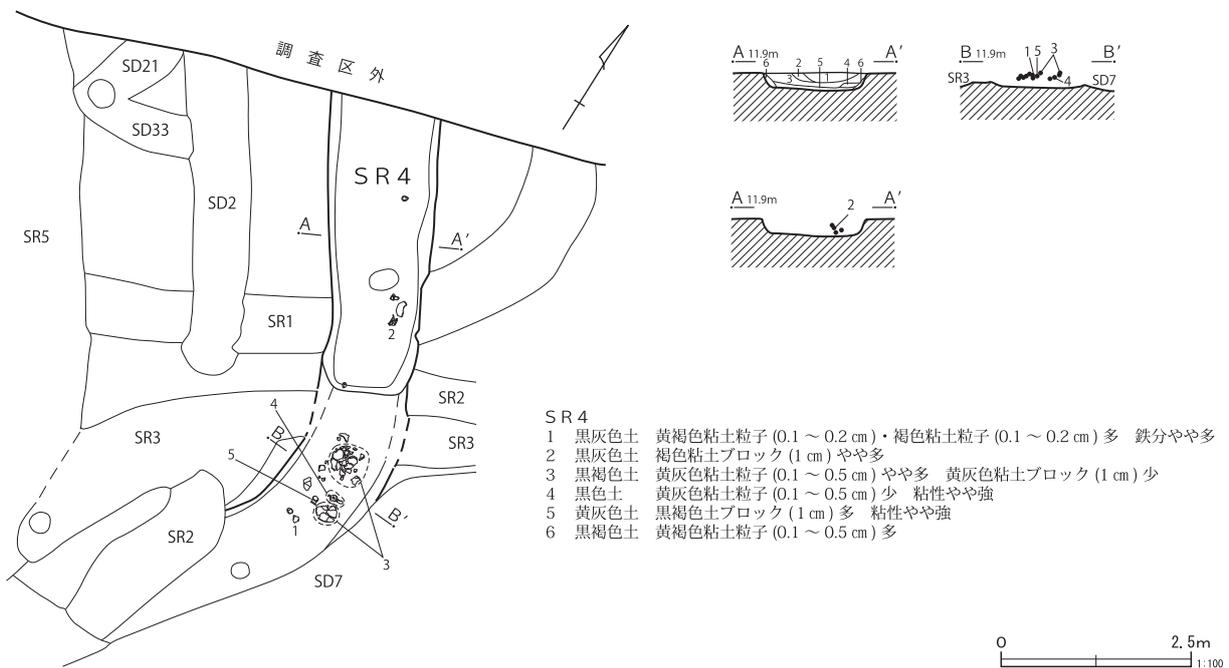
周溝内には、段差をもつ部分が西溝で2箇所、



第182図 E区第3号周溝状遺構出土遺物

第58表 E区第3号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR3	E	土師器	甕	15	(17.9)		[4.2]	A D F J	普通	明黄褐	No.2 口縁部内外面横ナデ 器面風化著し



第183図 E区第4号周溝状遺構

東溝で1箇所存在する。各段差の比高差は、西溝南側で11cm、北側で6cm、東溝では12cm程である。

図化できた遺物は、土師器甕の破片1点(1)である。

E区第4号周溝状遺構 (第183・184図)

C・D-19グリッドに位置する。周溝が円弧状に検出された。北側は調査区外に続く。E区第7号溝跡よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係については捉えられなかった。

部分的な検出であるため平面形は不明である

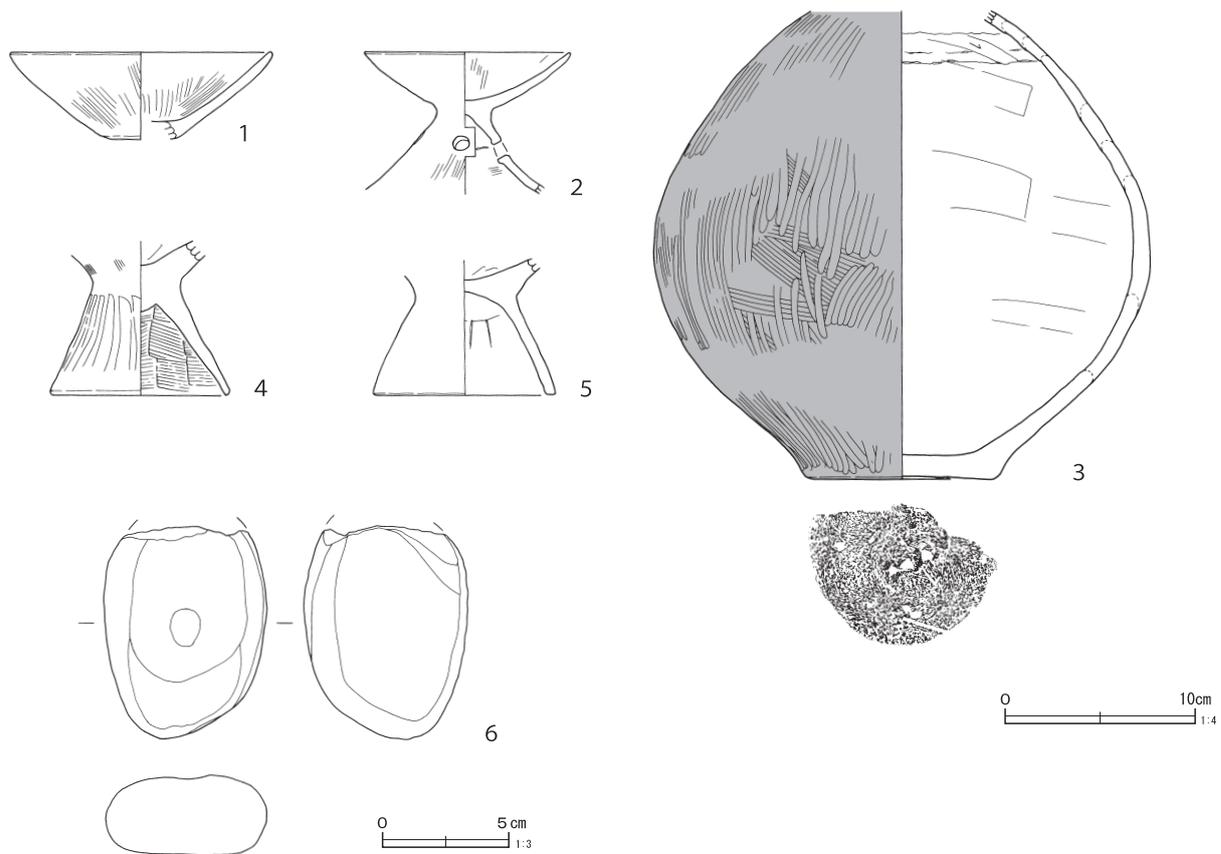
が、円形もしくは楕円形と推定される。

周溝の規模は、全長8.45m、上場幅1.20~1.45m、下場幅0.94~1.21m、深さ6~24cm、主軸方位は不明である。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

周溝内中程には、比高差17cm程の段差が1箇所みられる。

図化できた遺物は、土師器壺・台付甕など計6点(1~6)である。



第184図 E区第4号周溝状遺構出土遺物

第59表 E区第4号周溝状遺構出土遺物観察表

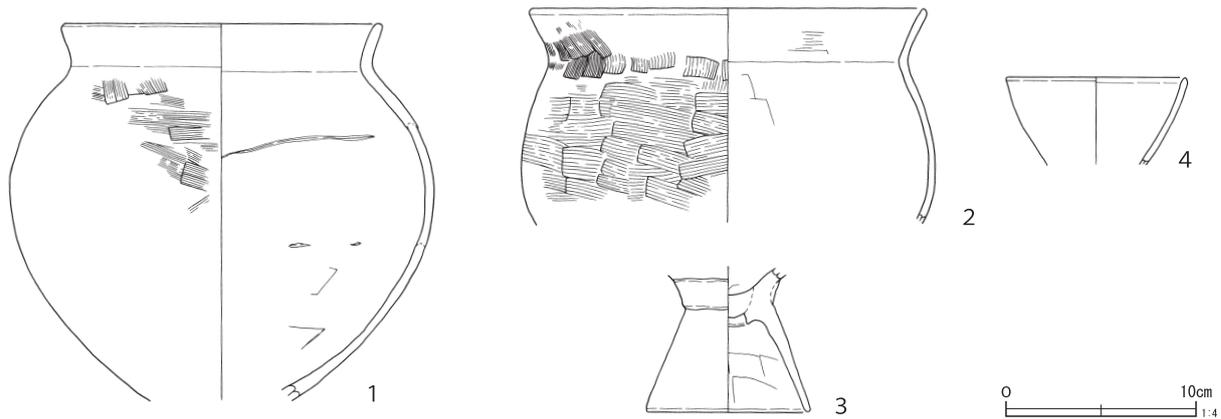
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR4	E	土師器	高坏	20	(13.7)		[4.5]	A C D F J	普通	橙	No.15 内外面ヘラ磨き 器面風化著しい
2	SR4	E	土師器	高坏	40	(10.7)		[7.5]	A C D F J	普通	浅黄	No.16 内外面ヘラ磨き 脚部内面ハケナデとナデか 穿孔4ヶ所(外からの穿孔) 器面風化著しい
3	SR4	E	土師器	壺	40		(10.2)	[24.7]	A C D E F	普通	橙	No.2・3・12 外面ハケ後ヘラ磨き 内面ヘラナデ 器面風化している 胴部外面に黒斑あり 底部木葉痕あり 外面赤彩
4	SR4	E	土師器	台付甗	85		9.3	[8.1]	A C D F J	普通	にぶい 橙	No.10 外面ハケとヘラ削り 底部内面ヘラナデ 脚部内面ハケ
5	SR4	E	土師器	台付甗	90		9.4	[7.1]	A C D F J	普通	橙	No.11 外面ヘラ削りとヘラナデか 底部内面ヘラナデか 脚部内面ヘラナデ 器面風化している
6	SR4	E	石製品	敲石か		長さ[8.3]cm 幅6.3cm 厚さ3.1cm 重さ296.7g						

E区第5号周溝状遺構 (第185・186図)

C-19、D-18・19グリッドに位置する。周溝がL字状に検出された。北側は調査区外に続くが、南側については調査区内で収束するのか、調査区外に続くのかは不明である。E区第1号周溝状遺

構より新しく、E区第2号墳、E区第1号井戸跡、E区第6・7号溝跡よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係については捉えられなかった。

周溝が直線状であることから、平面形は方形、もしくは長方形と推定される。



第186図 E区第5号周溝状遺構出土遺物

第60表 E区第5号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR5	E	土師器	甕	25	(16.4)		[19.8]	A D	普通	明褐	No.8 口縁部内外面横ナデ 胴部外面ハケ 胴部内面ヘラナデか 器面風化著しい 外面は被熱のため赤色化している
2	SR5	E	土師器	甕	20	(20.7)		[11.3]	A C D F	普通	にぶい黄橙	No.7 口縁部内外面横ナデ 胴部外面ハケ 胴部内面ヘラナデ 器面風化著しい 被熱のため一部赤色化している
3	SR5	E	土師器	台付甕	90		8.6	[7.7]	A C D F J	普通	にぶい黄橙	No.2 底部に突帯あり(ナデ) 外面ヘラナデか 底部内面・脚部内面ヘラナデ 器面風化している
4	SR5	E	土師器	壺	10	(9.2)		[4.6]	C D F	普通	にぶい黄橙	内外面ヘラ磨きか 外面に黒斑あり 器面風化著しい

溝状遺構と1つのピットより新しく、E区第2号墳、E区第11号井戸跡、E区第25号溝跡よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係については捉えられなかった。

全体的な平面形は、「コ」の字状である。南西部では5.62mにわたって周溝が途切れているが、開口部である可能性が考えられる。

周溝の規模は、北東-南西方向の外法8.02m、内法6.24m、北西-南東方向の外法9.54m、内法7.45m、上場幅0.75~1.31m、下場幅0.65~0.90m、深さ26~42cm、周溝が途切れている部分が開口部の場合、主軸方位はN-41°-Eとなる。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは深い部分では比較的急で、断面形は浅い部分で皿状、深い部分では逆台形である。

周溝内には、段差をもつ部分が北西-南東方向の溝で2箇所。北東-南西方向の溝で1箇所存在

する。各段差の比高差は、西から時計回りで13cm、7cm、12cm程である。

北東-南西方向の周溝内では、土壌状の落ち込みが検出された。平面形は長方形で、長径×短径×深さは、188×98×31cmである。

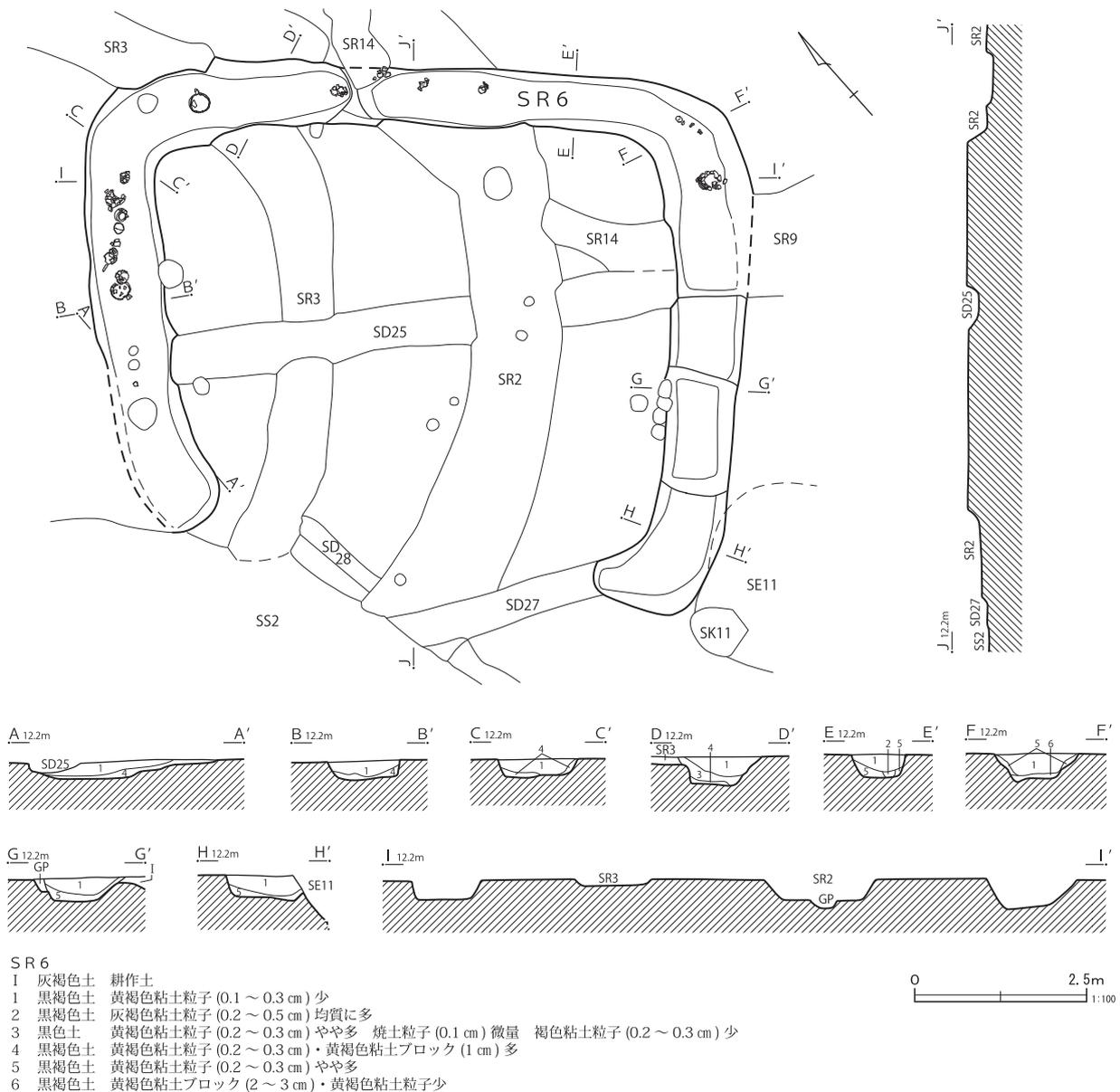
底面は平坦で、壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形である。遺物は出土していないが、溝内土壌の可能性が考えられる。

図化できた遺物は、土師器の埴・壺・甕など計13点(1~13)である。

E区第7号周溝状遺構(第190~192図)

D-19、E-18・19グリッドに位置する。直線状の周溝が1条検出された。北側はプランが失われている。E区第23号溝跡より新しく、E区第2号墳、E区第6・7・22号溝跡よりは古いが、その他の重複遺構との新旧関係は捉えられなかった。

検出された範囲内での推定であるが、直線状で



第187図 E区第6号周溝状遺構

あることから、平面形は、方形もしくは長方形と推定される。周溝南端部で途切れているが、周溝の深度が浅いため、開口部であるのか、プランが失われているのかは特定できなかった。自然堆積であると考えられる。

検出された周溝の規模は、全長11.94m、上場幅1.05~1.41m、下場幅0.86~1.05m、深さ19~56cmである。周溝の方位はN-35°-Eである。

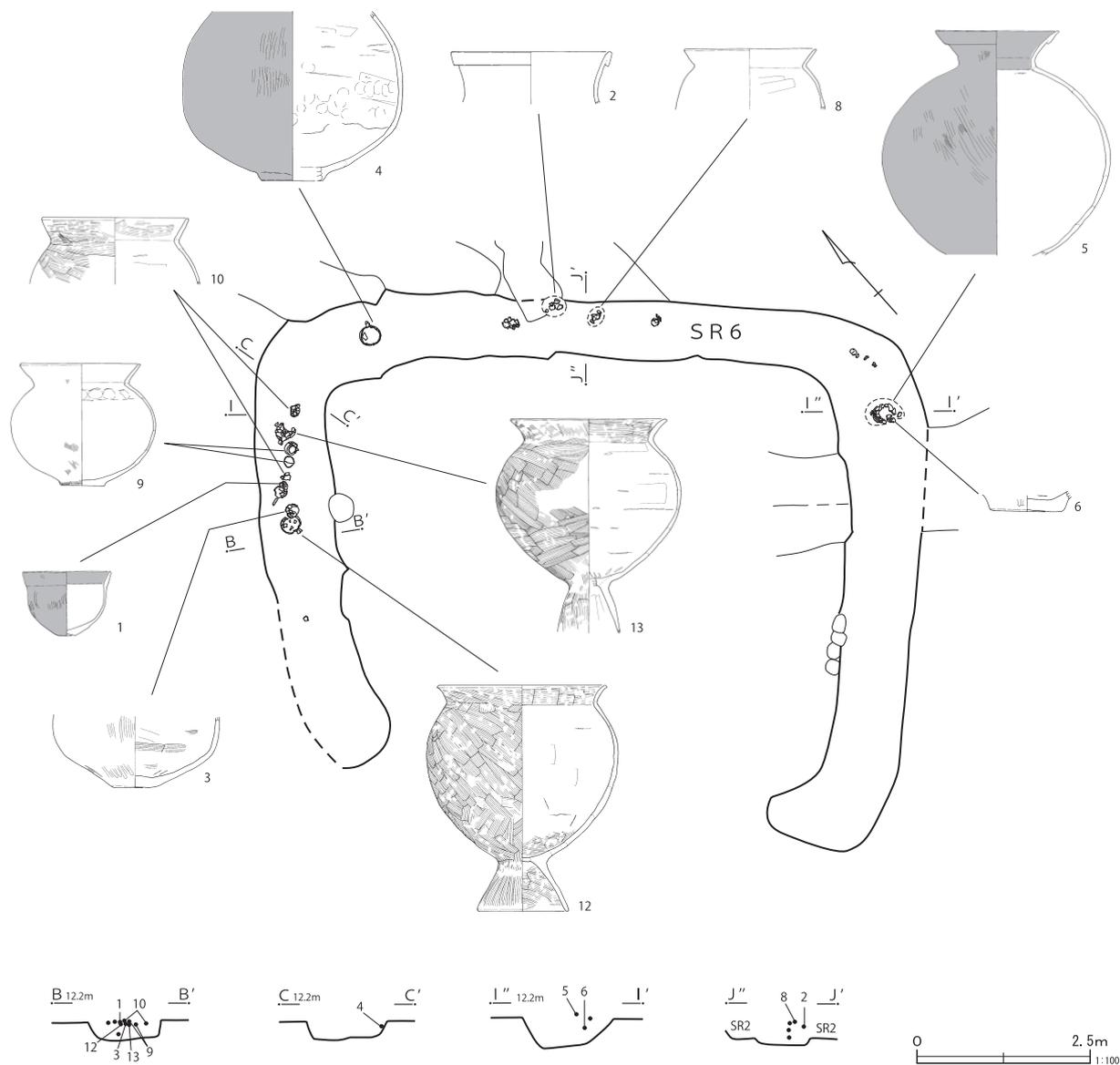
周溝の底面は平坦である。壁面の立ち上がりは

浅い部分では緩やかであるが、深い部分では比較的急である。断面形は前者では皿状、後者では逆台形である。

図化できた遺物は、土師器の壺・器台・甕などのほか土玉を含め計22点（1~22）である。

E区第8号周溝状遺構（第193・194図）

D・E-21・22グリッドに位置する。E区第16号土壇より新しく、E区第9・15号周溝状遺構、E区第6号方形周溝墓、E区第3号掘立柱建物跡、E



第188図 E区第6号周溝状遺構遺物出土状況

区第4・25号溝跡よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係については、土層断面が設定されていないため把握できなかった。

全体的な平面形は、円形に近い方形である。一部周溝が失われているが、南西側に開口部をもつと推定される。検出時点では、周溝間の距離は4.18mであるが、失われた部分があるため、本来はもう少し距離が短かったと考えられる。

遺構の規模は、北東-南西方向の外法12.10m、内法(10.05)m、北西-南東方向の外法11.61m、

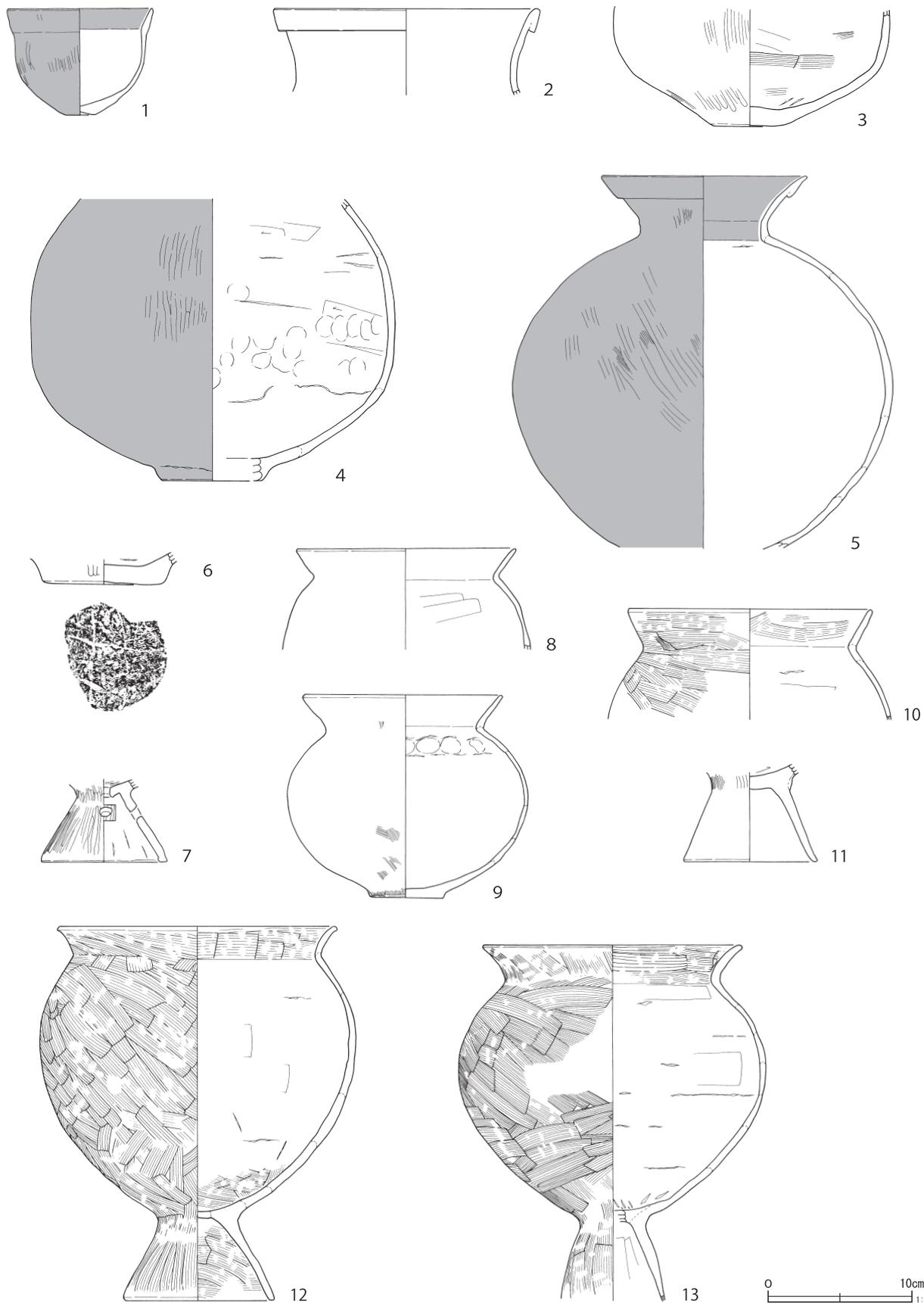
内法(9.80)m、周溝の上場幅0.89~1.05m、下場幅0.66~0.91m、深さ18~22cm、周溝が途切れている部分が開口部の場合、主軸方位はN-42°-Eとなる。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は皿状である。

図化できた遺物は、土師器の器台1点(1)である。

E区第9号周溝状遺構(第193・195図)

D・E-20・21グリッドに位置する。円弧状の周



第189图 E区第6号周沟状遗构出土遗物

第61表 E区第6号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR6	E	土師器	埴	55	(10.2)	2.1	7.4	A C D F J	普通	にぶい 黄橙	No.15 口縁部内面・外面へラ磨きか 内面へラナデか 器面風化著しい 外面・口縁部内面赤彩
2	SR6	E	土師器	壺	10	(18.1)		[5.9]	A C F J	普通	橙	No.6 器面風化著しく調整不明
3	SR6	E	土師器	壺	70		5.2	[8.2]	A C D F	普通	橙	No.18 外面へラ磨き 内面ハケとへラナデ 器面風化著しい 胴～底部外面に大黒斑あり
4	SR6	E	土師器	壺	70		(7.0)	[19.5]	A C D F	普通	にぶい 橙	No.9 外面へラ磨き 内面へラナデと指頭圧痕 器面風化著しい 胴部外面に赤彩・大黒斑あり
5	SR6	E	土師器	壺	70	14.2		[26.2]	A C D F J	普通	橙	No.3 口縁内外面へラ磨き 胴部外面ハケ後へラ磨きか 胴部内面へラナデか 器面風化著しい 胴部外面に大黒斑あり 外面・口縁部内面赤彩
6	SR6	E	土師器	壺	35		(8.4)	[1.7]	A C D F J	普通	橙	No.2 外面へラ磨き 内面へラナデ 底部木葉痕あり 器面風化著しい
7	SR6	E	土師器	器台	45		(8.8)	[5.8]	A C D F	普通	にぶい 橙	南東コーナー上層 外面・底部内面へラ磨き 脚部内面へラナデ 穿孔4ヶ所
8	SR6	E	土師器	甕	20	(15.4)		[7.0]	A C D F J	普通	橙	No.5 口縁部内外面横ナデ 胴部外面ハケ 胴部内面へラナデ 器面風化著しい
9	SR6	E	土師器	甕	80	13.6	4.9	14.1	A C D F J	普通	橙	No.12・13・17 口縁部内外面横ナデか 胴部外面ハケか 頸部内面指頭圧痕 胴部内面へラナデか 器面風化著しい 内外面黒斑あり
10	SR6	E	土師器	甕	25	(16.8)		[7.7]	A C D F J	普通	灰黄	No.10・14 口縁部内外面ハケ後横ナデ 内面へラナデ 口縁～胴部内外面に黒斑あり
11	SR6	E	土師器	台付甕	90		9.3	[6.2]	A C D F J	普通	橙	N-4G 底部内面へラナデ 脚部内面へラナデか 器面風化著しい
12	SR6	E	土師器	台付甕	40	(19.0)	10.2	26.1	A B C D F G	普通	にぶい 褐	No.19 口縁部内外面ハケ後ヨコナデ 外面ハケ 内面へラナデとハケ ハケ目の遺存状況は比較的良好 胴部外面に大黒斑あり
13	SR6	E	土師器	台付甕	40	(17.6)		[24.8]	A C D F I	普通	にぶい 橙	No.11 口縁内外面ハケ後横ナデ 外面ハケ内面・脚部内面へラナデ

溝の一部が1条検出された。E区第2・8・10・14・15号周溝状遺構より新しく、E区第4号井戸跡よりは古いが、その他の重複遺構との新旧関係については、土層断面が設定されていないため把握できなかった。

全体的な平面形は円形であるが、開口部の有無については不明である。

遺構の規模は、北東-南西方向の外法10.55m、内法7.71m、北西-南東方向の外法10.32m、内法7.88m、周溝の上場幅1.10~1.52m、下場幅0.63~1.40m、深さ15~49cm、主軸方位は不明である。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は浅い部分では皿状、深い部分では逆台形である。第4・5・8層は埋め戻し土である。

土層断面D-D' 設定箇所付近に段差が検出さ

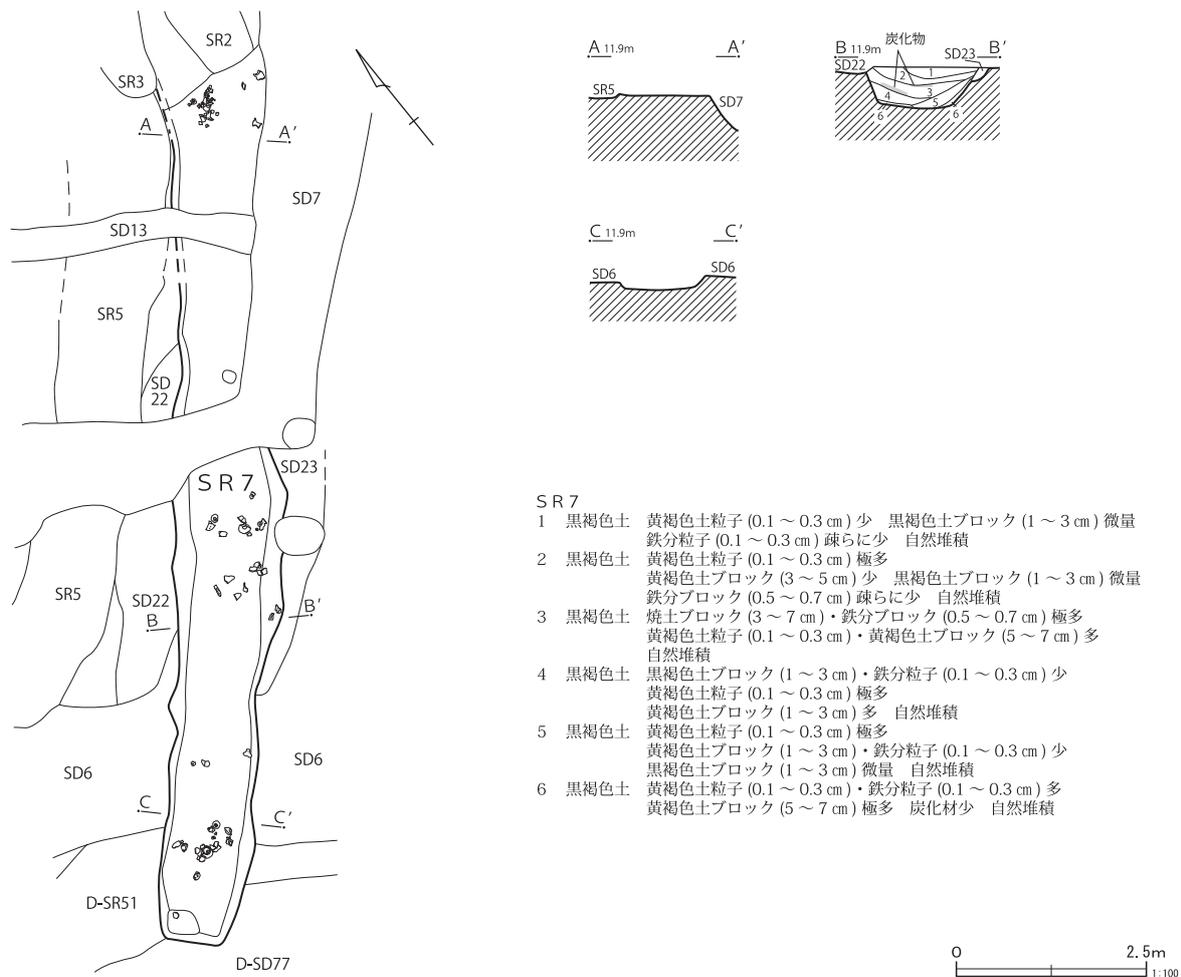
れた。周溝との比高差は9cm程である。

この他に、土壇状の落ち込みが3箇所検出された。平面形・断面形、長径×短径×確認面からの深さについては、北から南へ丸みをもつ長方形・塊形、125×112×29cm、円弧状長方形・皿状、296×[142]×40cm、長楕円形・逆台形、208×121×39cmであるが、いずれも溝内土壇の可能性が考えられる。この3基の周溝底面との比高差は、北側のものから順に、6~15cm、3~14cm、5~20cm程である。

図化できた遺物は、土師器2点(2・3)である。

E区第10号周溝状遺構(第196~198図)

C・D-21グリッドに位置する。やや湾曲するものの、直線状の周溝がL字状に確認された。E区第14号溝跡、E区第9・11号周溝状遺構、E区第7



第190図 E区第7号周溝状遺構

号井戸跡、E区第1・3号墳よりも古い、その他の重複遺構との新旧関係については把握できなかった。

西側は調査区外に続くが、南側は周溝が途切れており、開口部の可能性も考えられる。検出された部分的範囲内において、平面形は方形、または長方形と推定される。

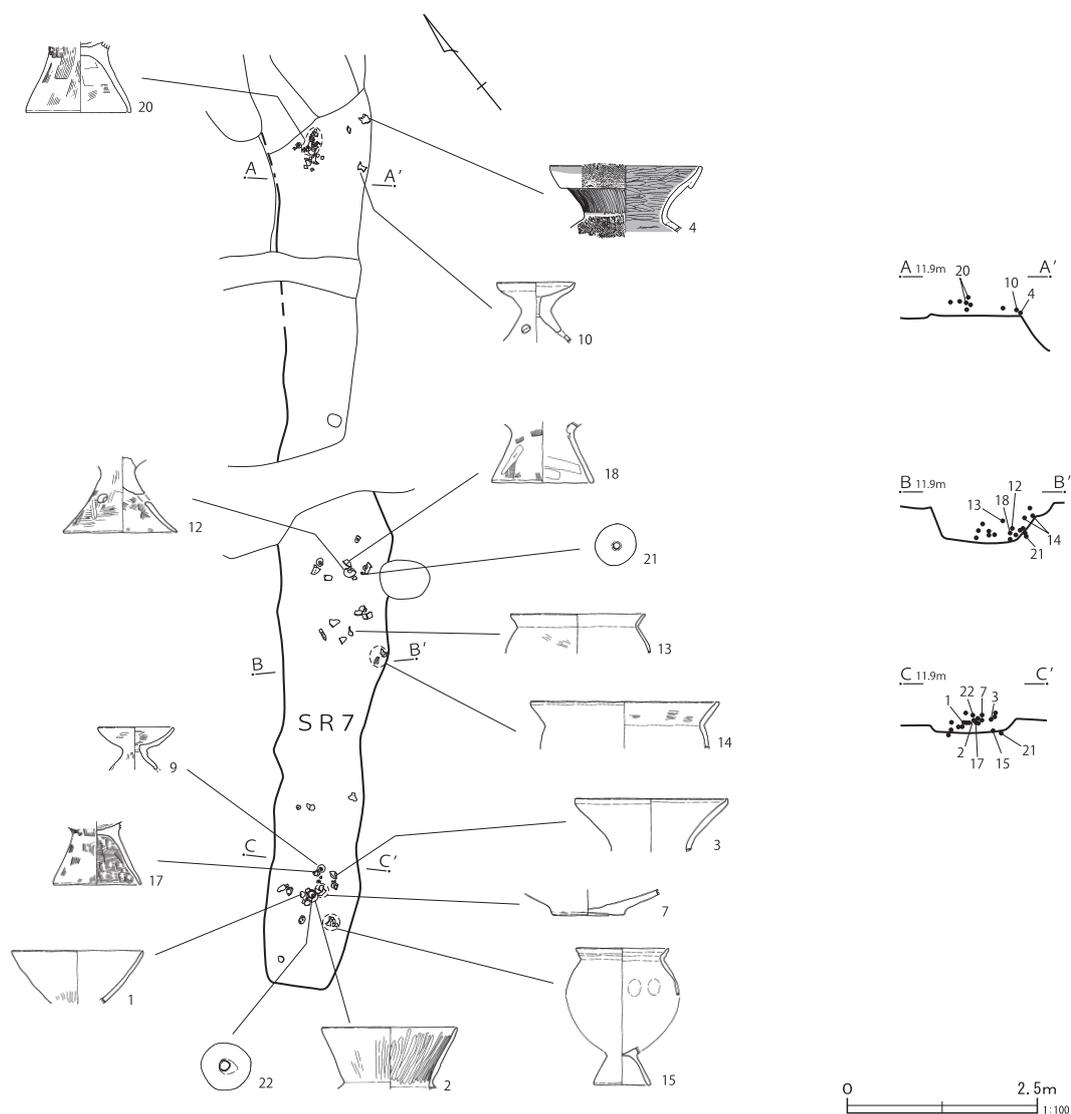
遺構の規模は、南西部分を開口部とした場合、北東-南西方向の外法13.10m、内法12.18mであるが、北西-南東方向については、外法12.56m、内法11.22mまでの確認にとどまる。上場幅0.85~1.29m、下場幅0.63~0.85m、深さ15~73cm、主軸方位はN-53°-Eとなる。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比

較的急で、断面形は浅い部分では皿状、もしくは碗状であるが、深い部分では逆台形、もしくは箱形である。第4・7・8・10・11層は埋め戻し土である。

土層断面A-A'設定箇所(東1.3m・3.7m)、B-B'設定箇所(西0.9m、C-C'の南1.3m・1.7m、およびG-G'設定箇所に段差が検出された。各々の段差の比高差は、西から南に17cm、25cm、3cm、3cm、24cm、26cm、47cm程である。

以上の段差とは別に、D-D'設定箇所には土壇状の落ち込みが検出されたが、溝内土壌の可能性が考えられる。平面形はやや歪みをもった長楕円形で、断面形、長径×短径×確認面からの深さについては、皿状、181×102×63cm、主軸方位は周溝



第191図 E区第7号周溝状遺構遺物出土状況

状遺構と同様に、N-53°-Eである。

開口部の可能性がある部分付近からまとまった形で土師器が出土した。図化できた土師器は、壺・高坏・台付甕など計22点（1～22）である。

E区第11号周溝状遺構（第199図）

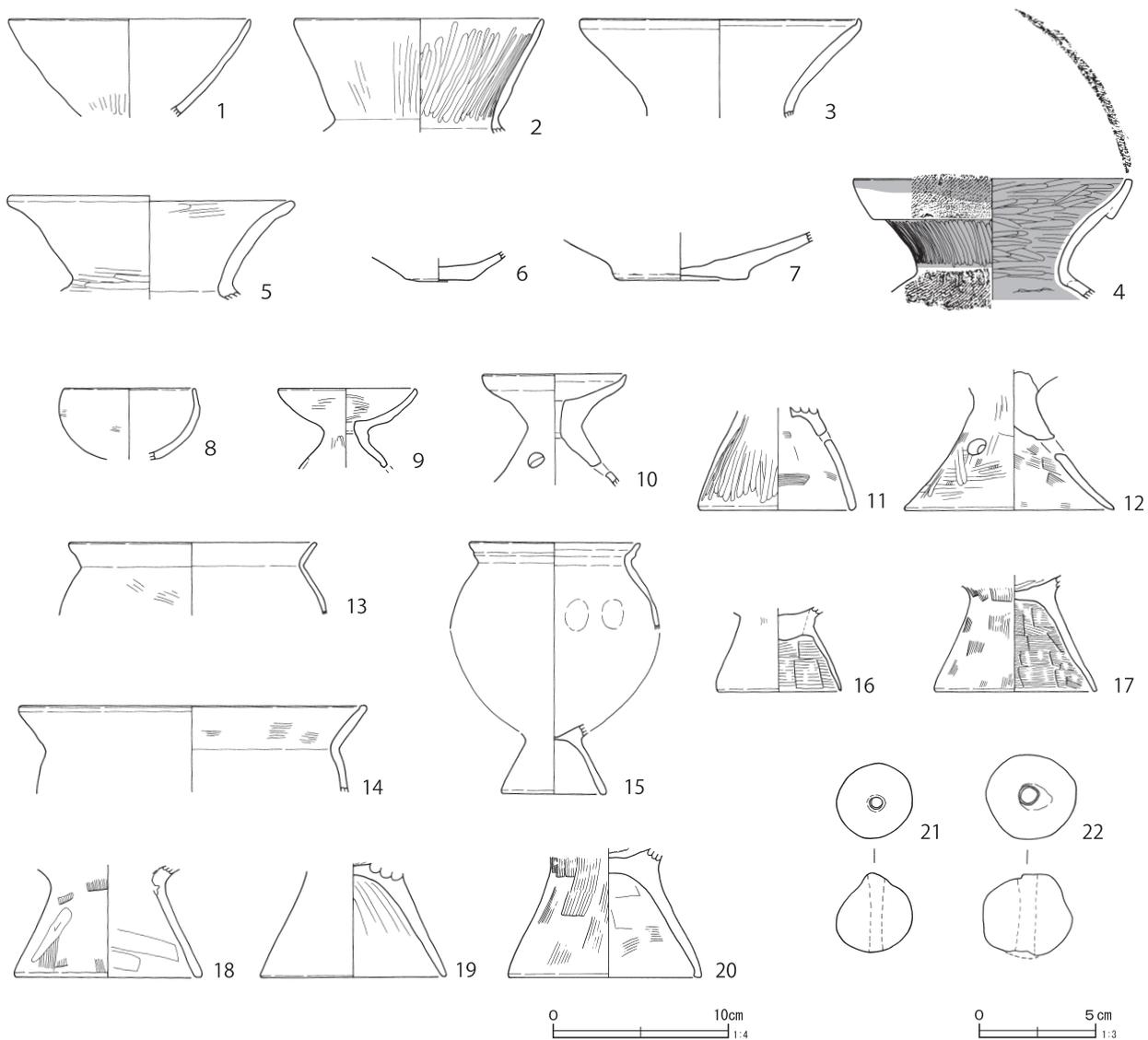
C・D-21グリッドに位置する。やや湾曲するものの、直線状の周溝が「コ」の字状に確認された。E区第10号周溝状遺構より新しく、E区第7号井戸跡よりは古いが、その他の重複遺構との新旧関係については把握できなかった。

南西側は周溝が失われているのか、あるいは開

口部であるのかについては特定できなかった。検出された部分的範囲内において、平面形は方形と推定される。

遺構の規模は、北東-南西方向の外法6.82m、内法5.75m、北西-南東方向の外法7.02m、内法5.68m。上場幅0.35～0.75m、下場幅0.18～0.53m、深さ8～30cm、主軸方位はN-51°-EまたはN-39°-Wと推定される。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは浅い部分では緩やかであるが、深い部分では比較的急で、断面形は浅い部分では皿状、深い部分では



第192図 E区第7号周溝状遺構出土遺物

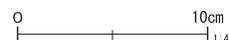
第62表 E区第7号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR7	E	土師器	壺	10	(13.8)		[5.5]	A C D F J	普通	明黄褐	No.35 外面へラ磨き 内面へラ磨きか 器面風化著しい 外面に黒斑あり
2	SR7	E	土師器	壺	80	14.2		[6.6]	A C F J	普通	にぶい黄橙	No.33 内外面へラ磨き 器面(特に外面)風化著しい
3	SR7	E	土師器	壺	15	(16.2)		[5.7]	A C D J	普通	黄橙	No.29 口唇部横ナデか 器面風化著しい 内面に小黒斑あり
4	SR7	E	土師器	壺	20	(16.3)		[6.9]	A C D F J	普通	にぶい褐	No.15 口縁部・肩部外面単節LRの縄文 口縁部外面下位・内面へラ磨き 内外面赤彩
5	SR7	E	土師器	壺	80	16.3		[5.9]	A C D F J	普通	浅黄	内外面へラ磨きか 器面風化著しい 内面に黒斑あり
6	SR7	E	土師器	小型壺	80		3.7	[1.3]	A C D F	普通	橙	器面風化著しい
7	SR7	E	土師器	壺	80		7.6	[2.8]	C D F G	普通	にぶい橙	No.31 風化著しく調整不明 外面に黒斑あり
8	SR7	E	土師器	碗か	45	(7.4)		[4.1]	A C D F J	普通	にぶい黄橙	口縁部内外面横ナデ 外面ハケナデとナデか 内面ナデか
9	SR7	E	土師器	器台	85	7.8		[4.5]	A C D F J	普通	橙	No.27 内外面へラ磨き 孔は2段である(各4孔か) 器面風化著しい

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
10	SR7	E	土師器	器台	70	(8.2)		[6.5]	A C F J	普通	橙	No.17 穿孔3ヶ所(外からの穿孔) 器面風化著しい
11	SR7	E	土師器	器台	20		(8.8)	[5.9]	A C D F J	普通	明黄褐	穿孔あり(外からの穿孔) 外面へラ磨き 脚部内面ハケとヘラナデ 器面風化している 外面に黒斑あり
12	SR7	E	土師器	高坏	85		11.9	[7.9]	A C D F J	普通	にぶい 橙	No.10 外面ハケ後へラ磨き 脚部内面ハケ 穿孔3ヶ所(外からの穿孔か) 器面風化している
13	SR7	E	土師器	甕	15	(14.0)		[4.2]	A C D F J	普通	橙	No.2 口縁部内外面横ナデか 頸部外面ハケ 頸部内面ヘラナデか 器面風化著しい
14	SR7	E	土師器	甕	15	(19.8)		[5.0]	A C D F J	普通	明灰黄	No.1 口縁部外面横ナデ 口縁部内面ハケ 後横ナデ 頸部外面ハケか 頸部内面ヘラナデか 器面風化著しい
15	SR7	E	土師器	小型台付甕(S字)	15	9.7	(5.8)	[9.1]	A B D J	普通	灰黄褐	No.42 内面上部に指頭圧痕 器面風化著しい ほかの土器とは胎土が違ふと思われる
16	SR7	E	土師器	台付甕	85		6.9	[4.7]	A C D F J	普通	にぶい 黄橙	外面ハケか 底部内面ヘラナデか 脚部内面ハケ 被熱のため赤色化・風化著しい
17	SR7	E	土師器	台付甕	80		9.3	[6.6]	A C D F J	普通	浅黄	No.28 外面・脚部内面ハケ 底部内面ヘラナデ 外面風化著しい
18	SR7	E	土師器	台付甕	45		(10.6)	[6.4]	A C D J	普通	にぶい 黄橙	No.11 外面ハケ・ヘラ削り・ナデ 内面ヘラナデ
19	SR7	E	土師器	台付甕	90		10.5	[6.5]	A C D F J	普通	赤褐	被熱のため大部分剥離 底部内面・脚部内面ヘラナデ
20	SR7	E	土師器	台付甕	55		(10.8)	[7.4]	A D	普通	灰黄褐	No.18・19 外面ハケ 底部内面ヘラナデ 脚部内面ヘラナデとハケナデ 器面風化している 被熱のため赤色化している
21	SR7	E	土製品	土玉	100	長さ3.4cm 最大径3.2cm 厚さ3.2cm 孔径0.7cm 重さ23.5g			A D F	普通	にぶい 黄橙	No.24
22	SR7	E	土製品	土玉	95	長さ3.5cm 最大径3.8cm 厚さ3.6cm 孔径0.7cm 重さ37.5g			A D F	普通	黒褐	No.32 黒斑あり

SR 8

SR 9



第193図 E区第8・9号周溝状遺構出土遺物

第63表 E区第8・9号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR8	E	土師器	器台	65	(8.4)		[2.9]	A C D F	普通	にぶい 橙	No.9
2	SR9	E	土師器	高坏	5	(15.7)		[3.1]	A D F	普通	灰黄	器面風化著しい
3	SR9	E	土師器	壺	80		7.9	[3.0]	A C D F J	普通	橙	No.2 器面風化著しい 胴~底部外面に黒斑あり

逆台形もしくは箱形である。

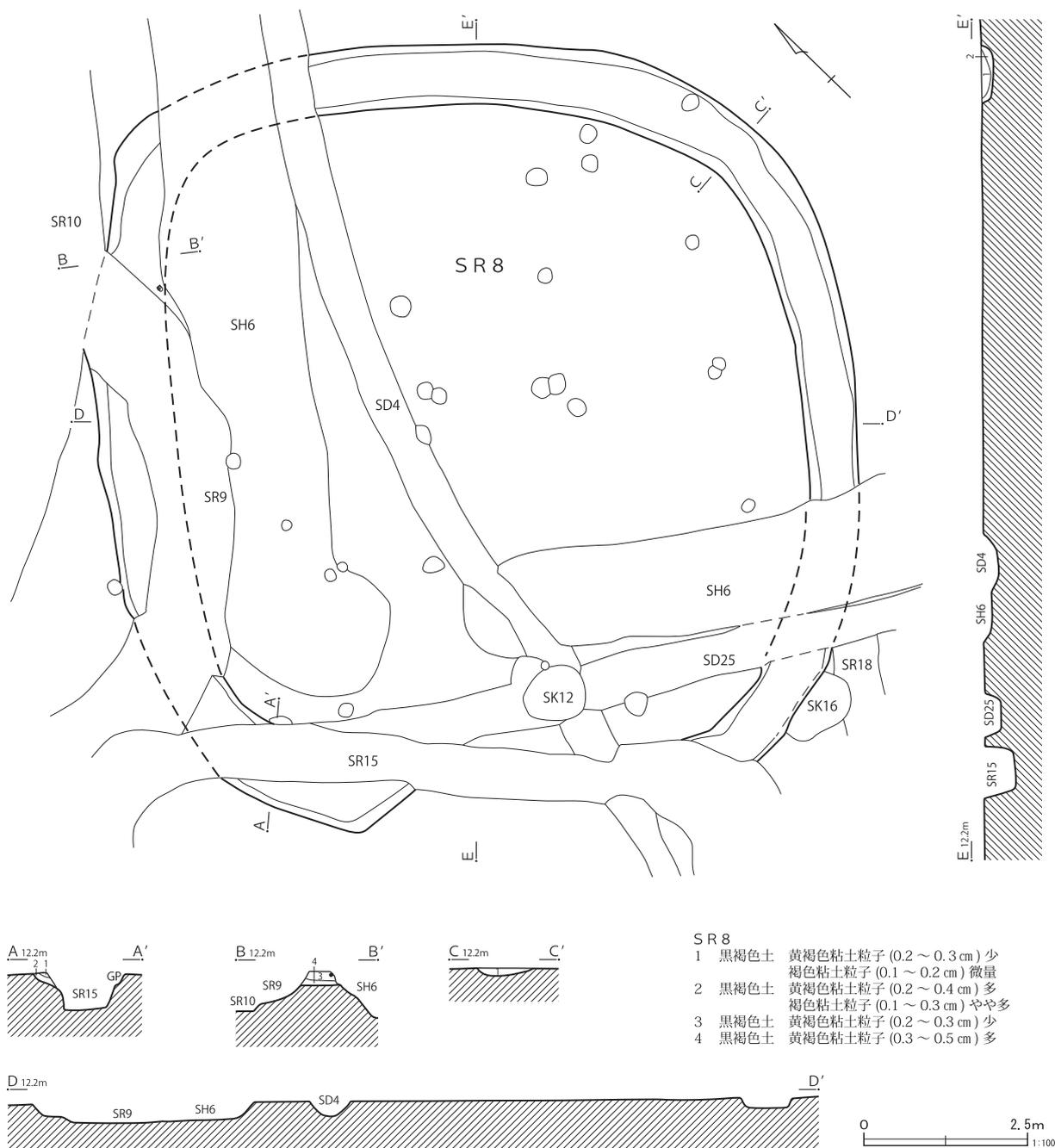
土層断面B-B'設定箇所には段差が、北溝には土壌状の落ち込みが検出された。各々の段差の比高差は、西から東へ6cm、7cm、4cm程である。落ち込みについては、溝内土壌の可能性が考えられる。平面形はやや歪みをもった長方形で、断面

形は逆台形であったと推定される。長径×短径×確認面からの深さについては、288×71×32cmである。

遺物は出土しなかった。

E区第12号周溝状遺構 (第200図)

E-19グリッドに位置する。直線状の周溝が短



第194図 E区第8号周溝状遺構

く1条検出された。南側は調査区外に続くと推定される。E区第6・14号溝跡よりも古い。

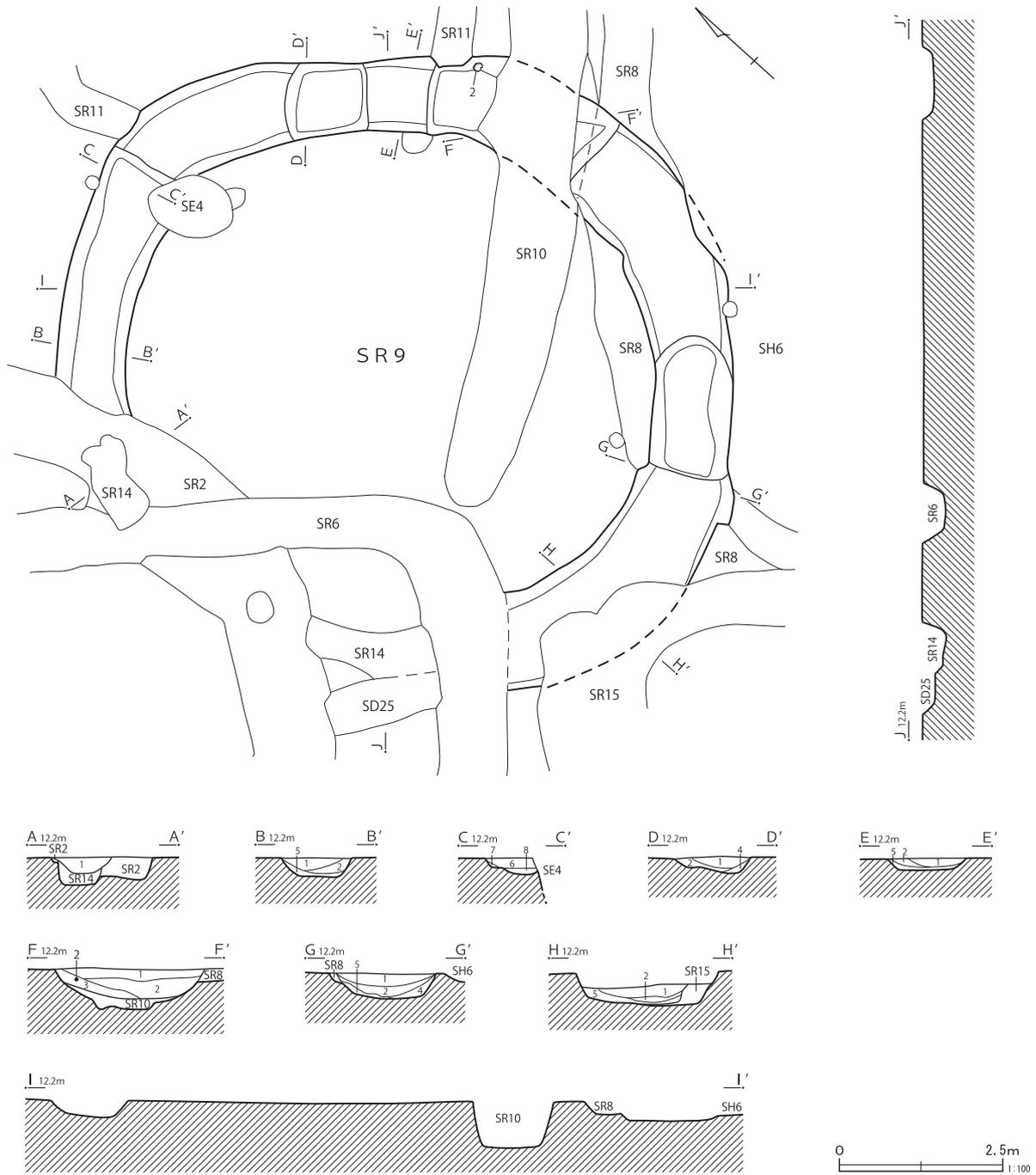
検出された範囲内からでは、平面形が方形・長方形、もしくは円形・楕円形いずれであるかは特定できなかった。

検出された周溝の規模は、全長3.45m、上場幅

0.61~0.80m、下場幅0.48~0.61m、深さ15cmである。周溝の方位はN-36°-Wである。

周溝の底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急ではあるが、深度が浅いため断面形は皿状である。

遺物は出土しなかった。

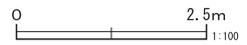
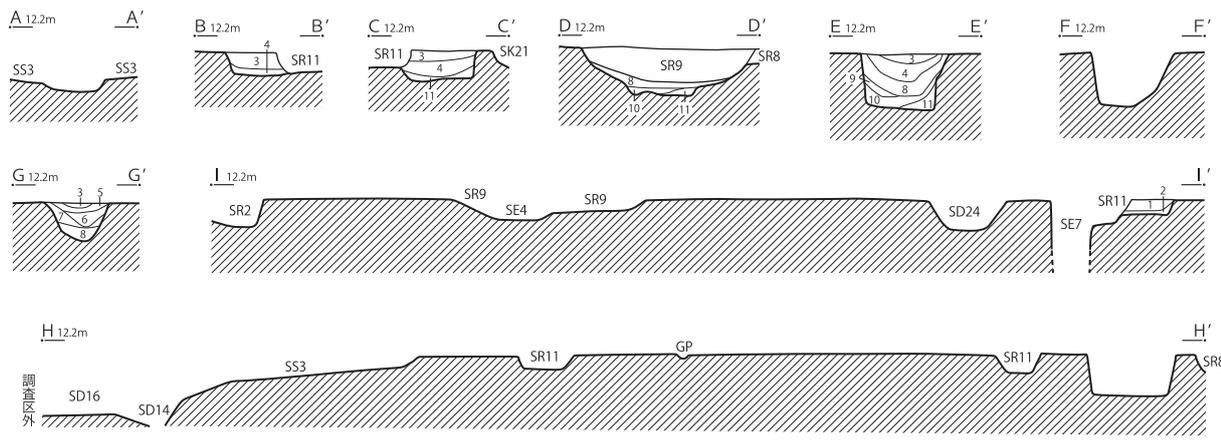
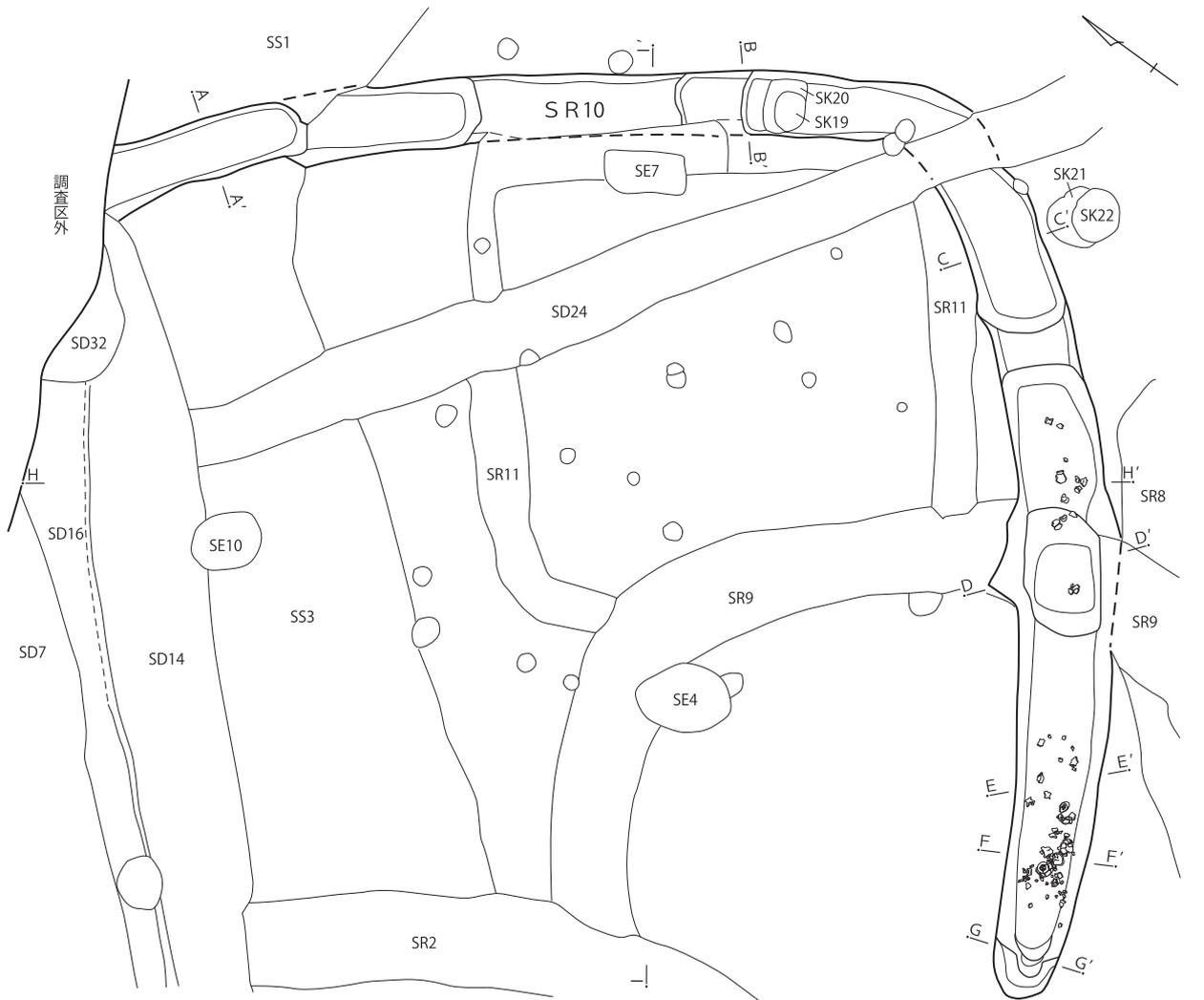


- SR9
- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1 暗褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 少 自然堆積 | 5 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 多 埋戻し土 |
| 2 黒褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 少 自然堆積 | 6 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.5 cm) 少 |
| 3 暗褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.1 cm) 多 自然堆積 | 7 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 cm) ・ 褐色粘土粒子 (0.1 cm) やや多 自然堆積 |
| 4 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 多 埋戻し土 | 8 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.1 ~ 0.7 cm) 多 埋戻し土 |

第195図 E区第9号周溝状遺構

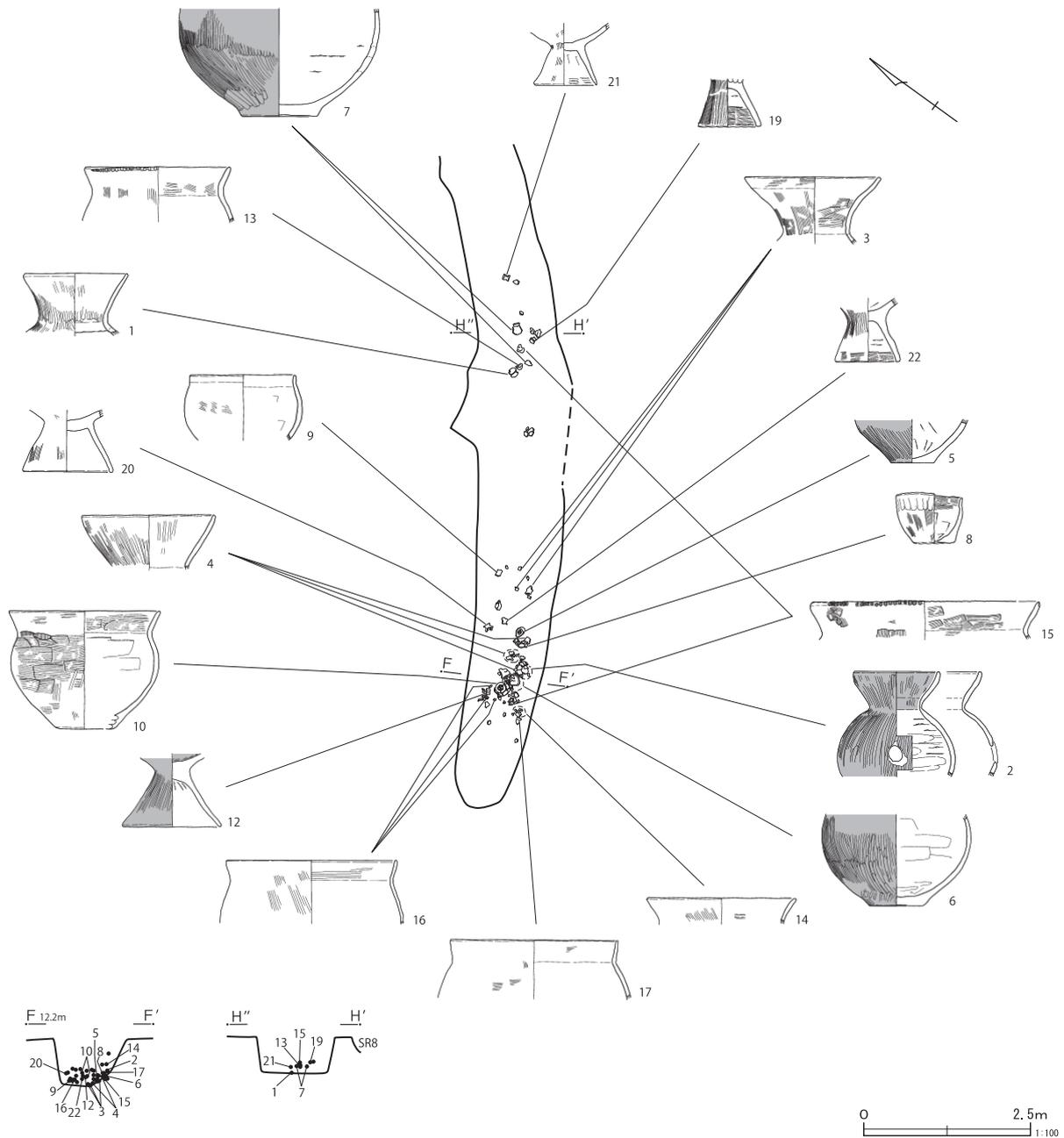
E区第13号周溝状遺構 (第201~203図)
 E・F-19・20グリッドに位置する。やや湾曲するものの、直線状の周溝が「コ」の字状に確認さ

れた。E区第4号土壇、D区第76号溝跡より新しく、D区第22号土壇、E区第2号墳、E区第6号溝跡よりは古い、その他の重複遺構との新旧関係



- SR10
- | | |
|--|---|
| 1 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 微量 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少 | 6 黒褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) ・焼土粒子・炭化物粒子少 自然堆積 |
| 2 黒褐色土 黒褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 微量 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 黄褐色土ブロック (3 ~ 5 cm) 極多 | 7 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) 多 埋戻し土 |
| 3 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・白色土粒子少 自然堆積 | 8 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 2 cm) 多 埋戻し土 |
| 4 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 1 cm) 多 埋戻し土 | 9 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 均質に少 自然堆積 |
| 5 暗褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.1 cm) ・焼土粒子少 自然堆積 | 10 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 多 埋戻し土 |
| | 11 黄灰色土 黒褐色土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 少 埋戻し土 |

第196図 E区第10号周溝状遺構



第197図 E区第10号周溝状遺構遺物出土状況

は把握できなかった。

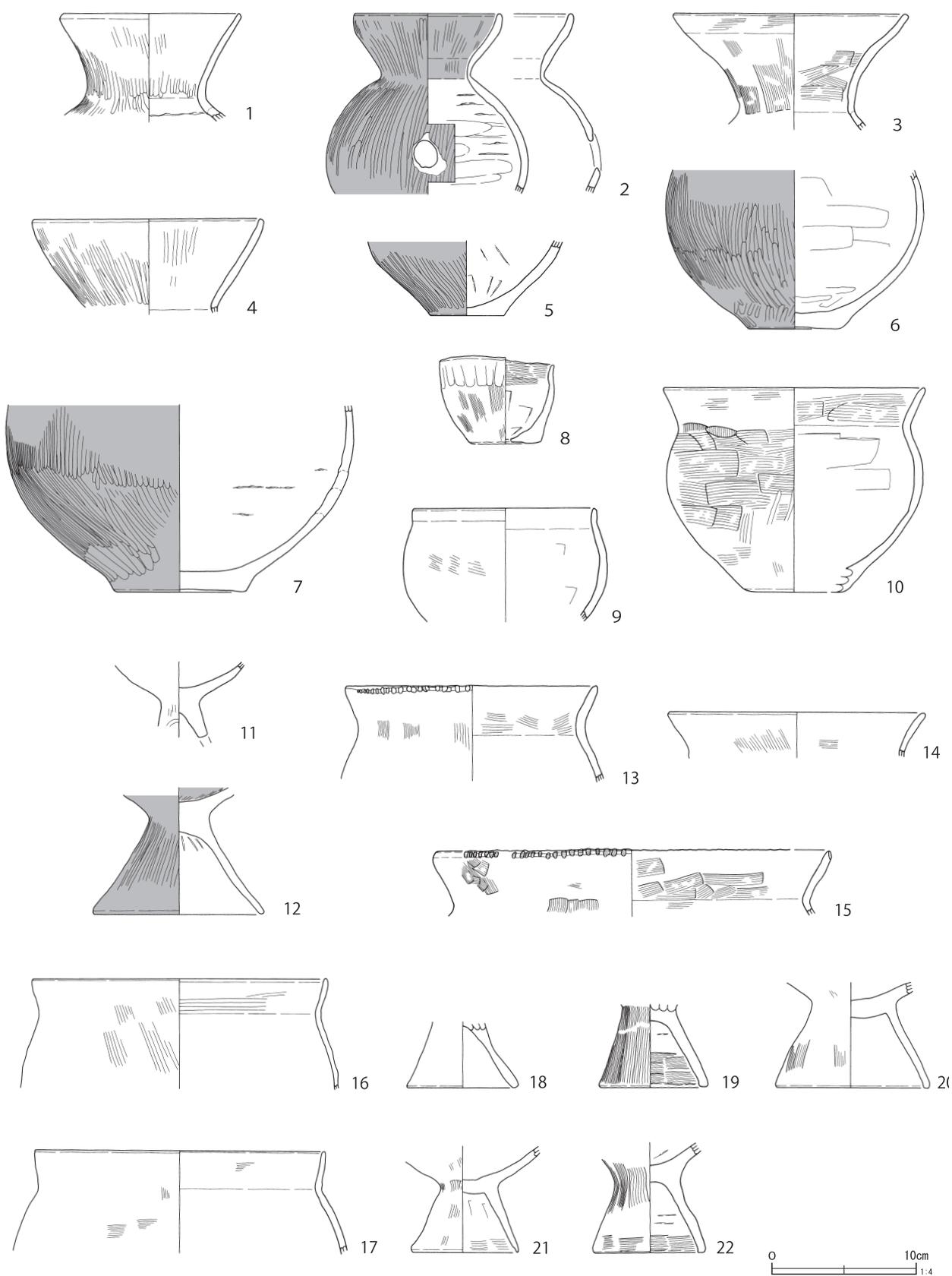
西溝はE区第2号墳によってプランが失われているが、東溝は南端部が途切れており、開口部の可能性が考えられる。検出された範囲内において、平面形は歪んだ方形と推定される。

遺構の規模は、南西部分を開口部とした場合、北東-南西方向の外法9.35m、内法8.57m、北西-南東方向の外法8.63m、内法7.53m、上場幅0.35~

1.33m、下場幅0.19~0.99m、深さ35~41cm、主軸方位はN-42°-Eとなる。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形、もしくは箱形である。

周溝内では、土層断面A-A' 設定箇所北1.6m・2.4m、D-D'の東1.3m、C-C'の設定箇所北2.2mの4箇所段差が検出された。これらの地点での比高差は、西から東に10cm、7cm、10cm、



第198图 E区第10号周沟状遗构出土遗物

第64表 E区第10号周溝状遺構出土遺物観察表

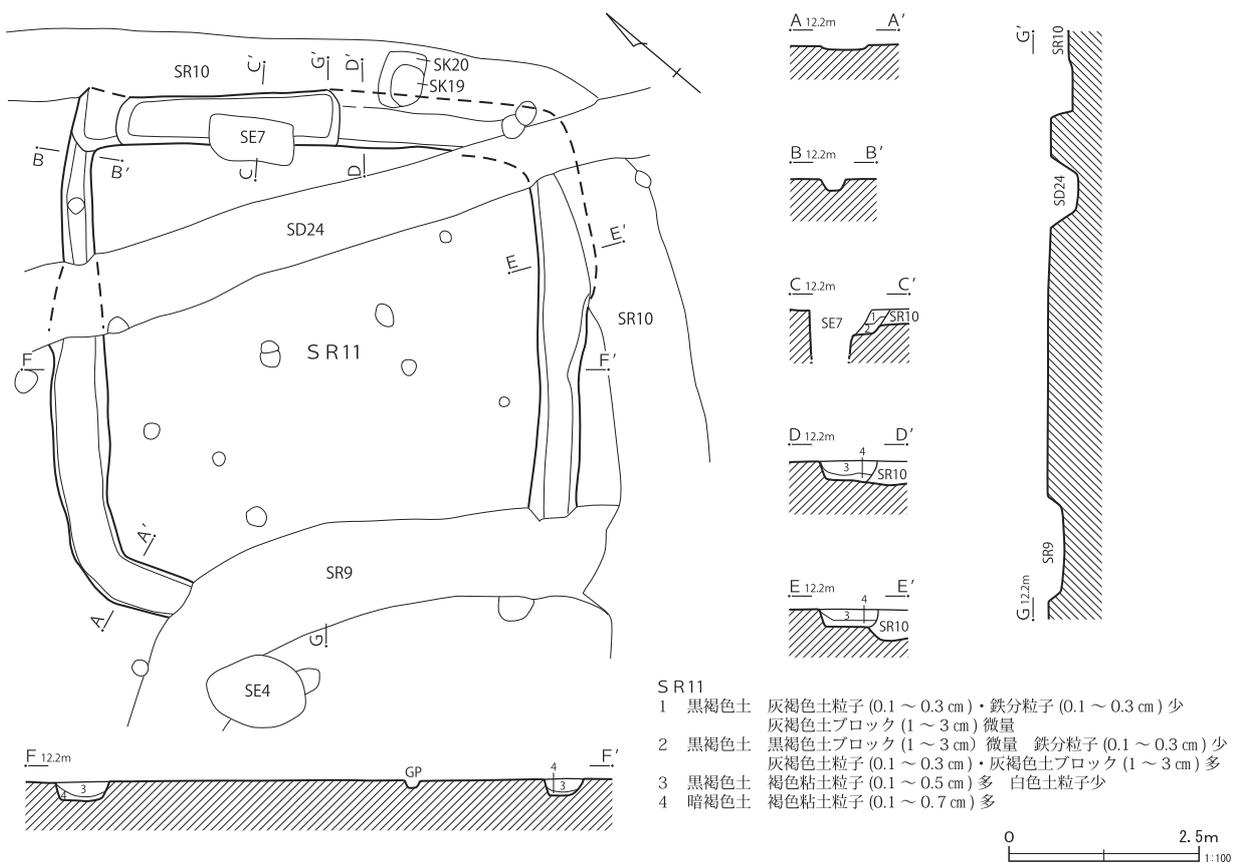
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR10	E	土師器	壺	85	12.3		[7.5]	A C D F J	普通	橙	No.47 口縁部内外面へラ磨き 器面風化している
2	SR10	E	土師器	壺	90	10.0		[12.5]	A F G	普通	にぶい 黄橙	No.25 外面・口縁部内面へラ磨き 内面へラナデとナデ 器面風化している 胴部穿孔1ヶ所(焼成後外面から) 外面・口縁部内面赤彩
3	SR10	E	土師器	壺	45	(16.0)		[8.1]	A C D F J	普通	橙	D-21G No.39・40・42 内外面ハケ
4	SR10	E		壺	90	15.8		[6.6]	A C D F J	普通	にぶい 黄橙	D-21G No.24・29・31・32 内外面へラ磨き 器面風化著しい
5	SR10	E	土師器	小型壺	85		5.0	[5.1]	A C D F	普通	橙	No.34 外面へラ磨き 内面へラナデ 底部へラ削り 外面赤彩
6	SR10	E	土師器	壺	40		6.6	[11.0]	A C F J	普通	赤褐	No.20 外面へラ磨き 内面へラナデ 遺存状況は比較的良い 胴～底部外面に黒斑あり 外面赤彩
7	SR10	E	土師器	壺	25		(9.0)	[13.0]	A C F J	普通	赤褐	No.49・53 外面へラ磨き 内面へラナデか内面風化著しい 外面赤彩
8	SR10	E	土師器	埴	65	8.1	4.8	6.0	A C F J	普通	にぶい 黄橙	No.30 口縁部外面ハケ後へラナデ 口縁部内面ハケとへラナデ 底部は穿孔と思われる 穿孔1ヶ所(内面から) 口縁～底部内外面に大黒斑あり 風化は少なく調整痕は良く残っている
9	SR10	E	土師器	埴	25	(12.4)		[7.9]	A C D F J	普通	灰黄	No.43 口縁部内外面横ナデか 外面ハケ内面へラナデ
10	SR10	E	土師器	甕	90	18.3	(6.3)	14.2	A D F J	普通	橙	No.12・13 口縁部内外面ハケ後横ナデ 外面ハケ後粗いへラ磨きとへラナデか 内面へラナデ 器面風化している 胴～底部外面に大黒斑あり 内面に何らかの付着物あり
11	SR10	E	土師器	高坏	80			[5.2]	A C D J	普通	橙	D-21G 外面へラ磨きか 器面風化著しい 内面に黒斑あり
12	SR10	E	土師器	高坏	70		11.8	[8.8]	A C D F J	普通	明黄褐	No.13・57 外面へラ磨き 底部内面へラナデ 脚部内面へラナデとナデか 外面・杯部内面赤彩
13	SR10	E	土師器	甕	15	(17.4)		[6.7]	A C D F J	普通	にぶい 褐	No.48 口縁部内外面ハケ後横ナデ 器面風化著しい
14	SR10	E	土師器	甕	15	(17.8)		[3.2]	A C D F	普通	浅黄	No.4 口縁部内外面ハケ後横ナデ 器面風化著しい
15	SR10	E	土師器	甕	15	(27.4)		[4.6]	A D F	普通	灰黄褐	No.7・50 口縁部内外面ハケ後横ナデ 器面風化している
16	SR10	E	土師器	甕	15	(20.2)		[7.6]	A C D F J	普通	にぶい 黄橙	No.17 口縁部内外面ハケ後横ナデ 外面ハケ内面へラナデか 器面風化著しい
17	SR10	E	土師器	甕	5	(20.2)		[7.2]	A C D F	普通	橙	D-21G No.3 口縁部内外面ハケ後横ナデ 外面ハケ内面へラナデか 器面風化著しい 口縁～胴部外面に大黒斑あり
18	SR10	E	土師器	台付甕	80		7.7	[4.6]	A C D F J	普通	橙	D-21G 器面風化著しい
19	SR10	E	土師器	台付甕	95		7.5	[5.7]	A C D F J	普通	橙	No.51 外面ハケ 脚部内面上位へラナデ 脚部内面中・下位ハケ 脚部内外面に黒斑あり
20	SR10	E	土師器	台付甕	70		10.7	[7.3]	A C D F J	普通	橙	No.36 外面ハケ 底部内面・脚部内面へラナデか 器面風化著しい
21	SR10	E	土師器	台付甕	70		(7.3)	[7.5]	A C D F J	普通	にぶい 橙	No.56 外面ハケ 底部内面へラナデか 脚部内面へラナデか 器面風化著しい 外面に黒斑あり
22	SR10	E	土師器	台付甕	80		7.5	[7.7]	A C F J	普通	明赤褐	No.35 外面・脚部内面下半ハケ 底部内面・脚部内面上半へラナデ

11cm程である。

これらの段差の他に、西溝内には土塊状の落ち込みが認められた。この落ち込みについては、溝内土塊の可能性が考えられる。平面形は長楕円形

で、断面形、長径×短径×確認面からの深さについては、皿状、96×41×7cm、主軸方位はN-48°-Eである。

西溝の段差付近でまとまった形で土師器が出土



第199図 E区第11号周溝状遺構

した。図化できた土師器は罎・壺・高坏・器台・台付甕など計24点（1～24）である。

E区第14号周溝状遺構（第179図）

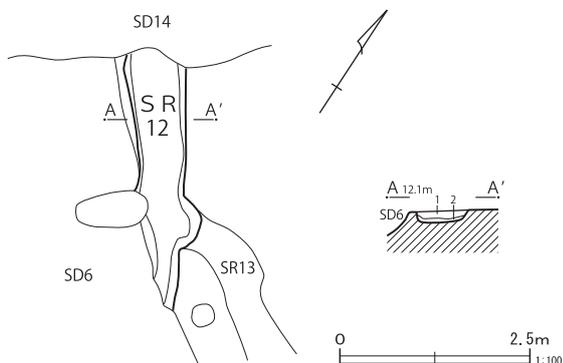
D・E-20グリッドに位置する。円弧状の周溝の一部が1条検出された。E区第2号周溝状遺構より新しく、E区第9号周溝状遺構よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係は捉えられなかった。

検出された範囲内での推定であるが、円弧状であることから、平面形は円形、もしくは楕円形である可能性が高い。

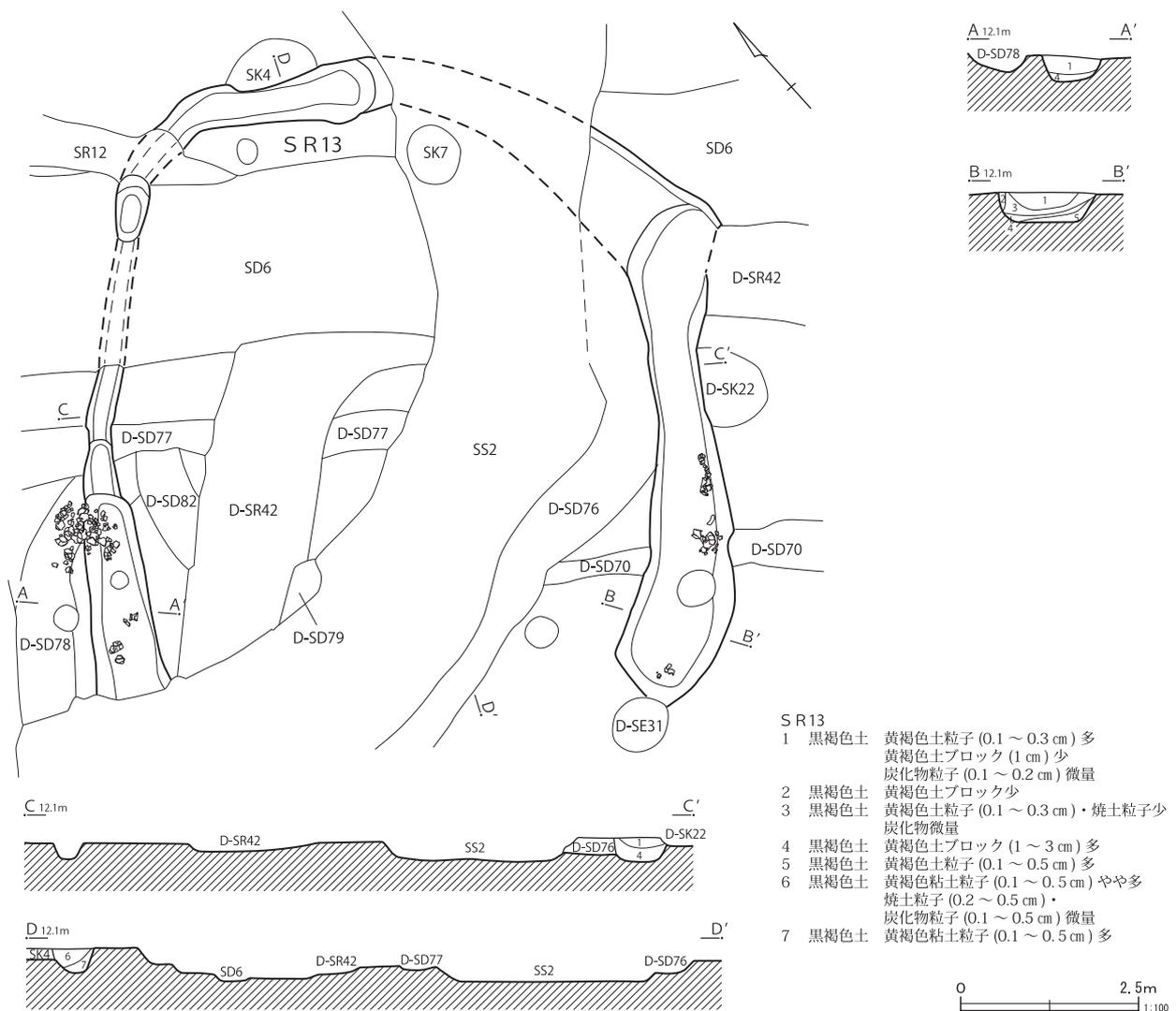
周溝の規模は、全長6.30m、上場幅0.52～0.68m、下場幅0.16～0.42m、深さ22～38cmである。

部分的検出のため、主軸方位は不明である。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形である。土層断面第2



第200図 E区第12号周溝状遺構



第201図 E区第13号周溝状遺構

層に斑状に分布する褐色粘土ブロックから埋め戻しと考えられる。

遺物は出土しなかった。

E区第15号周溝状遺構、D区第102号溝跡

(第204~206図)

E・F-20・21グリッドに位置する。やや湾曲するものの、直線状の周溝が4条確認された。

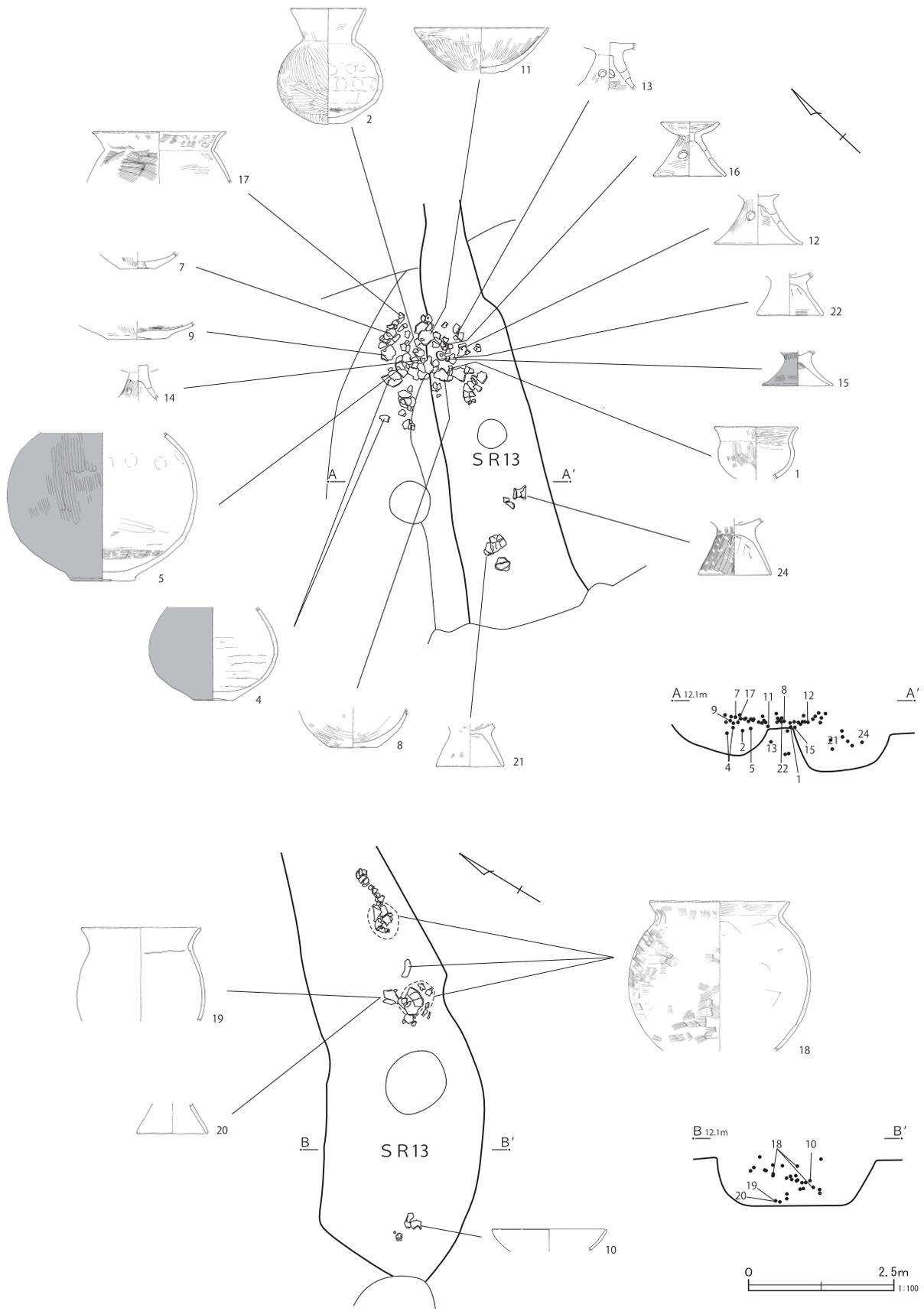
E区第8号周溝状遺構、E区第15号土壇より新しく、E区第9号周溝状遺構、E区第11号井戸跡、E区第2号掘立柱建物跡、D区第75号溝跡、E区第4・6・25号溝跡よりは古い、その他の重複遺構との新旧関係は把握できなかった。

4辺とも途切れることなく、平面形はほぼ方形で、開口部をもたないタイプの周溝状遺構である。

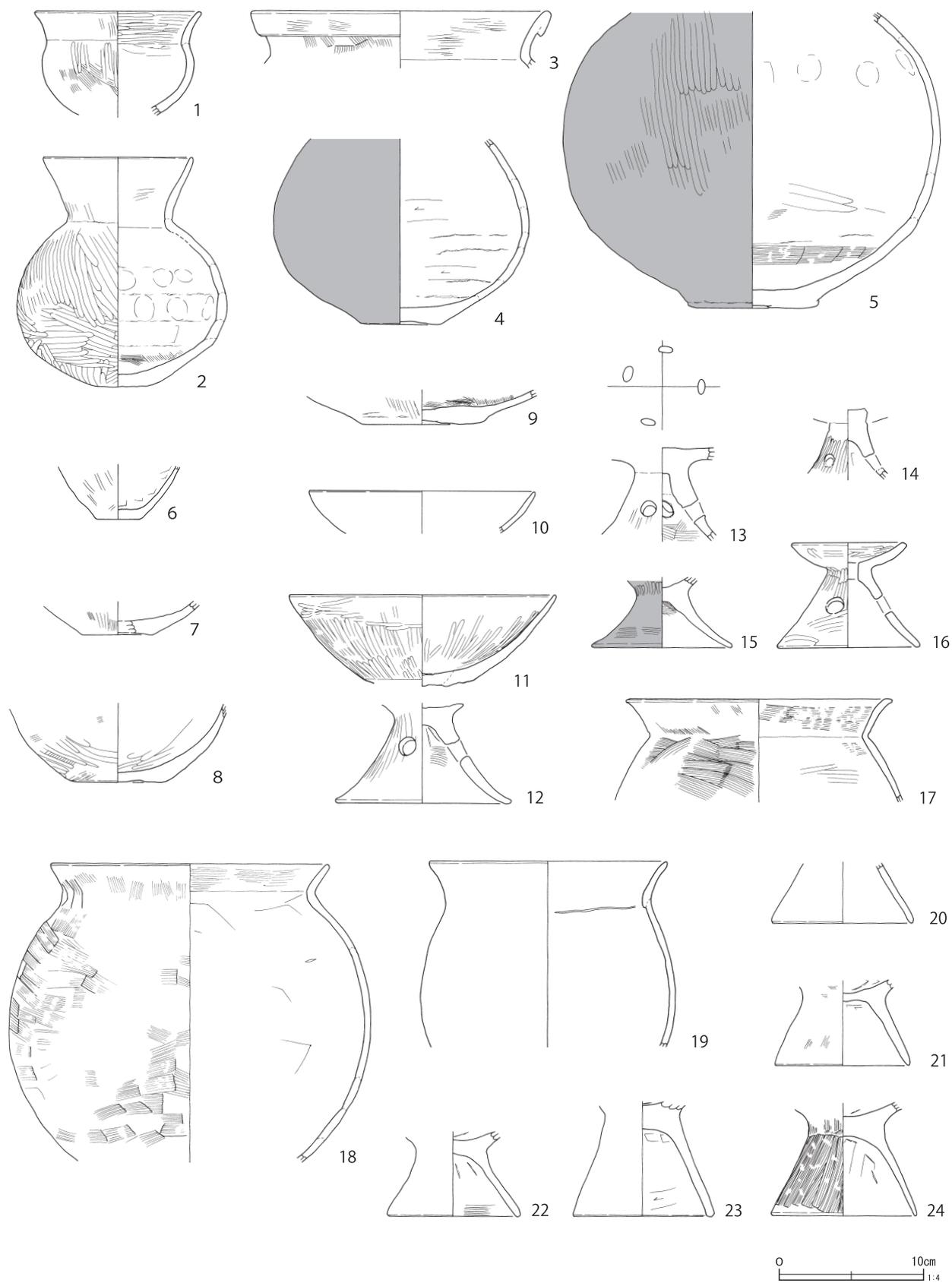
遺構の規模は、北東-南西方向の外法11.90m、内法9.92m、北西-南東方向の外法11.80m、内法8.92m、上場幅0.80~1.75m、下場幅0.55~1.15m、深さ35~80cm、長軸方向はN-45°-Eとなる。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形である。

周溝内では、土層断面B-B'設定箇所、北2.2m、E-E'の設定箇所、E-E'の設定箇所の南1.8mの計3箇所段差が検出された。これらの地点での比高差は、西から東に3cm、4cm、2cm



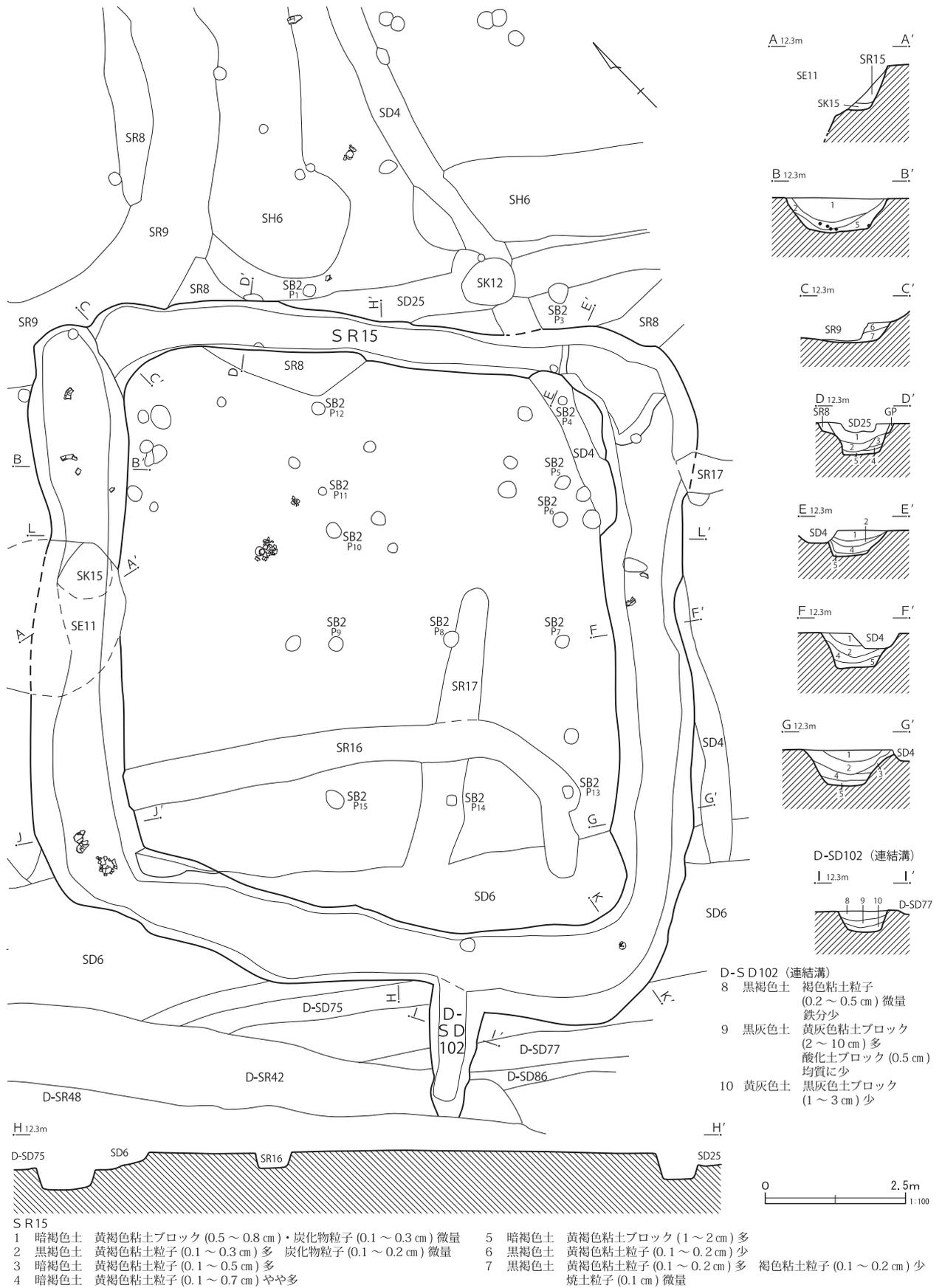
第202图 E区第13号周沟状遗构遗物出土状况



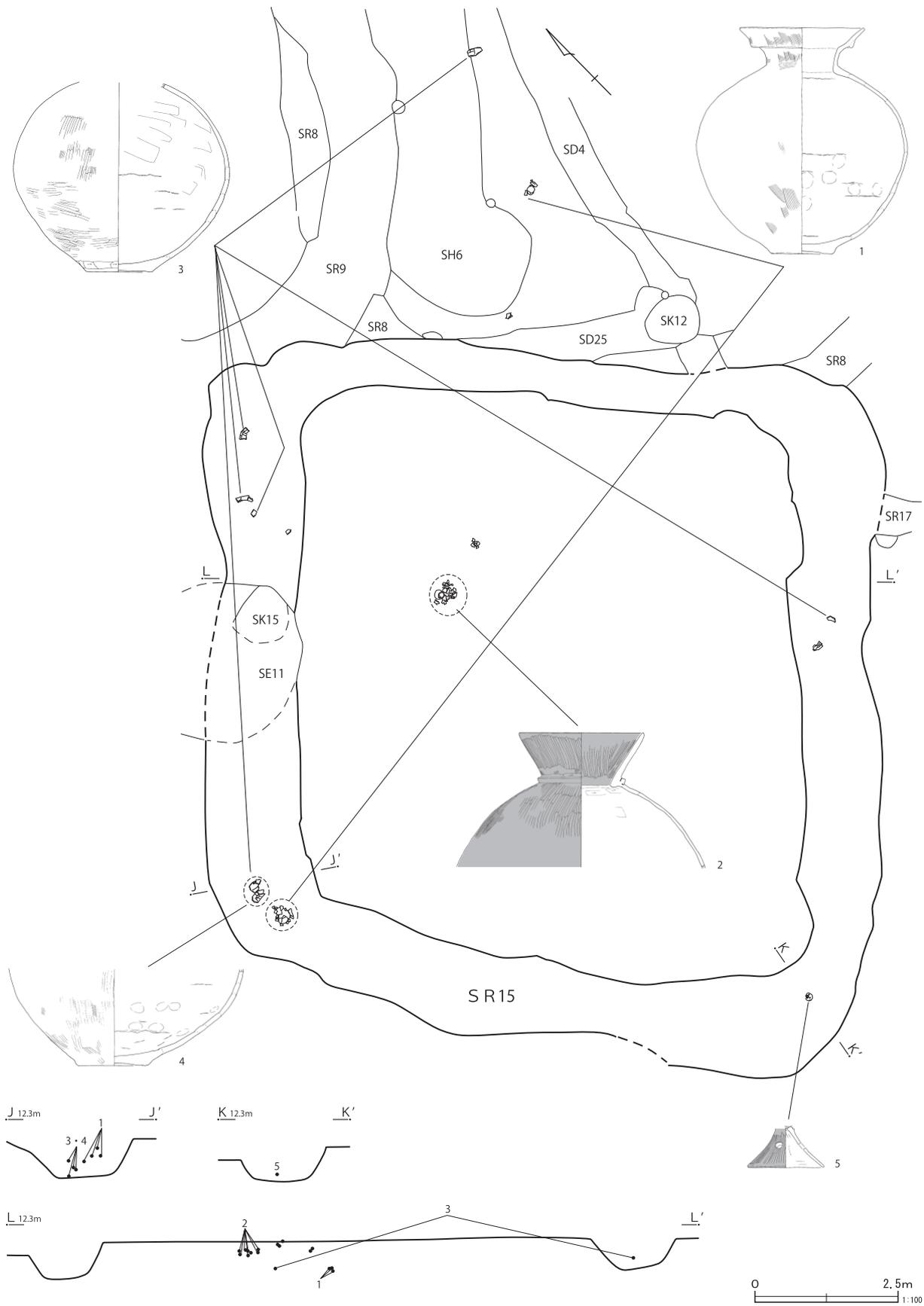
第203图 E区第13号周溝状遺構出土遺物

第65表 E区第13号周溝状遺構出土遺物観察表

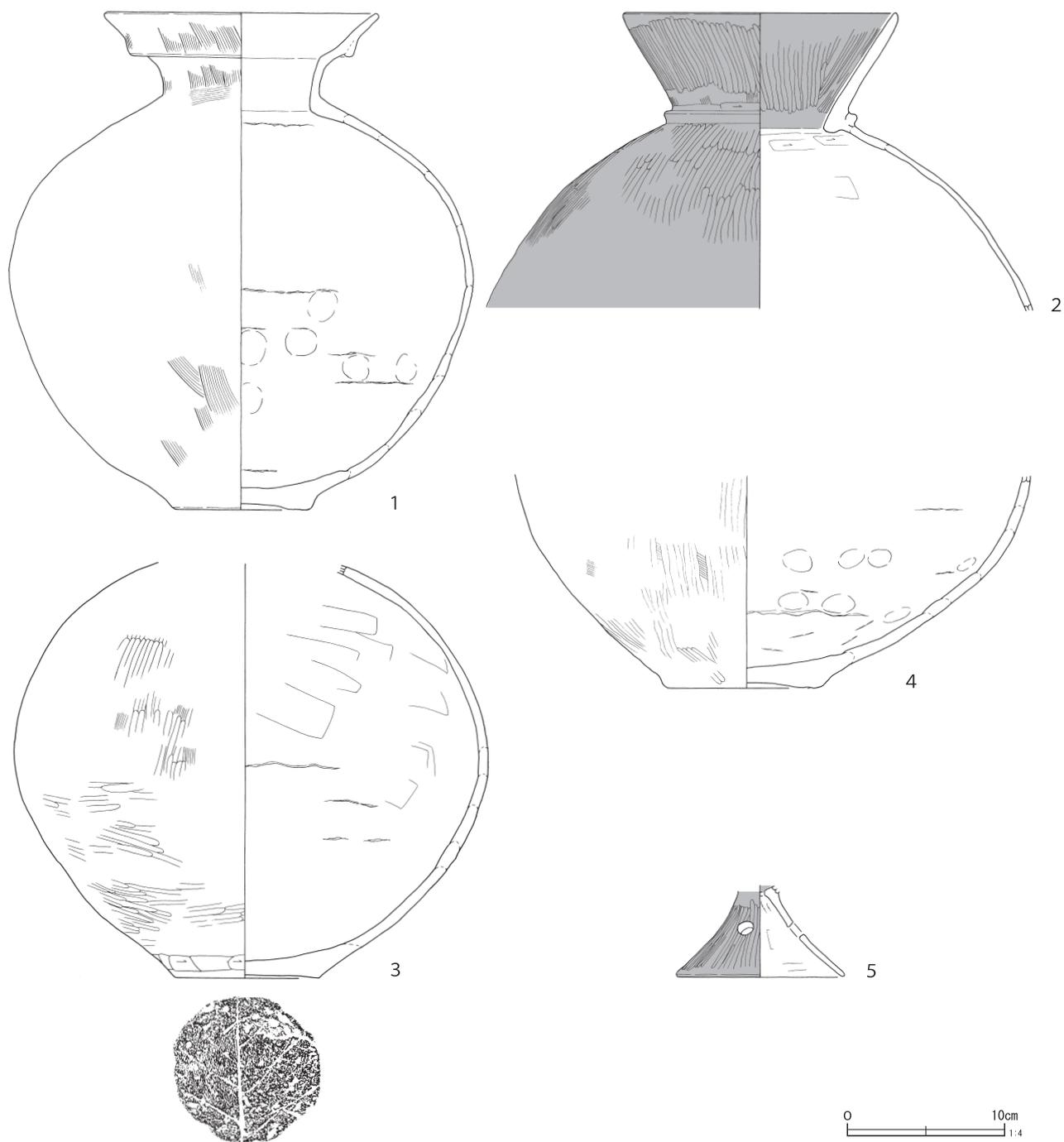
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR13	E	土師器	罎	35	(11.5)		[7.2]	C D F G	普通	橙	遺物集中区No.10 口縁部内外面横ナデ後へラ磨き 体部外面ハケ後へラ磨き 器面風化している 外面に黒斑あり
2	SR13	E	土師器	小型壺	85	(10.3)	3.4	15.9	C D F	普通	橙	遺物集中区No.32 外面へラ磨き 内面指押えとへラナデ 底部内面ハケナデ
3	SR13	E	土師器	壺	15	(20.6)		[4.0]	A C F J	普通	橙	遺物集中 口縁外面上部ハケ後横ナデ 口縁外面下位ハケ後へラ磨きか 口縁部内面ハケ後へラ磨き 器面風化著しい
4	SR13	E	土師器	壺	40		(5.4)	[12.8]	A C F I	普通	橙	遺物集中区No.2・6 内面へラナデ 外面赤彩 器面風化著しい
5	SR13	E	土師器	壺	70		(9.0)	[20.5]	C D F G	普通	赤褐	遺物集中区No.26 外面へラ磨き 内面へラナデ・ハケナデ・指頭圧痕 外面赤彩 内外面摩滅・風化著しい
6	SR13	E	土師器	小型壺	25		3.1	[3.7]	A D F	普通	黄灰	外面粗いへラ磨き 内面へラナデ 器面風化している
7	SR13	E	土師器	小型壺	45		4.9	[2.3]	A C D F	普通	橙	遺物集中区No.29 外面ハケ後へラ磨き 内面へラナデか 底部へラ削り 器面風化著しい 内面全体が黒斑
8	SR13	E	土師器	壺	60		(6.8)	[5.5]	A B C F	普通	橙	遺物集中区No.8 外面ハケ後へラ磨き 内面へラ磨き 底部へラナデ 器面は若干風化している
9	SR13	E	土師器	壺	70		8.2	[2.4]	C D F	普通	にぶい 橙	No.27 外面へラナデ後へラ磨き 内面ハケナデ 底部へラナデとナデ
10	SR13	E	土師器	高坏	10	(15.6)		[3.0]	A C D F	普通	橙	No.14 内外面へラ磨き 器面風化著しい
11	SR13	E	土師器	高坏	40	(18.4)		[6.4]	A B C F G	普通	橙	遺物集中区No.35 内外面へラ磨き 器面は若干風化している
12	SR13	E	土師器	高坏	50		(12.0)	[7.0]	A C D F	普通	橙	遺物集中区No.15 外面へラ磨き 内面ハケとへラナデか 孔数不明(残っているのは1ヶ所) 器面風化著しい
13	SR13	E	土師器	高坏	75			[6.5]	B C D F G	普通	橙	遺物集中区No.38 外面へラ磨き 脚部内面ハケナデ 穿孔4ヶ所(外からの穿孔) 器面風化著しい
14	SR13	E	土師器	高坏	50			[4.9]	A C F	普通	褐灰	遺物集中区No.25 外面へラ磨き 脚部内面へラナデか 穿孔3ヶ所(外からの穿孔) 風化少ない
15	SR13	E	土師器	高坏	80		(9.4)	[4.9]	B C D F	普通	明赤褐	遺物集中区No.20 外面赤彩 器面風化している
16	SR13	E	土師器	器台	70	7.6	(9.9)	7.2	C D F	普通	にぶい 赤褐	遺物集中区No.36 内外面へラ磨き 脚部内面へラナデか 穿孔3ヶ所
17	SR13	E	土師器	甗	55	(18.0)		[7.1]	A C F	普通	にぶい 黄橙	遺物集中区No.30 口縁上部内外面ハケ後横ナデ 胴部内面へラ磨き
18	SR13	E	土師器	甗	60	18.8		[20.8]	A C D F	普通	にぶい 褐	No.8~10 口縁部内外面ハケ後横ナデ 胴部外面ハケ 胴部内面へラナデ 器面風化著しい 被熱のため一部赤色化している
19	SR13	E	土師器	甗	15	(16.5)		[12.9]	A C D F J	普通	橙	No.13 器面風化著しい
20	SR13	E	土師器	台付甗	20		(9.4)	[4.2]	A C D F J	普通	橙	No.13 器面風化著しい 外面被熱のため一部赤色化
21	SR13	E	土師器	台付甗	85		9.3	[6.0]	A C D F J	普通	赤橙	No.4 外面ハケ 底部内面・脚部内面へラナデ器面風化著しい
22	SR13	E	土師器	台付甗	95		8.8	[5.9]	A B C D	普通	明赤褐	遺物集中区No.19 外面ハケか 底部内面へラナデか 脚部内面ハケとへラナデか 器面風化著しい
23	SR13	E	土師器	台付甗	75		(9.6)	[8.0]	A C D F	普通	にぶい 橙	遺物集中 DSD78と接合 外面へラナデとナデか 底部内面へラナデ 器面風化している 外面に黒斑あり
24	SR13	E	土師器	台付甗	75		9.9	[7.9]	A C D F	普通	橙	No.1 遺物集中 外面ハケ 底部内面・脚部内面へラナデ 被熱のためやや赤色化している



第204図 E区第15号周溝状遺構、D区第102号溝跡



第205图 E区第15号周沟状遗构遗物出土状况



第206図 E区第15号周溝状遺構出土遺物

程で落差はきわめて小さいといえる。

図化できた遺物は、土師器の壺・器台の計5点（1～5）である。2と4は同一個体の可能性が考えられる。

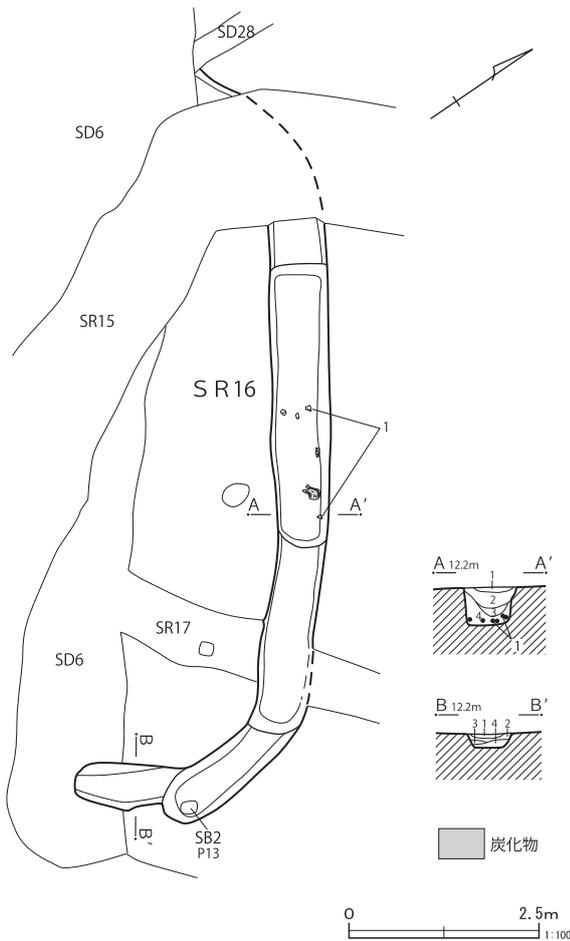
本遺構の南コーナー付近で、溝跡（D区第102号

溝跡）が検出された。この溝跡の規模や周溝状遺構との位置関係からみて、D区第42号周溝状遺構、後にD区第48号周溝状遺構と、本遺構とを結ぶ連結溝と推定した。

言い換えるならば、D区第38号周溝状遺構→D

第66表 E区第15号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR15	E	土師器	壺	40	(17.0)	8.4	31.9	A C F G	普通	にぶい 橙	E-20G No.8 外面ハケ 胴部内面中位に指頭圧痕 器面風化著しい 胴～底部外面に黒斑あり
2	SR15	E	土師器	壺	80	17.3		[19.1]	A C F J	普通	明赤褐	No.11 口縁外面ハケ後へラ磨き 口縁内面へラ磨き 胴部外面へラ磨き 器面やや風化している 外面・口縁部内面赤彩
3	SR15	E	土師器	壺	65		9.3	[26.4]	A C D F J	普通	橙	No.2・4～7・12 外面ハケ後へラ磨き 内面へラナデ 器面風化著しい 外面に黒斑あり 底部木葉痕あり
4	SR15	E	土師器	壺	75		9.3	[13.6]	A C D F J	普通	にぶい 黄	No.2 外面ハケ後へラ磨き 内面へラナデと指頭圧痕 器面風化著しい 内外面に黒斑あり
5	SR15	E	土師器	器台	80		10.5	[5.9]	A C J	普通	赤褐	No.14 外面へラ磨き 脚部内面上位絞り 脚部内面中・下位へラナデ 器面の風化は比較的少ない 穿孔3ヶ所 外面・底部内面赤彩



- SR16
 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) 少 焼土粒子 (0.1 cm) 微量
 2 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2～0.5 cm)・黄褐色粘土ブロック (1 cm) 多 埋戻し土
 3 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 cm)・黄褐色粘土ブロック (1～2 cm) 少
 4 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.5 cm) 多 黄褐色粘土ブロック (2 cm) 微量

第207図 E区第16号周溝状遺構

区第81号溝跡→D区第46号周溝状遺構またはD区第42号周溝状遺構、その後、D区第48号周溝状遺構→D区第102号溝跡→本遺構といった関連の中で、各周溝状遺構の周溝内に溜まった水を排水していた可能性が推定される。但し、流下の方向はあくまでも推測である。

E区第16号周溝状遺構 (第207・208図)

E-20、F-20・21グリッドに位置する。コーナー部分を含む周溝の一部が1条検出された。E区第6号溝跡、E区第2号掘立柱建物跡よりも古い。その他の重複する他遺構との新旧関係については捉えられなかった。

検出された範囲内のみでは、平面形が円形・楕円形であるのか方形・長方形であるのか特定できなかった。また、開口部の有無についても不明である。

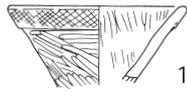
周溝の規模は、全長10.56m、上場幅0.62～0.78m、下場幅0.49～0.54m、深さ18～51cmである。

部分的検出のため、主軸方位は不明である。

なお、第2層は黄褐色粘土粒子が層状ではなく、ブロック状に混入していることから、埋め戻しによるものと推定される。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは比較的急で、断面形は逆台形である。

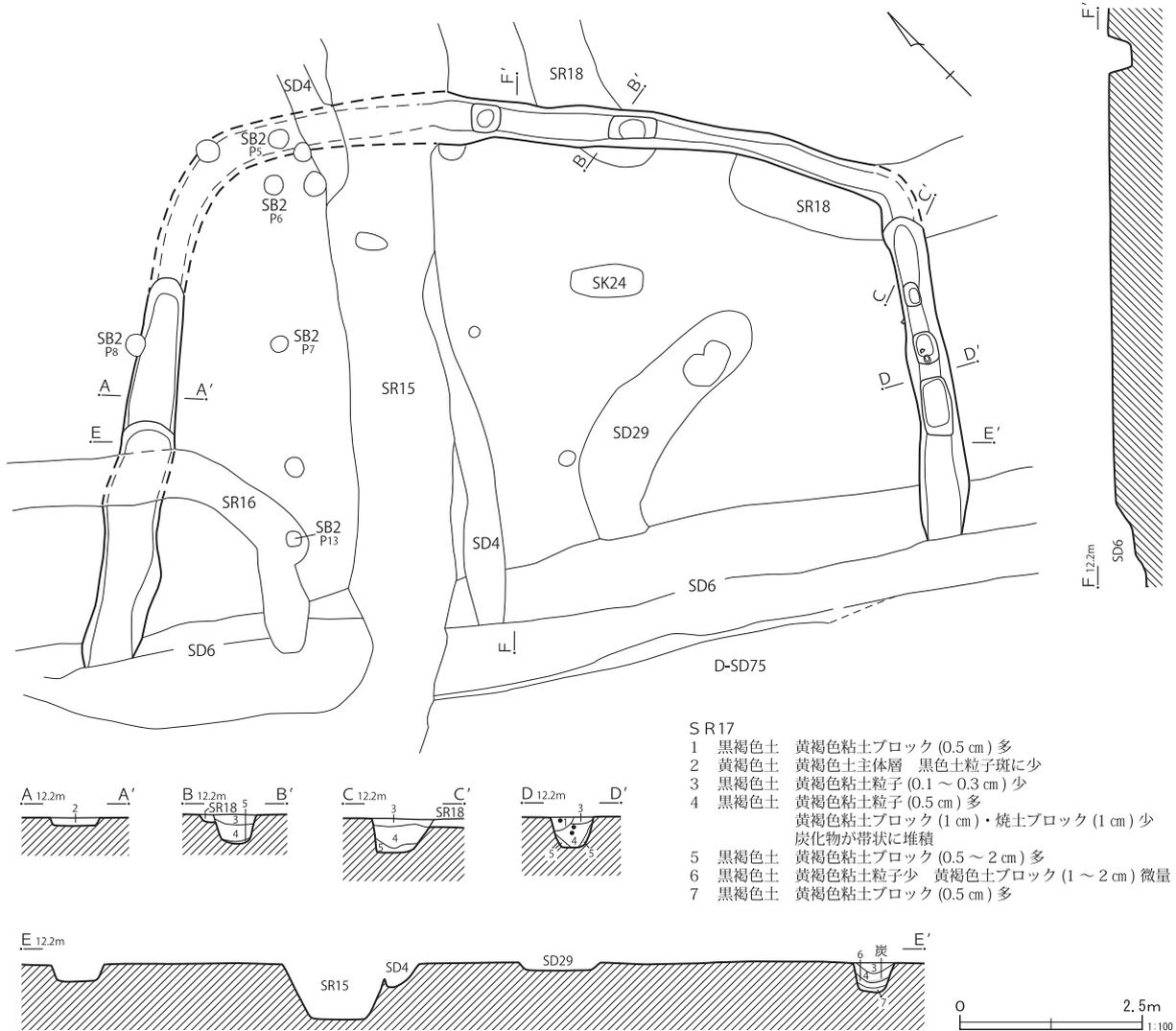
周溝内では、土層断面B-B'設定箇所の東



第208図 E区第16号周溝状遺構出土遺物

第67表 E区第16号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR16	E	土師器	小型壺	75	9.3		[4.1]	A C D F	良好	にぶい黄橙	No.1・5・6 口縁上位外面燃糸文 口縁外面中・下位・内面ヘラ磨き



第209図 E区第17号周溝状遺構



第210図 E区第17号周溝状遺構出土遺物

第68表 E区第17号周溝状遺構出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SR17	E	土師器	壺	15	(6.8)		[3.7]	A F	普通	橙	口縁部内外面横ナデか 肩部外面に鋸歯文あり 肩部外面へう磨きか 肩部内面へうナデ 器面風化著しい
2	SR17	E	土師器	壺	45		5.4	[4.5]	A C J	普通	灰白	外面へう磨き 内面へうナデ

1.2mと、2.7mの地点では段差が検出された。これらの地点での周溝底面との比高差は、西から東に5cm、13cmである。この他に、周溝中央では土壇状の落ち込みが検出された。この落ち込みについては、溝内土壇の可能性が考えられる。平面形は長方形で、断面形は箱形、長径×短径×確認面からの深さについては、378×75×51cmである。

図化できた遺物は、土師器小型壺1点(1)である。

E区第17号周溝状遺構 (第209・210図)

F-20~22、G-21グリッドに位置する。やや湾曲するものの、直線状の周溝が「コ」の字状に確認された。E区第18号周溝状遺構より新しく、E区第6号溝跡、E区第2号掘立柱建物跡よりは古い。その他の重複遺構との新旧関係については把握できなかった。

南西側は、本遺構より深度が深いためプランが失われているのか、あるいは開口部であるのか特定できなかった。平面形は歪んだ方形、または長方形と推定される。

遺構の規模は、北西-南東方向の外法11.80m、内法10.50mであるが、北東-南西方向では外法6.11m、内法5.69mまでの確認にとどまる。周溝の規模は、上場幅0.35~0.83m、下場幅0.11~0.56m、深さ10~47cmである。南西が開口部であった場合、主軸方位はN-46°-Eとなる。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは急で、断面形は浅い部分では皿状であるが、深い部分では逆台形、もしくは箱形である。

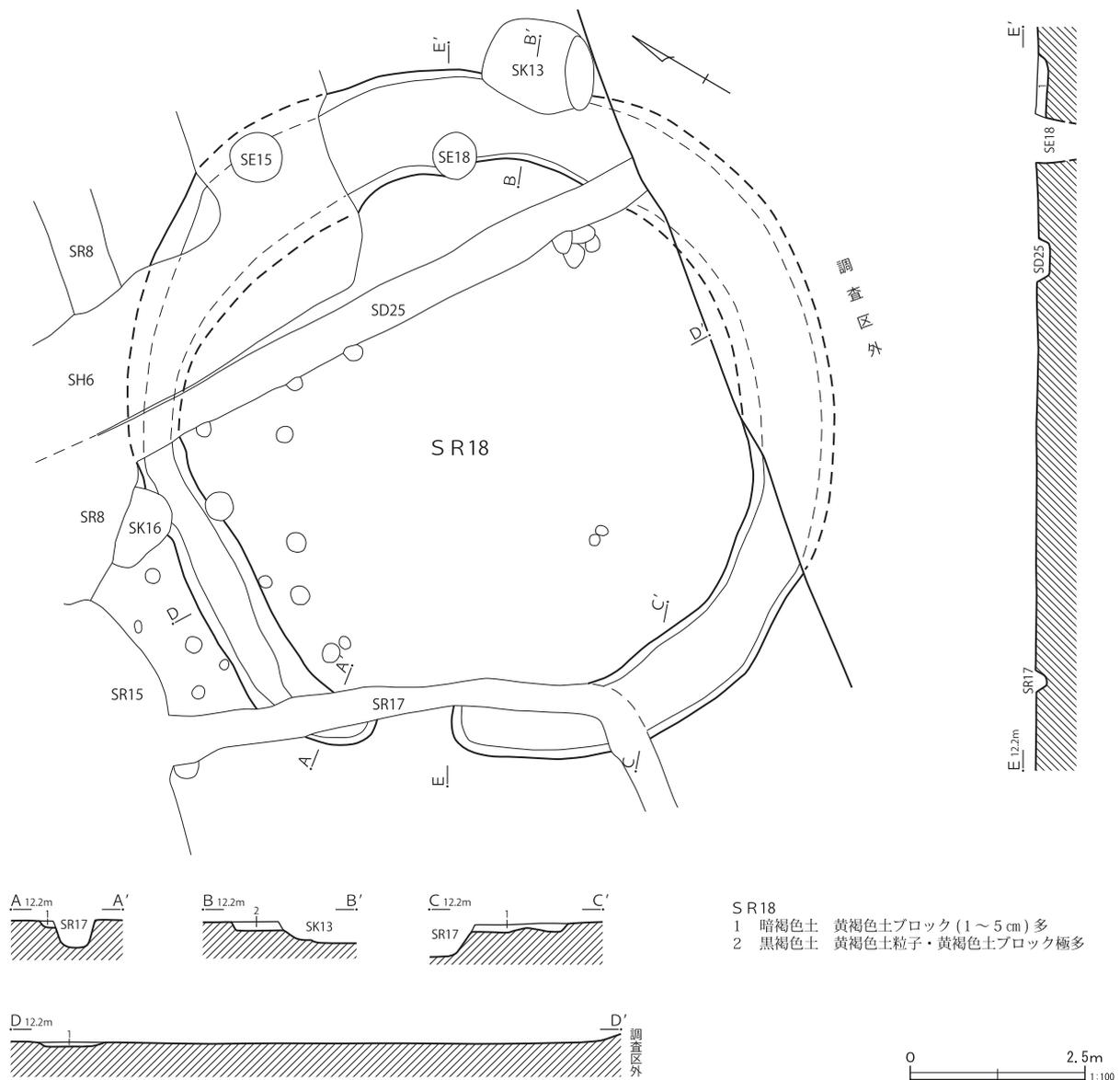
周溝内では、土層断面A-A'設定箇所南0.38m、D-D'の北2.24mの地点に段が検出された。これらの地点での比高差は、前者が9cm、後者は26cm程である。

これらの段差の他に、北溝内には2箇所、東溝では3箇所の土壇状の落ち込みが認められた。この落ち込みについては、溝内土壇の可能性が考えられる。北溝北側のものから、時計回りで平面形・断面形・長径×短径×確認面からの深さ、および周溝底面との比高差と主軸方位について述べていく。方形・箱形、40×38×70cm、28cm、長方形・箱形、65×29×41cm、20cm、主軸方位N-44°-W、長楕円形・箱形、33×22×57cm、9cm、主軸方位N-31°-E、長楕円形・箱形、43×32×62cm、23cm、主軸方位N-31°-E、長方形・箱形、81×40×61cm、23cm、主軸方位N-31°-E。

図化できた土師器は2点(1・2)である。

E区第18号周溝状遺構 (第211図)

E・F-21・22グリッドに位置する。E区第16号土壇より新しく、E区第17号周溝状遺構、E区第6号方形周溝墓、E区第13号土壇、E区第18号井戸跡よりは古い。その他の重複遺構との新旧関係は把握できなかった。



第211図 E区第18号周溝状遺構

東側は調査区外に続く。北側はE区第6号方形周溝墓によってプランが失われている。南西部では周溝が1.10mにわたって途切れており、開口部の可能性が考えられる。検出された範囲内において、平面形は円形と推定される。

遺構の規模は、南西部分を開口部とした場合、北東-南西方向の外法9.85m、内法 (7.75) m、北

西-南東方向の外法 (10.16) m、内法 (7.90) m、上場幅0.66~1.60m、下場幅0.41~1.22m、深さ7~15cm、主軸方位はN-63°-Eとなる。

周溝底面は平坦である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状である。

遺物は出土しなかった。

(3) 方形周溝墓

検出された方形周溝墓は7基であり、いずれもE区で確認されている（そのため、遺構名の前に区名を冠さないこととする）。しかも、E区東端部に重複することなく集中している。分布状況からみて、方形周溝墓群はさらに北・東・南へと展開していると推定される。各方形周溝墓の時期は、古墳時代前期であると考えられる。

第1号方形周溝墓（第213・214図）

A-25、B-24・25グリッドに位置する。E区第1号溝跡、E区第1号柵列跡より古いが、その他の重複遺構との新旧関係は捉えられなかった。

北西-南東溝と、北東-南西溝の2辺の一部とコーナー1箇所のみを検出であり、他の部分は調査区外に位置する。

南西に隣接する第3号方形周溝墓との距離は0.95m、西隣の第2号方形周溝墓では1.35mである。

確認範囲内では、方台部内の遺構確認面や土層断面に、方台部の盛土や埋葬施設は検出されなかった。覆土の堆積状況から、自然堆積と推定される。

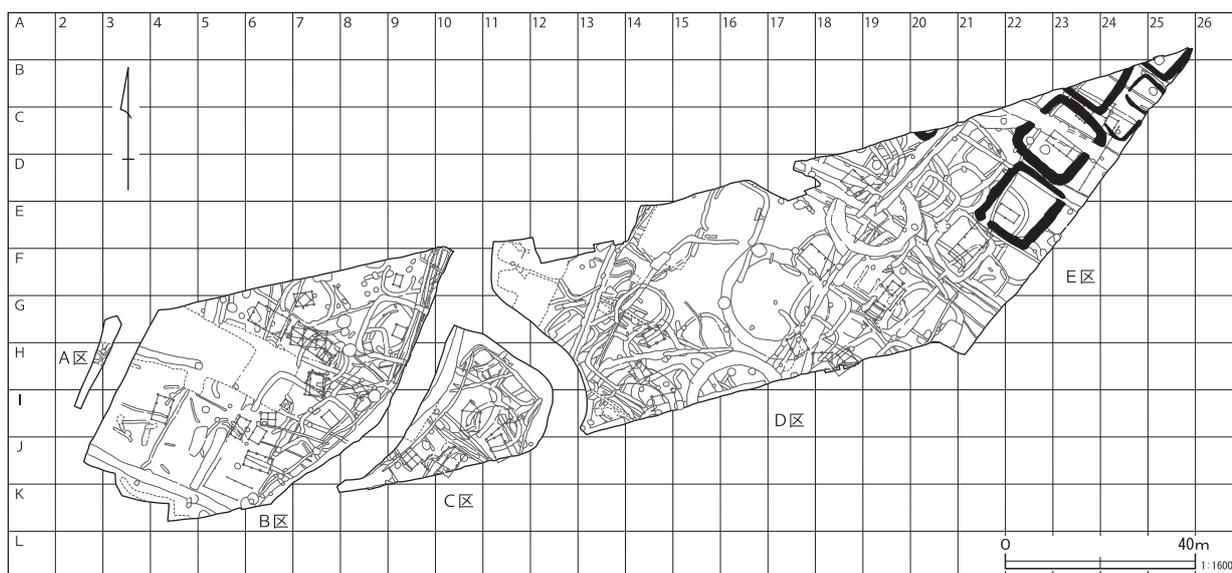
第3層は暗褐色の「ノロ」状の覆土であるが、

埋没初期に堆積したものと考えられる。3の底部穿孔された小型壺は、この層中からの出土である。

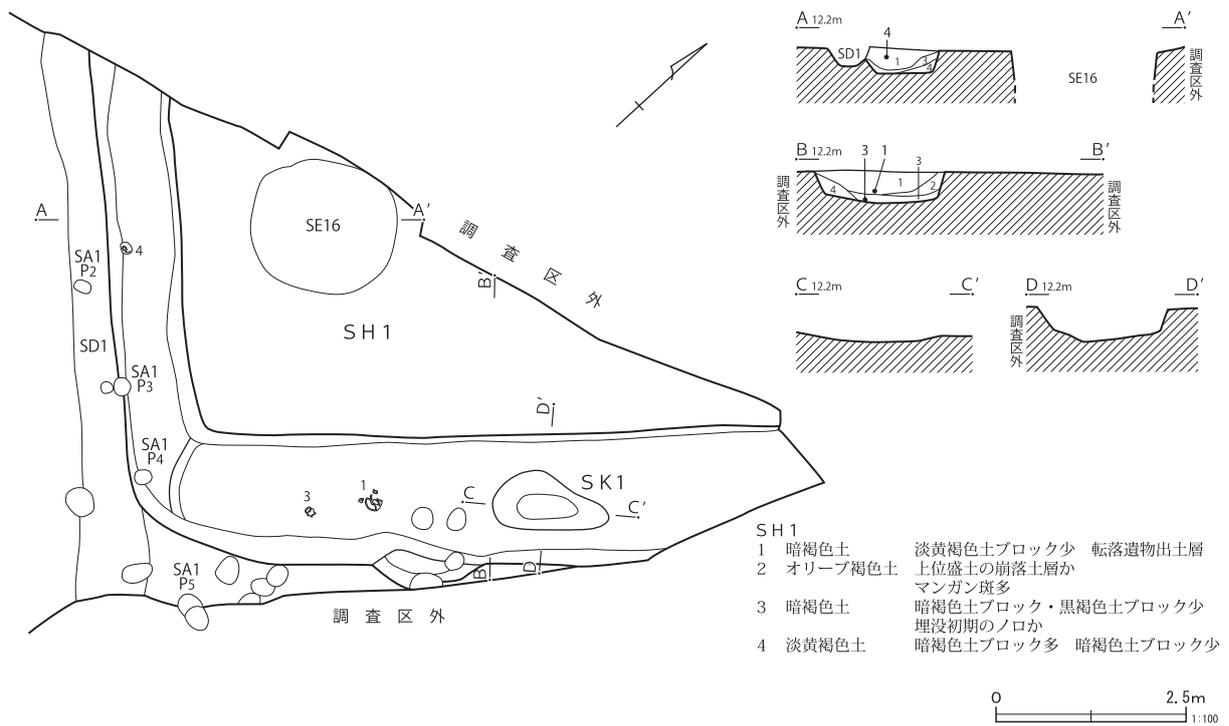
第2層はオリーブ褐色土で、他の土層とは異なるものであった。本遺構の周溝は、堆積状況から自然堆積と考えられる。つまり、周囲の土が流れ込んでいることになるが、近在する他の6基の方形周溝墓の覆土中にはみられなかった覆土である。

ひとつの可能性として、周囲といっても周溝墓の外部ではなく、内部=方台部側からの流れ込みの可能性が考えられる。別表現をするならば、方台部の盛土が崩落した土層であるとの可能性が考えられる。

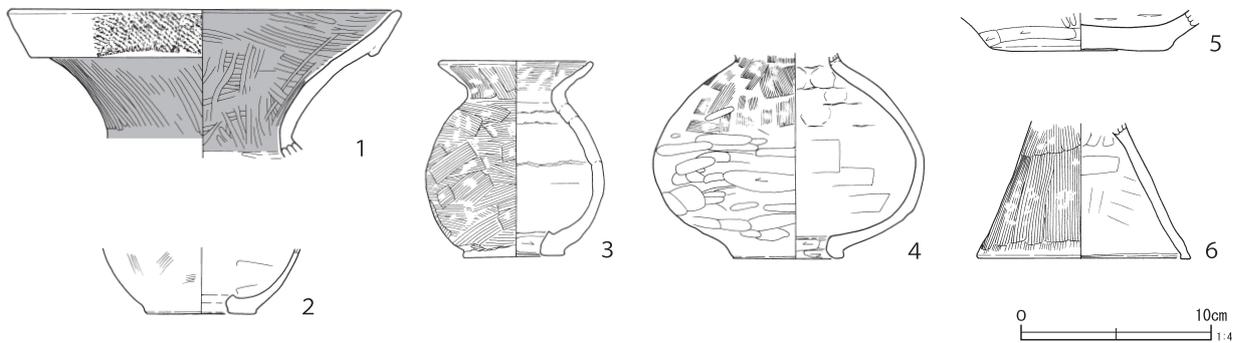
本遺構は、周溝も方台部もともに直線的である。検出できた範囲での周溝の長さとは、西溝5.40m、N-53°-W、南溝8.85m、N-42°-Eである。西溝は上場幅0.85~0.90m、下場幅0.53~0.74m、深さ30cm。南溝は上場幅1.52~1.70m、下場幅1.18~1.45m、深さ34~42cm。ともに底面は比較的平坦で、壁面の立ち上りは急であり、断面形は逆台形である。周溝の立ち上がりは、外周側よりも方台部側の方が急である。



第212図 方形周溝墓分布図



第213図 第1号方形周溝墓



第214図 第1号方形周溝墓出土遺物

コーナー部分には、南から北へ下る比高差6cm程の段が、南溝南壁には、深さ31cm程の半土壇状の落ち込みが検出された。後者の周溝底面との比高差は8cmほどである。これらの他に、南溝の中程でも落ち込みが確認された。これについては、溝内土壇の可能性がある。長径×短径×確認面からの深さ、周溝底面との比高差・長軸方向は、152×78×47cm、9cm・N-48°-Eである。

図化できた遺物は、土師器の壺・甌・台付甕な

ど計6点(1~6)である。なお、3の底部穿孔土器は、焼成前穿孔である。

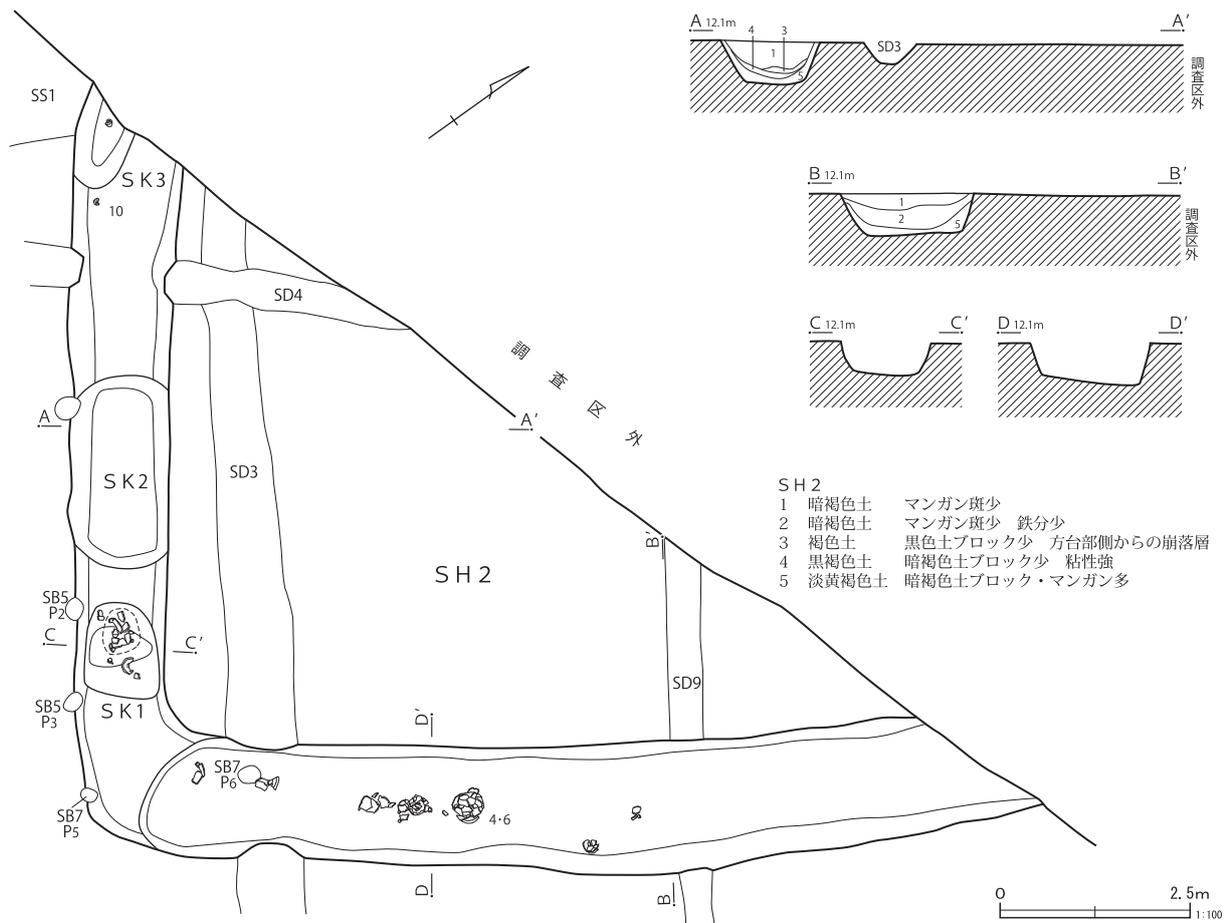
第2号方形周溝墓(第215~217図)

B・C-23・24グリッドに位置する。E区第3号溝跡より新しく、E区第1号墳、E区第5・7号掘立柱建物跡、E区第4・9号溝跡よりは古いが、その他の重複遺構との新旧関係は捉えられなかった。

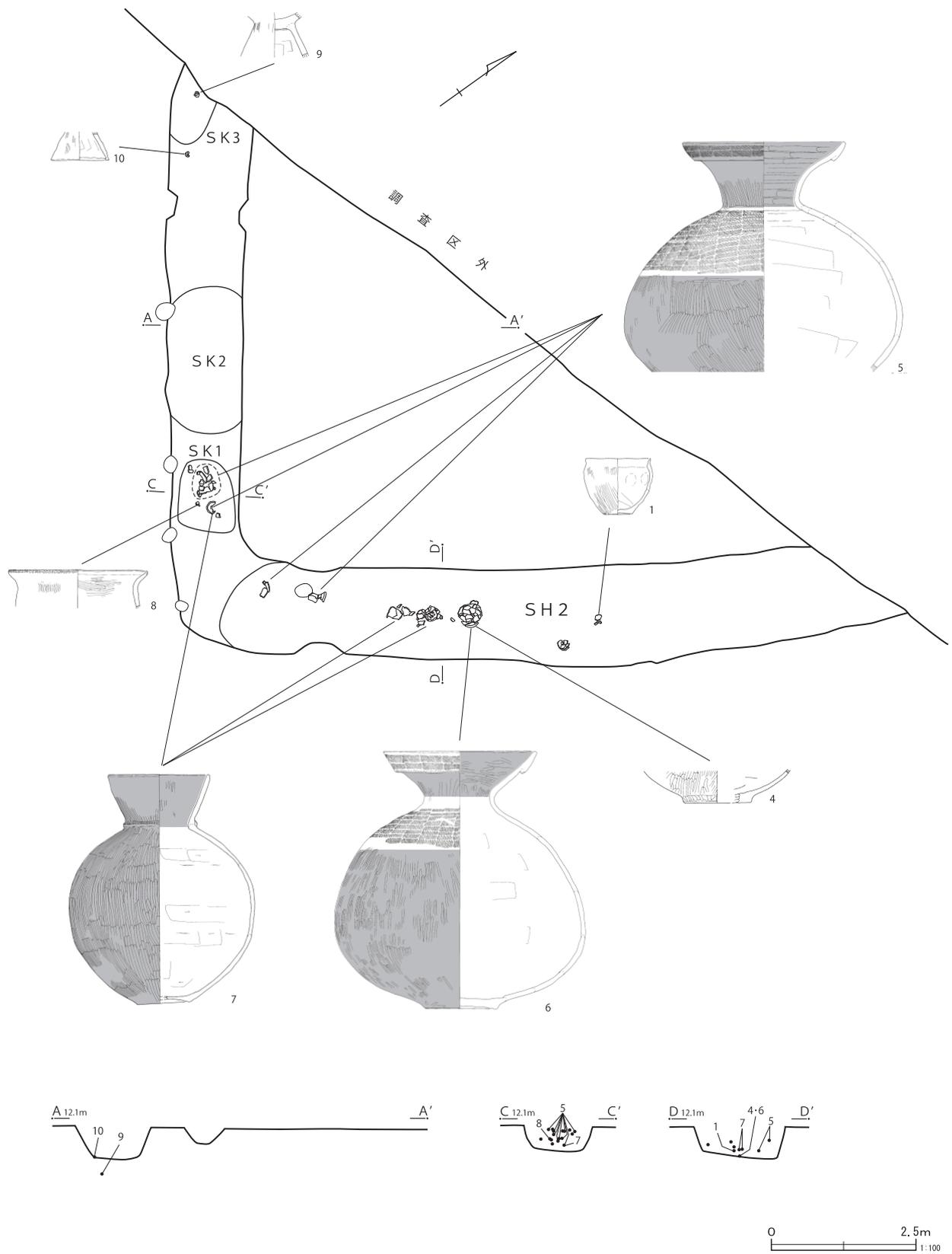
北西-南東溝と、北東-南西溝の2辺の一部と

第69表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表

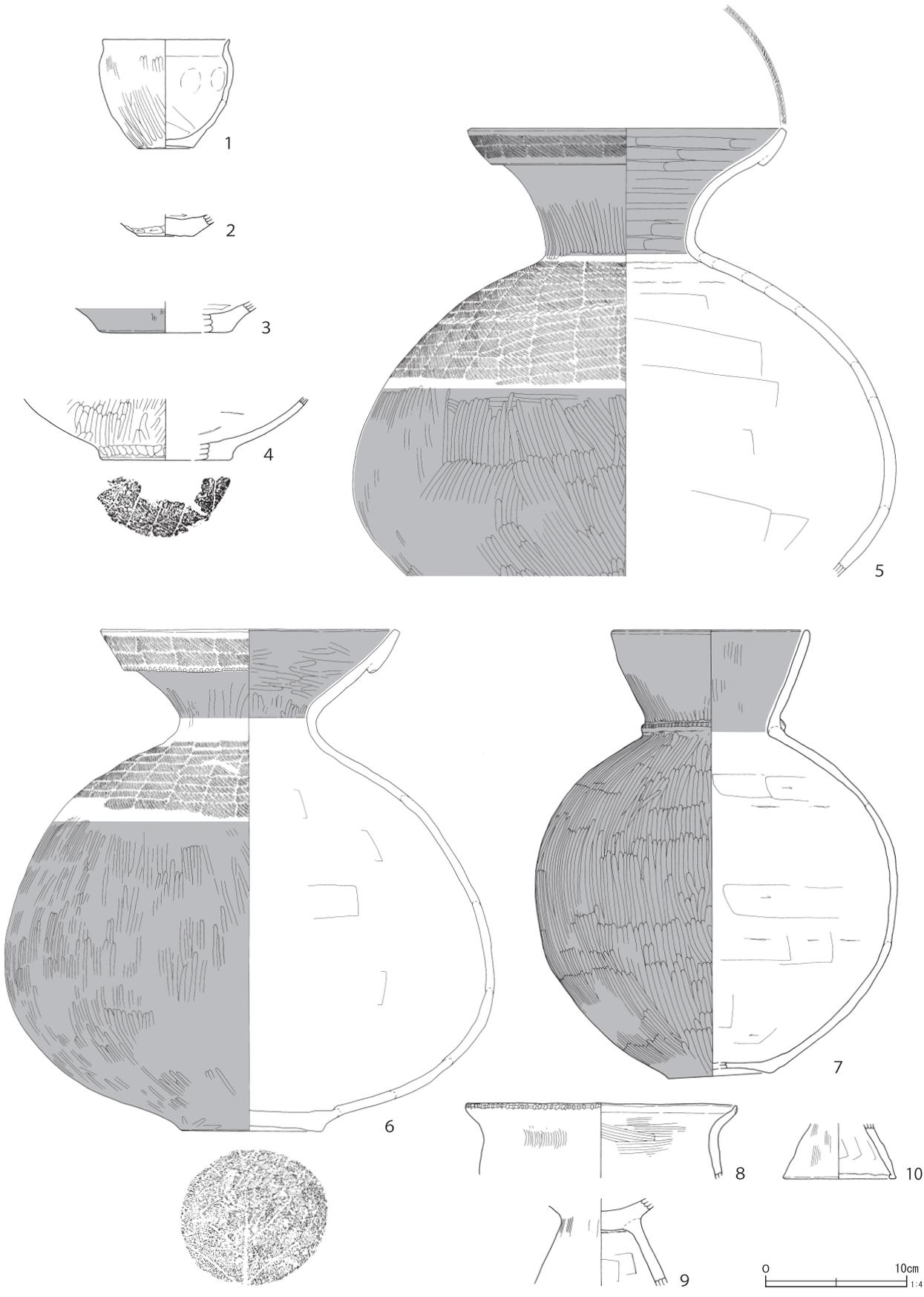
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SH1	E	土師器	壺	75	20.4		[5.6]	A F J	普通	赤褐	No.1 口縁部外面無節Rの縄文 口縁部外面下半・内面へら磨き 口縁部外面下半・内面赤彩
2	SH1	E	土師器	甌	55		(5.2)	[3.6]	A F	普通	橙	外面ハケ 内面へらナデ 器面風化している 外面に黒斑あり
3	SH1	E	土師器	壺	95	7.8	5.2	10.3	A D F	普通	にぶい黄橙	ESH1東溝 No.23 口縁部内外面ハケ後横ナデ 胴部外面ハケ 胴部内面へらナデとナデ 底部焼成前に穿孔し、下面から穿孔し その後横方向のへらナデ 端部を整えている 口縁~胴部外面に大黒斑あり 器面の遺存状況は良好である
4	SH1	E	土師器	壺	95		5.8	[10.9]	A F	普通	橙	No.2 外面ハケ後粗いへら磨き 内面上位指頭圧痕 内面中・下位へらナデ 焼成前穿孔 外面に大黒斑 ハケ目は極細かなもの
5	SH1	E	土師器	壺	45		(9.0)	[2.0]	A D F	普通	橙	東溝 外面へら磨きとへら削り 内面・底部へらナデ
6	SH1	E	土師器	台付甕	95		11.0	[5.5]	A C D F J	普通	橙	No.3 外面ハケ 内面へらナデ 遺存状況は比較的良好である



第215図 第2号方形周溝墓



第216图 第2号方形周沟墓遗物出土状况



第217图 第2号方形周沟墓出土遗物

第70表 第2号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SH2	E	土師器	小型壺	40	(8.9)	3.8	7.7	A C F	普通	橙	No.27 口縁部内外面横ナデ 胴部外面へラ磨き 胴部内面指頭圧痕 器面風化している 口縁～底部内外面に黒斑あり 赤彩か
2	SH2	E	土師器	壺	85		(3.9)	[1.5]	A D F J	普通	にぶい橙	東溝 外面・底部へラ削り 内面へラナデ
3	SH2	E	土師器	壺	25		(9.4)	[2.2]	A C F G	普通	にぶい橙	東溝 外面ハケ後へラ磨きか 内面へラナデ 外面赤彩
4	SH2	E	土師器	壺	15		(9.0)	[4.3]	A F G	普通	にぶい橙	東溝 No.25 外面へラ磨き 内面へラナデ 底部木葉痕あり
5	SH2	E	土師器	壺	60	22.0		[32.0]	A C F G	普通	にぶい橙	東溝 南溝 No.1・3～6・8・10・11・13・19・20 口縁部外面原体R横回転左→右・上→下 肩部外面原体R横回転左→右・上→下 縄文施文後結節回転施文 胴部外面へラ磨き 胴部内面へラナデ 口縁部内外面・胴部下位外面赤彩
6	SH2	E	土師器	壺	90	20.6	9.8	35.9	A C F G	普通	にぶい黄橙	No.25 口縁部外面原体R横回転左→右・上→下 肩部外面原体R横回転左→右・上→下 口唇上にも縄文施文あるが風化著しい 口縁部外面下位・胴部中下位・口縁部内面赤彩 底部木葉痕あり
7	SH2	E	土師器	壺	90	13.9	7.4	31.9	A B C D F G	普通	橙	東溝 No.16・21・22 外面へラ磨き 内面へラナデとナデ 胴部外面に黒斑あり 外面・口縁部内面赤彩
8	SH2	E	土師器	甕	5	(19.2)		[5.3]	A F J	普通	黒褐	No.15 口縁部内外面ハケ後横ナデ 内外面に黒斑あり
9	SH2	E	土師器	台付甕	75			[6.2]	A C F G	普通	にぶい橙	No.1 脚部内面へラナデか 脚部内外面へラナデ
10	SH2	E	土師器	台付甕	95		7.9	[3.9]	A C D F	普通	明黄褐	No.2 外面ハケ 内面へラナデ 器面風化著しい 外面黒斑あり 外面被熱により一部赤色化している

コーナー1箇所のみ検出であり、他の部分は調査区外に位置する。

隣接する周溝墓との距離は、北東の第1号方形周溝墓とは1.35m、南東の第3号方形周溝墓とは1.02m、第4号方形周溝墓とは2.15m、南西の第5号方形周溝墓とは0.42mである。

確認範囲内では、方台部内の遺構確認面や土層断面に、方台部の盛土や埋葬施設は検出されなかった。覆土の堆積状況から、自然堆積と推定される。

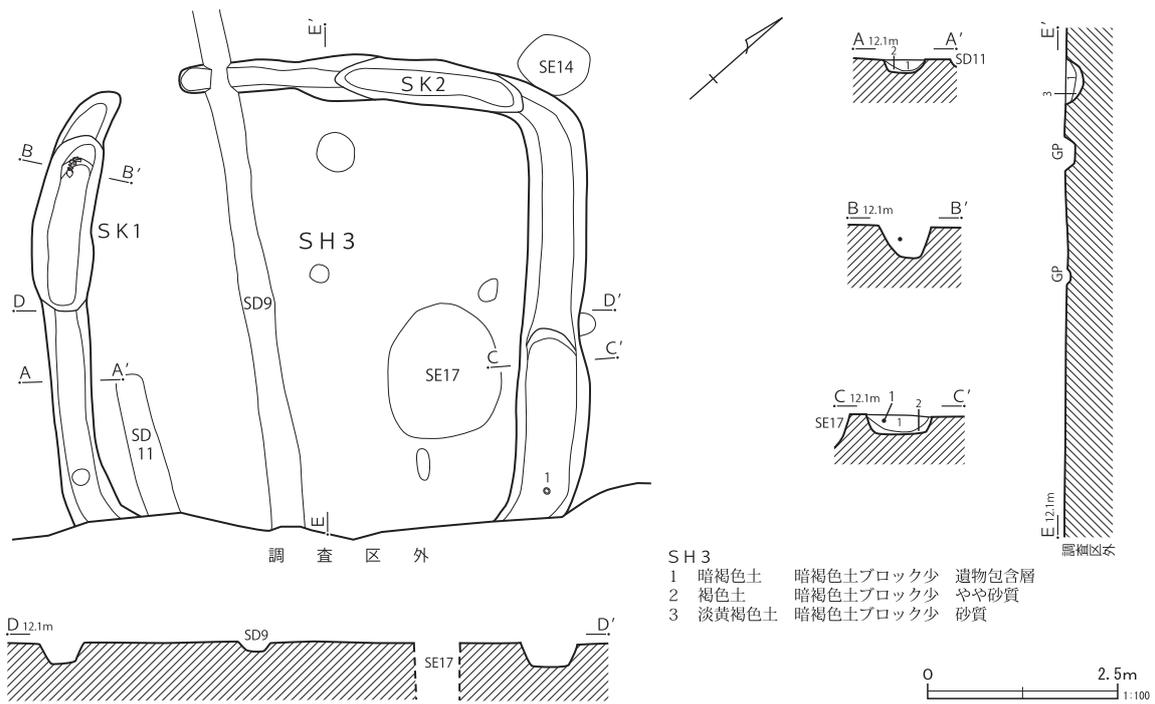
西溝は周溝も方台部もともに直線的であるが、南溝については、溝も方台部もともに僅かではあるが湾曲している。

検出できた範囲での周溝の長さ方位は、西溝8.80m、N-54°-W、南溝12.21m、N-34°-Eである。西溝は上場幅1.22～1.39m、下場幅0.90～

1.05m、深さ54cm。南溝は上場幅1.52～1.78m、下場幅1.18～1.26m、深さ42～56cm。ともに底面は比較的平坦で、壁面の立ち上りは急であり、断面形は逆台形である。全体的に周溝の立ち上がりは、外周側よりも方台部側の方が急である。

コーナー部分には、南から北へ下る比高差16cm程の段が検出された。この他に、西溝では土壌状の落ち込みが3箇所確認されたが、これらについては溝内土壌の可能性はある。長径×短径×確認面からの深さ、周溝底面との比高差・長軸方向は、西から東へ各々 [98] × 75 × 43cm、7 cm・N-35°-W、256 × 128 × 52cm、7 cm・N-53°-W、125 × 96 × 34cm、9 cm・N-53°-Wである。

凶化できた遺物は、土師器の壺・台付甕など計10点(1～10)である。6は、方台部から周溝へ崩落し、転倒した状態で出土した。



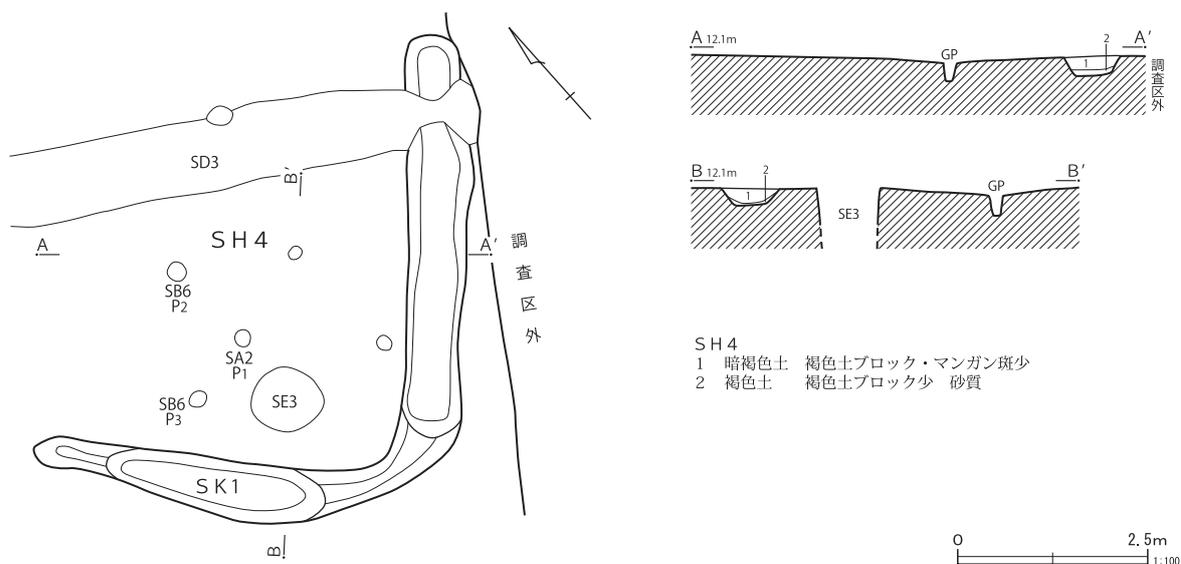
第218図 第3号方形周溝墓



第219図 第3号方形周溝墓出土遺物

第71表 第3号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SH3	E	土師器	小型壺	70		4.2	[5.8]	A C E F	普通	灰褐	No.1 内外面ヘラナデ 器面風化している 胴~底部外面に大黒斑あり 外面僅かに赤 彩残る



第220図 第4号方形周溝墓

第3号方形周溝墓（第218・219図）

B-24・25、C-24グリッドに位置する。第3号方形周溝墓、E区第9号溝跡より古い。その他の重複遺構との新旧関係は捉えられなかった。「コ」の字形に検出されたが、南東部分は調査区外に続く。

隣接する周溝墓との距離は、北東の第1号方形周溝墓とは0.95m、北西の第2号方形周溝墓とは1.02m、南西の第4号方形周溝墓とは1.60mである。

確認範囲内では、方台部内の遺構確認面や土層断面に、方台部の盛土や埋葬施設は検出されなかった。覆土の堆積状況から、自然堆積と推定される。

3辺ともに、僅かではあるが方台部側に湾曲しており、全体的な平面形は方形、または長方形と考えられる。北西部分では周溝が途切れているが、陸橋部であるのか、プランが失われているのかについては特定できなかった。所見としては、前者の可能性を考えたい。

検出できた範囲での遺構の規模は、北東-南西方向の外法7.28m、内法（=方台径、以下同じ）

5.68m、方位N-50°-W、北西-南東方向の外法（7.30）m、内法（6.10）m、方位N-40°-Eである。

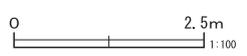
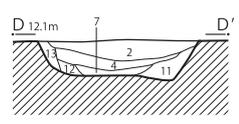
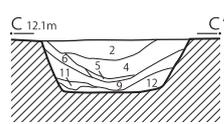
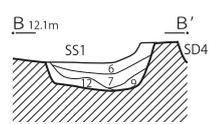
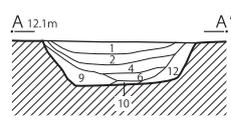
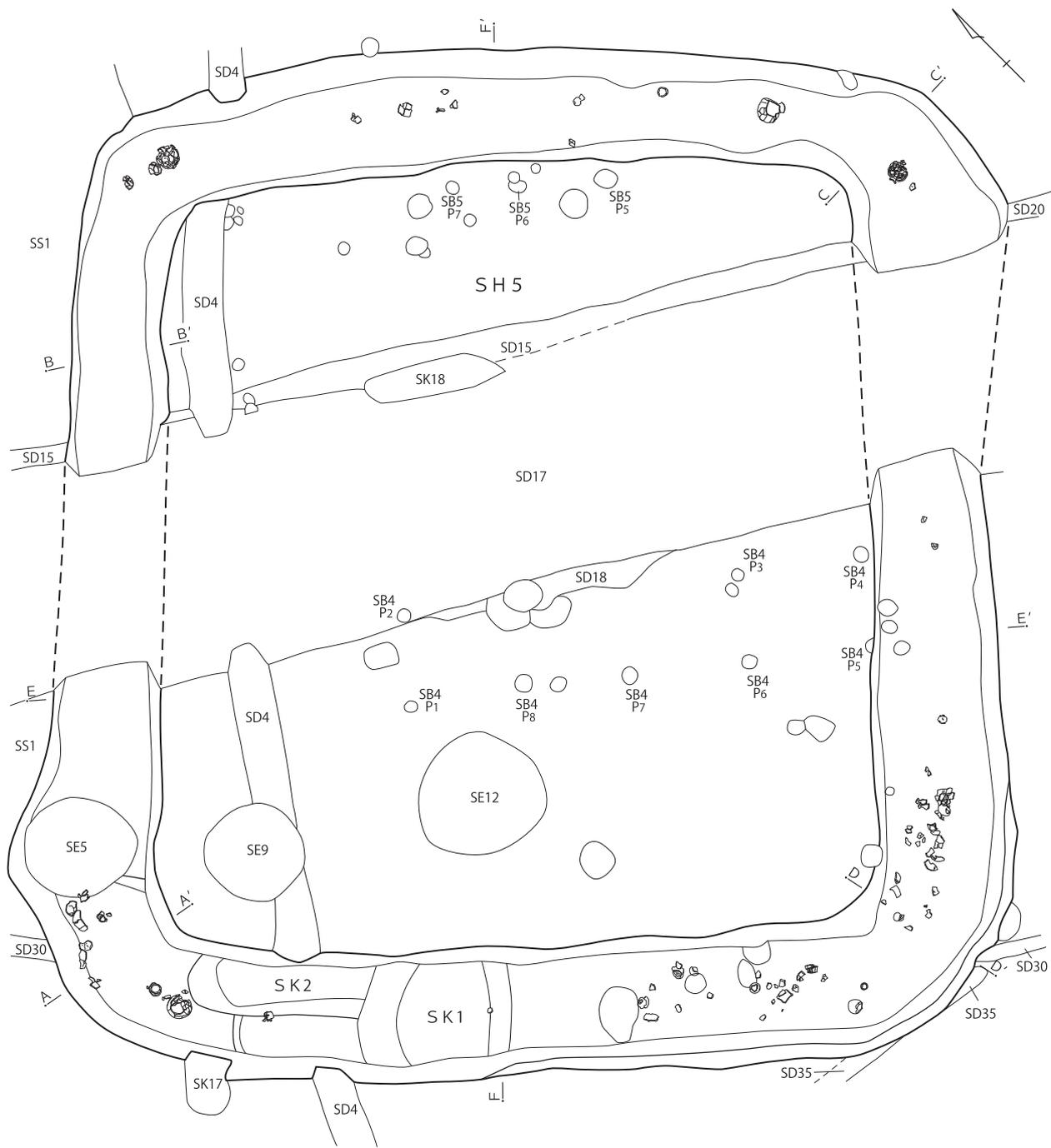
周溝の規模は、北溝が上場幅0.35~0.58m、下場幅0.18~0.25m、深さ22cm、東溝が上場幅0.78~1.02m、下場幅0.42~0.67m、深さ22~33cm、西溝が上場幅0.53~0.65m、下場幅0.33~0.36m、深さ13~42cm。全体的に周溝底面は平坦で、壁面の立ち上がりは急であり、断面形は逆台形である。

土層断面C-C'部分には、北から南へ下る比高差4cm程の段が検出された。この他に、北溝と西溝では土塊状の落ち込みが各々1箇所ずつ確認されたが、これらについては溝内土塊の可能性がある。この落ち込みの長径×短径×確認面からの深さ、周溝底面との比高差・長軸方向については、前者が245×60×34cm、3~13cm・N-47°-E、後者が238×80×43cm、20~35cm・N-43°-Wである。

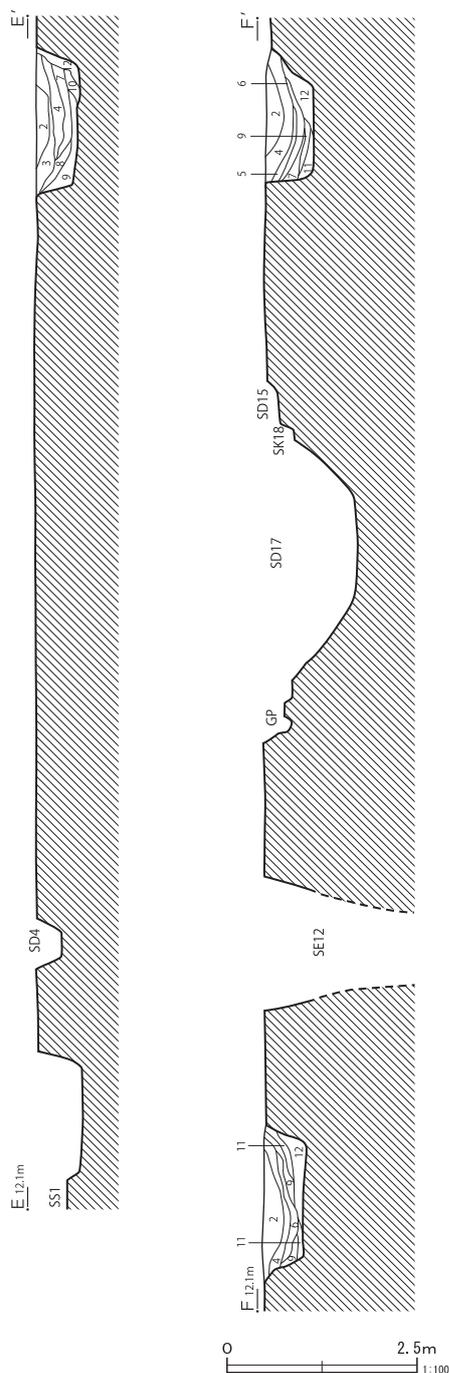
土師器の小破片が出土したが、図化できた遺物は小型壺1点（1）のみである。

第4号方形周溝墓（第220図）

C-24グリッドに位置する。E区第6号掘立柱建物跡、E区第2号柵列跡より古い。E区第3



第221图 第5号方形周溝墓(1)



- | | |
|------|--|
| SH 5 | |
| 1 | 黒褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 疎らに少 |
| 2 | 暗褐色土 褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 微量 |
| 3 | 暗褐色土 炭化物粒子微量 4層より明るい |
| 4 | 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 少 2層よりやや明るい |
| 5 | 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) やや多 |
| 6 | 褐色土粒子多 |
| 7 | 暗褐色土 褐色土粒子極多 黒褐色土ブロック少 |
| 8 | 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 多 |
| 9 | オリーブ褐色土 黄褐色土ブロック少 砂とマンガン斑の互層 |
| 10 | 暗褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) ・炭化物ブロック (1 cm) 少 |
| 11 | 黒色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) やや多
黄褐色粘土ブロック (1 cm) 少 粘性やや強 |
| 12 | 黄褐色土 黄褐色土粒子多 地山崩落層 |
| 13 | 黄灰色土 黄褐色土粒子やや多 地山崩落層 |

第222図 第5号方形周溝墓(2)

号溝跡との新旧関係は捉えられなかった。

本遺構はL字形に検出された。

隣接する周溝墓との距離は、北東の第3号方形周溝墓とは1.60m、北西の第2号方形周溝墓とは2.15m、南西の第5号方形周溝墓とは0.80mである。

確認範囲内では、方台部内の遺構確認面や土層断面に、方台部の盛土や埋葬施設は検出されなかった。覆土の堆積状況から、自然堆積と推定される。

両溝とも周溝・方台部は直線的であるが、南溝は溝内土壌と推定される落ち込みのため、外側に膨らんだ状態であった。

検出できた範囲での周溝の規模は、東溝は全長6.10m、上場幅0.45~0.86m、下場幅0.12~0.54m、深さ25cm、方位N-46°-E、南溝は全長4.65m、上場幅0.40~0.65m、下場幅0.12~0.23m、深さ16cm、方位N-41°-Wである。周溝底面は平坦で、壁面の立ち上がりは比較的急であり、断面形は逆台形である。

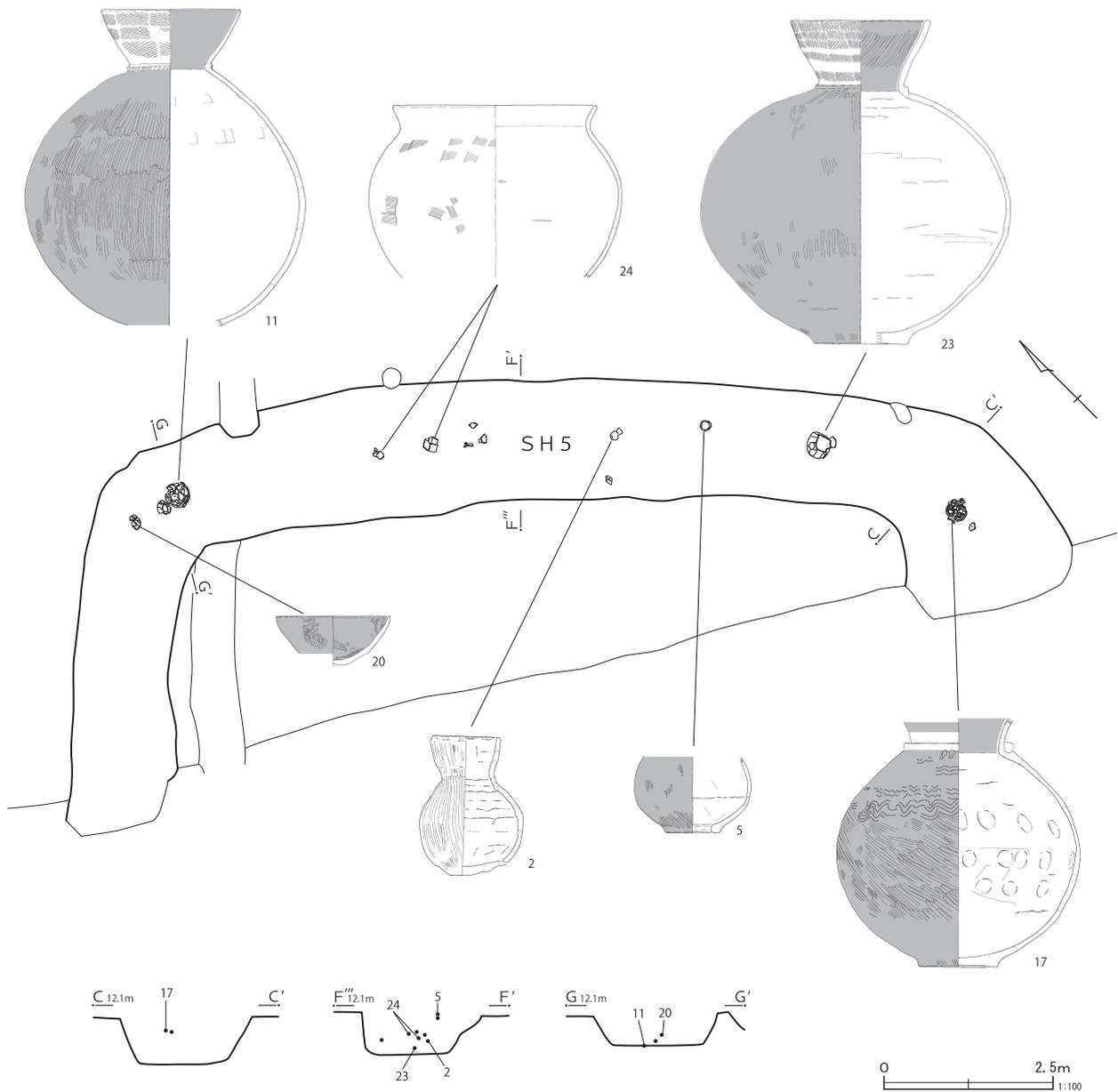
東溝では、コーナー付近に南から北へ下る比高差3cm程の段が検出された。この他に、南溝では土壌状の落ち込みが1箇所確認された。この落ち込みについては溝内土壌の可能性はある。長径×短径×確認面からの深さ、周溝底面との比高差・長軸方向は、290×78×21cm、5cm・N-41°-Wである。

遺物は出土しなかった。

第5号方形周溝墓(第221~227図)

B-22・23、C-22~24、D-22・23グリッドに位置する。E区第1号墳、E区第4~6号掘立柱建物跡、E区第5・12号井戸跡、E区第4号溝跡より古いが、その他の重複遺構との新旧関係は把握することができなかった。

隣接する周溝墓との距離は、北東の第2号方形周溝墓とは0.42m、第4号方形周溝墓とは0.80m、南西の第6号方形周溝墓とは0.36mである。



第223図 第5号方形周溝墓遺物出土状況（1）

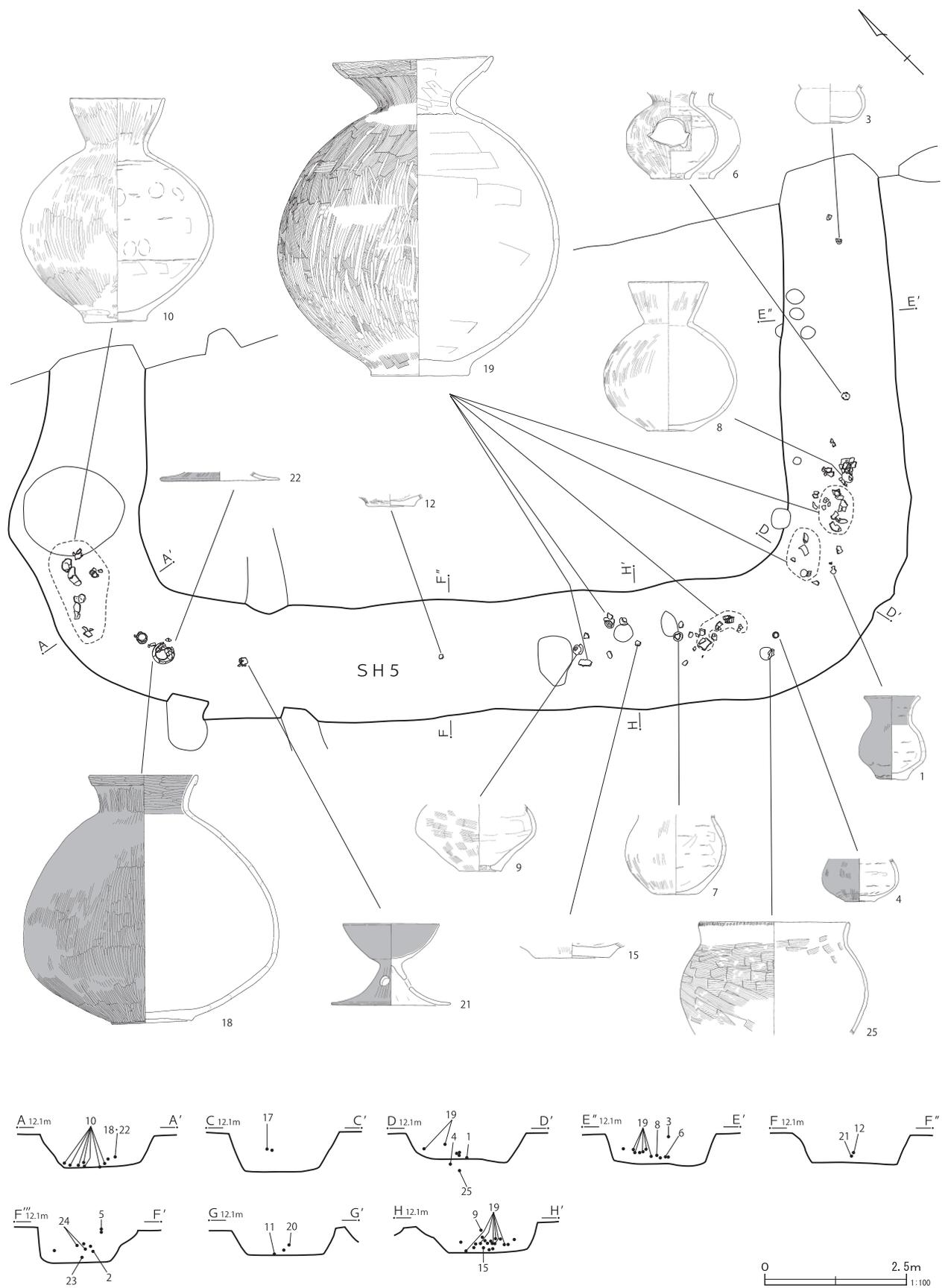
覆土の堆積状況から、自然堆積と推定される。方台部内の遺構確認面や、土層断面を観察した限りでは、方台部の盛土や埋葬施設は検出されなかった。

北溝の外周がやや湾曲しているが、概ね周溝も方台部もともにプランは直線的で、平面形は長方形を呈する。

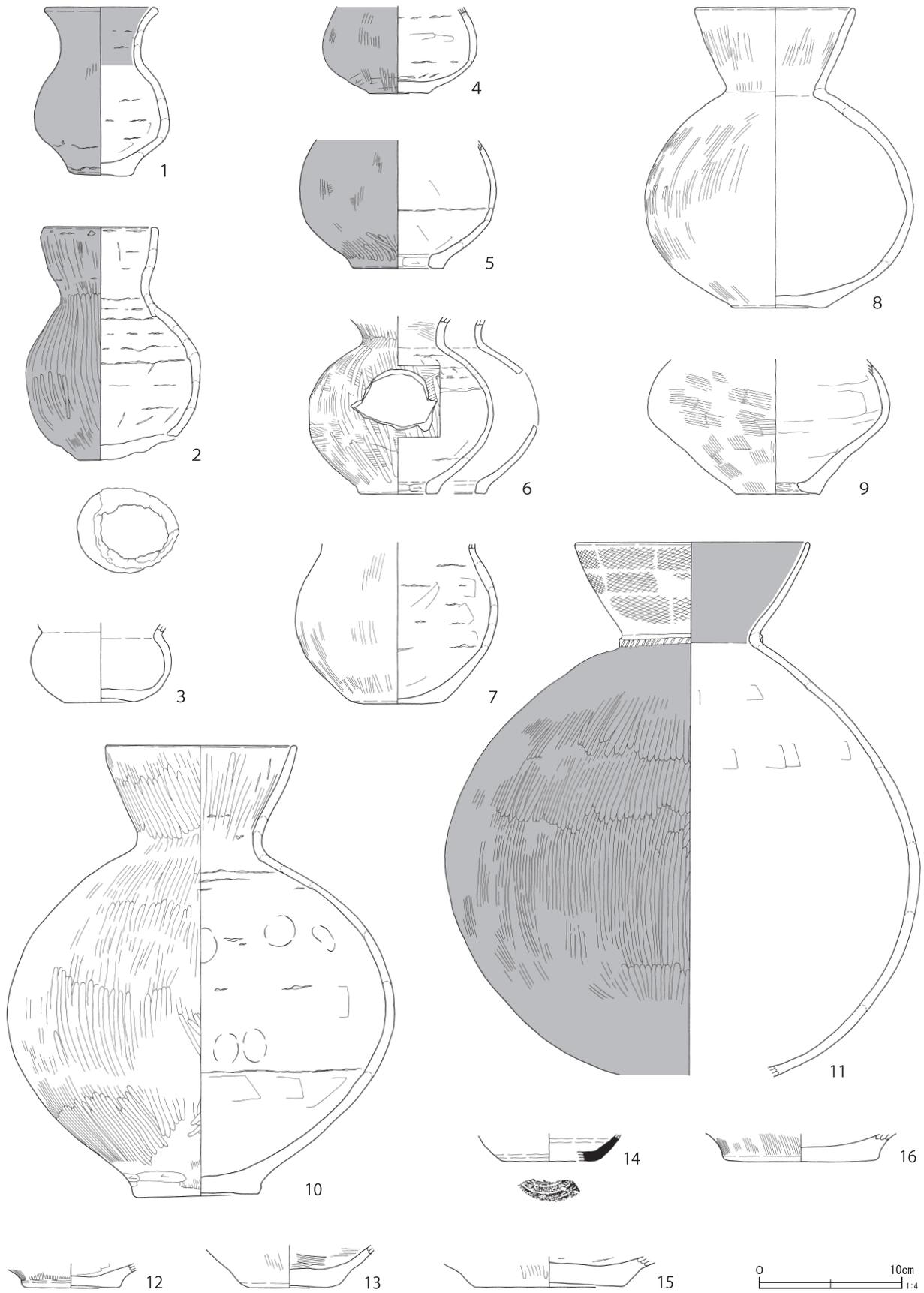
遺構の規模は、北東-南西方向の外法16.38m、

内法12.55mで、北西-南東方向の外法15.02m、内法11.20m、長軸方位はN-43°-Eである。

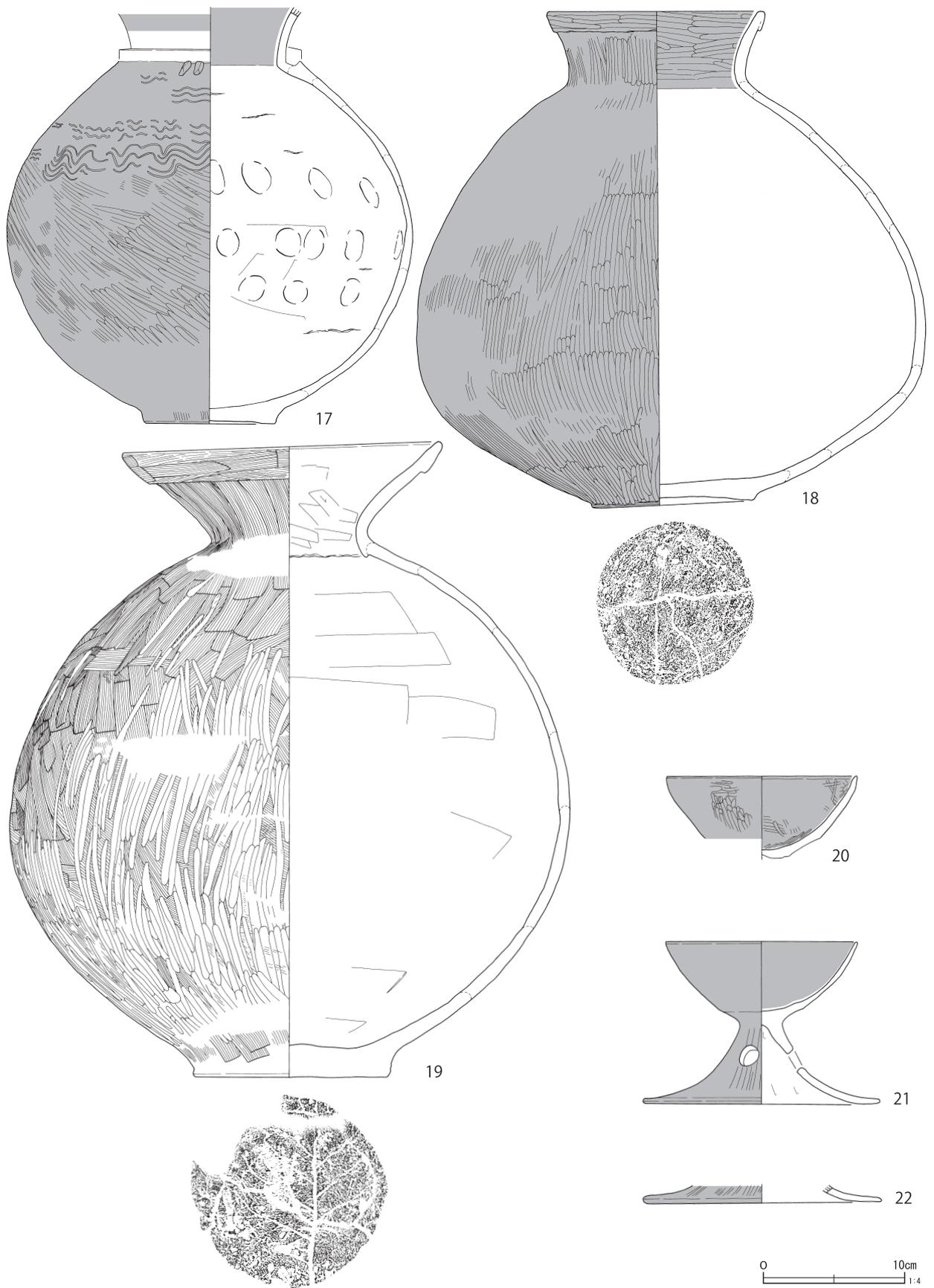
東溝は、上場幅1.85~2.45m、下場幅1.38~2.02m、深さ58~70cm、南溝は、上場幅1.90~2.15m、下場幅1.18~1.40m、深さ53cm、西溝は、上場幅1.40~2.28m、下場幅0.95~1.70m、深さ58~61cm、北溝は、上場幅1.62~2.02m、下場幅0.81~1.38m、深さ60cmである。各溝とも底面は平坦で、壁面の立



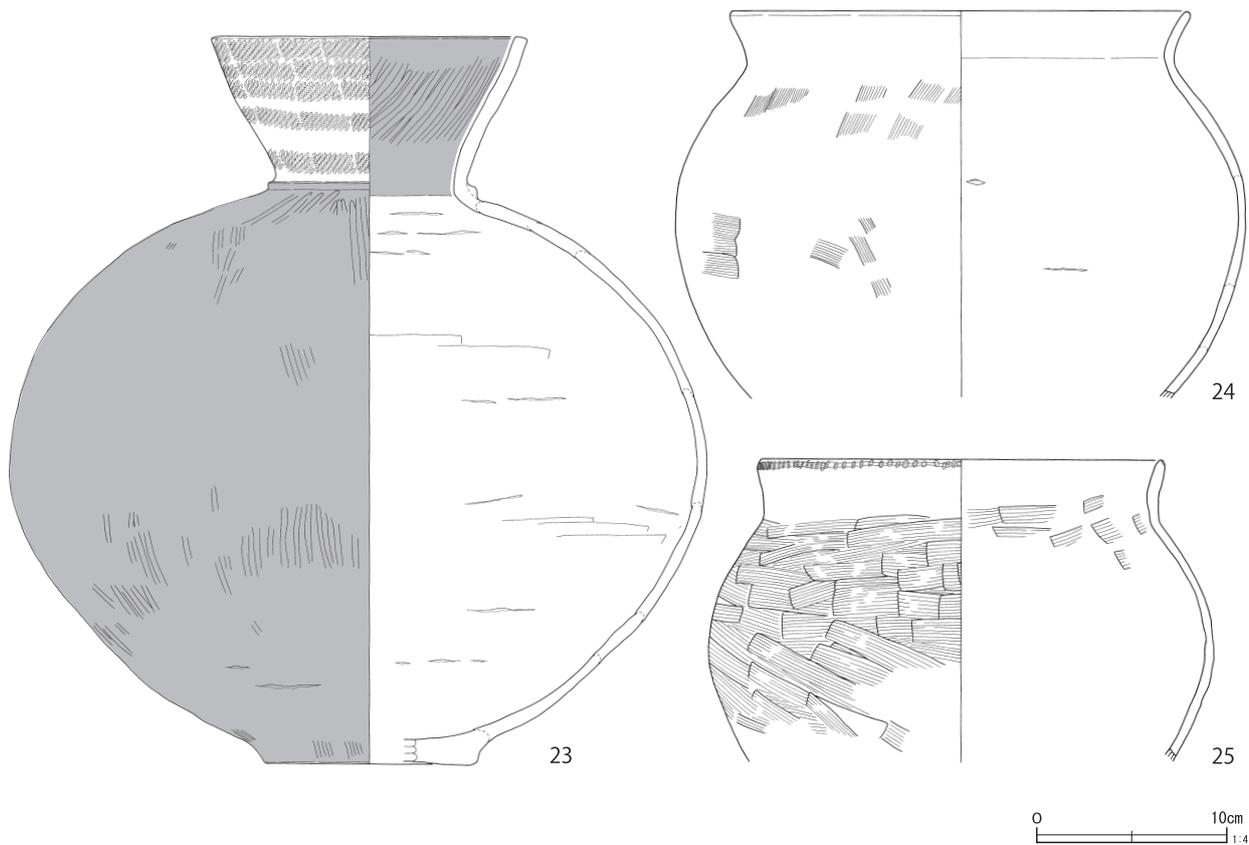
第224图 第5号方形周沟墓遗物出土状况(2)



第225图 第5号方形周沟墓出土遗物(1)



第226图 第5号方形周沟墓出土遗物(2)



第227図 第5号方形周溝墓出土遺物（3）

第72表 第5号方形周溝墓出土遺物観察表

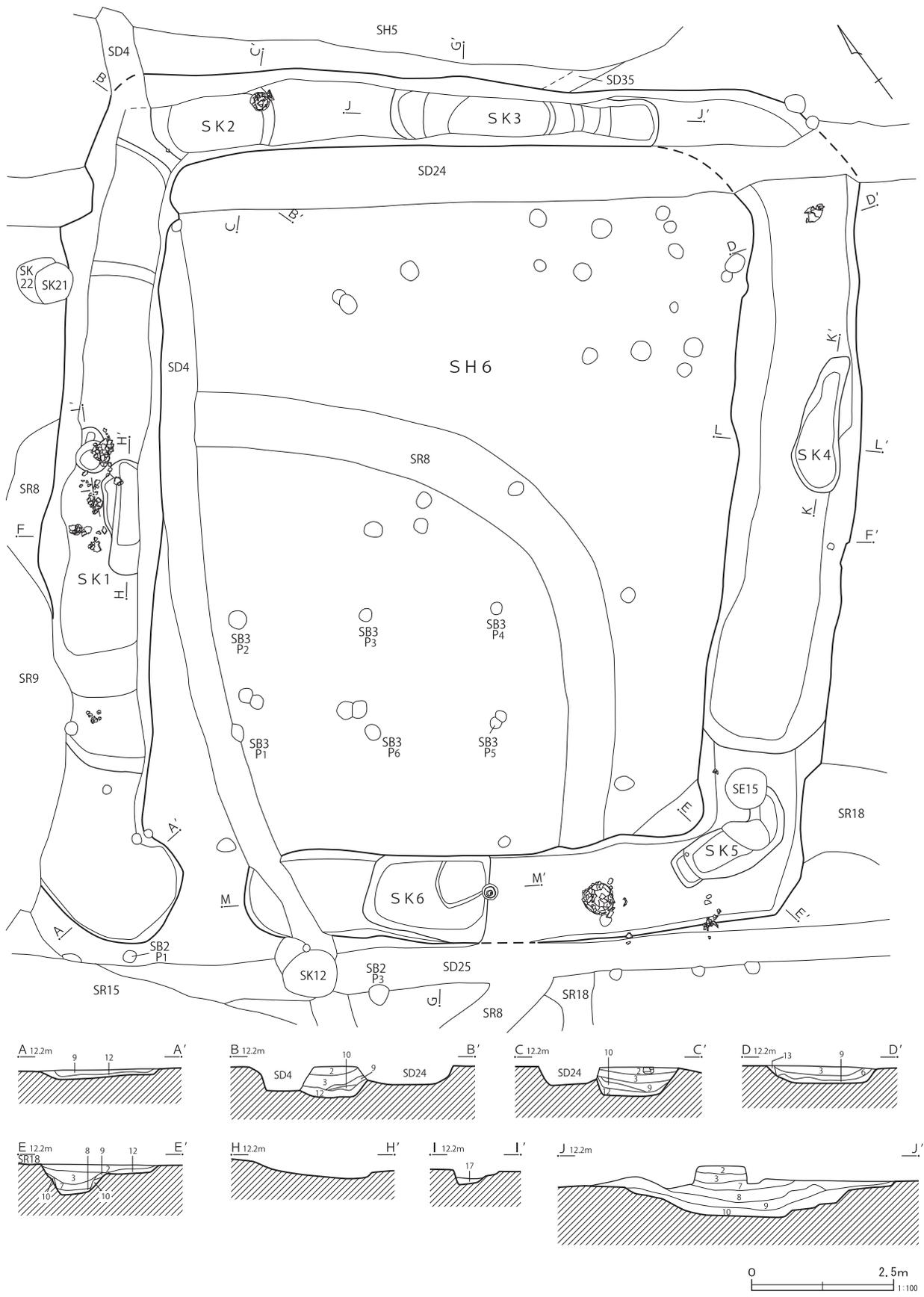
番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SH5	E	土師器	小型壺	90	7.4	4.4	11.8	A C F	普通	にぶい 橙	No.51 外面へら磨きか 内面へらナデとナデか 器面風化している 胴部外面に黒斑あり 外面・口縁部内面赤彩
2	SH5	E	土師器	壺	100	7.8		16.5	A D F J	普通	橙	No.9 外面ハケ後へら磨き 内面へらナデ 底部焼成後穿孔(外面から) 口縁部内外面・胴部外面に黒斑あり 外面赤彩
3	SH5	E	土師器	罎	65		4.8	[5.4]	A C F J	普通	にぶい 黄橙	東溝中層 器面風化著しい
4	SH5	E	土師器	壺	75		4.2	[6.1]	A C D F J	普通	灰黄	No.47 外面へら磨きとへら削り 器面風化している 内外面に大黒斑あり 外面赤彩
5	SH5	E	土師器	壺	55		6.2	[9.0]	A C D F J	普通	赤褐	No.11 外面ハケ後へら磨き 内面へらナデか 端部内面へら削り 器面風化著しい 底部焼成前に穿孔 外面赤彩
6	SH5	E	土師器	壺	95		5.6	[7.5]	A D F J	普通	赤褐	No.63 口縁部内外面ハケ後横ナデ 胴部外面粗いハケ後粗いへら磨き 端部内面へら削り 胴部内面上位指頭圧痕とナデ 胴部中・下位へらナデとナデ 底部焼成前に穿孔 胴部焼成後に穿孔
7	SH5	E	土師器	小型壺	90		6.5	[11.3]	A D F J	普通	にぶい 黄橙	No.35 外面へら磨き 内面へらナデ 器面風化著しい
8	SH5	E	土師器	壺	95	11.2	6.3	21.3	A C D F J	普通	浅黄	No.58 口縁部内面・外面へら磨き 胴部内面へらナデか 器面風化著しい
9	SH5	E	土師器	壺	35		5.9	[9.4]	A D F	普通	明黄褐	No.26 外面ハケ 内面へらナデとナデ 端部内面へら削り 底部焼成前に穿孔 器面風化している 内外面に大黒斑あり

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
10	SH5	E	土師器	壺	80	13.2	8.7	31.9	A C F	普通	にぶい 橙	No.15~21 外面へラ磨き 口縁部内面へラナデ後へラ磨き 胴部内面指頭圧痕とへラナデ 器面風化している 胴部外面に大黒斑あり
11	SH5	E	土師器	壺	90	(16.2)		[37.7]	A C F	普通	橙	No.2・3 口縁部外面擦糸文 口縁部内面・胴部外面へラ磨き 胴部外面・口縁部内面赤彩 ESR16-1と同じ
12	SH5	E	土師器	壺	80		6.9	[1.7]	A C D F J	普通	にぶい 黄橙	No.25 外面ハケ 内面へラナデ 底部へラ削り 底部~胴部外面に黒斑あり
13	SH5	E	土師器	壺	65		5.6	[3.0]	A C D J	普通	橙	南溝中央 中層 外面へラ磨きか 内面ハケナデ 器面風化著しい
14	SH5	E	須恵器	坏	10		(7.0)	[1.9]	A H J	普通	灰	南溝 底部回転糸切り離しか
15	SH5	E	土師器	壺	65		10.9	[2.1]	A C D F J	普通	橙	No.33 外面へラ磨き 内面へラナデ 底部へラ削り
16	SH5	E	土師器	壺	40		(11.0)	[2.0]	A C F G	普通	橙	東溝中層 外面ハケ 内面へラナデか 底部へラナデ
17	SH5	E	土師器	壺	60		9.2	[29.6]	A C D F J	普通	にぶい 黄橙	No.13 口縁部内外面へラ磨きか 肩部外面柳描き(波状文) 胴部外面中位ハケ後へラ磨き 頸部は突帯が剥離した状態と思われる 棒状浮文は2本で1単位(位置関係から4単位と思われる) 胴部外面に大黒斑あり
18	SH5	E	土師器	壺	75	15.2	11.4	35.2	A C F G	普通	橙	No.23 外面・口縁部内面へラ磨き 胴部内面へラナデとナデか 器面風化している 外面・口縁部内面赤彩 底部木葉痕あり
19	SH5	E	土師器	壺	85	22.3	13.6	45.7	A D F J	普通	赤褐	No.28・31・41・42・44・45・49・50・54~56 外面ハケ後粗いへラ磨き 内面へラナデ 胴部外面に黒斑あり 器面の風化少ない 底部木葉痕あり
20	SH5	E	土師器	高坏	80	13.5		[5.9]	A C D F J	普通	浅黄	No.1 内外面へラ磨き 器面風化著しい 内外面赤彩
21	SH5	E	土師器	器台	40	(13.4)	(16.8)	[11.5]	A B C D	普通	明赤褐	No.24 内外面へラ磨き 脚部内面へラナデ 穿孔3ヶ所(外からの穿孔) 器面風化している 外面・坏部内面赤彩
22	SH5	E	土師器	高坏	55		(16.9)	[1.4]	A C F J	普通	橙	No.23 外面へラ磨き 内面へラナデか 器面風化著しい 外面赤彩
23	SH5	E	土師器	壺	90	16.6	(11.2)	38.6	A C F	普通	にぶい 黄橙	No.12 口縁部外面原体 LR 回転方向上→下 胴部外面へラ磨き 内面へラ磨きとへラナデ 器面風化しており磨痕は僅か 胴部外面に黒斑あり 胴部外面・口縁部内面赤彩
24	SH5	E	土師器	甕	30	(24.0)		[20.5]	A C F J	普通	明黄褐	No.4・5 口縁部内外面横ナデ 胴部外面ハケ 胴部内面へラナデか 器面風化著しい 外面僅かに煤付着
25	SH5	E	土師器	甕	15	(21.3)		[16.0]	A D F J	普通	にぶい 黄橙	No.46 口縁部内外面ハケ後横ナデ 被熱のため外面に赤色化した部分あり 口縁~胴部に大黒斑あり

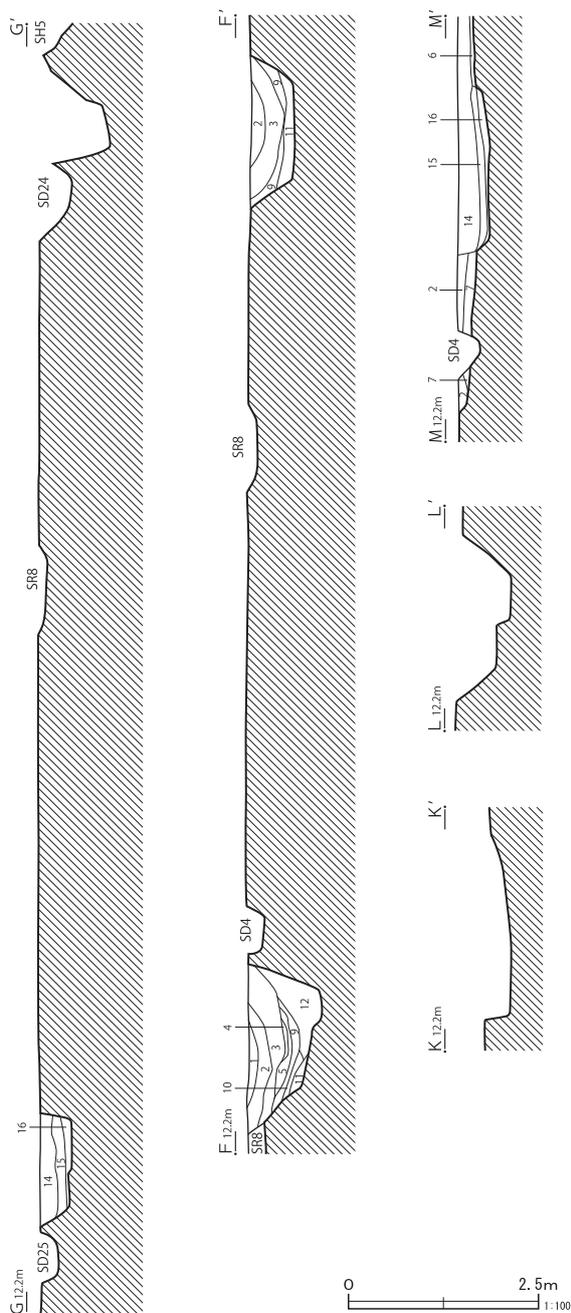
ち上がりは急であり、断面形は逆台形である。総じて、壁面の立ち上がりは、外周側よりも方台部側の方が急である。

西コーナー(A-A')北側には比高差14cm、南側には比高差6cmの段差がみられた。後者に接するようにして、溝内土壌と推定される落ち込みが検出された。便宜上、SK1、SK2と命名した。両者の長径×短径×確認面からの深さ、周溝底面との比高差・長軸方向は、SK1が[280]×99×55cm、5cm・N-47°-W、SK2が239×209×57cm、5cm・N-53°-Wである。

四隅からそれぞれ土師器壺が出土した。北コーナーからは1点(11)、東・南・西コーナーからは2点ずつ(17・23、8・19、10・18)が出土した。このうち、8・11・17・18・23は土圧で潰れたかのように、破片がまとまった状態であった。これに対し、10・19の2点は破片が散らばった状態で検出された。特に、19では分布範囲は6mに及んでいた。底部穿孔された壺が4点検出された。そのうち、6(東溝)の底部は焼成前穿孔であるが、胴部は焼成後の穿孔である。5(北溝)・9(南溝)の底部は焼成前穿孔であり、2(北溝)の底部は



第228图 第6号方形周溝墓(1)



- SH 6
- | | | |
|----|------|----------------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 黄灰色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 多 |
| 2 | 暗褐色土 | 黄灰色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm)・焼土粒子少 自然堆積 |
| 3 | 黒褐色土 | 黄灰色土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 微量 自然堆積 |
| 4 | 黒褐色土 | 黄灰色土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 多 |
| 5 | 黒褐色土 | 黄灰色粘土粒子 (0.05 ~ 0.1 cm) 少 |
| 6 | 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) を均質に少 |
| 7 | 暗褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 多 |
| 8 | 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) を均質に少 |
| 9 | 暗褐色土 | 黄灰色土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) を均質に少 |
| 10 | 黒色土 | 黄褐色粘土ブロック (0.8 ~ 1 cm) 少 |
| 11 | 黒褐色土 | 黄灰色粘土ブロック (1 ~ 5 cm) を均質に多 |
| 12 | 黄褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (1 ~ 2 cm) をブロック状に少 |
| 13 | 黄褐色土 | 黄褐色粘土粒子をブロック状 (3 ~ 5 cm) 少 |
| 14 | 暗褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.05 ~ 0.1 cm) 少 |
| 15 | 暗褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.05 ~ 0.1 cm) を均質に少 |
| | | 黄褐色粘土ブロック (5 ~ 8 cm) 少 |
| 16 | 黒褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) 多 |
| 17 | 暗褐色土 | 黒色土をブロック状 (1 cm) に多 粘性強 |

第229図 第6号方形周溝墓 (2)

焼成後穿孔である。

図化できた遺物は、土師器の壺・高環など計25点 (1~25) である。

第6号方形周溝墓 (第228~232図)

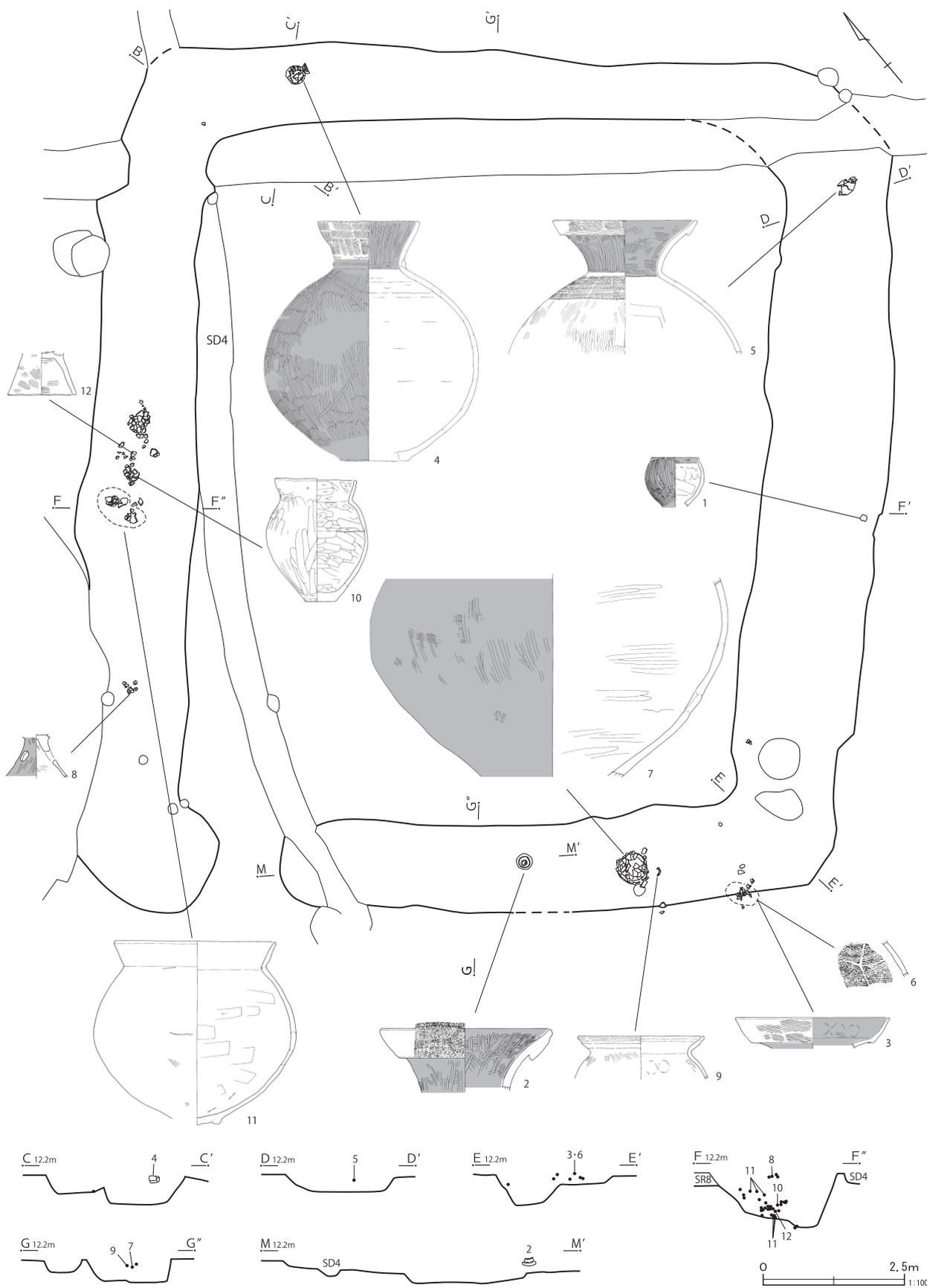
D・E-21~23グリッドに位置する。E区第8・18号周溝状遺構より新しく、E区第4・24・25号溝跡よりは古い。

覆土の堆積状況から、自然堆積と推定される。方台部内の遺構確認面や、土層断面を観察した限りでは、方台部の盛土や埋葬施設は検出されなかった。概ね周溝も方台部ともに直線からなる長方形を呈する。

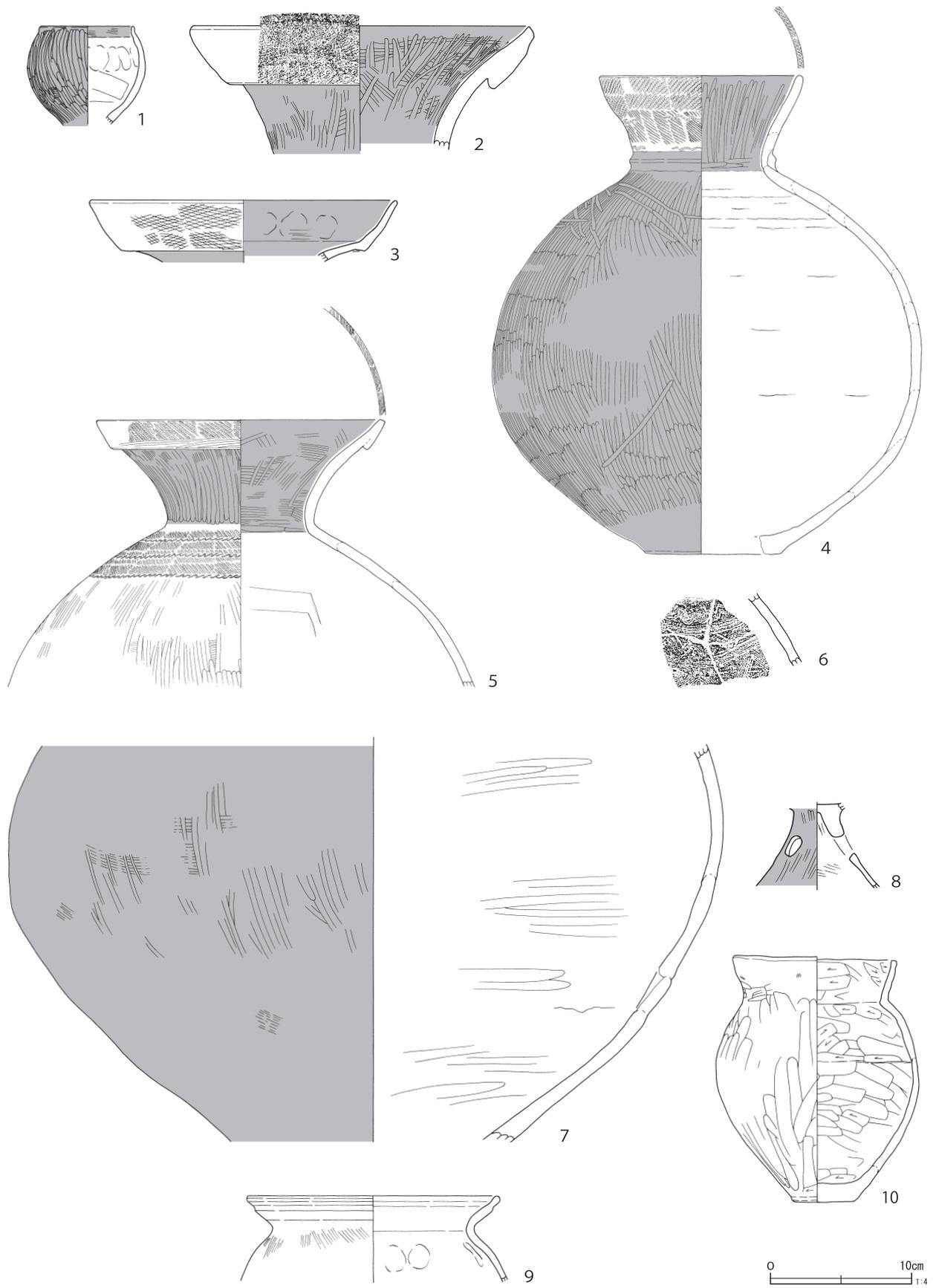
遺構の規模は、北東-南西方向の外法15.53m、内法12.50mで、北西-南東方向の外法14.16m、内法10.02m、長軸方位はN-39°-Eである。

北溝は上場幅1.25~1.40m、下場幅0.86~1.12m、深さ38cm、東溝は上場幅1.75~2.26m、下場幅1.34~1.58m、深さ54cm、南溝は上場幅1.63~1.83m、下場幅1.42~1.55m、深さ20cm、西溝は上場幅1.72~2.02m、下場幅1.05~1.81m、深さ45cmである。各溝とも底面は平坦で、壁面の立ち上がりは急であり、断面形は逆台形である。総じて、壁面の立ち上がりは、外周側よりも方台部側の方が急である。

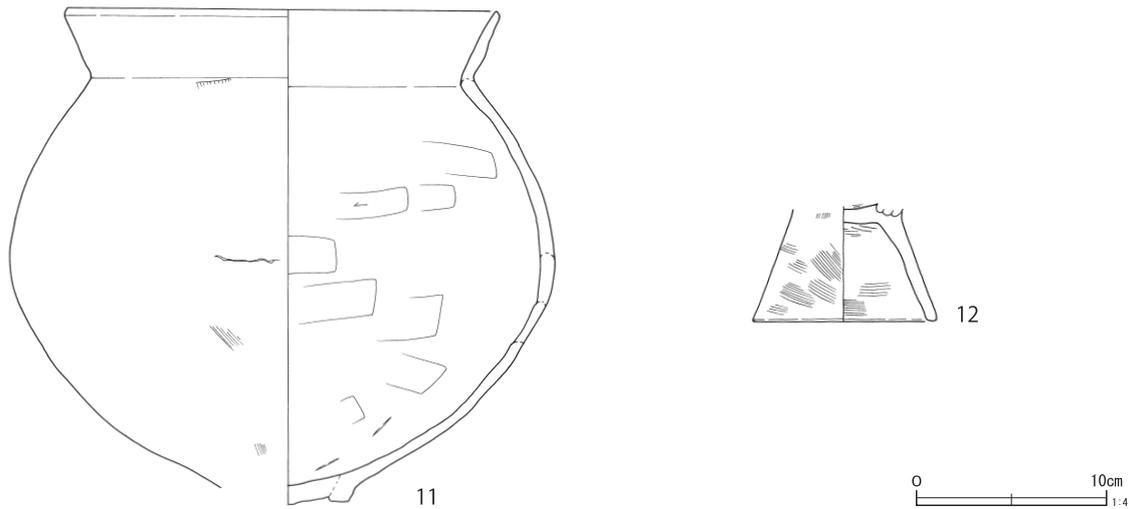
南コーナー (E-E') 北側2mの地点には比高差16cm程の段差がみられた。各溝から、溝内土壌と推定される落ち込みが検出された。便宜上、SK 1~6と命名した。SK 1については、南北方向ともに3段に及ぶが、上段・中段・下段に分けて法量を記すこととする。各土壌の長径×短径×確認面からの深さ、周溝底面との比高差・長軸方向は、SK 1上段が1150×191×51cm、6cm・N-37°-E、中段が773×188×75cm、上段との比高差13cm (北側)・24cm・N-37°-E、下段が205×100×97cm、中段との比高差20cm・N-37°-E、SK 2が215×150×40cm、27cm・N-60°-Wである。SK 3が472×125×90cm、10cm・N-54°-W、SK 4が240×90×71cm、18cm・N-60°-E、SK 5が225×97×36cm、



第230图 第6号方形周沟墓遗物出土状况



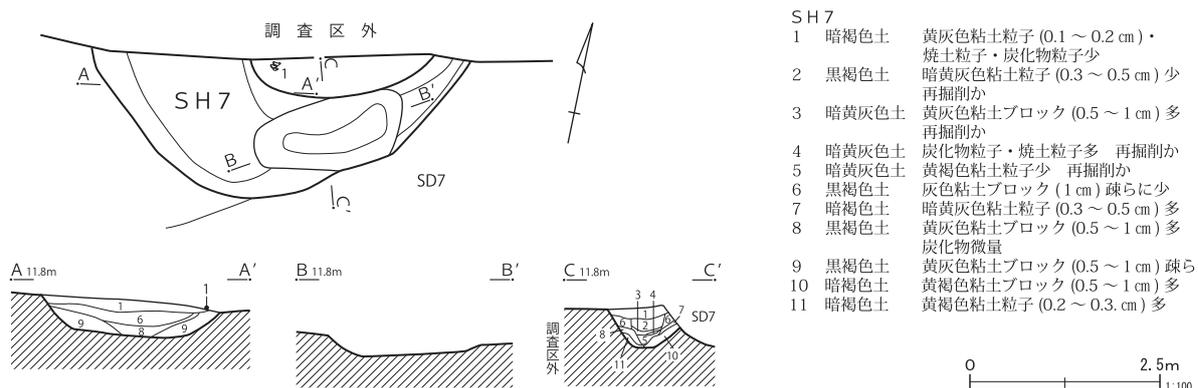
第231图 第6号方形周沟墓出土遗物（1）



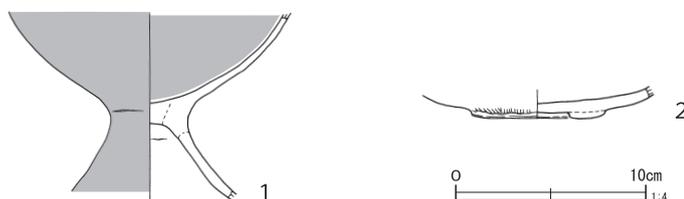
第232図 第6号方形周溝墓出土遺物（2）

第73表 第6号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SH6	E	土師器	壺	90	6.6		[7.0]	A F	良好	にぶい赤褐	No.37 口縁部内外面ハケ後横ナデ 外面ハケ後ヘラ磨き 内面上位指頭圧痕あり 内面中・下位ヘラナデとナデ 外面・口縁部内面赤彩
2	SH6	E	土師器	壺	95	(23.8)		[8.8]	A D F J	普通	明黄褐	No.34 内外面ヘラ磨き 口縁部外面単節 LRで末端部と結束する 内外面赤彩
3	SH6	E	土師器	壺	25	(21.8)		[4.4]	A C D F J	普通	にぶい黄橙	No.40 口縁部外面撚糸文 口縁部内面指頭圧痕とヘラ磨き 頸部外面・口縁部内面赤彩 ESR16-1と同じ
4	SH6	E	土師器	壺	65	14.2	(9.7)	[34.2]	A C D F G	普通	橙	No. 2 口唇上原体 LR 口縁 LR(横回転)→L(縦回転)→結節原体 R 胴部外面・口縁部内面ヘラ磨き 胴部内面ヘラナデか 器面は剥離部の他は比較的調整痕が残っている 頸部・胴部外面に黒斑あり 外面・口縁部内面赤彩
5	SH6	E	土師器	壺	40	(20.8)		[19.1]	A C D F	普通	赤褐	No.38 外面・口縁部内面ハケ後ヘラ磨き 口唇部は無節 Rで肩部外面は無節 R端部を結束する 胴部内面ヘラナデ 器面やや風化している 口縁部内外面・胴部中位赤彩
6	SH6	E	土師器	壺	5			[4.7]	A C D F J	普通	橙	No.40 外面波状文・横線文・山形文 内面指頭圧痕あり
7	SH6	E	土師器	壺	65			[28.3]	C D F I	普通	浅黄橙	No.35 外面ハケ後ヘラ磨き 内面ヘラナデ 器面風化著しい 外面赤彩
8	SH6	E	土師器	器台	35			[6.2]	A D F J	普通	淡黄	No.6 外面ヘラ磨き 脚部内面ハケナデと 絞り 穿孔3ヶ所 器面風化著しい 外面赤彩
9	SH6	E	土師器	甕	10	(17.9)		[6.1]	A C F J	普通	明黄褐	No.36 口縁部内外面横ナデ 胴部外面粗いハケ 胴部内面指頭圧痕 器面風化著しい 口縁部内外面に黒斑あり
10	SH6	E	土師器	甕	75	11.4	4.2	18.4	A F J	良好	にぶい橙	No.14 口縁上部内外面横ナデ 胴部外面ハケナデ 内面ヘラ削りとヘラナデ つくりは大雑把で器形も歪んでいる 調整も雑 口縁～胴部外面に大黒斑あり
11	SH6	E	土師器	甕	55	(22.8)		[26.0]	A C F J	普通	にぶい黄橙	No.7～12・29 D-21G 口縁部内外面横ナデ 胴部外面ハケナデか 胴部内面ヘラナデ 器面風化著しい 胴部外面に大黒斑あり
12	SH6	E	土師器	台付甕	95		9.5	[6.1]	A C D F J	普通	明黄褐	No.20 外面・脚部内面ハケ 底部内面ヘラナデ 器面風化している



第233図 第7号方形周溝墓



第234図 第7号方形周溝墓出土遺物

第74表 第7号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SH7	E	土師器	高坏	35			[9.9]	A C F G	普通	灰白	No.1 外面・坏部内面へラナデ 脚部内面へラナデ 器面風化著しい 外面・坏部内面赤彩
2	SH7	E	土師器	壺	5		(7.0)	[1.6]	C D F	普通	灰黄褐	外面ハケ後へラナデ 器面風化著しい 内面・底部へラナデ

7 cm・N-87°-W、SK6が220×160×40cm、18cm・N-45°-Wである。

北コーナー付近では、土師器の壺(4)が、方台部から崩落し、転倒した状態で出土した。

図化できた遺物は、土師器の壺・甕ほか計12点(1~12)である。

第7号方形周溝墓(第233・234図)

C-20グリッドに位置する。E区第7号溝跡よりも古い。南コーナー部分1箇所のみを検出であり、その他の部分は調査区外に位置している。

方台部内の遺構確認面や、土層断面を観察した限りでは、方台部の盛土や埋葬施設は検出されな

かった。覆土の堆積状況から、自然堆積と推定されるが、第3~5層については再掘削の可能性もある。この覆土については、溝内土壌との関連性も想定される。

周溝の規模は、上場幅0.43~1.65m、下場幅0.18~1.32m、深さ43cm。

溝内土壌と推定される落ち込みが確認された。土壌の長径×短径×確認面からの深さ、周溝底面との比高差・長軸方向は、203×96×92cm、7~34cm・N-63°-Eである。

図化できた遺物は、土師器の高坏・壺の計2点(1・2)である。

(4) 掘立柱建物跡

検出された掘立柱建物跡は、B区12棟、C区5棟、D区11棟、E区7棟の計35棟である。調査面積が極めて限られたA区を除くB～E区では、ほぼ満遍なく分布している状況であった。D区中央では掘立柱建物跡がみられないが、これはこの部分が土取りのため削平されているのが要因であると考えられる。そのため、深度の大きな古墳の周溝や、溝跡のみの検出となった。

検出された35棟の内、掘立柱建物跡同士の重複は5箇所、11棟と比較的少ないといえる。

発掘調査の工程上、C区とD区を並行して調査を行う必要があったため、遺構名の重複を避けるべく、先に着手したB・C区では、第1号～第17号まで通し番号とし、D・E区では両区とも第1号から開始して、それぞれ遺構番号の前に区名を冠した。そのため、遺構名が煩雑になったり、空き番号が生ずる結果となったが、整理段階では遺物の注記を尊重して、旧番のままとした。

第1号掘立柱建物跡 (第236図)

I-5・6、J-5グリッドに位置する。多数の遺構と重複している。第12号周溝状遺構よりは

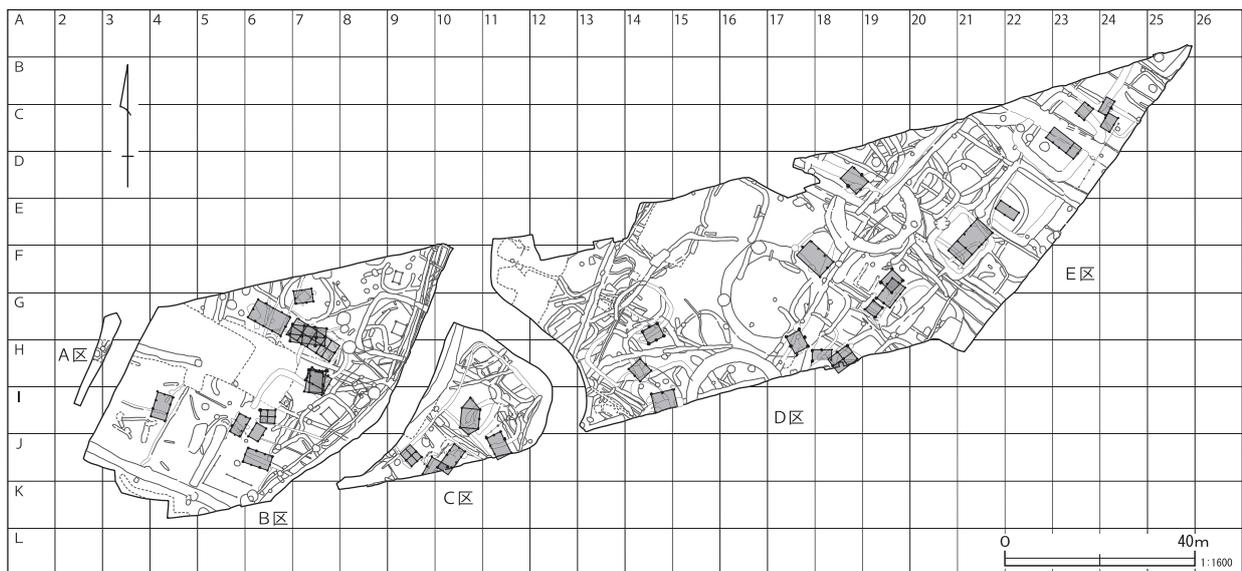
新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、西の第8号掘立柱建物跡とは13.87m、南東の第3号掘立柱建物跡とは1.56m、第4号掘立柱建物跡とは2.76m、北東の第2号掘立柱建物跡とは2.24m、第7・9・11号掘立柱建物跡（3棟重複）とは12.40mである。

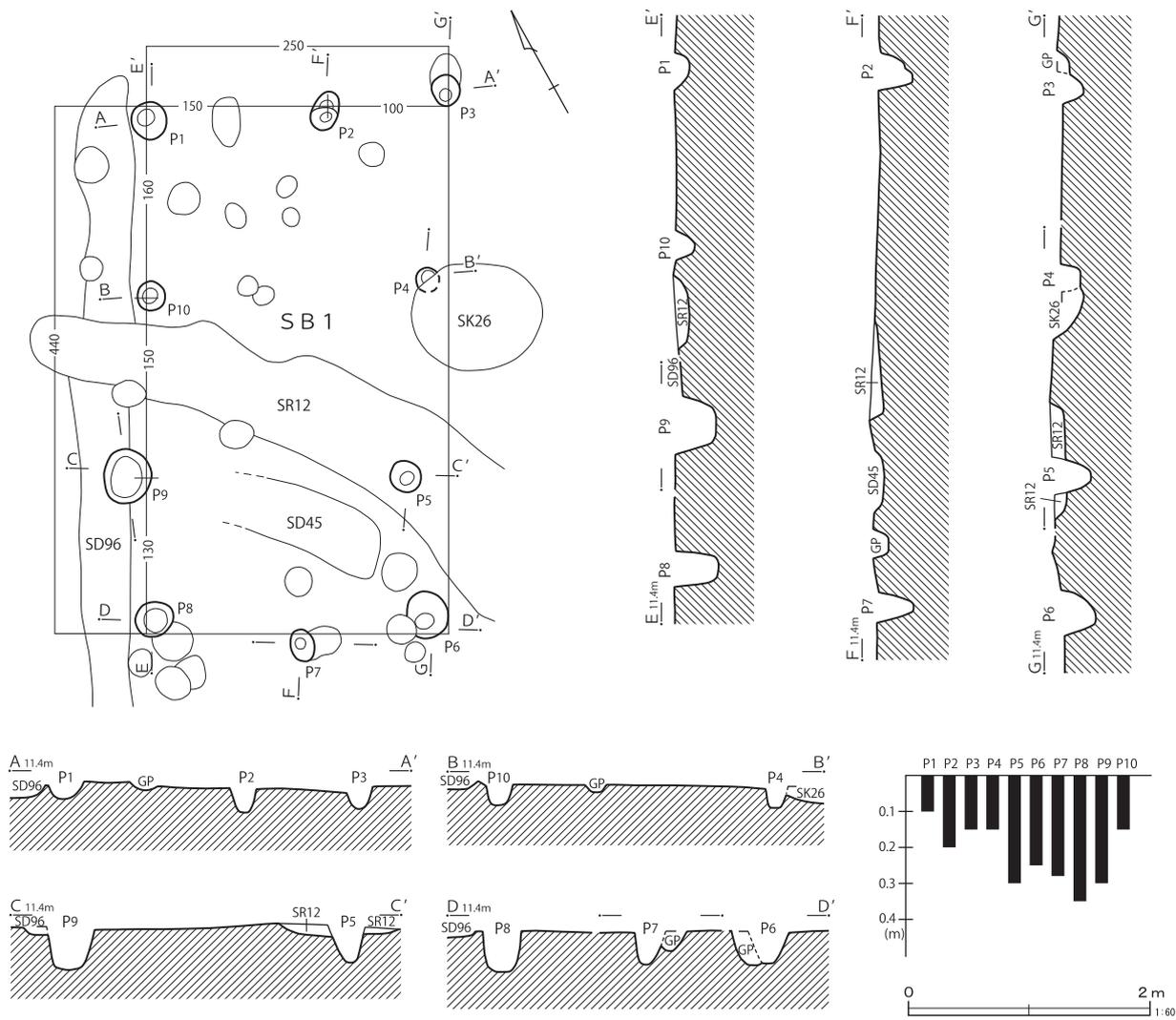
母屋の規模は、桁行3間（4.40m）、梁行2間（2.50m）、面積11.00㎡であり、主軸方位はN-30°-Eを指す。柱間距離は、桁行P1-P10間1.60m、P10-P9間1.50m、P9-P8間1.30m（平均1.47m）、梁行P1-P2間1.50m、P2-P3間1.00m（平均1.25m）である。

柱穴の規模は径18×26cm～38×45cm、深さ10～35cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。桁行・梁行ともに柱筋の通りは良くなく、柱間距離は一定しない。

本掘立柱建物跡は、隣接する第3号掘立柱建物跡の主軸方位（N-32°-E）、第13号掘立柱建物跡（N-30°-E）、第14号掘立柱建物跡（N-35°-



第235図 掘立柱建物跡分布図



第236図 第1号掘立柱建物跡

E) とほぼ平行し、第10号掘立柱建物跡 (N-55°-W)、第11号掘立柱建物跡 (N-60°-W)、第12号掘立柱建物跡 (N-61°-W) とほぼ直交する主軸方位である。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

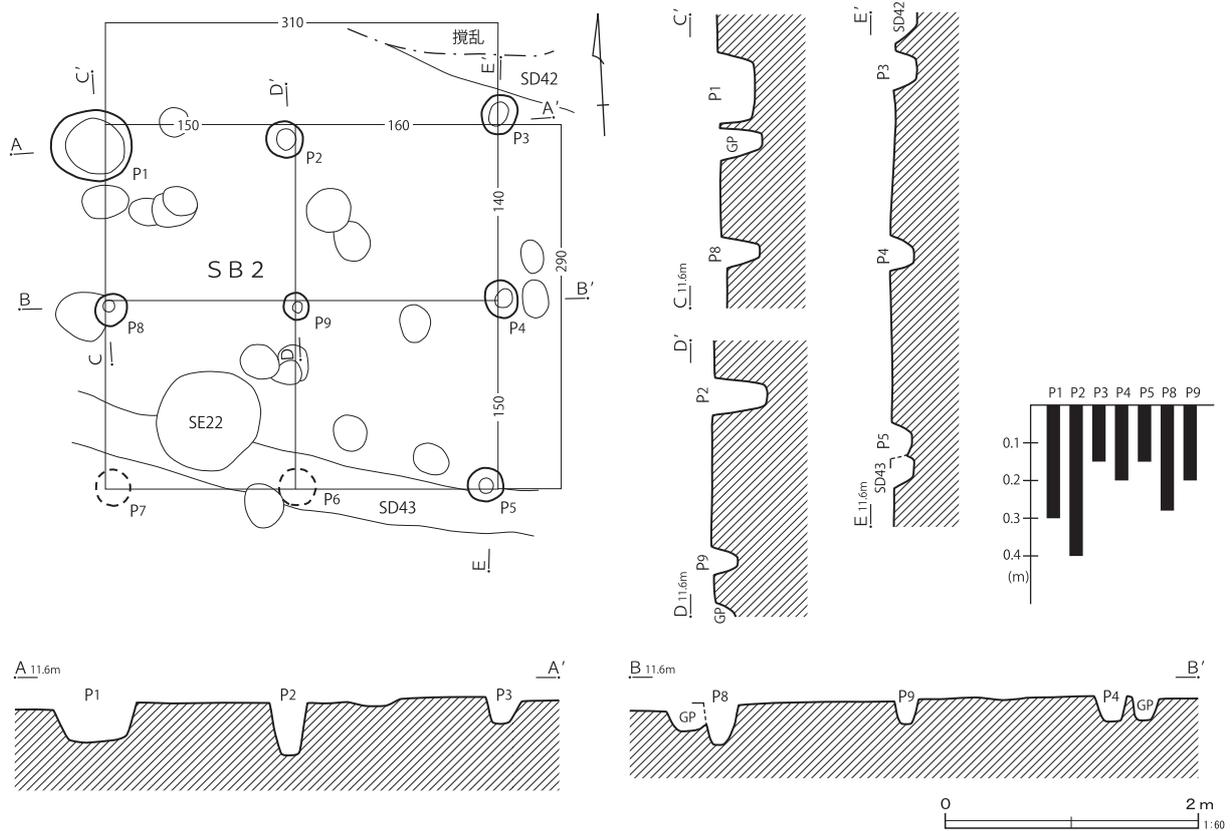
第2号掘立柱建物跡 (第237図)

I-6グリッドに位置する。第8・11号周溝状遺構より新しいが、その他の重複遺構との新旧関係については確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、西の第8号掘

立柱建物跡とは17.76m、南西の第1号掘立柱建物跡とは2.24m、第3号掘立柱建物跡とは0.40m、南の第4号掘立柱建物跡とは5.85m、北東の第7・9・11号掘立柱建物跡 (3棟重複) とは6.80mである。

P5の存在からP6・7を想定し、2間×2間の総柱建物と判断した。その結果、母屋の規模は、桁行2間 (3.10m)、梁行2間 (2.90m)、面積8.99㎡であり、主軸方位はN-87°-Wを指す。柱間距離は、桁行P1-P2間1.50m、P2-P3間1.60m (平均1.55m)、梁行P3-P4間1.40m、P4-



第237図 第2号掘立柱建物跡

P 5間1.50m (平均1.45m) である。

柱穴の規模は径20×20cm～55×65cm、深さ15～40cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。桁行・梁行ともに柱筋の通りは比較的良好で、柱間距離はほぼ一定している。

本掘立柱建物跡は、第7号掘立柱建物跡(N-3°-E)と直交するが、第3号掘立柱建物跡の主軸方位(N-32°-E)、第1号掘立柱建物跡(N-30°-E)、第4号掘立柱建物跡(N-71°-W)とは平行・直交関係にない。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

第3号掘立柱建物跡 (第238図)

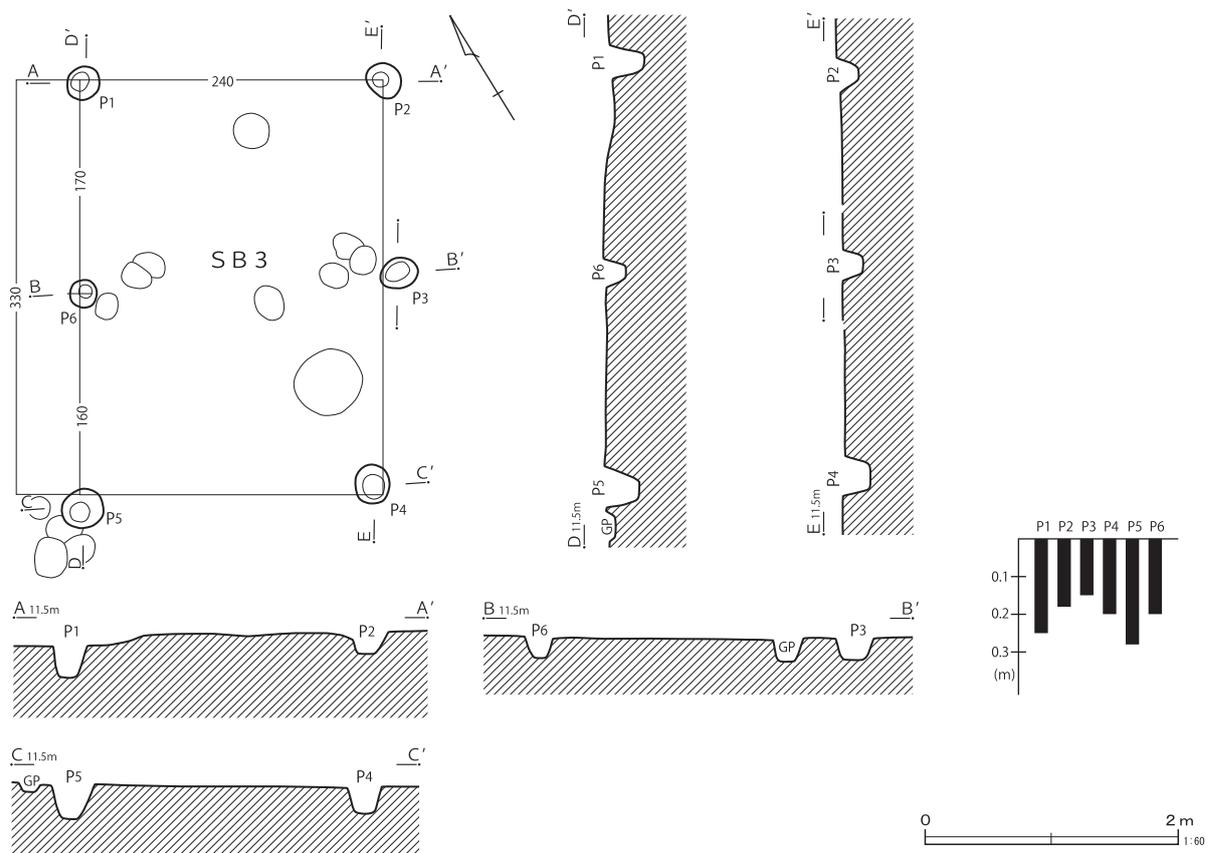
I・J-6グリッドに位置する。近隣の掘立柱建物跡との距離は、北西の第1号掘立柱建物跡と

は1.56m、北東の第2号掘立柱建物跡とは0.40m、第7・9・11号掘立柱建物跡(3棟重複)とは10.85m、西の第8号掘立柱建物跡とは17.32m、南の第4号掘立柱建物跡とは1.75mである。

母屋の規模は、桁行2間(3.30m)、梁行1間(2.40m)、面積7.92㎡であり、主軸方位はN-32°-Eを指す。柱間距離は、桁行P1-P6間1.70m、P6-P5間1.60m(平均1.65m)である。

柱穴の規模は径20×20cm～30×35cm、深さ15～28cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。桁行の柱筋の通りは比較的良好で、柱間距離はほぼ一定している。

本掘立柱建物跡は、隣接する第1号掘立柱建物跡の主軸方位(N-30°-E)、第13号掘立柱建物跡(N-30°-E)、第14号掘立柱建物跡(N-35°-



第238図 第3号掘立柱建物跡

E) とほぼ平行し、第10号掘立柱建物跡 (N-55°-W)、第11号掘立柱建物跡 (N-60°-W)、第12号掘立柱建物跡 (N-61°-W) とは直交する。第2号掘立柱建物跡 (N-87°-W)、第4号掘立柱建物跡 (N-71°-W) とは平行・直交関係にはない。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

第4号掘立柱建物跡 (第239図)

J-5・6グリッドに位置する。第10号周溝状遺構よりも新しいが、その他の重複遺構との新旧関係については確認できなかった。

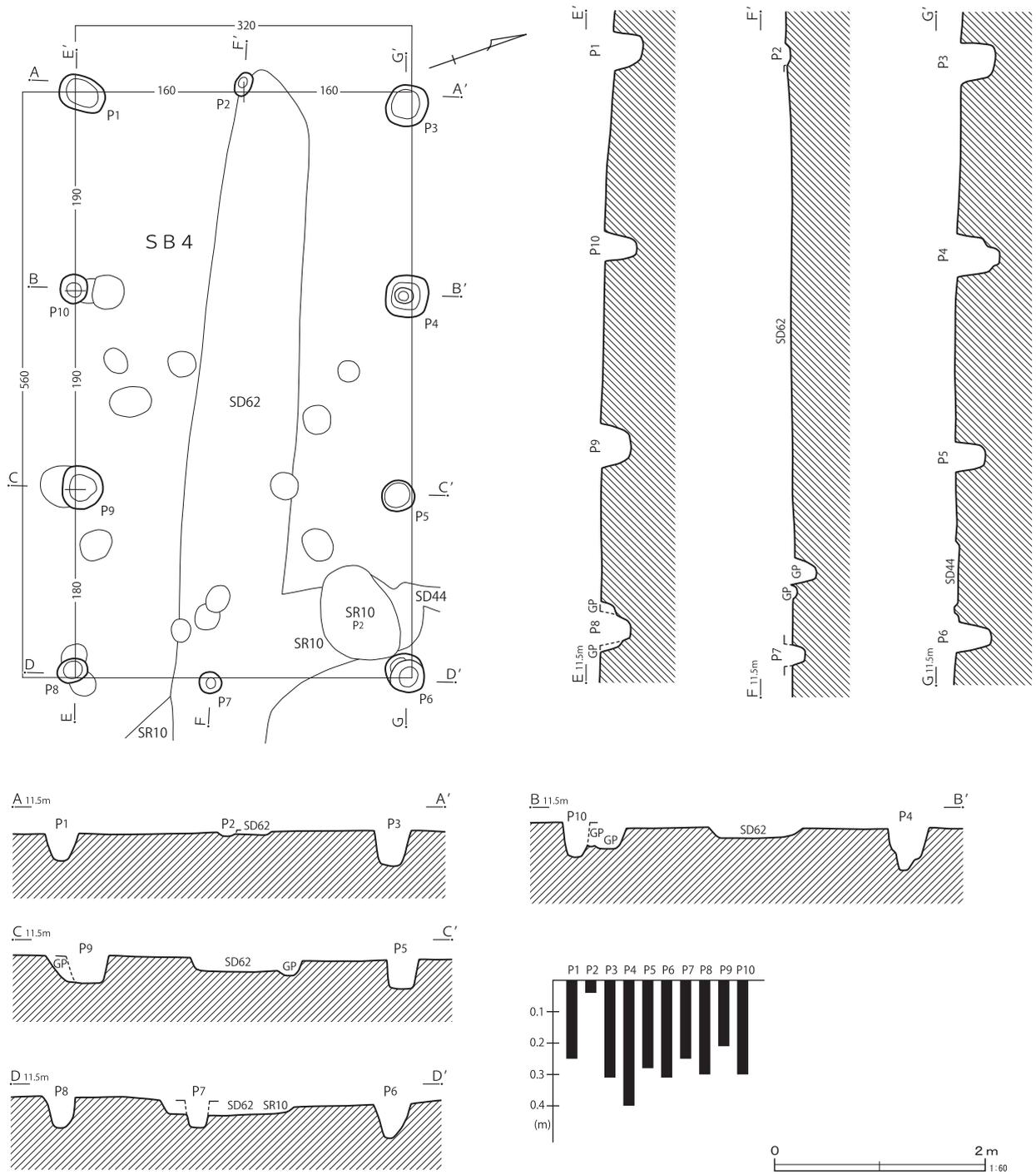
近隣の掘立柱建物跡との距離は、北の第2号掘立柱建物跡とは5.85m、第3号掘立柱建物跡とは1.75m、北西の第1号掘立柱建物跡とは2.76m、第8号掘立柱建物跡とは18.12mである。

母屋の規模は、桁行3間 (5.60m)、梁行2間

(3.20m)、面積17.92m²であり、主軸方位はN-71°-Wを指す。柱間距離は、桁行P1-P10間1.90m、P10-P9間1.90m、P9-P8間1.80m (平均1.87m)、梁行P1-P2間1.60m、P2-P3間1.60m (平均1.60m) である。

柱穴の規模は径20×20cm~40×40cm、深さ4~40cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。桁行・梁行ともに柱筋の通りは良好で、柱間距離はほぼ一定している。

本掘立柱建物跡は、第8号掘立柱建物跡 (N-18°-E)、第9号掘立柱建物跡 (N-10°-E) とほぼ直交するが、隣接する第3号掘立柱建物跡の主軸方位 (N-32°-E)、第1号掘立柱建物跡 (N-30°-E)、第2号掘立柱建物跡 (N-87°-W) との平行・直交関係はない。



第239図 第4号掘立柱建物跡

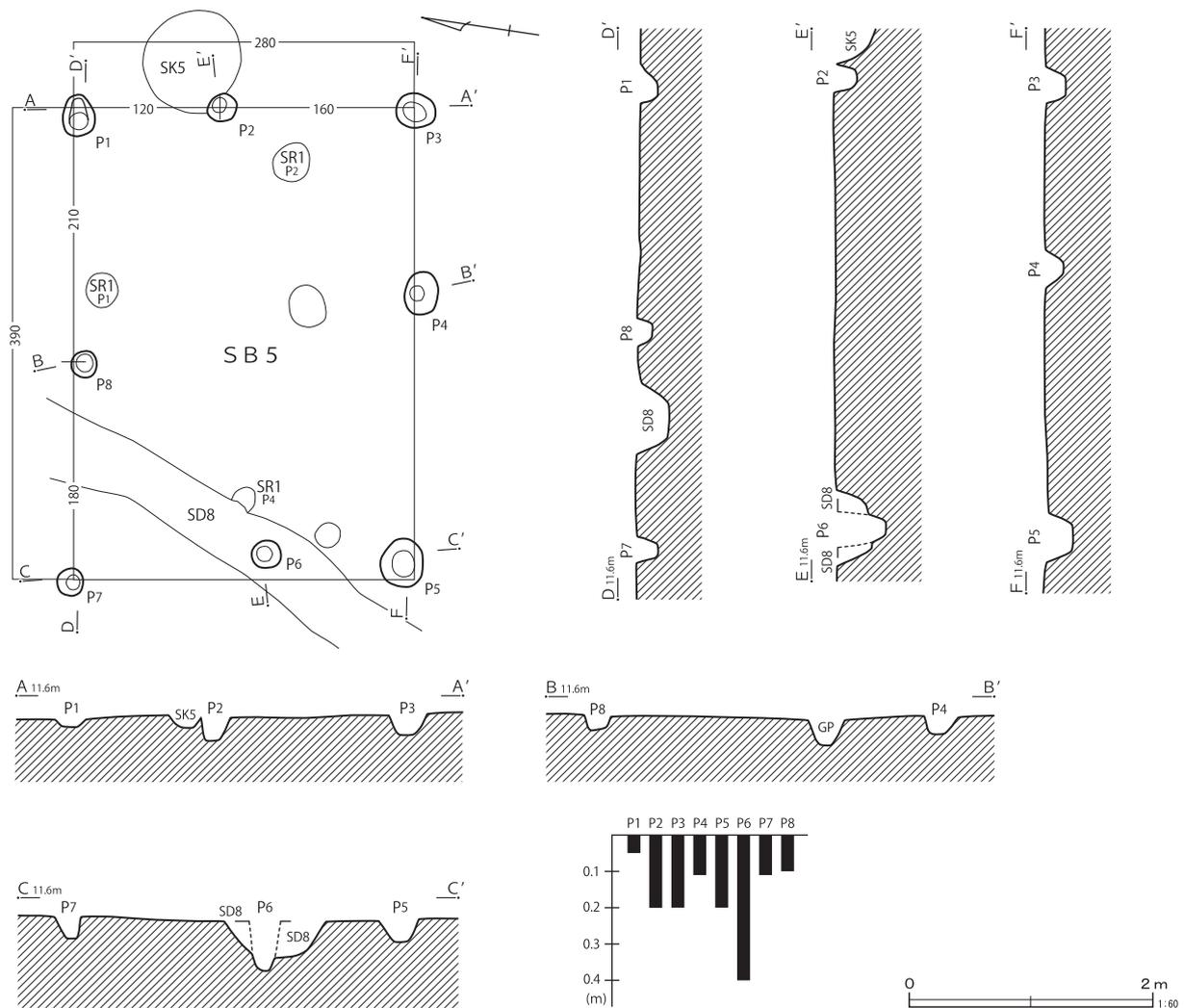
遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

第5号掘立柱建物跡 (第240図)

F・G-7グリッドに位置する。第1号周溝状遺構よりも新しいが、その他の重複遺構との新旧

関係については確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、南西の第12号掘立柱建物跡とは2.75m、南の第10号掘立柱建物跡とは3.02m、第6号掘立柱建物跡とは4.55mである。



第240図 第5号掘立柱建物跡

母屋の規模は、桁行2間(3.90m)、梁行2間(2.80m)、面積10.92㎡であり、主軸方位はN-79°-Eを指す。柱間距離は、桁行P1-P8間2.10m、P8-P7間1.80m(平均1.95m)、梁行P1-P2間1.20m、P2-P3間1.60m(平均1.40m)である。

柱穴の規模は径20×20cm~31×40cm、深さ5~40cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。桁行の柱筋の通りは比較的良好であるが、西側の梁の通りにはズレがみられる。柱間距離も一定していない。

本掘立柱建物跡は、隣接する第10号掘立柱建物跡の主軸方位(N-55°-W)、第12号掘立柱建物跡(N-61°-W)とは平行・直交関係にはない。第6号掘立柱建物跡(N-81°-W)とは平行に近い主軸方位である。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

第6号掘立柱建物跡(第241・242図)

G・H-6・7グリッドに位置する。第4号周溝状遺構、第70号溝跡よりも新しいが、その他の重複遺構との新旧関係については確認できなかった。第10号掘立柱建物跡とは重複関係にあるが、新

旧関係は不明である。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、西の第12号掘立柱建物跡とは0.91m、北の第5号掘立柱建物跡とは4.55m、南の第7・9・11号掘立柱建物跡（3棟重複）とは4.18mである。

総柱の掘立柱建物と推定される。母屋の規模は、桁行3間（7.40m）、梁行2間（3.70m）、面積27.38㎡であり、主軸方位はN-81°-Wを指す。柱間距離は、桁行P1-P10間2.60m、P10-P9間2.90m、P9-P8間1.90m（平均2.47m）、梁行P1-P2間1.70m、P2-P3間2.00m（平均1.85m）である。P11については、掘り替えが行われた結果と考えられる。桁行2列目の柱筋は、梁行中央ではなく、南側に寄った状態で検出された。

柱穴の規模は径20×25cm～55×55cm、深さ10～60cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的大きなものが多いといえる。桁行・梁行ともに、柱筋の通りにはズレがあり良好とはいえない。桁行の2間目は他に比べ、柱間距離が大きいといえる。また、その他の柱間距離も一定していない。

本掘立柱建物跡は、近隣の掘立柱建物跡の内、第7号掘立柱建物跡（N-3°-E）、第9号掘立柱建物跡（N-10°-E）、第15号掘立柱建物跡（N-5°-E）とは直行し、第5号掘立柱建物跡の主軸方位（N-79°-E）とは平行関係に近いといえる。第12号掘立柱建物跡（N-61°-W）とは平行・直行関係にはない。因みに、本遺構と重複している第10号掘立柱建物跡の主軸方位はN-55°-Wである。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

第7号掘立柱建物跡（第243図）

H・I-7グリッドに位置する。第4・8号周溝状遺構より新しく、第9・11号掘立柱建物跡よりは古い。その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。近隣の掘立柱建物跡との距離は、北

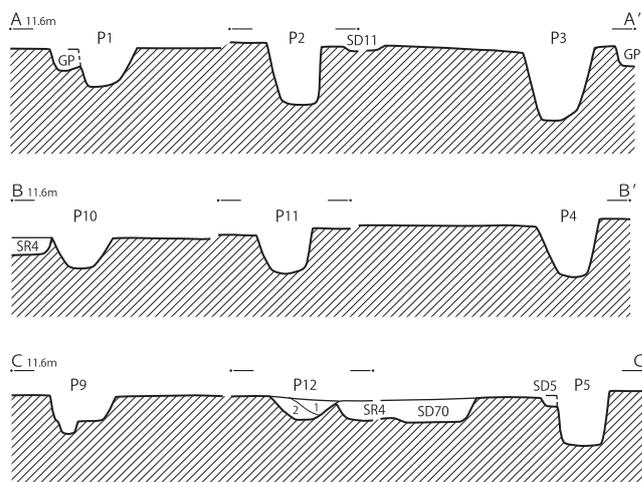
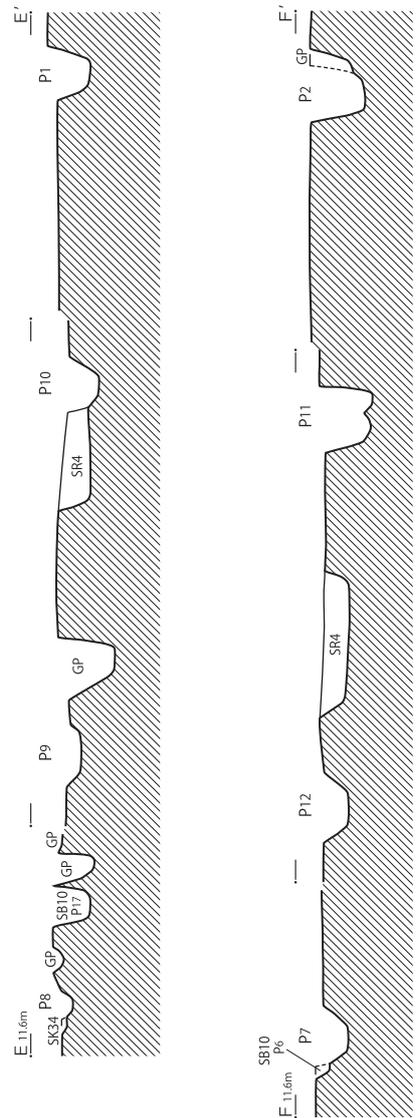
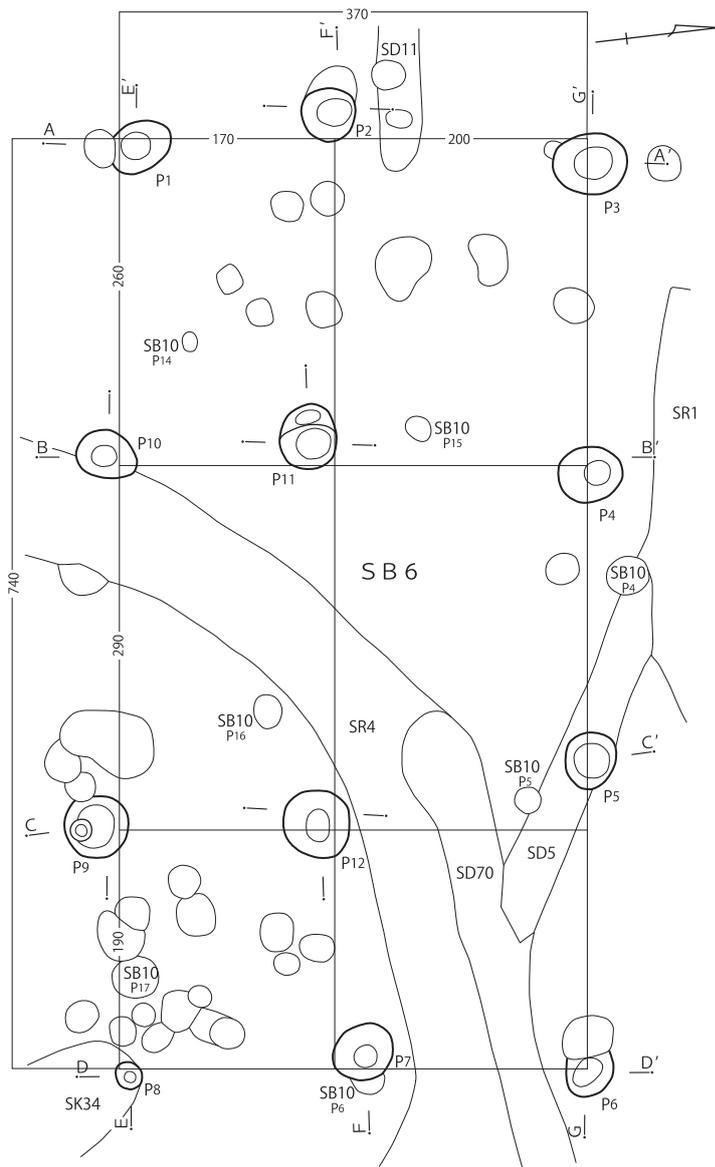
の第10号掘立柱建物跡とは2.20m、第6号掘立柱建物跡とは5.15m、北西の第12号掘立柱建物跡とは9.22m、南西の第2号掘立柱建物跡とは7.58m、第3号掘立柱建物跡とは11.50m、第1号掘立柱建物跡とは13.20mである。

母屋の規模は、桁行3間（4.60m）、梁行2間（2.70m）、面積12.42㎡であり、主軸方位はN-3°-Eを指す。柱間距離は、桁行P1-P10間1.20m、P10-P9間1.40m、P9-P8間2.00m（平均1.53m）、梁行P1-P2間1.20m、P2-P3間1.50m（平均1.35m）である。P7については、他遺構との重複により失われたと推定される。

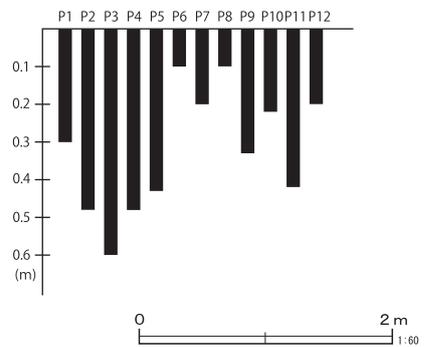
柱穴の規模は径25×25cm～35×70cm、深さ25～45cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形であるが、P3は、土壌状の掘り込みの中に、小ピットが存在しているかのような形態であった。径・深度ともに比較的小規模なものが多い。桁行・梁行ともに、柱筋の通りにはズレがあり良好とはいえない。

本掘立柱建物跡は、近隣の掘立柱建物跡の内、第2号掘立柱建物跡（N-87°-W）、第6号掘立柱建物跡（N-81°-W）と直交関係にあり、第15号掘立柱建物跡（N-5°-E）とは平行関係にある。なお、重複する第9号掘立柱建物跡（N-10°-E）は平行関係に近く、新旧関係は不明ながら建て替えられた可能性が考えられる。この他に、近在の第1号掘立柱建物跡（N-30°-E）、第3号掘立柱建物跡（N-32°-E）、第4号掘立柱建物跡（N-71°-W）、第10号掘立柱建物跡（N-55°-W）、第12号掘立柱建物跡（N-61°-W）とは平行・直交関係はない。因みに、本遺構と重複しているもう1棟の第11号掘立柱建物跡の主軸方位はN-60°-Wである。

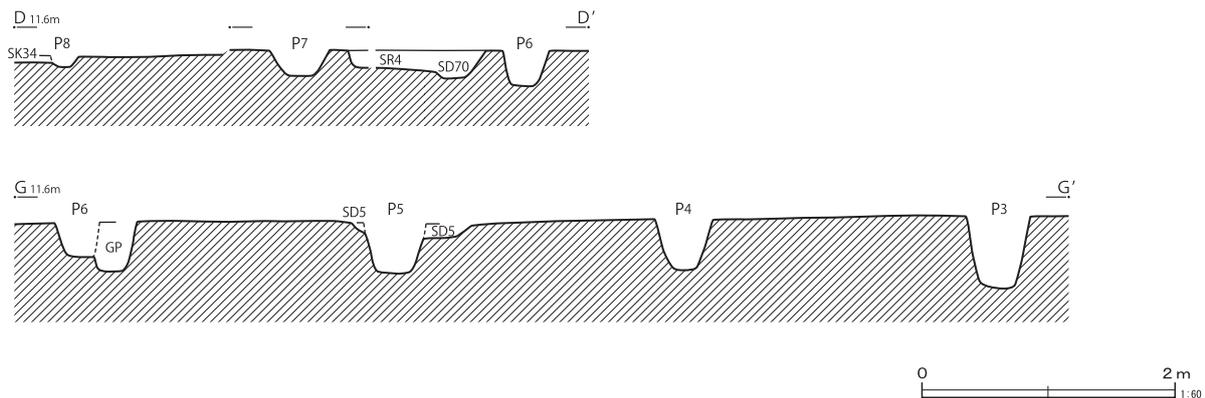
P1から土師器片が出土したが、図化には至らなかった。本遺構の時期は、古墳時代前期と推定される。



SB 6
 1 暗褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 多
 炭化物粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 少
 2 暗褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 少



第241图 第6号掘立柱建物跡 (1)



第242図 第6号掘立柱建物跡（2）

第8号掘立柱建物跡（第244図）

I-4グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。今回の調査で検出された掘立柱建物跡の中で、最西端に位置する。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、東の第1号掘立柱建物跡とは13.87m、第3号掘立柱建物跡とは17.32m、第2号掘立柱建物跡とは17.76m、南東の第4号掘立柱建物跡とは18.12mである。

母屋の規模は、桁行3間（5.40m）、梁行2間（3.30m）、面積17.82㎡であり、主軸方位はN-18°-Eを指す。柱間距離は、桁行P1-P10間1.80m、P10-P9間1.90m、P9-P8間1.70m（平均1.80m）、梁行P1-P2間1.50m、P2-P3間1.80m（平均1.65m）である。P7については、プランが失われたと推定される。

柱穴の規模は径20×23cm～35×42cm、深さ8～40cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。桁行・梁行ともに、柱筋の通りにはズレがあり良好とはいえない。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、第4号掘立柱建物跡（N-71°-W）とほぼ直交する主軸方位であるが、その他の第1号掘立柱建物跡（N-30°-E）、第2号掘立柱建物跡（N-87°-W）、第3号掘立柱建物跡（N-32°-E）との平行・

直行関係は認められない。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、古墳時代前期と推定される。

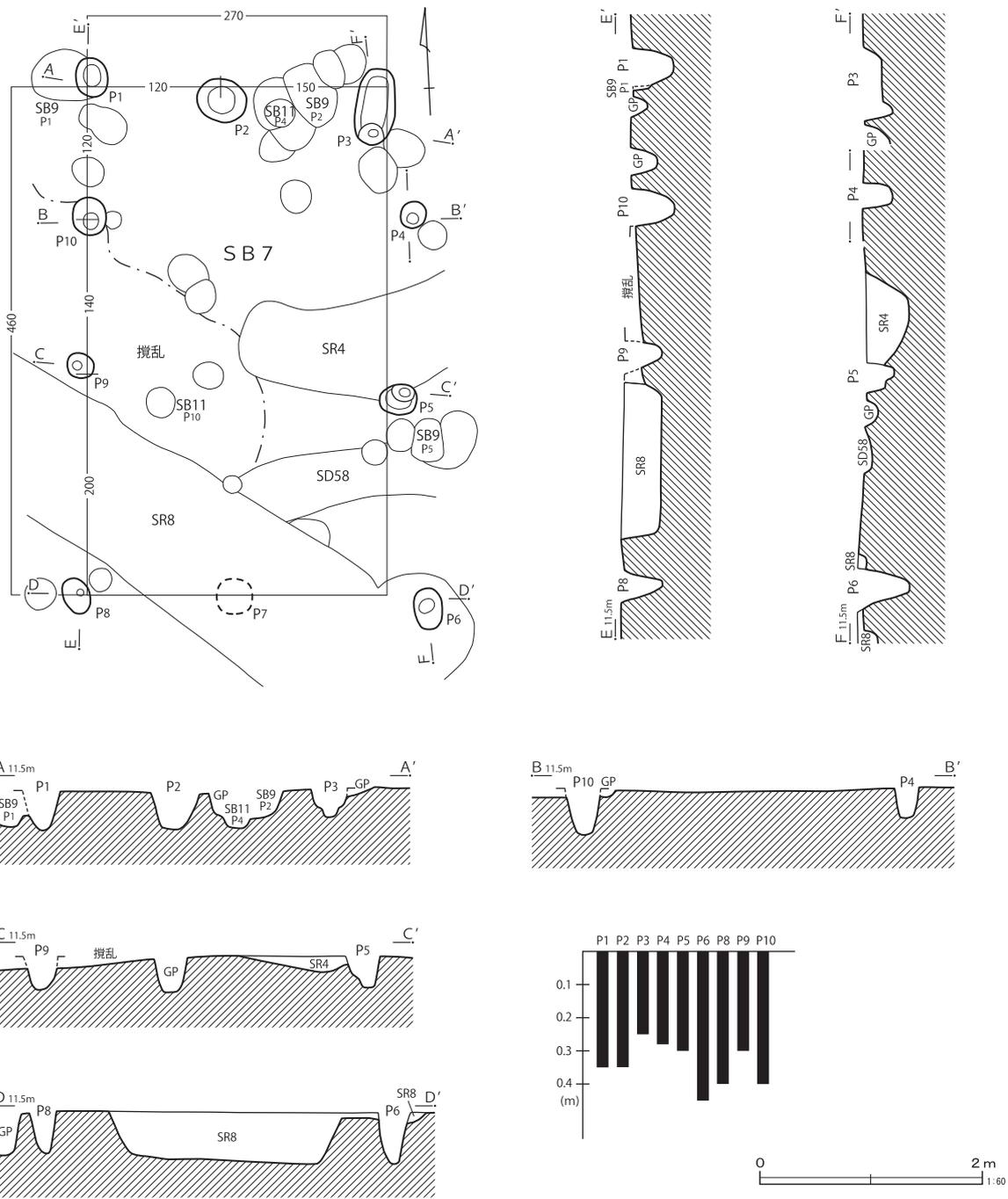
第9号掘立柱建物跡（第245図）

H・I-7グリッドに位置する。第4・8号周溝状遺構、第7号掘立柱建物跡より新しいが、その他の重複遺構との新旧関係については確認できなかった。第7・11号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北の第10号掘立柱建物跡とは1.55m、第6号掘立柱建物跡とは4.75m、北西の第12号掘立柱建物跡とは8.88m、南西の第2号掘立柱建物跡とは6.80m、第3号掘立柱建物跡とは10.85m、第1号掘立柱建物跡とは12.40mである。

P5とP10の位置関係から、P4・P9を想定した。その結果、母屋の規模は、桁行3間（5.00m）、梁行2間（3.80m）、面積19.00㎡であり、主軸方位はN-10°-Eを指す。柱間距離は、桁行P1-P10間1.90m、梁行P1-P2間2.40m、P2-P3間1.40m（平均1.90m）である。P7については、プランが失われたと推定される。

柱穴の規模は径（25）×28cm～62×75cm、深さ18～55cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なもの

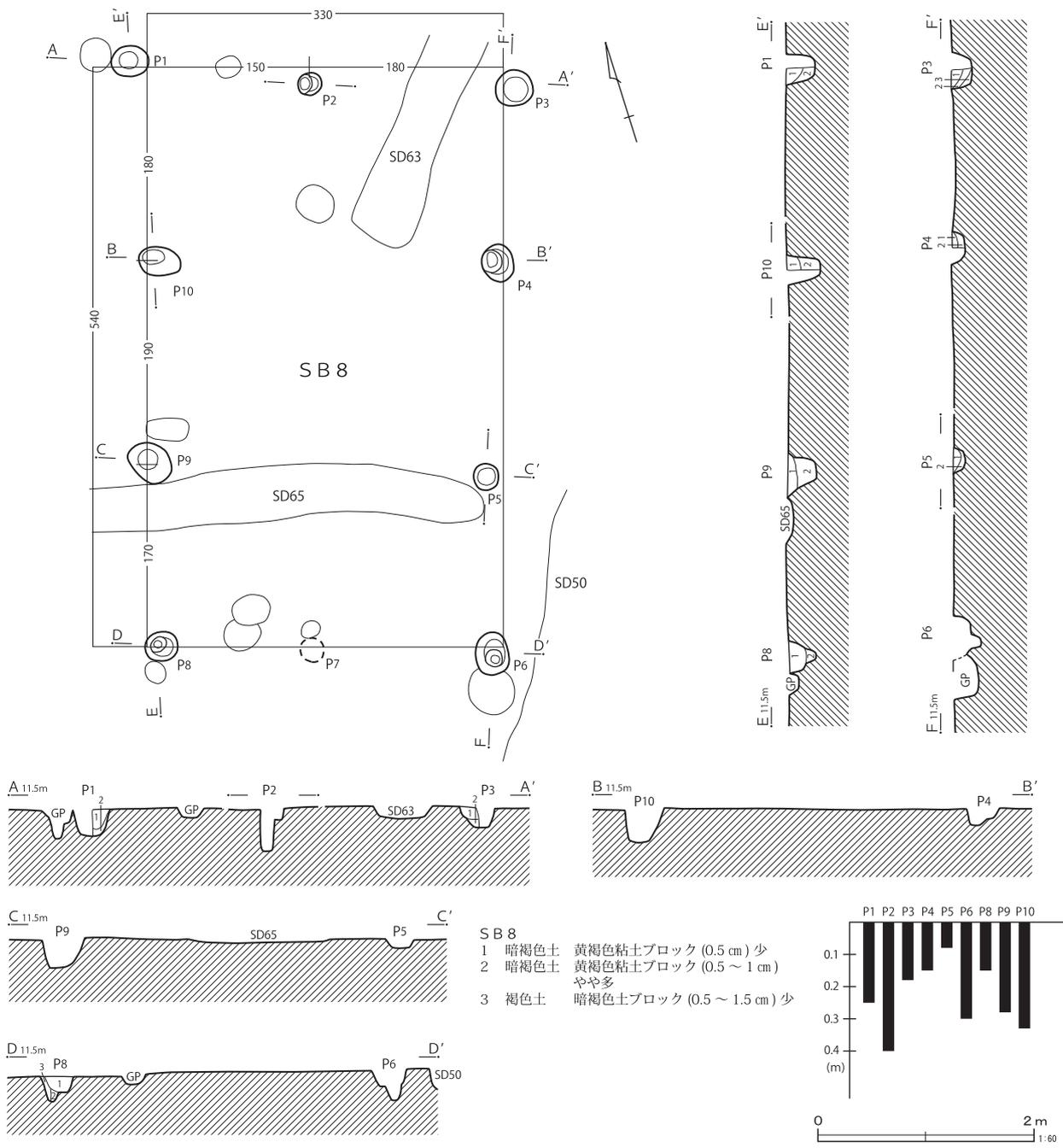


第243図 第7号掘立柱建物跡

が多い。桁行・梁行ともに、柱筋の通りにはズレがあり良好とはいえない。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、第4号掘立柱建物跡(N-71°-W)、第6号掘立柱建物跡(N-81°-W)とほぼ直交し、重複する第

7号掘立柱建物跡(N-3°-E)、第15号掘立柱建物跡(N-5°-E)とは平行関係に近い。但し、その他の第1号掘立柱建物跡(N-30°-E)、第2号掘立柱建物跡(N-87°-W)、第3号掘立柱建物跡(N-32°-E)、第11号掘立柱建物跡(N-60°-



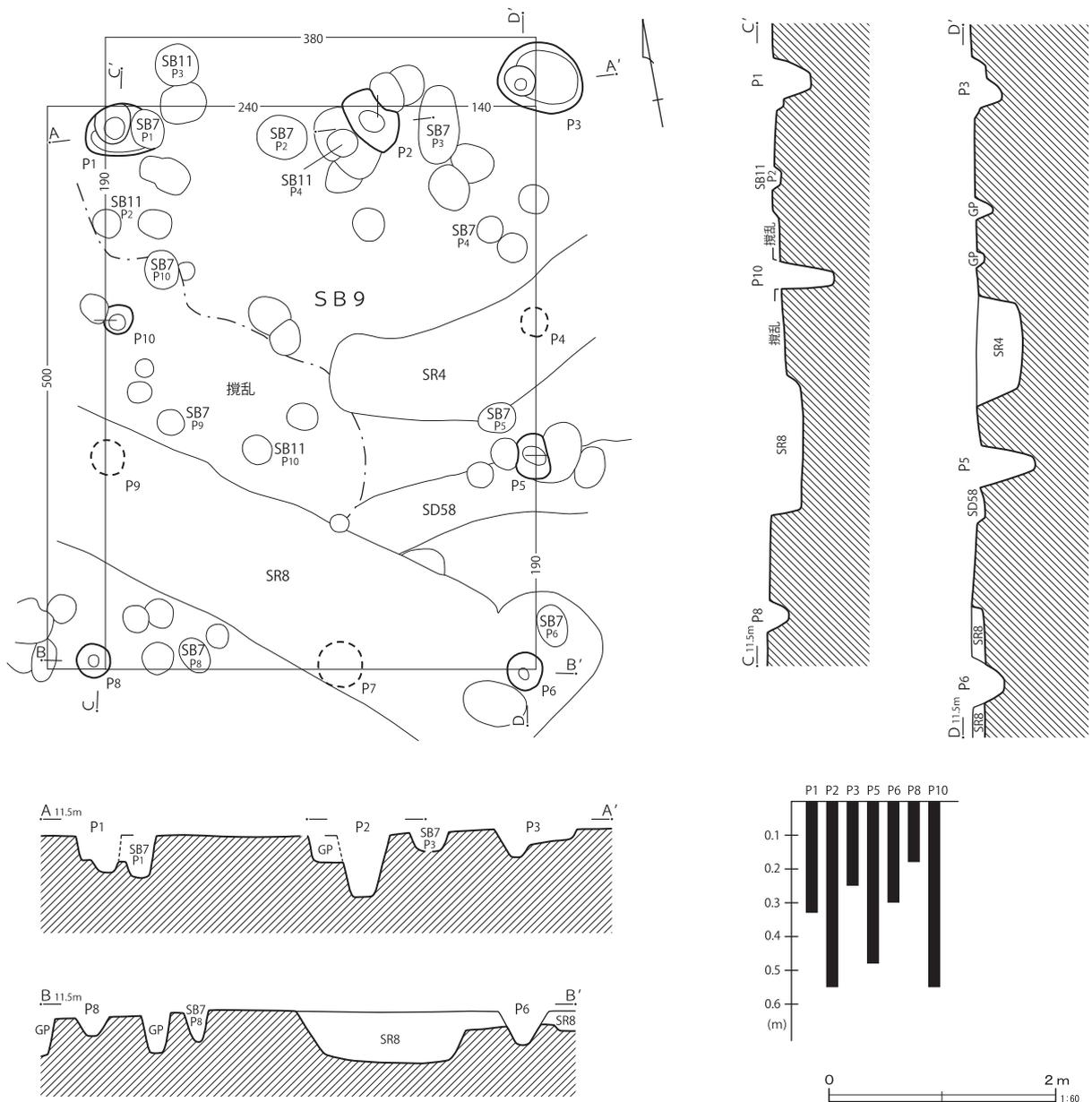
第244図 第8号掘立柱建物跡

W)、第12号掘立柱建物跡 (N-61°-W)、第5号掘立柱建物跡 (N-79°-E) との平行・直交関係は認められない。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

第10号掘立柱建物跡 (第246・247図)

G・H-6・7グリッドに位置する。第1・4号周溝状遺構よりも新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。第6号掘立柱建物跡とは重複関係にあるが、新旧関係は不明で



第245図 第9号掘立柱建物跡

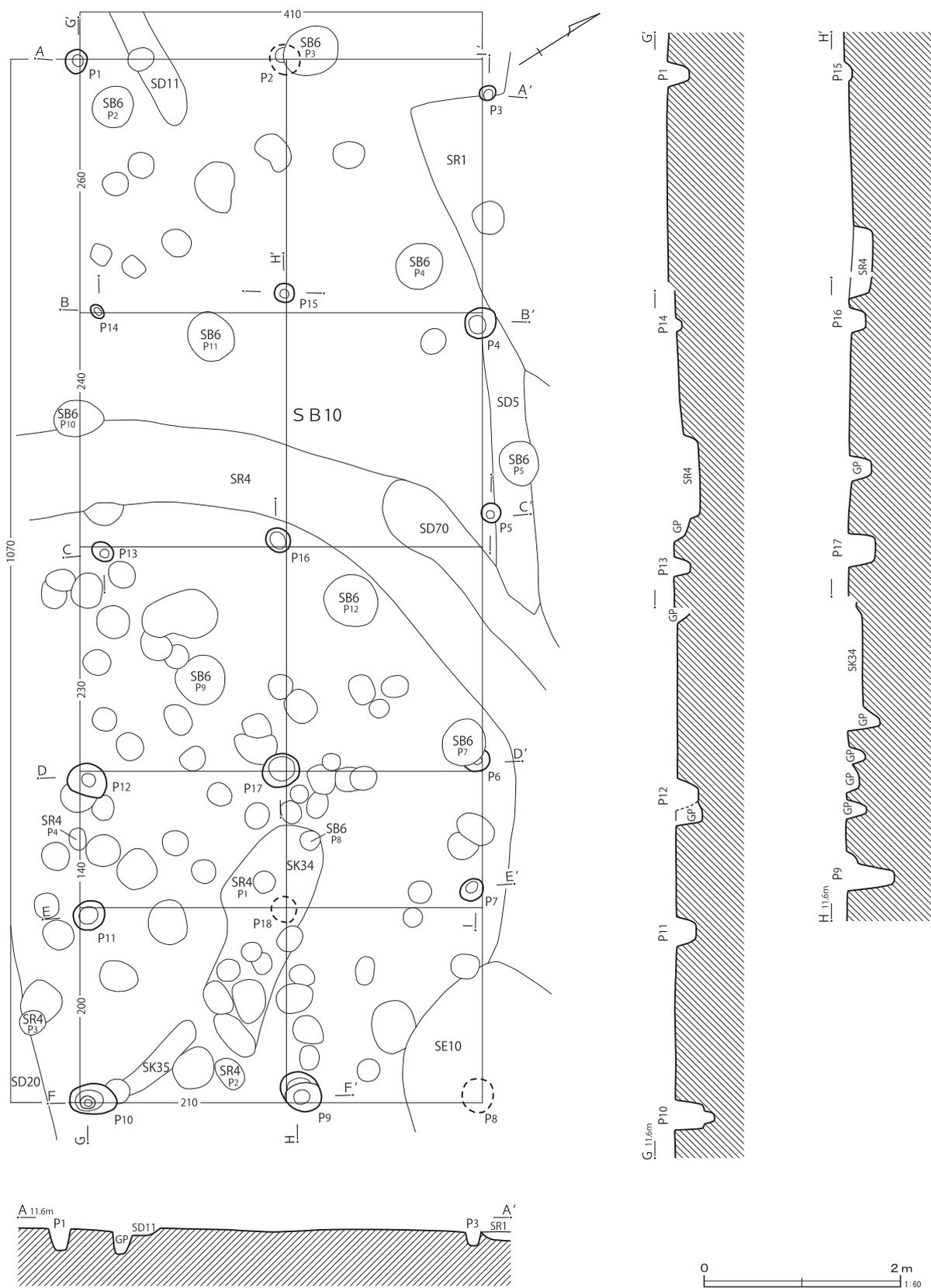
ある。P 2・P 8・P 18については、プランが失われていると推定して図示したものである。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、西の第12号掘立柱建物跡とは0.92m、北の第5号掘立柱建物跡とは3.02m、南の第9号掘立柱建物跡とは1.55m、第7号掘立柱建物跡とは2.20m、第11号掘立柱建物跡とは2.75mである。

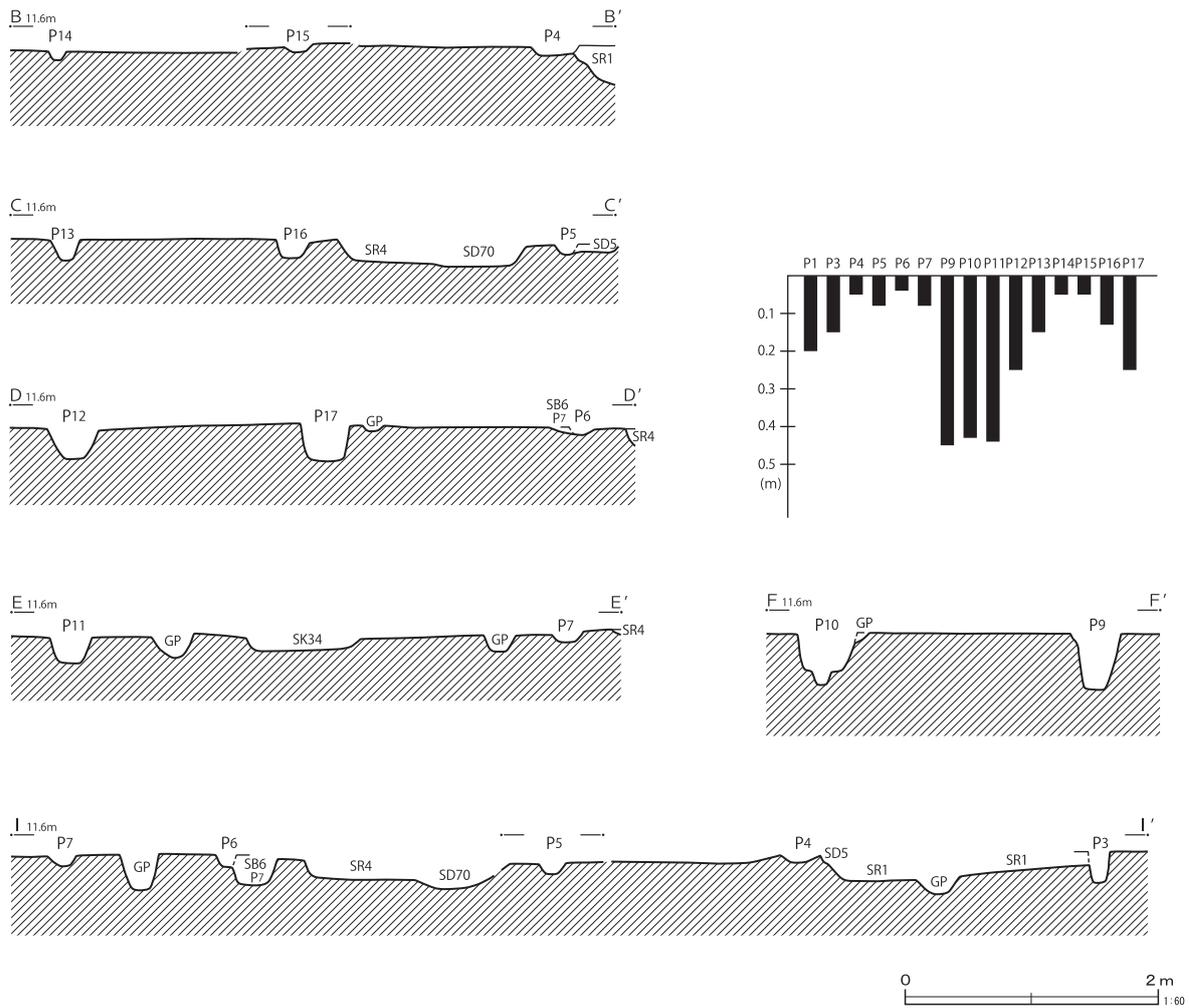
母屋の規模は、桁行5間（10.70m）、梁行2間

（4.10m）、面積43.87㎡であり、主軸方位はN-55°-Wを指す。柱間距離は、桁行 P 1 - P 14間 2.60m、P 14 - P 13間2.40m、P 13 - P 12間2.30m、P 12 - P 11間1.40m、P 11 - P 10間2.00m（平均2.14m）、梁行 P 12 - P 17間2.10m、P 17 - P 6間 2.00m（平均2.05m）である。

柱穴の規模は径10×15cm～40×43cm、深さ5～45cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕



第246图 第10号掘立柱建物迹 (1)



第247図 第10号掘立柱建物跡（2）

円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。桁行・梁行ともに、柱筋の通りにはズレがあり良好とはいえない。また、桁行では柱間が一定しておらず、特にP6-P7間、P11-P12間については、他の部分の柱間とは大きく異なっている。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、第14号掘立柱建物跡（N-35°-E）とは直交し、第1号掘立柱建物跡（N-30°-E）、第3号掘立柱建物跡（N-32°-E）、第13号掘立柱建物跡（N-30°-E）ともほぼ直交する。第11号掘立柱建物跡（N-60°-W）、第12号掘立柱建物跡（N-61°-W）とは平行関係にある。第2号掘立柱建物跡（N-87°-W）、第6号掘立柱建物跡（N-81°-

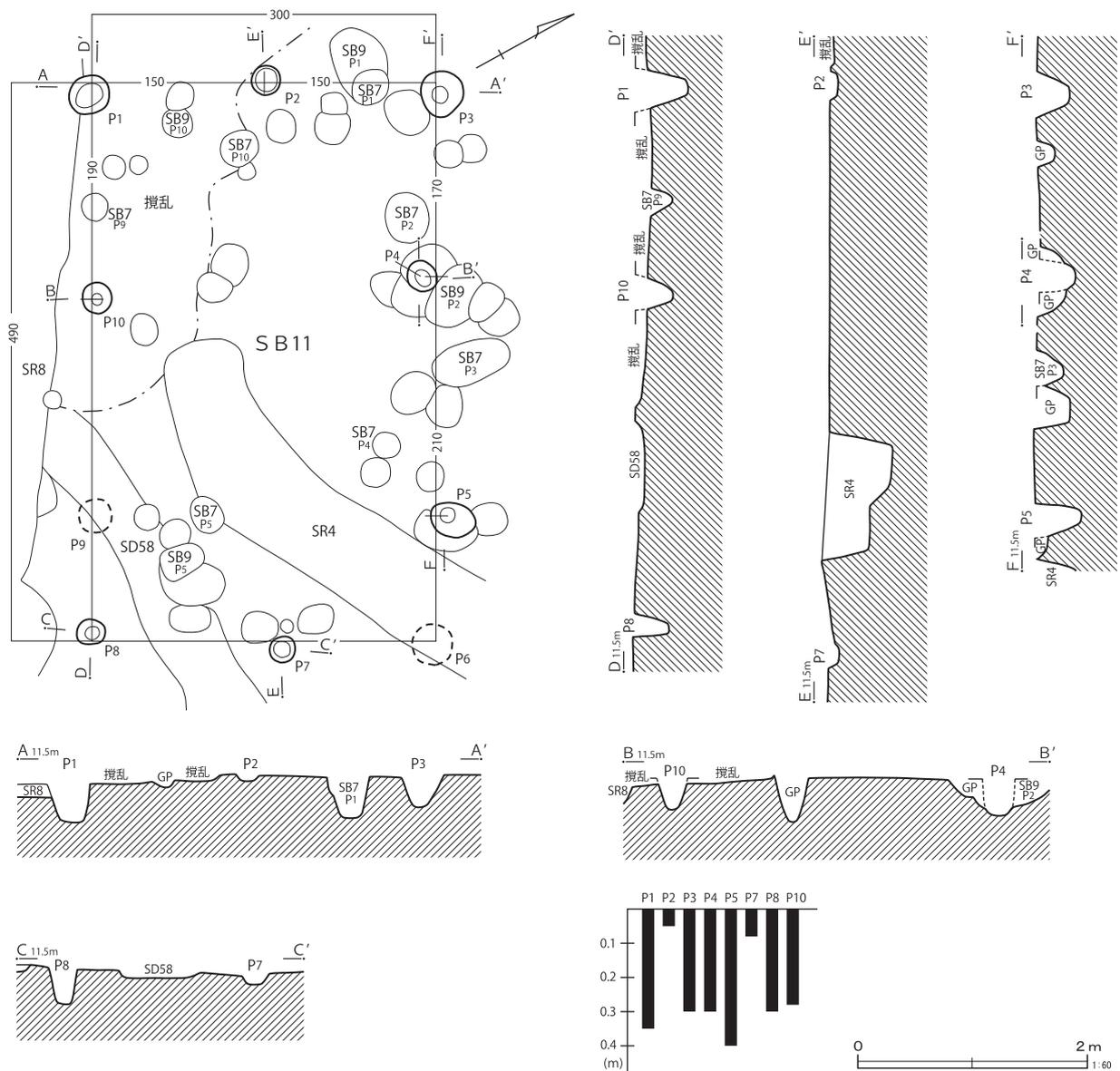
W）、第5号掘立柱建物跡（N-79°-E）との平行・直交関係は認められない。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

第11号掘立柱建物跡（第248図）

H・I-7グリッドに位置する。第4・8号周溝状遺構、第7号掘立柱建物跡より新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北の第10号掘立柱建物跡とは2.75m、第6号掘立柱建物跡とは4.18m、北西の第12号掘立柱建物跡とは9.15m、南西の第2号掘立柱建物跡とは8.56m、第3号掘立



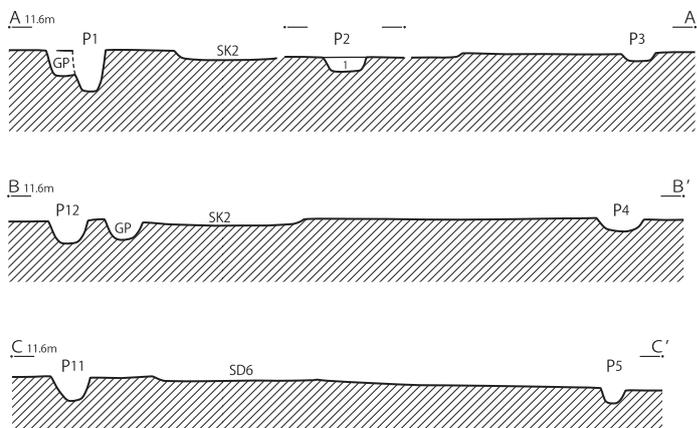
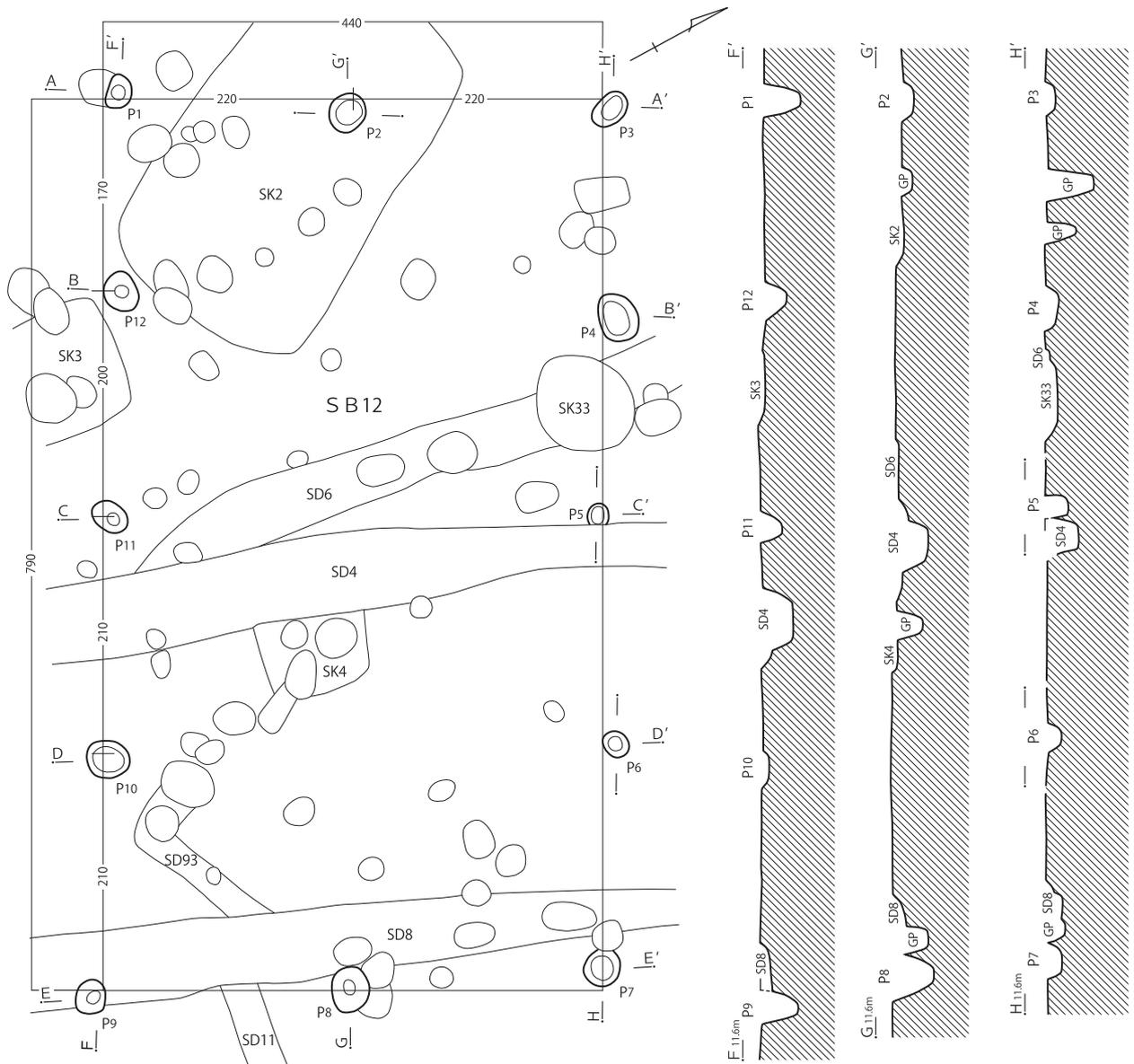
第248図 第11号掘立柱建物跡

柱建物跡とは12.80m、第1号掘立柱建物跡とは13.73mである。

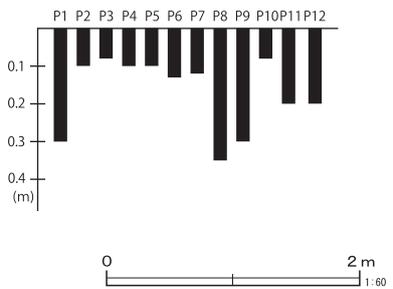
P5・P7との位置関係からP6を、P5との位置関係からP9を想定した。その結果、母屋の規模は、桁行3間(4.90m)、梁行2間(3.00m)、面積14.70㎡であり、主軸方位はN-60°-Wを指す。柱間距離は、桁行P1-P10間1.90m、P4-P5間2.10m(平均2.00m)、梁行P1-P2間1.50m、P2-P3間1.50m(平均1.50m)である。

柱穴の規模は径20×25cm~35×38cm、深さ5~40cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。桁行・梁行ともに、柱筋の通りは良くない。

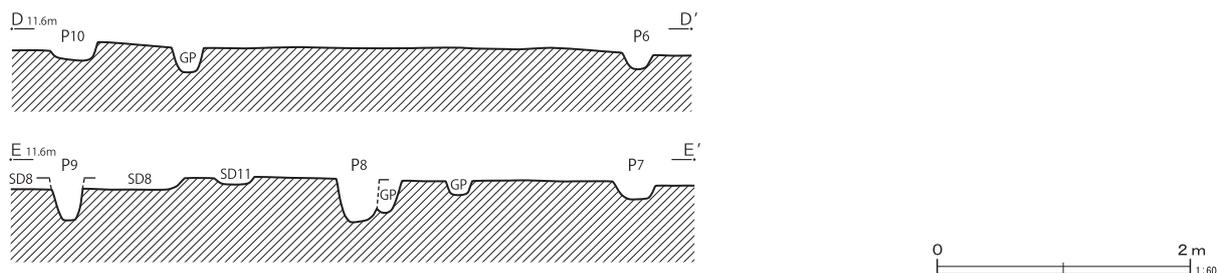
本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、第1号掘立柱建物跡(N-30°-E)、第3号掘立柱建物跡(N-32°-E)、第13号掘立柱建物跡(N-30°-E)、第14号掘立柱建物跡(N-35°-E)と直交もしくはほぼ直交し、第12号掘立柱建物跡(N-



S B 12
 1 黒褐色土 褐色地山ブロック少 粘性やや強



第249図 第12号掘立柱建物跡 (1)



第250図 第12号掘立柱建物跡（2）

61°-W)とは平行する。また、第10号掘立柱建物跡(N-55°-W)とも平行関係に近い主軸方位である。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

第12号掘立柱建物跡（第249・250図）

G-6グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北東の第5号掘立柱建物跡とは2.75m、東の第6号掘立柱建物跡とは0.91m、第10号掘立柱建物跡とは0.92m、南東の第11号掘立柱建物跡とは9.15m、第7号掘立柱建物跡とは9.22m、第9号掘立柱建物跡とは8.88mである。

母屋の規模は、桁行4間(7.90m)、梁行2間(4.40m)、面積34.76㎡であり、主軸方位はN-61°-Wを指す。柱間距離は、桁行P1-P12間1.70m、P12-P11間2.00m、P11-P10間2.10m、P10-P9間2.10m(平均1.98m)、梁行P1-P2間2.20m、P2-P3間2.20m(平均2.20m)である。桁行方向の柱間は一定しない。

柱穴の規模は径(20)×20cm~33×45cm、深さ8~35cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。桁行・梁行ともに、柱筋の通りは比較的良好い。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、

第1号掘立柱建物跡(N-30°-E)、第3号掘立柱建物跡(N-32°-E)と直交もしくはほぼ直交し、第11号掘立柱建物跡(N-60°-W)とは平行する。また、第10号掘立柱建物跡(N-55°-W)ともほぼ平行する主軸方位である。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

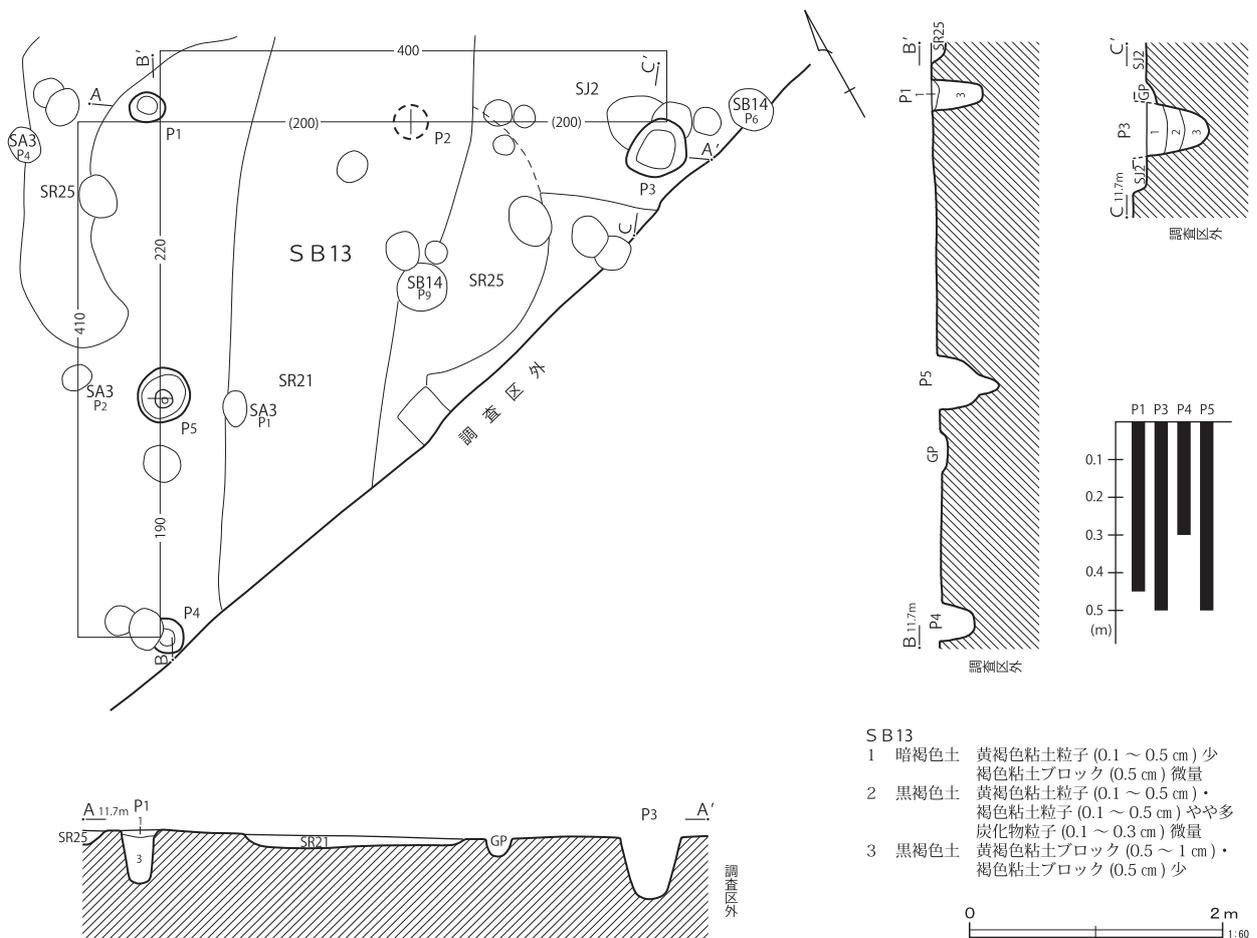
第13号掘立柱建物跡（第251図）

J-9・10グリッドに位置する。第2号住居跡、第21・25号周溝状遺構より新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。南西部分は調査区外に位置する。北西-南東方向の柱間が大き過ぎることから、P2を想定した。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北西の第17号掘立柱建物跡とは1.58m、北東の第15号掘立柱建物跡とは7.80m、東の第16号掘立柱建物跡とは9.67mであり、第14号掘立柱建物跡とは重複関係にある。

母屋は調査区外に続くため、規模は不明である。北東-南西方向(桁行か)は、2間(4.10m)までの検出である。北西-南東方向(梁行か)についても2間(4.00m)である。主軸方位はN-30°-EまたはN-60°-Wを指すと考えられる。柱間距離は、桁行と推定したP1-P5間2.20m、P5-P4間1.90m(平均2.05m)である。

柱穴の規模は径23×28cm~42×47cm、深さ30~50cmと幅がある。柱筋の通りは良くない。



第251図 第13号掘立柱建物跡

本掘立柱建物跡は、今回の調査で確認された掘立柱建物跡の内、第1号掘立柱建物跡 (N-30°-E)、第3号掘立柱建物跡 (N-32°-E) と平行もしくはほぼ平行し、第14号掘立柱建物跡 (N-35°-E) ととも平行関係に近い。そして、第11号掘立柱建物跡 (N-60°-W) とは直交している。また、第10号掘立柱建物跡 (N-55°-W) ととも直交する主軸方位である。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

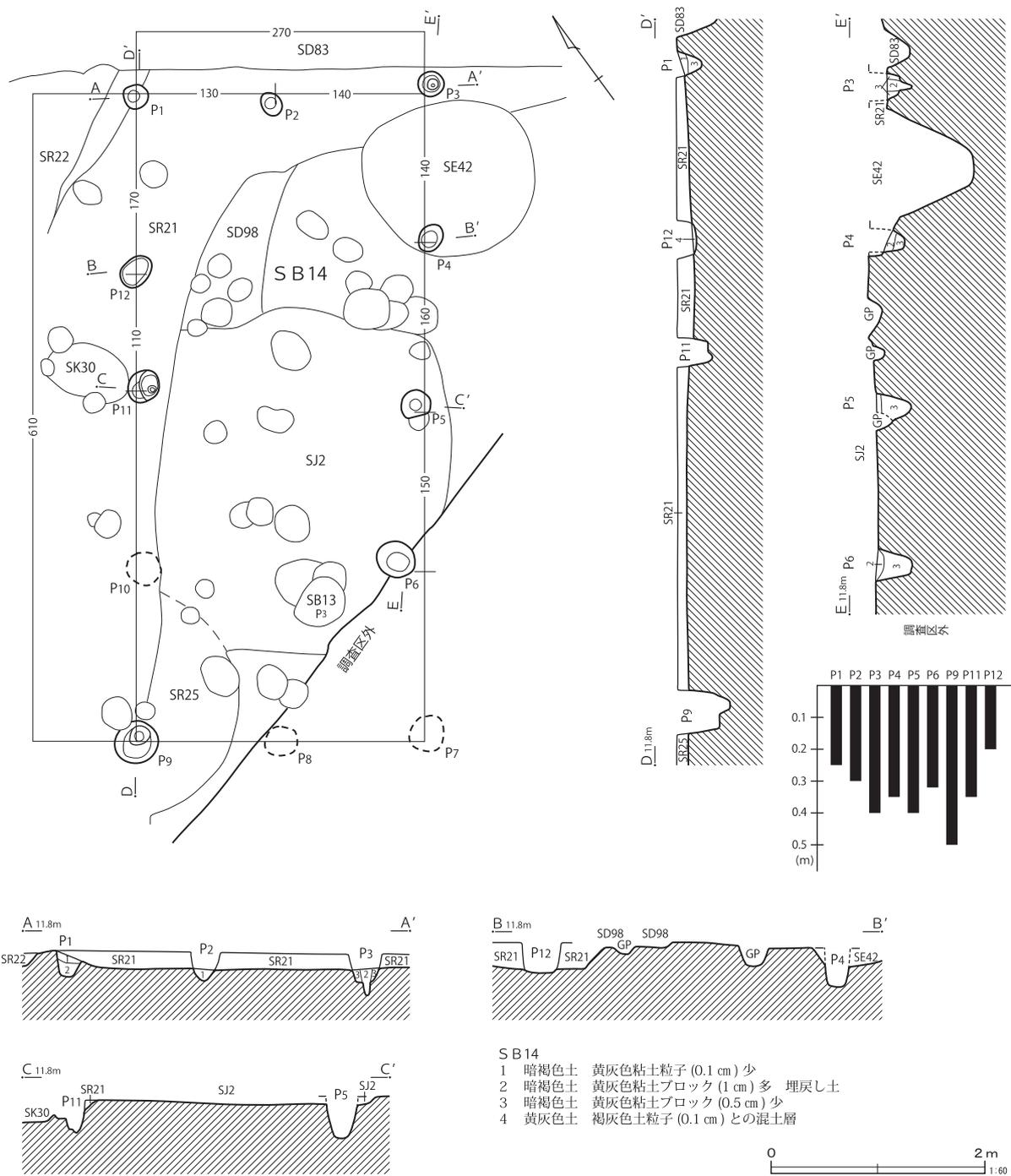
第14号掘立柱建物跡 (第252図)

J-10グリッドに位置する。第2号住居跡、第21・25号周溝状遺構、第98号溝跡よりも新しいが、

その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。南端部は調査区外に位置する。P6・P9との位置関係からP7・P8およびP10を想定した。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、西の第17号掘立柱建物跡とは3.45m、北東の第15号掘立柱建物跡とは3.25m、東の第16号掘立柱建物跡とは5.33mであり、第13号掘立柱建物跡とは重複関係にある。

母屋の規模は、桁行4間 (6.10m)、梁行2間 (2.70m)、面積16.47m²であり、主軸方位はN-35°-Eを指す。柱間距離は、桁行P1-P12間1.70m、P12-P11間1.10m、P11-P10間 (1.70m)、P10-P9間 (1.60m) (平均1.53m)、梁行P1-P2間1.30m、P2-P3間1.40m (平均1.35m) である。



第252図 第14号掘立柱建物跡

桁行方向の柱間は一定しない。

柱穴の規模は径18×22cm～40×49cm、深さ20～50cmと幅がある。桁行の柱筋の通りは良くない。

本掘立柱建物跡は、今回の調査で確認された掘立柱建物跡の内、第3号掘立柱建物跡 (N-32°-

E) とはほぼ平行し、第1号掘立柱建物跡 (N-30°-E)、第13号掘立柱建物跡 (N-30°-E) ととも平行関係に近い。そして、第10号掘立柱建物跡 (N-55°-W) とは直交し、また、第11号掘立柱建物跡 (N-60°-W) とともほぼ直交する主軸方位

である。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

第15号掘立柱建物跡（第253図）

I・J-10グリッドに位置する。第19・26・27号周溝状遺構、第89号溝跡よりも新しいが、第85・90号溝跡との新旧関係は確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、南東の第16号掘立柱建物跡とは2.10m、南西の第14号掘立柱建物跡とは3.25m、第13号掘立柱建物跡とは7.80m、第17号掘立柱建物跡とは9.86mである。

母屋の規模は、桁行2間（4.10m）、梁行1間（3.90m）、面積20.09㎡であり、主軸方位はN-5°-Eを指す。柱間距離は、桁行P2-P3間2.00m、P3-P4間2.10m（平均2.05m）、梁行P1-P2間3.90mである。

本遺構は、今回の調査で検出された掘立柱建物跡の中で唯一、棟持柱の柱穴と推定されるピット（P7・P8）を有するものである。この2つのピットの梁行までの距離は、P7が2.30m、P8が1.40mであり、距離が異なっている。また、P8が梁中央の延長線上にあるのに対し、P7では若干西に寄っている。

母屋にかかわる柱穴の規模は径25×30cm～38×40cm、深さ20～82cmと幅がある。棟持柱の径と深さは、P7が30×38cm、深さ45cm、P8が25×30cm、深さ70cmである。各柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。柱筋は比較的通っている。P2・P7・P8では、柱痕跡が認められた。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、第7号掘立柱建物跡（N-3°-E）と平行し、第9号掘立柱建物跡（N-10°-E）とも平行に近い。また、第6号掘立柱建物跡（N-81°-W）とはほぼ直交する主軸方位である。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

第16号掘立柱建物跡（第254図）

I・J-11グリッドに位置する。第27号周溝状遺構よりも新しい。P6・P9との位置関係から、P5と調査区外にP7・P8を想定した。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北西の第15号掘立柱建物跡とは2.10m、西の第14号掘立柱建物跡とは5.33m、第13号掘立柱建物跡とは9.67m、第17号掘立柱建物跡とは13.79mである。

母屋の規模は、桁行は3間（5.10m）と推定した。梁行は2間（3.30m）、面積は16.83㎡と推定される。主軸方位はN-27°-Wを指す。柱間距離は、桁行P1-P10間1.80m、P10-P9間1.90m、P9-P8（1.40m）（平均1.70m）、梁行P1-P2間1.70m、P2-P3間1.60m（平均1.65m）である。

柱穴の規模は径20×25cm～48×62cm、深さ6～（52）cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。柱筋は比較的通っている。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡との平行もしくは直行関係はみられない。

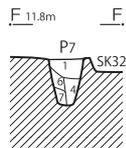
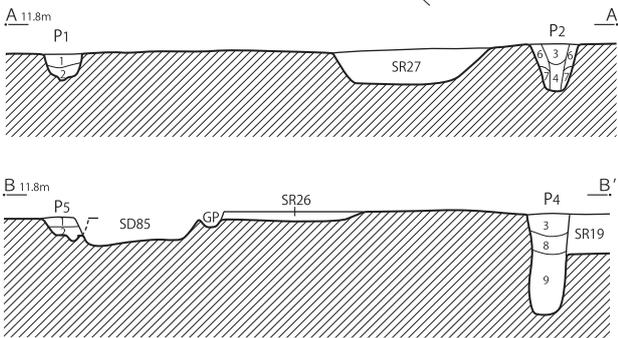
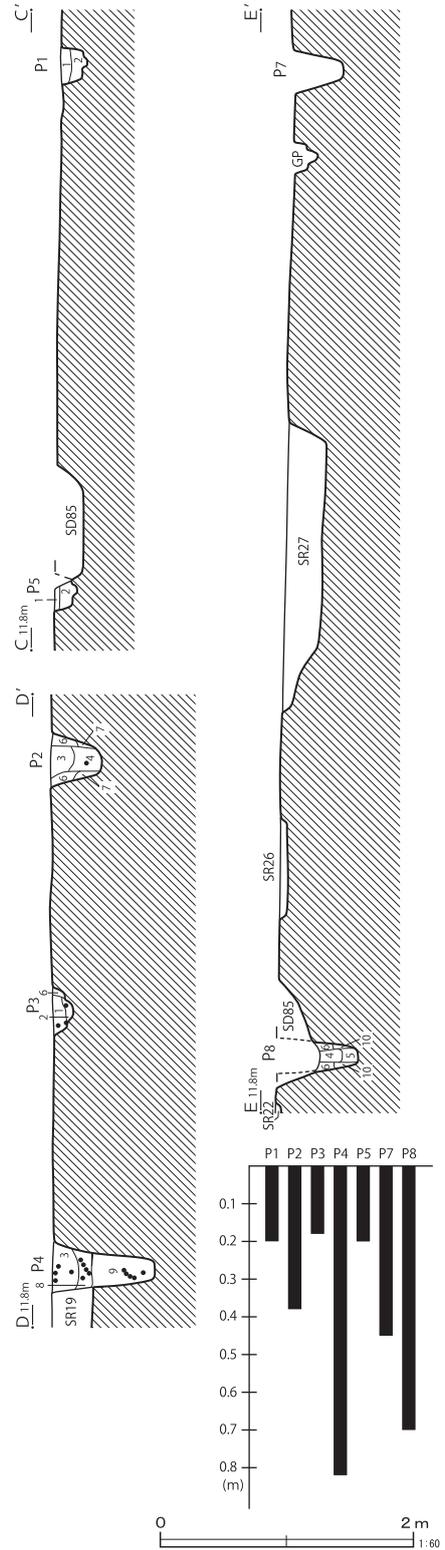
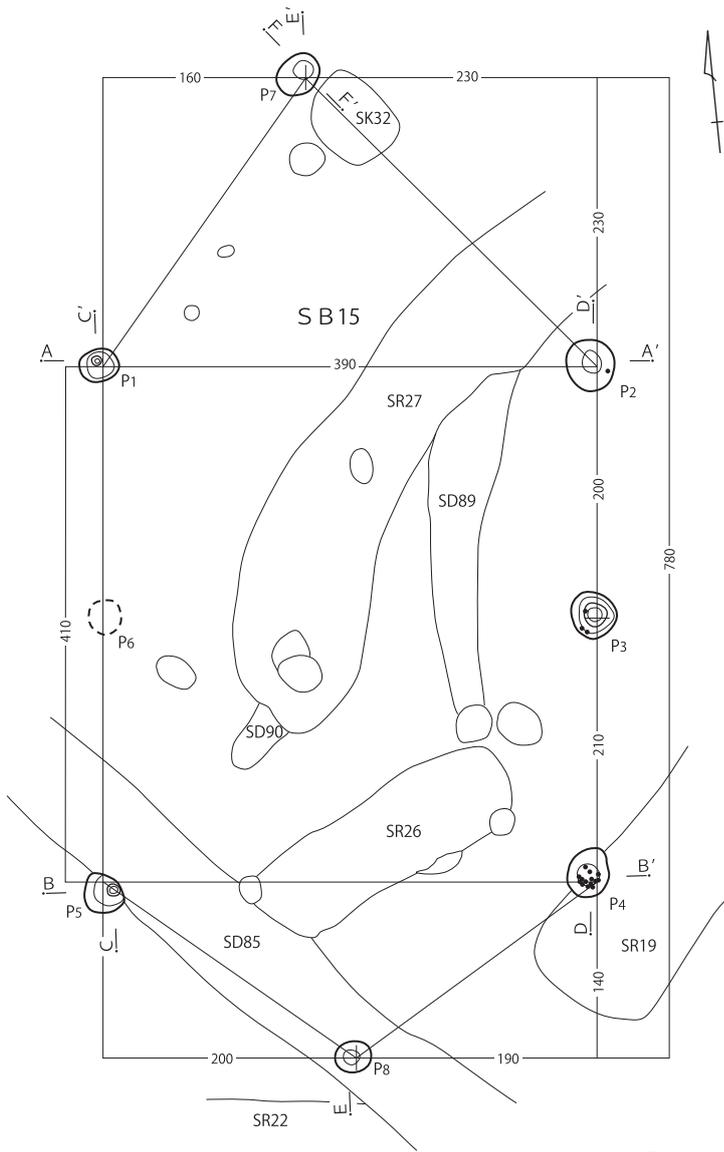
遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

第17号掘立柱建物跡（第255図）

J-9グリッドに位置する。第87号溝跡と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。北西部分は、第75号溝跡との重複により、失われていると推定される。さらにその北側にはピットが検出されていないことから、2間×2間の総柱建物としてP7～9を図示した。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、南東の第13号掘立柱建物跡とは1.58m、東の第14号掘立柱建物跡とは3.45m、第16号掘立柱建物跡とは13.79m、北東の第15号掘立柱建物跡とは9.86mである。

母屋の規模は、桁行は2間（推定3.60m）と推定した。梁行は2間（2.90m）、面積は10.44㎡と推定される。主軸方位はN-43°-Wを指す。柱間距離は、桁行P7-P1間（1.90m）、P1-P6間

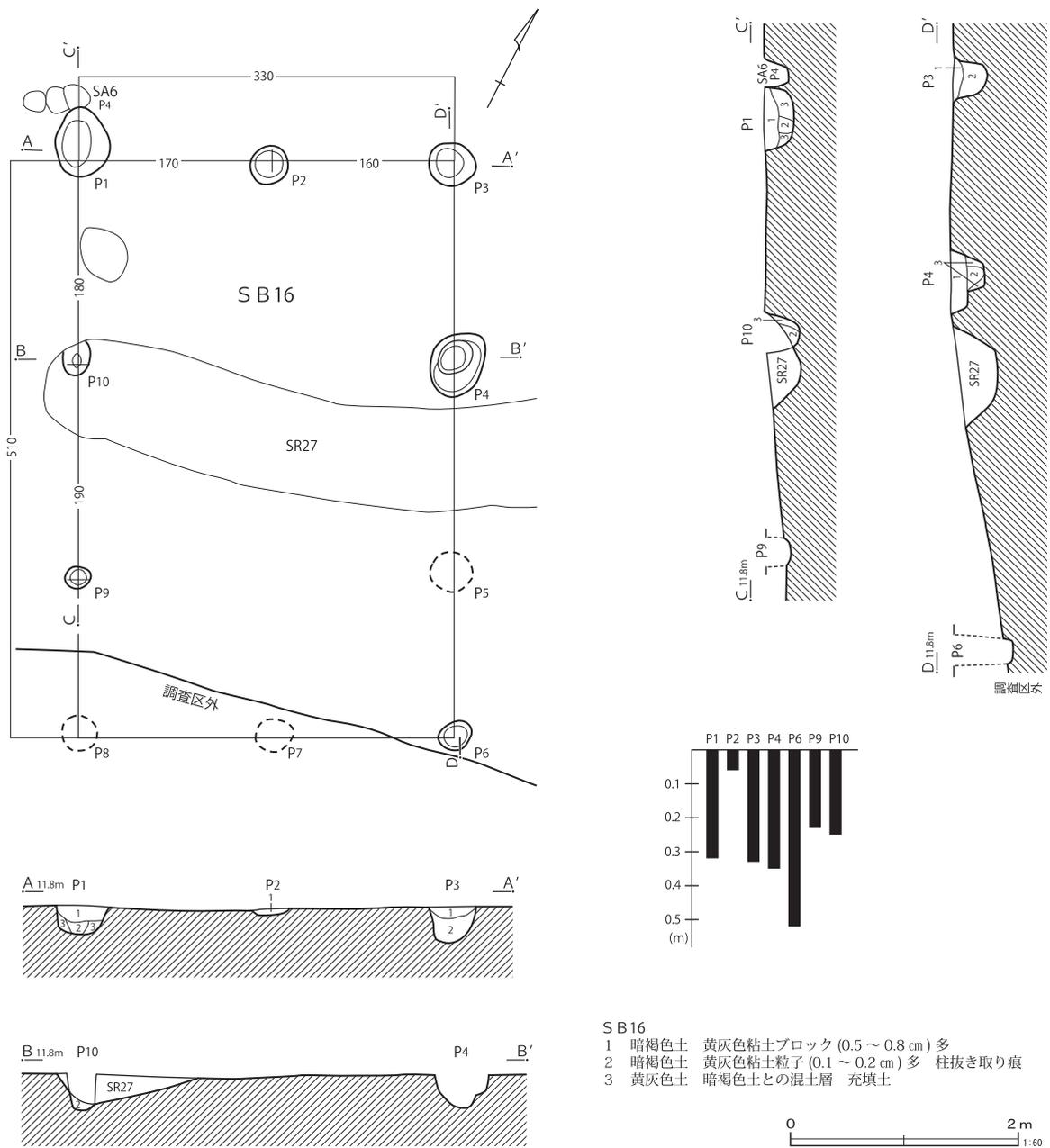


SB15

- 1 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 cm)・褐色粘土ブロック (0.5 cm) 多 埋戻し土か
- 2 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) やや多
- 3 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 微量 灰色粘土ブロック (1 cm) 少 柱抜き取り後の自然堆積土
- 4 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 微量 柱痕跡
- 5 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 微量 粘性強 柱痕跡
- 6 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 1 cm)・褐色粘土ブロック (0.5 ~ 1 cm)・灰色粘土ブロック (0.5 ~ 0.7cm) 多 充填土

- 7 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 1 cm)・褐色粘土ブロック (0.5 ~ 1 cm) 少 充填土
- 8 黒灰色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm)・褐色粘土ブロック (1 cm) 微量 黄灰色粘土ブロック (1 cm) 多
- 9 黒褐色土 灰色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) 微量 粘性やや強
- 10 黒褐色土 褐色粘土ブロック (5 cm)・黒褐色土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) 少 充填土

第253図 第15号掘立柱建物跡



第254図 第16号掘立柱建物跡

1.70m (推定平均1.80m)、梁行 P 6 - P 5 間1.60m、P 5 - P 4 間1.30m (平均1.45m) である。

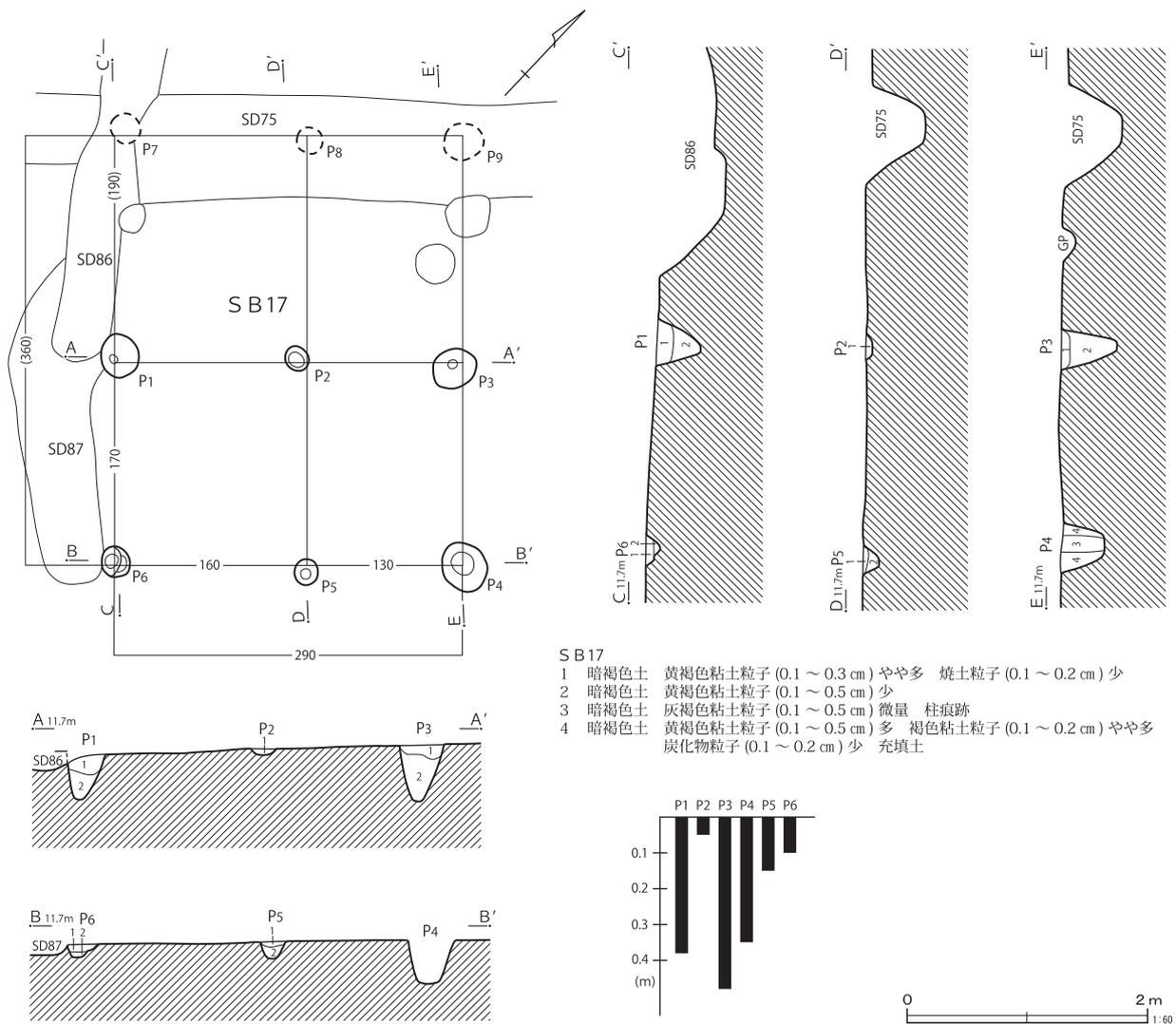
柱穴の規模は径18×25cm~38×45cm、深さ 5 ~ 48cm と幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。柱筋は比較的通っている。P 4 では、柱痕跡が認められた。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の中で、平行もしくは直交するものはみられない。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから、中・近世と推定される。

D区第2号掘立柱建物跡 (第256図)

H-14グリッドに位置する。D区第1号墳よりも新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確



第255図 第17号掘立柱建物跡

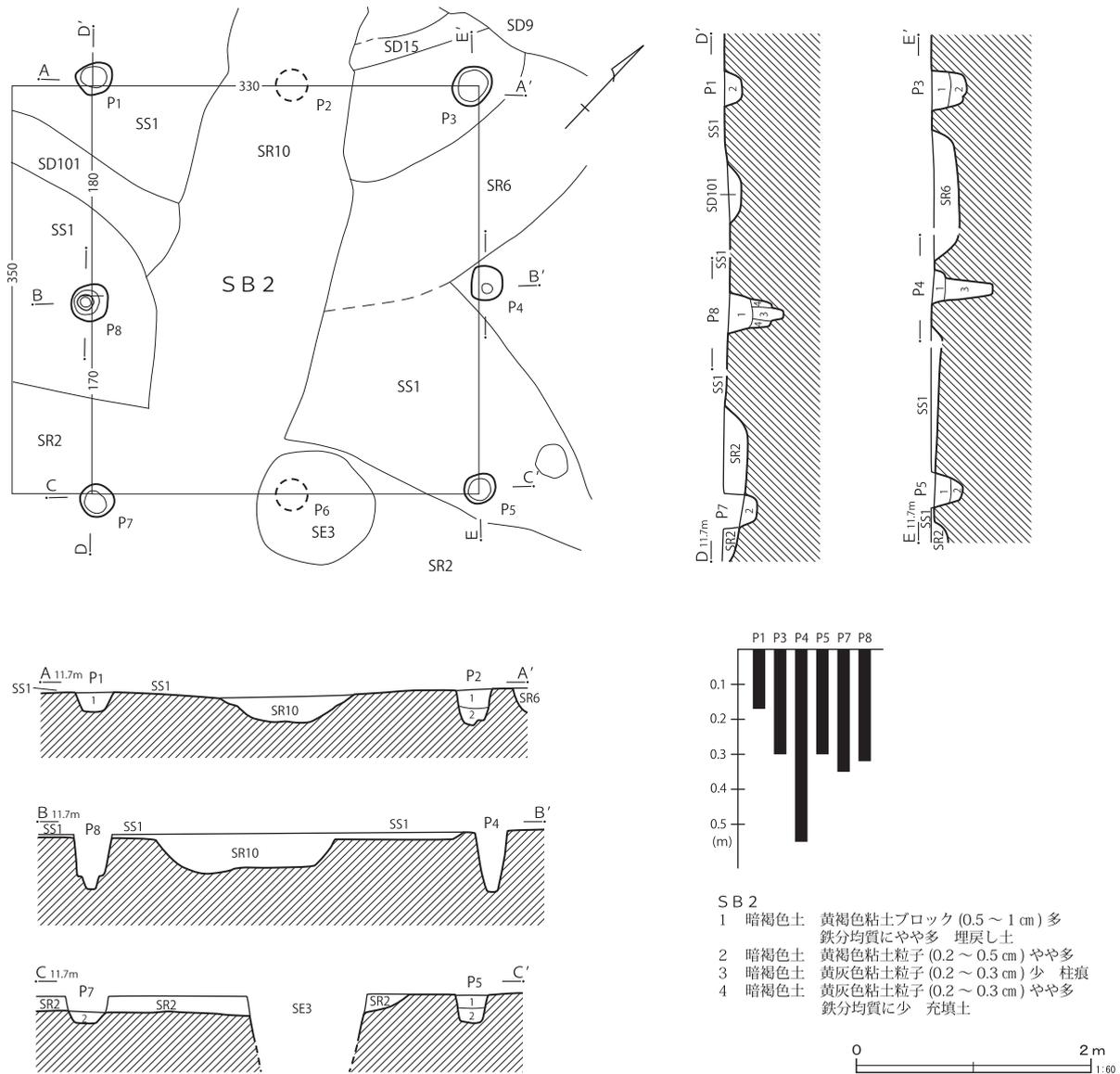
認できなかった。梁行の柱間距離が、桁行の柱間距離に比べ極めて大きいことから、重複するD区第10号周溝状遺構・D区第3号井戸跡の調査の過程で、梁行の柱穴が失われたとの推測の基、P2・P6を想定した。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、南のD区第3号掘立柱建物跡とは3.12m、北のD区第4号掘立柱建物跡とは3.38m、東のD区第8号掘立柱建物跡とは28.77m、D区第6号掘立柱建物跡とは33.29m、D区第7号掘立柱建物跡とは36.70mであ

る。

母屋の規模は、桁行2間(3.50m)、梁行2間(推定3.30m)、面積は11.55㎡であり、主軸方位はN-44°-Wを指す。柱間距離は、桁行P1-P8間1.80m、P8-P7間1.70m(平均1.75m)であるが、梁行については不明である。

柱穴の規模は径38×38cm~48×62cm、深さ16~24cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。柱筋は比較的通っている。P4・P8では柱



第256図 D区第2号掘立柱建物跡

痕跡が認められた。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、D区第12号掘立柱建物跡 (N-47°-W) にほぼ平行し、D区第5号掘立柱建物跡 (N-40°-E)、D区第11号掘立柱建物跡 (N-45°-E) とはほぼ直交する主軸方位である。

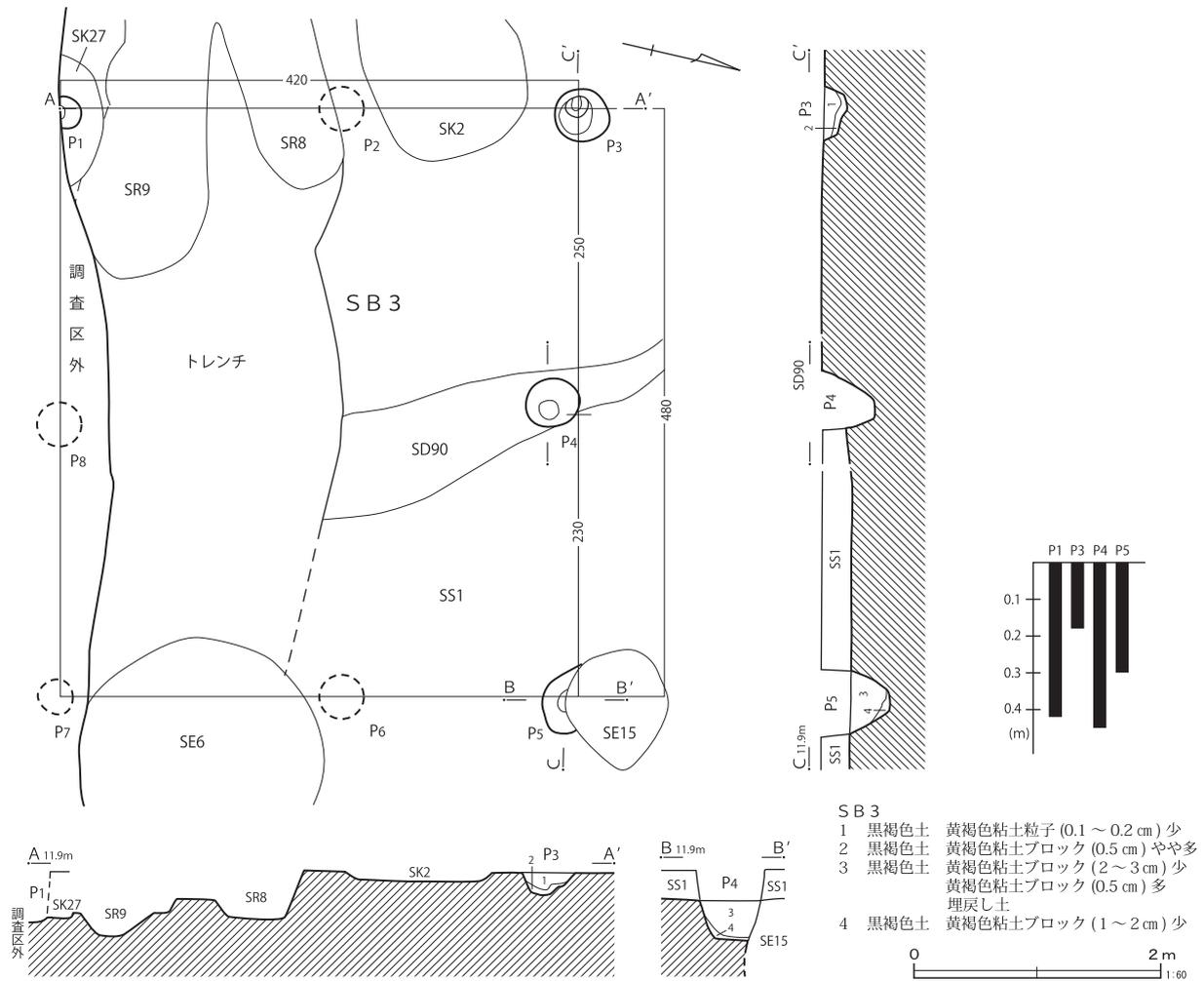
柱穴から土師器の小破片が出土したが、図化には至らなかった。本遺構の時期は、柱穴の規模・形態などから中・近世と推定されるが、土師器片

の出土や、覆土の色調から遡る可能性も否定できない。

D区第3号掘立柱建物跡 (第257図)

I-14・15グリッドに位置する。D区第1号墳、D区第90号溝跡よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

南は調査区外に続いている。P 1 - P 3間の柱間距離が極めて大きいことから、その間にもう1つの柱穴が存在したが、D区第8号周溝状遺構の



第257図 D区第3号掘立柱建物跡

調査過程で失われた結果と推測される。そのため、梁行にP2・P6を、P1・P4・P5との位置関係から、P7・P8を想定した。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北のD区第2号掘立柱建物跡とは3.12m、D区第4号掘立柱建物跡とは10.20m、東のD区第6号掘立柱建物跡とは29.28m、D区第7号掘立柱建物跡とは33.29mである。

母屋の規模は、桁行は2間(4.80m)と推定したが、それ以上である可能性も充分あり得る。梁行についても2間(4.20m)と推定した。その場合、面積は20.16㎡となる。主軸方位はN-77°-Eを指す。柱間距離は、桁行P3-P4間2.50m、P4-

P5間2.30m(平均2.40m)であるが、梁行については不明である。

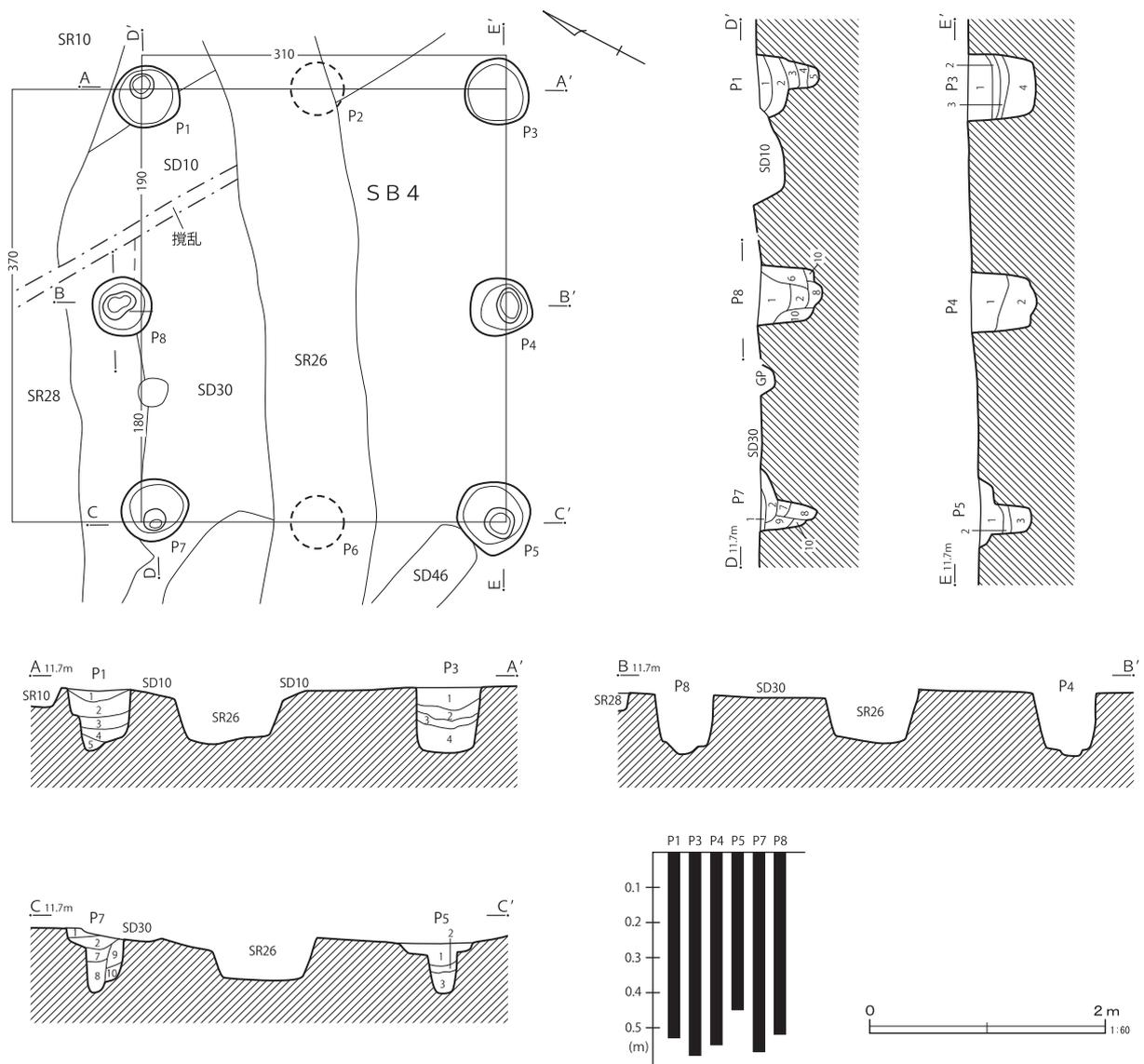
柱穴の規模は径(17)×27cm~43×45cm、深さ18~45cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の中で、平行関係、直行関係にある掘立柱建物跡はない。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、古墳時代前期と推定される。

D区第4号掘立柱建物跡(第258図)

G・H-14グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は不明である。桁行の柱間距離に比べ、梁



S B 4

- | | | | | | |
|--------|----------------------------|--------|---------|------------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 多 | 鉄分均質に多 | 6 暗褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (0.5 cm) 多 | 抜き取り後の流込み |
| 2 黒褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (0.5cm)・ | | 7 黒褐色土 | 褐色粘土粒子 (0.1 cm) やや多 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 多 |
| | 灰褐色粘土ブロック (1 ~ 2 cm) やや多 | | | 焼土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少 | 埋戻し土 |
| | 灰褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 | | 8 暗褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 微量 | 柱痕跡 |
| 3 暗褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) やや多 | | 9 暗褐色土 | 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少 | |
| 4 暗褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 多 | | | 黄灰色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 多 | 充填土 |
| 5 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少 | | 10 暗褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (0.3 ~ 0.7 cm) やや多 | 充填土 |

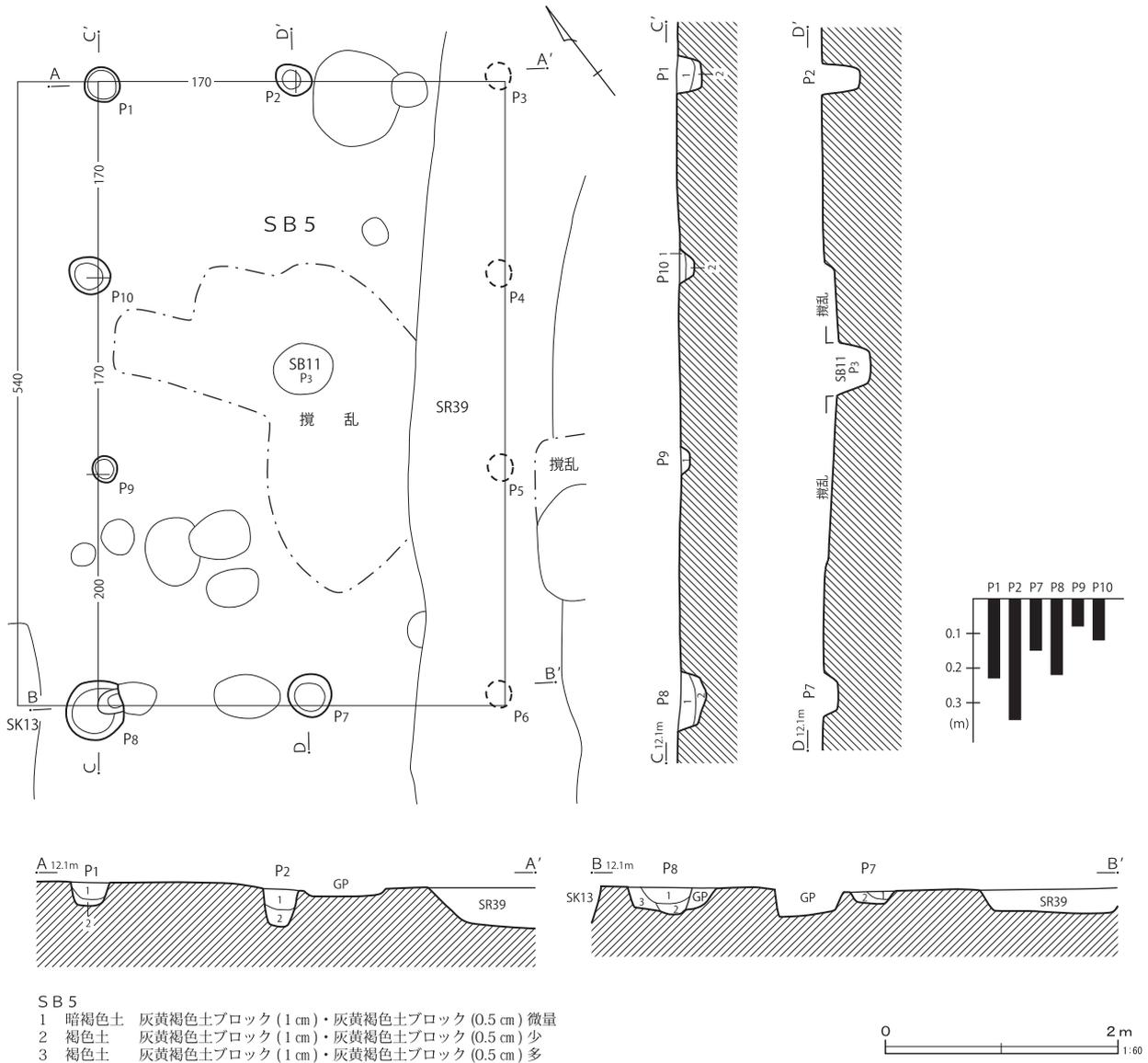
第258図 D区第4号掘立柱建物跡

行の柱間距離が極めて大きいことから、間にもう1本の柱穴が存在したが、D区第26号周溝状遺構の調査時に失われた結果と推測し、P2・P6を想定して図示した。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、南のD区第2

号掘立柱建物跡とは3.38m、D区第3号掘立柱建物跡とは10.20m、東のD区第8号掘立柱建物跡とは25.12mである。

母屋の規模は、桁行は2間 (3.70m)、梁行は2間 (3.10m) と推定した。面積は11.47㎡である。主



第259図 D区第5号掘立柱建物跡

軸方位はN-62°-Eを指す。柱間距離は、桁行P1-P8間1.90m、P8-P7間1.80m(平均1.85m)であるが、梁行については不明である。

柱穴の規模は径52×52cm~60×62cm、深さ45~58cmであり、揃っているといえる。柱穴の平面形は、円形で、径・深度ともに比較的大規模なものが多い。柱筋は比較的通っている。P7・P8では、柱痕跡が認められた。

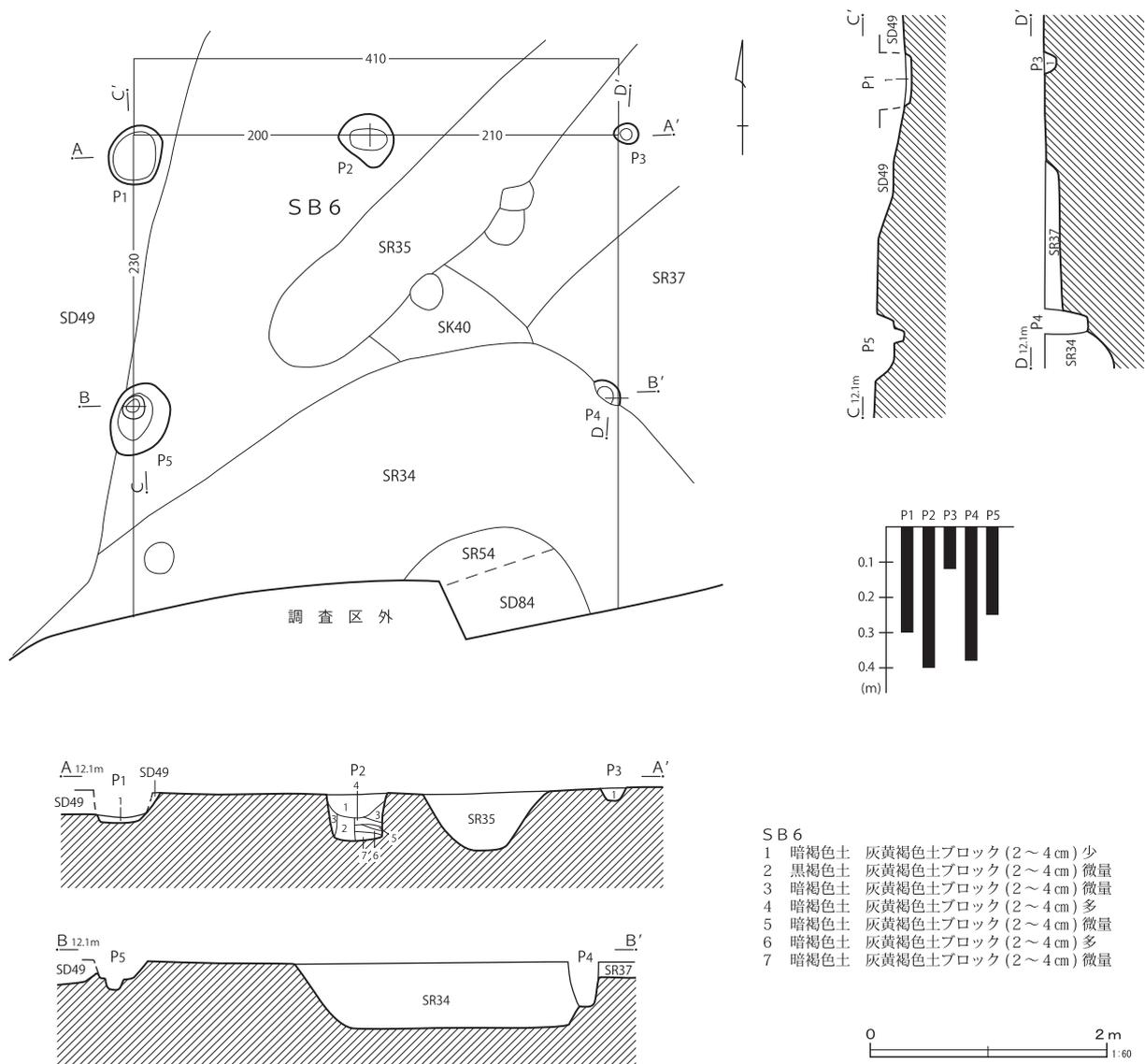
本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物の内、D

区第8号掘立柱建物跡(N-30°-W)とほぼ直交する主軸方位である。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴掘方の規模が大きいことや覆土の色調などから、中世以前に遡ると推定される。

D区第5号掘立柱建物跡(第259図)

F・G-19グリッドに位置する。D区第39・42号周溝状遺構よりも新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は不明である。東側の桁行はD区第39



第260図 D区第6号掘立柱建物跡

号周溝状遺構の調査過程で失われたと推測し、P3~6を想定して図示した。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、南西のD区第7号掘立柱建物跡とは11.05m、D区第8号掘立柱建物跡とは16.30m、D区第6号掘立柱建物跡とは13.65m、D区第9号掘立柱建物跡とは0.18m、北西のD区第12号掘立柱建物跡とは11.72m、E区第1号掘立柱建物跡とは19.36m、北東のE区第2号掘立柱建物跡とは12.14mである。D区第11号掘立柱

建物跡とは、重複関係にある。

母屋の規模は、桁行は3間(5.40m)であるが、梁行は2間(3.50m)と推定した。面積は不明である。主軸方位はN-40°-Eを指す。柱間距離は、桁行P1-P10間1.70m、P10-P9間1.70m、P9-P8間2.00m(平均1.80m)、梁行P1-P2間1.70mである。

柱穴の規模は径30×30cm~50×52cm、深さ8~35cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕

円形で、径・深度ともに比較的小規模である。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、D区第9号掘立柱建物跡(N-40°-E)と平行し、D区第11号掘立柱建物跡(N-45°-E)とも平行関係に近い。また、D区第2号掘立柱建物跡(N-44°-W)とは直交に近い主軸方位である。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴掘方の規模、覆土の色調などから、中・近世と推定される。

D区第6号掘立柱建物跡(第260図)

H-17・18グリッドに位置する。D区第34・35・37号周溝状遺構、D区第49号溝跡よりも新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。南は調査区外に続いている。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北西のD区第8号掘立柱建物跡とは0.65m、北のD区第12号掘立柱建物跡とは15.08m、北東のD区第11号掘立柱建物跡とは17.22m、D区第9号掘立柱建物跡とは10.58m、D区第5号掘立柱建物跡とは13.65m、西のD区第2号掘立柱建物跡とは33.29m、D区第3号掘立柱建物跡とは29.28mある。D区第7号掘立柱建物跡とは重複関係にある。

母屋の規模は、桁行は不明、梁行2間(4.10m)で、面積は不明である。主軸方位はN-0°を指す。柱間距離は、桁行P1-P5間2.30m、梁行P1-P2間2.00m、P2-P3間2.10m(平均2.05m)である。

柱穴の規模は径(18)×20cm~45×65cm、深さ12~40cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形である。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の中には、平行関係、直行関係にある掘立柱建物跡はない。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は不明であるが、柱穴掘方の規模から、中・近世と考えておきたい。

D区第7号掘立柱建物跡(第261・262図)

H-18グリッドに位置する。D区第34号周溝状遺構より新しいが、D区第37号周溝状遺構、D区第50号溝跡よりは古い。その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。南は調査区外に続いている。また1本の柱穴(P7)が、D区第34号周溝状遺構の調査過程で失われたと推測される。もう1本(P2)の柱穴については、D区第50号溝跡より古いのか否かは不明である。以上の点からP2・P7を、あわせて調査区外にP4・P5を想定した。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北のD区第12号掘立柱建物跡とは15.15m、北東のD区第11号掘立柱建物跡とは14.75m、D区第9号掘立柱建物跡とは7.85m、D区第5号掘立柱建物跡とは11.05m、北西のD区第8号掘立柱建物跡とは4.75m、西のD区第2号掘立柱建物跡とは36.70m、D区第3号掘立柱建物跡とは33.29mである。

母屋の規模は、桁行は2間(5.00m)、梁行2間(3.70m)、面積18.50㎡、主軸方位はN-55°-Eを指す総柱建物である。

柱間距離は、桁行P1-P8間2.40m、P9-P6間2.60m(平均2.50m)、梁行P8-P9間1.90mである。

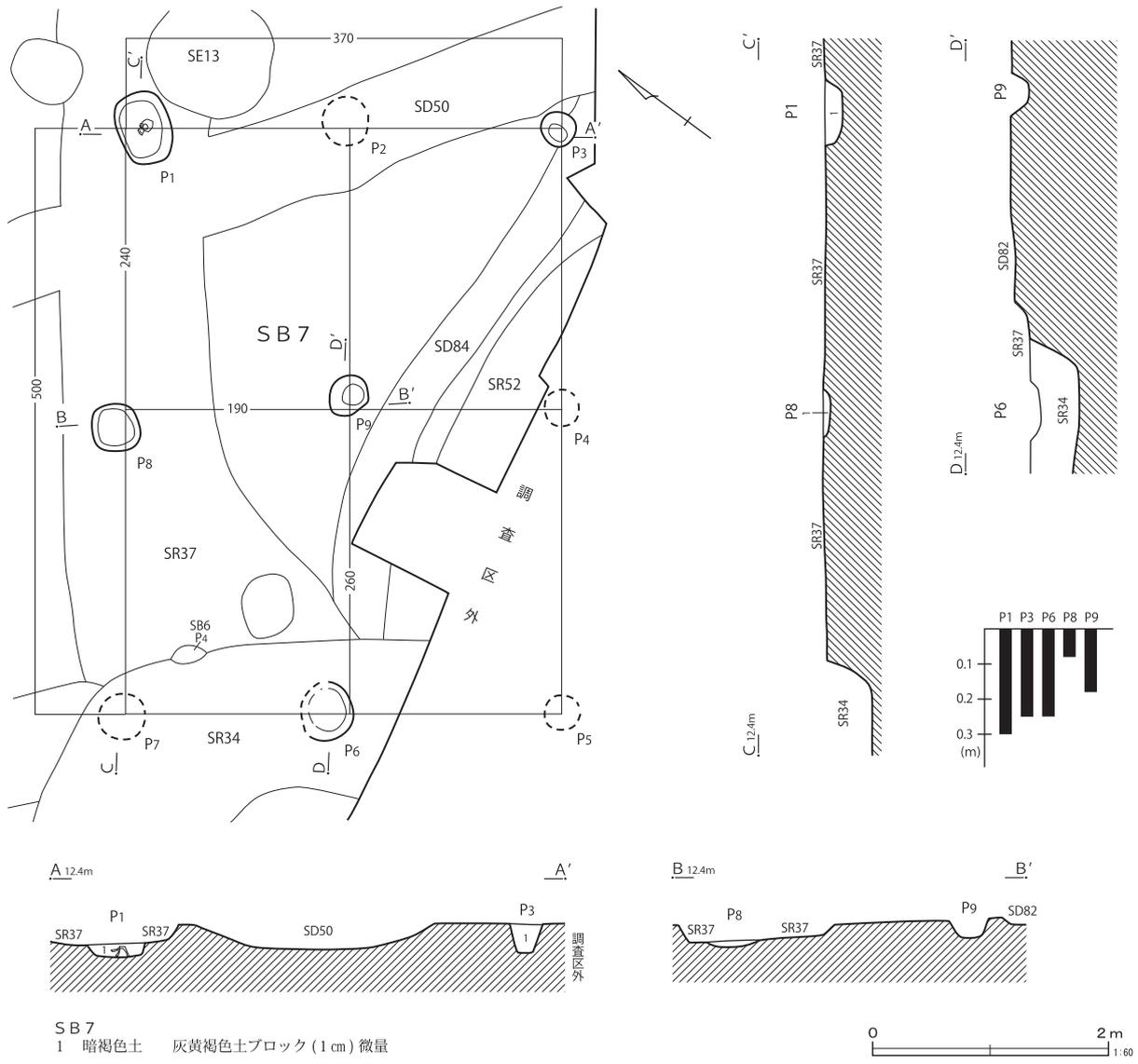
柱穴の規模は径30×30cm~45×60cm、深さ8~30cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。柱筋は比較的通っている。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の中には、直交もしくは平行関係にある掘立柱建物跡はない。

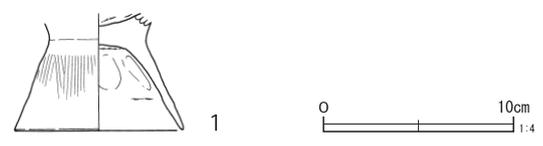
土師器の台付甕(1)が出土している。D区第37号周溝状遺構よりも古いことから、遺構の時期は、古墳時代前期であると推定される。

D区第8号掘立柱建物跡(第263図)

G・H-17グリッドに位置する。D区第3号墳より新しく、D区第29号井戸跡よりは古い。その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。



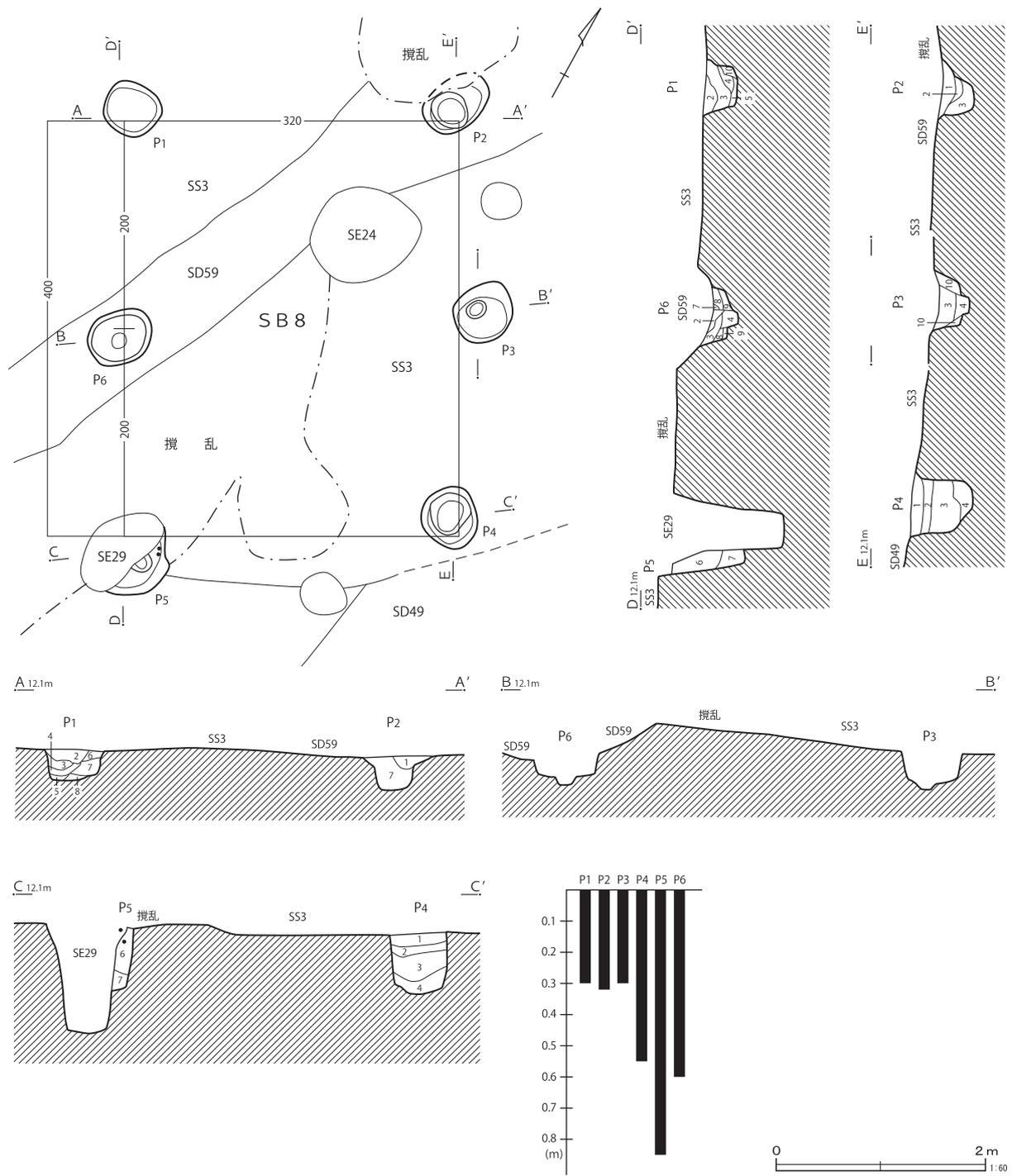
第261図 D区第7号掘立柱建物跡



第262図 D区第7号掘立柱建物跡出土遺物

第75表 D区第7号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SB7	D	土師器	台付甕	90		8.9	[6.2]	A C D F G	普通	にぶい 橙	P1-No.1・2 外面ハケ 脚部内面ナデと 指頭圧痕か 器面風化著しい



- SB 8**
- | | | |
|----|------|---|
| 1 | 暗褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (0.5 cm) 多
焼土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm)・
炭化物粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) やや多 埋戻し土 |
| 2 | 暗褐色土 | 黄灰色粘土ブロック (0.5 ~ 1 cm)・焼土ブロック (0.5 cm)・
黒色土ブロック (0.5 ~ 0.7 cm) やや多 埋戻し土 |
| 3 | 黒褐色土 | 黄灰色粘土ブロック (1 ~ 5 cm) 多 鉄分少 |
| 4 | 黒灰色土 | 灰褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm)・
黒褐色土ブロック (0.5 cm) やや多
褐色粘土粒子 (0.2 cm) 少 |
| 5 | 黒褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (1 ~ 2 cm) 多 |
| 6 | 黄褐色土 | 黒色土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) やや多 充填土 |
| 7 | 黄褐色土 | 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 1 cm) 多
鉄分やや多 充填土 |
| 8 | 黒褐色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) 充填土 |
| 9 | 黄褐色土 | 黒色土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) やや多 充填土 |
| 10 | 黒色土 | 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 微量
褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 少
灰色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) やや多 |

第263図 D区第8号掘立柱建物跡

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北のD区第12号掘立柱建物跡とは11.42m、北東のD区第9号掘立柱建物跡とは13.34m、D区第5号掘立柱建物跡とは16.30m、南東のD区第6号掘立柱建物跡とは0.65m、D区第7号掘立柱建物跡とは4.75m、西のD区第2号掘立柱建物跡とは28.77m、D区第4号掘立柱建物跡とは25.12mである。

母屋の規模は、桁行は2間(4.00m)、梁行1間(3.20m)、面積12.80㎡、主軸方位はN-30°-Wを指す。

柱間距離は、桁行P1-P6間2.00m、P6-P5間2.00m(平均2.00m)、梁行P1-P2間3.20mである。

柱穴の規模は径50×55cm～50×65cm、深さ30～85cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的大規模なものが多い。柱筋は比較的通っている。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、D区第4号掘立柱建物跡(N-62°-E)と直交し、D区第7号掘立柱建物跡(N-55°-E)とも直交関係に近いといえる。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、古墳時代前期の土師器が埋納されていたD区第29号井戸跡より古いことから、古墳時代前期もしくはそれ以前と考えられる。

D区第9号掘立柱建物跡(第264図)

G-19グリッドに位置する。D区第48号溝跡、D区第13号土壇より古い、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北東のD区第5号掘立柱建物跡とは0.18m、D区第11号掘立柱建物跡とは3.32m、北西のE区第1号掘立柱建物跡とは22.84m、D区第12号掘立柱建物跡とは11.35m、南西のD区第7号掘立柱建物跡とは7.85m、D区第6号掘立柱建物跡とは10.58m、D区第8号掘立柱建物跡とは13.34mである。

母屋の規模は、桁行・梁行とも1間(2.60m)、

面積6.76㎡、主軸方位はN-40°-EもしくはN-50°-Wを指す。

柱間距離は、桁行P1-P4間2.60m、梁行P1-P2間2.60mである。

柱穴の規模は径(30)×40cm～45×62cm、深さ52～60cmと若干の幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的大規模である。柱筋は比較的通っている。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、D区第5号掘立柱建物跡(N-40°-E)と直交または平行し、D区第12号掘立柱建物跡(N-47°-W)、D区第11号掘立柱建物跡(N-45°-E)が直交・平行関係に近いといえる。

周辺に、古墳時代前期の遺構が多数存在することから、この時期の住居または周溝状遺構に伴う主柱穴の可能性も考えられる。しかし、床面らしき痕跡が確認できなかったことから、掘立柱建物跡として扱った。また、床面が確認できなかった点については、高床の可能性も考えられるが、特定するには至らなかった。面積的にみて、居住のための施設ではなく、倉庫または納屋の可能性が考えられる。

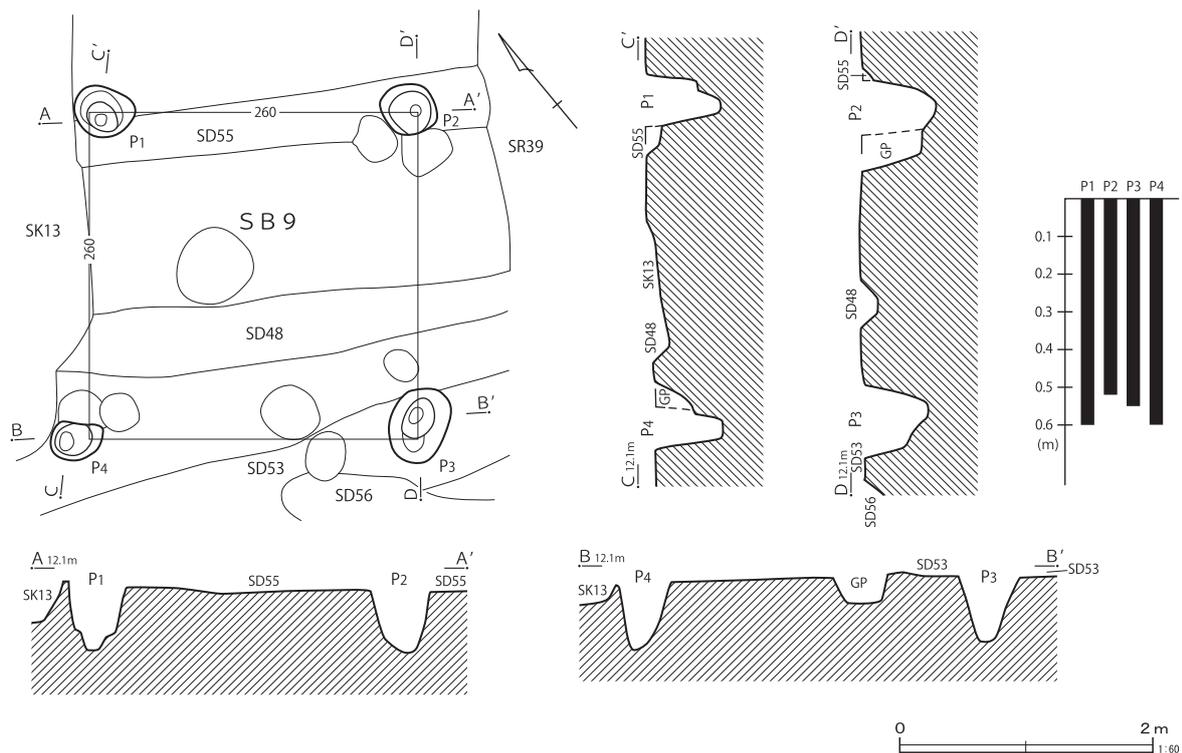
今回の調査で検出された35棟の掘立柱建物跡中、1間×1間のものは、本遺構とD区第11号掘立柱建物跡のみであった。

土師器の小破片が出土したが、図化には至らなかった。古墳時代前期のD区第13号土壇より古いことから、該期の遺構と推定される。

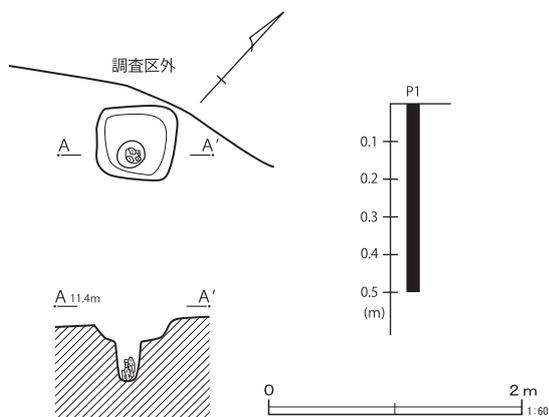
D区第10号掘立柱建物跡(第265図)

D-15グリッドに位置する。掘立柱建物跡の南東コーナーの柱穴1本のみの検出である。柱材が遺存していたことから、掘立柱建物跡として命名した。他の柱穴は、調査区外に存在すると推定される。

柱穴の径は47×65cm、深さ50cm、柱穴の平面形は隅丸方形である。柱材は柱穴掘方よりも深く沈みこんでいるが、これは屋根の重量で沈んだもので



第264図 D区第9号掘立柱建物跡



第265図 D区第10号掘立柱建物跡

はなく、上部で柱の高さを揃えるためと推測される。

遺物は出土しなかった。柱穴掘方の規模が大きいこと・柱穴の形態からみて、中世以前の掘立柱建物跡と考えられる。

D区第11号掘立柱建物跡 (第266図)

F・G-19グリッドに位置する。重複遺構との新

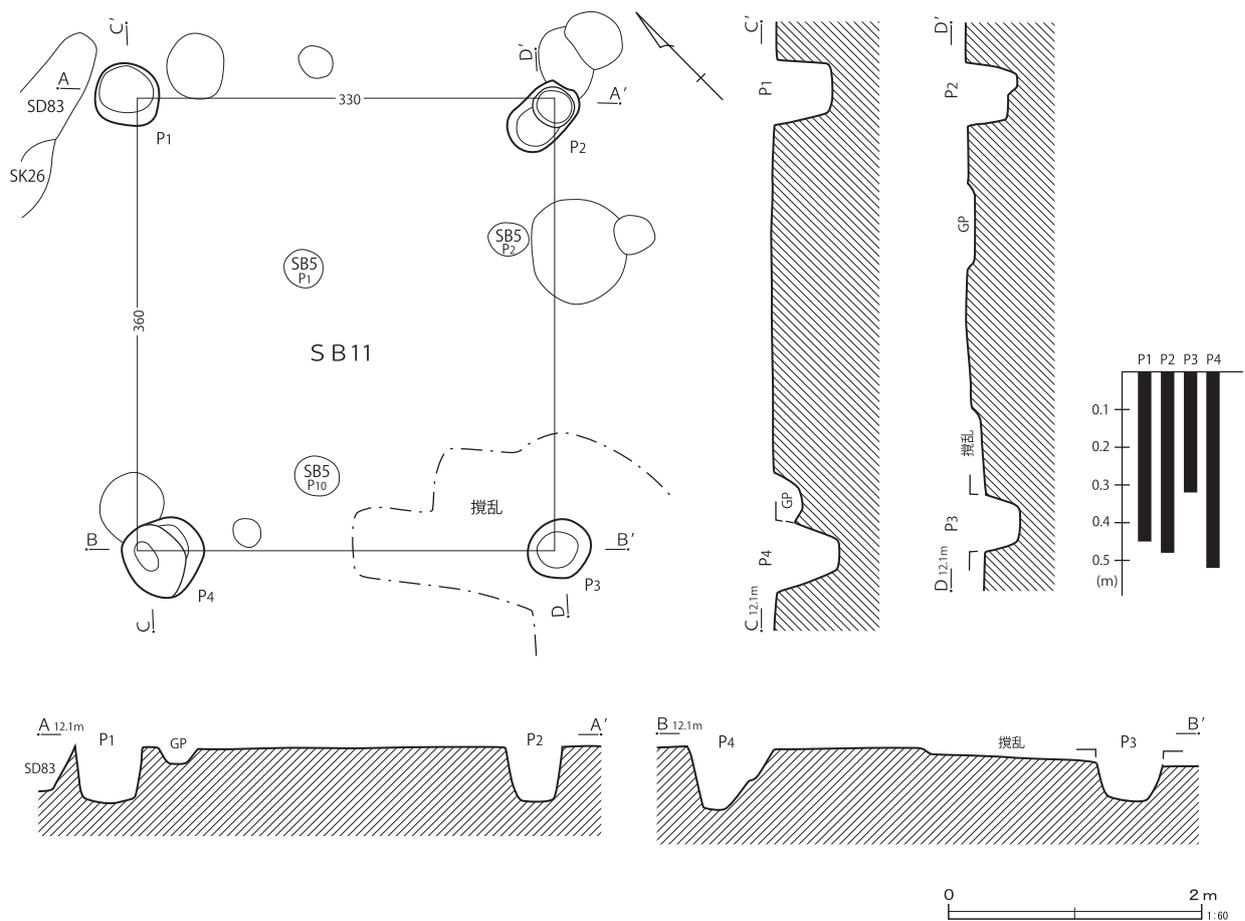
旧関係は確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北西のE区第1号掘立柱建物跡とは17.50m、北東のE区第2号掘立柱建物跡とは11.22m、西のD区第12号掘立柱建物跡とは10.46m、南西のD区第9号掘立柱建物跡とは3.32m、D区第7号掘立柱建物跡とは14.75m、D区第6号掘立柱建物跡とは17.22mである。また、D区第5号掘立柱建物跡とは重複関係にある。

母屋の規模は、桁行(3.60m)・梁行(3.30m)とも1間、面積11.88㎡、主軸方位はN-45°-Eを指す。

柱間距離は、桁行P1-P4間3.60m、梁行P1-P2間3.30mである。

柱穴の規模は径48×52cm~55×65cm、深さ32~52cmと若干の幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的大規模である。柱筋は比較的通っている。



第266図 D区第11号掘立柱建物跡

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、E区第2号掘立柱建物跡(N-43°-E)と平行し、D区第12号掘立柱建物跡(N-47°-W)、E区第1号掘立柱建物跡(N-45°-W)と直交する。

周辺に、古墳時代前期の遺構が多数存在することから、この時期の住居または周溝状遺構に伴う支柱穴の可能性も考えられる。しかし、床面らしき痕跡が確認できなかったことから、掘立柱建物跡として扱った。また、床面が確認できなかった点については、高床の可能性も考えられるが、特定するには至らなかった。D区第9号掘立柱建物跡よりは規模が大きいが、面積的にみて居住のための施設ではなく、倉庫または納屋の可能性が考えられる。

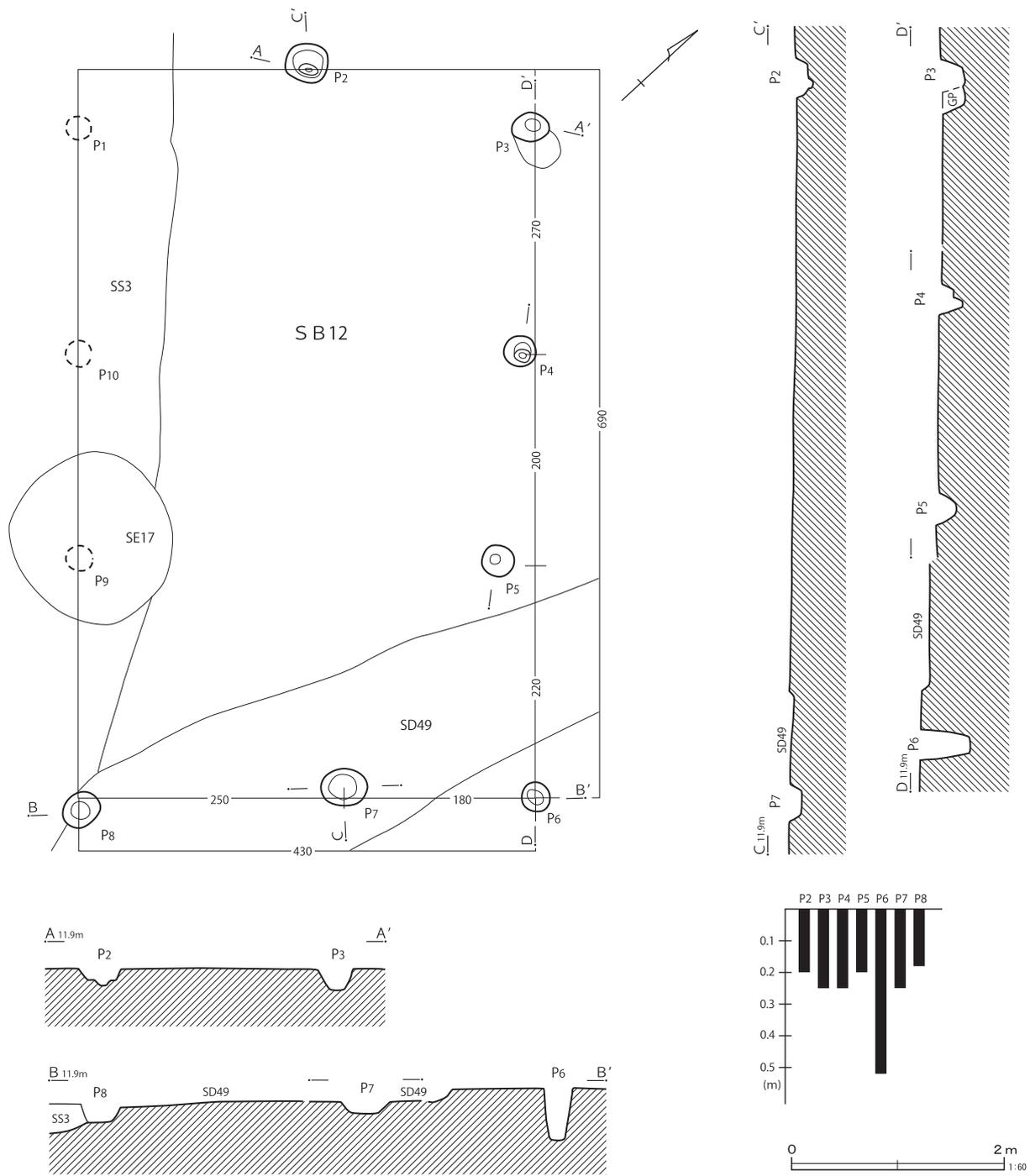
今回の調査で検出された35棟の掘立柱物跡中、1間×1間のものは、本遺構とD区第9号掘立柱建物跡のみであった。

遺物は出土しなかった。しかし、1間×1間という形態、柱穴の規模などから中・近世とは考えにくく、それ以前と推定される。

D区第12号掘立柱建物跡(第267図)

E-17、F-17・18グリッドに位置する。D区第33号周溝状遺構、D区第3号墳より新しいが、その他の重複遺構との新旧関係については確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北のE区第1号掘立柱建物跡とは13.66m、東のD区第11号掘立柱建物跡とは10.46m、南東のD区第5号掘立柱建



第267図 D区第12号掘立柱建物跡

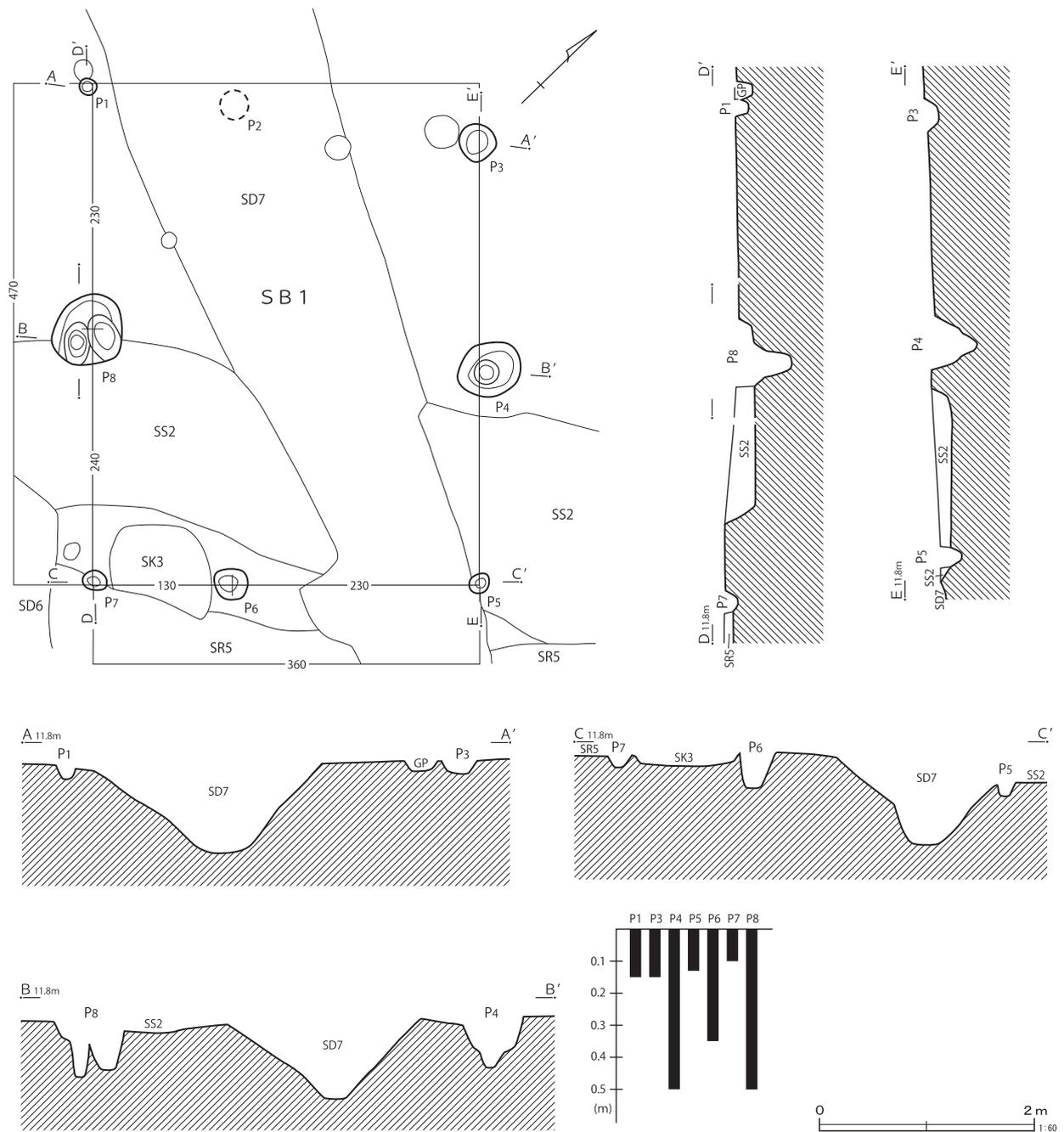
物跡とは11.72m、D区第9号掘立柱建物跡とは11.35m、南のD区第8号掘立柱建物跡とは11.42m、D区第6号掘立柱建物跡とは15.08m、D区第7号掘立柱建物跡とは15.15mである。

P3・P8の存在から、P1・P9・P10を想定

した。

母屋の規模は、桁行は3間(6.90m)、梁行2間(4.30m)、面積29.67㎡、主軸方位はN-47°-Wを指す。

柱間距離は、桁行はP2がのる梁行-P4間



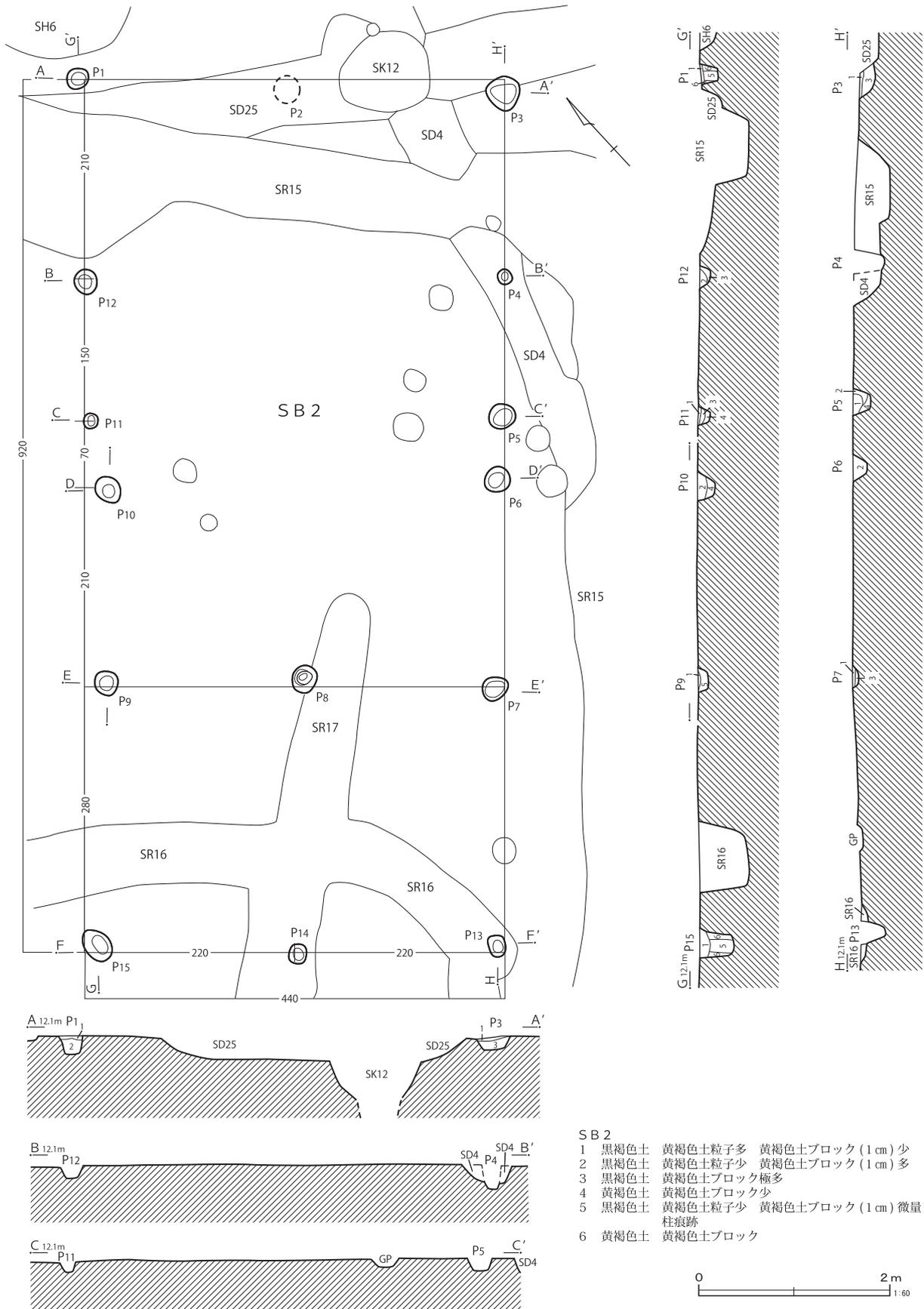
第268図 E区第1号掘立柱建物跡

2.70m、P4-P5間2.00m、P5-P6間2.20m (平均2.30m)、梁行P6-P7間1.80m、P7-P8間2.50m (平均2.15m) である。

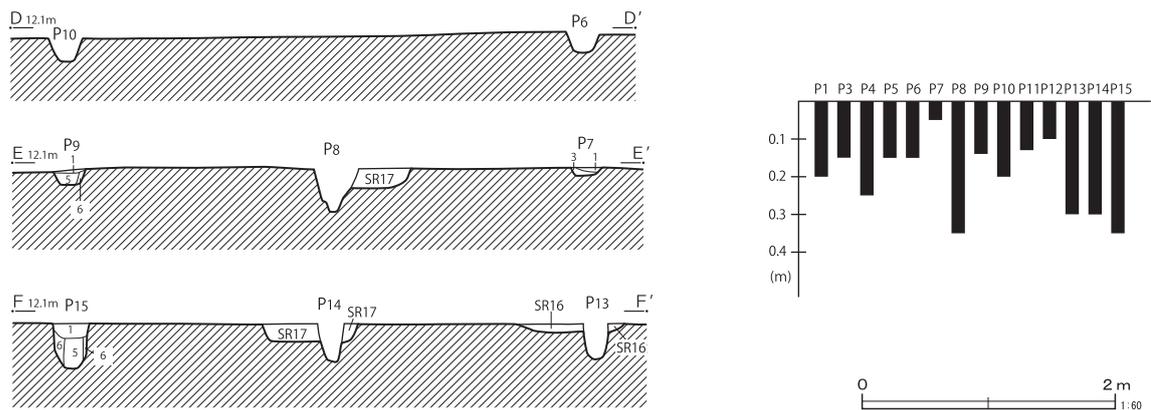
柱穴の規模は径28×30cm~35×45cm、深さ18~52cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多

い。柱筋の通りは良好ではなく、ズレがみられる。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、D区第2号掘立柱建物跡(N-44°-W)、E区第1号掘立柱建物跡(N-45°-W)と平行し、D区第11号掘立柱建物跡(N-45°-E)とは直交関係に近いといえる。



第269図 E区第2号掘立柱建物跡 (1)



第270図 E区第2号掘立柱建物跡(2)

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、柱穴掘方の規模、覆土の色調などから、中・近世と推定される。

E区第1号掘立柱建物跡(第268図)

D-18・19グリッドに位置する。E区第7号溝跡、E区第2号古墳よりも新しい。その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、南のD区第12号掘立柱建物跡とは13.66m、南東のD区第11号掘立柱建物跡とは17.50m、D区第5号掘立柱建物跡とは19.36m、D区第9号掘立柱建物跡とは22.84m、E区第2号掘立柱建物跡とは22.12m、東のE区第3号掘立柱建物跡とは27.01mである。

P1・P3・P6との位置関係から、P2を想定した。梁行2間とした場合、P6-P7間が1.30mであるのに対し、P5-P6間が2.30mとなり、柱間距離に大きな差があることになる。あるいは、P6は本遺構に伴わない可能性も考えられる。その場合、P2も存在しなかったことになる。P8は2つのピットが存在しており、建て替えの可能性も考えられる。

母屋の規模は、桁行は2間(4.70m)、梁行2間(3.60m)、面積16.92㎡、主軸方位はN-45°-Wを指す。

柱間距離は、桁行P1-P8間2.30m、P8-P7間2.40m(平均2.35m)、梁行P5-P6間2.30m、P6-P7間1.30m(平均1.80m)である。但し、東側の桁行きでは、P3-P4間2.10m、P4-P5間2.10m(平均2.10m)であり、西側の数値とは大きく異なっている。

柱穴の規模は径15×15cm~65×70cm、深さ10~50cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。柱筋は比較的通っているが、北側の梁行については当てはまらない。

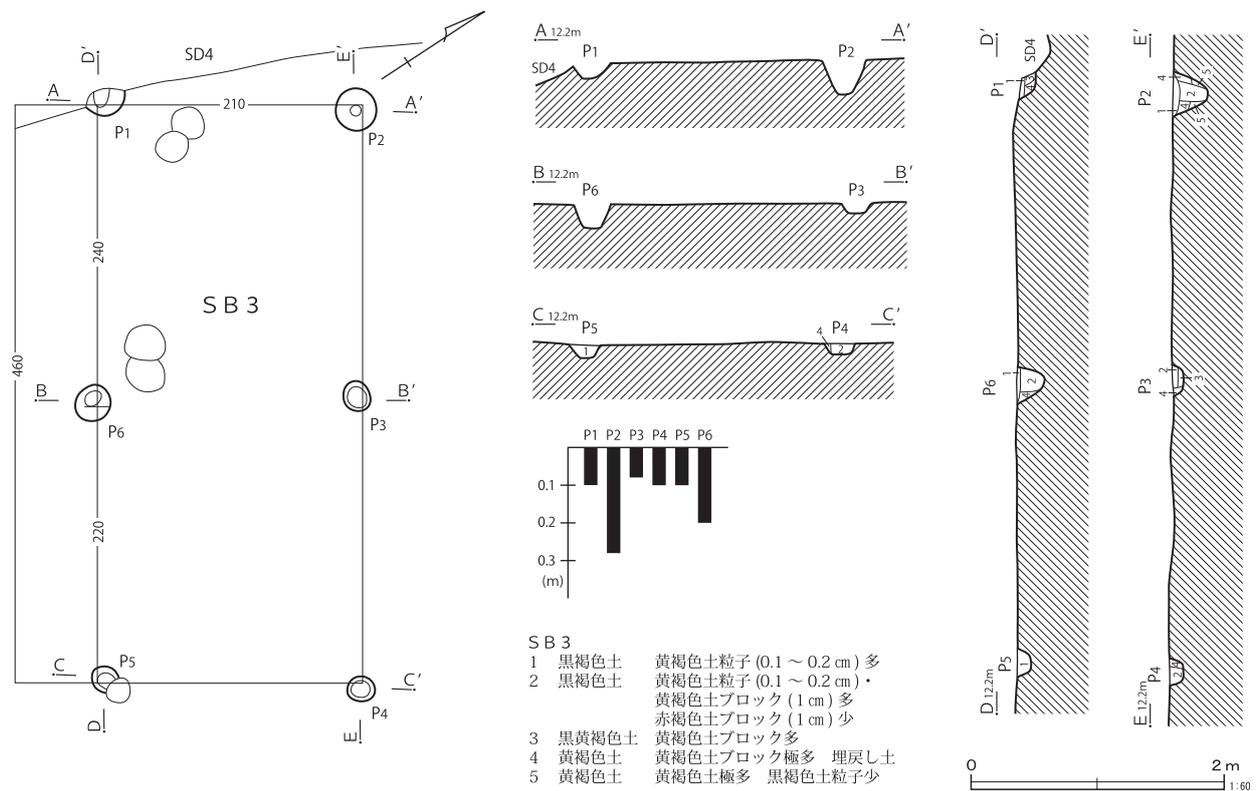
本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、D区第12号掘立柱建物跡(N-47°-W)と平行し、D区第11号掘立柱建物跡(N-45°-E)、E区第2号掘立柱建物跡(N-43°-E)とは直交する。

遺物は出土しなかった。明快な根拠を示すことはできないが、中世以前と判断した掘立柱建物跡の覆土の色調との類似点から、本遺構の時期は、中世以前の遺構と推定される。

E区第2号掘立柱建物跡(第269・270図)

E・F-20・21グリッドに位置する。E区第15・16・17号周溝状遺構よりも新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、南西のD区第



第271図 E区第3号掘立柱建物跡

11号掘立柱建物跡とは11.22m、D区第5号掘立柱建物跡とは12.14m、北東のE区第3号掘立柱建物跡とは3.92m、E区第4号掘立柱建物跡とは21.92m、北西のE区第1号掘立柱建物跡とは22.12mである。

P8・P14との位置関係から、P2を想定した。母屋の規模は、桁行は5間(9.20m)、梁行2間(推定4.40m)、面積40.48㎡、主軸方位はN-43°-Eを指す。

柱間距離は、桁行P1-P12間2.10m、P12-P11間1.50m、P11-P10間0.70m、P10-P9間2.10m、P9-P15間2.80m(平均1.84m)、梁行P13-P14間2.20m、P14-P15間2.20m(平均2.20m)である。

柱穴の規模は径15×15cm~35×35cm、深さ5~35cmと幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多

い。柱筋は比較的通っている。柱穴の配置からみて、P7-P13、P8-P14、P9-P15の部分は廂、P5-P6、P10-P11の部分は出入り口の施設の可能性が挙げられる。

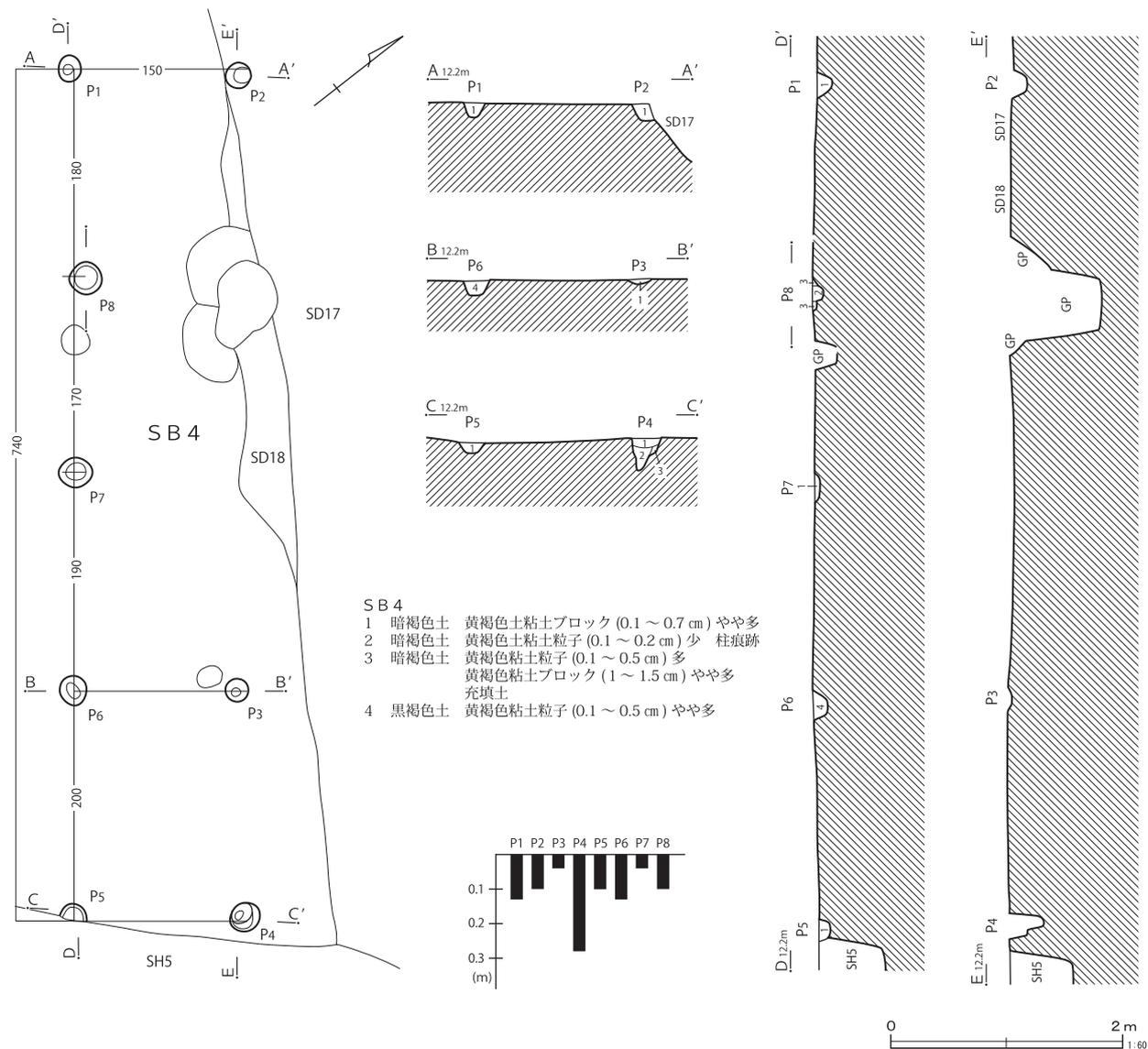
本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、E区第1号掘立柱建物跡(N-45°-W)と直交し、E区第5号掘立柱建物跡(N-40°-E)とほぼ平行する。

遺物は出土しなかった。柱穴掘方の規模や、覆土の色調から、本遺構の時期は、中・近世と推定される。

E区第3号掘立柱建物跡(第271図)

E-21・22グリッドに位置する。E区第8号周溝状遺構、E区第6号方形周溝墓より新しいが、その他の重複遺構との新旧関係については確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、南西のE区第



第272図 E区第4号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡とは3.92m、西のE区第1号掘立柱建物跡とは27.01m、北東のE区第4号掘立柱建物跡とは15.72m、E区第5号掘立柱建物跡とは23.52mである。

母屋の規模は、桁行は2間(4.60m)、梁行1間(2.10m)、面積9.66㎡、主軸方位はN-57°-Wを指す。梁行を1間としたが、各柱穴が浅いことから、柱穴が失われている可能性も否定できないが、確認された範囲内から1間とした。

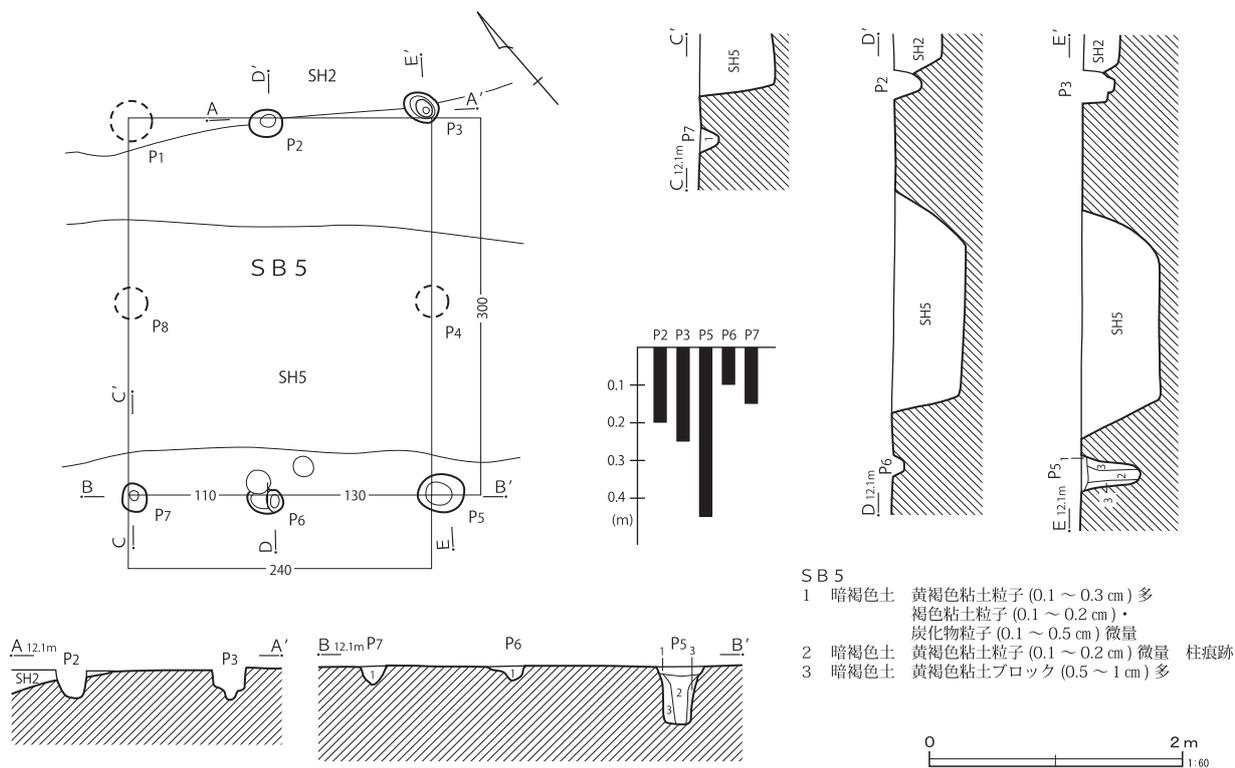
柱間距離は、桁行P1-P6間2.40m、P6-P5間2.20m(平均2.30m)、梁行P1-P2間2.10m

である。

柱穴の規模は径20×20cm~34×34cm、深さ8~28cmと若干の幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。柱筋は比較的通っている。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、E区第4号掘立柱建物跡(N-52°-W)とほぼ平行する。

遺物は出土しなかった。柱穴掘方の規模や、覆土の色調から、本遺構の時期は、中・近世と推定される。



第273図 E区第5号掘立柱建物跡

E区第4号掘立柱建物跡 (第272図)

C-22・23、D-23グリッドに位置する。E区第5号方形周溝墓よりも新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北東のE区第5号掘立柱建物跡とは6.30m、E区第6号掘立柱建物跡とは7.23m、E区第7号掘立柱建物跡とは9.51m、南西のE区第2号掘立柱建物跡とは21.92m、E区第3号掘立柱建物跡とは15.72mである。

本遺構の北側部分は、E区第17号溝跡の調査の過程で失われており、本来の梁行は2間もしくは3間であったと推定される。

母屋の規模は、桁行は4間 (7.40m)、梁行と面積については不明、主軸方位はN-52°-Wを指す。

柱間距離は、桁行P1-P8間1.80m、P8-P7間1.70m、P7-P6間1.90m、P6-P5間

2.00m (平均1.85m)、梁行P1-P2間1.50mである。P3の存在から、廂または総柱の可能性が考えられる。

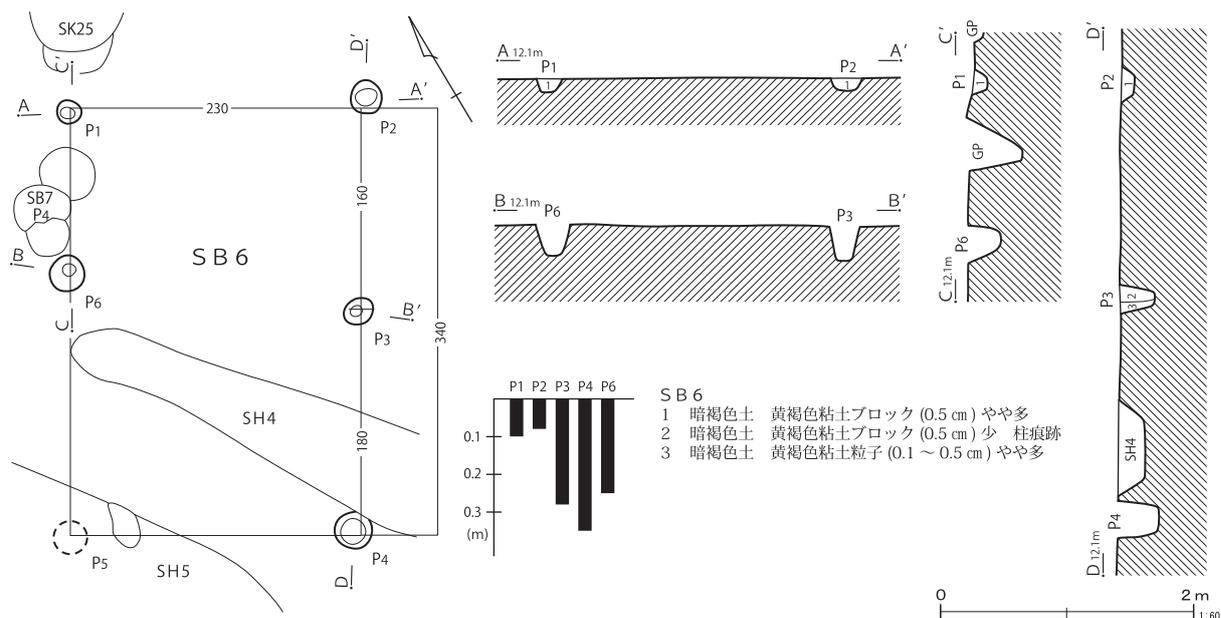
柱穴の規模は径20×20cm~25×25cm、深さ4~28cmと若干の幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに小規模である。柱筋は通っている。P4・P8では柱痕跡が確認された。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、E区第3号掘立柱建物跡 (N-57°-W) とほぼ平行し、E区第5号掘立柱建物跡 (N-40°-E) とはほぼ直交する。

遺物は出土しなかった。柱穴掘方の規模や、覆土の色調から、本遺構の時期は、中・近世と推定される。

E区第5号掘立柱建物跡 (第273図)

B・C-23グリッドに位置する。E区第2・5号方形周溝墓よりも新しい。



第274図 E区第6号掘立柱建物跡

近隣の掘立柱建物跡との距離は、東のE区第7号掘立柱建物跡とは1.05m、南東のE区第6号掘立柱建物跡とは3.05m、南西のE区第3号掘立柱建物跡とは23.52m、E区第4号掘立柱建物跡とは6.30mである。

P3・P7との位置関係から、P1を想定した。また、P3-P5間の柱間距離の大きさから、P4・P8を想定した。これらのピットは第2・5号方形周溝墓の調査の過程で失われたと考えられる。

母屋の規模は、桁行は2間（推定3.00m）、梁行2間（2.40m）、面積7.20㎡、主軸方位はN-40°-Eを指す。

柱間距離は、桁行は不明（平均1.50m）、梁行P5-P6間1.30m、P6-P7間1.10m（平均1.20m）である。

柱穴の規模は径20×20cm~30×35cm、深さ10~45cmとやや幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模なものが多い。残っている柱穴から、柱筋は比較的通っていると推定される。P5では、柱痕跡が確認さ

れた。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、E区第2号掘立柱建物跡（N-43°-E）とほぼ平行し、E区第4号掘立柱建物跡（N-52°-W）とほぼ直交する。

遺物は出土しなかった。柱穴掘方の規模や、覆土の色調から、本遺構の時期は、中・近世と推定される。

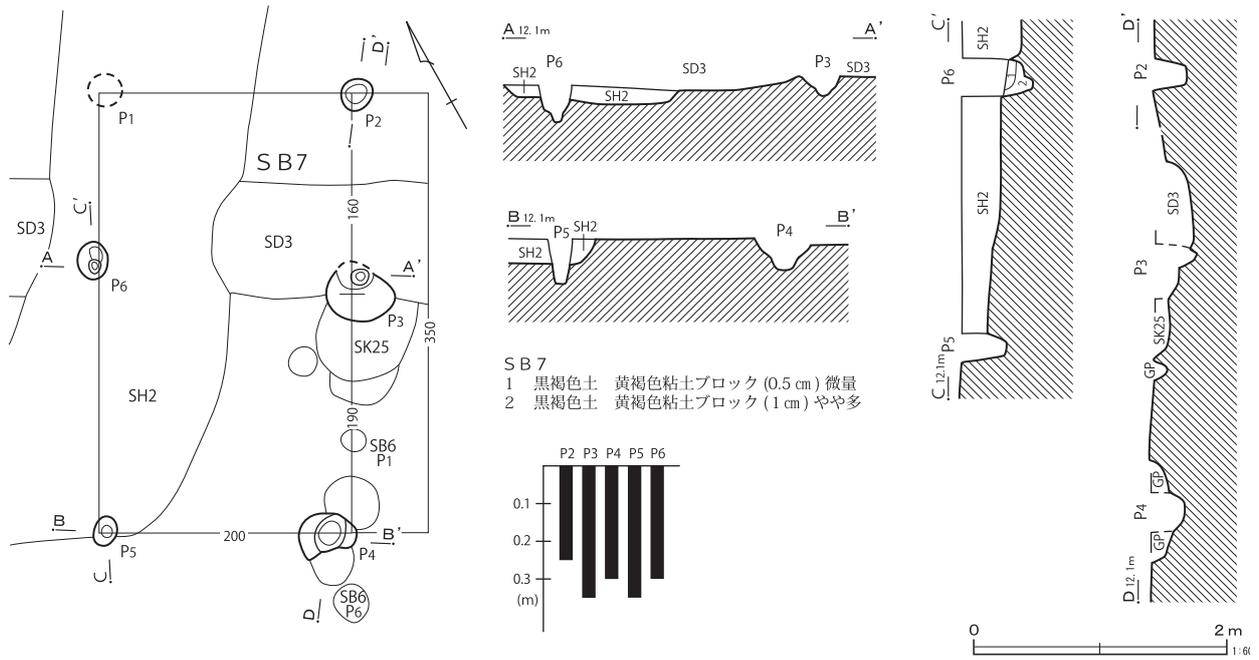
E区第6号掘立柱建物跡（第274図）

C-24グリッドに位置する。E区第4・5号方形周溝墓よりも新しい。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、北のE区第7号掘立柱建物跡とは0.05m、北西のE区第5号掘立柱建物跡とは3.05m、南西のE区第4号掘立柱建物跡とは7.23mである。

P1・P4との位置関係から、P5を想定した。母屋の規模は、桁行は2間（3.40m）、梁行1間（推定2.30m）、面積7.82㎡、主軸方位はN-30°-Eを指す。

柱間距離は、桁行P2-P3間1.60m、P3-P4間1.80m（平均1.70m）、梁行P1-P2間2.30m



第275図 E区第7号掘立柱建物跡

である。

柱穴の規模は径18×20cm～28×30cm、深さ8～35cmと若干の幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模である。柱筋は比較的通っている。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、E区第7号掘立柱建物跡（N-29°-E）と平行する。

遺物は出土しなかった。柱穴掘方の規模や、覆土の色調から、本遺構の時期は、中・近世と推定される。

E区第7号掘立柱建物跡（第275図）

B-24、C-23・24グリッドに位置する。E区第2号方形周溝墓、E区第3号溝跡よりも新しいが、その他の重複遺構との新旧関係については確認できなかった。

近隣の掘立柱建物跡との距離は、南のE区第6号掘立柱建物跡とは0.05m、西のE区第5号掘立柱建物跡とは1.05m、南西のE区第4号掘立柱建物跡とは9.51mである。

物跡とは9.51mである。

P2・P5との位置関係から、P1を想定した。母屋の規模は、桁行は2間（3.50m）、梁行1間（推定2.00m）、面積7.00㎡、主軸方位はN-29°-Eを指す。

柱間距離は、桁行P2-P3間1.60m、P3-P4間1.90m（平均1.75m）、梁行P4-P5間2.00mである。

柱穴の規模は径20×25cm～30×45cm、深さ25～35cmと若干の幅がある。柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、径・深度ともに比較的小規模である。柱筋は比較的通っている。

本掘立柱建物跡は、近在の掘立柱建物跡の内、E区第6号掘立柱建物跡（N-30°-E）と平行する。

遺物は出土しなかった。柱穴掘方の規模や、覆土の色調から、本遺構の時期は、中・近世と推定される。

(5) 柵列跡

柵列跡と判断したのは、B区2基、C区3基、E区2基の計7基である。掘立柱建物跡の一部分が遺存している可能性も否定できないが、建物状にピットが並ばないものを、柵列跡として扱った。

B区・C区の柵列については連番である。しかし、調査工程の都合上、D区・E区を並行して調査を行ったため、遺構名の重複を避けるべく区名を冠してE区第○号柵列跡と命名した。

第1号柵列跡 (第277図)

J・K-5グリッドに位置する。南北方向・東西方向との2辺から成るが、1基の柵列と判断した。直接重複する遺構は検出されなかったが、第1号柵列跡で囲む範囲内に第2号柵列跡が存在している。

P1～5が確認された。2辺の長さは、南北辺6.90m、東西辺7.70m、総延長14.60m。柱間距離は、P1-P2間2.40m、P2-P3間4.50m、P3-P4間4.50m、P4-P5間3.20m(平均3.65m)、柱穴の規模は径13×15cm～20×20cm、深さ20～60cmと幅がある。柱筋は通っているが、柱間距離は不均一で柱穴はいずれも小規模である。

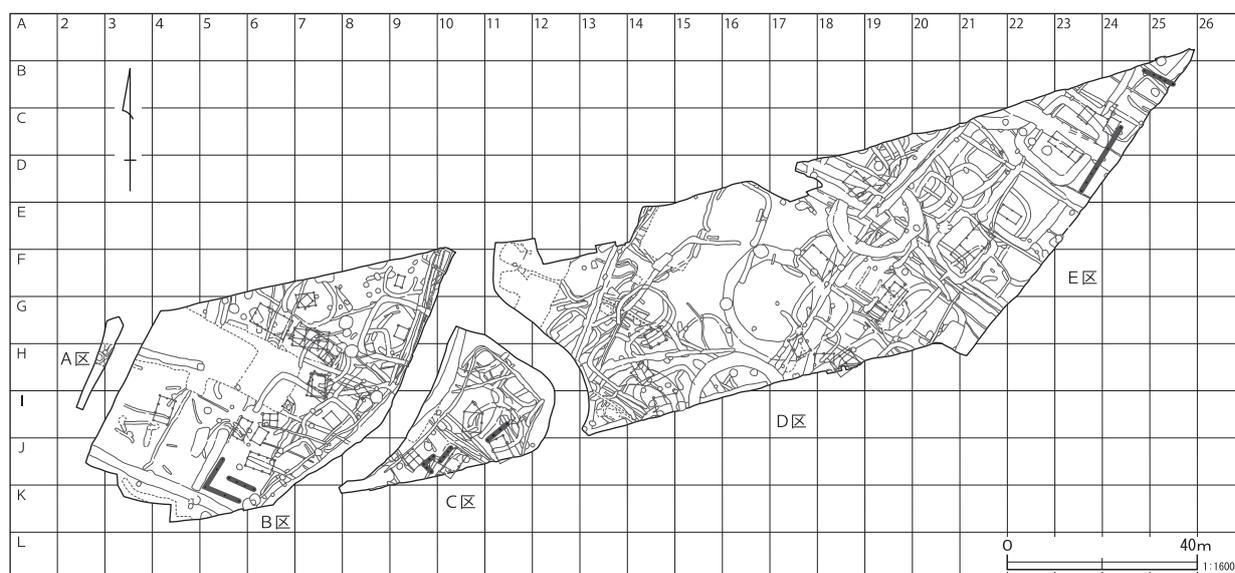
方位は、南北辺はN-32°-E、東西辺はN-67°-Wを指し、両辺の開きは81°である。南北辺は、第3号掘立柱建物跡(N-32°-E)、第1号掘立柱建物跡(N-30°-E)と平行し、第46号溝跡(N-26°-E)ともほぼ平行する。南北辺は第46号溝跡に沿って設けられていた可能性が考えられる。東西辺は、第4号掘立柱建物跡(N-71°-W)、第2号柵列跡(N-65°-W)、第47号溝跡(N-66°-W)とほぼ平行している。東西辺については第47号溝跡に沿って設けられていた可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。中・近世と推定される第1・3号掘立柱建物跡の方位に近いことから、本遺構の時期は中・近世と考えられる。

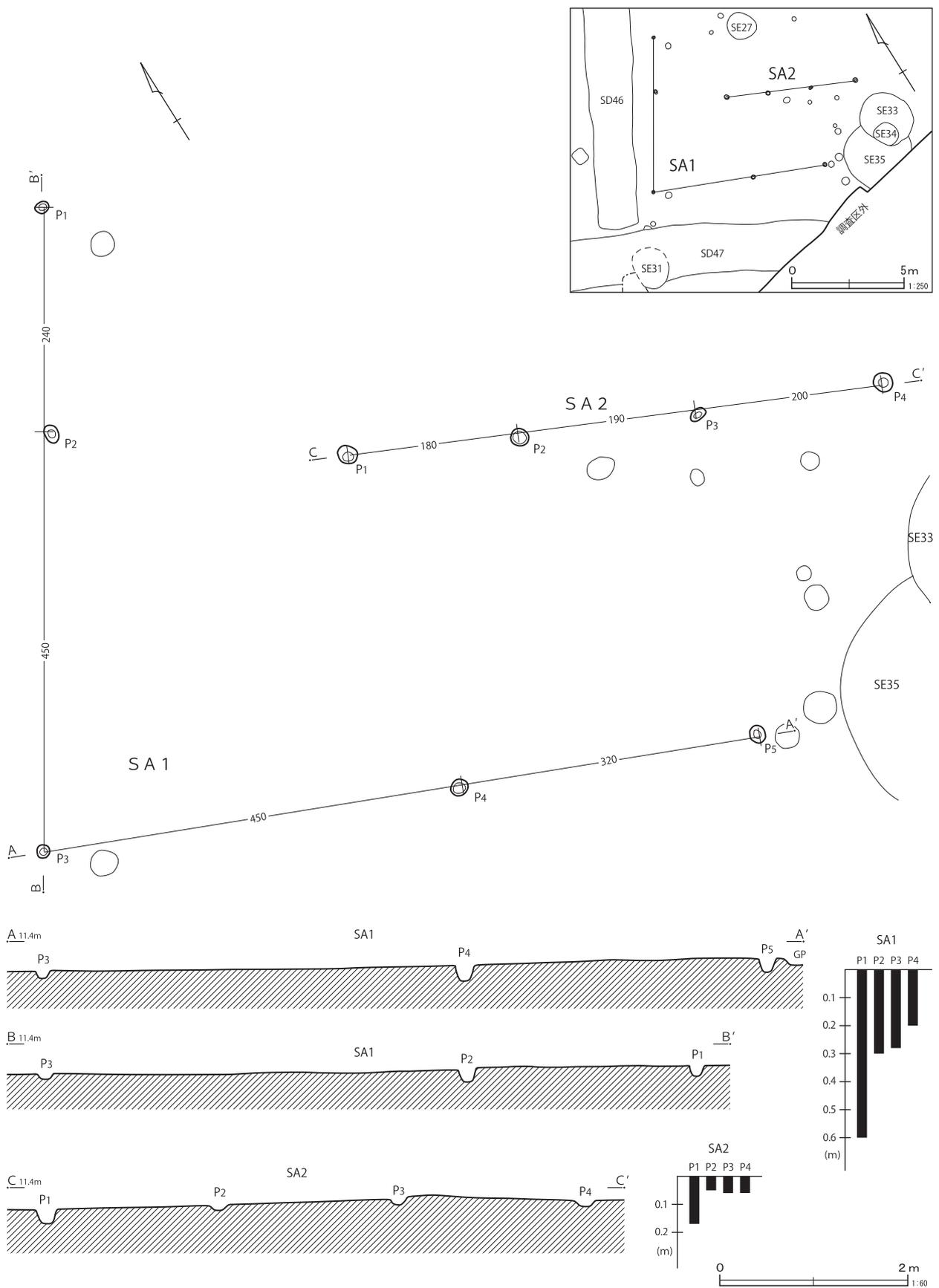
第2号柵列跡 (第277図)

J-5、K-5・6グリッドに位置する。直接重複する遺構は検出されなかったが、本遺構は、第1号柵列跡で囲む範囲内に位置している。

P1～4が確認された。柵列跡の総延長は5.70m。柱間距離は、P1-P2間1.80m、P2-P3間1.90m、P3-P4間2.00m(平均1.90m)、



第276図 柵列跡分布図



第277图 第1·2号栅列迹

柱穴の規模は径12×18cm～20×22cm、深さ5～17cmと比較的均一である。柱間距離は数値的に近く、柱筋は通っているが、柱穴はいずれも小規模である。

方位は、N-65°-Wを指す。第3号掘立柱建物跡(N-32°-E)、第1号掘立柱建物跡(N-30°-E)、第46号溝跡(N-26°-E)とほぼ直交する。第4号掘立柱建物跡(N-71°-W)、第2号柵列跡(N-65°-W)、第47号溝跡(N-66°-W)とはほぼ平行している。

同時性は不明ではあるが、第1・3号掘立柱建物跡、第46・47号溝跡を意識して設けられていた可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。中・近世と推定される第1・3号掘立柱建物跡の方位に近いことから、併存の有無は不明ながら本遺構の時期は中・近世と考えられる。

第3号柵列跡(第278図)

J-9グリッドに位置する。第21・25号周溝状遺構より新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。P1-P3から成る辺と、P3-P5から成る辺の2辺が検出されたが、1基の柵列と判断した。

P1～5が確認された。2辺の長さは、前者が2.20m、後者が2.70m、総延長4.90m。柱間距離は、P1-P2間1.20m、P2-P3間1.00m、P3-P4間1.60m、P4-P5間1.10m(平均1.23m)、柱穴の規模は径20×25cm～25×30cm、と比較的均一であるが、深さは11～40cmと幅がある。柱筋は通っているが、柱間距離はやや不均一で、柱穴はいずれも小規模である。

方位は、P1-P3から成る辺がN-46°-W、P3-P5から成る辺がN-50°-Eを指し、両辺の開きは84°である。両辺ともに第17号掘立柱建物跡(N-43°-W)、第14号掘立柱建物跡(N-35°-E)と比較的平行・直交関係にあるが、第17号掘立柱建物跡については囲い込む形ではない。またP

3-P5から成る辺は、第75号溝跡とほぼ平行する。方位は若干異なるが、周囲の溝跡に平行もしくは直交するようにも見受けられるが、詳細は不明である。

遺物は出土しなかった。中・近世と推定される第14・17号掘立柱建物跡の方位に近いことから、併存の有無は不明ながら本遺構の時期は中・近世と考えられる。

第4号柵列跡(第278図)

J-10グリッドに位置する。第21・22号周溝状遺構より新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

P1～4が確認された。柵列跡の総延長は3.60m。柱間距離は、P1-P2間1.00m、P2-P3間1.40m、P3-P4間1.20m(平均1.20m)、柱穴の規模は径15×20cm～22×25cm、深さ12～18cmと比較的均一である。柱筋は通っているが、柱間距離は不均一で、柱穴はいずれも小規模である。

方位は、N-38°-Eを指し、第14号掘立柱建物跡(N-35°-E)、第75号溝跡とほぼ平行する。

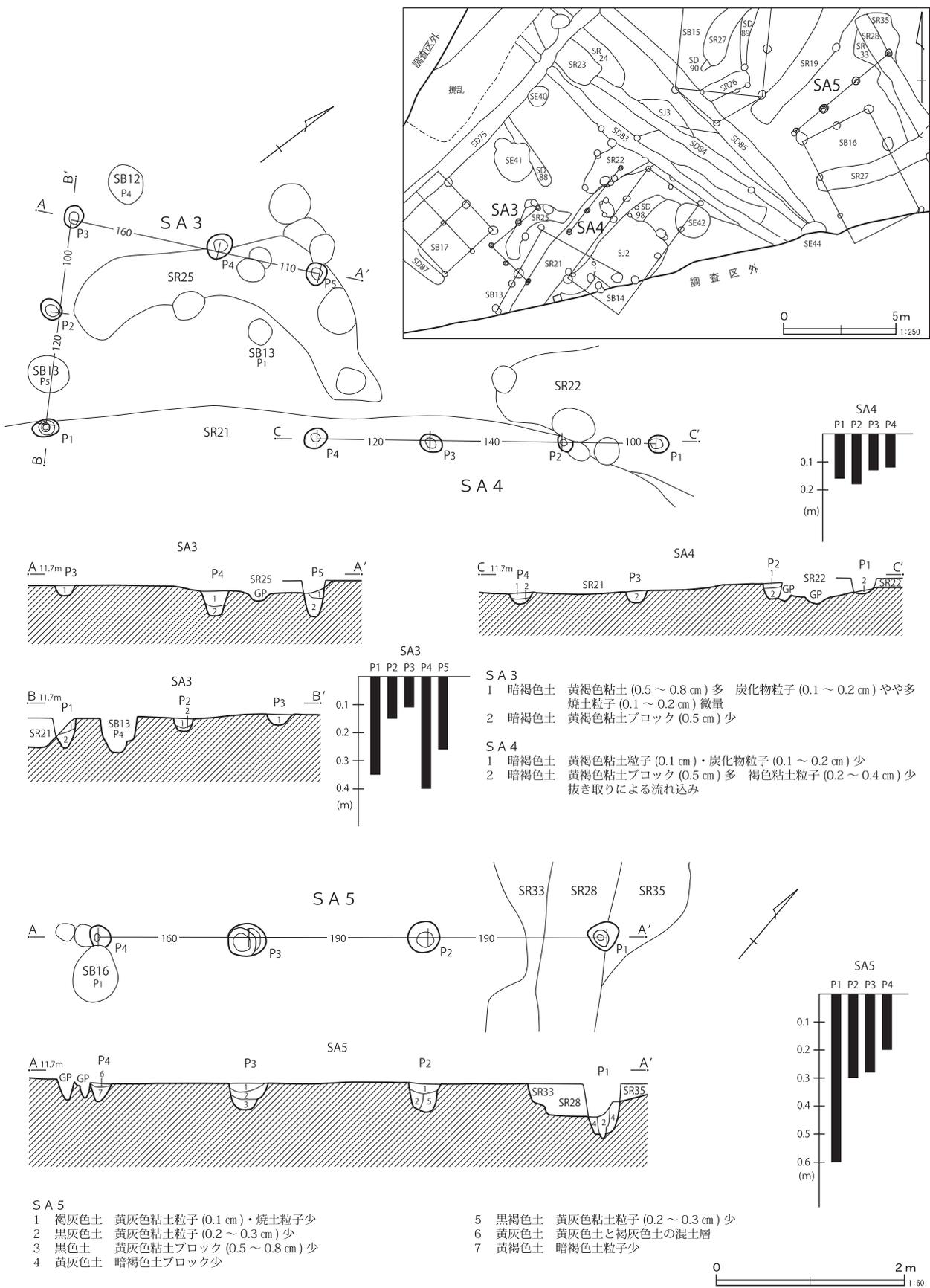
遺物は出土しなかった。中・近世と推定される第14・17号掘立柱建物跡の方位に近いことから、併存の有無は不明ながら本遺構の時期は中・近世と考えられる。

第5号柵列跡(第278図)

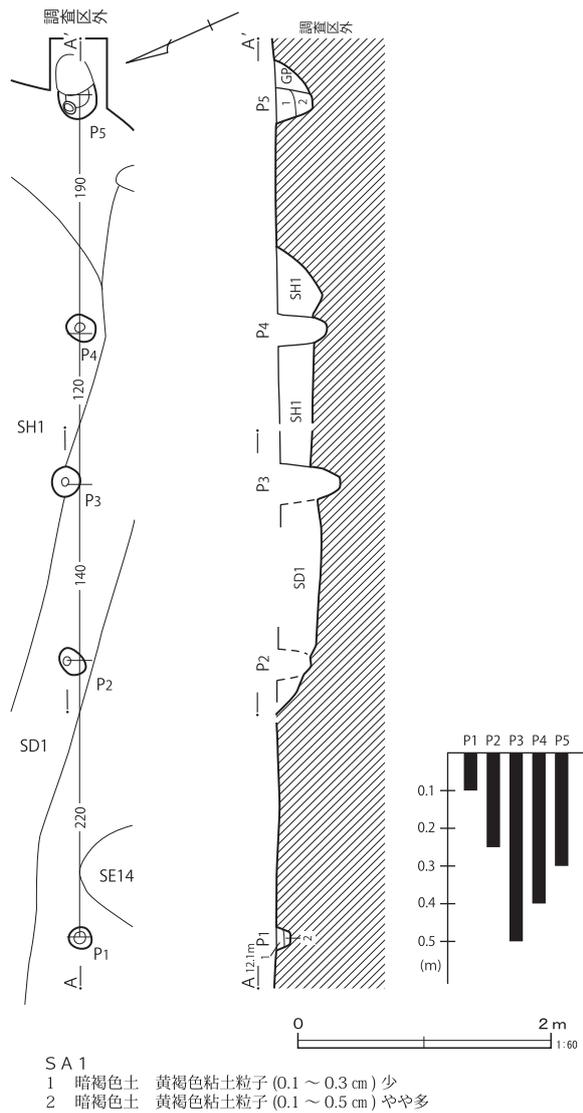
I・J-11グリッドに位置する。第27・28・33・35号周溝状遺構より新しい。

P1～4が確認された。柵列跡の総延長は5.40m。柱間距離は、P1-P2間1.90m、P2-P3間1.90m、P3-P4間1.60m(平均1.80m)、柱穴の規模は径20×25cm～35×40cm、深さ20～60cmと幅がある。柱筋は通っており、柱間距離も整っているといえる。柱穴の規模は、他の柵列よりも若干大きいといえる。

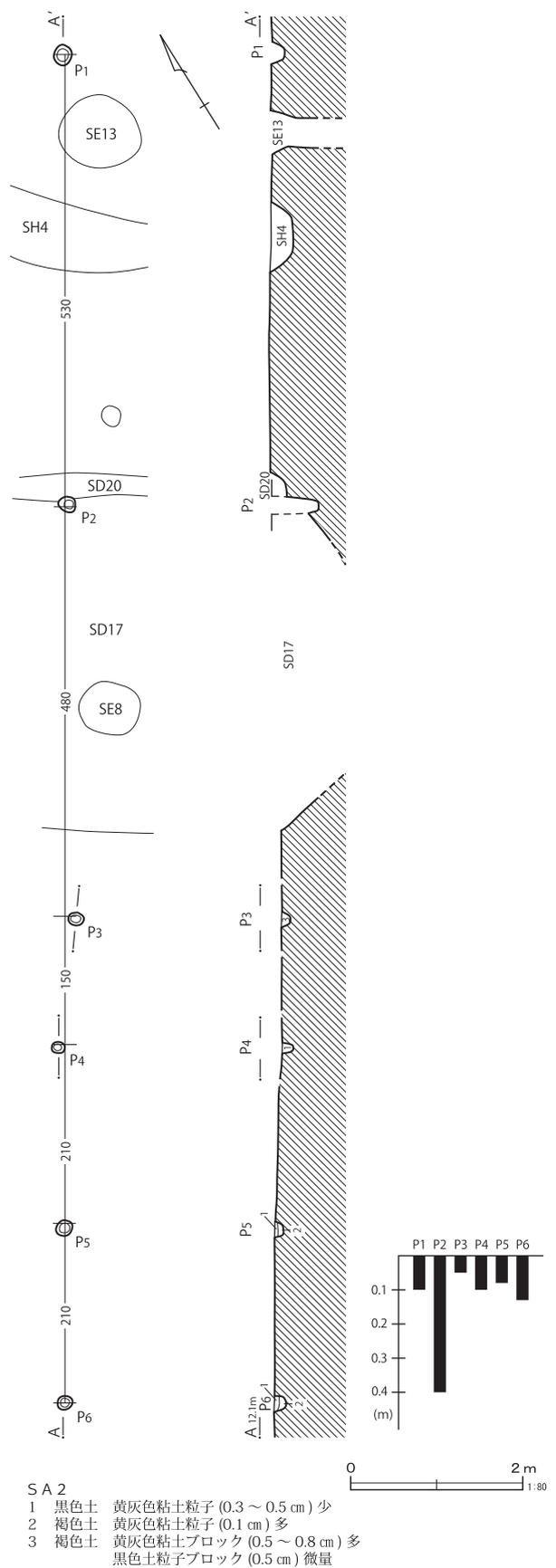
方位は、N-50°-Eを指し、第14号掘立柱建物跡(N-35°-E)とほぼ平行し、第17号掘立柱建物跡(N-43°-W)とは直交関係に近い。また、



第278図 第3・4・5号柵列跡



第279図 E区第1号柵列跡



第280図 E区第2号柵列跡

第3号柵列跡のP3-P5の辺と平行関係にある。

遺物は出土しなかった。中・近世と推定される第14・17号掘立柱建物跡の方位に近いことから、併存の有無は不明ながら本遺構の時期は中・近世と考えられる。

E区第1号柵列跡 (第279図)

B-24・25グリッドに位置する。E区第1号方形周溝墓と1つのピットより新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

P1~5が確認された。柵列跡の総延長は6.70m。柱間距離は、P1-P2間2.20m、P2-P3間1.40m、P3-P4間1.20m、P4-P5間1.90m(平均1.68m)、柱穴の規模は径15×15cm~20×30cm、深さ10~50cmと若干の幅がある。

柱穴はいずれも小規模ではあるが、柱筋は通っている。しかし、柱間距離は不均一である。

方位は、N-66°-Wを指し、E区第7号掘立柱建物跡(N-29°-E)、E区第6号掘立柱建物跡(N-30°-E)とは比較的直交関係にある。

遺物は出土しなかった。中・近世と推定されるE区第6・7号掘立柱建物跡の方位に近いことか

ら、併存の有無は不明ながら本遺構の時期は中・近世と考えられる。

E区第2号柵列跡 (第280図)

C-24、D-23・24グリッドに位置する。E区第4号方形周溝墓より新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

P1~6が確認された。柵列跡の総延長は15.80m。柱間距離は、P1-P2間5.30m、P2-P3間4.80m、P3-P4間1.50m、P4-P5間2.10m、P5-P6間2.10m(平均3.16m)、柱穴の規模は、径15×16cm~20×24cmというように比較的均一であるが、深さは5~40cmであり若干の幅がある。

柱穴はいずれも小規模ではあるが、柱筋は比較的通っている。しかし、柱間距離は不均一である。

方位は、N-33°-Eを指し、E区第7号掘立柱建物跡(N-29°-E)、E区第6号掘立柱建物跡(N-30°-E)と平行関係にある。

遺物は出土しなかった。中・近世と推定されるE区第6・7号掘立柱建物跡との方位・位置関係から、併存の有無は不明ながら本遺構の時期は中・近世と考えられる。

(6) 土壌

土壌については、古墳時代、古代、中・近世のものが混在すると考えられ、時期を特定することは極めて困難であることから、この項ですべての土壌について扱うこととした。なお、発掘調査の工程上、D区・E区を並行して行ったため、遺構名の重複を避けるべく各々区名を冠して、D区第1号土壌、E区第1号土壌と命名した。但し、A～C区については連番で行っているため、区名の表記を行っていない。

A～C区で検出された土壌（区名表記なし）は41基、D区37基、E区25基の計103基である。

第1号土壌（第282図）

G-5グリッドに位置する。第2号溝跡より新しい。平面形は円形に近い楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.35m、短径1.30m、深さ15cm、長軸方位はN-34°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第2号土壌（第282図）

G-6グリッドに位置する。重複する第12号掘立柱建物跡や、ピットとの新旧関係は確認できな

かった。平面形は隅丸長方形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径3.40m、短径2.00m、深さ5cm、長軸方位はN-26°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第3号土壌（第282図）

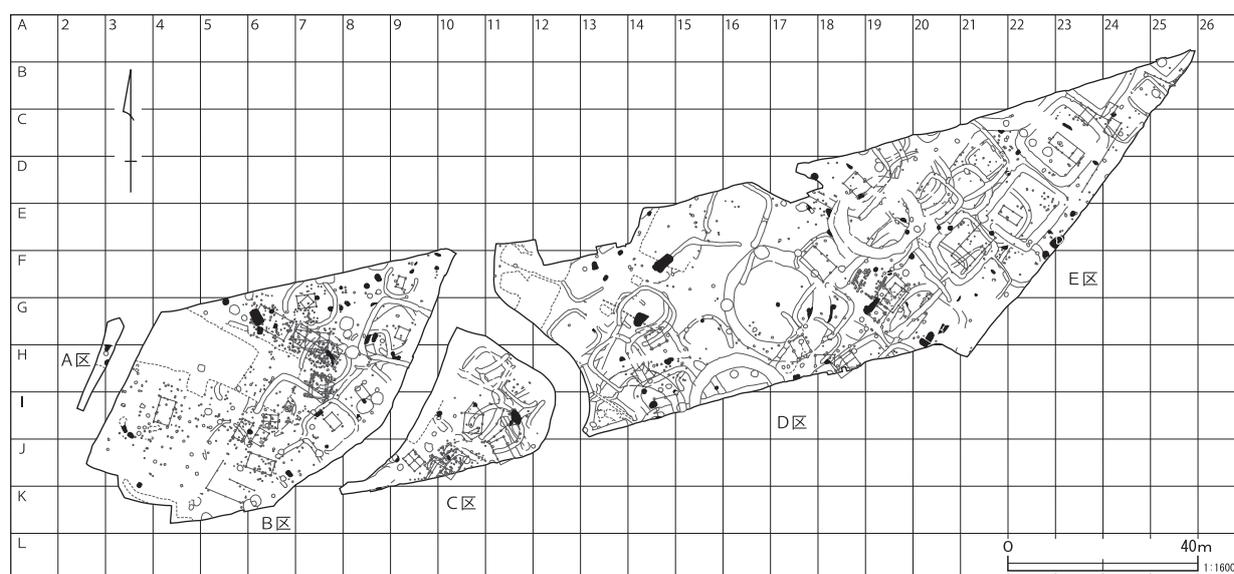
G-6グリッドに位置する。重複する第12号掘立柱建物跡やピットとの新旧関係は確認できなかった。平面形は隅丸長方形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.50m、短径1.15m、深さ5cm、長軸方位はN-8°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

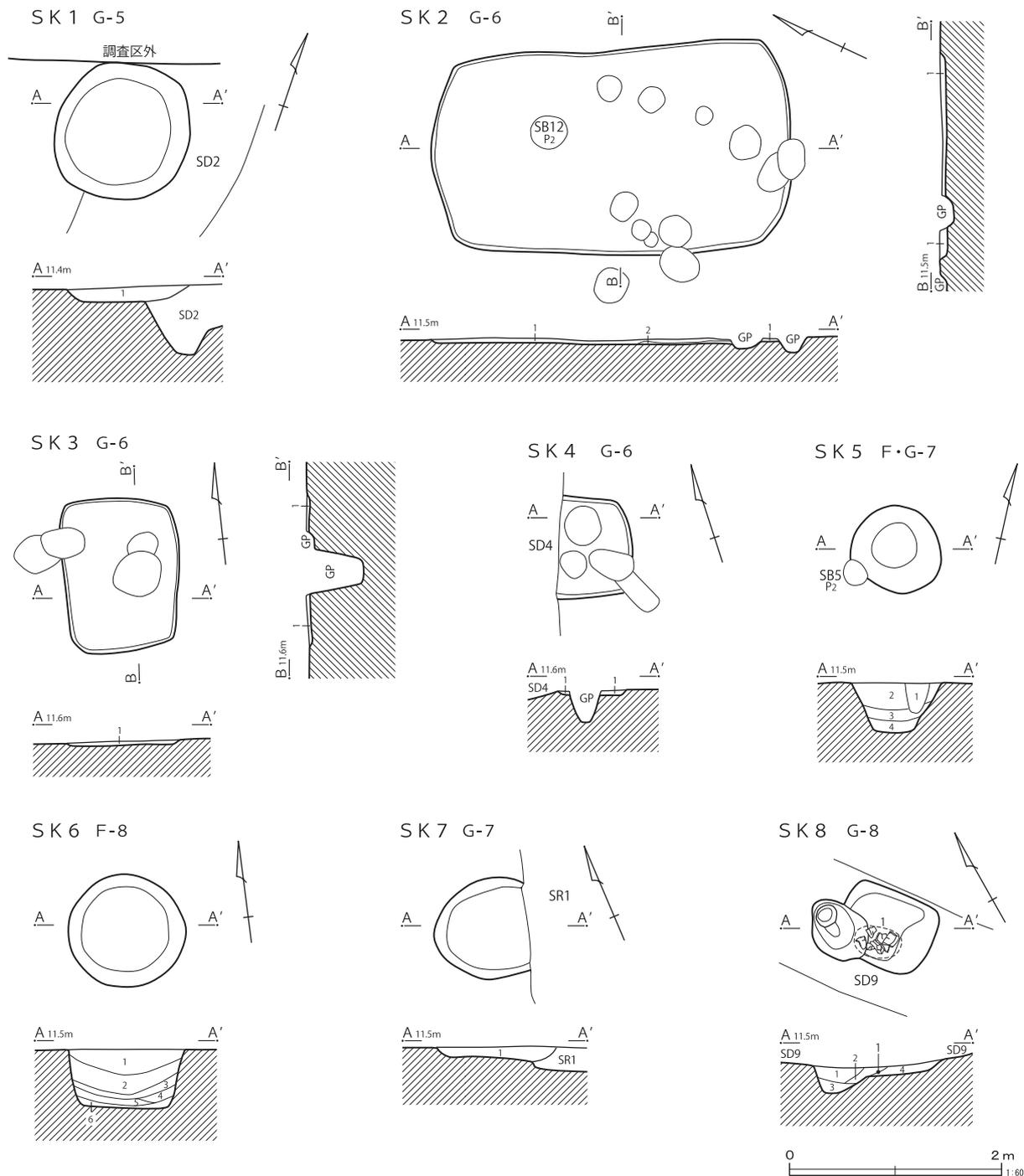
第4号土壌（第282図）

G-6グリッドに位置する。重複する第4号溝跡や、ピットとの新旧関係は確認できなかった。平面形は隅丸方形、または隅丸長方形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、径が0.99×[0.75]m、深さ6cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。



第281図 土壌分布図



- SK 1
1 灰褐色土 炭化物・焼土少
- SK 2
1 褐灰色土 黒色土が混じる褐色地山ブロック多 粘性弱
2 黒褐色土 褐色地山ブロック微量 粘性弱
- SK 3
1 褐灰色土 黄灰色土ブロック・褐色地山ブロック多 粘性弱
- SK 4
1 黄褐色土 褐色地山粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 多

- SK 5
1 褐灰色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 少
2 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 均質に少 埋戻し土
3 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) 少
4 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) 疎らに少
- SK 6
1 褐灰色土 黄灰色粘土ブロック (1 cm) 少
2 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック (1 cm) 少
3 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック (1 cm) 多
4 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック (1 cm) 均質に多
5 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック (1 cm) 疎らに少
6 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 少

- SK 7
1 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 多
- SK 8
1 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) 少
2 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) 疎らに少
3 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) 多
4 黄褐色土 黒褐色土との混土层

第282図 土壌 (1)

第5号土壙 (第282図)

F・G-7グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。平面形は円形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、径が0.86×0.85m、深さ50cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第6号土壙 (第282図)

F-8グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形は円形、断面形は立ち上がりの急な逆台形である。遺構の規模は、径が1.15×1.10m、深さ57cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第7号土壙 (第282図)

G-7グリッドに位置する。第1号周溝状遺構よりも新しい。平面形は円形と推測される。遺構の規模は、径が1.00×[0.93]m、深さ16cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第8号土壙 (第282・294図)

G-8グリッドに位置する。第9号溝跡との新旧関係は確認できなかった。重複関係にある土壙がピット状であるが、1つの土壙として扱った。ピット部分の平面形は長楕円形、断面形は碗形である。規模は、長径0.65m、短径0.52m、深さ28cm、長軸方位はN-9°-Wである。次いで、土壙部分の平面形は隅丸長方形、断面形は皿状である。規模は、長径0.88m、短径0.73m、深さ7cm、長軸方位はN-41°-Wである。

土師器の甕(1)が出土している。遺構の時期は古墳時代前期と推定される。

第9号土壙 (第283図)

F-9グリッドに位置する。重複遺構はない。平面形は長楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.50m、短径1.05m、深さ10cm、長軸方位はN-48°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第10号土壙 (第283図)

F-9グリッドに位置する。重複遺構はない。平面形は長楕円形、断面形は碗形である。遺構の規模は、長径1.20m、短径0.71m、深さ45cm、長軸方位はN-45°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第11号土壙 (第283図)

G-7グリッドに位置する。重複するピットとの新旧関係は確認できなかった。平面形は長楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径0.94m、短径0.67m、深さ13cm、長軸方位はN-2°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第12号土壙 (第283図)

F-7グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形は楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径0.65m、短径0.60m、深さ17cm、長軸方位はN-45°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

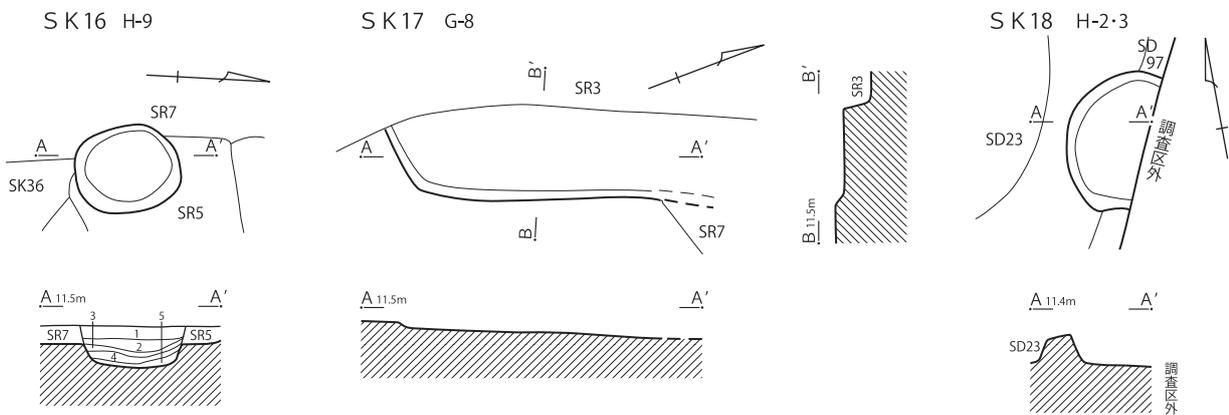
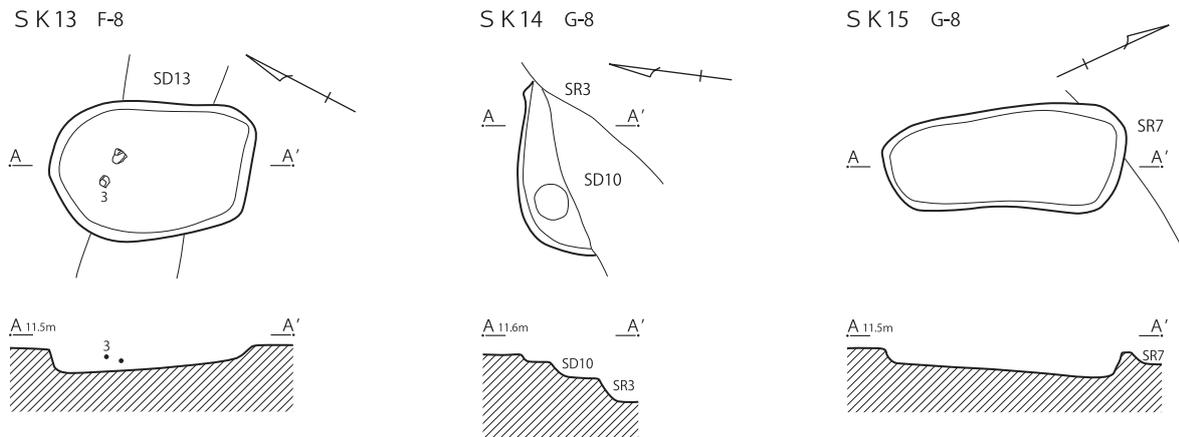
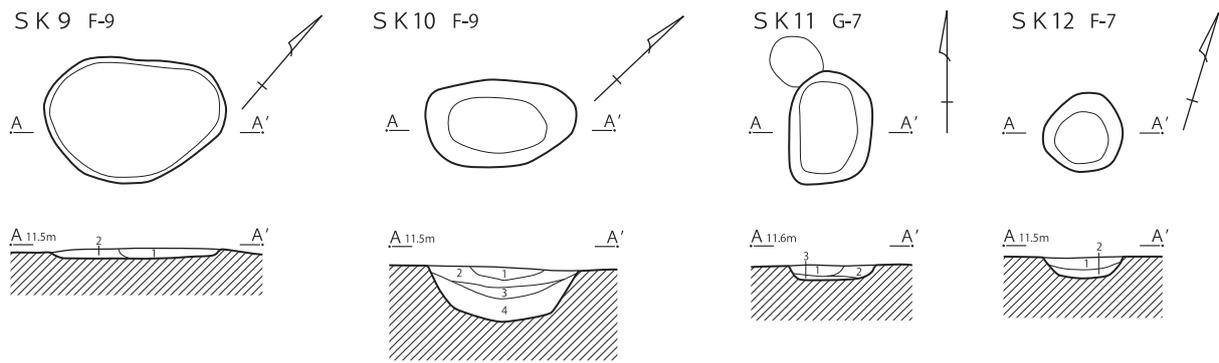
第13号土壙 (第283・294図)

F-8グリッドに位置する。重複する第13号溝跡との新旧関係は確認できなかった。平面形は歪な長楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.65m、短径1.17m、深さ12cm、長軸方位はN-30°-Wである。

土師器の台付甕(2・3)が出土している。遺構の時期は、古墳時代前期と推定される。

第14号土壙 (第283図)

G-8グリッドに位置する。重複する第3号周溝状遺構、第10号溝跡との新旧関係は確認できなかった。平面形は隅丸長方形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径[1.45]m、短径[0.40]m、



- SK 9
 1 暗褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 多 埋戻し土
 2 黄灰色土 褐色土との混土层
- SK 10
 1 黒灰色土 黄灰色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 疎らに少
 2 黒灰色土 黄灰色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 疎らに少
 1層より明るい
 3 黒灰色土 黄灰色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm)・炭化物少 粘性強
 4 黒灰色土 黄灰色粘土ブロック (1 cm)・炭化物少 粘性強
- SK 11
 1 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) 多
 2 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) 少
 3 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) との混土层

- SK 12
 1 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.4 ~ 0.7 cm) 少
 褐色地山粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 微量
 2 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.4 ~ 0.7 cm) 多 焼土微量
- SK 16
 1 黒褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 多
 2 黒褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 少
 3 黄褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 極多
 4 黒褐色土 黄灰色粘土粒子 (0.3 ~ 0.5 cm) 少
 5 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 多

第283図 土壌 (2)

深さ7cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第15号土壙 (第283図)

G-8グリッドに位置する。重複する第3・5・7号周溝状遺構との新旧関係は確認できなかった。平面形は隅丸長方形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.95m、短径0.90m、深さ20cm、長軸方位はN-20°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第16号土壙 (第283図)

H-9グリッドに位置する。重複する第5・7号周溝状遺構よりも新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。平面形は楕円形、断面形は碗形である。遺構の規模は、長径0.87m、短径0.77m、深さ35cm、長軸方位はN-18°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第17号土壙 (第283図)

G-8グリッドに位置する。第3・7号周溝状遺構より新しい。平面形は隅丸長方形と推定されるが詳細は不明で、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径[2.20]m、短径[0.80]m、深さ11cm、長軸方位はN-25°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第18号土壙 (第283図)

H-2・3グリッドに位置する。東側は調査区外に続く。重複する第97号溝跡との新旧関係は確認できなかった。平面形は楕円形と推定されるが詳細は不明である。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.24m、短径[0.65]m、深さ25cm、長軸方位はN-28°-Eと推定される。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第19号土壙 (第284図)

H-2・3グリッドに位置する。北側は攪乱によって失われている。第22号溝跡より新しい。平面形は長楕円形と推定されるが詳細は不明である。断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径[1.38]m、短径[0.90]m、深さ31cm、長軸方位はN-26°-Eと推定される。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第20号土壙 (第284図)

F-9・10グリッドに位置する。第32号溝跡よりも古い。第15号溝跡との新旧関係は確認できなかった。平面形は円形、断面形は箱形である。遺構の規模は、径0.80m×0.75m、深さ60cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第21号土壙 (第284図)

I-7グリッドに位置する。第9号周溝状遺構との新旧関係は確認できなかった。平面形は不整形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.67m、短径[0.63]m、深さ9cm、長軸方位はN-51°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

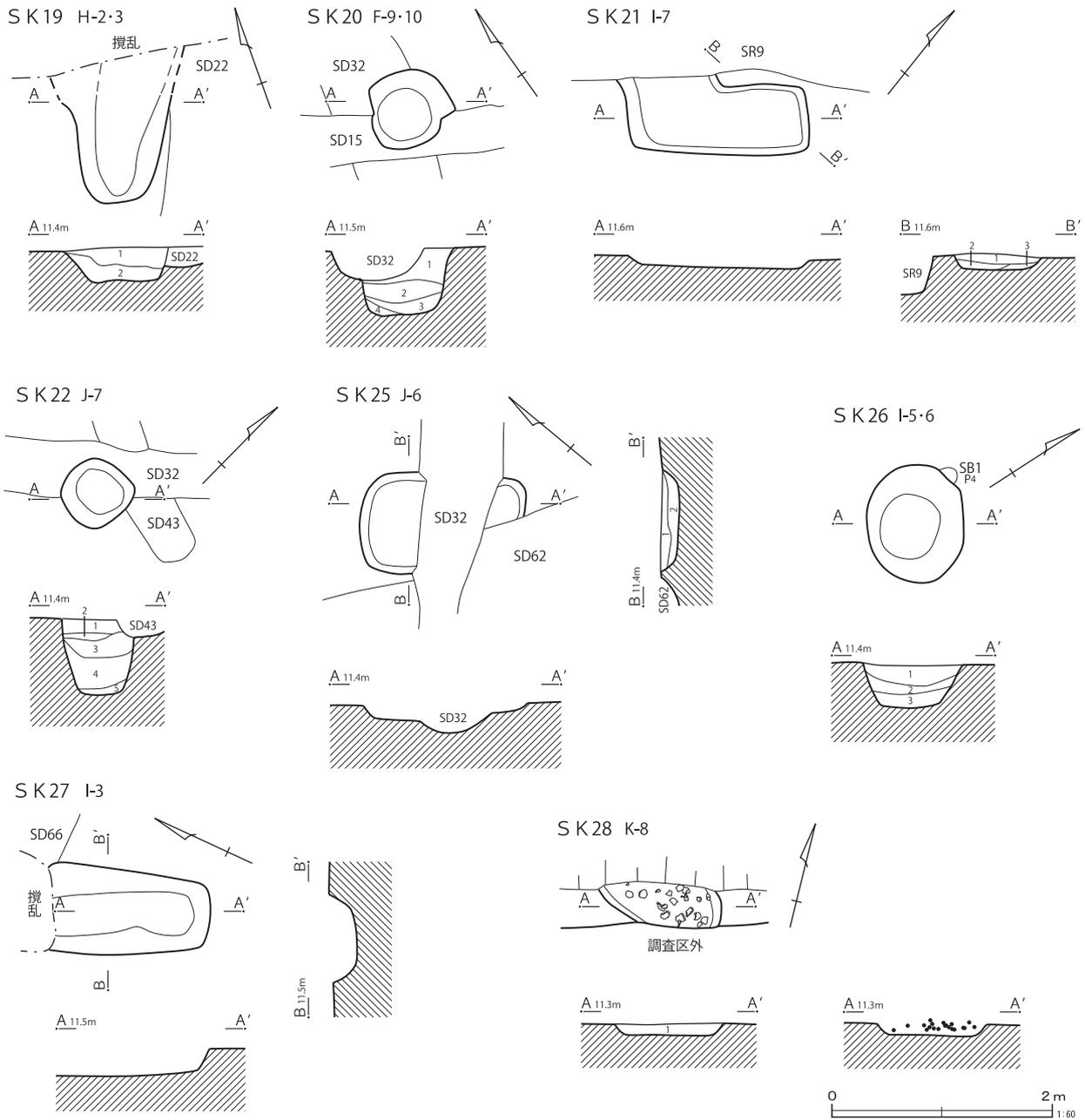
第22号土壙 (第284・294図)

J-7グリッドに位置する。第43号溝跡より古いと推定される。平面形は円形、断面形はU字形である。遺構の規模は、径が0.67×0.64m、深さ69cmである。

土師器の甕(4)が出土している。遺構の時期は古墳時代前期と推定される。

第25号土壙 (第284図)

J-6グリッドに位置する。重複する第32・62号溝跡との新旧関係は確認できなかった。平面形は隅丸長方形と推定されるが詳細は不明である。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.65m、短径0.94m、深さ16cm、長軸方位はN-39°-Wであ



- SK19**
- 1 黒褐色土 黒褐色土中に暗黄褐色土ブロック (0.5 cm) 少
しまり強 粘性やや強
 - 2 暗褐色土 黄褐色灰ロームブロック (2 ~ 4 cm) 多
黒褐色土ブロックやや少 しまり・粘性強

- SK20**
- 1 明暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 多 酸化土少
 - 2 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 ~ 3 cm) やや多
焼土ブロック (0.5 cm)・褐色粘土ブロック (2 ~ 3 cm) 少
 - 3 灰褐色土 褐色粘土ブロック (0.5 cm) 多
 - 4 暗灰色土 褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm)・黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 多
酸化土粒子 (0.2 cm) 微量

- SK21**
- 1 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 少 褐色地山粒子 (0.3 cm) 微量
 - 2 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm)・炭化物粒子 (0.2 cm) やや多
 - 3 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) 多 焼土粒子 (0.2 cm) 微量

- SK22**
- 1 褐色土 しまりやや強
 - 2 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) 少
 - 3 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) 多 粒子は薄い層状
 - 4 灰褐色土 褐色地山粒子 (0.1 cm) 少 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) 微量
 - 5 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 少

- SK25**
- 1 褐色土 暗褐色土ブロック (1 cm) 微量
 - 2 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.3 ~ 0.6 cm) 多
焼土粒子 (0.2 cm) 微量

- SK26**
- 1 暗褐色土 褐色粘土ブロック (5 ~ 10 cm)・褐色地山ブロック (0.5 cm) やや多
 - 2 暗褐色土 褐色地山ブロック (0.5 ~ 1 cm) 多 炭化物粒子 (0.3 cm) やや多
 - 3 褐色土 褐色地山ブロック (0.5 cm) やや多

- SK28**
- 1 暗黄灰色土 暗黄灰色土ブロック (1 cm) 多 (縄文時代土坑覆土) シルト質

第284図 土壌 (3)

る。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第26号土壙 (第284図)

I-5・6グリッドに位置する。重複する第1号掘立柱建物跡との新旧関係は確認できなかった。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径1.09m、短径0.88m、深さ38cm、長軸方位はN-65°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第27号土壙 (第284図)

I-3グリッドに位置する。北側は攪乱によって失われている。平面形は隅丸長方形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径[1.43]m、短径0.67m、深さ24cm、長軸方位はN-23°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第28号土壙 (第284図)

K-8グリッドに位置する。北側は谷地形であるため、調査の過程でプランが失われており、南側は調査区外に続いている。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.10m、短径[0.40]m、深さ11cmである。

縄文時代後期の遺物が出土している(要:IV-1参照)。遺構の時期は縄文時代後期と推定される。

第29号土壙 (第285図)

I-9・10グリッドに位置する。重複する第24号周溝状遺構、ピットとの新旧関係は確認されなかった。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径1.18m、短径0.85m、深さ29cm、長軸方位はN-38°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第30号土壙 (第285図)

J-10グリッドに位置する。第21号周溝状遺構、第14号掘立柱建物跡よりも古い。平面形は長楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径0.81m、短径0.50m、深さ8cm、長軸方位はN-30°-Wである。

古墳時代前期の土師器壺の破片が出土したが、図化には至らなかった。

第31号土壙 (第285図)

I-11グリッドに位置する。重複する第27・35号周溝状遺構との新旧関係は確認できなかった。平面形は長楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.08m、短径0.52m、深さ12cm、長軸方位はN-22°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は、古墳時代前期の可能性が考えられる。

第32号土壙 (第285図)

I-10グリッドに位置する。重複する第19号周溝状遺構、第15号掘立柱建物跡との新旧関係は確認できなかった。平面形は長楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径0.74m、短径0.57m、深さ12cm、長軸方位はN-36°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

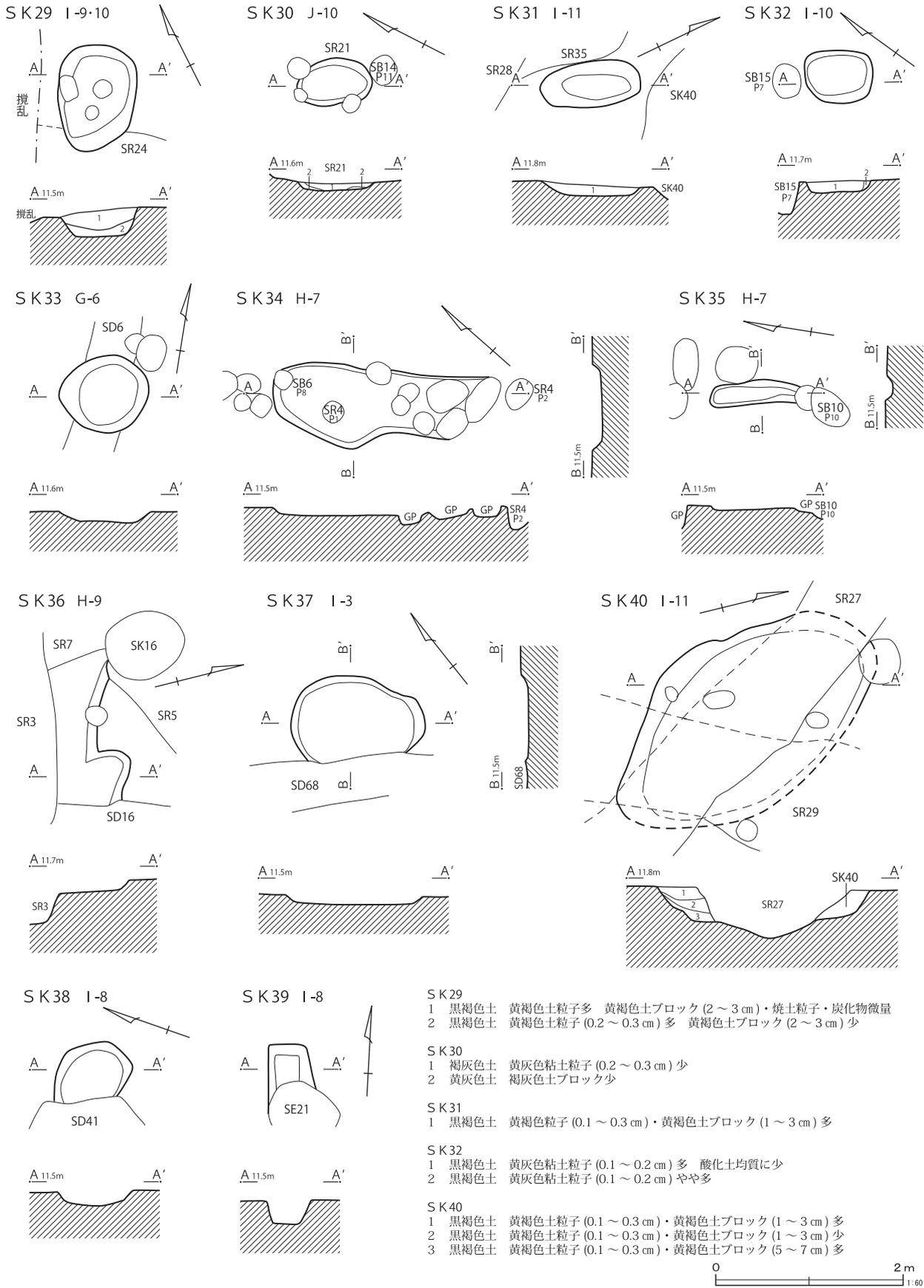
第33号土壙 (第285図)

G-6グリッドに位置する。重複する第12号掘立柱建物跡、第6号溝跡との新旧関係は確認できなかった。平面形は楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径0.98m、短径0.74m、深さ12cm、長軸方位はN-74°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第34号土壙 (第285図)

H-7グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。南側はピットとの重複によりプランが失われている。平面形は不整形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径



第285図 土壙 (4)

[2.36] m、短径0.66m、深さ11cm、長軸方位はN-37°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第35号土壙 (第285図)

H-7グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。南側はピットとの重複によりプランが失われている。平面形は溝状、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径[0.93] m、短径0.25m、深さ8 cm、長軸方位はN-11°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第36号土壙 (第285図)

H-9グリッドに位置する。重複する第3・5号周溝状遺構、第16号溝跡との新旧関係は確認できなかった。他遺構との重複によりプランが失われている。平面形は不整形、断面形は皿状である。遺構の規模は、[1.75] × [0.63] m、深さ13cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第37号土壙 (第285図)

I-3グリッドに位置する。重複する第68号溝跡との新旧関係は確認できなかった。西側は第68号溝跡との重複によりプランが失われている。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.44m、短径[0.85] m、深さ9 cm、長軸方位はN-52°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第38号土壙 (第285図)

I-8グリッドに位置する。第37号井戸跡より新しいが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。西側は第41号溝跡との重複によりプランが失われている。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、長

径[0.84] m、短径0.83m、深さ15cm、長軸方位はN-70°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第39号土壙 (第285図)

I-8グリッドに位置する。南側は第21号井戸跡との重複により失われているが、新旧関係は確認できなかった。平面形は隅丸長方形と推定される。断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径[0.64] m、短径0.46m、深さ25cm、長軸方位はN-3°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第40号土壙 (第285図)

I-11グリッドに位置する。第27号周溝状遺構よりも古いが、その他の重複遺構との新旧関係は確認できなかった。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径(3.25) m、短径(1.85) m、深さ37cm、長軸方位はN-28°-Wである。

遺物は出土しなかった。重複関係から、遺構の時期は古墳時代前期と推定される。

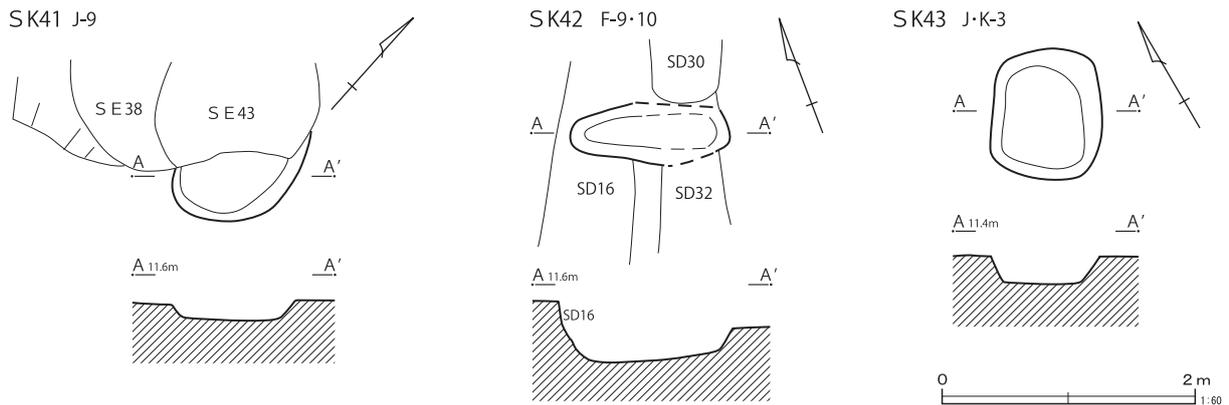
第41号土壙 (第286図)

J-9グリッドに位置する。北側は第38・43号井戸跡との重複により失われているが、新旧関係は確認できなかった。平面形は楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、平面規模は0.95×0.88mまでの確認である。深さは15cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第42号土壙 (第286図)

F-9・10グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。各溝跡の調査の過程で、本遺構の一部が失われている平面形はやや歪んだ長楕円形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径1.28m、短径(0.44) m、深さ43cm、長



第286図 土壇（5）

軸方位はN-69°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第43号土壇（第286図）

J・K-3グリッドに位置する。重複遺構はない。平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径1.05m、短径0.88m、深さ22cm、長軸方位はN-34°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第1号土壇（第287図）

H・I-14グリッドに位置する。D区第2号周溝状遺構よりも新しい。平面形は円形、断面形はロート状である。遺構の規模は、径が1.05×1.00m、深さ77cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明であるが、中・近世以前の可能性が考えられる。

D区第2号土壇（第287図）

I-14グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、確認できなかった。平面形は楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.71m、短径1.35m、深さ10cm、長軸方位はN-79°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第3号土壇（第287図）

H-14グリッドに位置する。D区第9号溝跡より新しく、D区第4号土壇よりは古い。平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.30m、短径0.95m、深さ15cm、長軸方位はN-64°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明であるが、古墳時代前期の可能性が考えられる。

D区第4号土壇（第287図）

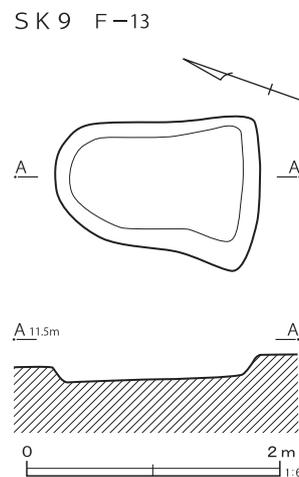
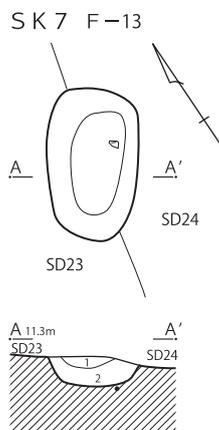
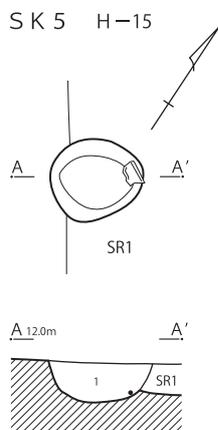
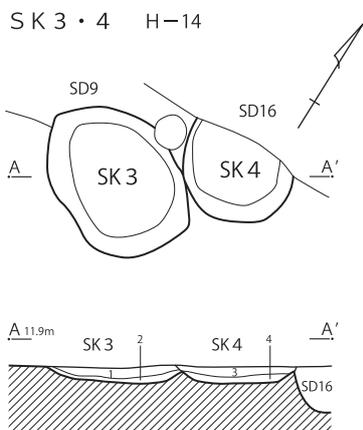
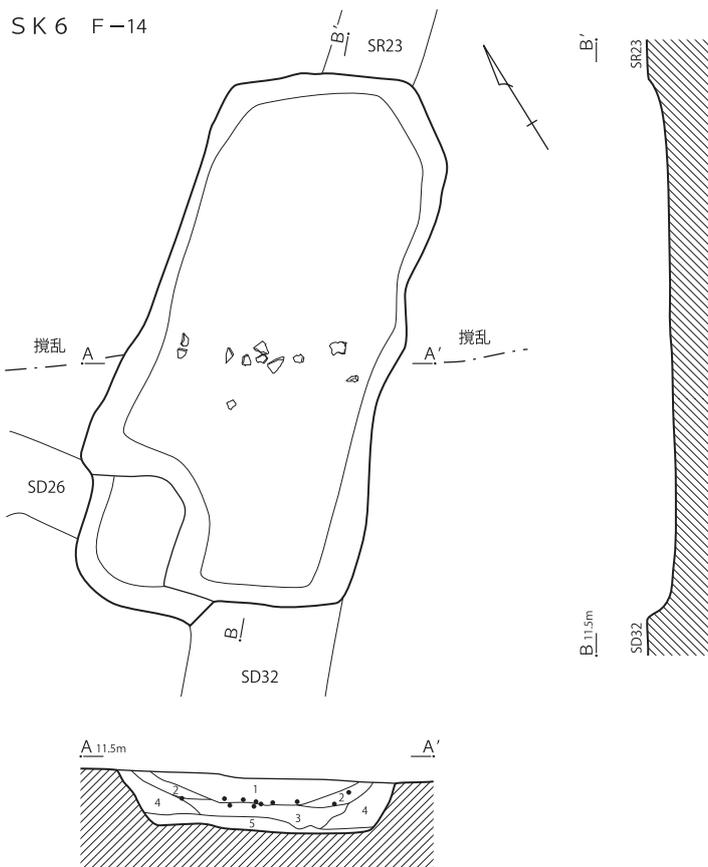
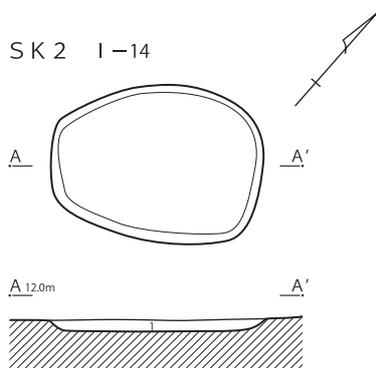
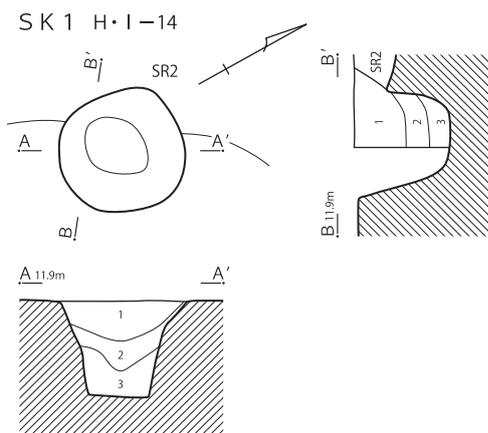
H-14グリッドに位置する。D区第16号溝跡、D区第3号土壇よりも新しい。本遺構の北側はD区第16号溝跡の調査の過程で失われている。平面形は楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、0.90×[0.82]m、深さ15cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明であるが、古墳時代前期の可能性が考えられる。

D区第5号土壇（第287図）

H-15グリッドに位置する。D区第1号周溝状遺構よりも新しい。平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は碗形である。遺構の規模は、長径0.70m、短径0.65m、深さ30cm、長軸方位はN-20°-Eである。

土師器の小破片が1点出土したが、図化には至らなかった。遺構の時期は、古墳時代前期の可能性が考えられる。



- SK 1
- 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 微量 土器片少
 - 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) やや多 土器片微量
 - 黒褐色土 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・褐色粘土ブロック (0.5 cm) ・灰色粘土ブロック (0.5 ~ 0.7 cm) 少
- SK 2
- 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) ・黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 多
- SK 3・4
- 褐灰色土 黄灰色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 多
 - 黄灰色土 褐灰色土粒子をブロック状に少
 - 暗褐灰色土 黄灰色粘土ブロック (0.3 ~ 0.5 cm) 少
 - 黄灰色土 暗褐灰色土ブロック (1 cm) 多

- SK 5
- 褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・炭化物少
- SK 6
- 黒褐色土 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) やや多
 - 黒灰色土 褐色粘土粒子 (0.2 cm) ・黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) やや多
 - 黒褐色土 褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 少 焼土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少 炭化物粒子 (0.2 ~ 0.4 cm) 微量 酸化土粒子やや多
 - 黒褐色土 褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) ・黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) 多 流れ込み 5層程度に薄く堆積している
 - 黒褐色土 褐色粘土ブロック (0.5 cm) 少 黄褐色粘土ブロック (0.5 cm ~ 3 cm) ・マンガンやや多 鉄分多
- SK 7
- 褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) やや多 埋戻し土
 - 褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 2 cm) 多 埋戻し土

第287図 D区土壌 (1)

D区第6号土壙（第287・294図）

F-14グリッドに位置する。D区第23号周溝状遺構、D区第32号溝跡より新しい。平面形はやや歪んだ隅丸長方形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径4.30m、短径2.30m、深さ45cm、長軸方位はN-46°-Eである。

土師器の高坏（5）が出土した。遺構の時期は古墳時代前期と推定される。

D区第7号土壙（第287図）

F-13グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。

平面形は長楕円形、断面形は壙形である。人為的埋め戻しであると考えられる。遺構の規模は、長径1.20m、短径0.70m、深さ25cmである。長軸方位はN-38°-Eである。

流れ込みと考えられる土師器の小破片が出土したが、図化には至らなかった。遺構の覆土の色調から、時期は近世の可能性が高い。

D区第9号土壙（第287図）

F-13グリッドに位置する。D区第30号周溝状遺構と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸三角形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.64m、短径1.04m、深さ14cm、長軸方位はN-20°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の覆土の色調から、時期は近世の可能性が高い。

D区第10号土壙（第288図）

H-15グリッドに位置する。D区第47号溝跡よりも新しい。平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は箱形である。遺構の規模は、長径0.73m、短径0.60m、深さ0.25m、長軸方位はN-5°-Wである。

遺構の時期は不明である。

D区第11号土壙（第288図）

G-18グリッドに位置する。D区第28号土壙、D区第3号墳、およびピットと重複しているが、新旧関係は確認できなかった。平面形はやや歪んだ

円形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、1.00×0.98m、深さ23cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第13号土壙（第288・294図）

G-18・19グリッドに位置する。D区第9号掘立柱建物跡より新しく、D区第48号溝跡と1つのピットよりも古い。D区第42号周溝状遺構との新旧関係は不明である。複数の土壙が重複しているかのような形状である。平面形はやや不整形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径4.32m、短径1.13m、深さ54cm、長軸方位はN-45°-Eである。

土師器の壺・甕・台付甕（6～9）が出土している。遺構の時期は、古墳時代前期と推定される。

D区第14号土壙（第288図）

G-13グリッドに位置する。D区第27号周溝状遺構より新しく、D区第32号溝跡よりも古い。前記の2遺構の調査の過程で、本遺構の大部分のプランは失われている。平面形は楕円形、断面形は皿状と推定される。遺構の平面規模は不明、深さは31cmである。

遺構の時期は不明であるが、古墳時代前期の可能性が考えられる。

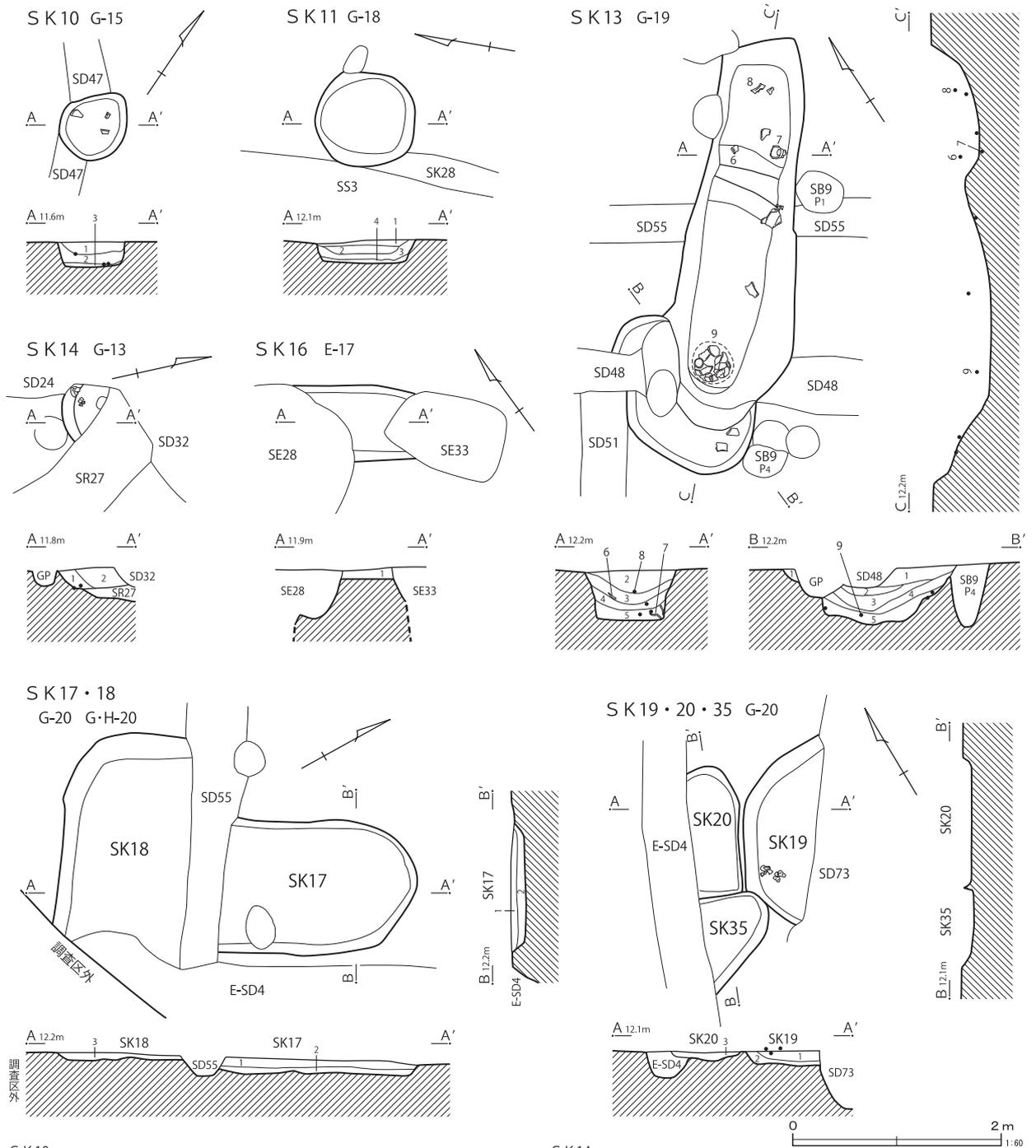
D区第16号土壙（第288図）

E-17グリッドに位置する。D区第28・33号井戸跡よりも古いため、両端部が失われている。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径 [1.16] m、短径0.75m、深さ10cm、長軸方位はN-52°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明であるが、古墳時代前期の可能性が考えられる。

D区第17号土壙（第288図）

G-20グリッドに位置する。D区第55号溝跡よりも古いため、西側部分が失われている。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径 [1.86] m、短径1.29m、深さ



- SK10**
 1 暗褐色土 黄褐色土粒子多 鉄分多
 2 暗褐色土 黄褐色土粒子微量 黄褐色土ブロック (1 cm) 少
 3 暗褐色土 黄褐色土粒子・黄褐色土ブロック (1~2 cm) 多

- SK11**
 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2~0.3 cm) 少
 2 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2~0.5 cm) 多 底に黒褐色土が薄く堆積
 3 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1~0.5 cm) やや多 褐色粘土粒子 (0.2~0.5 cm) 少
 4 黄灰色土 暗褐色土ブロック (0.5~1 cm) やや多

- SK13**
 1 暗褐色土 黄褐色土粒子 (0.1~0.3 cm)・黄褐色土ブロック (1~3 cm) 多
 2 黒灰色土 黄褐色土粒子 (0.1~0.3 cm) 極多 黄褐色土ブロック (3~5 cm) 多
 3 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1~0.3 cm) 多 黄褐色土ブロック (1~3 cm)・炭化物ブロック (1~3 cm) 少
 4 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1~0.3 cm) 少
 5 黒褐色土 黄褐色土粒子 (0.1~0.3 cm)・黄褐色土ブロック (1~3 cm) 極多

- SK14**
 1 暗褐色土 鉄分粒子 (0.1~0.3 cm) 微量 黄褐色土粒子 (0.1~0.3 cm) 少 黄褐色土ブロック (3~5 cm) 多
 2 暗褐色土 鉄分粒子 (0.1~0.3 cm) 多 黄褐色土粒子 (0.1~0.3 cm) 少

- SK16**
 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.3~0.5 cm) 多
- SK17・18**
 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.3~0.5 cm) 多
 2 黄褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 cm) と暗褐色土の混土層
 3 褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5~1 cm) 多

- SK19・20**
 1 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5~0.8 cm) 多
 2 黄褐色土 暗褐色土ブロック (0.5~0.8 cm) との混土層 埋戻し土か
 3 褐色土 暗褐色土ブロック・黄褐色土ブロック (0.5~0.8 cm) の混土層 攪乱か

第288図 D区土壌 (2)

16cm、長軸方位はN-28°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第18号土壙（第288図）

G・H-20グリッドに位置する。D区第55号溝跡より古いため、東側部分が失われている。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径 [2.20] m、短径 [1.25] m、深さ 7 cm、長軸方位はN-57°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第19号土壙（第288図）

G-20グリッドに位置する。D区第73号溝跡よりも古いため、東側部分が失われている。平面形は楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、[1.85] × [0.70] m、深さ15cmである。

土師器片が出土したが、図化には至らなかった。遺構の時期は、古墳時代前期と推定される。

D区第20号土壙（第288図）

G-20グリッドに位置する。E区第4号溝跡よりも新しいが、調査の過程で本遺構の西側部分のプランは失われている。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径 [1.25] m、短径 [0.44] m、深さ 8 cm、長軸方位はN-28°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第21号土壙（第289図）

F-19グリッドに位置する。D区第42号周溝状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径0.96m、短径0.82m、深さ32cm、長軸方位はN-52°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は、古墳時代前期の可能性が考えられる。

D区第22号土壙（第289図）

F-19・20グリッドに位置する。E区第13号周

溝状遺構より新しいが、D区第77・86号溝跡との新旧関係は不明である。平面形は楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、1.13 × [0.90] m、深さ12cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第23号土壙（第289図）

F-21グリッドに位置する。D区第75号溝跡より古い。本遺構の北側部分はプランが失われている。平面形は楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、0.52m × [0.43] m、深さ12cmである。

縄文時代後期の土器が出土しており、該期の遺構と推定される。

D区第24号土壙（第289図）

H・I-14グリッドに位置する。D区第15号井戸跡、D区第1号墳よりも古い。平面形は楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、0.60 × [0.24] m、深さ13cmである。

縄文時代後期の土器が出土しており、該期の遺構と推定される。

D区第25号土壙（第289図）

G-17グリッドに位置する。D区第3号墳よりも古いと推定される。平面形は楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径0.84m、短径0.66m、深さ11cmである。長軸方位はN-8°-Eである。

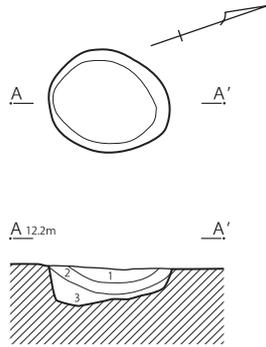
縄文時代後期の土器が出土しており、該期の遺構と推定される。

D区第26号土壙（第289図）

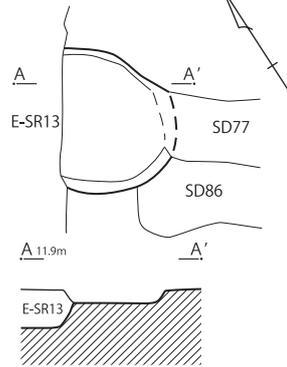
F-19グリッドに位置する。D区第83号溝跡より新しいが、D区第42号周溝状遺構との新旧関係は確認できなかった。平面形は長楕円形、もしくは隅丸長方形と推定される。断面形は逆台形に近いといえる。遺構の規模は、長径1.02m、短径0.83m、深さ46cm、長軸方位はN-43°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明であ

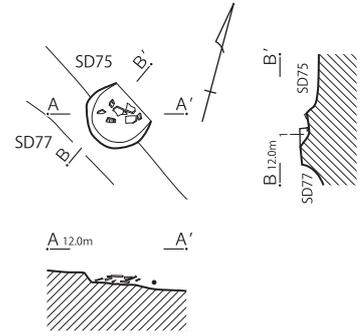
SK21 F-19



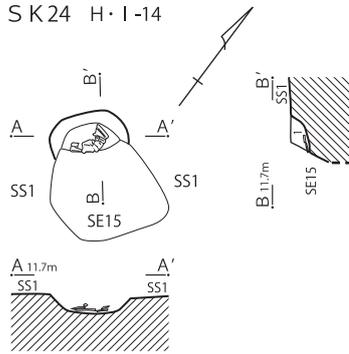
SK22 F-19-20



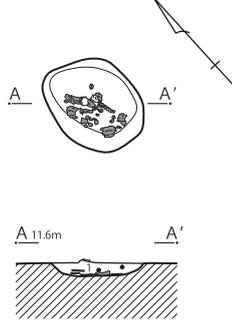
SK23 F-21



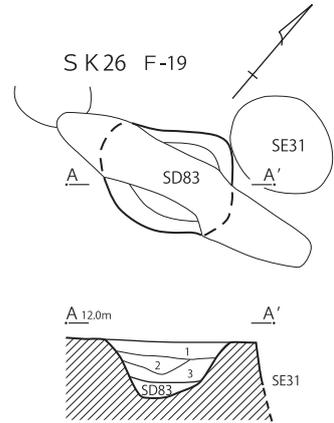
SK24 H-I-14



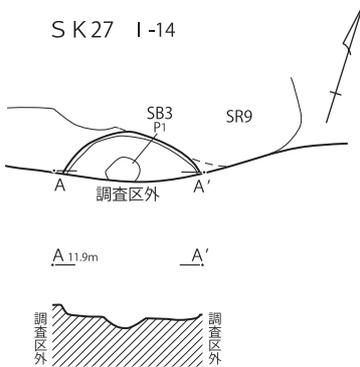
SK25 G-17



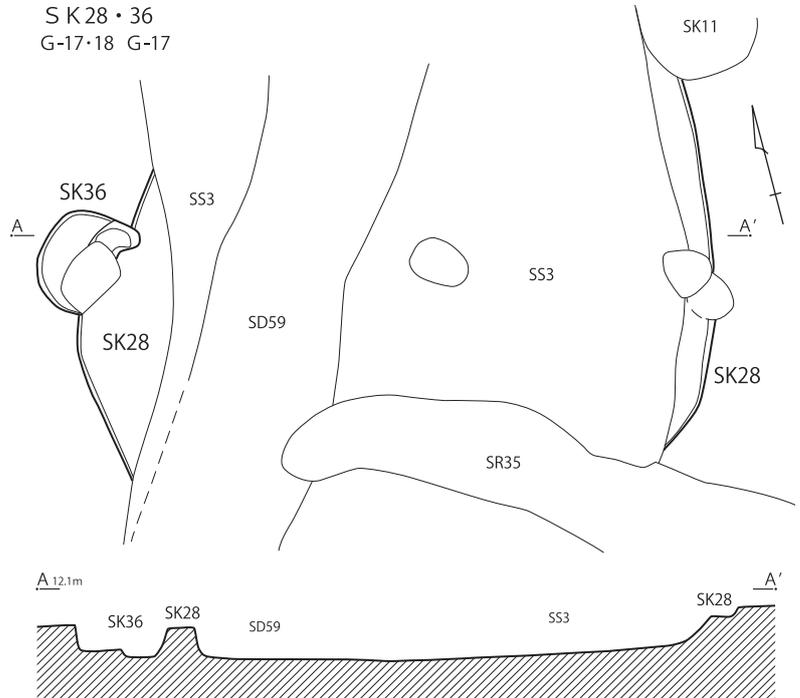
SK26 F-19



SK27 I-14



SK28・36
G-17・18 G-17



SK21

- 1 黒褐色土 暗褐色土ブロック(0.5 cm)・黄褐色粘土粒子(0.1~0.2 cm) やや多
- 2 黒褐色土 黄褐色粘土粒子(0.2~0.5 cm) 少
- 3 黒褐色土 黄褐色粘土粒子(0.1~0.3 cm) やや多
黄褐色粘土ブロック(1 cm) 少
焼土粒子(0.1~0.4 cm) 微量

SK23

- 1 明黄灰褐色土 地山よりやや暗い

SK24

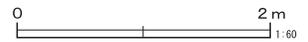
- 1 黄褐色土 鉄分やや多 炭化物微量

SK25

- 1 黄褐色土 炭化物粒子ブロック状に少

SK26

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子(0.1~0.5 cm)・黄褐色土ブロック(1~2 cm) 多
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒子(0.1~0.5 cm) 多
黄褐色土ブロック(1~2 cm) 少
- 3 暗褐色土 黄褐色土粒子(0.1~0.5 cm)・黄褐色土ブロック(1~3 cm) 多



第289図 D区土壌(3)

る。

D区第27号土壌 (第289図)

I-14グリッドに位置する。南側部分は調査区外に続く。D区第9号周溝状遺構との新旧関係は確認できなかった。平面形は楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、 $[1.08] \times [0.40]$ m、深さ16cmである。

土師器の破片が多数出土したが、いずれも小破片であり、図化には至らなかった。遺構の時期は不明である。

D区第28号土壌 (第289図)

G-17・18グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。大部分のプランが失われているため、平面形は不明、断面形は皿状と推定される。遺構の規模は、径が $5.04 \times [3.10]$ m、深さ8cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第29号土壌 (第290図)

E-14グリッドに位置する。D区第20・21号周溝状遺構、D区第19・20号溝跡と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。平面形は楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径0.92m、短径 $[0.64]$ m、深さ14cm、長軸方位はN-32°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第30号土壌 (第290図)

G-14グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は確認できなかった。平面形は歪んだ隅丸長方形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径3.06m、短径1.77m、深さ16cm、長軸方位はN-36°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第31号土壌 (第290図)

H-13グリッドに位置する。D区第6号周溝状

遺構、D区第9号溝跡と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。平面形は楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、 $1.05 \times [0.76]$ m、深さ9cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第32号土壌 (第290図)

E-18グリッドに位置する。D区第50号周溝状遺構と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径 $[1.51]$ m、短径 $[1.23]$ m、深さ9cm、長軸方位はN-46°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第33号土壌 (第290図)

E-18グリッドに位置する。D区第33・50号周溝状遺構と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、 $[1.51] \times [0.75]$ m、深さ15cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第34号土壌 (第290図)

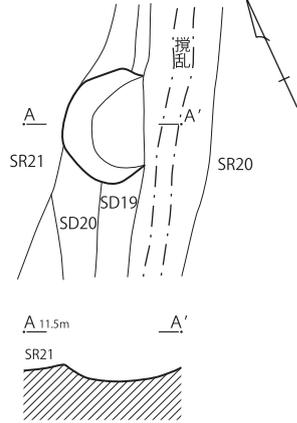
G-19グリッドに位置する。D区第39・41・42号周溝状遺構と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。平面形は不明、断面形は皿状である。遺構の規模は、 $[0.75] \times [0.25]$ m、深さ6cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

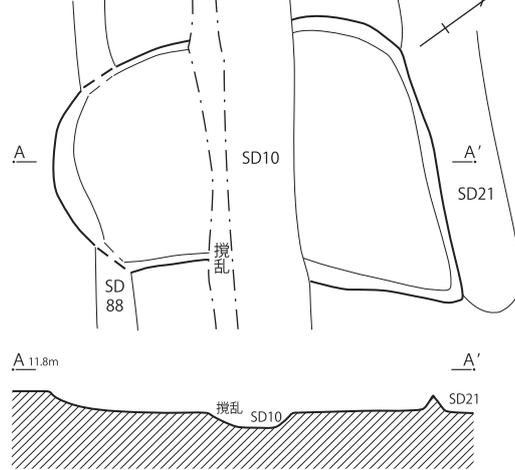
D区第35号土壌 (第288図)

G-20グリッドに位置する。E区第4号溝跡と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。E区第4号溝跡の調査の過程で、本遺構の西側部分は失われている。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、長径

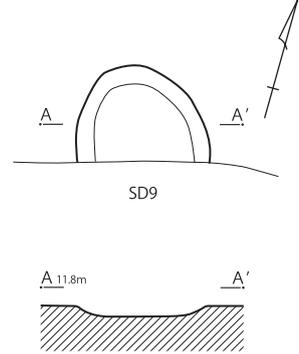
SK29 E-14



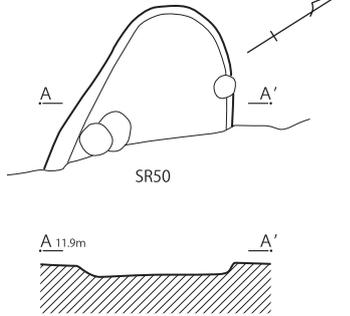
SK30 G-14



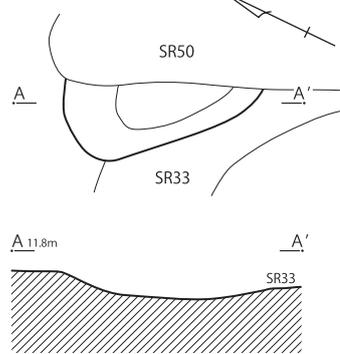
SK31 H-13



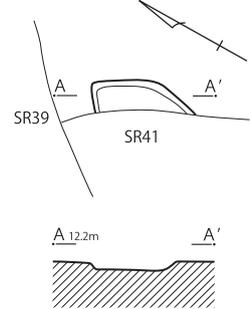
SK32 E-18



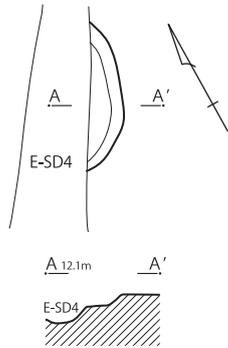
SK33 E-18



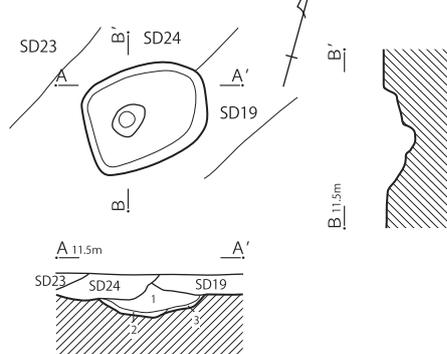
SK34 G-19



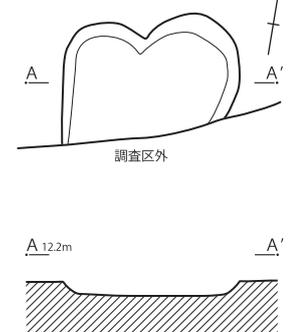
SK37 F·G-20



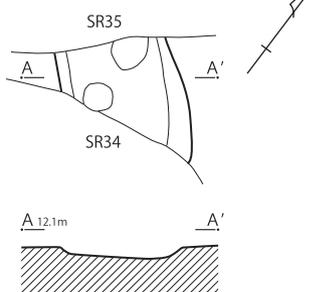
SK38 F-13



SK39 H-17



SK40 H-18



SK38

- 1 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 1 cm) 多
- 2 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) 多 埋戻し土
- 3 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) やや多
- 4 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 cm) 少



第290図 D区土壇 (4)

[0.74] m、短径 [0.72] m、深さ11cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第36号土壌 (第289図)

G-17グリッドに位置する。D区第3号墳、D区第28号土壌およびピットと重複しているが、新旧関係は確認できなかった。平面形は楕円形、断面形は箱形と推定される。遺構の規模は、長径0.85m、短径 [0.66] m、深さ28cm、長軸方位はN-51°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第37号土壌 (第290図)

F・G-20グリッドに位置する。E区第4号溝跡と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、[1.15] × [0.27] m、深さ10cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第38号土壌 (第290図)

F-13グリッドに位置する。D区第19・24号溝跡よりも古い。平面形はやや歪んだ隅丸長方形、断面形は塊形である。遺構の規模は、長径1.00m、短径0.77m、深さ34cm、長軸方位はN-45°-Eである。

平面形と底面にピット状の窪みがあることから、掘立柱建物跡の柱穴の可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第39号土壌 (第290図)

H-17グリッドに位置する。重複遺構はないが、南側部分は調査区外に位置している。2つの土壌が重複しているかのような形状であるが、詳細は確認できなかった。平面形は不明、断面形は皿状である。遺構の規模は、1.39 × [1.06] m、深さ12cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

D区第40号土壌 (第290図)

H-18グリッドに位置する。D区第34・35号周溝状遺構と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、[0.96] × 0.93m、深さ8cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

E区第1号土壌 (第291・294図)

D-17グリッドに位置する。E区第6・10号溝跡より新しい。南側部分は、調査区外に続いている。平面形は楕円形、もしくは長楕円形、断面形は逆台形と推定される。

遺構の規模は、1.45 × [1.43] m、深さ73cmである。

陶器の破片(10・11)が2点出土した。共に瀬戸・美濃産、10は播鉢で、卸目の磨滅がみられないことから、播鉢内の上部の破片ではないかと考えられる。11は鉢である。外面の灰釉は、一部高台にまで流れているほか、畳付にも付着がみられるが、高台・畳付・高台内は基本的には露胎と思われる。18世紀後葉～19世紀中葉と推定される。遺構の時期は、近世と考えられる。

E区第2号土壌 (第291図)

D-18グリッドに位置する。E区第13号溝跡より古いため、北側部分のプランが失われている。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、[1.35] × 「0.65」 m、深さ20cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明であるが、古墳時代前期の可能性が考えられる。

E区第3号土壌 (第291・294図)

D-18グリッドに位置する。E区第2号墳よりも古い。E区第5号周溝状遺構とも重複しているが、新旧関係は確認できなかった。同遺構の調査

過程で、南側部分のプランが失われた可能性がある。平面形は楕円形または長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、 $0.97 \times [0.75]$ m、深さ12cmである。

土師器の台付甕(12)が出土している。遺構の時期は古墳時代前期と推定される。

E区第4号土壙(第291・294図)

E-19グリッドに位置する。E区第2号墳、E区第13号周溝状遺構よりも古い。平面形は楕円形または長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、 $1.30 \times [0.67]$ m、深さ15cmである。

土師器の壺(13・14)が出土している。遺構の時期は古墳時代前期と推定される。

E区第6号土壙(第291図)

E-23グリッドに位置する。1つのピットよりも新しい。平面形は楕円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、長径1.20m、短径0.95m、深さ20cm、長軸方位はN-23°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明であるが、中・近世以前の可能性が考えられる。

E区第7号土壙(第291図)

E-19グリッドに位置する。E区第6号溝跡、E区第2号墳よりも古いと考えられる。平面形は楕円形、断面形は箱形である。遺構の規模は、長径0.89m、短径0.77m、深さ65cm、長軸方位はN-19°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明であるが、古墳時代前期の可能性が考えられる。

E区第8号土壙(第291図)

E-23グリッドに位置する。E区第9号土壙よりも古い。E区第10号土壙との新旧関係は確認できなかった。平面形はやや歪んだ長楕円形、断面形は皿状と推定される。遺構の規模は、 $[1.70] \times [1.03]$ m、深さ15cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

E区第9号土壙(第291・294図)

E-23グリッドに位置する。E区第8・10号土壙よりも新しい。平面形は不整形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径1.70m、短径1.12m、深さ55cm、長軸方位はN-8°-Eである。

土師器の甕(15)と須恵器の坏(16)が出土している。前者は北武蔵型の甕で、9世紀前半、後者は南比企産の坏で8世紀後半と推定される。

E区第10号土壙(第291・294図)

E-22・23グリッドに位置する。E区第9号土壙よりも古い。平面形は楕円形もしくは長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、 $[2.12] \times [1.65]$ m、深さ17cmである。

土師器の甕(17)と須恵器の坏(18)が出土している。前者は9世紀前半、後者は南比企産の坏で9世紀第2四半期と推定される。

E区第11号土壙(第292図)

E-20グリッドに位置する。E区第11号井戸跡よりも古いため、本遺構の東側部分は失われている。平面形は円形または楕円形、断面形は碗形と推定される。遺構の規模は、 $[0.85] \times [0.70]$ m、深さ85cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は、古墳時代前期の可能性が考えられる。

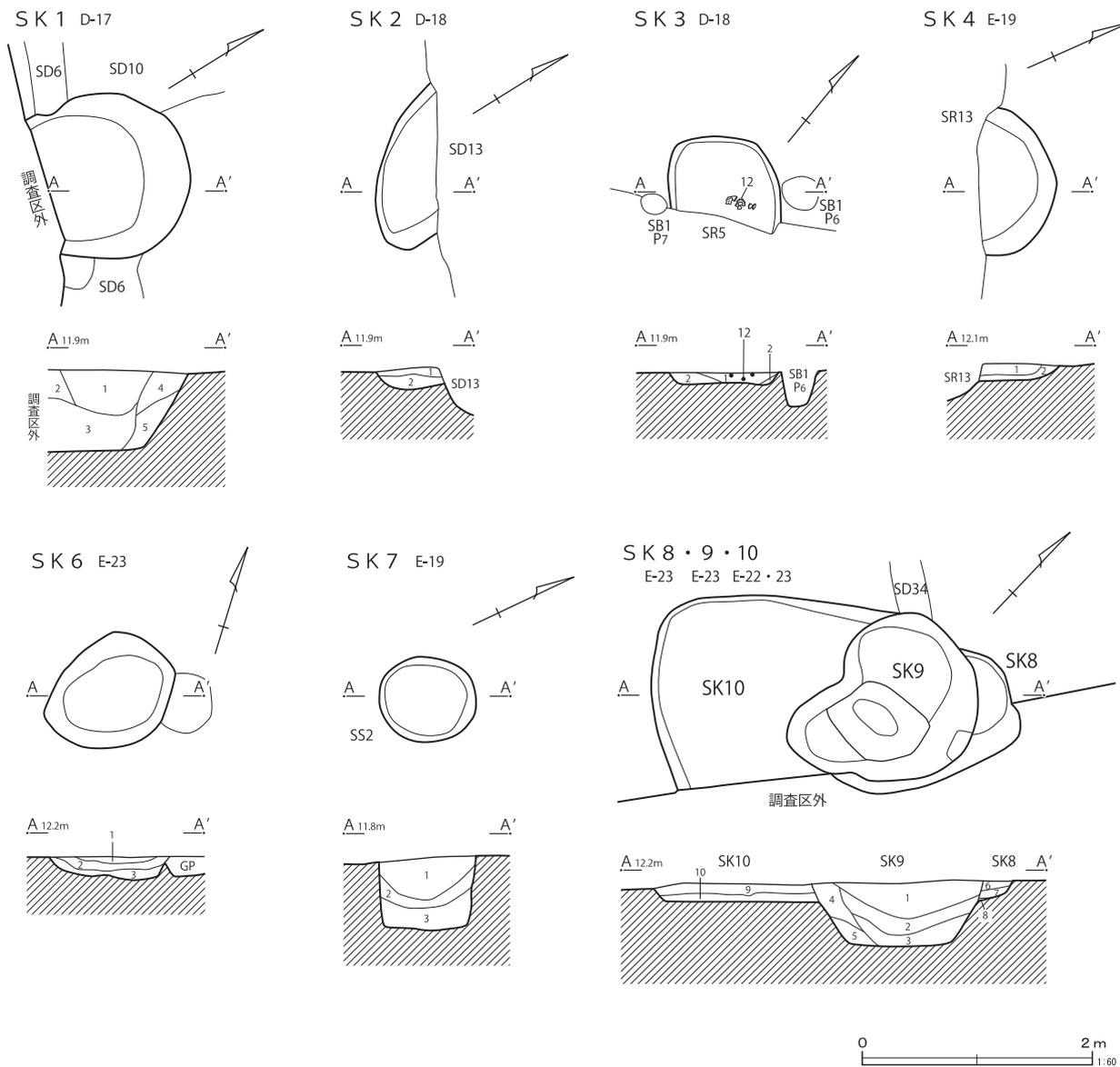
E区第12号土壙(第292図)

E-21グリッドに位置する。E区第4・25号溝跡と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。平面形は楕円形、断面形はロート状である。遺構の規模は、長径0.97m、短径0.85m、深さ96cm、長軸方位はN-66°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は、古墳時代前期の可能性が考えられる。

E区第13号土壙(第292・294図)

F-22グリッドに位置する。E区第18号周溝状遺構よりも新しい。3つのピットと重複しているが、新旧関係は確認できなかった。ピットの調査の過程で、南側部分のプランが失われたと推定さ



- SK 1**
- 1 褐色土 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多 黒褐色土ブロック少
 - 2 褐色土 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 極多 黒褐色土ブロック少
 - 3 褐灰色土 鉄分粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 多
 - 4 灰褐色土 黄褐色土ブロック (3 ~ 5 cm) 多
 - 5 灰褐色土 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少

- SK 2**
- 1 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.5 cm) やや多
 - 2 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (1 ~ 2 cm) 多

- SK 3**
- 1 暗褐色土 黒褐色土ブロック (1 ~ 2 cm) 少 黄褐色粘土ブロック (0.5 cm) ・褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) やや多
 - 2 暗褐色土 黒褐色土ブロック (1 cm) 少 黄褐色粘土ブロック (0.5 cm ~ 2 cm) ・褐色粘土ブロック (0.5 cm) 多 崩落土

- SK 4**
- 1 暗褐色土 黒褐色土ブロック・黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 少
 - 2 暗褐色土 黒褐色土ブロック・黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.5 cm) 多 黄褐色粘土ブロック (1 cm) 少

- SK 6**
- 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.2 ~ 0.3 cm) 少
 - 2 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 0.8 cm) 多
 - 3 黄褐色土 暗褐色土粒子をブロック状に少

- SK 7**
- 1 黒褐色土 黄褐色土ブロック (1 ~ 2 cm) ・赤褐色土粒子微量 黄褐色土粒子・黒色土粒子多
 - 2 黒褐色土 黄褐色土ブロック (1 ~ 2 cm) ・赤褐色土粒子微量 黄褐色土粒子多
 - 3 黒褐色土 黄褐色土粒子多

- SK 8・9・10**
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・黒色土粒子・鉄分粒子多 下層に炭化物帯状に少
 - 2 暗褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・黒色土粒子少 鉄分粒子多
 - 3 暗褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・黄褐色粘土ブロック (2 ~ 4 cm) ・鉄分粒子多 黒色土粒子・炭化物少
 - 4 暗褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・黒色土粒子・炭化物・黄褐色粘土ブロック (1 cm) 少 鉄分粒子多
 - 5 暗褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 多
 - 6 褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 多
 - 7 褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) ・黄褐色土粒子多
 - 8 褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 多
 - 9 褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 多
 - 10 褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 多

第291図 E区土壇 (1)

れる。平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径 [1.44] m、短径 1.36m、深さ29cm、長軸方位はN-14°-Wである。

須恵器の坏 (19) が出土している。南比企産の坏で9世紀第2四半期と推定される。

E区第14号土壙 (第292図)

E-22グリッドに位置する。E区第34号溝跡と1つのピットと重複しているが、新旧関係は確認できなかった。平面形は円形、断面形は皿状である。遺構の規模は、0.70×(0.69) m、深さ8cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は、覆土の色調から近世と考えられる。

E区第15号土壙 (第292図)

E-20グリッドに位置する。E区第15号周溝状遺構、E区第11号井戸跡よりも古い。平面形は楕円形と推定される。断面形はU字形である。遺構の規模は、(1.05) × (0.95) m、深さ90cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明であるが、古墳時代前期と推定される。

E区第16号土壙 (第292図)

E-21グリッドに位置する。E区第8・18号周溝状遺構より古いため、本遺構の北側部分のプランが失われている。平面形は楕円形と推定される。断面形は逆台形である。遺構の規模は、1.25×[0.70] m、深さ20cmである。

縄文時代後期の深鉢が出土している。該期の遺構と推定される。

E区第17号土壙 (第292図)

C-22グリッドに位置する。第5号方形周溝墓と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。同遺構の調査の過程で、本遺構の東側部分が失われた可能性がある。平面形は長楕円形、断面形は逆台形と推定される。遺構の規模は、長径[0.95] m、短径0.73m、深さ27cm、長軸方位はN-54°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

る。

E区第18号土壙 (第292図)

C-23グリッドに位置する。E区第15・17号溝跡と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。E区第17号溝跡の調査の過程で、本遺構の南西部分が失われた可能性がある。平面形は長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、2.30×[0.80] m、深さ27cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

E区第19号土壙 (第293図)

C-21グリッドに位置する。E区第20号土壙より新しいが、E区第10号周溝状遺構との新旧関係については特定できなかった。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径0.56m、短径0.44m、深さ52cm、長軸方位はN-57°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

E区第20号土壙 (第293図)

C-21グリッドに位置する。E区第19号土壙よりも古いが、E区第10号周溝状遺構との新旧関係については特定できなかった。平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径0.78m、短径0.54m、深さ40cm、長軸方位はN-63°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

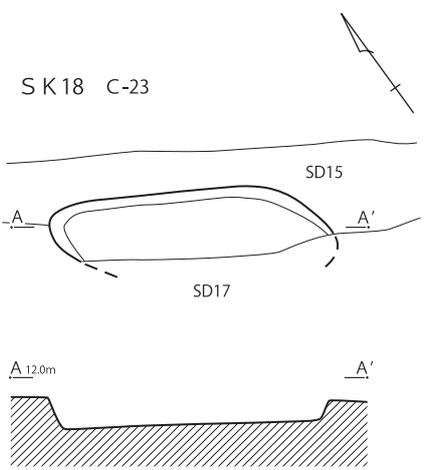
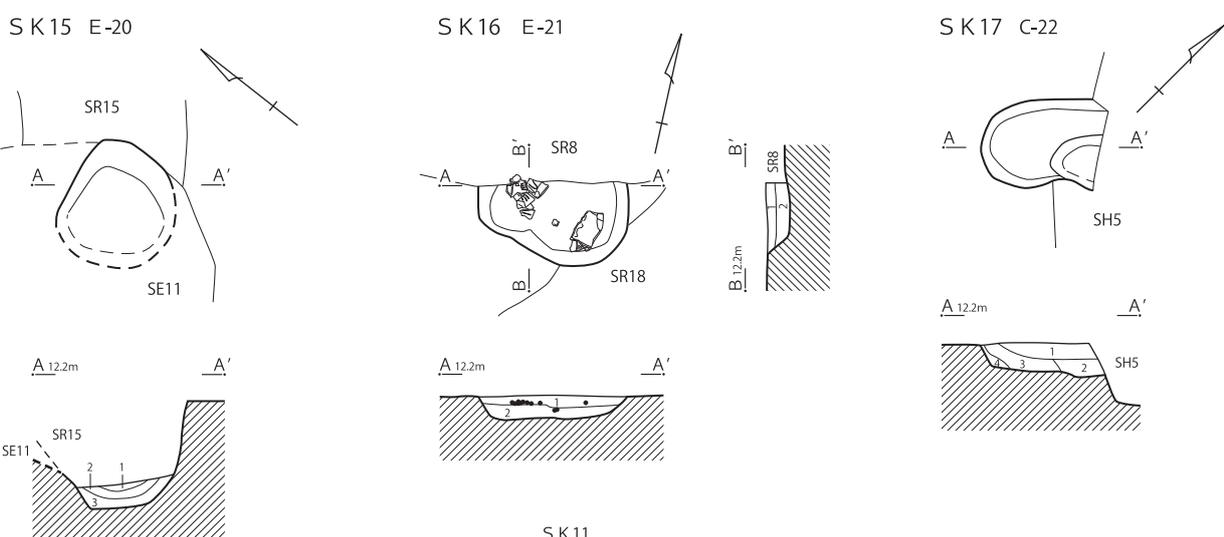
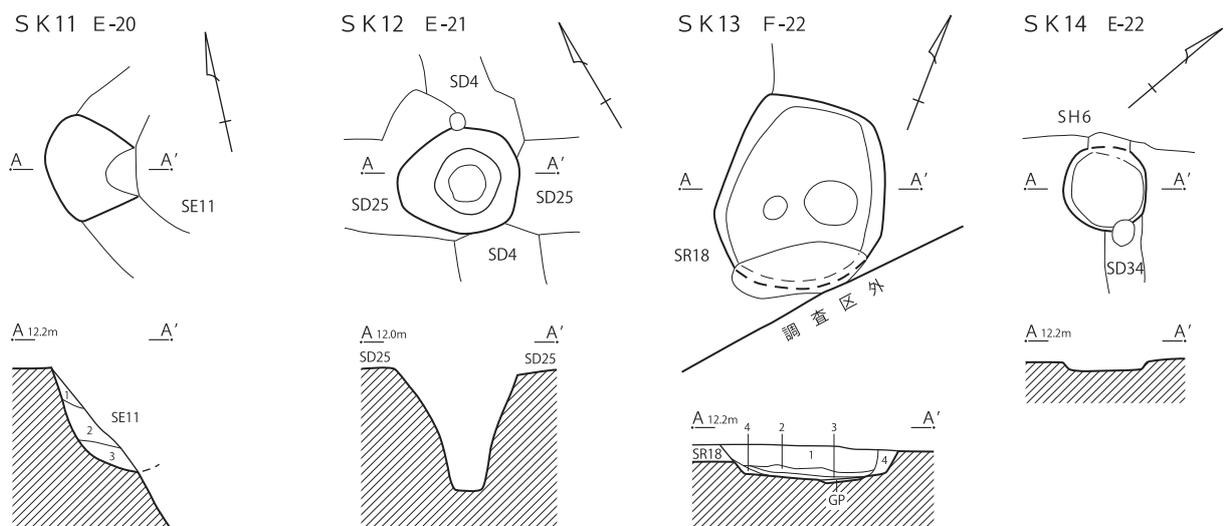
E区第21号土壙 (第293図)

D-21・22グリッドに位置する。E区第22号土壙よりも新しい。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。遺構の規模は、長径0.75m、短径0.68m、深さ50cm、長軸方位はN-69°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

E区第22号土壙 (第293図)

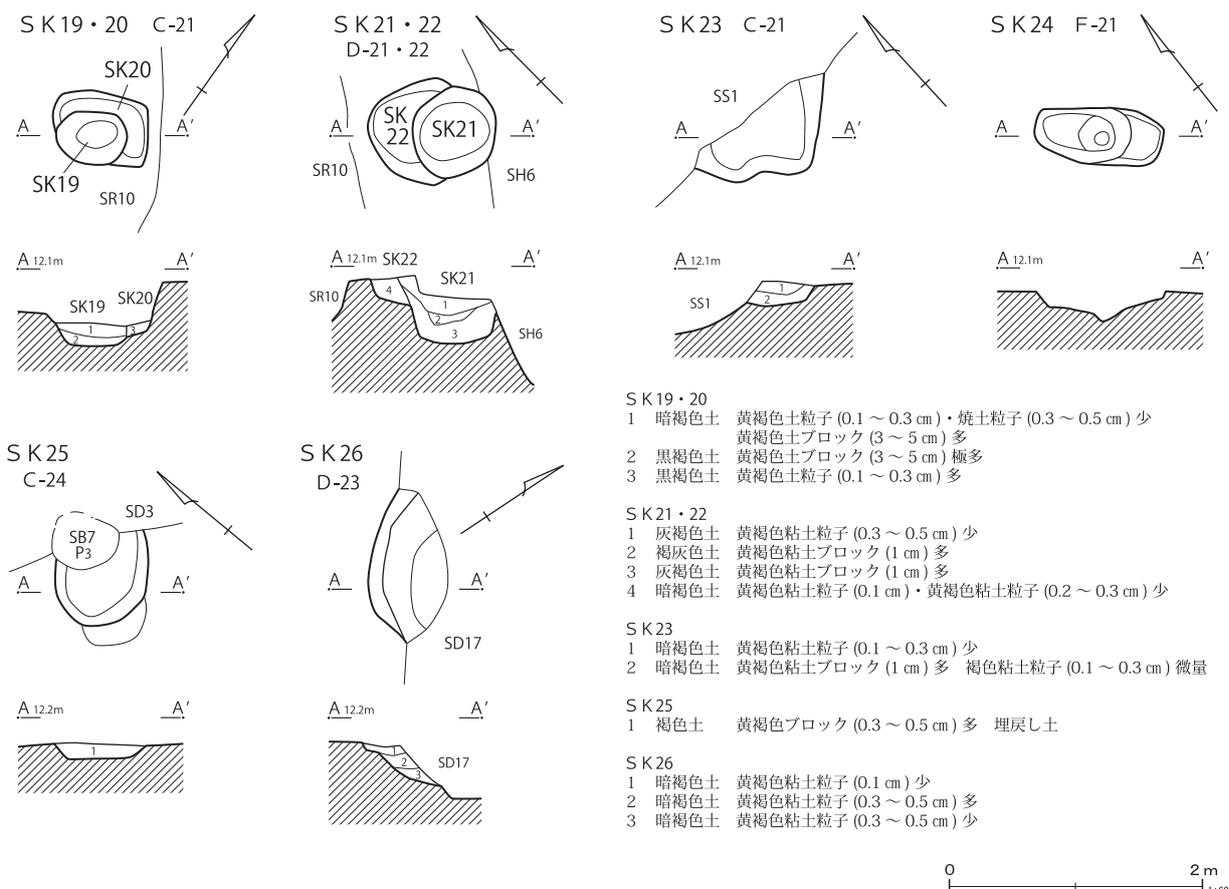
D-21・22グリッドに位置する。E区第21号土壙



- SK11
 1 黒褐色土 焼土粒子 (0.1 cm) 微量
 2 黒褐色土 黄褐色粘土粒子 (0.1 ~ 0.2 cm) 少 鉄分粒子均質に多
 3 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック (0.5 ~ 1 cm)・褐色粘土ブロック (0.5 cm) 多
- SK13
 1 暗褐色土 黄褐色土粒子多
 2 暗褐色土 黄褐色土粒子多 下面に炭化物带状に堆積
 3 暗褐色土 黄褐色土粒子・黄褐色土ブロック (1 ~ 2 cm) 多
 4 黄褐色土 黄褐色土主体 自然堆積
- SK15
 1 灰褐色土 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm)・黒褐色土ブロック (3 ~ 5 cm) 極多
 2 黒褐色土 灰褐色土ブロック (5 ~ 7 cm)・灰褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 極多
 3 黒褐色土 灰褐色土ブロック (5 ~ 7 cm) 極多 灰褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 微量
- SK16
 1 黄褐色土 黄褐色土層中に炭化物粒子少 鉄分粒子多 黒色土粒子少
 2 黄褐色土 炭化物粒子微量 鉄分粒子多 粘性やや強
- SK17
 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック (3 ~ 5 cm) 極多 自然堆積
 2 暗褐色土 黄褐色土粒子 (0.1 ~ 0.3 cm) 微量 自然堆積
 3 暗褐色土 黄褐色土ブロック (1 ~ 3 cm) 少 自然堆積
 4 暗褐色土 黄褐色土ブロック (5 ~ 7 cm) 多 自然堆積



第292図 E区土壌 (2)



第293図 E区土坑（3）

よりも古い。平面形は楕円形、断面形は逆台形と推定される。遺構の規模は、長径0.85m、短径[0.54] m、深さ20cm、長軸方位はN-63°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

E区第23号土坑（第293図）

C-21グリッドに位置する。E区第1号墳と重複しているが、新旧関係については確認できなかった。本遺構の北側部分は、E区第1号墳の調査の過程で失われた可能性がある。平面形は不整形、断面形は塊形である。遺構の規模は、長径[0.80] m、短径[0.75] m、深さ22cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

E区第24号土坑（第293図）

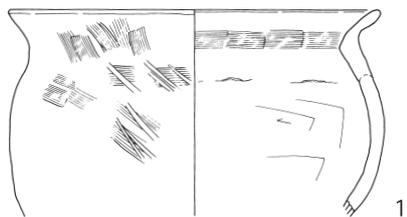
F-21グリッドに位置する。E区第17号周溝状遺構と重複しているが、新旧関係については確認できなかった。平面形は隅丸長方形、断面形は中央に窪みをもつ塊形である。遺構の規模は、長径1.05m、短径0.45m、深さ25cm、長軸方位はN-42°-Wである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

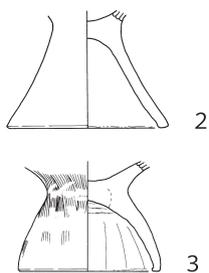
E区第25号土坑（第293図）

C-24グリッドに位置する。E区第7号掘立柱建物跡P3、E区第3号溝跡および1つのピットと重複しているが、新旧関係については確認できなかった。本遺構の北側部分は、E区第3号溝跡の調査の過程で失われた可能性がある。平面形は

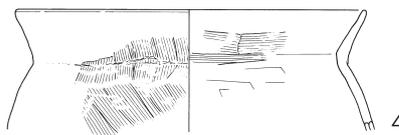
B区 SK 8



B区 SK 13



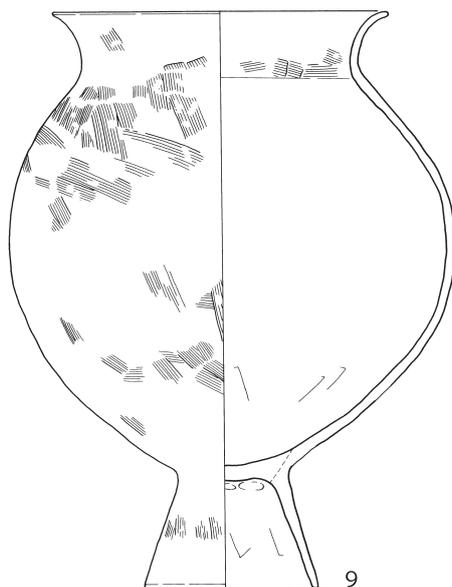
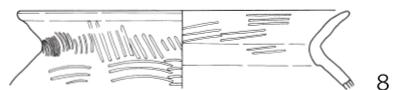
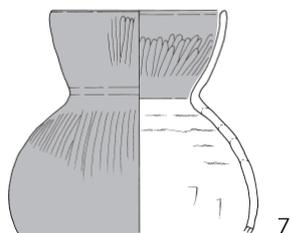
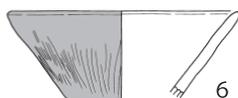
B区 SK 22



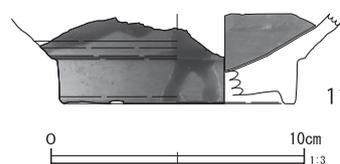
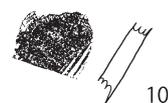
D区 SK 6



D区 SK 13



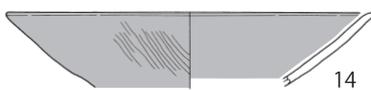
E区 SK 1



E区 SK 3



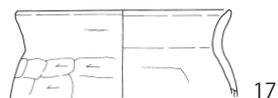
E区 SK 4



E区 SK 9



E区 SK 10



E区 SK 13



第294图 土壙出土遺物

第76表 土壌出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
1	SK8	B	土師器	甗	75	19.5		[10.8]	A G	普通	灰黄褐		No.1 口縁上部内外面横ナデ
2	SK13	B	土師器	台付甗	45		(8.0)	[6.1]	E F	普通	にぶい黄橙		器面風化著しく調整痕はみえない
3	SK13	B	土師器	台付甗	55		(7.3)	[5.7]	A D E	普通	にぶい赤褐		No.2 風化著しい
4	SK22	B	土師器	甗	15	(18.2)		[6.3]	A B C F G	普通	橙		口縁部内外面横ナデ
5	SK6	D	土師器	高坏	95			[7.9]	A F G	普通	にぶい黄橙		外面へラ磨き 内面へラナデ 器面風化著しい
6	SK13	D	土師器	壺	10	(12.0)		[4.5]	A C D F	普通	にぶい橙		No.5 外面へラ磨き 器面風化している (内面は表面が剥離している) 外面赤彩
7	SK13	D	土師器	壺	80	9.1		[11.7]	C D F I	普通	橙		No.4 外面へラ磨き 内面へラナデ 内外面に黒斑あり 外面・口縁部内面赤彩
8	SK13	D	土師器	甗	25	(17.5)		[4.1]	A C D F J	普通	にぶい橙		No.1 口縁上部内外面ハケ後横ナデ ハケ目は太く深いものである
9	SK13	D	土師器	台付甗	80	17.4	9.0	30.6	A C F	普通	褐灰		No.8 口縁部内外面ハケ後横ナデ 胴部内面へラナデか 脚部上位指頭圧痕あり 器面風化している 胴部外面に大黒斑あり
10	SK1	E	陶器	擂鉢	5			[4.1]	A	普通	淡黄緻密		内外面鉄釉 卸目の摩滅はみられない 上位部分の破片か 瀬戸・美濃系
11	SK1	E	陶器	鉢	20		(9.2)	[3.6]	A G	良好	淡黄緻密	轆轤	内外面灰釉 畳付一部釉付着 削出し高台 底部静止糸切りか 瀬戸・美濃系 18C後～19C中葉 貫入多(大き目)
12	SK3	E	土師器	台付甗	30		(8.0)	[5.8]	A C F J	普通	にぶい黄橙		No.2 外面上位へラナデか 端部内外面ヨコナデ 脚部内面ハケナデ 器面風化著しい
13	SK4	E	土師器	壺	10	(19.2)		[2.4]	A C D F J	普通	にぶい黄橙		E-19G 内外面ハケ後へラ磨き 器面風化著しい 内外面赤彩
14	SK4	E	土師器	壺	15	(19.2)		[3.9]	A C J	普通	明黄褐		E-19G 内外面へラ磨きか 器面風化著しい 内外面赤彩
15	SK9	E	土師器	甗	10	(18.6)		[6.1]	A C D F J	普通	橙		口縁～頸部内外面横ナデ 胴部外面へラ削り 胴部内面へラナデ 器面風化著しい 北武蔵野産 9C前半
16	SK9	E	須恵器	坏	10	(12.4)		[2.8]	A G H I	普通	灰		内外面轆轤ナデ 南比企産 8C第3四半期
17	SK10	E	土師器	甗	15	(11.2)		[4.6]	A D F	普通	褐		口縁部内外面横ナデ 頸部外面へラ削り 頸部内面へラナデ 9C前半か
18	SK10	E	須恵器	坏	70		5.6	[2.0]	A B F H	不良	灰白		底部回転糸切り 南比企産 9C第2四半期
19	SK13	E	須恵器	坏	20	(12.6)	6.0	4.4	A C F H	不良	灰白		底部回転糸切り 南比企産 9C第2四半期

楕円形もしくは長楕円形と推定される。断面形は皿状である。遺構の規模は、0.75× [0.70] m、深さ13cm、長軸方位はN-54°-Eである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

E区第26号土壌 (第293区)

D-23グリッドに位置する。E区第17号溝跡と重複しているが、新旧関係については確認できな

かった。本遺構の北側部分は、E区第17号溝跡の調査の過程で失われた可能性がある。平面形は楕円形もしくは長楕円形と推定される。断面形は塊形である。遺構の規模は、[1.23] × [0.70] m、深さ33cmである。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

報告書抄録

ふりがな	とみたうしろいせき							
書名	富田後遺跡							
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う川島地区埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第385集							
編著者名	鈴木 孝之							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台四丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2011(平成23)年11月30日							
所収遺跡	ふりがな所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とみたうしろいせき 富田後遺跡	さいたまけん ひきぐん 埼玉県比企郡 かわじままちおおあざ 川島町大字 みほや 三保谷77-2 ばんちほか 番地他	11346	024	35°59'07"	139°29'40"	20050601～ 20051130 20060801～ 20070131	9,900	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項・備考	
富田後遺跡	集落跡	縄文時代		土 壙	5基	土器 石器	古墳時代前期の周溝状遺構は、検出数が多く、分布密度も高い。 古墳時代前期の方形周溝墓は、自然堤防上の比較的高い位置に設けられていた。 古墳時代前期の井戸跡28基の内には、井戸の中に、意図的に土器を納めた例があり、しかも頻度が高い。 時期不明 井戸跡 27基 土壙 75基 溝跡 146条	
		古墳時代		住居跡	4軒	土師器		
				周溝状遺構	96基	石製品		
				方形周溝墓	7基	鉄製品		
		中・近世以前		掘立柱建物跡	6棟	木製品		
				井戸跡	29基			
				土壙	21基			
				溝跡	24条			
				古墳跡	6基			
				掘立柱建物跡	4棟	土師器		
				井戸跡	3基	須恵器		
				土壙	2基			
				溝跡	1条			
		中・近世		掘立柱建物跡	25棟	陶磁器類		
				柵列跡	7基	石製品		
				井戸跡	36基	金属製品		
				土壙	4基	木製品		
				溝跡	45条			
				ピット	多数			
要 約								
<p>富田後遺跡は、比企郡川島町の荒川右岸に所在する。川島町は旧河川と、それによって形成された多数の自然堤防が明瞭に残されている地域である。遺跡は、その旧流路のひとつに面した自然堤防上に立地している。この旧流路の対岸の自然堤防上には、元宿遺跡が存在している。土壙内から縄文時代後期の土器が出土したことから、富田後遺跡が立地している自然堤防は、この時期には既に形成されていたことが判明した。古墳時代前期では、立地的に標高の高い部分に方形周溝墓が分布している。周溝状遺構は方形周溝墓を避けるように調査区全体にほぼ満遍なく分布するが、一部は方形周溝墓と重複関係にある。この時期の井戸の約3分の1には、意図的に土器が納められていることは特筆に値する。古墳時代後期では古墳の周溝から、埼玉古墳群で用いられているのと同様の、大型の円筒埴輪が出土した。奈良・平安時代では集落は小規模であったが、中・近世に入ると徐々に拡大していったと考えられる。</p>								

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第385集

富田後遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う
川島地区埋蔵文化財発掘調査報告
(第1分冊)

平成23年11月14日 印刷

平成23年11月30日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台四丁目4番地1
電話 0493 (39) 3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／朝日印刷工業株式会社